

青森県埋蔵文化財調査報告書第70集

# 馬場瀬遺跡



昭和56年度

青森県教育委員会



馬場瀬遺跡 正 誤 表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
付 図	袋 2	発掘調査	発掘調査	183	上 1	である。ミニ	であるが、ミニ
〃	第 11 図	(右側中央・脱落)	(遺構番号) 10号	〃	上 4~5	これらの…認められる	削除
26	上 15	とみられる (P i t i i ~ 4)。	とみられる。	〃	上 13	これらの遺構	これらの遺構床面
26	上 27	出土しただけ	出土しただけで、	〃	上 14	見当たらない。	見当たらないが、第Ⅲ群 3類以外には縄文、無文、磨消縄文(第Ⅲ群 1、2、4類)の土器が認められる。
付 図	第 18 図	(A—B 注記・欠) IV	焼土、VI				第Ⅲ~Ⅴ群土器
83	上 3	59、60図)。	60、61図)。	189	上 12	第Ⅲ群土器	第Ⅲ~Ⅴ群土器
98	中 央	(第71~74図)。	(第71~73図)。	〃	下 3	十腰内 4	十腰内 5
112	下 9	48表に、……(第40~47表)。	47表に、……(第40~46表)。	〃	下 1	安行 I—(+)-	安行 I、(-)-
〃	下 5	第48表出土……第40~47表	第47表出土……第40~46表	190~		C i	C i
127	上 8	(器形現状) 長頸壺	注口	191			
133	上 2	第49表	第48表	195	15	第131~132図	第131~133図
136	第 50 表	(No 7) 第98図 9	……	〃	31	竪穴住居及び竪穴の…	竪穴住居の場合、壁の張り出し部分を出入口に関する施設として把握することができる。竪穴住居及び竪穴の…
165	上 4	第74表……分類集計表	第73表……分類一覽表				5000000
〃	上 13	第74表	第73表	221	上 18	一方、フラス	一方、問題はフラス
〃	下 6	第89図 7	削除	222	上 8	覆土第IV層と第VI	覆土、第IV層及び第VI
166	上 4	第76図 3、7	第76図 4、5	223	上 7	北海道東部まで	北海道の一部に
〃	上18~20	(第62図 2、……の器形がある。	(第62図 2)、ミニチュア形注口	〃	上 15	土器の発掘資料の	土器(発掘資料)の
			(第49図 5、第50図 2、第60図 2、	229	第 156 図	(左・脱落)	A地区
			4、第68図 2、第81図 1)、台付浅鉢(第81図 5)の器形がある。	237	上 10	(脱落)	第7号遺構
166	下11~	鉢(第60図 8、…浅鉢(第68図 5))	小鉢(第60図 8、第80図 1、2)、	243	第 89 表	底部無文	削除
	下10		浅鉢(第68図 5、第80図 3)	259	上 15	手づく	手づく
167	下 13	第81図 3	第82図 3	〃	上 19	以上を区分	以上を厚手と区分
〃	下 11	90図 5	90図16	269	上 7	(第 162 図	(第 162、183 図
〃	下 5	第84図 2	削除	〃	上 9	(第 162 図	(第 162、184 図
168	下 4	口唇…もち	削除	〃	上 11	(第 183 図	(第 162、182 図
〃	下 2	B 器形	削除	〃	下 8	による	にある
〃	下 1	第82図 4)、注口(第69図 1)	第82図 2)、注口(第53図 1)	273	上 4	古銭20	古銭20、陶器12、
169	上 1	(第13号遺構第69図 1 ほか)	(第 3 号遺構第53図 1 ほか)	274	上15、16	(4) 古銭 (第 187 図、…図版87-7~15)	(4) 古 銭 (第 187 図、…7~15)
〃	上 6	小突起付平縁	小突起付口縁				20点出土した。ここ……
〃	上 7	が多いが、長頸……92図 6)。	が多い。(以下削除)	276	第 102 表	図版番号 81	図版番号 87
173	第 128 図	21 (50-6) 31 (68-6)	21 (60-6) 31 (69-1)	〃	下 6	(5) 陶 器	(5) 陶 器 (第 185、188 図、第 103 表、図版 86)
176	器 高	11、17の欄	(17の 1 が11に移る)	281	上 10	と降下火山	と十和田 a 降下火山
179		(台付浅鉢の説明) ↓	↓ H H	285	左 中 央	マスナロ	アスナロ
180	上 12	第82図 1) など	第82図 1) など	286	上18、19	1980	1981
181		(注口土器の欄) I—6	P—6	289	下 2	裕	裕
182	上 13	佐 原 真	佐原 真				
〃	上 15	実態は未完成	実態は不詳				
〃	下 3	第82表	第38、80表				



青森県埋蔵文化財調査報告書第70集

# 馬場瀬遺跡

発掘調査報告書

昭和56年度

青森県教育委員会



## 序

青森県教育委員会は、国土開発計画に基づいて建設される東北縦貫自動車道八戸線建設予定地内の埋蔵文化財の保護と活用を図るため、昭和53年度から分布調査、試掘調査を実施してまいりました。

昭和55年度は、この予定地内に所在する馬場瀬(1)、馬場瀬(2)遺跡について、記録保存のため発掘調査を実施しました。

本報告書は、その調査結果をまとめたものでありますが、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いと思います。

ここに、調査及び本報告書の作成にあたり、御指導、御協力をいただいた調査員をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和 57 年 3 月

青森県教育委員会

教育長

**ニッ森 重 志**





## 例 言

- 1 本報告書は、昭和55年度に実施した東北縦貫自動車道八戸線建設に係る三戸郡南郷村馬場瀬(1)遺跡及び馬場瀬(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書の執筆者の氏名は、それぞれの文末に付した。
- 3 遺構の番号は、確認順に付したが、欠番もある。
- 4 本報告書に掲載した地形図は、日本道路公団、南郷村役場から提供されたものを使用した。
- 5 実測図等の縮尺は、それぞれスケールを付してある。写真図版の縮尺は、統一していない。
- 6 資料の同定、鑑定は、次の諸氏に依頼した(敬称略)。

樹種同定	元奈良教育大学教授	嶋倉巳三郎
石種鑑定	県立八戸高等学校教諭	松山 力
陶器鑑定	東北歴史資料館考古科長	藤沼 邦彦
〃	金沢大学文学部助教授	佐々木達夫
- 7 発掘調査並びに本報告書の作成にあたっては、次の諸氏から御教示を賜った(敬称略、順不同)。

石本省三、近藤義郎、野村 崇、林 謙作、富樫泰時、嶋 千秋、菊地郁雄、小井川和夫、渡辺 誠、本堂寿一、石岡憲雄、栗村知弘、市川金丸、工藤竹久、名久井文明、上野佳也、葛西 励、藤村東男、高橋 潤。
- 8 引用、参考文献は巻末に、また、単なる注は文末に記した。
- 9 青森県教育委員会が刊行した埋蔵文化財調査報告書については、遺跡名、報告書番号、刊行年のみを記載した( 遺跡 県埋文 集：西暦年)。

# 目 次

序		(3) 出土遺物	158
例言		ア 土器	158
		イ 礫	161
はしがき	1	5 第 層の調査	161
1 調査に至る経過	1	(1) 遺物の分布	161
2 調査要項	2	(2) 出土遺物	161
3 調査方法と調査経過	3	ア 土器	161
(1) 調査方法	3	イ 石器、礫	164
(2) 調査経過	4	6 若干の分類と考察	165
遺跡の概観	7	第 群土器について	165
1 遺跡の立地と周辺の地質	7	7 まとめと問題点	193
2 周辺の遺跡	14	馬場瀬2遺跡	232
馬場瀬1遺跡	18	1 調査の概要	232
1 調査の概要	18	2 調査区の基本層位	232
2 調査区の基本層位	18	3 第 、 層の調査	237
3 第 、 層の調査	23	(1) 遺構、遺物の分布	237
(1) 遺構、遺物の分布	23	(2) 検出遺構	
(2) 検出遺構	23	溝状ピット	237
竪穴住居	26	(3) 出土遺物	238
竪穴	37	ア 土器	238
特殊竪穴	40	イ 土製品	260
フラスコ状土壌	52	ウ 石器、礫	261
土壌	60	4 第 ~ 層の調査	269
(3) 出土遺物	64	(1) 遺構、遺物の分布	269
ア 土器	64	(2) 検出遺構	269
A 遺構出土の土器	64	フラスコ状土壌	269
B 遺構外出土の土器	112	(4) 出土遺物	270
イ 土製品	133	土器	270
ウ 石器、石製品、礫	135	5 歴史時代の遺物	273
エ 炭化木製品	155	(1) 土師器、須恵器	273
4 第 層の調査	156	(2) 鉄製品	274
(1) 遺構、遺物の分布	156	(3) 鉄滓	274
(2) 検出遺構	156	(4) 古銭	274
落ち込み	156	(5) 陶器	276

(6) 土製品 .....	278	第30図	第9号遺構 .....	44
6 まとめ .....	279	第31図	C地区の遺構 .....	付図
馬場瀬遺跡出土の炭化材 .....	284	第32図	第20号遺構 .....	45
引用参考文献 .....	286	第33図	第20号遺構覆土出土遺物 .....	47

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 .....	5	第34図	第21号遺構 .....	49
第2図	遺跡周辺の地形分類図 .....	8	第35図	第21号遺構覆土出土遺物 .....	51
第3図	十和田火山完新世火山灰編年図 .....	13	第36図	第22号遺構 .....	53
第4図	馬場瀬(1)遺跡地形図 .....	17	第37図	第22号遺構覆土出土遺物 .....	55
第5図	基本層位 .....	19	第38図	第18号遺構 .....	56
第6図	基本層位・Kライン .....	20	第39図	第19号遺構 .....	57
第7図	基本層位・21ライン .....	21	第40図	第23号遺構 .....	58
第8図	基本層位・13ライン .....	22	第41図	第25号遺構 .....	59
第9図	第 〃 層遺構分布図 .....	24	第42図	第27号遺構 .....	60
第10図	第 〃 層遺物分布図 .....	25	第43図	第28号遺構覆土出土遺物 .....	61
第11図	A地区の遺構 .....	付図	第44図	第24号遺構覆土出土遺物 .....	62
第12図	第3号遺構床面出土遺物 .....	付図	第45図	第26a、b号遺構 .....	63
第13図	第3号遺構覆土出土遺物 .....	付図	第46図	第29号遺構 .....	63
第14図	第7号遺構床面出土遺物 .....	28	第47図	第1号遺構出土土器実測図 .....	66
第15図	第7号遺構覆土出土遺物 .....	29	第48図	第1、2号遺構出土土器 実測拓影図 .....	67
第16図	第10号遺構 .....	31	第49図	第3号遺構出土土器実測図(1) .....	69
第17図	第10号遺構覆土出土遺物 .....	30	第50図	第3号遺構出土土器実測図(2) .....	70
第18図	第13号遺構 .....	付図	第51図	第3号遺構出土土器実測拓影図(3) .....	71
第19図	第13号遺構覆土出土遺物 .....	付図	第52図	第3号遺構出土土器実測拓影図(4) .....	72
第20図	第15号遺構床面出土遺物 .....	35	第53図	第3号遺構出土土器実測拓影図(5) .....	73
第21図	第15号遺構覆土出土遺物 .....	34	第54図	第3号遺構出土土器実測拓影図(6) .....	74
第22図	第1号遺構床面出土遺物 .....	37	第55図	第3号遺構出土土器拓影図(7) .....	75
第23図	第1号遺構覆土出土遺物 .....	38	第56図	第3号遺構出土土器拓影図(8) .....	76
第24図	第2号遺構 .....	39	第57図	第3号遺構出土土器拓影図(9) .....	77
第25図	第2号遺構覆土出土遺物 .....	40	第58図	第3号遺構出土土器実測拓影図(10) .....	81
第26図	第12号遺構 .....	41	第59図	第6号遺構出土土器拓影図 .....	82
第27図	第12号遺構覆土出土遺物 .....	42	第60図	第7号遺構出土土器実測図(1) .....	84
第28図	第14号遺構覆土出土遺物 .....	43	第61図	第7号遺構出土土器拓影図(2) .....	85
第29図	第6号遺構床面、覆土出土遺物 .....	44	第62図	第10号遺構出土土器実測拓影図 .....	86
			第63図	第12号遺構出土土器実測拓影図 .....	88
			第64図	第13号遺構出土土器実測拓影図(1) .....	90
			第65図	第13号遺構出土土器実測図(2) .....	91

第66図	第13号遺構出土石器実測拓影図(3)...	92	第102図	A地区出土石器実測図(5).....	148
第67図	第13号遺構出土石器実測拓影図(4)...	93	第103図	A地区出土石器実測図(6).....	149
第68図	第13号遺構出土石器実測図(5).....	94	第104図	B地区出土石器、石製品、 礫分布図.....	付図
第69図	第13号遺構出土石器実測図(6).....	95	第105図	B地区出土礫構成比.....	151
第70図	第13号遺構出土石器拓影図(7).....	96	第106図	B地区出土礫、破碎率と焼率.....	151
第71図	第14号遺構出土石器実測拓影図(1)...	99	第107図	B地区出土石器実測図(1).....	151
第72図	第14号遺構出土石器展開図(2).....	100	第108図	B地区出土石器実測図(2).....	152
第73図	第14号遺構出土石器拓影図(3).....	101	第109図	C地区出土礫構成比.....	153
第74図	第15号遺構出土石器実測拓影図(1)...	103	第110図	C地区出土礫、破碎率と焼率.....	153
第75図	第15号遺構出土石器実測拓影図(2)...	104	第111図	C地区出土石器実測図(1).....	153
第76図	第20号遺構出土石器拓影図.....	106	第112図	C地区出土石器実測図(2).....	154
第77図	第21号遺構出土石器拓影図.....	108	第113図	地区外出土石器実測図(1).....	155
第78図	第22号遺構出土石器実測図.....	110	第114図	地区外出土石器実測図(2).....	155
第79図	遺構外出土石器実測図(1).....	113	第115図	炭化木製品実測図.....	155
第80図	遺構外出土石器実測図(2).....	114	第116図	第層遺構、遺物分布図.....	157
第81図	遺構外出土石器実測図(3).....	115	第117図	第16号遺構.....	159
第82図	遺構外出土石器実測図(4).....	116	第118図	第層出土石器拓影図.....	158
第83図	遺構外出土石器実測図(5).....	117	第119図	第層出土礫構成比.....	161
第84図	遺構外出土石器実測拓影図(6).....	118	第120図	第層出土礫、破碎率と焼率.....	161
第85図	遺構外出土石器実測図(7).....	119	第121図	第層遺物分布図.....	162
第86図	遺構外出土石器実測図(8).....	120	第122図	第層出土石器実測図.....	163
第87図	遺構外出土石器拓影図(9).....	121	第123図	第層出土礫構成比.....	164
第88図	遺構外出土石器拓影図(10).....	122	第124図	第層出土礫、破碎率と焼率.....	164
第89図	遺構外出土石器拓影図(11).....	123	第125図	第層出土石器実測図.....	164
第90図	遺構外出土石器拓影図(12).....	124	第126図	第群石器集成図(1).....	171
第91図	遺構外出土石器拓影図(13).....	125	第127図	第群石器集成図(2).....	172
第92図	遺構外出土石器拓影図(14).....	126	第128図	第群石器集成図(3).....	173
第93図	土製品実測図.....	134	第129図	深鉢形土器器形区分概念図.....	174
第94図	A地区出土石器、石製品、 礫分布図.....	付図	第130図	第群石器組成図.....	185
第95図	A地区出土剥片計測グラフ.....	140	第131図	遺構の規模.....	197
第96図	A地区出土礫構成比.....	143	第132図	遺構の規模と深さ.....	198
第97図	A地区出土礫、破碎率と焼率.....	143	第133図	遺構の規模と平面図.....	199
第98図	A地区出土石器実測図(1).....	144	第134図	遺構内遺物分布図(1).....	200
第99図	A地区出土石器実測図(2).....	145	第135図	遺構内遺物分布図(2).....	201
第100図	A地区出土石器実測図(3).....	146	第136図	遺構内遺物分布図(3).....	202
第101図	A地区出土石器実測図(4).....	147	第137図	遺構内遺物分布図(4).....	203

第138図	遺構内遺物分布図(5).....	204	第165図	第 Ⅰ 層出土土器実測拓影図(1)...	244
第139図	遺構内遺物分布図(6).....	205	第166図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(2).....	245
第140図	遺構内遺物分布図(7).....	206	第167図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(3).....	246
第141図	遺構内遺物分布図(8).....	207	第168図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(4).....	247
第142図	遺構内遺物分布図(9).....	208	第169図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(5).....	248
第143図	遺構内遺物分布図(10).....	209	第170図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(6).....	249
第144図	遺構内遺物分布図(11).....	210	第171図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(7).....	250
第145図	遺構内遺物分布図(12).....	211	第172図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(8).....	251
第146図	遺構内遺物分布図(13).....	212	第173図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(9).....	252
第147図	遺構内遺物分布図(14).....	213	第174図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(10).....	253
第148図	遺構内遺物分布図(15).....	214	第175図	第 Ⅰ 層出土土器拓影図(11).....	254
第149図	遺構内遺物分布図(16).....	215	第176図	円盤状土製品実測拓影図.....	261
第150図	遺構内遺物分布図(17).....	216	第177図	石器、礫分布図.....	262
第151図	遺構内遺物分布図(18).....	217	第178図	礫構成比.....	264
第152図	最終期の遺構.....	218	第179図	石器実測図(1).....	265
第153図	A地区石器、礫の分布.....	224	第180図	石器実測図(2).....	266
第154図	石器構成比.....	226	第181図	第 Ⅰ 層発掘区配置図.....	267
第155図	個体数による器種別、石種構成比...228		第182図	第 Ⅰ 層発掘区配置図.....	268
第156図	重量による石種別、器種構成比(1)...229		第183図	第5、6号フラスコ状土壌実測図...270	
第157図	重量による石種別、器種構成比(2)...230		第184図	第 Ⅰ 層出土土器実測図.....	271
第158図	馬場瀬(2)遺跡地形図.....	231	第185図	歴史時代の遺物分布模式図.....	272
第159図	馬場瀬(2)基本層位.....	233	第186図	歴史時代遺物実測図.....	273
第160図	馬場瀬(2)基本層位.....	234	第187図	古銭拓影図.....	275
第161図	馬場瀬(2)基本層位.....	235	第188図	陶器実測拓影図.....	277
第162図	遺構、遺物分布模式図.....	236	第189図	石器構成比.....	282
第163図	第7号溝状ピット実測図.....	237	第190図	石器、礫と石種.....	283
第164図	第 Ⅰ 層出土土器分布模式図.....	239			

## 表 目 次

第1表	地質層序表.....	10	第7表	第1号遺構出土土器観察表.....	65
第2表	青森県南東部～岩手県北部の沖積世 火山砕屑物黒色土層等の層序.....	10	第8表	第2号遺構出土土器分類表.....	68
第3表	十和田 a、b 両降下火山灰の <sup>14</sup> C年代.....	12	第9表	第2号遺構出土土器観察表.....	68
第4表	南郷村遺跡地名表.....	15	第10表	第3号遺構出土土器分類表.....	68
第5表	出土土器分類表.....	64	第11表	第3号遺構出土土器観察表(1).....	77
第6表	第1号遺構出土土器分類表.....	65	第12表	第3号遺構出土土器観察表(2).....	78
			第13表	第3号遺構出土土器観察表(3).....	79

第14表	第3号遺構出土土器觀察表(4).....	80	第50表	磨製石斧計測表 .....	136
第15表	第3号遺構出土土器觀察表(5).....	80	第51表	尖頭器計測表 .....	137
第16表	第6号遺構出土土器分類表 .....	80	第52表	石匙計測表 .....	137
第17表	第6号遺構出土土器觀察表 .....	81	第53表	石錐計測表 .....	138
第18表	第7号遺構出土土器分類表 .....	83	第54表	異形石器計測表 .....	138
第19表	第8号遺構出土土器觀察表(1)(2) ...	83	第55表	R - フレーク計測表 .....	138
第20表	第10号遺構出土土器分類表 .....	85	第56表	欠損品計測表 .....	139
第21表	第10号遺構出土土器觀察表 .....	87	第57表	すり石計測表 .....	141
第22表	第12号遺構出土土器分類表 .....	87	第58表	円盤状石器計測表 .....	142
第23表	第12号遺構出土土器觀察表 .....	88	第59表	打製石斧計測表 .....	142
第24表	第13号遺構出土土器分類表 .....	89	第60表	石皿計測表 .....	142
第25表	第13号遺構出土土器觀察表(1).....	89	第61表	石製品計測表 .....	143
第26表	第13号遺構出土土器觀察表(2).....	97	第62表	欠損品計測表 .....	150
第27表	第14号遺構出土土器分類表 .....	98	第63表	すり石計測表 .....	150
第28表	第14号遺構出土土器觀察表 .....	101	第64表	円盤状石器計測表 .....	150
第29表	第15号遺構出土土器分類表 .....	102	第65表	石製品計測表 .....	150
第30表	第15号遺構出土土器觀察表 .....	102	第66表	尖頭器計測表 .....	152
第31表	第20号遺構出土土器分類表 .....	105	第67表	すり石計測表 .....	153
第32表	第20号遺構出土土器觀察表 .....	105	第68表	尖頭器計測表 .....	154
第33表	第21号遺構出土土器分類表 .....	107	第69表	特殊すり石計測表 .....	154
第34表	第21号遺構出土土器觀察表 .....	107	第70表	第 層出土土器分類表 .....	158
第35表	第22号遺構出土土器分類表 .....	109	第71表	第 層出土土器分類表 .....	163
第36表	第22号遺構出土土器觀察表 .....	109	第72表	すり石計測表 .....	164
第37表	第28号遺構出土土器分類表 .....	111	第73表	第 層出土土器分類一覽表 .....	170
第38表	竪穴遺構出土完形、 復原土器一覽表 .....	111	第74表	深鉢形土器資料一覽表 .....	175
第39表	遺構出土土器分類表 .....	112	第75表	小鉢形土器資料一覽表 .....	176
第40表	遺構外出土土器觀察表(1).....	117	第76表	注口土器資料一覽表 .....	177
第41表	遺構外出土土器觀察表(2).....	127	第77表	長頸壺形土器資料一覽表 .....	178
第42表	遺構外出土土器觀察表(3).....	128	第78表	台付浅鉢形土器資料一覽表 .....	179
第43表	遺構外出土土器觀察表(4).....	129	第79表	ミニアチュア形土器資料一覽表 .....	181
第44表	遺構外出土土器觀察表(5).....	130	第80表	十腰内第 ~ 群土器 組成対比表(1).....	186
第45表	遺構外出土土器觀察表(6).....	131	第81表	十腰内第 ~ 群土器 組成対比表(2).....	187
第46表	遺構外出土土器觀察表(7).....	132	第82表	十腰内第 ~ 群土器 組成対比表(3).....	188
第47表	遺構外出土土器分類表 .....	132			
第48表	土製品觀察表 .....	133			
第49表	石器、石製品、礫分類表 .....	135			

第83表	十腰内遺跡の土器群別と東北地方における後期縄文土器の型式対比表	191	第93表	遺構外出土土器観察表(5)	257
第84表	遺構一覧表	196	第94表	遺構外出土土器観察表(6)	258
第85表	A地区石器遺構別出土表	225	第95表	石器、礫分類表	261
第86表	第1層出土土器集計表(1)	240	第96表	磨製石斧計測表	263
第87表	第2層出土土器集計表(2)	242	第97表	尖頭器計測表	263
第88表	土器分布群別集計表	243	第98表	石匙計測表	263
第89表	遺構外出土土器観察表(1)	243	第99表	R - フレイク計測表	263
第90表	遺構外出土土器観察表(2)	254	第100表	すり石計測表	264
第91表	遺構外出土土器観察表(3)	255	第101表	特殊すり石計測表	264
第92表	遺構外出土土器観察表(4)	256	第102表	古銭観察表	276
			第103表	陶器観察表	278

## 写 真 図 版 目 次

図版1	馬場瀬(1)遺跡遠景	291	図版23	第14号遺構	313
図版2	馬場瀬(1)遺跡南西部の調査	292	図版24	第20号遺構	314
図版3	南西部第1層の調査	293	図版25	第20号遺構	315
図版4	北半部の調査	294	図版26	第21号遺構	316
図版5	基本層位(1)	295	図版27	第21号遺構	317
図版6	基本層位(2)	296	図版28	第22号遺構	318
図版7	南西部検出遺構群	297	図版29	第22号遺構	319
図版8	第3号遺構	298	図版30	第18号遺構	320
図版9	第3号遺構出土遺物	299	図版31	第19号遺構	321
図版10	第7号遺構	300	図版32	第23号遺構	322
図版11	第7号遺構出土遺物	301	図版33	第25号遺構	323
図版12	第10号遺構	302	図版34	第27号遺構	324
図版13	第10号遺構	303	図版35	第28号遺構	325
図版14	第10号遺構出土遺物	304	図版36	第6号遺構	326
図版15	第13号遺構	305	図版37	第9号遺構	327
図版16	第13号遺構	306	図版38	第24号遺構	328
図版17	第13号遺構	307	図版39	第26号遺構	329
図版18	第15号遺構	308	図版40	第29号遺構	330
図版19	第15号遺構	309	図版41	第16号遺構	331
図版20	第1号遺構	310	図版42	第1、3号遺構出土土器	332
図版21	第2号遺構	311	図版43	第3号遺構出土土器	333
図版22	第12号遺構	312	図版44	第1～3号遺構出土土器	334

図版45	第3号遺構出土土器(1).....	335	図版67	馬場瀬(2)遺跡遠景.....	357
図版46	第3号遺構出土土器(2).....	336	図版68	馬場瀬(2)遺跡試掘調査.....	358
図版47	第3号遺構出土土器(3).....	337	図版69	馬場瀬(2)遺跡発掘調査.....	359
図版48	第6、7、10号遺構出土土器.....	338	図版70	馬場瀬(2)遺跡北半地区の調査.....	360
図版49	第10、12、13号遺構出土土器.....	339	図版71	基本層位(1).....	361
図版50	第10、12、13号遺構出土土器.....	340	図版72	基本層位(2).....	362
図版51	第13号遺構出土土器(1).....	341	図版73	基本層位(3).....	363
図版52	第13号遺構出土土器(2).....	342	図版74	基本層位(4).....	364
図版53	第14、15号遺構出土土器.....	343	図版75	遺物、遺構出土状況.....	365
図版54	第15、20、21号遺構出土土器.....	344	図版76	第7号溝状ピット.....	366
図版55	遺構内、遺構外出土土器.....	345	図版77	フラスコ状土壌(1).....	367
図版56	遺構外出土土器(1).....	346	図版78	フラスコ状土壌(2).....	368
図版57	遺構外出土土器(2).....	347	図版79	第、層出土土器(1).....	369
図版58	遺構外出土土器(3).....	348	図版80	第、層出土土器(2).....	370
図版59	遺構外出土土器(4).....	349	図版81	第、層出土土器(3).....	371
図版60	遺構外出土土器(5).....	350	図版82	第、層出土土器(4).....	372
図版61	遺構外出土土器(6).....	351	図版83	第、層出土土器(5).....	373
図版62	遺構外出土土器(7).....	352	図版84	土器、土製品.....	374
図版63	遺構外出土土器、土製品.....	353	図版85	石器.....	375
図版64	石器、石製品(1).....	354	図版86	歴史時代の遺物(1).....	376
図版65	石器、石製品(2).....	355	図版87	歴史時代の遺物(2).....	377
図版66	石器、石製品(3).....	356	図版88	樹種同定顕微鏡写真.....	378



# はしがき

## 1 調査に至る経過

県内の東北縦貫自動車道建設に係る埋蔵文化財の調査については、文化庁と日本道路公団の覚書によって、県教育委員会（文化課）が担当してきた。

県内の高速自動車道建設予定路線は二つある。ひとつはすでに開通した（昭和55年10月29日）秋田県から青森市に至る路線である。この路線内にある18箇所（遺跡）については、昭和46年11月の第一次路線発表以来、分布・試掘、発掘調査を実施して、その成果をその都度報告書にして刊行してきた。もう一つの予定路線が、岩手県二戸市と八戸市を結ぶルートである。この予定路線は、昭和46年6月に基本計画が策定され、昭和52年9月に実施計画の認可とともに本県と岩手県内の路線が同時に発表された。総延長41.88kmのうち、県内分は14.28kmであった。県教育委員会では、昭和53年4月と11月の二度にわたり路線内（南郷村、福地村、八戸市）の遺跡分布調査を行ったが、周知の遺跡を含め13箇所（161,230㎡）について発掘調査に入る前に試掘を行って遺跡が否かを決定することが必要となった。そこで県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局と協議の上、用地買収が未了であったが、昭和54年8月から10月まで3ヶ月間にわたって、13箇所のうち6箇所（99,600㎡対象）の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、No. 1（16,200㎡）とNo.10（10,000㎡）は除外され、No. 3、4、7、13の調査対象面積が確定（延63,200㎡減）した。また、八戸ICに関連して分布調査が行われて、2箇所（10,000㎡）の遺跡が確認された。

昭和54年10月、日本道路公団仙台建設局長から南郷村内5遺跡の発掘調査の依頼があり、翌11月24日付けで埋蔵文化財発掘調査通知書が県教育委員会経由で文化庁に送付され、昭和55年4月から発掘調査を実施することになった。なお、これまでNo.で呼称していた遺跡名については地元教育委員会と協議のうえ、下表のとおり確定した。

No.	遺跡名	所在地	試掘の有無	備考	No.	遺跡名	所在地	試掘の有無	備考
1		南郷村	有	除外	8	鴨平(2)	八戸市	無	昭和56年発掘
2	右エ門次郎窪	"	無	昭和55年発掘	9	昼巻沢	八戸市 福地村	無	"
3	三合山	"	有	"	10		八戸市	有	除外
4	石ノ窪	"	有	"	11	葦窪	"	無	
5	馬場瀬(1)	"	無	"	12	長者森	"	無	昭和56年発掘
6	馬場瀬(2)	"	無	"	13	白山平(2)	"	有	"
7	鴨平(1)	南郷村 八戸市	有	昭和56年発掘					

昭和55年4月、青森県埋蔵文化財調査センターの設置に伴い、東北縦貫自動車道関連遺跡の発掘調査業務は、文化課から当センターに移行された。(北林)

## 2 調査要項

### (1) 調査目的

東北縦貫自動車道八戸線建設の工事着工に先立ち、当該路線に所在する遺跡の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

### (2) 遺跡名 所在地 遺跡略号

馬場瀬(1)遺跡	青森県三戸郡南郷村大字市野沢馬場瀬41	80馬(1)
馬場瀬(2)遺跡	同 上	26 80馬(2)

### (3) 調査期間 調査対象面積

馬場瀬(1)遺跡	昭和55年4月23日～5月1日、5月19日～8月30日	6,500㎡
馬場瀬(2)遺跡	昭和55年5月2日～5月17日、8月21日～10月31日	6,100㎡

### (4) 調査依頼者

日本道路公団仙台建設局

### (5) 調査担当者

青森県教育委員会

### (6) 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### (7) 調査関係協力機関

南郷村役場、南郷村教育委員会

### (8) 調査参加者

調査指導員	小井田幸哉	青森県文化財保護審議会委員
〃	村越 潔	弘前大学教育学部教授
調査協力員	岩織 文弥	南郷村教育委員会教育長
〃	本多 辰巳	南郷村文化財審議委員
〃	村上 四郎	南郷村文化財審議委員
調査員	松山 力	青森県立八戸高等学校教諭
〃	滝沢 幸長	光星学院高等学校教諭
調査補助員	奈良 清隆、吹田 光広、吉田 智、福土 静子、浅利 哲世	
	青森県埋蔵文化財調査センター	
	北山峰一郎	所長

古井 睦夫	次長
工藤 泰博	調査第三課課長
北林八洲晴	主査（調査担当者）
工藤 大	主事（ " ）
高谷 重彰	総務課主任主査
成田 静男	" 主事

### 3 調査方法と調査経過

#### (1) 調査方法

馬場瀬(1)、同(2)遺跡は、昭和53年の分布調査によって確認されたが、その後、試掘調査は実施されていなかった。しかし、本遺跡に近い三合山、石ノ窪、鴨平(1)などの遺跡を試掘した結果からみて、各種の降下火山灰が厚く堆積して地表から八戸火山灰層上面まで相当深いこと、降下火山灰層を鍵層として分層発掘を行い易いことなどが予想されていた。

発掘調査に先立ち、現地調査担当者の間では、東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査方法を記した小冊子を用意したが、ここでは前記2点を加味して、現地で実際採用した調査方法の概要について記してみたい。

#### 調査の手順

調査は、馬場瀬(1)、同(2)の順に実施する。

ア 道路公団が設置した路線内の中心杭を利用して、グリッド（調査単位）を設定する。

イ 試掘を行い、遺物包含層、遺構の有無、土層の厚さなどを把握する。

ウ 表土の粗掘り、層（中掬浮石層上面）まで全面的に掘り下げ、遺構の確認、遺物包含層の有無を調査する。粗掘り出土の遺物は、グリッドごと一括取り上げる。

エ 遺構確認—精査、実測、写真撮影、遺物取り上げの順とする。

遺物出土 平面分布図作成、遺物台帳へ記録、必要に応じて写真撮影し、遺物を取り上げる。

オ 次に、5 m × 5 mの面積（1グリッド相当面積 = 25m<sup>2</sup>）を調査の1単位として、その面積の2/5（5 m × 2 m = 10m<sup>2</sup>、又は相当面積）を南部浮石層上面まで掘り下げる。遺物、遺構などが出土した場合は、周辺のグリッドを拡張して、エの調査を繰り返す。

カ エのグリッドは、検出遺構、出土遺物が確認できない場合でも、その2/5（5 m × 2 m = 10m<sup>2</sup>）の面積を八戸火山灰層上面まで掘り下げる。確認できた場合は、付近のグリッドに調査区を拡げてエの作業を行う。

#### グリッド設定

5 m × 5 mを1単位とする。グリッド名は、南郷地区5遺跡を共通させて、アルファベッ

トを東西基準線（西 東）、算用数字を南北基準線（南 北）に配して、組み合わせ表示する。

#### 基本土層の実測と注記

基本土層は、調査地区の南北、東西ラインで最長箇所を選んで実測する。土層観察用溝は必要に応じて設ける。基本土層はローマ数字（Ⅰ、Ⅱ）、遺構覆土は算用数字（1、2～）で注記する。

#### 遺構の番号、精査、実測方法、B・M.

遺構の番号は、確認順におし番号を付ける。精査の結果、遺構でないことが判明した場合は欠番とする。精査は、2分法、4分法による分層発掘とする。遺構の完掘後は、“ダメ押し”をする。遺構の実測は、簡易遣り方と平板実測を併用する。縮尺は、1/20、1/10を原則とする。B・M.（ベンチマーク）は、公団設置のものを利用する。

#### 遺物の取り上げ

第 層以下の遺物は、各層ごとに必要に応じて、平面図、遺物台帳に記録する。遺物を取り上げて収納する場合は、白（土器）、青（石器）、赤（その他）の遺物カードを使用して、1点（一括）1袋とする。

#### 写真撮影

35ミリ判2台でモノクロとカラースライドのフィルムを使用する。撮影前に遺跡名、年月日、遺物、遺構No.（被写体名）、撮影方向などを記載した小黒板を撮影しておく。

#### 自然科学の分野の応用

地質、石種、樹種、炭素年代測定などは必要に応じて専門家に依頼する。

（北林）

## （2）調査経過

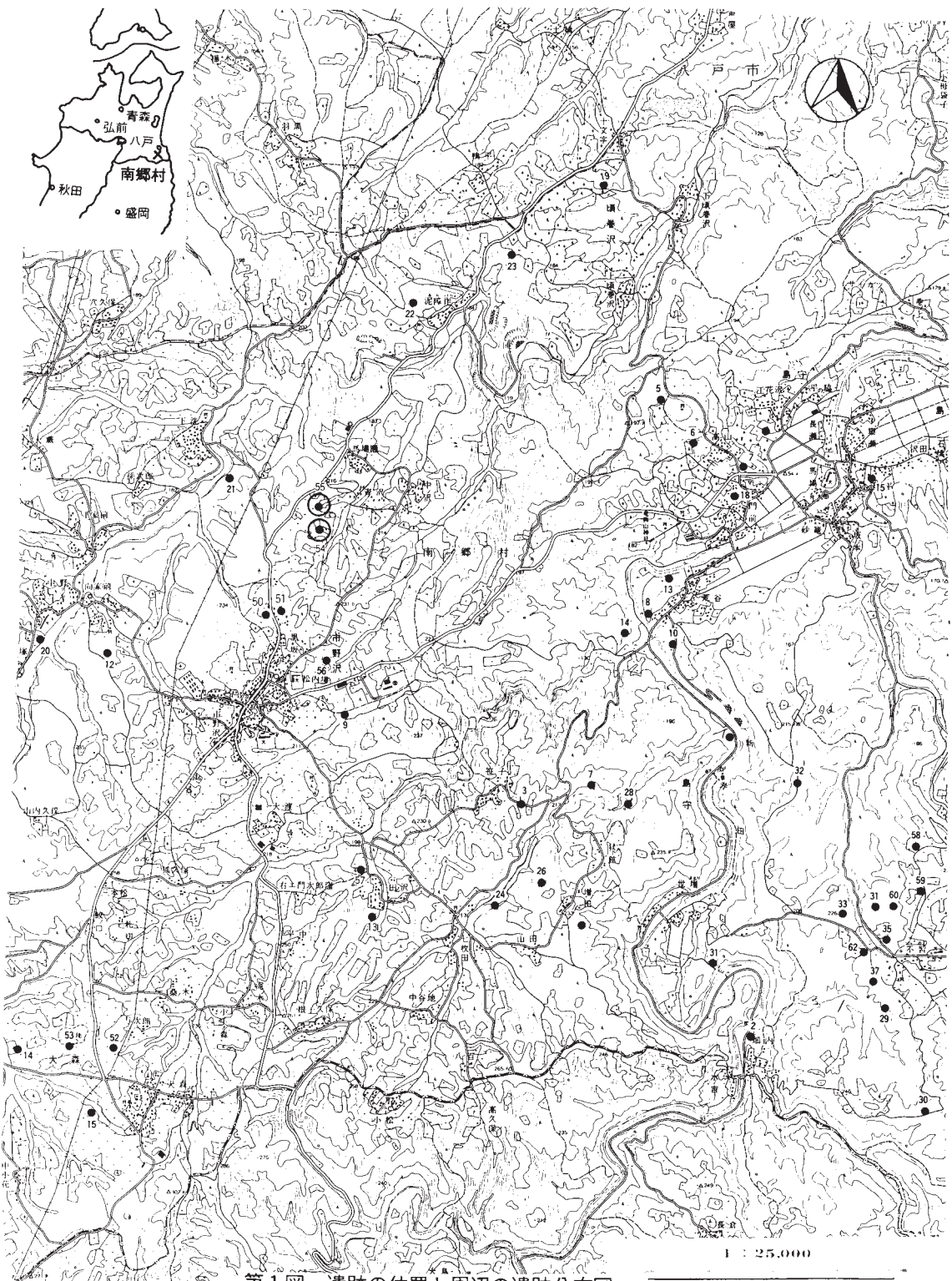
南郷地区の調査は、2チームが同時に実施するため、発掘作業員の確保が懸念されたが、地元南郷村同村教育委員会の献身的な応援によって予定人数を確保することができた。

調査開始前に、作業員には雇用に関する説明会並びに発掘調査打ち合わせ会議を開催するとともに、調査器材を現地に搬入した。調査は試掘調査を先行させて、まず、遺跡の概要を把握することから始めた。

4月23日から馬場瀬1遺跡の試掘調査を開始して、5月の連休前日に終了した。グリッドの設定は中心杭（S T A 324 + 00 ~ 323 + 60 真北 - 27° - 西）を利用した。

5月初旬から馬場瀬2遺跡の試掘に入り、バックホーを導入して、中旬に終了した。

5月下旬から再び馬場瀬1遺跡へ移動して、調査地区の南端から粗掘りを開始した。第 層から完形土器、土偶、石器などが出土し、大小9箇所の落み込みを確認した。粗掘と精査



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

を併行して調査を進めたが遺物、遺構は調査地区の南西部に集中していた。6月中旬、八戸火山灰層上面から貝殻文系土器片が出土した。

6月23日から7月1日まで、新築になったセンターへ移転するため調査を休み、7月半ばで調査対象地区の南半部を終り、北半部の調査に移るが、抜根作業を伴うため調査は困難を極めた。

お盆前に北半部の粗掘りを終了し、お盆休み後、遺構確認と精査に入った。

8月21日、精査要員を残して馬場瀬(2)遺跡に移動し、草刈り後粗掘りに入った。8月下旬は、連日雨天が続いたが8月末日、馬場瀬(1)遺跡の調査を終了した。

9月中旬になって、これまで葉煙草栽培のため調査ができなかった調査地区北半部の調査を開始した。

10月22日、曇から初雪となった。10月29日、現地の調査を終了して、午後から調査器材を搬出した。

(北林)

# 遺跡の概観

## 1 遺跡の立地と周辺の地質

松山 力

### (1) 地形の概観

青森県南東部の、馬淵川～名久井岳東麓～岩手県境～階上岳の西麓から北麓～太平洋岸に囲まれた、東西およそ25km、南北およそ20kmの地域は、馬淵川沿い及び海岸沿いにみられる。平坦面がよく残された中・低位の洪積段丘及び沖積低地を除けば、大部分が標高80～250m、ところによっては300m余のゆるやかに起伏する丘陵地（蒼前平段丘）となっている。

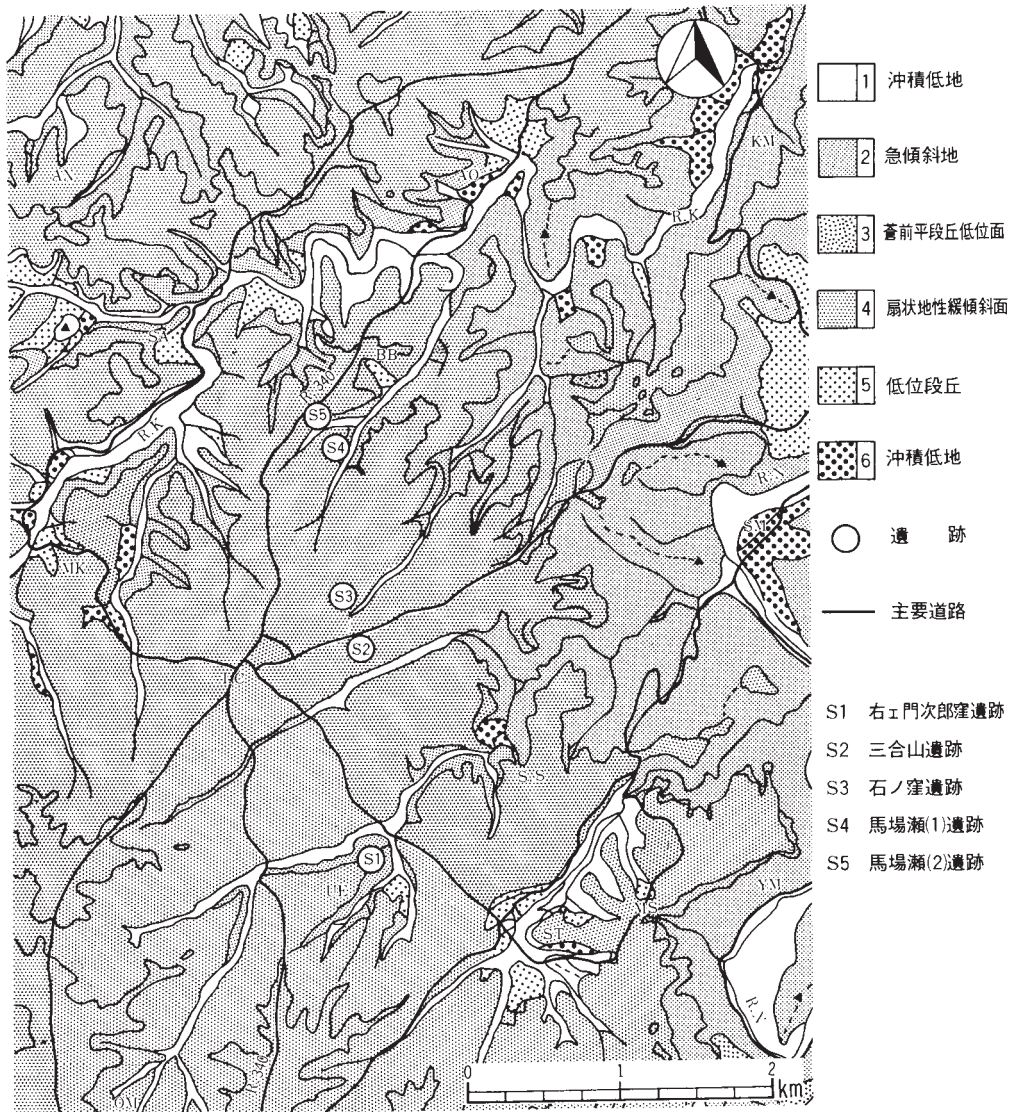
この広い地域は、岩手県軽米町を通り抜け、北々東方の八戸湾に向け流れ下る新井田川によって東西に2分される。この川の途中、岩手県境から4kmほどの区間は、屈曲しながら北上する峡谷となり、南部には世増（南郷村）の小盆地が、北端から東北東方には島守盆地が開けている。その間の峡谷部の両壁は、標高差100m前後の急崖となっている。この峡谷部の西方ほぼ2～3kmの丘陵部に、東北自動車道八戸線の予定地がほぼ南北にのび、それに沿って南から右工門次郎窪・三合山・石ノ窪・馬場瀬(1)・馬場瀬(2)などの遺跡群が、ほぼ3kmの間に分布している。

新井田川と、西方の馬淵川にはさまれた丘陵地は、さらに南郷村頃巻沢を通る谷（以下、頃巻沢の谷と呼ぶ）によって2分される。頃巻沢の谷は、南郷村鳩田の南の県境付近に谷頭をもつ谷で、右工門次郎窪遺跡の西方3kmほどから次第に東へ向きを変えて北東流となり、馬場瀬の北1.5kmから曲流しながら一たん東へ向かったあと、上頃巻沢付近から北北東へ流れ下り、島守盆地の島守中心街から北方4.5km付近（八戸市是川の差波部落）で新井田川と合流する。この谷は、馬場瀬の北北東の泥障作付近からは数10～100mの急な谷壁を刻んでいる。なお、この谷と西方の馬淵川下流部とはほぼ平行しており、その間の距離は5.5～7kmある。

新井田川と頃巻沢の谷とにはさまれた丘陵地（蒼前平段丘）は、全体として南から北へ少しづつ高度をさげ、もっとも高い県境付近で標高300mをこすところもあるが、おおむね260m前後～180m前後である。この地域の丘陵地はかなり開折されている部分が多く、ところどころを小谷で切られながら波状に起伏している。

### (2) 遺跡の立地

馬場瀬(1)・馬場瀬(2)両遺跡は、南郷村市野沢中心街からほぼ北方へ1.5km、八戸湾（新井田川口）の南南西方約14kmの地域に位置している。両遺跡は南東～北西方向に約300mほど離れている。両遺跡の西方約1kmから、北方約1～1.5km付近を抜けて、北北東方2kmの泥障作付近まで



AN 穴久保 AO 泥障作 BB 馬場瀬 IC 市野沢中心街 KM 頃巻沢  
 MK 向家前 MS 増田 OM 大森 SA 下洗 SM 島守盆地 SS 笹子  
 ST 七枚田 UE 右エ門次郎窪 YM 世増 PK 頃巻沢の谷 RN 新井田川  
 R340 国道 340 号線

第 2 図 遺跡周辺の地形分類図



屈曲しながら流れる頃巻沢の谷に、泥障作南南西約500m付近で合する小支谷があって、両遺跡はこの小支谷合流点から上流1.5km付近にある。この小支谷は、両遺跡の手前で2つに分かれ、西への枝谷の約300m上流の北岸（左岸）に馬場瀬2遺跡が、南南西への枝谷の約200m上流の西岸（左岸）に馬場瀬1遺跡が、それぞれの中心を置いており、両枝谷の分岐点には南南西よりくさび状の丘陵峯部が突きだして、両遺跡を分ける。

馬場瀬1遺跡は、前述のように、南南西への枝谷の西岸にあるが、枝谷西岸部は、幅約40mほどで、谷に沿って北北東方へのびる細長い低位段丘部と、その西の丘陵部東側斜面部に分けられ、発掘は谷際から両部分にまたがって行われた。低位段丘は幅15～40mほどで、細長くのびる谷底部と標高差3～5mの段丘崖で接し、ゆるく谷際に傾斜するが平坦である。東側斜面の勾配はほぼ5～14度の間を変化する。対岸は直接丘陵西斜面と谷底が接し、谷際が標高差2～4mの急崖となっているものの、全体的には西側丘陵斜面と同様の勾配である。

馬場瀬2遺跡は、前述のように、西への枝谷の北岸にある。この谷は遺跡のところで急に南西方に折れ曲がり500m先で谷頭となる。遺跡付近での谷底は屈曲部の東で約70m、南西では40m以下の幅をもち、屈曲部付近で全体的に3～8度の勾配で南東にゆるく傾斜する。発掘はこの部分を主体に、一部北側のやや急な斜面にかけて行われた。遺跡のすぐ北西に市野沢中心街

第1表 地質層序表

地質年代		層 序	
第四紀	沖積世	—中 振 浮 石 層—	沖積低地——泥・砂・礫など
		—南 部 浮 石 層—	台 地 部— <span style="font-size: 2em;">{</span> 黒色土層 火山灰層（浮石層）
	洪積世	八 戸 火 山 灰 層 (田 面 木 段 丘)	火山灰層・浮石層
		高 館 火 山 灰 層	粘土質褐色火山灰層（ローム）・浮石層
		根城段丘堆積物	河成礫
		高館段丘堆積物	シルト・砂・砂礫
		天 狗 岱 火 山 灰 層	粘土質褐色火山灰層（ローム）・浮石層
天狗岱段丘堆積物	砂鉄質砂・砂礫		
第三紀	鮮新世	斗 川 層 相 当 層	泥岩・砂岩・凝灰岩、(軟体動物化石)
	中新世	名久井岳安山岩類相当層	火山碎屑岩(含溶結凝灰岩)・安山岩
第三紀		古 期 岩 類	チャート・輝緑凝灰岩・粘板岩・砂 岩

をのせる丘陵頂部から北へわかれてのびる丘陵峯部があり、その両側は勾配10～14度の斜面で、その南東斜面から谷底に発掘地が広がっている。

### (3) 地 質

新井田川と頃巻沢の谷及び岩手県境に囲まれた丘陵地域の基盤は、主に先第三系の古期岩類及び第三紀中新世の安山岩や同質の火山碎屑岩類である。市野沢中心街と島守盆地とを結ぶ線の南側では、チャート・輝緑凝灰岩・粘板岩・砂岩などの古期岩類が、北側では第三系が卓越する。第三紀中新世の安山岩は、両輝石安山岩で、多くは板状あるいは柱状節理の発達したいわゆる「鉄平石」である。なお、頃巻沢の谷の泥障作より下流域と、島守盆地周辺の一部地域とには、第三紀鮮新世の地層が分布する。

第2表 青森県南東部～岩手県北部の沖積世火山碎屑物黒色土層等の層序

年 代	記号	土 層	火 山 噴 出 物	備 考
歴 史 時 代	I	暗 褐 色 土 層	未 命 名 火 山 灰 層	耕作土・その他の表土
	II	灰 黒 色 土 層	十和田 a 降下火山灰層	
			十和田 b 降下火山灰層	
続縄文時代	III	黒 褐 色 土 層		黒色土層の下半は中振浮石への漸移部で暗黄褐色
縄 文 時 代		暗 褐 色 土 層		
中 期 後 期 早 期 後 半 早 期 前 半	IV	{ 粘 土 質 黒 褐 色 土 層 粘 土 質 暗 褐 色 土 層 粘 土 質 浮 石 質 暗 褐 色 土 層	中 振 浮 石 層	土層の特徴から編年的区分をすることは困難な部分、下部は南部浮石層中の浮石と混合
			南 部 浮 石 層	
			二ノ倉火山灰層	
		( 粘 土 質 黒 褐 色 ~ 暗 褐 色 ) ~ 灰 褐 色 土 層		
中・旧石器時代	V	褐色火山灰層(ローム) 泥・砂・礫層 基盤岩の風化土層	八戸火山灰層 高館火山灰層 天狗岱火山灰層	八戸浮石流凝灰岩を含む 大不動浮石流凝灰岩を含む

これらの基盤岩類を覆って、洪積世の水成段丘堆積物・褐色火山灰（ローム）と、沖積世の火山砕屑物、黒色土類が全地域に分布し、河谷底には沖積世の軟弱な地層が存在する。

洪積世の水成段丘堆積物は主に厚さ数m程度の砂礫層で、チャートや安山岩の礫が多い。褐色火山灰類は、下位より天狗岱火山灰層・高館火山灰層・八戸火山灰層の3層にわけられる。天狗岱火山灰層は、厚さ数m以内の、しまって固い暗褐色（チョコレート色）火山灰である。高館火山灰層は、天狗岱火山灰層よりはやわらかい、明るい色調の褐色火山灰で、中に数枚以上のそれぞれに特徴ある厚さ数～10数cmの粘土化浮石層をはさみ、全層厚は数m程度である。

八戸火山灰層は、灰白色～明黄褐色の粘土質火山灰と浮石層の互層及びその上位の明褐色火山灰層で構成される。互層部の下半では灰白色の粘土質あるいは砂質の火山灰が、上半では粒径0.5～1cm程度の浮石を主とする浮石層が卓越する。上位の明褐色火山灰は粘性に乏しく、上方の黒色土層に漸移する。八戸火山灰層下底部で $13.770 \pm 510$ 年 B.P.（大池昭二ら、1977）互層部上限で $12.700 \pm 260$ 年 B.P.（大池昭二、1964）の絶対年代測定例がある。

地表直下の黒色土類中には、下から南部浮石層・中撮浮石層・十和田b降下火山灰層・十和田a降下火山灰層・未命名降下火山灰層など、少なくとも5枚の火山砕屑物層がはさまれる。

南部浮石層は、粒径0.3～1.5cm程度の黄橙色～明褐色～赤褐色の浮石が密集した、未膠結でくずれやすい厚さ20～40cmの浮石層で、ほぼ全域に分布する。中撮浮石層は、主に砂粒大の黄色浮石が未膠結状態で密集した浮石層である。しかし、本地域では、厚さ10～30cm以上の連続した地層となっているところや、厚さ5～20cmの浮石塊として断続するところもあるが、大部分の地域では黒色土と混合して、黄色がかった相対的に明るい土層となっている。黒色土と混合した部分は二次的な形成層であるから、年代の大まかな示標とはなっても、厳密な年代示標層としては使用できない。

十和田b降下火山灰層は、噴出源である十和田湖から東側20km以内では、下半が白色浮石、上半が青灰色火山灰の2層で構成されるが、その外側には白色浮石部のみが分布する。本地域では、粒径0.2～0.6（最大2）cmの固い白色浮石の集まる厚さ1～5cmの浮石層で、各地にごく局部的に確認できるにすぎず、その浮石が黒色土中に散在する状態のところが多い。

本地域の十和田a降下火山灰層は、灰白色～淡灰黄色のやや粘土化したシルト状細粒火山灰であるが、本地域では厚さ数cmのものが各所に断片的に認められるにすぎない。

以上の、黒色土類にはさまれる沖積世降下火山砕屑物の降下年代については、第3図及び第3表を参照されたい。

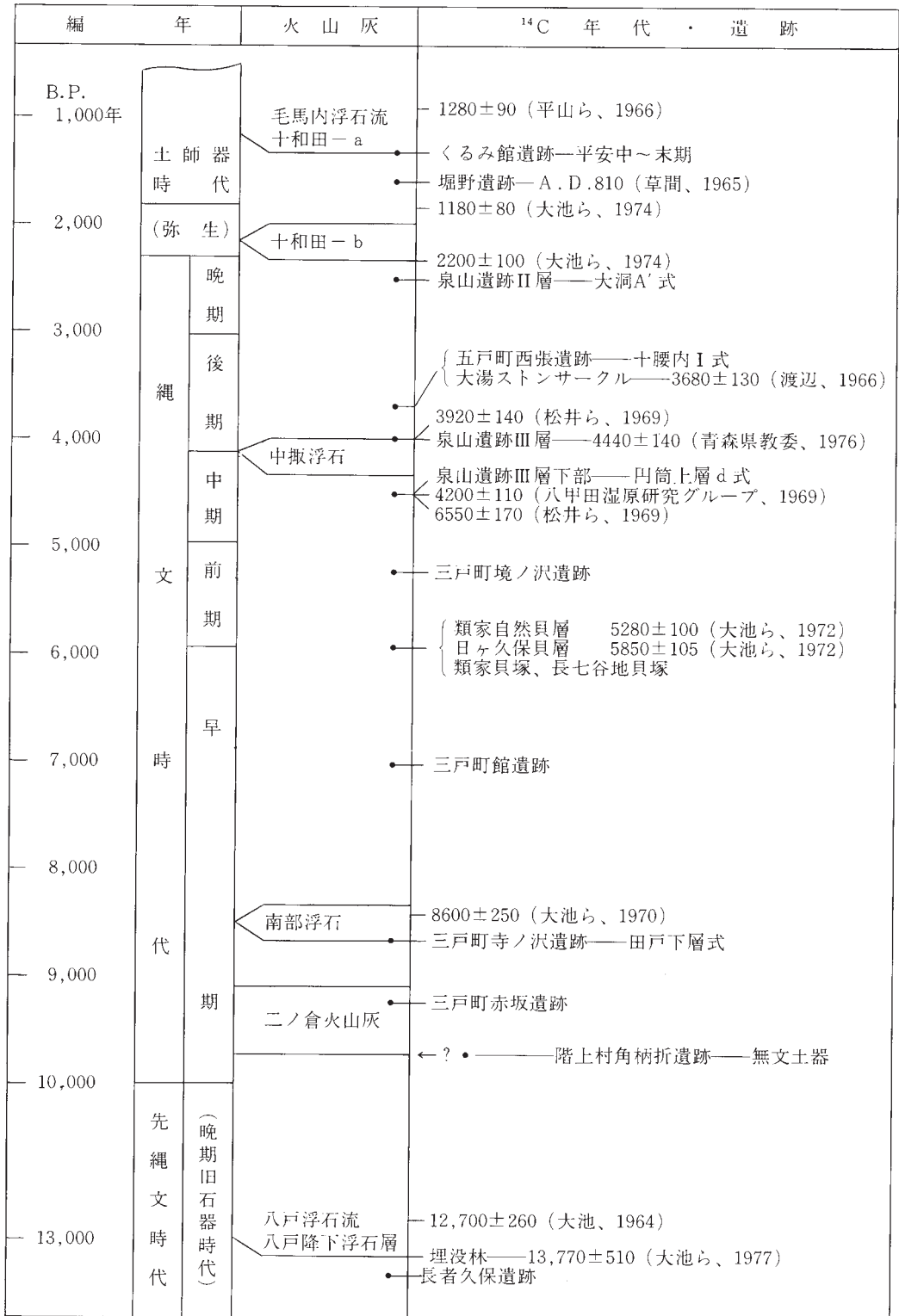
最近の数年間、県内各地で十和田a降下火山灰層よりも新しい火山灰層の存在が明らかにされてきた。本地域では、馬場瀬2)遺跡、右工門次郎窪遺跡でその存在が認められている。いず

第3表 十和田 a・b 両降下火山灰の<sup>14</sup>C年代

層	位	<sup>14</sup> C年代(年B.P.)	測定資料	採集者	発表年度
十和田 a 降下火山灰 (八甲田 a 火山灰)	直上	1450 ± 100	泥炭	八甲田湿原グループ	1969
		1280 ± 90	木炭	平山ら	1966
	直下	2140 ± 90	泥炭	松井ら	1969
		2170 ± 80	沢炭	八甲田湿原グループ	1969
十和田 b 降下火山灰 (八甲田 b 火山灰)	直上	1180 ± 80	腐植酸	大池ら	1974
	直下	2220 ± 100	腐植酸	大池ら	1974

れも淡黄灰色～淡黄褐色で、厚さ数cmの粘土状火山灰として局部的に存在した。町田洋ら(1981、科学 - 岩波書店 - 9月号)によれば、青森市近野・八戸市根城・その他県内各地の遺跡にみられる新しい火山灰は、朝鮮半島基部の白頭山に由来すると推定される苦小牧火山灰であろうという。三辻利一(奈良教育大)の蛍光線分析の結果(未公表 - 八戸市鶉久保遺跡発掘報告書で公表の予定)をみると、十和田 a 降下火山灰より新しい火山灰には2つのタイプがあり、馬場瀬2遺跡のそれは、町田洋らの述べる火山灰とは別のものの可能性が大きい。同様の特徴は黒石市板留遺跡の火山灰にもみられた。2つのタイプの上下関係は、いまのところはっきりしないが、相互の降下時期はそれほど離れたものではない。十和田 a 降下火山灰の降下時期とは、遺物・遺構との関係からみて、一世紀程度の開きがあると推定される。

第3図 十和田火山完新世火山灰編年図 (大池・中川、1979)



## 2 周辺の遺跡

馬場瀬(1)、同(2)遺跡の周辺には、多数の遺跡が所在している。ここでいう、周辺の遺跡とは、便宜上三戸郡南郷村内の遺跡に限定した(第4表)。

昭和53年10月に県教育委員会で刊行した遺跡地図と遺跡地名表によると、南郷村内には53箇所の遺跡が確認されている。その後、昭和53年頃から実施した八戸平原関係(県埋文64、65集1981)及び東北縦貫自動車道八戸線関係の遺跡分布試掘調査によって、更に9箇所の遺跡が追加された。中には、館跡と記録されたところも2箇所知られている(盛田稔1980)。また、全村の遺跡分布図は、すでに同じタイトルで報告書(県埋文65集:1981)が刊行されているので、ここでは一部を割愛した。これら62箇所の遺跡は、縄文時代から藩政時代にわたるものであるが、ここでは、これら遺跡の時代、時期の特徴を遺跡地名表から概観してみたい。

### 遺跡の内訳

62箇所の遺跡のなかで、縄文時代の単独遺跡は13箇所、歴史時代の単独遺跡が8箇所、合計21箇所である。縄文時代の単独遺跡の時期的内訳は、早期がなく、前期1箇所、中期3箇所、後期6箇所、晩期2箇所、時期不詳1箇所である。歴史時代の遺跡8箇所に5箇所は、藩政時代の一里塚である。そのほかの41箇所は、複合遺跡である。その内訳は、縄文時代と歴史時代とが複合している遺跡は7箇所、そのうち、縄文時代の時期不明が2箇所、残り34箇所が縄文時代の複合遺跡となっている。なお、弥生時代の遺跡について公式な報告書は刊行されていないが、馬場瀬(1)遺跡の分布調査の際、採集された遺物のなかに弥生時代の土器と思われるものがあつたといわれている。

縄文時代の複合遺跡と歴史時代の遺跡と複合している縄文時代の遺跡を時期別に区分すると、早・前・晩期1箇所、早・中期2箇所、中・後期3箇所、中・後・晩期2箇所、後・晩期20箇所、時期不明2箇所である。なお、草創期(先土器期)の遺跡は、まだ発見されていない。

これらのことから、南郷村の縄文時代の遺跡で、時期的に多いのは後期であるが、早期から晩期にかけて連続していること。特に、後期と晩期の遺跡が複合している例が全体の70%強を占めている。早期の遺跡が少ない点は、降下火山灰層が厚く堆積していることと、これまで発掘調査が少なかったことに起因しているようである。

なお、昭和53年度に発掘調査が行われた外長根(1)、同(4)、同(5)遺跡及び昭和54年度に調査が実施された田ノ上遺跡については、県埋文64、65集に収録されている。また、昭和55年、同時に調査を行った右工門次郎窪、三合山、石ノ窪遺跡については、県埋文69集として刊行された。

(北林)

第4表 南郷村遺跡地名表

番号	地図	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品
1	135	下山遺跡	島守字崩向10	台地 (河岸段丘)	住居跡	歴史 (奈良・平安)	山林	土師器片、焼石
2	135	畑内遺跡	島守字畑内4	〃	包含地	縄文 (前～晩)	畑	縄文土器片、石斧、石鏃、石皿、石錘
3	135	市野沢笹子遺跡	市野沢字笹子15	台地 (斜面)	〃	縄文 (後・晩)	〃	縄文土器片(壺形、注口土器)
4	126	江花沢遺跡	島守字江花沢	〃	〃	古墳	〃	土師器、須恵器
5	126	高山遺跡(1)	島守字高山4-7	〃	〃	縄文 (早・前晩)	〃	縄文土器(円筒下層式、大洞A式、貝殻文)
6	126	高山遺跡(2)	島守字小林25	〃	〃	縄文(前～晩) 古墳	〃	縄文土器片、土師器
7	126 135	高山遺跡(3)	島守字門前22の2	〃	〃	縄文 (中)	〃	縄文土器片
8	135	荒谷遺跡	島守字下荒谷4の2	台地 (河岸段丘)	〃	縄文 (前～晩) 歴史	畑 水田	縄文土器片(円筒下層a、b式、円筒上層a、b式、大洞B、B C、A、A'、C <sub>2</sub> 式、釣手壺形、注口土器)、土偶、土師器、人骨、石皿他
9	135	三合山遺跡	市野沢字三合山	台地 (斜面)	〃	縄文 (後・晩)	畑 山林	縄文土器片(鉢形土器)、土偶
10	135	松石橋遺跡	島守字松石橋9番地	〃	〃	縄文 (中～後晩)	畑	縄文土器片、緒締型大珠
11	135	田屋久保遺跡	中野字田屋久保4の1	台地 (舌状)	〃	縄文 (晩)	畑 宅地	縄文土器(壺型、深鉢形)、石棒
12	135	中野遺跡	中野字館の下	丘陵 (端)	〃	古墳	水田 山林	土師器片
13	135	田ノ沢遺跡	市野沢字田ノ沢	台地	〃	縄文 (後・晩)	山林	頸飾
14	135	砂子崎遺跡	大森字砂子崎24	〃	〃	縄文 (後)	畑	縄文土器片
15	135	大森西山遺跡	大森字西山	〃	〃	縄文 (後・晩)	〃	縄文土器片(浅鉢形、壺形)
16	135	泉清水遺跡(1)	泉清水字大沢	〃	〃	縄文 (後)	〃	縄文土器片(鉢形)
17	135	泉清水遺跡(2)	泉清水字大久保	丘陵 (頂)	〃	縄文 古墳	山林	竪穴住居跡、空濠跡(三重)
18	135	泉清水遺跡(3)	泉清水字居守渡	台地 (河岸段丘)	〃	縄文 (後・晩)	畑	縄文土器片
19	135	千日沢遺跡	中野字千日沢	台地	〃	〃	〃	縄文土器片
20	135	八地役遺跡	中野字八地役	〃	〃	〃	〃	縄文土器片
21	135	下洗遺跡	中野字大久保	丘陵 (斜面)	〃	縄文 (後)	水田 山林	縄文土器片(注口土器、壺形)
22	126	沢口遺跡	市野沢字沢口	台地	〃	〃	畑	縄文土器片
23	126	下坂遺跡	市野沢字下坂	丘陵 (斜面)	〃	縄文 (後・晩)	〃	縄文土器片、石鏃、石斧
24	135	増田遺跡(1)	島守字坂の沢13	丘陵 (端)	〃	〃	水田 山林	縄文土器片(浅鉢形、大洞B、C式)、石匙
25	135	増田遺跡(2)	島守字提森	〃	〃	〃	牧草地 畑	縄文土器片、石匙
26	135	増田遺跡(3)	島守字伏館	〃	〃	縄文	山林	縄文土器片
27	135	伏館遺跡(1)	島守字井戸尻2	丘陵 (頂)	〃	縄文 (後・晩) 古墳	牧草地	縄文土器片(十腰内式、大洞式他)、石皿片、磨石片、土師器片、竪穴住居跡
28	135	伏館遺跡(2)	島守字坂の上11	台地	〃	縄文 (早・晩)	畑	縄文土器片(貝殻文、物見台式)
29	136	野場遺跡(1)	島守字長坂長根7	丘陵 (端)	〃	縄文 (後・晩)	〃	縄文土器片、石匙
30	136	野場遺跡(2)	島守字長坂長根5	台地	〃	〃	〃	縄文土器片、石斧、石鏃

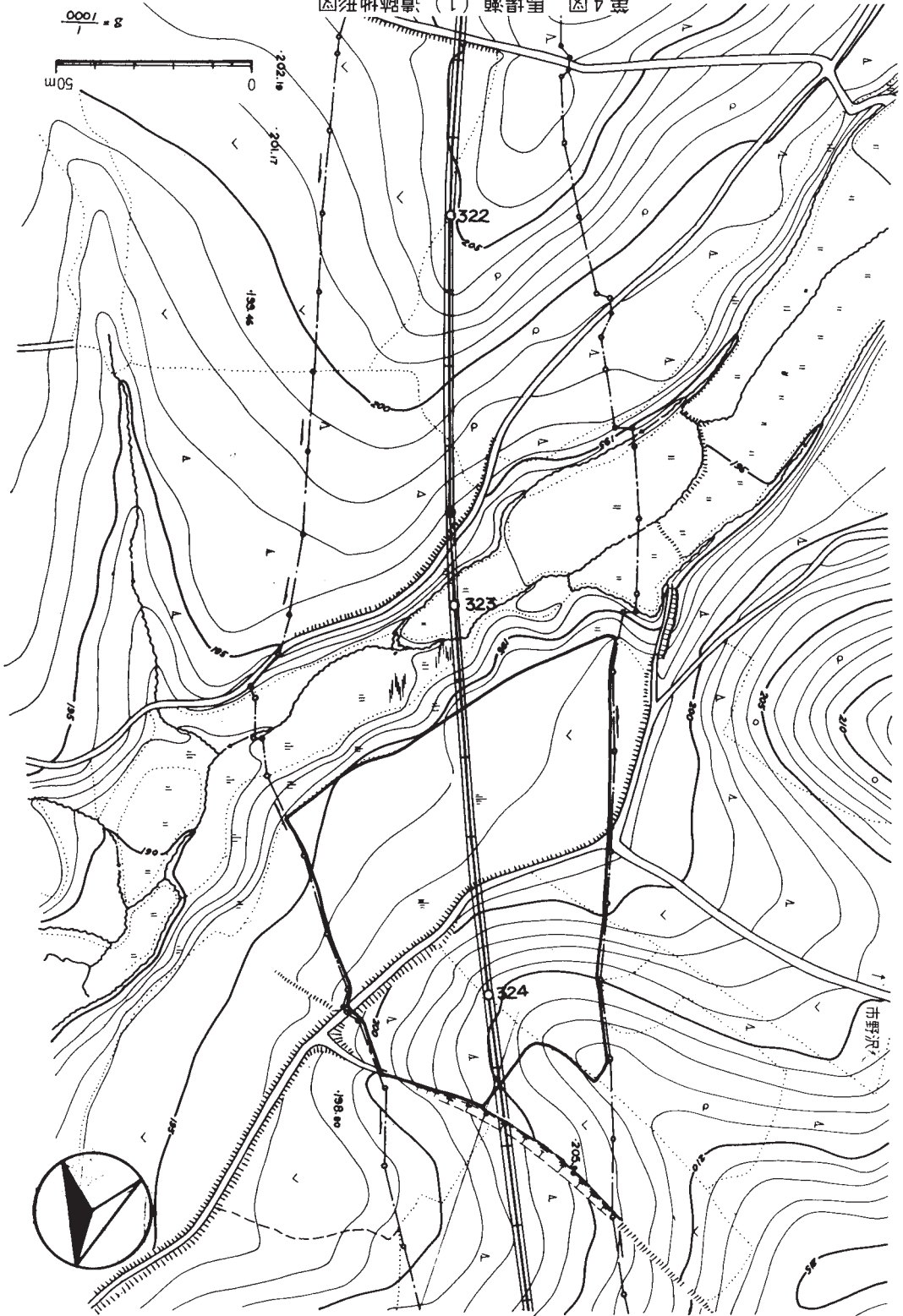
番号	地図	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品
31	135	四ッ役遺跡	島守字四ッ役	丘陵 (斜面)	包含地	古縄文 (中・後)	牧草地	縄文土器片、土師器
32	135	持金沢遺跡	島守字持金沢	〃	〃	縄文 (後・晩)	畑	縄文土器片
33	135	田ノ上遺跡	島守字田ノ上	〃	〃	〃	山林	縄文土器片、石斧
34	135	馳下り遺跡(1)	島守字馳下り	〃	〃	縄文 (中・後・晩)	畑	縄文土器片(円筒式)、石斧
35	135 136	馳下り遺跡(2)	島守字馳下り	〃	〃	縄文 (後・晩)	牧草地	縄文土器片
36	136	馳下り遺跡(3)	島守字馳下り	台地 (斜面)	〃	〃	畑	縄文土器片、石斧
37	135	外長根遺跡	島守字外長根40	丘陵 (斜面)	〃	〃	〃	縄文土器片、礫器
38	136	駒木沢遺跡	島守字駒木沢	〃	〃	〃	〃	縄文土器片、異形土製品、未完成石器
39	136	多越遺跡	島守字古里多越	山地 (頂)	〃	縄文 (後)	山林	縄文土器片
40	136	若宮遺跡	島守字若宮14	台地 (斜面)	〃	縄文 (中・後)	畑	縄文土器片
41	136	売井坂遺跡	島守字売井坂	丘陵 (斜面)	〃	縄文 (後)	畑 山林	縄文土器片、石棺
42	136	田代遺跡	島守字番屋	台地 (斜面)	〃	縄文 (中・後)	畑	縄文土器片
43	135	下荒谷遺跡	島守字下荒谷7	台地	〃	縄文 (中)	〃	縄文土器片、石鏃
44	135	向山遺跡	島守字向山根黒13	台地 (河岸段丘)	〃	縄文 (前)	山林	縄文土器片(円筒下層式)
45	135	十文字遺跡	島守字十文字20の1	台地	〃	縄文 (中)	畑 宅地	縄文土器片(円筒上層c式)
46	127	石橋遺跡	島守字石橋	〃	〃	縄文 (前・中)	畑	縄文土器片(円筒下層d式)
47	127 136	駒坂遺跡	島守字駒坂9の1	〃	〃	〃	畑 宅地	縄文土器片、石鏃
48	135	島守館跡遺跡	島守字館	〃	包含地	縄文 (中・後)	畑	縄文土器片
49	126	南郷村一里塚(1)	頃巻沢字長久保19-1	丘陵	一里塚		〃	
50	135	南郷村一里塚(2)	市野沢字新田28	台地	〃		山林	
51	135	南郷村一里塚(3)	中野字大久保22	〃	〃		〃	
52	135	南郷村一里塚(4)	大森字林崎36	〃	〃			
53	135	南郷村一里塚(5)	大森字砂子崎52	〃	〃		山林	
54	135	馬場瀬(1)遺跡	市野沢字馬場瀬41	〃	包含地	縄文 (早・後)	畑 山林	
55	135	馬場瀬(2)遺跡	市野沢字馬場瀬26	〃	〃	縄文 (早・晩)	〃	
56	135	石ノ窪遺跡	市野沢字石ノ窪13	〃	〃	縄文 (歴史)	畑	
57	135	右エ門次郎窪遺跡	市野沢字右エ門次郎窪13-22	〃	〃	縄文 (晩)	山林	
58	136	外長根(1)遺跡	島守字外山根23	〃	〃	縄文 (中~晩)	畑	
59	136	外長根(4)遺跡	島守字外山長根5	〃	〃	〃	〃	
60	135	外長根(5)遺跡	島守字外山長根18	〃	〃	〃	〃	
61	136	前平(2)遺跡	島守字前平23	〃	〃	縄文 (晩)	〃	
62	135	田ノ上遺跡	島守字田ノ上31-34	〃	〃	縄文 (早・中・後)	〃	



# 馬場瀨(1)遺跡



第4図 馬場瀬(1)遺跡地形図



# 馬場瀬(1)遺跡

## 1 調査の概要

本遺跡の調査は、遺物、遺構の有無、その分布範囲、堆積土の厚さ、遺物包含層などを把握するため試掘調査を行ってから発掘調査に移行した。

調査方法は、グリッド法と分層発掘法を採用して、遺構、遺物の分布、地形、排土地などを考慮しながら、調査地区の南側から北側に向けて行った。

調査地区内の基本層序は、8層に分層したが、基本層序ごとの堆積を呈していないところもある。

検出した遺構は、竪穴住居5、竪穴4、特殊竪穴3、フラスコ状土壇6、その他の土壇6、湧水を伴う落ち込み1である。竪穴住居と竪穴からは縄文時代後期の土器を伴出した。

出土した遺物は、縄文時代早期、前期、後期及び晩期の土器片約7,200点、完形及び復原できた後期の土器50点、土製品6点、石器89点、石製品2点などである。出土遺物の多くは、縄文時代後期後半のものである。 (北林)

## 2 調査区の基本層位

調査区内の堆積土は、次のように区分される(第5～8図)。

表土

第 a 層 灰黒色土層 下位に十和田 b 火山灰を少量含む。

第 b 層 十和田 b 火山灰層。

第 層 暗褐色土層 下位に中掬浮石を少量含む。

第 層 中掬浮石層。

第 a 層 黒褐色土層 南部浮石を少量含む。

第 b 層 黒褐色土層 南部浮石を多量に含む。

第 層 南部浮石層。

第 層 暗褐色土層。

第 層 八戸火山灰層。

第 層 高館火山灰層。

調査区北側の小高い部分では、第 ~ 層を欠き、表土下に薄い漸移層を隔てて、直接第層があらわれる。逆に標高の低い部分では、第 ~ 層がかなり厚く堆積している。第 b 層は、標高の低い部分及び遺構内に散在するのみである。

遺物の出土層は、次のとおりである。

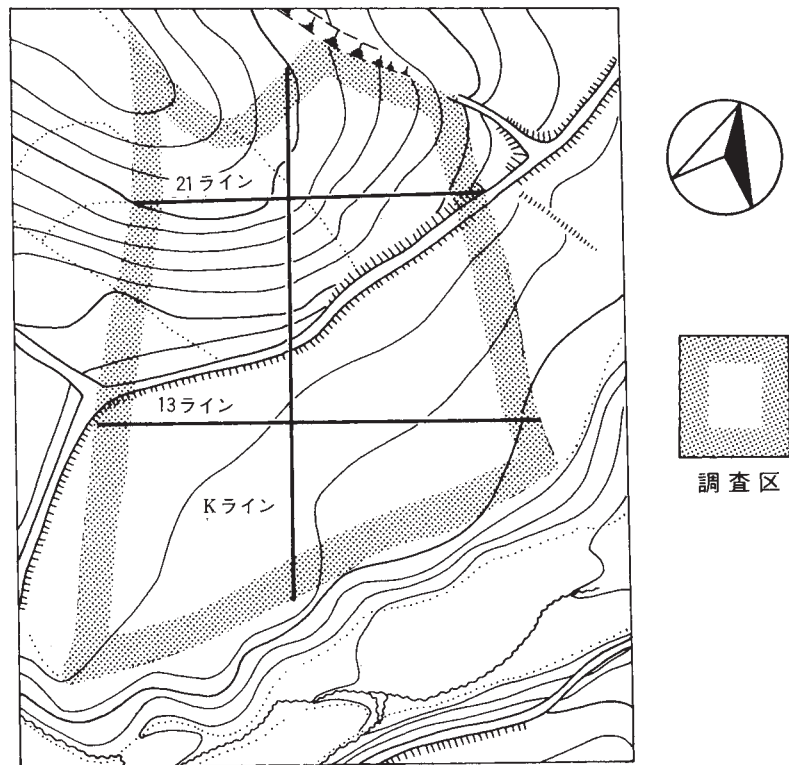
第 a 層 縄文時代後・晩期の遺物。

第 層 縄文時代後・晩期の遺物。

第 層 縄文時代早期の遺物。

第 層 縄文時代早期の遺物。

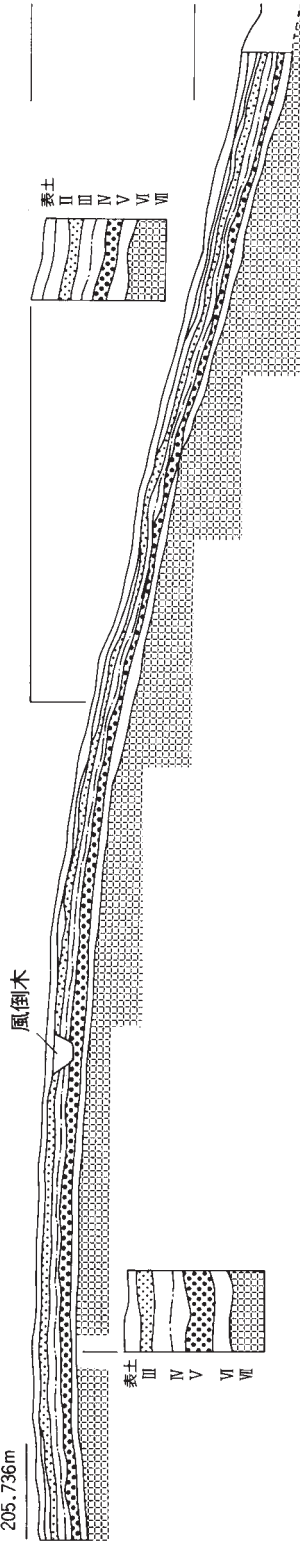
第 b 層（十和田 b 火山灰層）は、縄文時代晩期末葉以降の降下火山灰である。従って、後・晩期の遺物の本来の包含層は第 層である。 (工藤 大)



第5図 基本層位

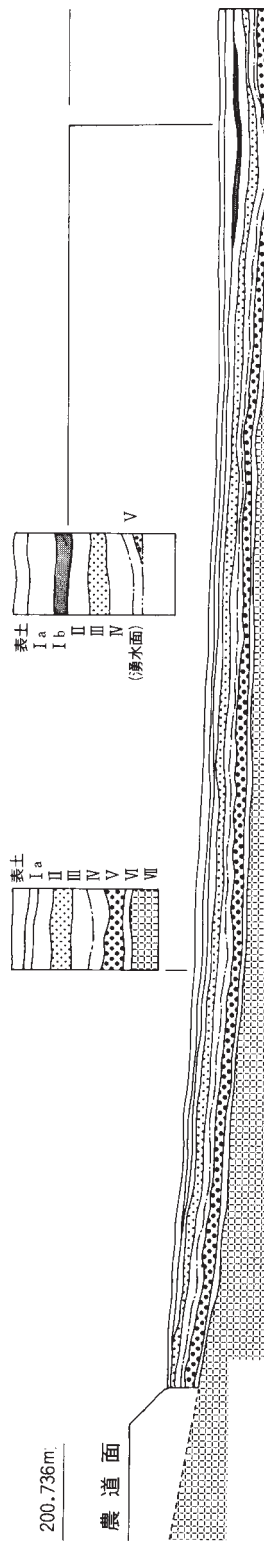
# Kライン

205.736m



200.736m

# 農道面

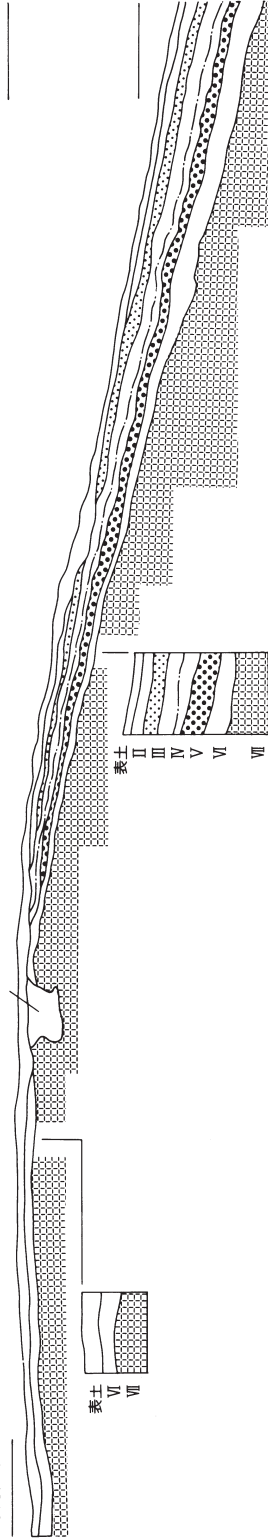


第6図 基本層位・Kライン

# 21ライン

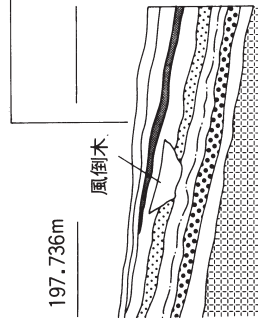
201.736m

第18号遺構



197.736m

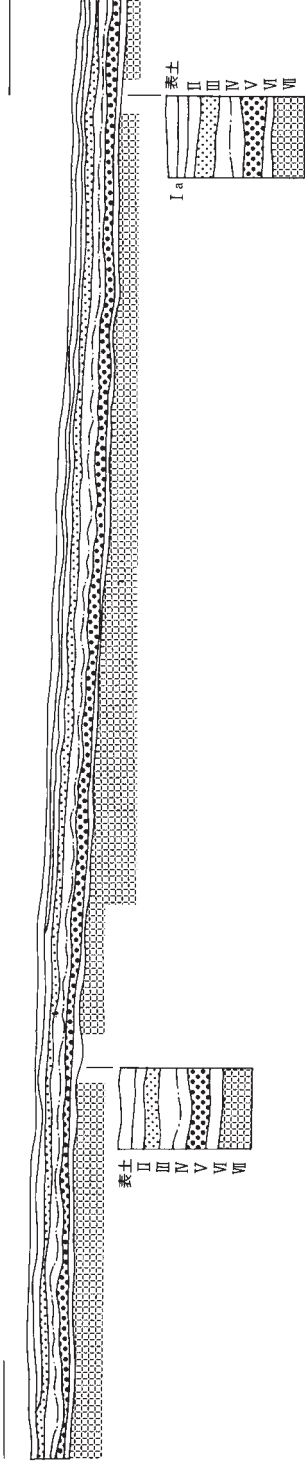
風御木



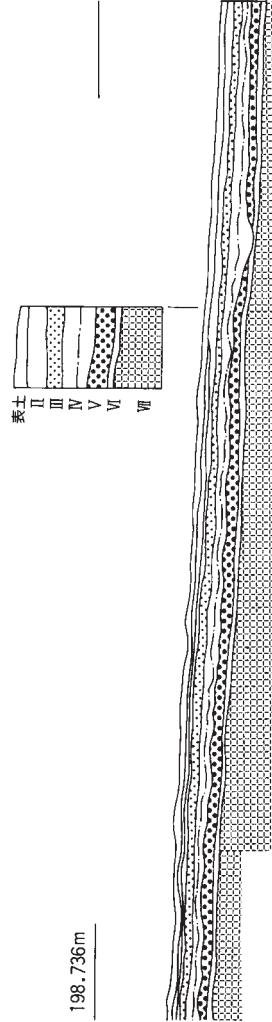
第7図 基本層位・21ライン

13ライン

198.736m



198.736m



第8図 基本層位・13ライン



### 3 第 、 層の調査

#### (1) 遺構、遺物の分布 (第9・10図)

第 層における遺構と遺物の分布は、第9・10図に示すように、大きく3群に分かれる。これをそれぞれA、B、C地区とする。A地区には、縄文時代後期の遺構と遺物、B地区には、後・晩期の遺物、C地区には、晩期以前とみられる遺構と後・晩期の遺物が分布する。

第9図における等高線は、第 層(中坵浮石層)上面での計測であるが、ほぼ縄文時代後・晩期の生活面に近いものとみなすことができる。これによると、調査区を設定した台地は、農道を境として、北西側の斜面と南東側の平坦面とに分かれる。A地区の遺構群は、南東側平坦面の南端に位置し、C地区の遺構群は、北西側斜面が、丁度緩斜面から急斜面に移行する部分に位置している。(工藤 大)

#### (2) 検出遺構

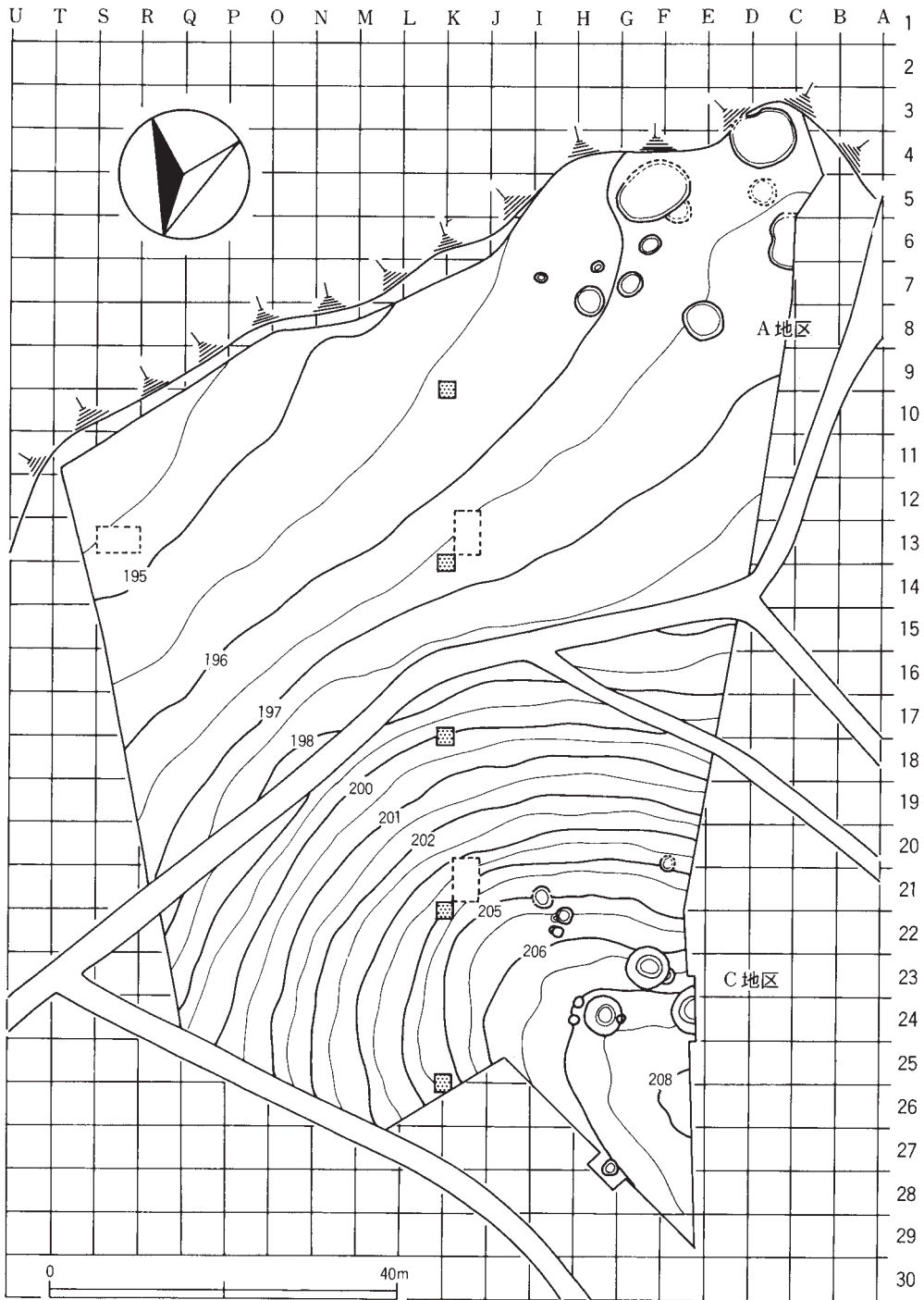
ここでは、第 層(中坵浮石層)上面で確認した遺構及び縄文時代後・晩期に属するとみられる遺構について記載する。ただし、後述するように、調査区の北側斜面で検出した遺構の時期に関しては、確定しえない部分がある。

検出した遺構は、24基である。平面形は、すべて円又は楕円を基本としているが、これを次のように分類する。

竪穴	{	竪穴住居	.....焼土(炉)を伴うもの	第3・7・10・13・15号遺構
		竪穴	.....焼土(炉)を伴わないもの	第1・2・12・14号遺構
		特殊竪穴	.....壁に段を有するもの	第20・21・22号遺構
土 壙	{	フラスコ状土壙	.....断面がフラスコ状のもの	第18・19・23・25・27・28号遺構
		土 壙	.....その他の土壙	第6・9・24・26a・26b・29号遺構

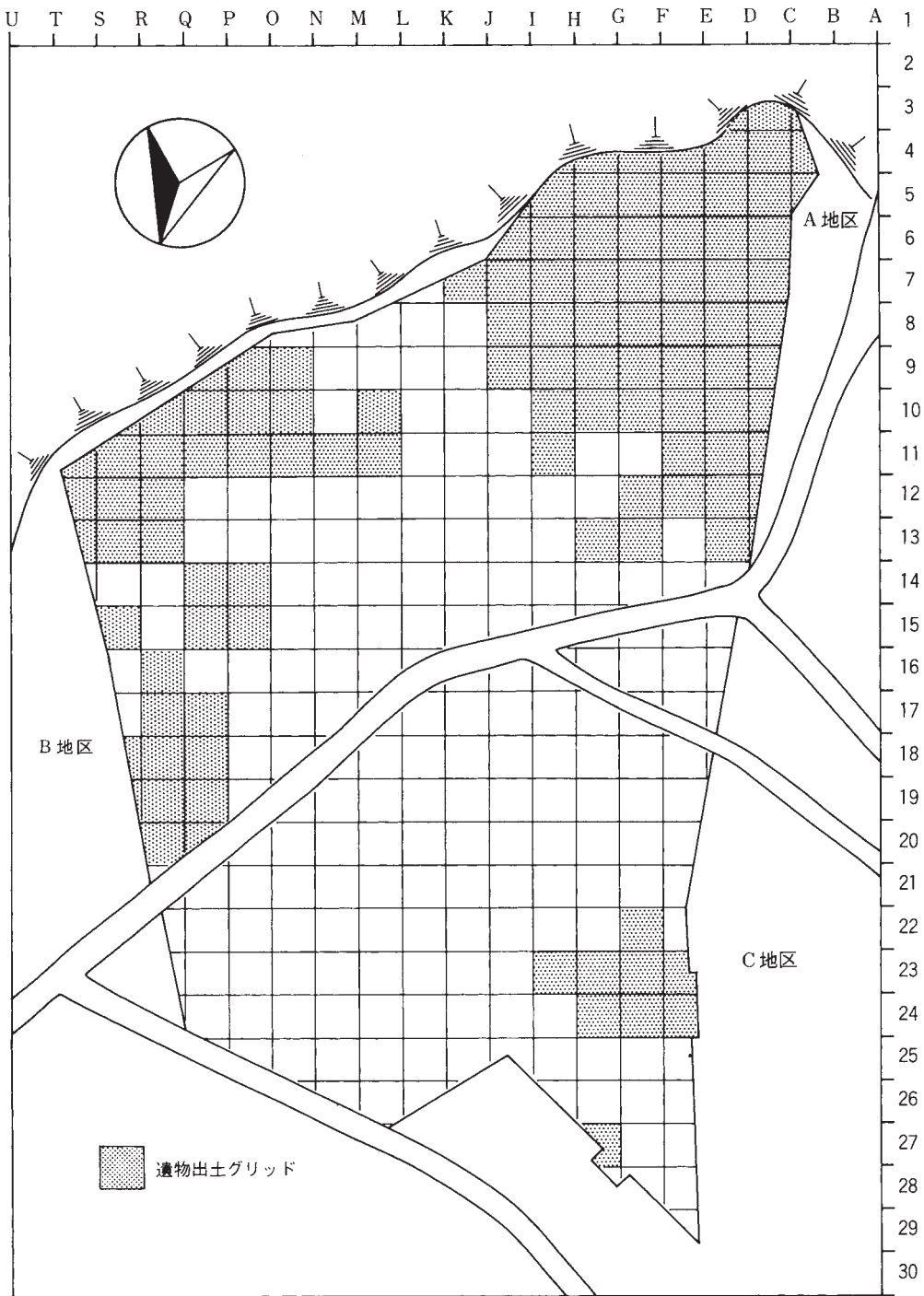
竪穴と土壙の区別は、遺構の規模(長径×短径)と深さの比率による。すなわち、深さに対して規模の大きなものを竪穴、規模の小さなものを土壙とした。いずれも確認面を基準とした計測で、便宜的な分類にすぎないが、一応、規模：深さ=1000：1を目安とした。竪穴については、柱穴の確認が不十分であるため、焼土(炉)の有無によって、竪穴住居と竪穴に分けた。特殊竪穴としたものは、壁の下半部に段を有するものであり、竪穴の中では、特に深く掘り込まれている。

#### ア A地区の遺構(第11図)



☐ テストビット

第9図 第I、II層遺構分布図



第10図 第I、II層遺物分布図

すべて第 層（中掘浮石層）上面で検出したものである。中掘浮石が希薄になっている部分があるため、平面形を明瞭に把握できなかった遺構がある。第 6・9・13号遺構を除いて、底面が第 層中に構築されているため、遺物の出土状態、炉のレベル等から底面を推定せざるをえない場合もあった。また、床面のレベルでは、柱穴を充分確認できなかったので、精査後、再精査の形で床面を削平したが、検出できたのは、第 3・13号遺構のみである。竪穴住居における炉は、すべて地床炉である。石組の痕跡は、確認されていない。また、出入口等の施設も把握できなかった。

### < 竪穴住居 >

#### 第 3 号遺構（第 12・13 図）

第 14 号遺構（竪穴）と重複している。平面プラン及びセクションからは、新旧関係を把握できなかったが、覆土の遺物の流れから、本遺構の方が新しいものとみられる。平面形の基本は楕円であるが、谷側南半部のプランは明確にすることができなかった。床面は第 層中に構築されており、北西に向ってやや傾斜しているが、ほぼ平坦である。床面を削平した結果、10 個のピットを検出したが、主柱穴は 4 個とみられる（Pit 1～4）。床面中央からやや南東寄りに位置する炉を中心として、台形に配置されている。炉は、床面が約 8 cm ほど掘り込まれ、掘り込み部分に焼土が堆積しているだけのものである。

床面からの出土遺物は、西半部に集中している。土器はすべて後期のものである。完形品として、無文の壺、磨消文様をもつ注口、羽状縄文の施文された小型の鉢があり、ほかに注口又は壺の口縁部、口縁部を欠いた注口、台付浅鉢の台の部分 2 点、磨消文様をもつ深鉢、無文の鉢及び縄文のみ施文された深鉢の破片が出土した。磨消文様をもつ深鉢の破片は、本遺構及び第 10 号遺構（竪穴住居）の覆土出土のものと接合し、ほぼ完形に近いものとして復原され、壺又は注口の口縁部、無文の鉢及び縄文の施文された深鉢の破片は、本遺構覆土出土のものと接合している。完形品は、床面北西部に分布し、接合資料は、床面南西部に分布するが、注口土器は、完形品、口縁部欠損品、いずれも壁際から出土した。石器は、床面中央から北西寄り、基部を欠損した磨製石斧が 1 点出土した。ほかには、焼けた凝灰岩のかなり大きな礫（7.6kg）が出土しただけ、炉の周囲からは、ほとんど遺物が出土していない。

住居廃絶後は、自然埋没したものとみられるが、覆土からの出土遺物は、北西側に多く、南東側に向かって希薄である。したがって、地形的にやや高い北西側から、主に廃棄あるいは流入したものとみられる。後期の土器が多量に出土しており、ほかに、早期の土器が少量混入している。完形品として、無文の注口、縄文の施文された浅鉢、手づくねの浅鉢、原形を復原できるものとして、台付浅鉢、手づくねの注口等が出土した。また、本遺構内覆土中の接合資料

として、壺又は注口、磨消文様をもつ鉢又は深鉢、無文の鉢、縄文のみ施文された深鉢、手づくねの浅鉢、第7号遺構（竪穴住居）覆土及び遺構外出土のものと接合する資料として、磨消文様のある深鉢、第13号遺構（竪穴住居）覆土及び遺構外出土のものと接合する資料として、縄文のみ施文された深鉢、第15号遺構（竪穴住居）床面出土のものと接合する資料として、台付浅鉢、遺構外出土のものと接合する資料として、磨消文様のある鉢又は深鉢、縄文のみ施文された深鉢、手づくねの浅鉢等がある。完形品及び復原資料は、北壁寄りに多く、接合資料は西壁寄りに多く分布している。石器は、刃部を折損した磨製石斧1点、R - フレイク3点、剥片石器の欠損品1点、石核1点、剥片16点、原材1点、打製石斧1点、破損した石皿1点が出土したが、北西壁及び南東壁寄りに多く分布している。礫は、壁寄りに散在する形で、32点出土した。

#### 第7号遺構（第14・15図）

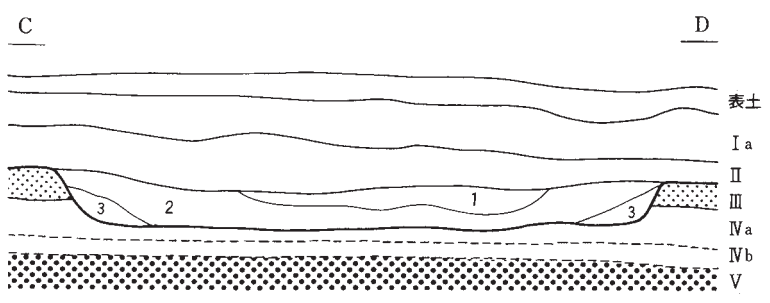
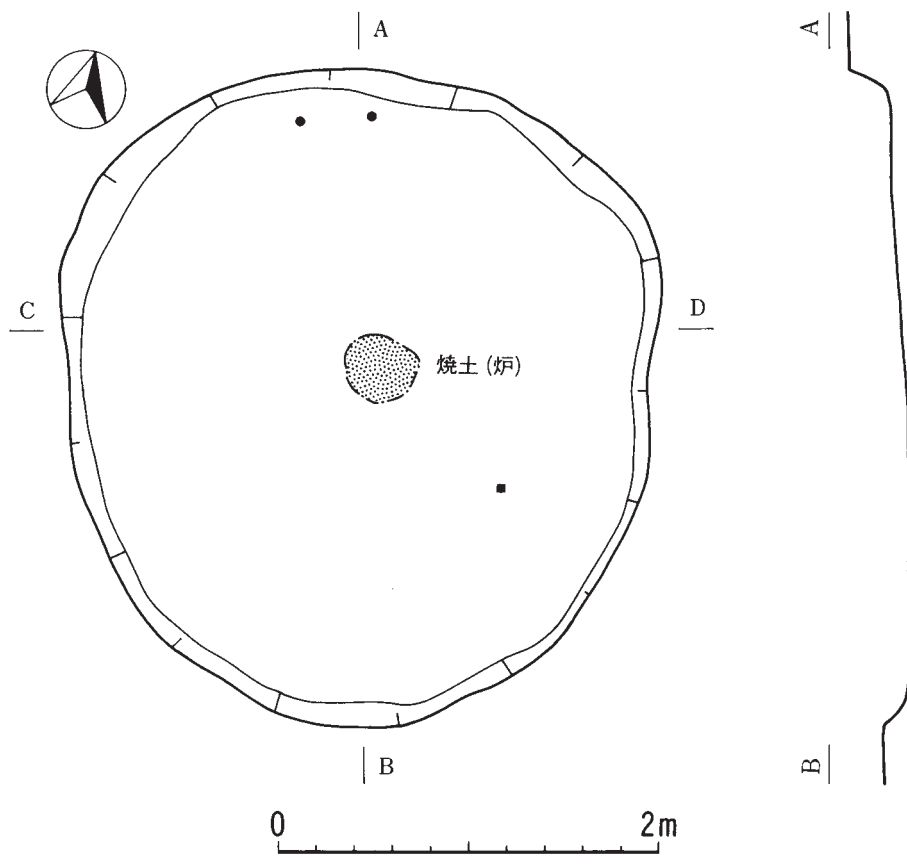
A地区で検出した竪穴住居の中では北東端に位置する。平面プランは不整な円形を呈している。床面は第 層中に構築されており、ほぼ平坦である。柱穴は確認できなかった。床面中央からやや北寄りに焼土が薄く堆積しており、地床炉とみられる。掘り込みはされていない。

床面からの出土遺物は、北西壁際で、後期に属する完形の無文の壺及び注口部を欠いた手づくねの注口、東壁寄りで石核が1点出土しただけである。

住居廃絶後は、壁際から自然埋没したものとみられる。覆土からの出土遺物は、この埋没過程で、堆積土に廃棄あるいは流入したものである。土器は、すべて後期のものであるが完形品として、南壁寄りから手づくねの注口が出土した。また、本遺構内覆土中の接合資料として、磨消文様のある鉢又は深鉢、無文の深鉢、手づくねの浅鉢、第3号遺構（竪穴住居）覆土及び遺構外出土のものと接合する資料として、磨消文様のある深鉢（前出）第10号遺構（竪穴住居）覆土出土のものと接合する資料として、縄文のみ施文された浅鉢、遺構外出土のものと接合する資料として、磨消文様のある壺、台付浅鉢、縄文のみ施文された浅鉢及び鉢等がある。石器は完形の尖頭器1点、完形の石錐1点、石核3点、剥片12点、礫は3点出土した。土器・石器、いずれも壁際ないし壁寄りに分布しているが、東側に空白がみられる。

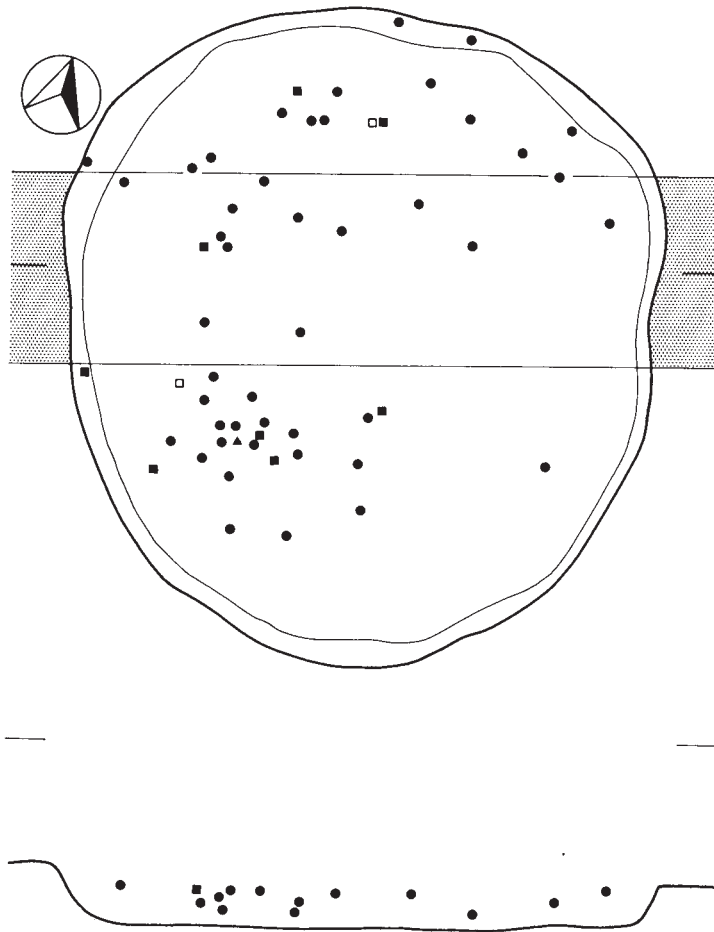
#### 第10号遺構（第16 - 17図）

西半部が調査区外にあるため、全体形は不明であるが、東壁の一部が竪穴内に張り出す変則的な楕円形のプランになるものとみられる。床面は第 層中に構築され、ほぼ平坦である。床面中央付近に掘り込みのある地床炉が設けられ、これを挟んで、柱穴が2個確認された。また、炉の周辺には、崩れ落ちたような状態で、炭化材・炭化物が堆積土に多く混っている。



- 第1層 暗褐色土 微砂、中礫浮石、南部浮石を少量含む。炭化物を含む。
- 第2層 暗褐色土 微砂、中礫浮石、南部浮石を含む。炭化物を含む。
- 第3層 暗褐色土 微砂、中礫浮石、南部浮石を多量に含む。炭化物を含む。

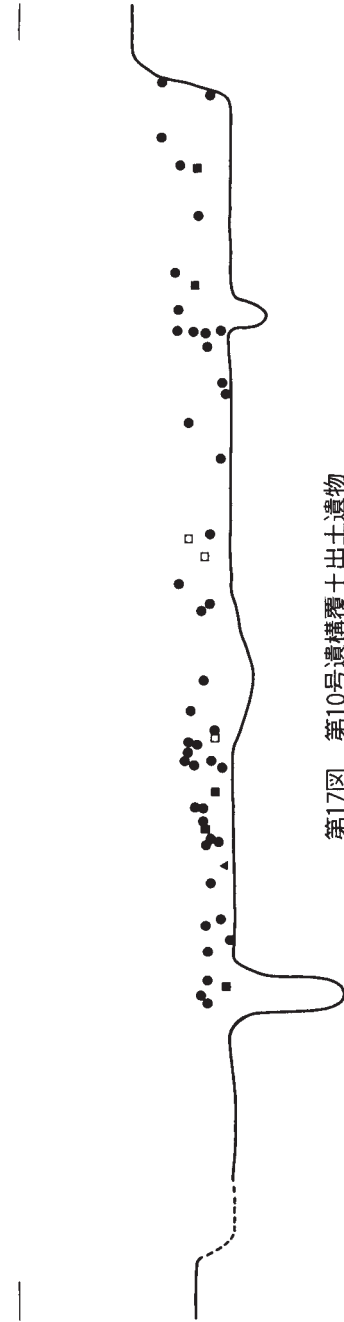
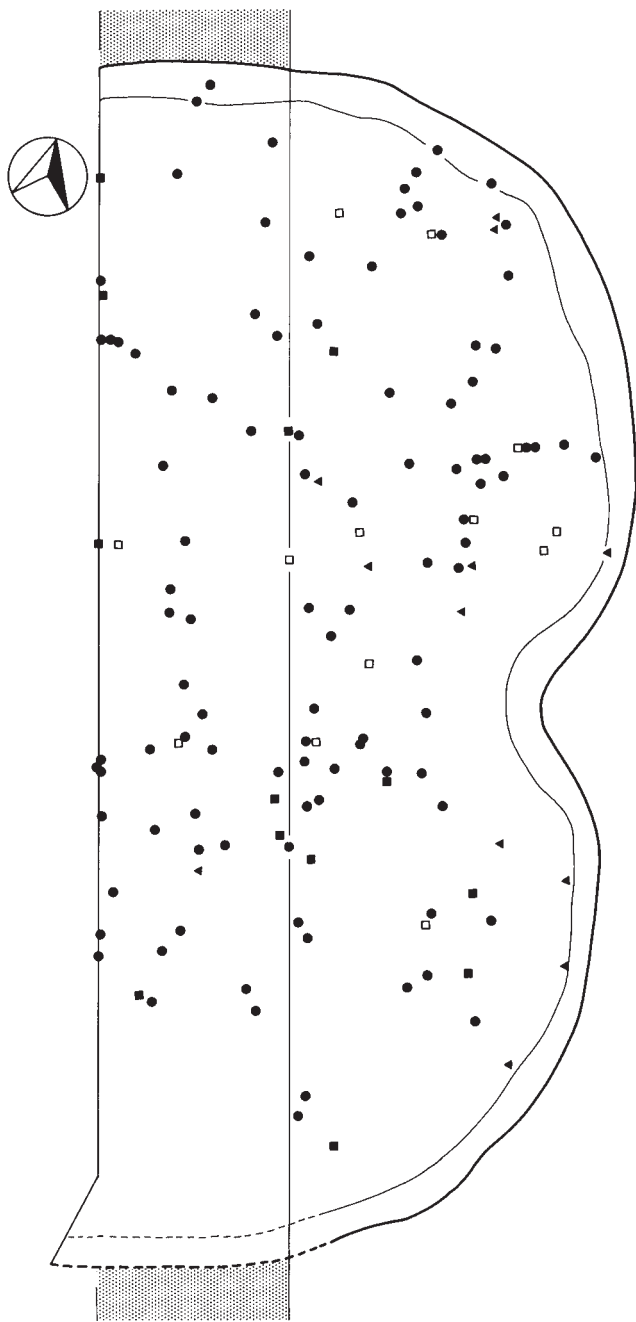
第14図 第7号遺構床面出土遺物



第15図 第7号遺構覆土出土遺物

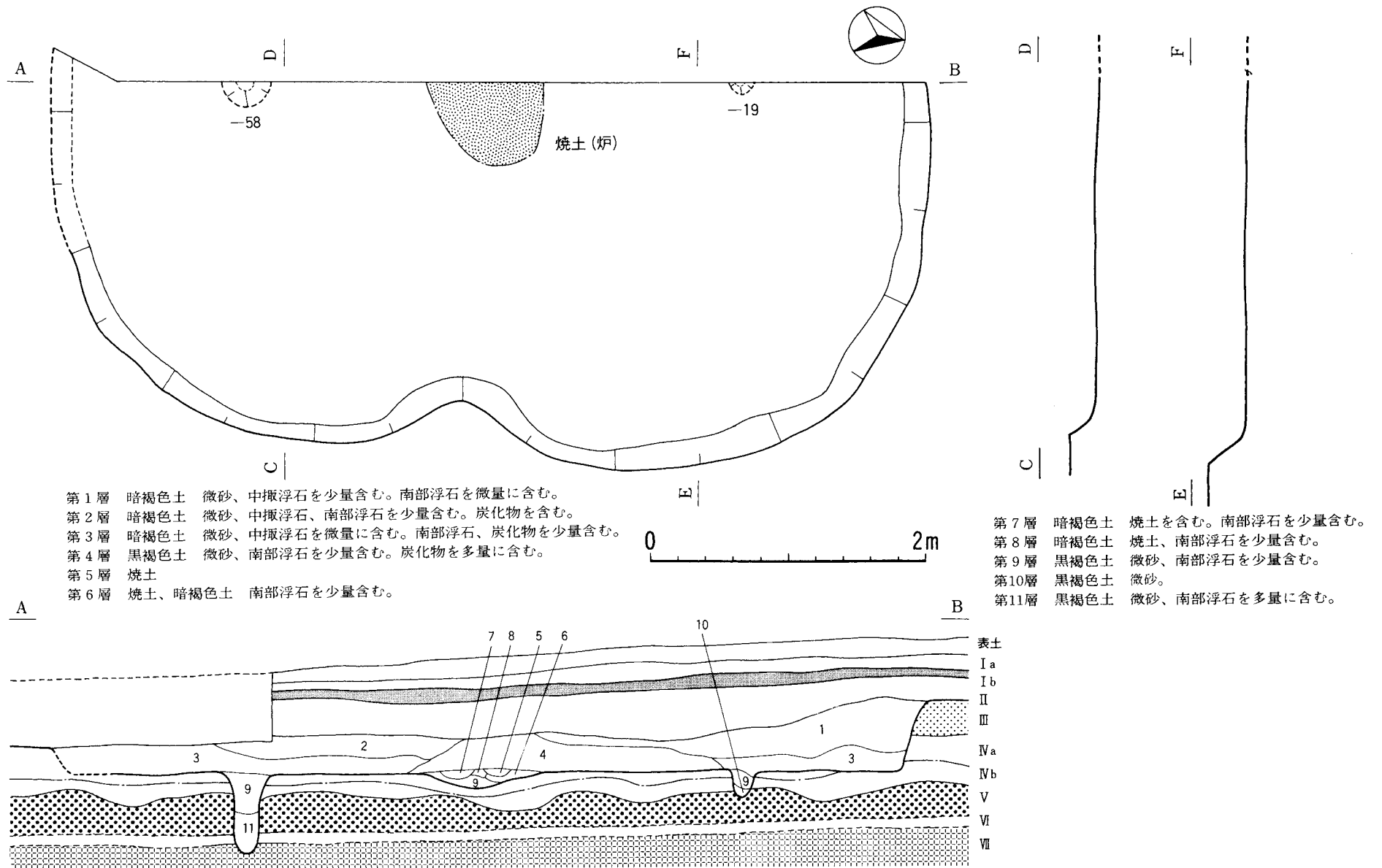
床面から遺物は出土していない。

住居廃絶後は、自然埋没したものとみられるが、覆土出土の遺物は、壁際から廃棄あるいは流入した状態を呈している。ただし、廃絶時の事情を示すものとみられる炉周辺の炭化物を多く含む堆積層において、遺物は、まばらになり、乱れている。覆土出土の遺物は、遺構全面に散在している。出土土器の多くは後期のものであり、接合資料として、縄文のみ施文された深鉢及び小型の鉢がある。また、第3号遺構（竪穴住居）及び遺構外出土のものと同接合した資料として、磨消文様をもつ深鉢（前出）、第7号遺構（竪穴住居）覆土出土のものと同接合した資料として、縄文の施文された浅鉢（前出）、遺構外出土のものと同接合した資料として、磨消文様をもつ深鉢又は鉢、無文の深鉢、手づくねの浅鉢等がある。石器は、欠損した磨製石斧5点、先



第17図 第10号遺構覆土出土遺物





第16図 第10号遺構

端部を欠いた尖頭器 1 点、完形の石匙 1 点、R - フレイク 1 点、石核 1 点、剥片 15 点、原材 2 点、完形のすり石 2 点、完形の円盤状石器 1 点、破損した石皿の破片 1 点が出土し、ほかに礫が 13 点出土した。

### 第13号遺構（第18・19図）

台地末端部に位置し、一部傾斜面にかかっている。平面形は基本的に楕円であるが、谷側 - 南東壁の一部が竪穴内に張り出している。壁は垂直に近く、八戸火山灰層上部まで掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。覆土に炭化物の細粒を多く含んでいるが、床面上に有機物の置かれた痕跡はない。床面レベルで13個のピットが検出された。かなり深く掘り込まれたものが多く、支柱穴を判断できない。炉は、床面中央からやや南東寄りに位直している。浅く掘り込まれた面に薄く焼土が堆積している。

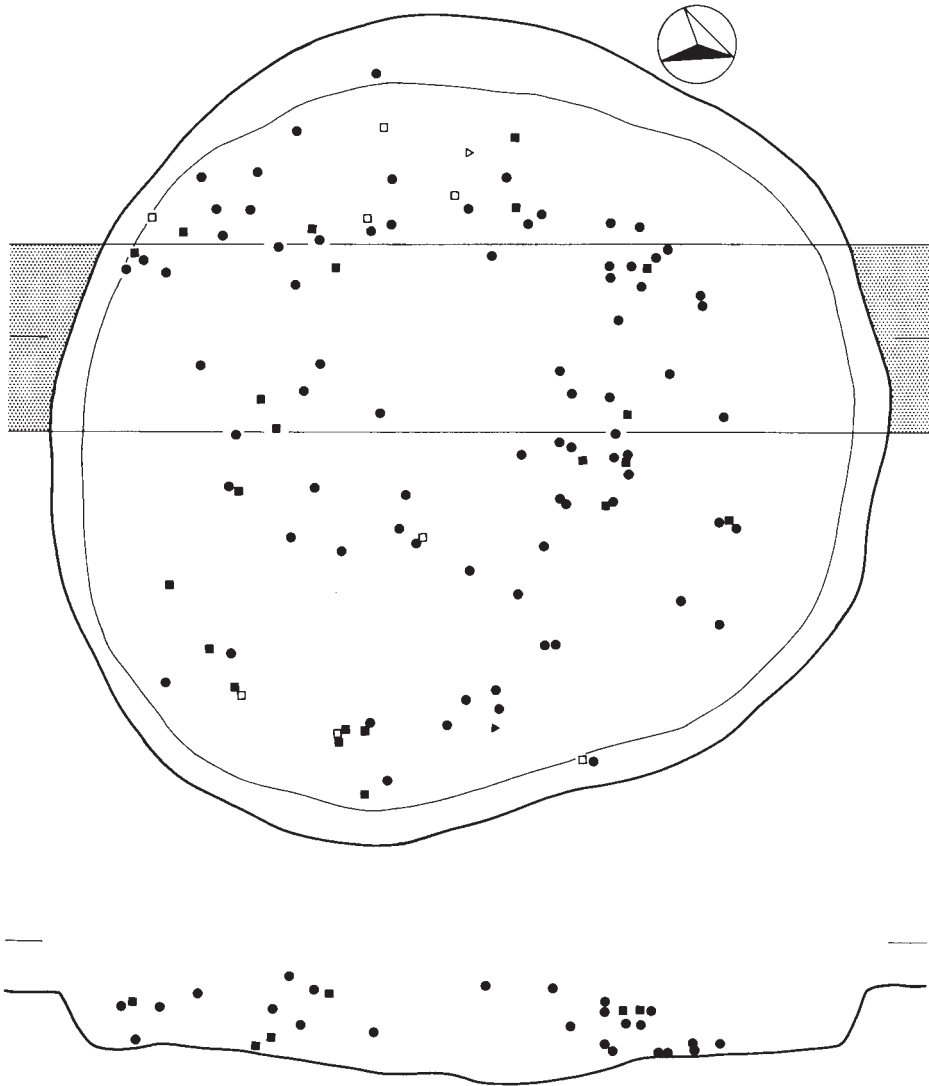
床面から遺物は出土していない。

覆土の堆積状態から、住居廃絶後、壁際より自然埋没したものとみられる。覆土からは、多量の遺物が出土したが、その垂直分布は堆積土の流れに一致している。遺構埋没の過程において、廃棄あるいは流入したものとみられる。土器の多くは後期のものであるが、早期及び晩期のものが少量混入している。完形品及び原形を復原できるものとして、無文の注口、縄文の施文された浅鉢、手づくねの壺、浅鉢があり、接合資料として、磨消文様のある壺又は注口、鉢又は深鉢、無文の浅鉢、縄文のみ施文された深鉢、手づくねの浅鉢等がある。また、第3号遺構（竪穴住居）覆土及び遺構外出土のものと接合する資料として、縄文のみ施文された深鉢（前出）遺構外出土のものと接合する資料として、磨消文様のある鉢又は深鉢及び縄文の施文された深鉢等がある。完形品及び原形を復原できる資料は壁際に限られ、接合資料は、南北の壁寄りに多い。石器は、先端部を欠いた尖頭器 3 点、完形の石匙 1 点、R - フレイク 2 点、剥片 4 点、石皿の破片 1 点が出土しており南側を除く壁際に分布する。礫は、25点出土したが、南側を除いて散在する。

### 第15号遺構（第20・21図）

不整な円形のプランを呈している。床面は、第 1 層中に構築されているが、中央部がくぼみその部分に、炭化物を多く含む層が堆積している。柱穴は確認できなかった。炉は、床面のほぼ中央に位置し、掘り込み部分に焼土が堆積している。床面上で、浅い土壌を検出したが、本遺構に伴うものとみられる。土壌内から遺物は出土していない。

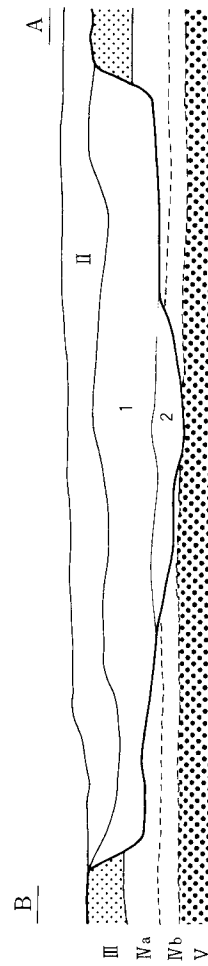
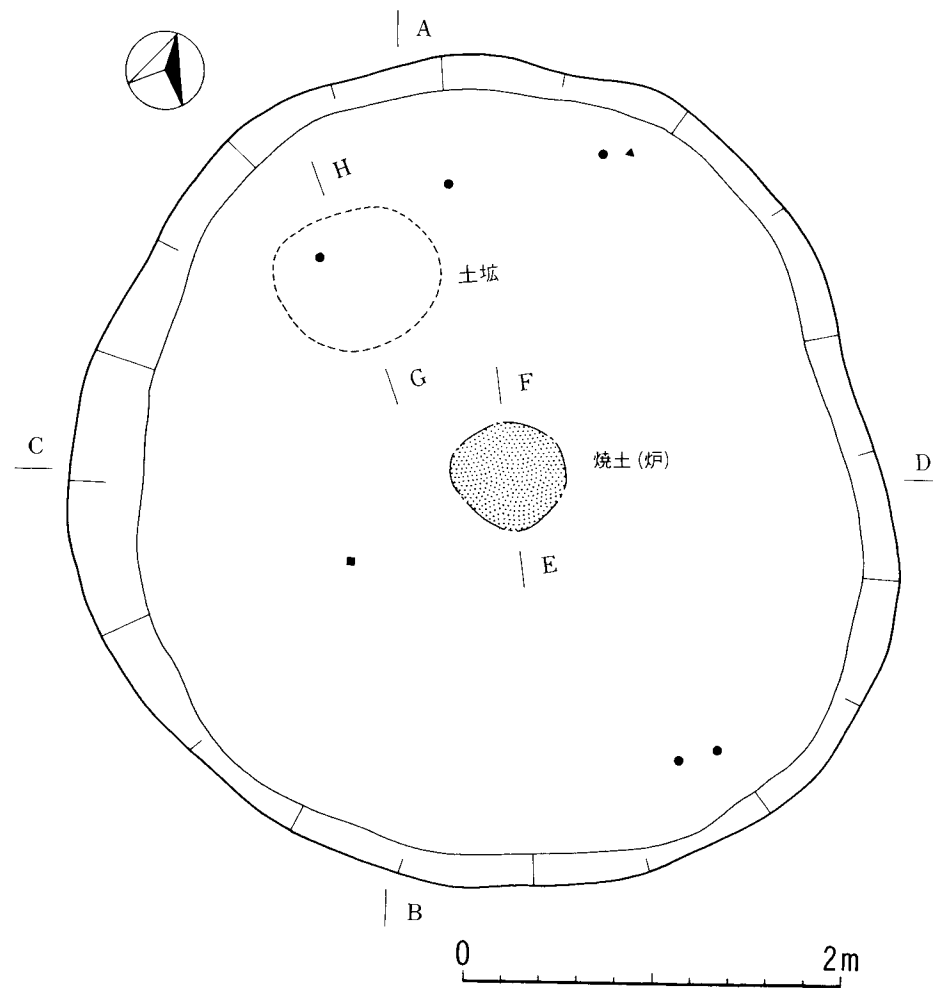
床面出土遺物は、後期のものである。完形土器として、縄文の施文された小型の鉢、手づくねの壺があり、原形を復原できるものとして、無文の壺、縄文の施文された深鉢及び第3号遺



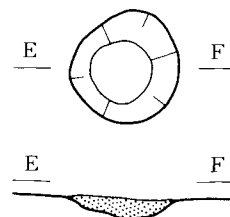
第21図 第15号遺構覆土出土遺物

(竪穴住居) 覆土出土のものと接合し復原された台付浅鉢の台の部分がある。いずれも壁際ないし壁寄り出土したが、縄文の施文された深鉢は、土壌上面に倒立した状態で出土したものである。石器は、北壁際で刃部のつぶれた磨製石斧が1点、床面中央から南西寄りで、剥片が1点出土した。

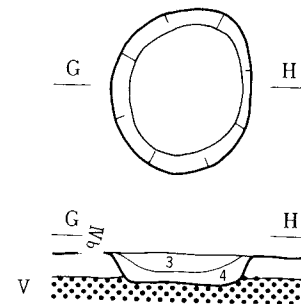
住居廃絶後は自然埋没したものとみられる。覆土出土遺物の多くは、後期のものである。遺構全体に散在しており、垂直分布は、かなり不規則な状態を呈している。中央のくぼんだ部分



炉セクション



土塚セクション



- |     |      |                         |
|-----|------|-------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 微砂、中振浮石、南部浮石、炭化物を少量含む。  |
| 第2層 | 暗褐色土 | 微砂、南部浮石を少量含む。炭化物を多量に含む。 |
| 第3層 | 黒褐色土 | 微砂、南部浮石を少量含む。炭化物を微量含む。  |
| 第4層 | 黒褐色土 | 微砂、南部浮石を多量に含む。          |



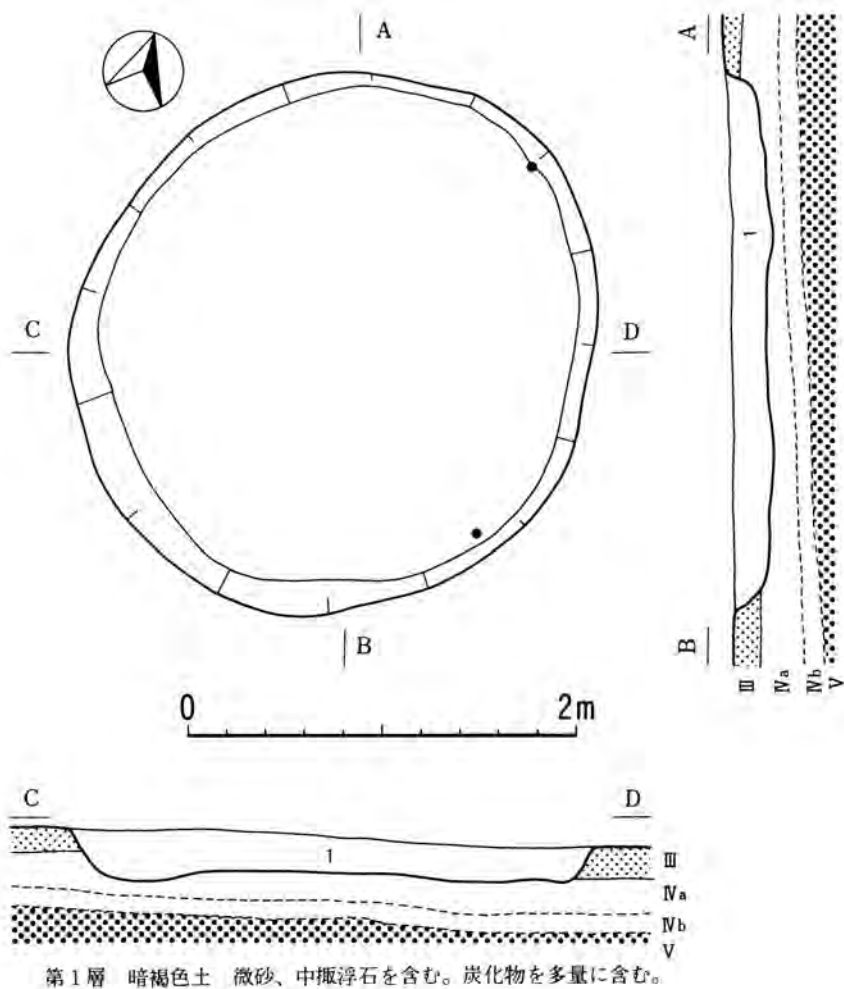
第20図 第15号遺構床面出土遺物

からは全く遺物が出土していない。覆土出土の接合資料は少ない。磨消文様のある鉢又は深鉢、縄文のみ施文された小型の鉢等があるだけである。他の遺構及び遺構外出土のものと接合する資料はない。石器は、完形の尖頭器1点、石核5点、剥片37点、原材1点、円盤状石器の破片1点、石製品として、石剣又は石刀状の破片1点が出土した。礫は、9点のみである。

## 竪 穴

### 第1号遺構 (第22・23図)

ほぼ円形のプランを呈している。第1層まで掘り込まれており、かなり凹凸のある床面は、

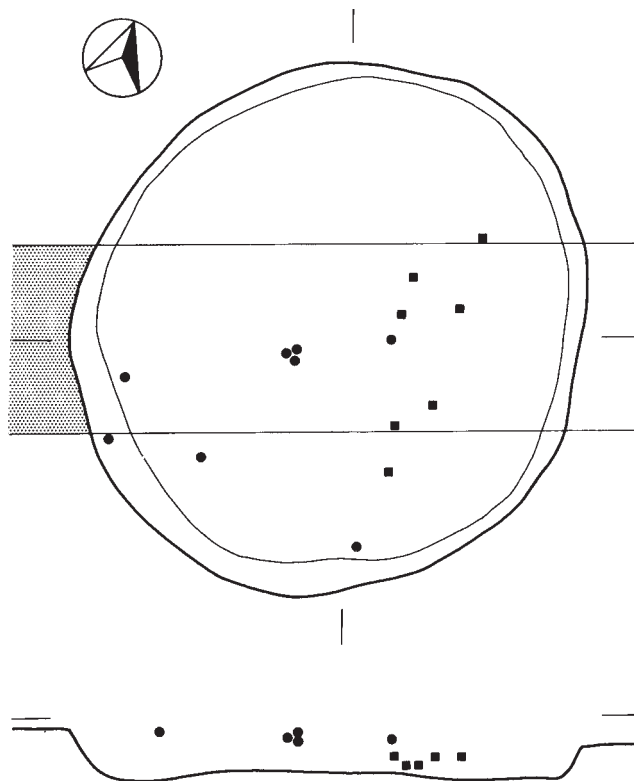


第22図 第1号遺構床面出土遺物

全体に北東に向かって傾斜している。柱穴は確認できなかった。

床面壁際から、完形の壺及び小型の鉢が出土している。いずれも磨消文様が施文されており、後期のものである。

竪穴廃絶後は自然埋没したものとみられる。覆土出土の遺物には、土器と石器においてレベル差がみられる。土器は、後期のものである。接合資料は、遺構外出土のものと接合した縄文の施文された深鉢が壁際で出土しただけである。石器は、剥片が7点出土した。



第23図 第1号遺構覆土出土遺物

#### 第2号遺構（第24・25図）

平面プランは、楕円形を呈している。床面は第層中に構築され、北東に向かってやや傾斜しているが、ほぼ平坦である。柱穴は確認できなかった。

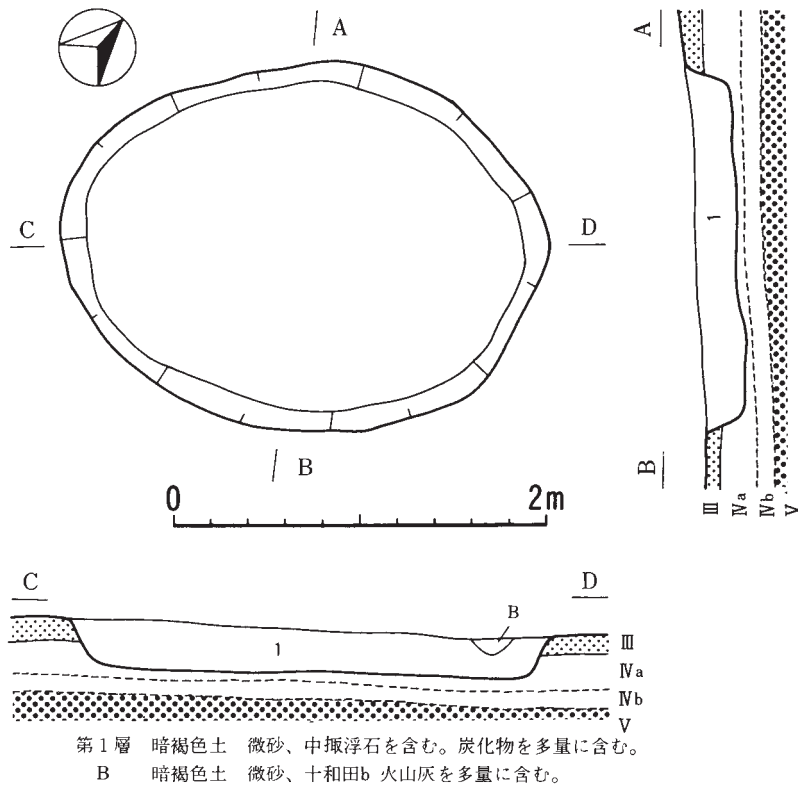
床面から遺物は出土していない。

竪穴廃絶後は、自然埋没したものとみられる。覆土出土の遺物は少なく、接合資料はない。後期の土器片が遺構中央部から出土しただけで、石器は出土していない。

#### 第12号遺構（第26・27図）

ほぼ円形のプランを呈するとみられるが、本遺構周辺では、中撒浮石が希薄であり、平面形及び床面を明瞭に把握できなかった。

覆土出土の遺物は少量であるが、西壁際及び南壁寄りに多く、相互にレベル差をもっている。接合資料は、磨消文様のある壺、無文の鉢があり、ほかに、遺構外出土のものと接合する資料として、磨消文様のある鉢又は深鉢がある。いずれも後期のものである。石器は、西壁際から完形のすり石が1点、剥片が4点、礫は、2点出土した。



第24図 第2号遺構

**第14号遺構 (第28図)**

第3号遺構(竪穴住居)によって、南東部を切られている。平面形は、ほぼ楕円形のプランを呈するとみられるが、明瞭には把握できなかった。柱穴も確認できなかった。

床面西壁際から、横転しつぶれた状態で完形の深鉢が出土している。磨消文様をもつ後期の土器である。

覆土出土の遺物は、西壁寄りに多く、垂直分布と対比しても、遺構西側から、埋没過程において廃棄あるいは流入したものとみられる。早期と後期の土器片が少量、剥片1点、礫1点出土したが接合資料はない。

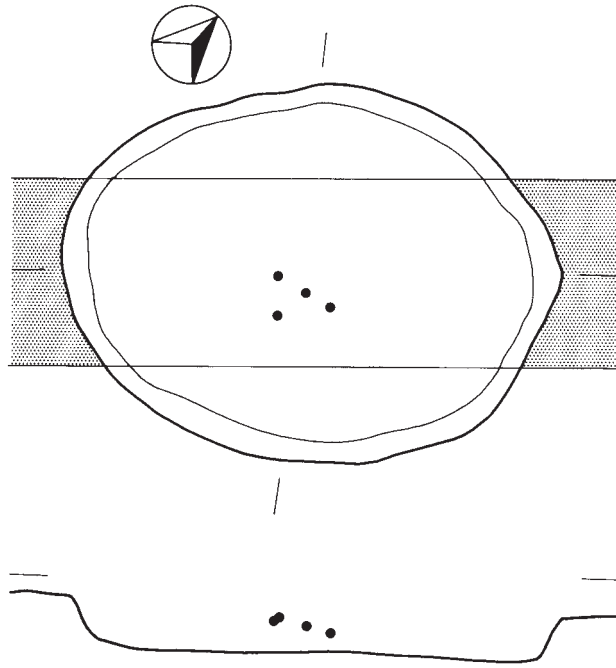
## 土 壌

### 第 6 号遺構 (第29図)

平面形は不整な円形プランを呈し、第 層(南部浮石層)上面まで掘り込まれており、底面には細かい凹凸がある。

底面中央からやや西寄り、縄文のみ施文された深鉢の破片が出土したが、後期のものである。

土壌廃絶後は自然埋没したものとみられるが、遺構中央部に、浮き上がったような南部浮石を含む層が堆積している。覆土から早期及び後期の土器片が少量出土しており、接合資料として、磨消文様のある鉢又は深鉢がある。



第25図 第 2 号遺構覆土出土遺物

### 第 9 号遺構 (第30図)

平面形はやや楕円状を呈し、第 層上面まで掘り込まれている。底面は、中央がやや低くなっている。

土壌廃絶後は自然埋没したものとみられるが、第 6 号遺構(土壌)と同様、中央部に浮き上がったような南部浮石を含む層が堆積している。

遺物は出土していない。

### イ C地区の遺構(第31図)

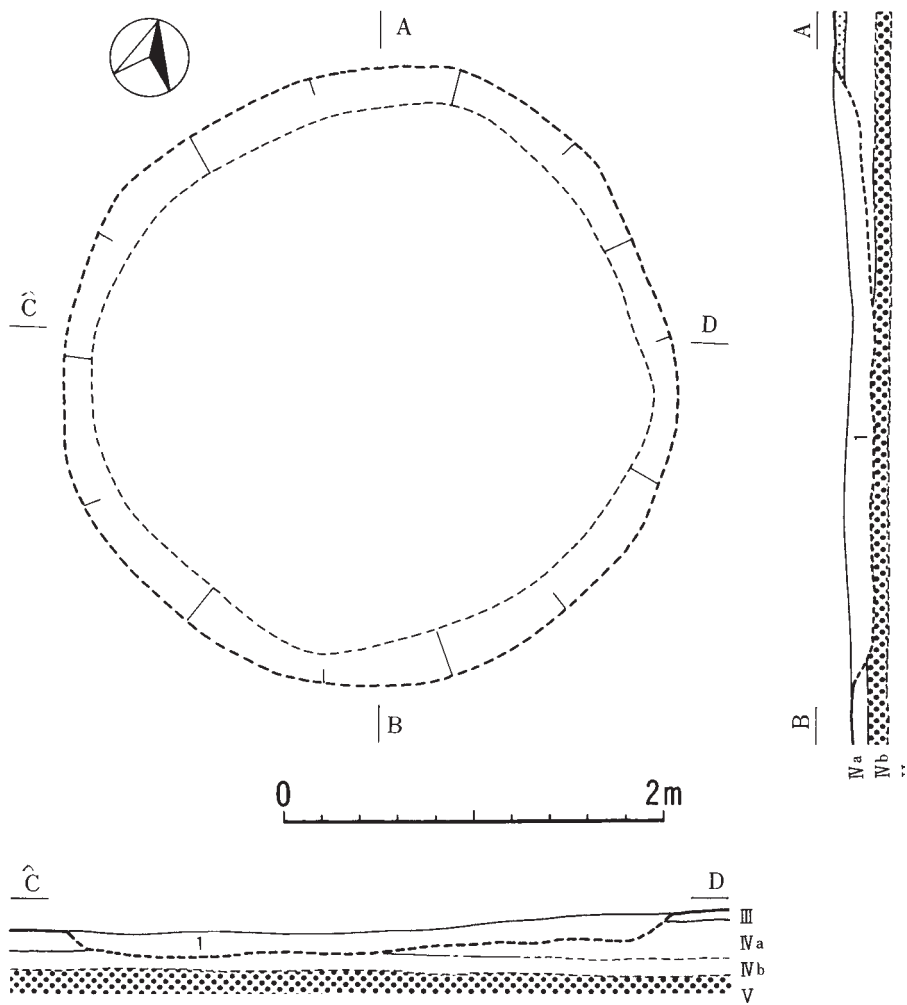
前述したように、C地区遺構群の分布する斜面上部では、第 層(中坵浮石層)及び第 層(南部浮石層)を欠いており、表土下に薄い漸移層を隔ててすぐ第 層(八戸火山灰層)があらわれる。従って、C地区遺構群の多くは、八戸火山灰層上面で確認したものである。

## 特殊竪穴

### 第20号遺構(第32・33図)

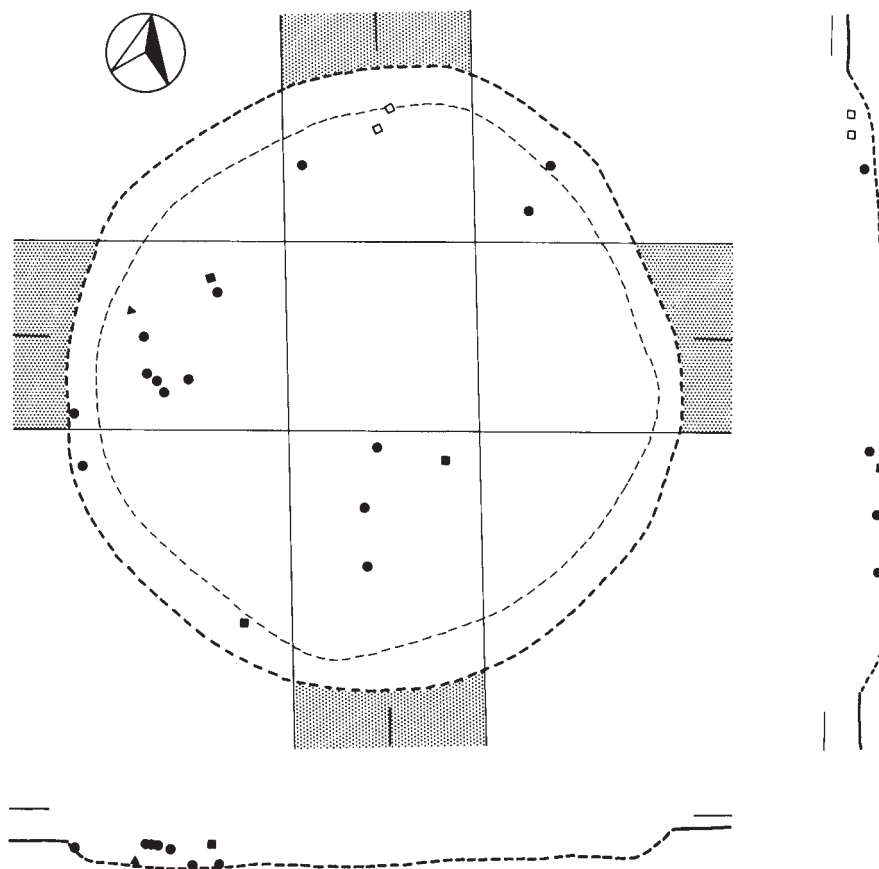
第23号遺構(フラスコ状土壌)と重複関係にある。本遺構精査中に第23号遺構を検出したた





第1層 暗褐色土 微砂、中振浮石、南部浮石、炭化物を少量含む。

め、新旧関係を示す土層断面図を作成できなかったが、第23号遺構内の堆積土を切って本遺構が構築されているので、本遺構の方が新しい。斜面につくられているためやや歪んでいるが、平面プランは基本的に円形である。八戸火山灰層を掘り込み、床面は一部高館火山灰層に達している。壁の下半部に段を有し、段の上下で掘り込みの角度を変えているが、斜面下方の壁では、段がやや不明瞭になっている。全体に壁の傾斜が緩いので、竪穴の規模に比べて、床面積が小さくなっている。壁が粗く掘り込まれているのに対して、床面は平坦でしっかりしている。柱穴、付属施設等は確認できなかった。



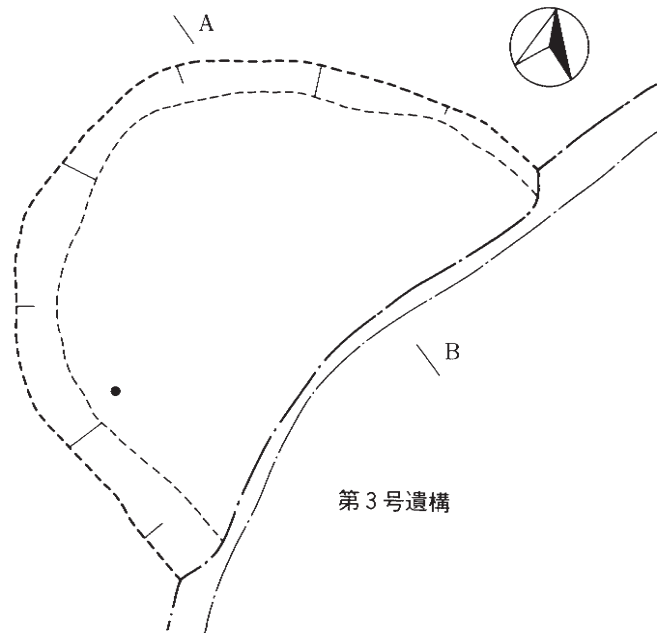
第27図 第12号遺構覆土出土遺物

床面から遺物は出土していない。

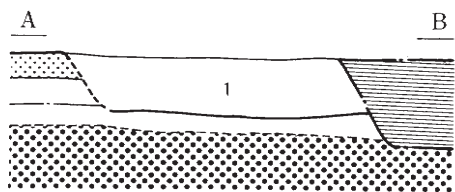
覆土の堆積状態は、竪穴廃絶後、自然埋没した様相を示しているが、覆土出土遺物の垂直分布は堆積土の流れに一致し、遺構中央部では、かなり床面近くまで達している。遺構北西側及び西側から、廃棄あるいは流入したものとみられる。後期又は晩期の土器が出土しているが、接合資料としては、縄文の施文された深鉢がある。いずれも近距離で接合したものである。石器は剥片が2点、礫は凝灰岩が6点出土し、焼けたものが多い。

#### 第21号遺構（第34・35図）

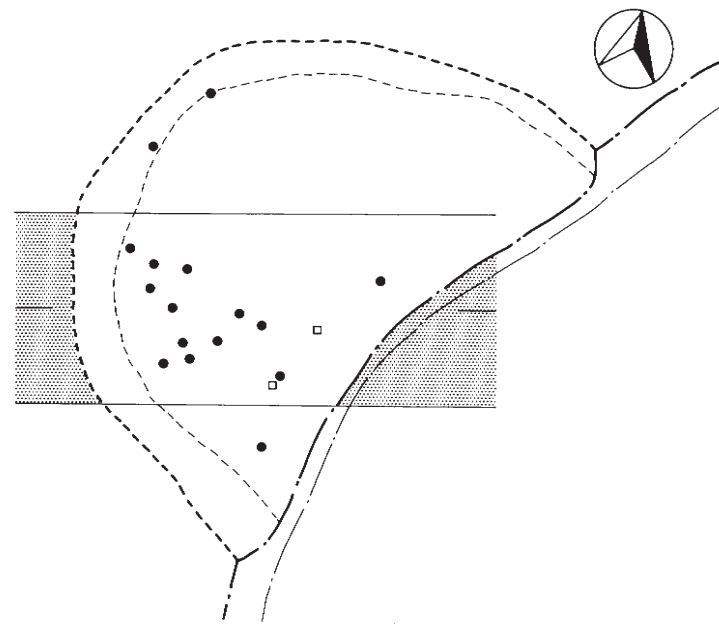
西半部が調査区外に位置するため、東半部のみでの精査であるが、第20号遺構（特殊竪穴）と同様、基本的に円形プランを呈するものとみられる。構造的にも第20号遺構とほぼ同様である



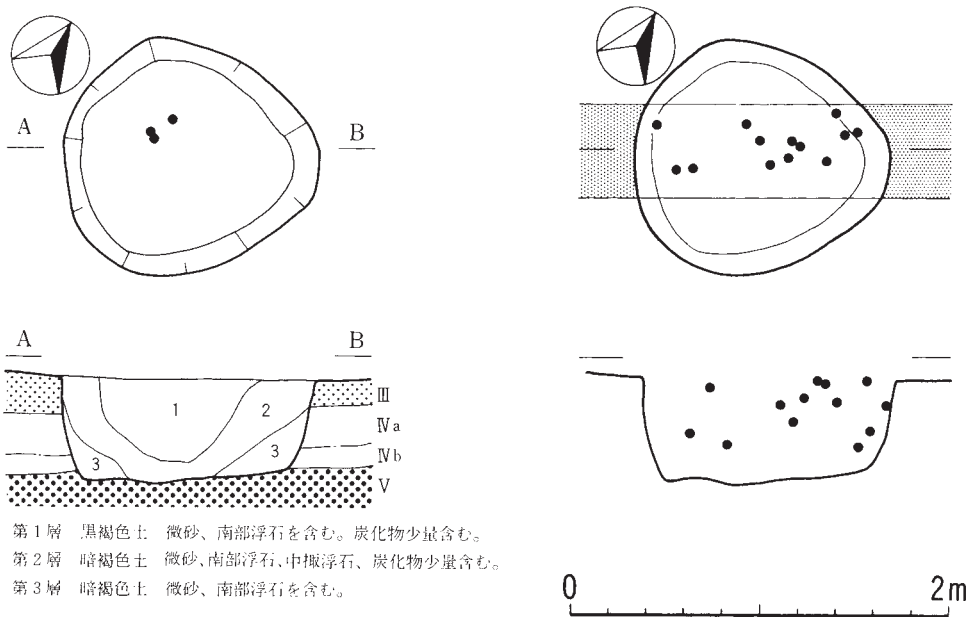
第3号遺構



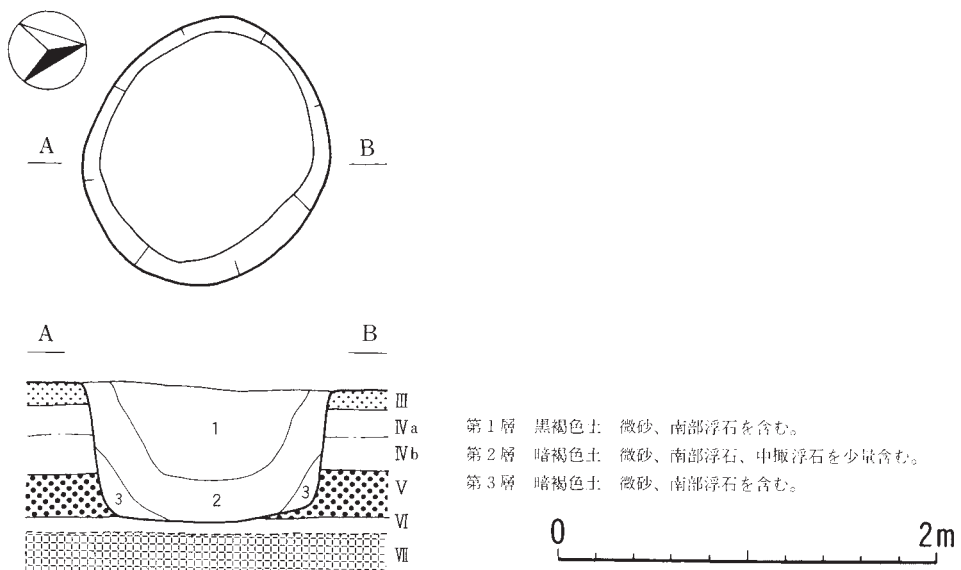
第1層 褐色土 微砂、中振浮石、炭化物を少量含む。



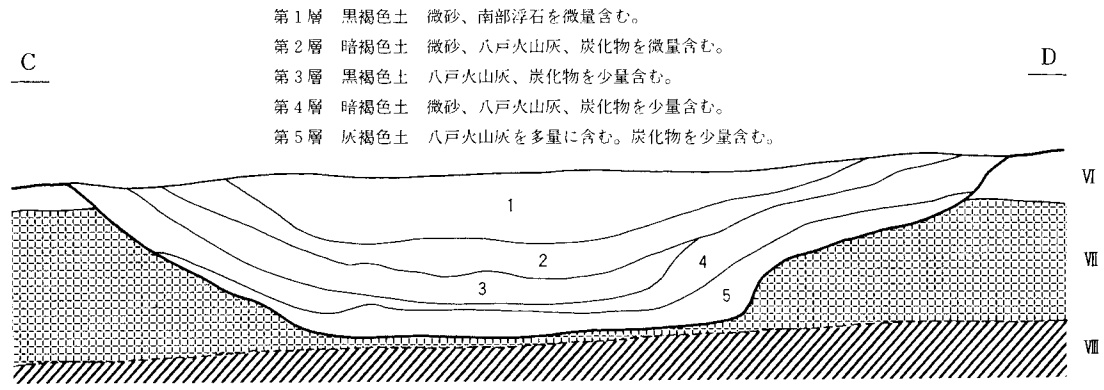
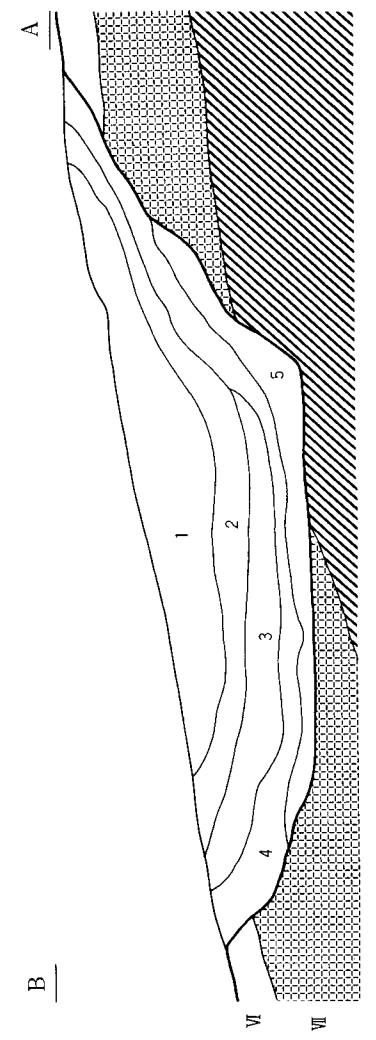
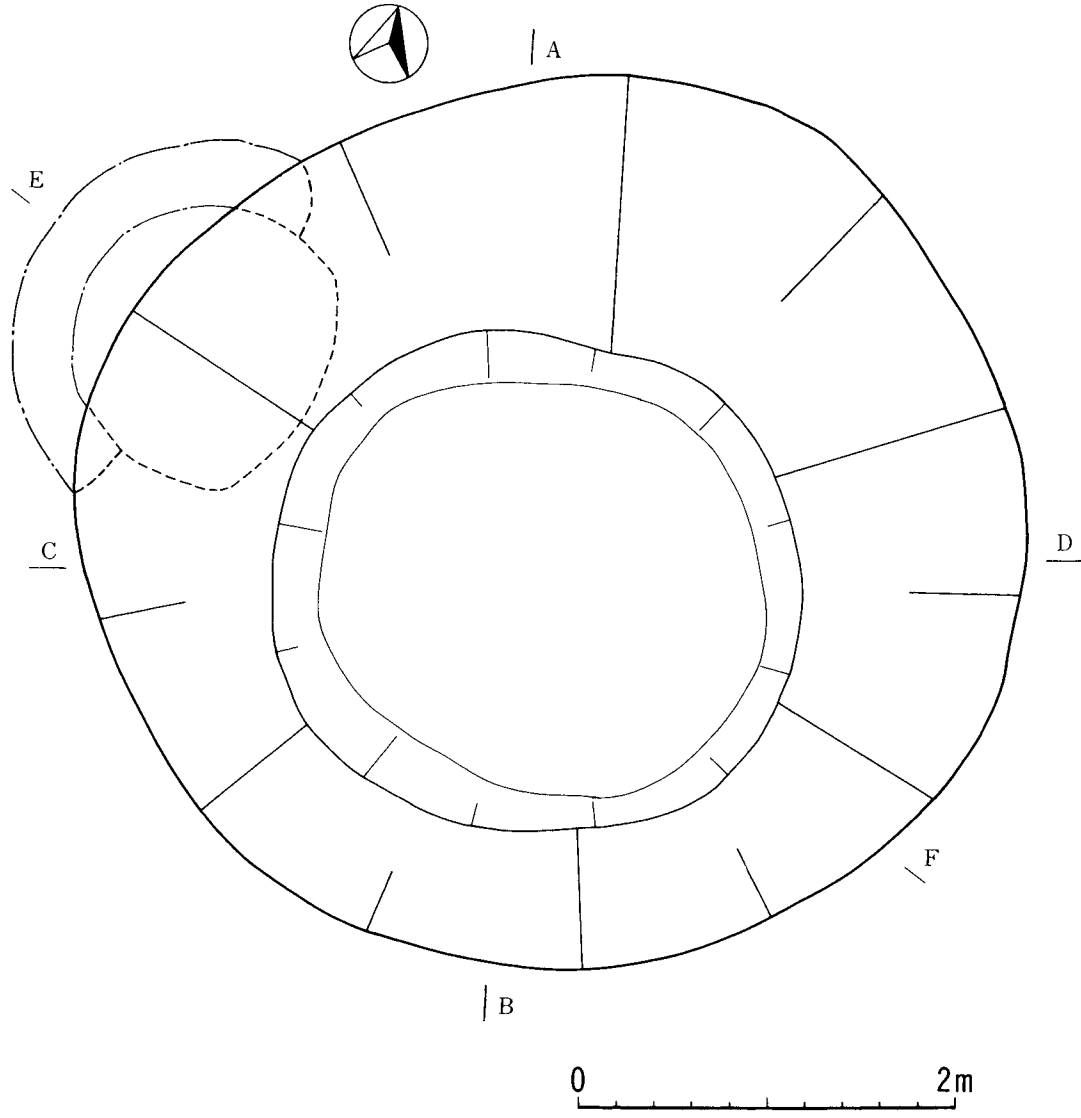
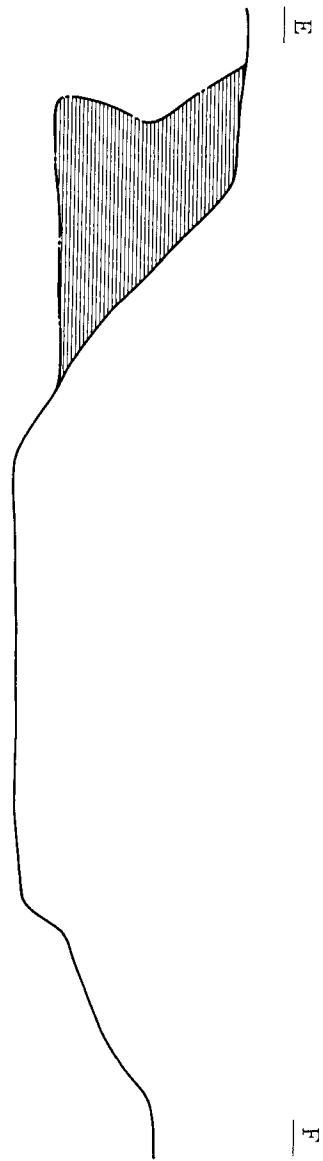
第28図 第14号遺構覆土出土遺物



第29図 第6号遺構床面・覆土出土遺物

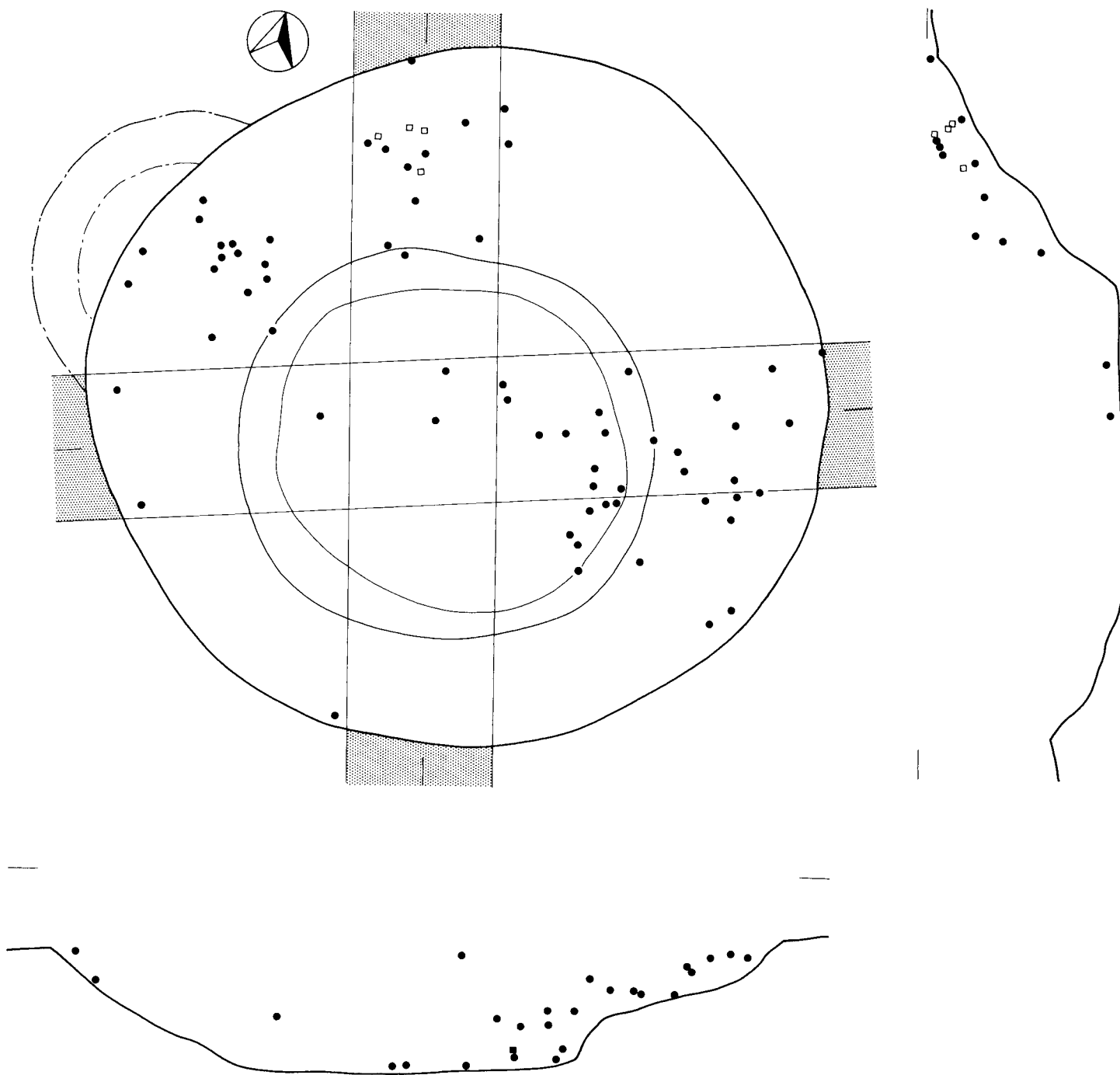


第30図 第9号遺構

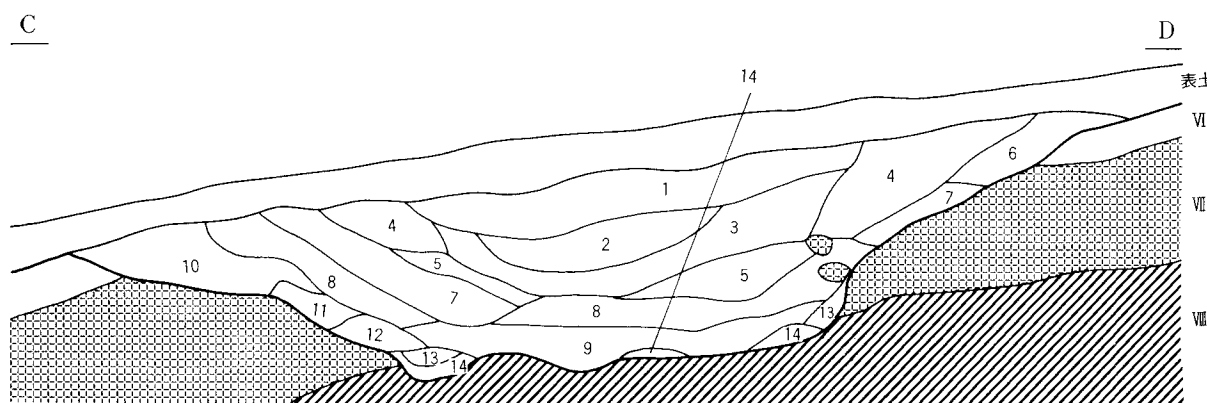
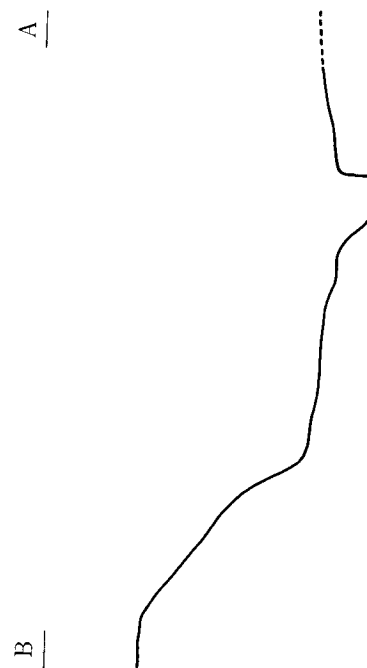
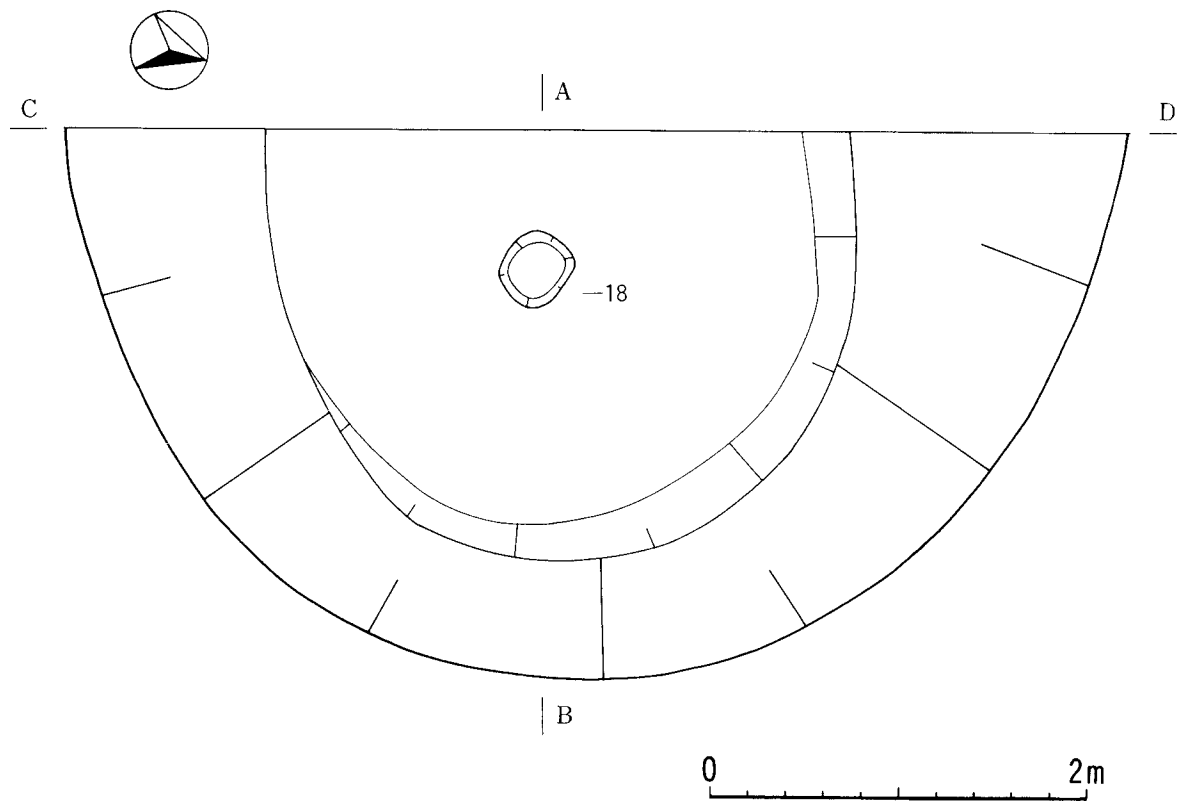


- 第1層 黒褐色土 微砂、南部浮石を微量含む。
- 第2層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰、炭化物を微量含む。
- 第3層 黒褐色土 八戸火山灰、炭化物を少量含む。
- 第4層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰、炭化物を少量含む。
- 第5層 灰褐色土 八戸火山灰を多量に含む。炭化物を少量含む。

第32図 第20号遺構

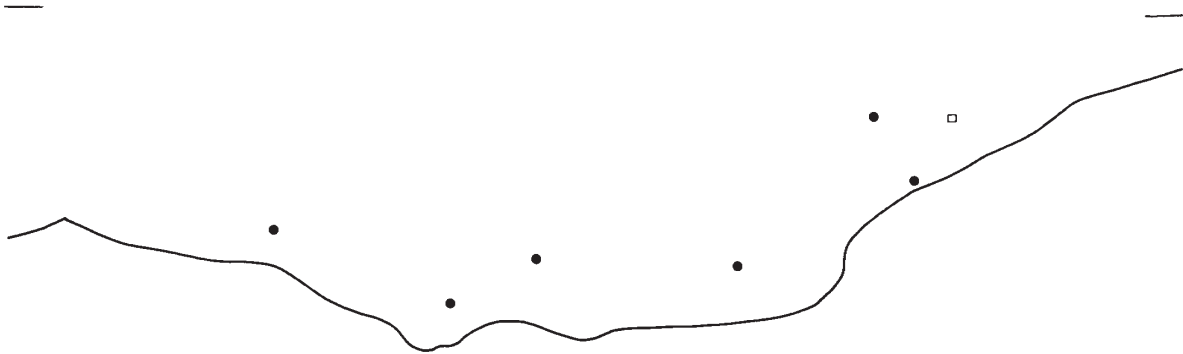
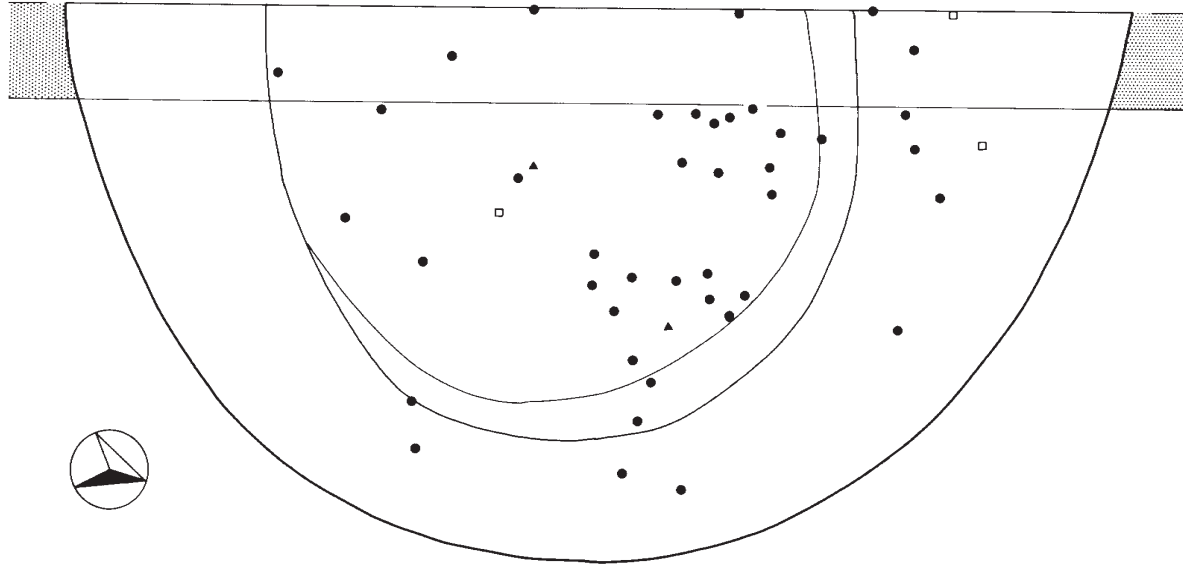


第33図 第20号遺構覆土出土遺物



- 第1層 黒褐色土 微砂。
- 第2層 黒褐色土 微砂。
- 第3層 黒褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第4層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第5層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を含む。
- 第6層 褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第7層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を含む。
- 第8層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を多量に含む。
- 第9層 褐色土 微砂、八戸火山灰を多量に含む。
- 第10層 褐色土 微砂、八戸火山灰を含む。
- 第11層 褐色土 八戸火山灰を多量に含む。
- 第12層 灰褐色土 八戸火山灰を多量に含む。
- 第13層 明褐色土 八戸火山灰を多量に含む。
- 第14層 灰褐色土 八戸火山灰を多量に含む。

第34図 第21号遺構



第35図 第21号遺構覆土出土遺物



が、床面はかなり荒れており、床面中央部に柱穴状のピットがある。

床面から遺物は出土していない。

竪穴廃絶後は自然埋没したものとみられるが、覆土出土の遺物は、遺構北側の斜面上方から、廃棄あるいは流入した状態を呈している。土器は後期又は晩期及び晩期のものが少量出土しているが、接合資料として、三叉文をもつ鉢、縄文の施文された深鉢がある。石器は、遺構中央部から完形のすり石1点、北東壁寄りから破損したすり石1点が出土した。礫は凝灰岩が4点出土した。接合資料は、北壁寄りに多い。

#### 第22号遺構（第36・37図）

平面形、規模、構造とも、第20・21号遺構（特殊竪穴）と基本的に差異がない。ただし、本遺構では、壁上部で柱穴状のピットを4個検出した。それぞれほぼ等間隔に位置し、上屋構造を想定させるが、北西隅の1個を除き、掘り方が荒れているため、明確に柱穴とは断定できない。また、西側の壁上端で落ち込みを確認し精査したが、やはり掘り方がただらしており、一種の付属施設とみなすべきか、判断できなかった。

床面から遺物は出土していない。

竪穴廃絶後は、自然埋没したものとみられ、覆土出土の遺物は、主に遺構西側の斜面上方から、廃棄あるいは流入した状態を呈している。垂直分布は、堆積土の流れに沿っており、遺構中央部では、床面近くに達しているものがある。土器は、後期又は晩期及び晩期のものが少量出土しており、接合資料として、羊歯状文の施文された鉢、磨消文様のある壺、縄文の施文された深鉢がある。石器は出土していない。礫は、7点出土したが、凝灰岩が多い。

#### フラスコ状土壇

##### 第18号遺構（第38図）

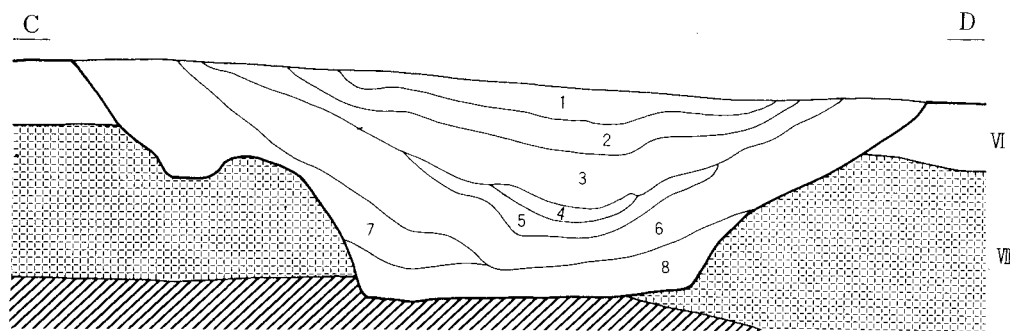
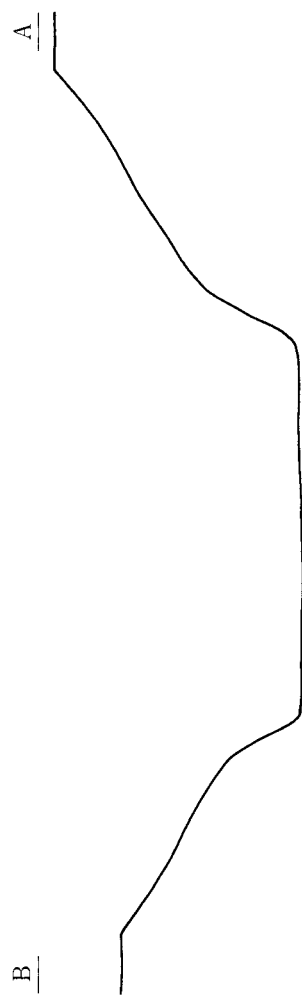
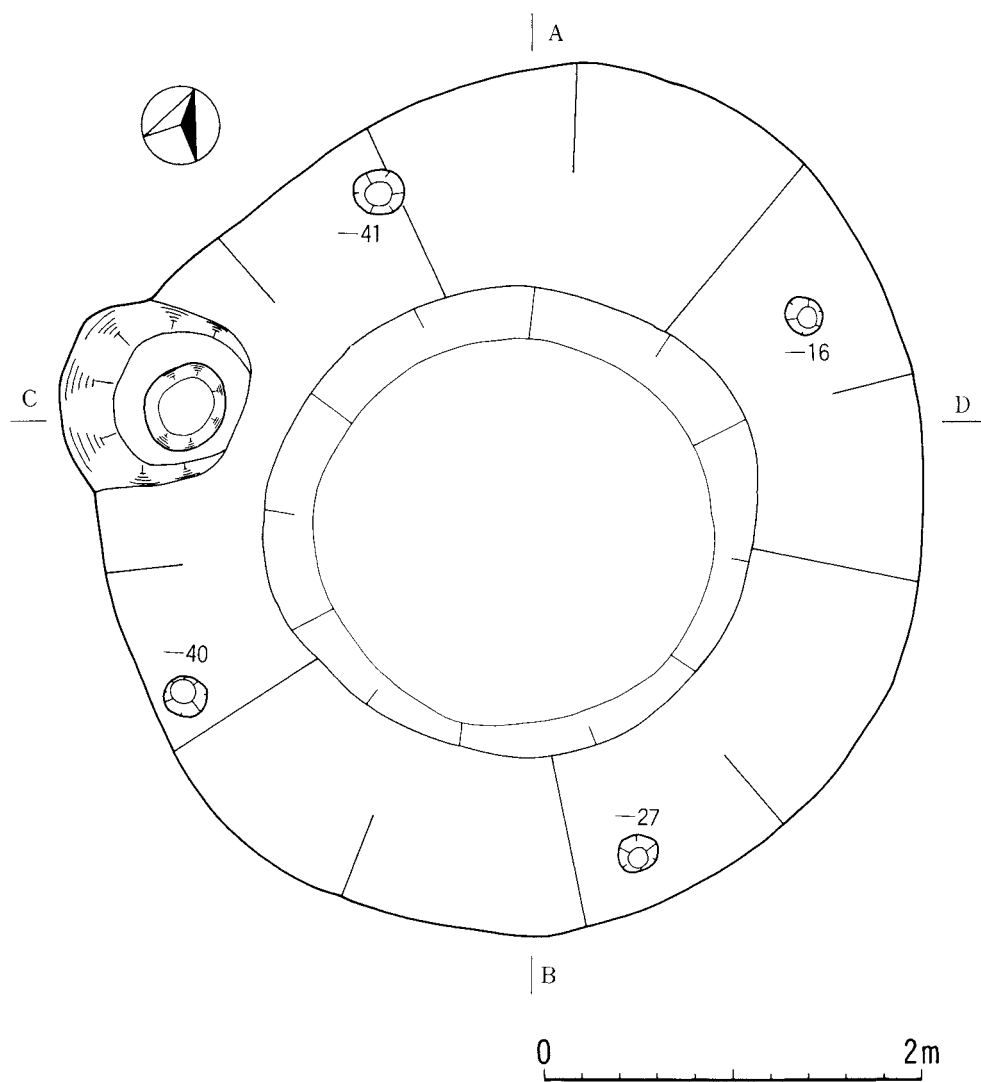
土層観察用トレンチのため、中央部をカットされているが、平面プランは、不整楕円形である。第1層（八戸火山灰層）を掘り込み構築され、底面は、ほぼ平坦であるが、かなり凹凸をもつ。

土壇廃絶後、自然埋没したものとみられるが、壁をなす八戸火山灰の浮石質の部分が、堆積土中にかなり崩れ落ちている。

遺物は出土していない。

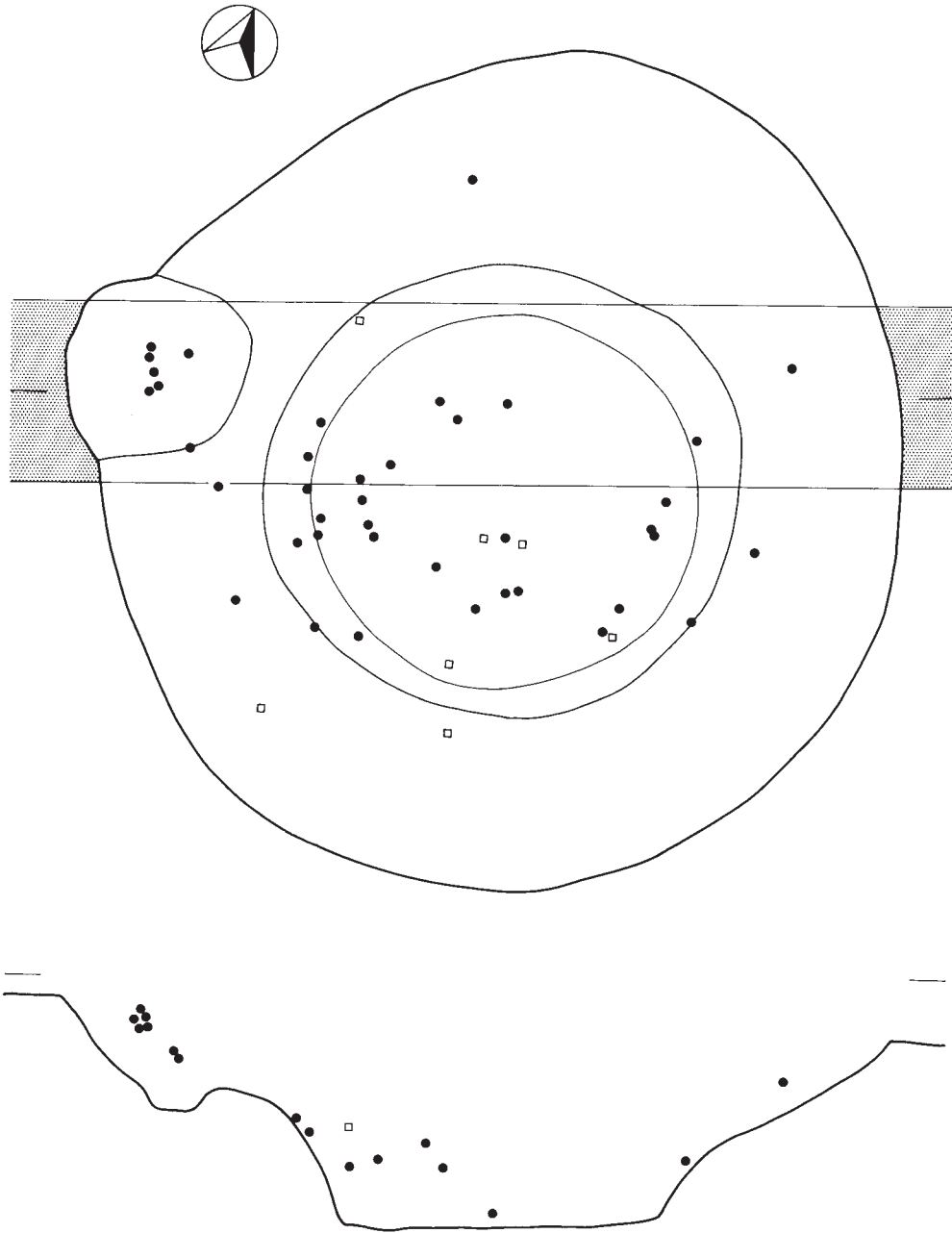
##### 第19号遺構（第39図）

第1層調査用グリッドのため、南半部をカットされているが、平面プランは、ほぼ円形であ

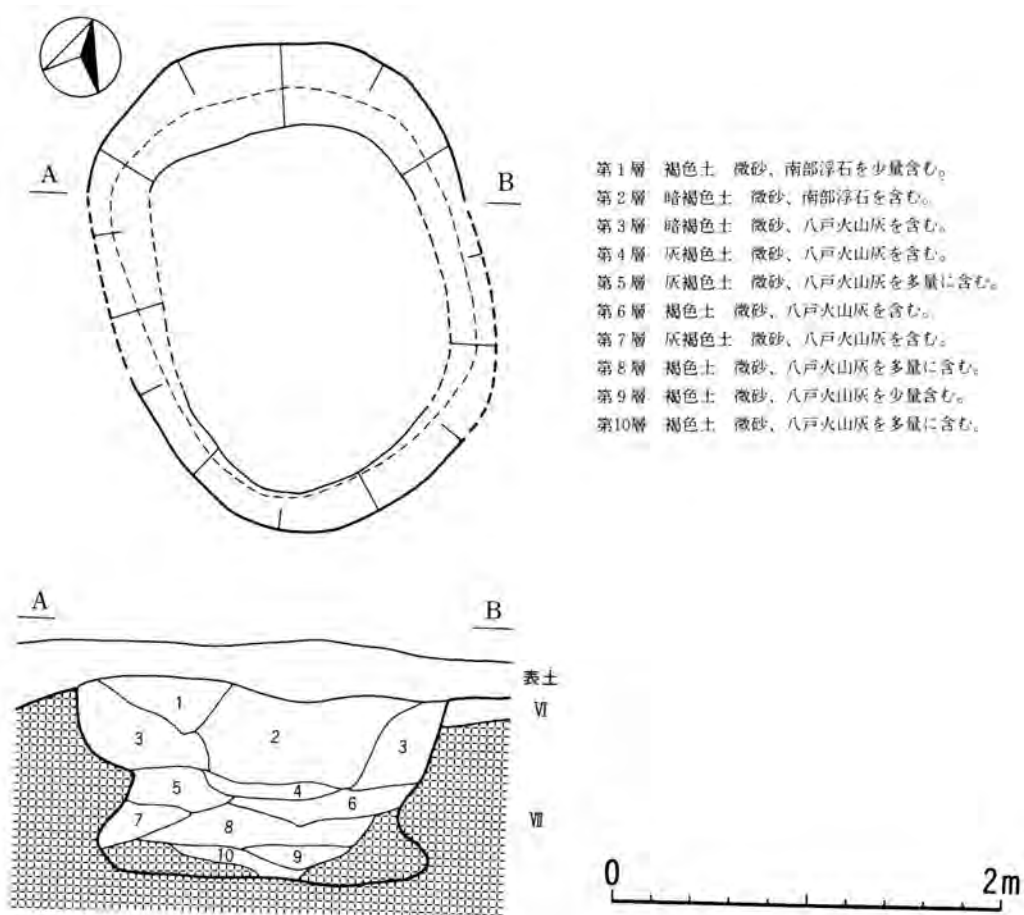


- 第1層 黒褐色土 微砂。
- 第2層 暗褐色土 微砂。
- 第3層 黒褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第4層 黒褐色土 微砂、八戸火山灰、炭化物を少量含む。
- 第5層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第6層 褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第7層 褐色土 微砂、八戸火山灰を多量に含む。
- 第8層 褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。

第36図 第22号遺構



第37図 第22号遺構覆土出土遺物



第38図 第18号遺構

る。第 層（八戸火山灰層）を掘り込んで構築している。底面は、南西 - 斜面下方に向かって傾斜しており、全体にやや荒れている。

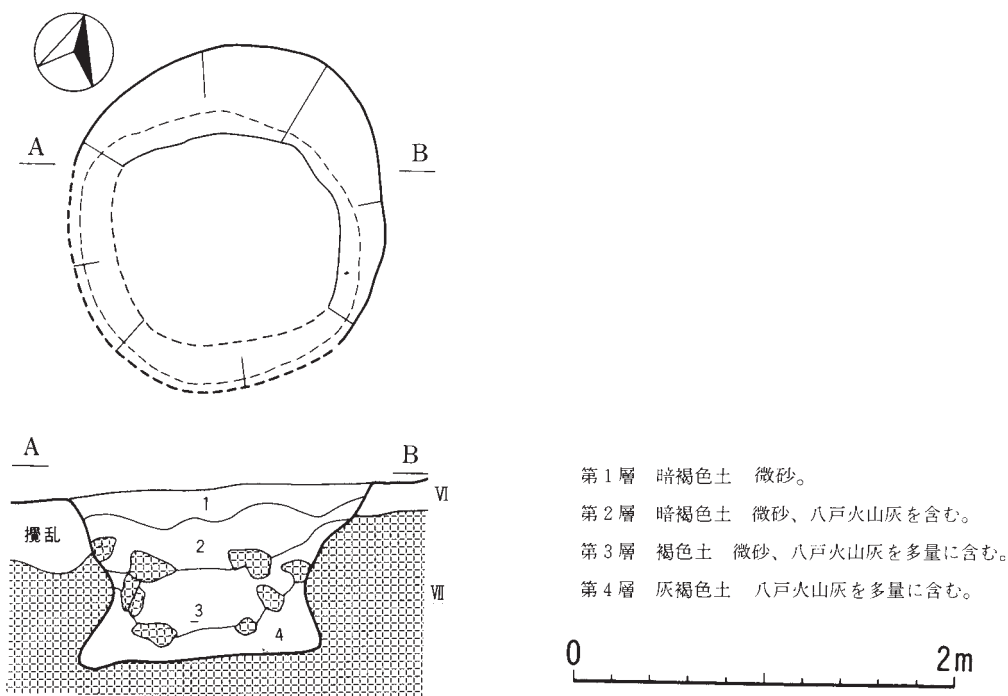
土壌廃絶後は自然埋没したものとみられるが、壁をなす八戸火山灰が、かなりブロック状に落ち込んでいる。

遺物は出土していない。

#### 第23号遺構（第40図）

第20号遺構（特殊竪穴）によって、東半部を切られているが、平面プランは、ほぼ円形になるものとみられる。底面は第 層（高館火山灰層）まで、掘り込まれており、ほぼ平坦である。

土壌廃絶後の埋没過程において、八戸火山灰が、かなりブロック状に崩落している。底面直



第39図 第19号遺構

上に有機質に富む腐植土が薄く堆積しており、この層から、完形の尖頭器が1点出土している。

#### 第25号遺構 (第41図)

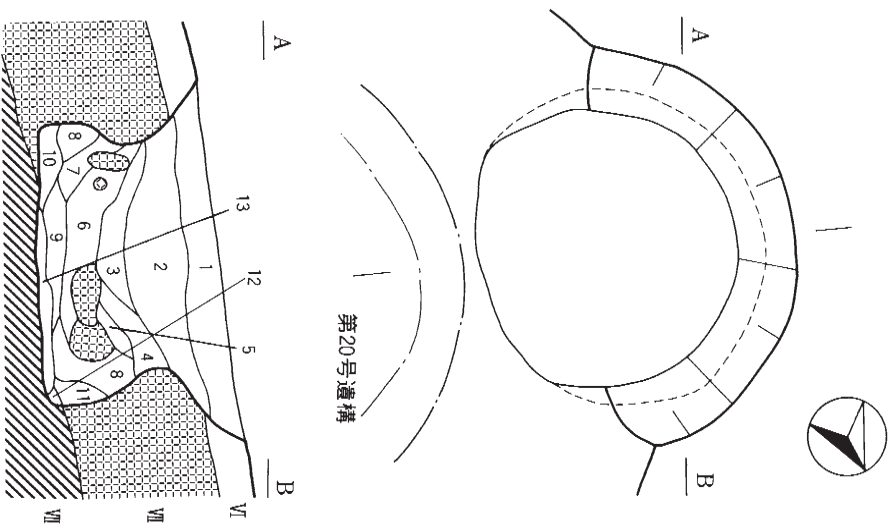
第27号遺構 (フラスコ状土壌) と重複関係にある。本遺構を精査中、第27号遺構を確認したため、新旧関係を示す土層断面図を作成していないが、第27号遺構内の堆積土を切って構築している本遺構の方が新しい。平面プランは、ほぼ円形である。第 層 (高館火山灰層) まで掘り込まれており、底面は、ほぼ平坦である。

土壌廃絶後は、自然埋没したものとみられ、その過程で、八戸火山灰の主に浮石質の部分が、多量に落ち込んでいる。また、壁際に、高館火山灰の崩落がみられる。

遺物は出土していない。

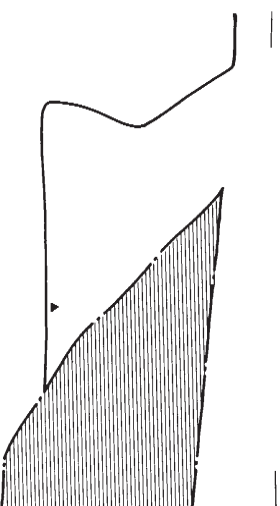
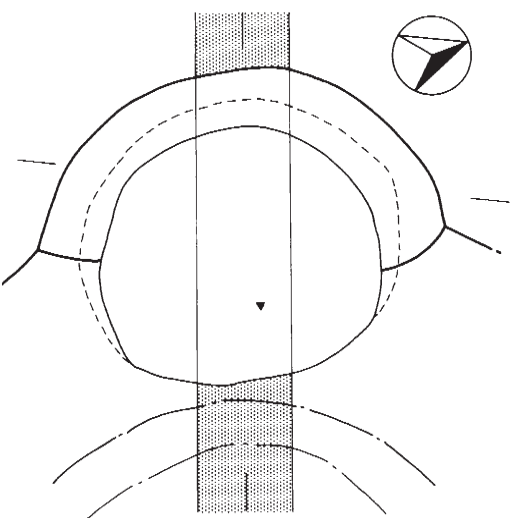
#### 第27号遺構 (第42図)

第25号遺構 (フラスコ状土壌) によって、北東部を切られている。平面プランは、円形になるとみられるが、ほかのフラスコ状土壌に比べて、かなり規模が小さい。底面は、高館火山灰

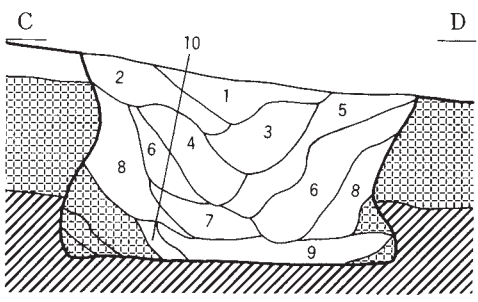
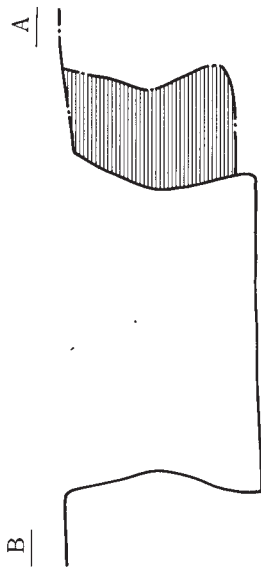
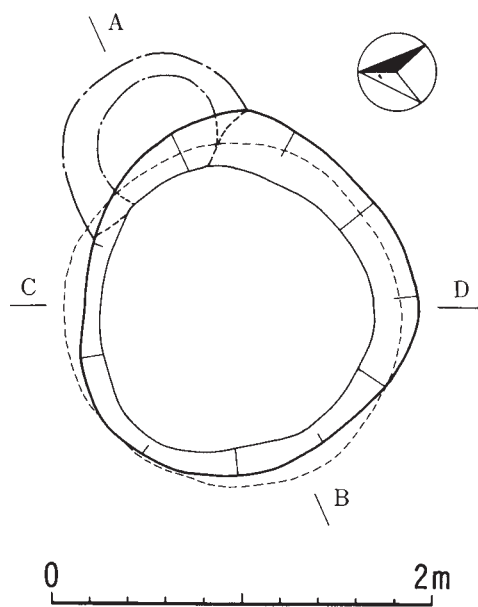


第20号遺構

- 第1層 暗褐色土 微砂、南部浮石を少量含む。
- 第2層 明褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第3層 褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第4層 明褐色土 微砂、八戸火山灰を含む。
- 第5層 灰褐色土 微砂、八戸火山灰を含む。
- 第6層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第7層 灰褐色土 微砂、八戸火山灰を含む。
- 第8層 灰褐色土 八戸火山灰を少量含む。
- 第9層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第10層 灰褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第11層 灰褐色土 八戸火山灰を少量含む。
- 第12層 褐色土 八戸火山灰を少量含む。
- 第13層 黒褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を含む。



第40図 第23号遺構



- 第1層 黒褐色土 微砂
- 第2層 暗褐色土 微砂、炭化物を微量に含む。
- 第3層 明褐色土 微砂、炭化物を微量に含む。
- 第4層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第5層 褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第6層 褐色土 微砂、八戸火山灰を多量に含む。  
炭化物を微量に含む。
- 第7層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第8層 褐色土 八戸火山灰を少量含む。
- 第9層 暗褐色土 微砂、八戸火山灰を少量含む。
- 第10層 褐色土 八戸火山灰を多量に含む。

第41図 第25号遺構

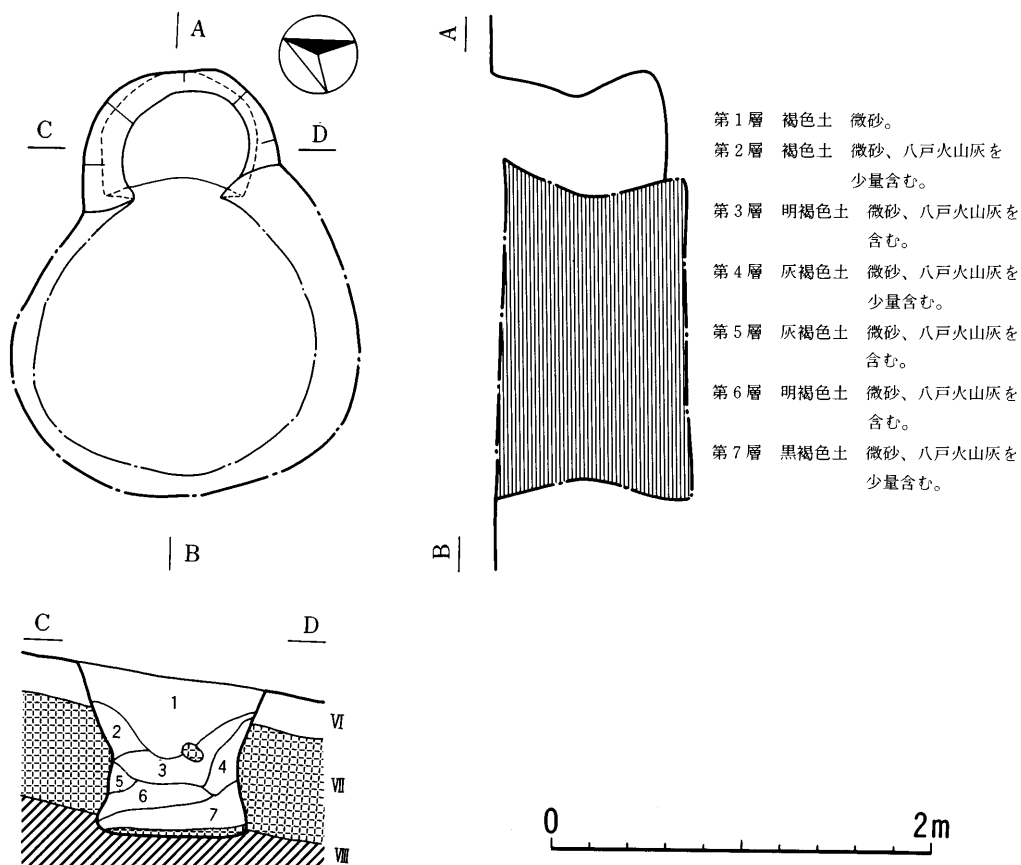
層上部につくられ、ほぼ平坦であるが、中央部がややくぼんでいる。

覆土の堆積状態は、土壌廃絶後、自然埋没した様相を呈しているが、底面直上に、崩落した火山灰の薄層を挟んで、有機質に富む腐植土が堆積している。

遺物は出土していない。

**第28号遺構 (第43図)**

平面プランは、ほぼ円形である。八戸火山灰層を掘り込み構築されている。底面は、ほぼ平坦であるが、かなり荒れている。精査した範囲では、他のフラスコ状土壌にみられるような開口部を欠いている。



第42図 第27号遺構

土壌廃絶後は、自然埋没したものとみられるが、その過程で、八戸火山灰が、ブロック状に崩落している。また、後期又は晩期の土器片が少量出土したが、底面近くに位置するものもある。

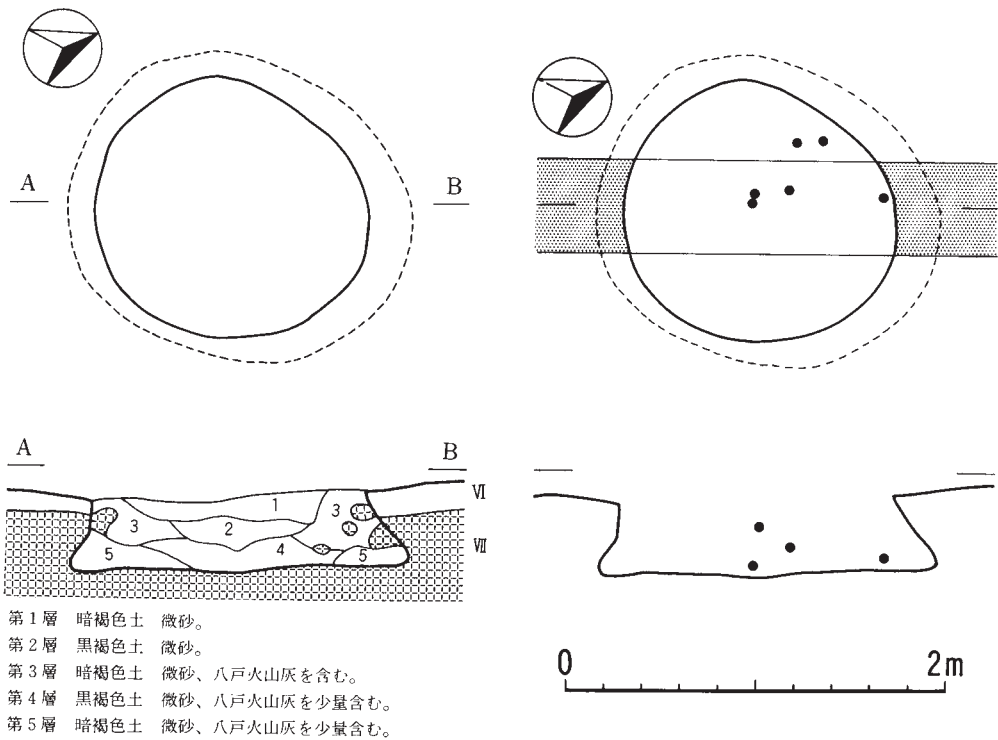
### 土 壤

#### 第24号遺構 (第44図)

第 層 (中掘浮石層) 上面で検出した。円形のプランを呈する。第 層 (南部浮石層) 上面まで掘り込まれており、底面は、北東に向かって傾斜している。

土壌廃絶後は、自然埋没したものとみられる。覆土から、礫が3点出土したが、いずれも焼けたものである。





第43図 第28号遺構覆土出土遺物

**第26 a号遺構 (第45図)**

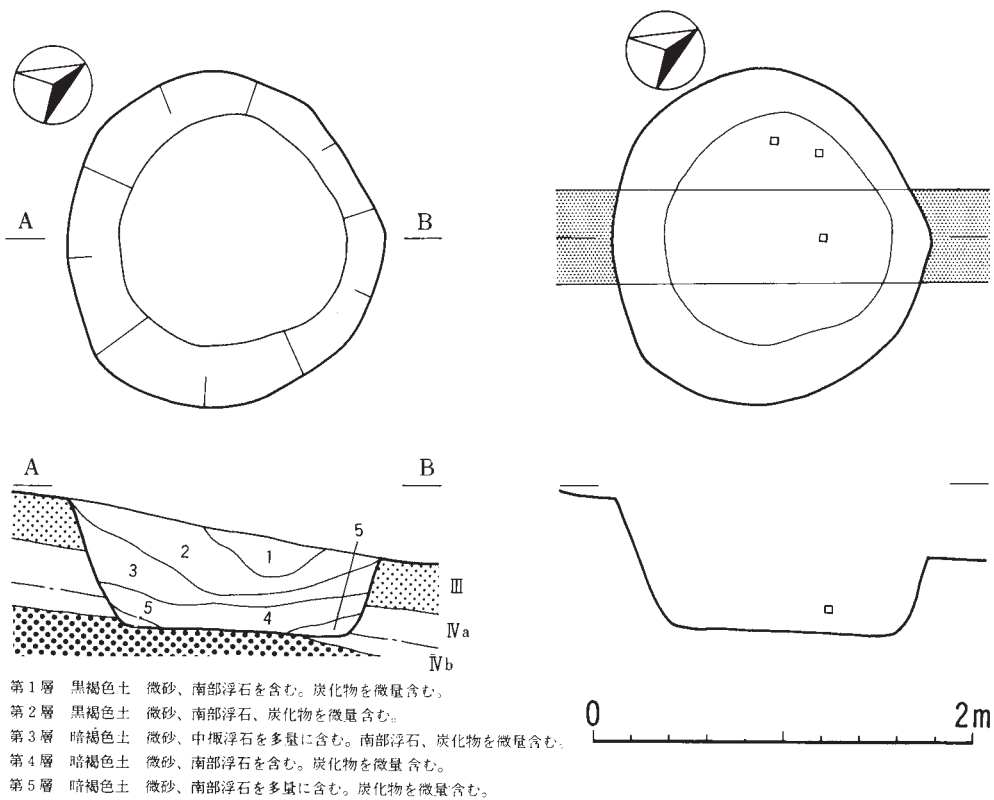
第26 b号遺構 (土壌) と重複関係にある。セクションから判断するかぎり、本遺構の方が新しいものとみられる。平面プランは楕円形である。八戸火山灰層を掘り込んでつくられているが、底面は凹凸が激しく荒れている。壁面は、部分的にオーバーハングした状態を呈している。廃絶後、自然埋没したものとみられる。遺物は出土していない。

**第26 b号遺構 (第45図)**

第26 a号遺構 (土壌) によって、その大部分を切られており、全体形は不明である。遺物は出土していない。

**第29号遺構 (第46図)**

平面プランは円形である。底面は第 層 (八戸火山灰層) 上部につくられ、ほぼ平坦である



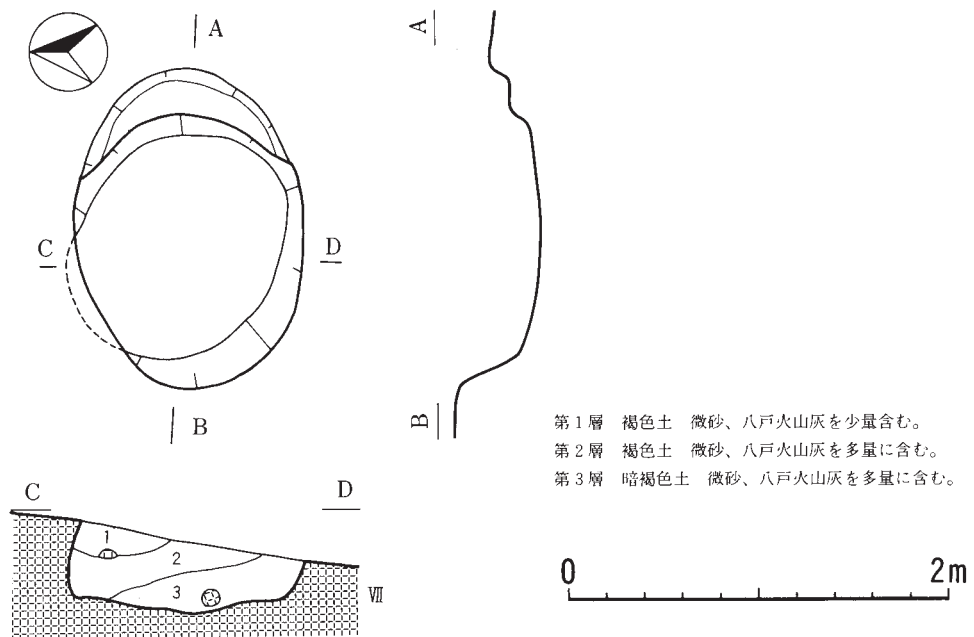
第44図 第24号遺構覆土出土遺物

が、かなり荒れている。

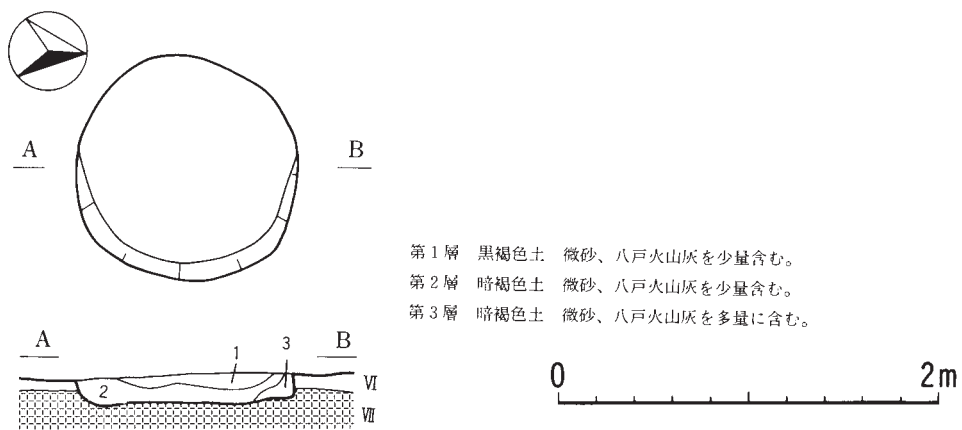
廃絶後は、自然埋没したものとみられる。

遺物は出土していない。

(工藤 大)



第45図 第26 a・b号遺構



第46図 第29号遺構

### (3) 出土遺物

#### ア 土器

第 一 層から出土した土器は、遺構内の床面及び覆土並びに遺構外の遺物包含層のものに大別して記載する。本来、遺構に伴い時期を決定する遺物は、竪穴住居跡においては、床面上、ピット内、焼土、炉跡などから出土した土器に限られるが、整理作業の都合で、各遺構の覆土から出土した土器も併せて図示してある。

出土土器のうち本書で図化したものは、完形品、復原した土器及び器形、文様等の観察が可能な破片である。個々の土器の観察所見は、観察表によって記載する。また、土器分類基準は、第 5 表のとおりに大きく分けて、更に細分した第 一 群土器については後節で述べる。

第 5 表 出土土器分類表

分類 型式名 (文様)	第 I 群(早期)				第 II 群(前期)		第 III 群(後期)				第 IV 群(晩期)		
	1類	2類	3類	4類	5類	計	1類	2類	計	1類	2類	3類	計
現 状	蛋 沢 A H (貝 殻 文 系)	ム シ リ I 式 (条 紋 文 系)	赤 御 堂 式		早 稲 田 V 類			繩 文	無 文	沈 線 文	磨 消 繩 文	大 洞 B 式	捺 糸 文 繩 文
完 形													
復 原													
部 位	口縁部												
	胴体部												
	底 部												
	注口・把手												
	不 明												
計													
個 体 数													

土器分類表、土器観察表について

- 1 土器分類表の( )は、該当型式名が不詳あるいは時期を決定する特徴を欠いているが、比定できる類を一括した。
- 2 完形 完形品及びごく一部分を欠損している土器。
- 3 復原 復原して器形の1/3以上を把握できる状態の土器。
- 4 口縁部 口縁部から胴体部までの破片。
- 5 胴体部 口縁部及び底部(台部)を欠損した破片。
- 6 底部 底部から胴体部までの破片。
- 7 台部 台付土器の台部の破片。
- 8 不明 極細片あるいは剥離によって部位が不詳な破片。
- 9 外面施文の、 a、などは、山内清男氏が提唱している文様帯の部位を示す。
- 10 観察表中の( )は、推定値、xは現存値、分類表中の は推定個体数を示す。

#### A 遺構出土の土器

床面及び覆土から遺物が出土した遺構は、第 1、2、3、6、7、10、13、14、15、20、21、22、28号(現地でのNo.)である。出土した土器は、本書において第 一 群から第 一 群までに分類したものである。

以下、遺構出土の土器については、各遺構ごとに土器実測、拓影図及び分類表、観察表で図示する。

第1号遺構出土土器（図版42、44）

床面上から完形土器2点（第47、48図）と覆土から破片が4点出土した。出土土器の分類と図示した土器の観察結果は、第6、7表に示した。

第6表 第1号遺構出土土器分類表

分類	第I群(早期)					第II群(前期)		第III群(後期)				第IV群(晩期)				
	1類 (貝文系)	2類 (壺文系 A II)	3類 ムシ I	4類 (糸文系)	5類 赤御堂式	1類 早稲田 V 類	2類 ( )	1類	2類	3類	4類	1類 大洞 B 式	2類 大洞 BC 式	3類		
型式名								I 腰内 IV 群								
現状					計		計	縄文	無文	洗線文	磨消縄文	計	三文文	羊歯状文	然糸縄文	計
完形											2	2				
復原																
部位	口縁部							1			1	2				
	胴体部								1		1	2				
	底部															
	注口・把手															
不明																
計							1	1		2	4					
個体数							1	1		4	6					

第7表 第1号遺構出土土器観察表

単位 cm

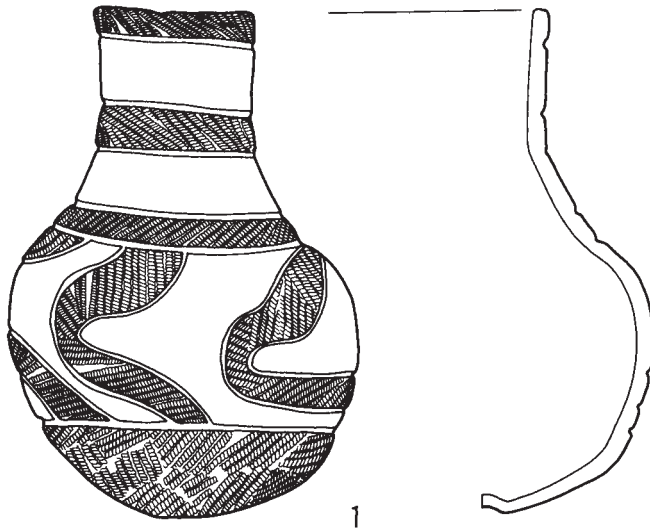
挿入番号	図版番号	遺留番号	器形名	器形現状	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面調整	その他の特徴			分類		備考	
											口唇部	底部	その他	群	類		
47	42	1床	長頸壺	完形	13.5	4.3	1.3	9.3	I-IIa-平行磨消縄文 II-入組状磨消縄文	接合痕 残存		上げ底	磨なし 底面まで縄文あり	III	4	g	
48	42	1床	小鉢	完形	11.1	12.3	4.4	12.3	I-平行羽状縄文 IIa-II-入組状磨消縄文	横 縦		上げ底	磨なし B器形	III	4	g	炭化物内外面に付着
44	1覆	1覆	小鉢	口縁		(17.0)			I-IIa-平行羽状縄文 II-入組状磨消縄文	横			磨なし	III	4	j	

第2号遺構出土土器（図版44）

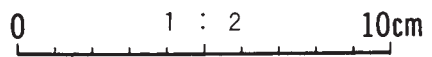
土器は、覆土から破片のみ4点出土した。図示できる土器は、第48図3の1点である。分類別数量は第8表、観察表は第9表に示した。

第3号遺構出土土器（図版42～47）

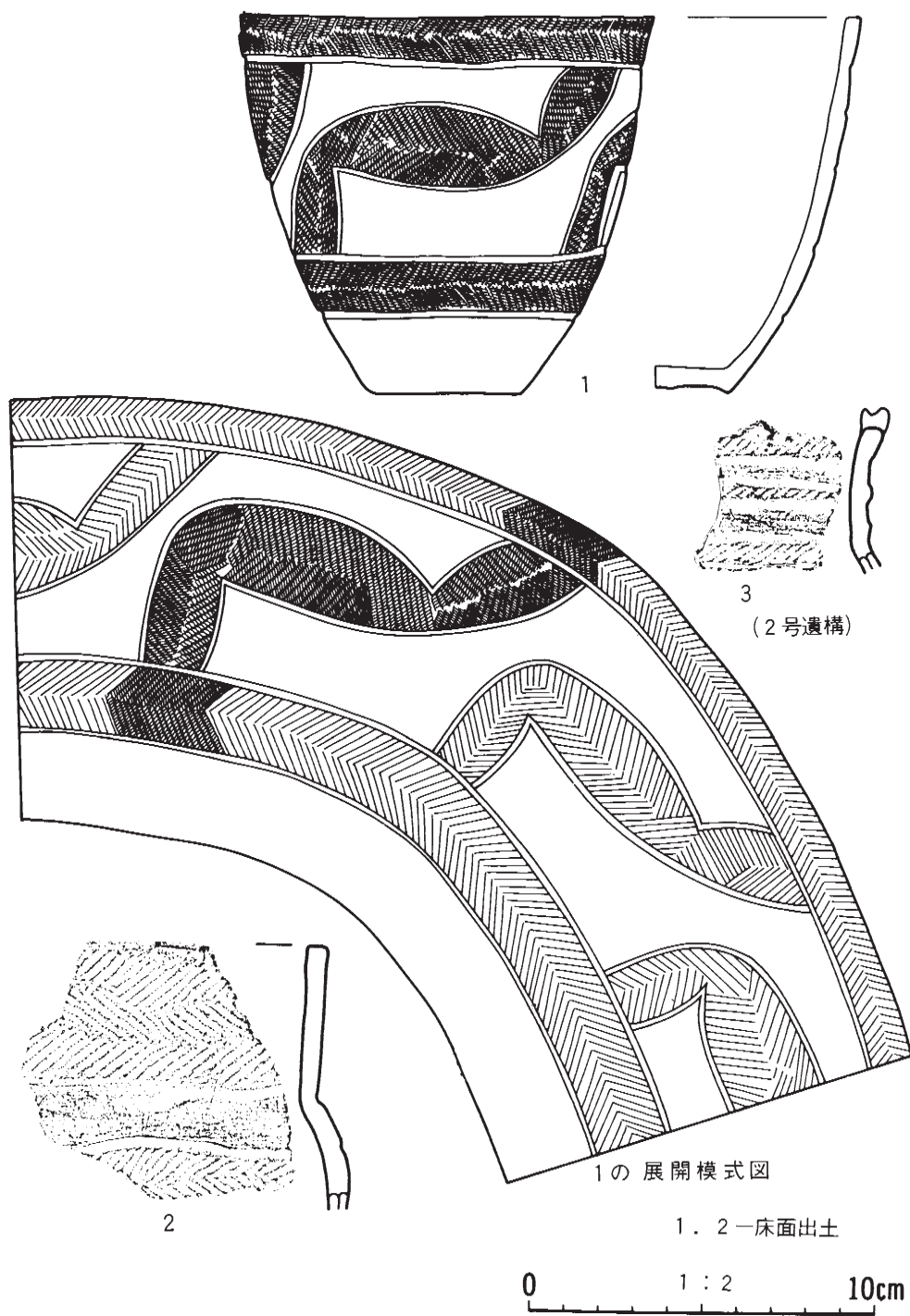
床面上及び覆土から第I群並びに第II群土器の完形品、復原できたもの17点及び約500点の破片（第49～58図）が出土した。床面上から出土した土器は、組成関係を把握できるものである。分類及び部位別の数量は第10表に、また、土器観察表は、第11～15表に示した。主な接合関係は、第7、10、13、14号跡の覆土の土器及びC-4、C-5、D-6、E-4、G-7、H-4、H-5グリッド出土の土器である。



1の展開模式図



第47図 第1号遺構出土土器実測図



第48図 第1・2号遺構出土土器実測拓影図

第8表 第2号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第I群(早期)					第II群(前期)			第III群(後期)				第IV群(晩期)			
	1類	2類	3類	4類	5類	1類	2類		1類	2類	3類	4類		1類	2類	3類
現状	(貝殻文系)	(蜜沢A II)	ムシリ	(条状文系)	赤御堂式	早稲田V類	( )		十 腰 内 IV 群					大洞B式	大洞BC式	
完形																
復原																
部位	口縁部											1	1			
	胴体部									3				3		
	底部															
	注口・把手															
	不明															
計										3		1	4			
個体数										2		1	3			

第9表 第2号遺構出土土器観察表

単位 cm

挿図 番号	図版 番号	遺構 番号	器形 名称	器高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
48図 -3	44 -10	2覆 号土	注口 口縁		(8.0)			I-IIa-平行磨消縄文(LR)	横	横溝突起付				III 4 f	

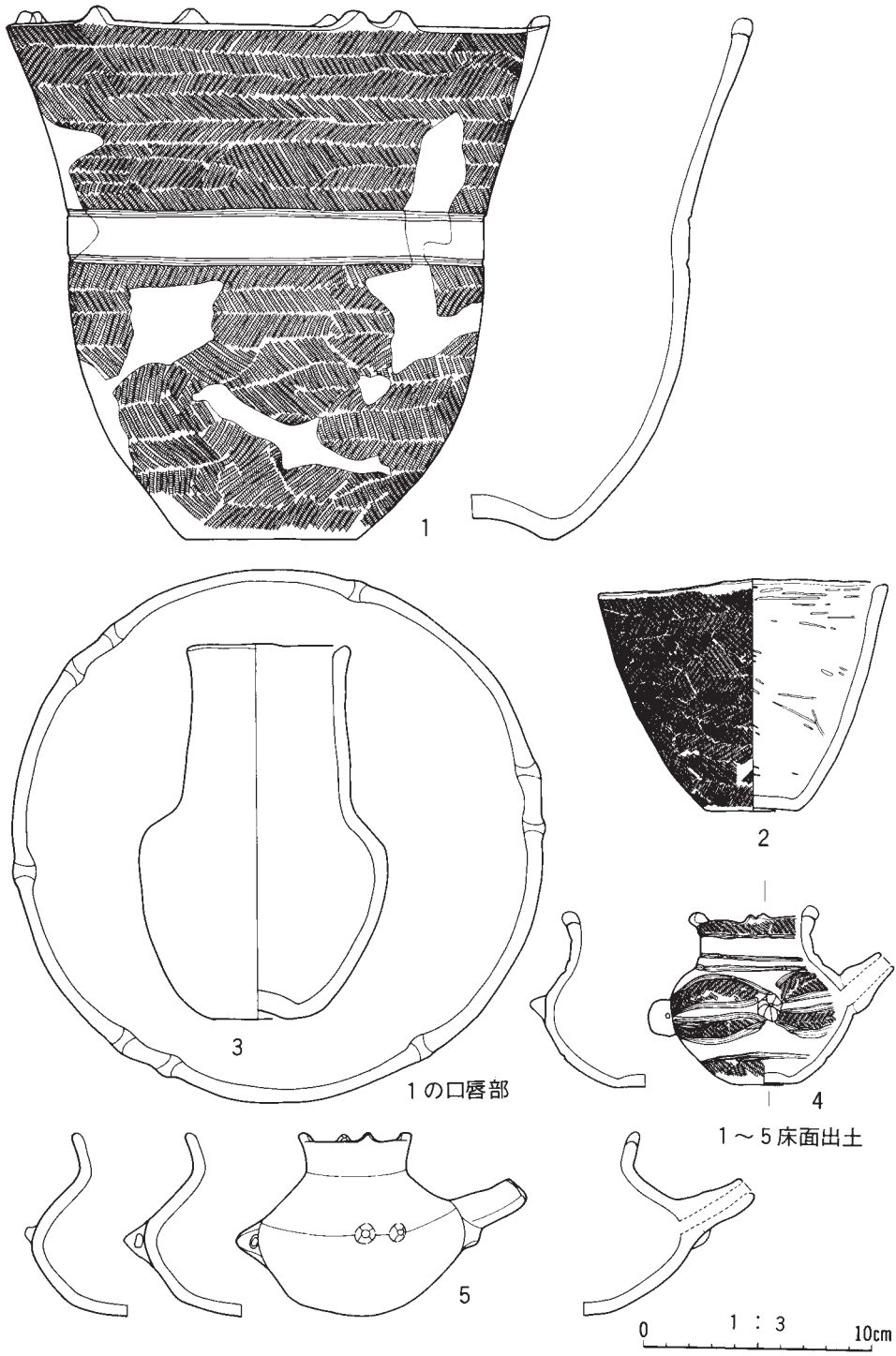
第10表 第3号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第I群(早期)					第II群(前期)			第III群(後期)				第IV群(晩期)			
	1類	2類	3類	4類	5類	1類	2類		1類	2類	3類	4類		1類	2類	3類
現状	(貝殻文系)	(蜜沢A II)	ムシリ	(条状文系)	赤御堂式	早稲田V類	( )		十 腰 内 IV 群					大洞B式	大洞BC式	
完形										1	4		1	6		
復原										1	4	1	5	11		
部位	口縁部			2		2			<12> 17	<5> 5		<26> 33	<43> 55			
	胴体部			29		29			<105> 245	<42> 44		<86> 92	<233> 381			
	底部			1		1			8	4		4	<16> 16			
	注口・把手															
	不明								69	1		4	74			
計			32		32			339	54		129	522				
個体数	3		29	3	29			199	60	1	124	384				

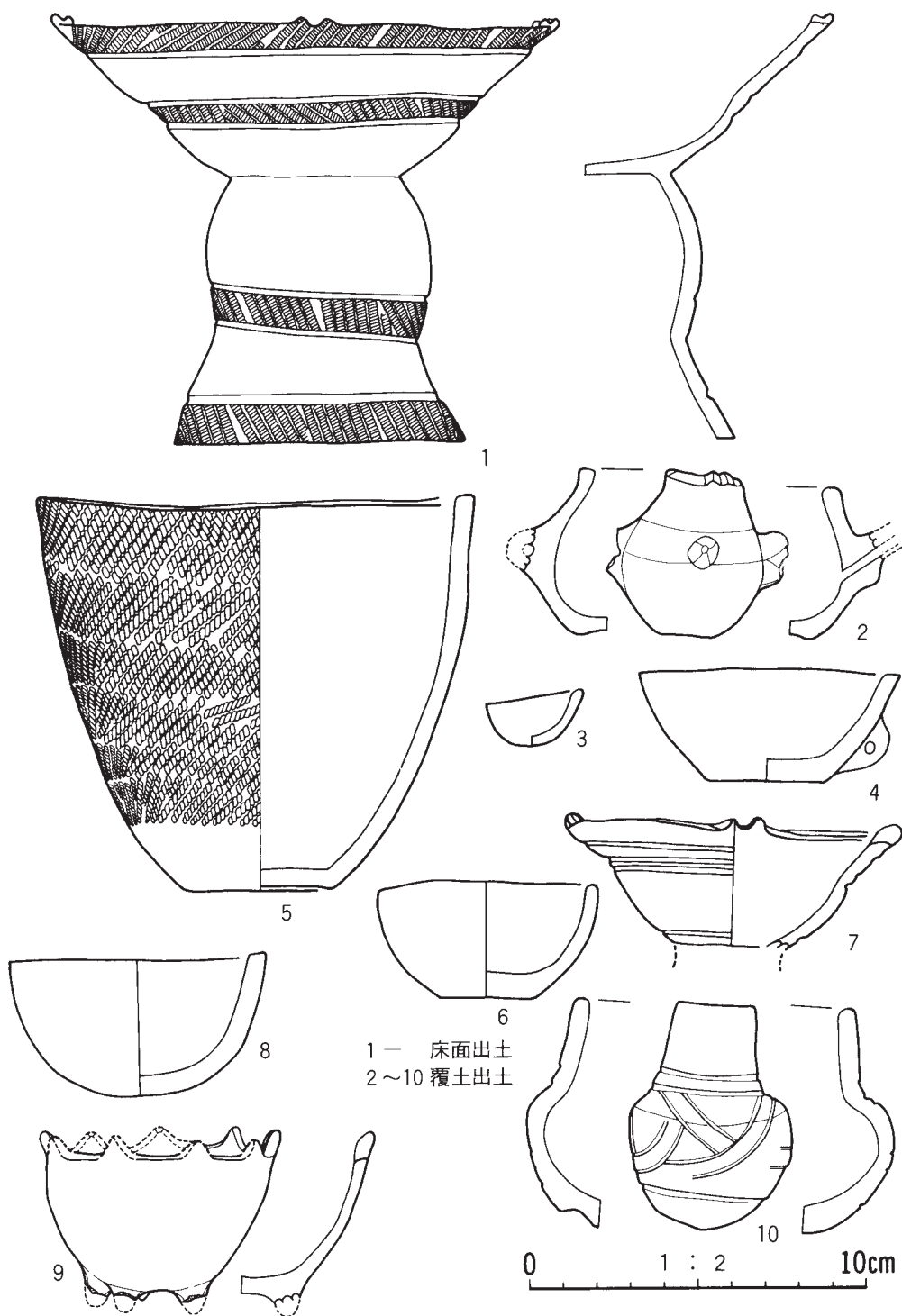
第6号遺構出土土器(図版48)

第 群3類土器3片と第 群1類、4類土器12片計15点13個体が、墳底面と覆土から出土した。完形品はなく、図示できる破片は3点(第59図)である。分類別の数量は第16表、土器の観察所見は、第17表に示した。

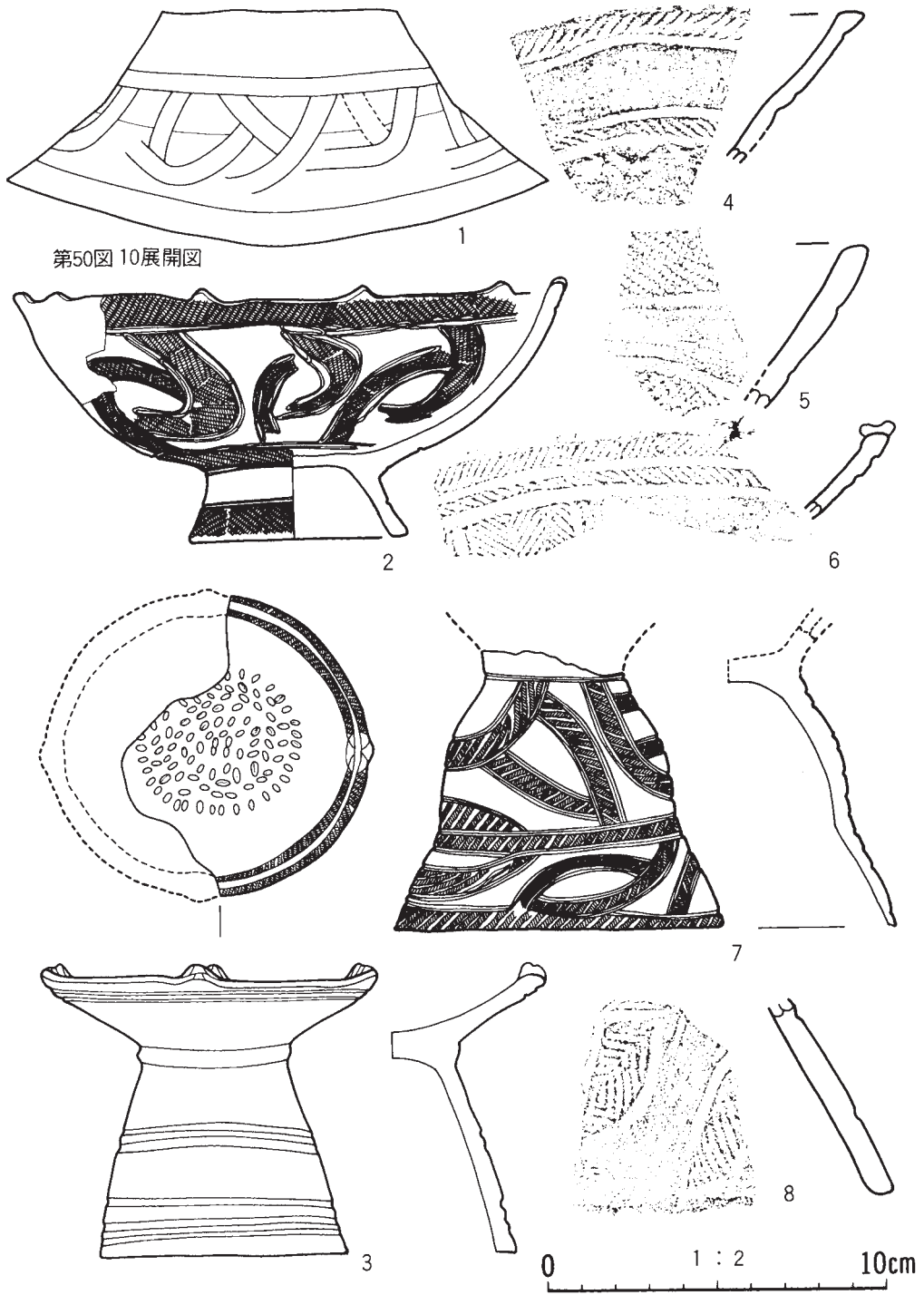




第49図 第3号遺構出土土器実測図(1)

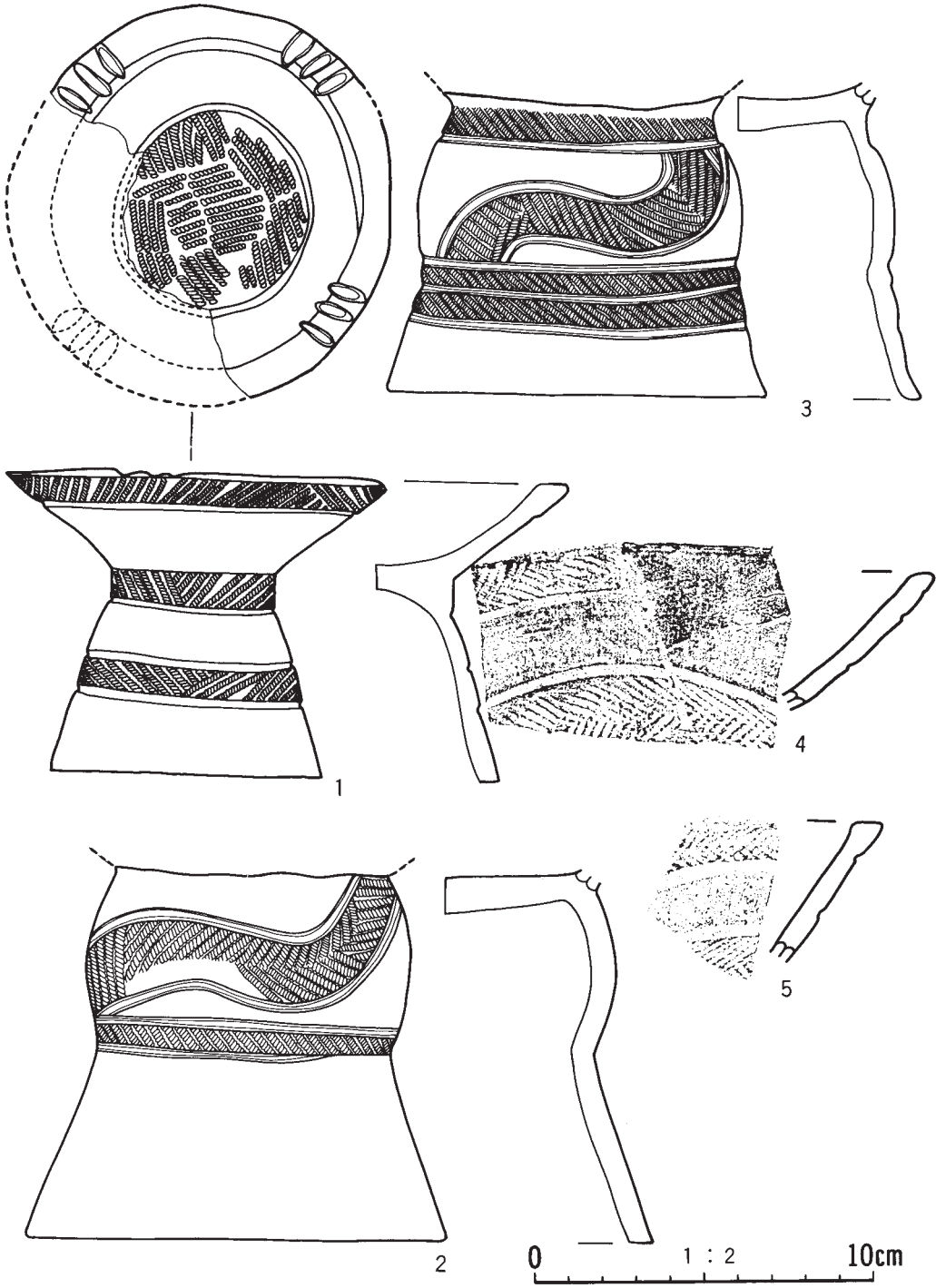


第50图 第3号遺構出土土器実測図(2)

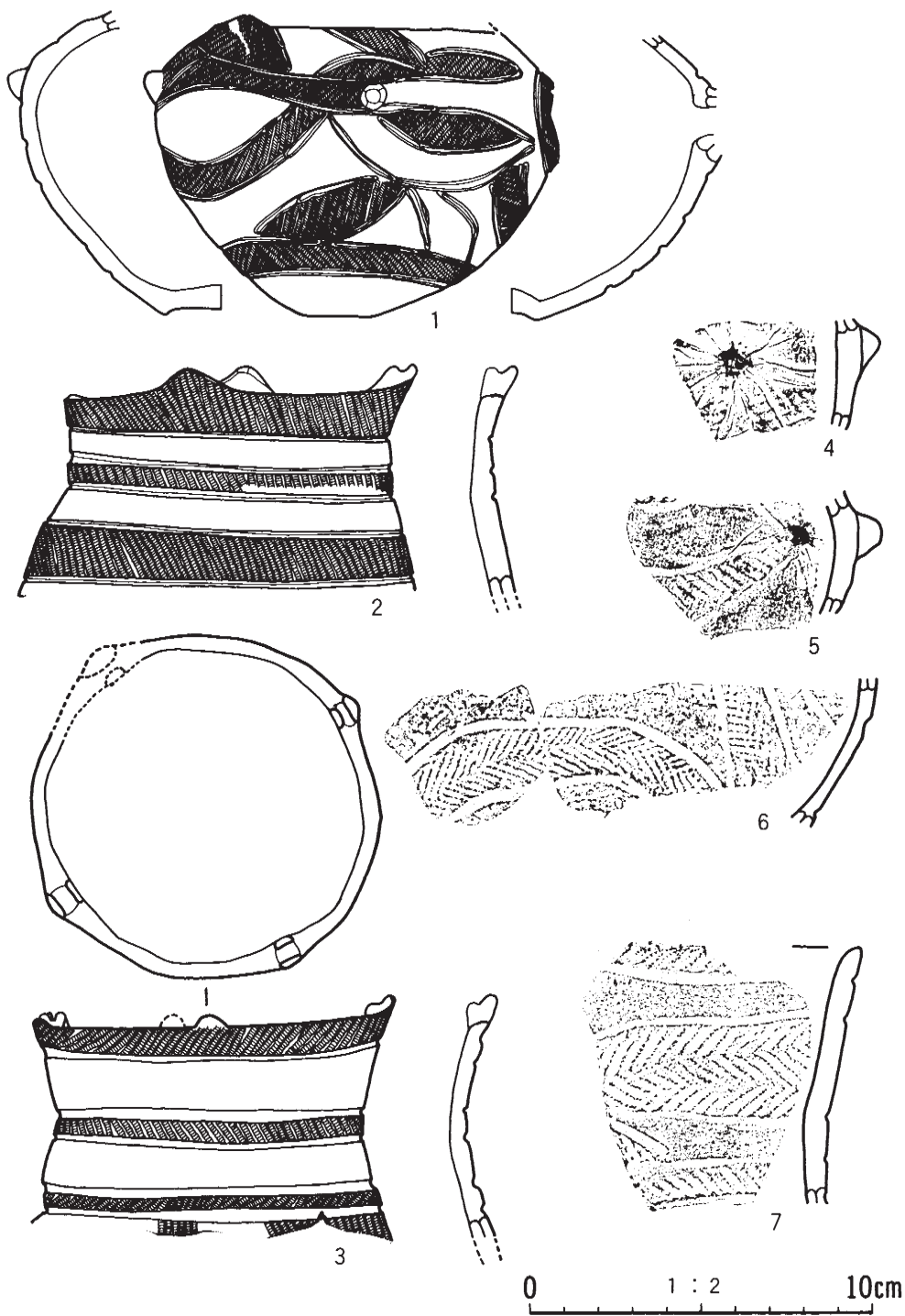


第50図 10展開図

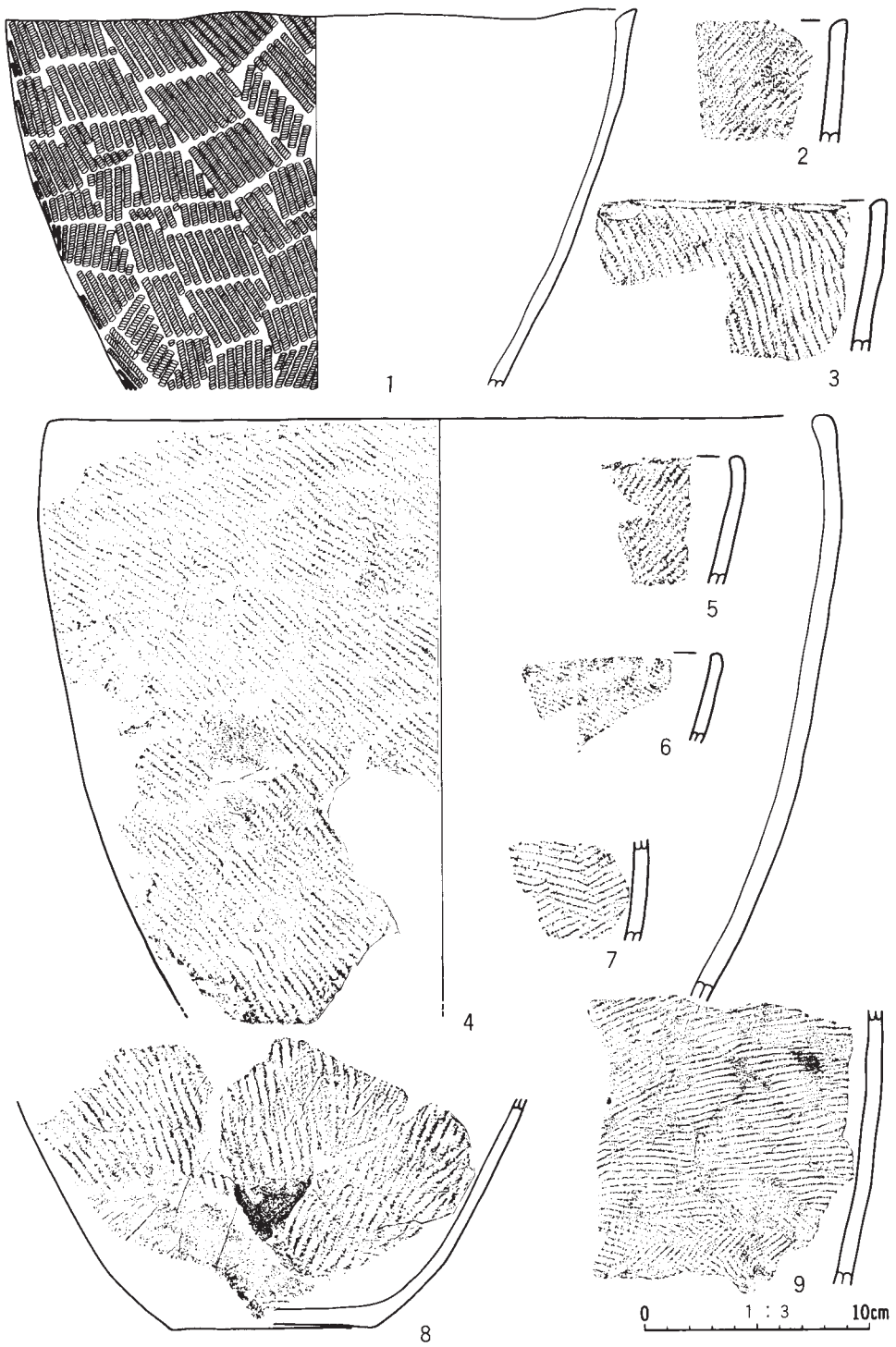
第51図 第3号遺構出土土器実測拓影図(3)



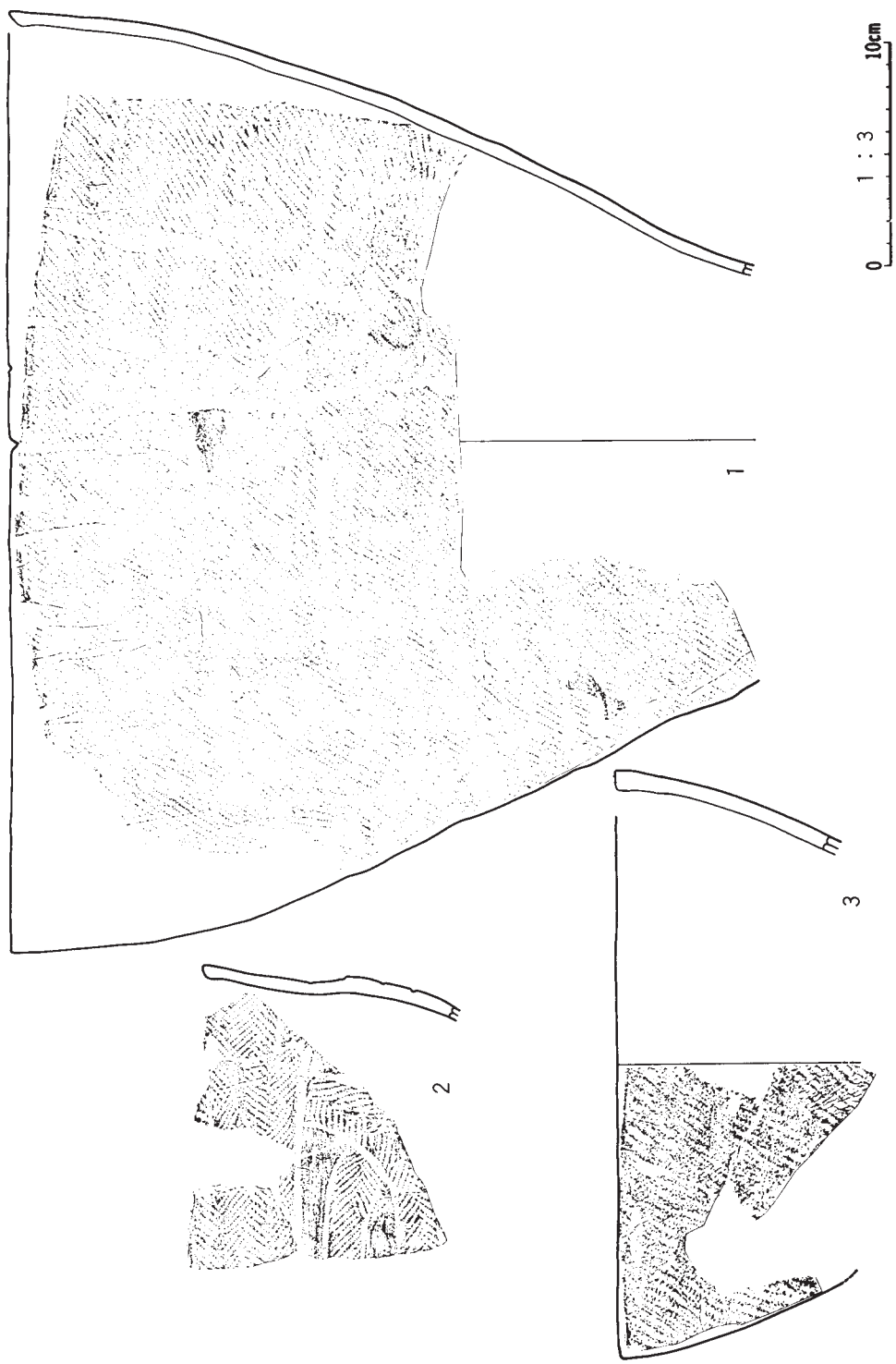
第52図 第3号遺構出土土器実測拓影図(4)



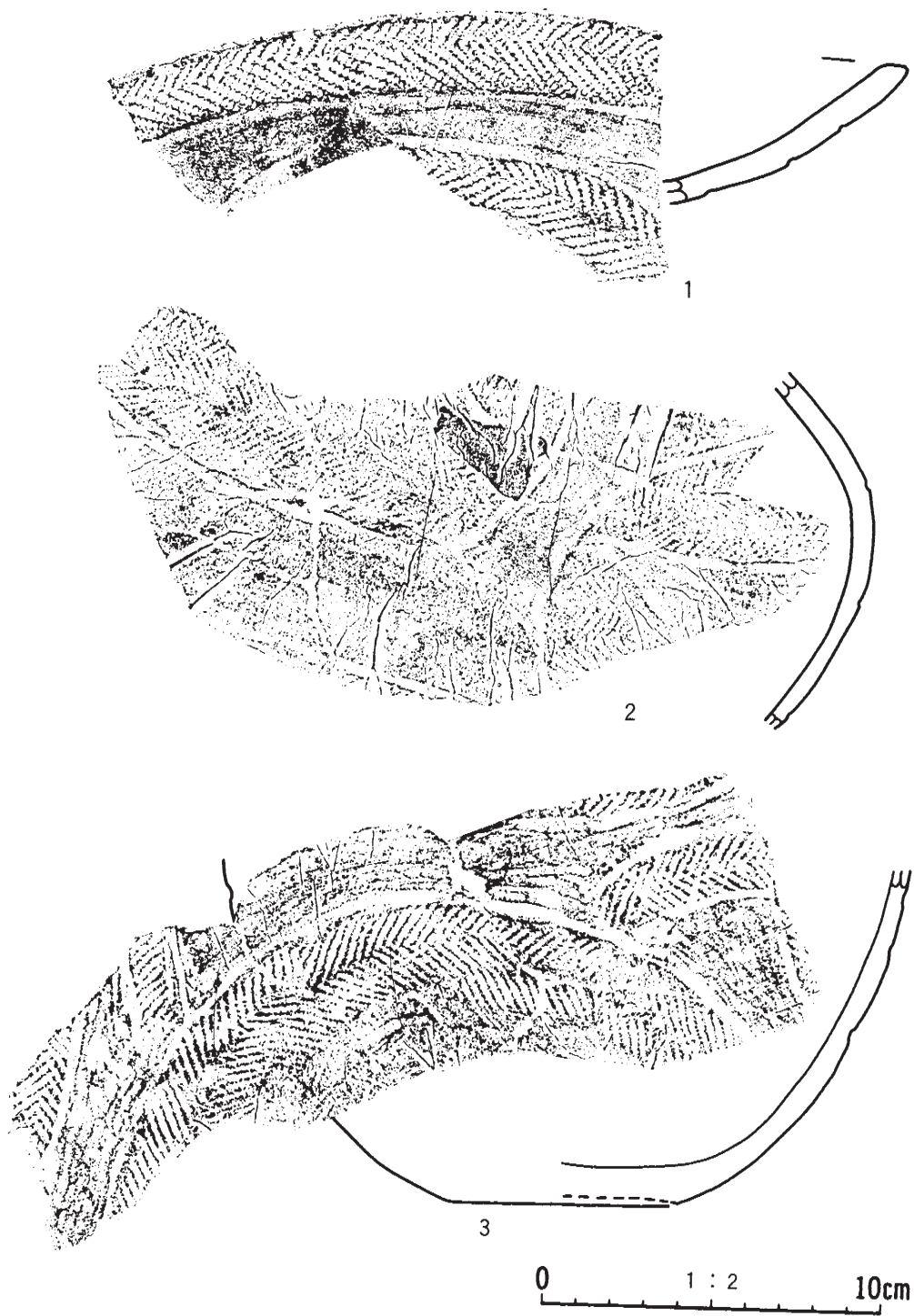
第53図 第3号遺構出土土器実測拓影図(5)



第54图 第3号遺構出土土器実測拓影图 (6)

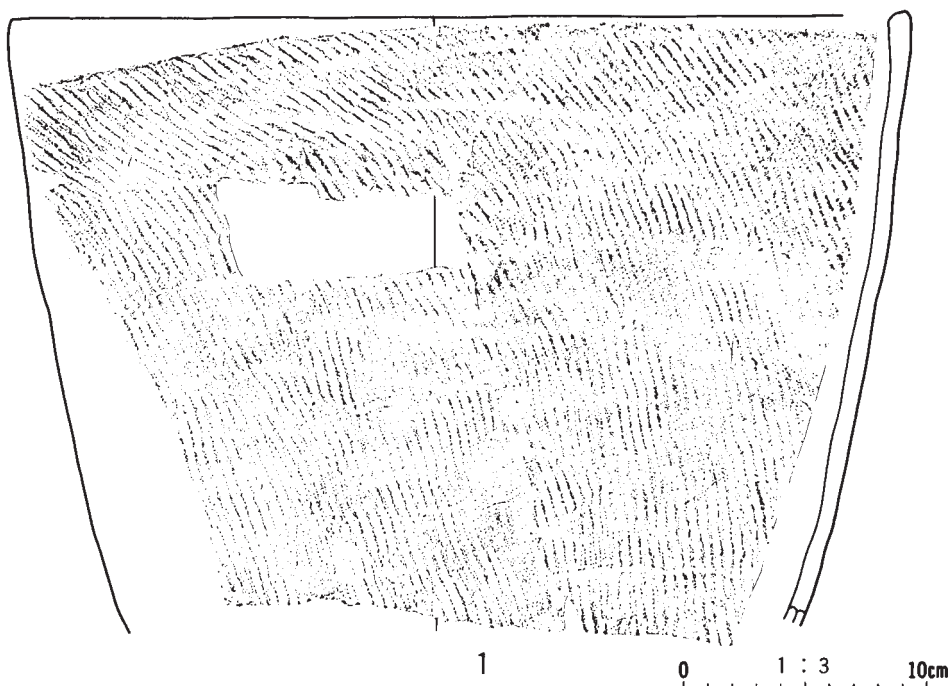


第55図 第3号遺構出土土器拓影图 (7)



第56図 第3号遺構出土土器拓影図(8)





第57図 第3号遺構出土土器拓影図(9)

第11表 第3号遺構出土土器観察表(1)

単位 cm

挿図 番号	図版 番号	遺構 標名	器形 現狀	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群 類		
49 -1	44 -12	3床 号面	深鉢 復原	23.5	26.0	8.0	26.0	I. IIa - 平行磨消羽状縄文 II - 羽状縄文	横 斜め	2個1組 2 1個 2 交互突起	押し上 げ底	A器形	III	4 e	10. 14号-C-4.5. H-4と接合
42 -2	44 -4	3床 号面	小鉢 完形	10.3	13.7	4.2	13.7	O段多条・LR・RL羽状縄文	横	平縁 肥厚なし	やや 上げ底 気味		III	1 c	二次火焼有
42 -3	42 -6	3床 号面	長頸壺 完形	16.0	7.2	3.0	11.5	無文(全面研磨)	横 縦	平縁	押し上 げ底		III	2 b	
43 -4	43 -1	3床 号面	注口 完形	7.2	5.5		10.4	I. IIa - 平行磨消縄文 II - 連弧状磨消羽状縄文		縦割突起4個	(割離) 丸底	胴部瘤付2個 小橋状把手1個	III	4 d	注口基部 底部をアスファルト 状で補修
42 -5	42 -5	3床 号面	注口 完形	8.1	5.0		8.7	無文(全面研磨)	不良	小突起4個	丸底	小型注口下瘤付 丸底胴体部に2個1対 瘤付	III	2 a	注口の反対側に小橋 状把手
50 -1	44 -11	3床 号土	台付 浅鉢 復原	12.8	15.1	8.8	15.2	I. IIa - 平行磨消縄文	横 丁寧	2個1対 横割突起4組			III	4 f	
44 -2	44 -1	3覆 号土	ミニ 注口 復原	4.7	2.3	1.4	5.2	無文	横 斜め	縦割小突起3個		器形雑・歪	III	2 a	
44 -3	44 -2	3覆 号土	ミニ鉢 完形	1.5	2.9	0.9	2.9	無文	横 斜め			器形雑・歪	III	2 b	注口のみ

第12表 第3号遺構出土土器観察表(2)

単位 cm

図号	図版番号	遺構名	器形	口径	口径	口径	口径	外面施文	内面調整	その他の特徴			分類		備考	
										口唇部	底部	その他	群	類		
50	44	3覆号土	ミニ鉢形	3.4	7.8	3.4	7.9	無文	横斜め	平縁		胴体部ニ小橋状把手	III	2	a	
-5	42	3覆号土	小鉢復原	11.8	13.1	4.5	13.5	I.R 多条縄文	横縦	肥厚気味		B器形	III	1	a	
-6	44	3覆号土	ミニ鉢復原	3.5	6.5	2.7	6.5	無文	横斜め	平縁			III	2	b	
-7	44	3覆号土	台付鉢口縁	(4.2)	10.1		10.1	I. IIa - 平行洗線 + 磨消縄文	横斜め	縦割突起4個			III	3	b	
-8	44	3覆号土	ミニ鉢復原	4.1	7.6	1.6	7.6	無文	横斜め		丸底		III	2	b	
-9	44	3覆号土	ミニ四脚付鉢復原	5.3	7.2	3.6	7.2	無文		小突起10個以上	四脚付	整形雑	III	2	a	脚端を欠く
50-10	44	3覆号土	ミニ長頸壺復原	6.8	2.3	1.3	4.8	I. IIa - 2条1組の平行入組状縄文 II - 洗線文(洗線浅い)			肩底	ミニチュア	III	3	a	
51	43	3覆号土	台付鉢復原	7.0	16.5	7.5	16.5	I. II - 平行入組状磨消縄文	特別念入	縦割突起5個 小突起相互配置5個	台高2cm		III	4	g	
-2	43	3覆号土	台付鉢復原	8.7	9.9	7.3	9.9	I. IIa. II - 平行磨消縄文		縦割突起4組	台高6cm	器内面一目形の刺突を 円形に配置	III	4	f	口縁欠
-4	47	3床号面	台付鉢口縁	(22.8)				I. IIa - 平行磨消羽状縄文	横				III	4	f	
-5	47	3覆号土	台付鉢口縁					I. IIa - 平行磨消羽状縄文					III	4	f	
-6	47	3覆号土	台付鉢口縁	(25.4)				I. IIa - 平行磨消羽状縄文	横				III	4	f	
-7	43	3覆号土	台付鉢台			9.8		II - 平行入組状磨消縄文			小型台付鉢		III	4	g	
-8	47	3覆号土	台付鉢台			13.2		II - 平行磨消羽状縄文	横				III	4	f	
52	43	3覆号土	台付鉢復原	9.3	11.6	8.4	11.6	IIa. II - 平行磨消縄文	横斜め 人念目	三条1組の如み	脚高6cm	器内面 - 縄文を円形に 施文	III	4	f	
-2	44	3床号面	台付鉢浅鉢台	12.2		12.8		II - 入組状磨消羽状縄文	横縦 斜め				III	4	g	
-3	43	3床号面	台付鉢台			11.2		II - 平行入組状磨消縄文			大型台付鉢		III	4	g	
-4	47	3覆号土	台付鉢口縁	(32.8)				I. IIa - 平行磨消羽状縄文	横縦				III	4	f	
-5	47	3床号面	台付鉢口縁					I. IIa - 平行磨消羽状縄文	横				III	4	f	

第13表 第3号遺構出土土器観察表(3)

単位 cm

図号 挿入 番号	図版 番号	遺構 名位	器形 現狀	器高	口径	底径	最大 径	外 底 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考	
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類		
53図 -1	43 -2	3覆 号土	注 II 底	現	8.2	12.0	12.0	IIb. II-平行入組状磨消縄文	入 念	注口・口縁部欠	上縁底	胴体部に貼瘤3個	III	4	g	
	43 -3	3床 号面	注 II 口 縁		(10.6)			I. IIa-平行磨消縄文		横割山形小突起 4個			III	4	f	
	43 -4	3覆 号土	注 II 口 縁		(10.6)			I. IIa-平行磨消縄文		横割山形小突起 4個			III	4	f	
	46 -47 -8	3覆 号土	注 II 胴 体					II-入組状磨消羽状縄文	不 良			胴体部瘤4個	III	4	g	
	47 -9	3覆 号土	台付鉢 胴 体					II-入組状磨消羽状縄文	横				III	4	g	
	47 -7	3覆 号土	深鉢 口 縁					I. IIa-入組状磨消縄文	横			A器形	III	4	g	
54図 -1	45 -1	3覆 号土	深鉢 口 縁		28.1		28.1	RL多条縄文	横 斜 め	平縁			III	1	a	
	45 -5	3覆 号土	深鉢 口 縁		(25.4)			LR多条縄文	横			B器形	III	1	a	
	45 -9	3覆 号土	深鉢 口 縁		(44.0)			LR縄文	横	平縁肥厚		煤状炭化物 B器形	III	1	a	
	45 -3	3覆 号土	深鉢 口 縁		(35.0)			RL単斜縄文	横 縦	肥厚		B器形	III	1	a	
	45 -6	3覆 号土	小鉢 口 縁		(14.0)			RL縄文	横			B器形	III	1	a	
	45 -7	3覆 号土	小鉢 口 縁		(15.0)			LR縄文	横			B器形	III	1	a	二次火焼有
	45 -8	3覆 号土	深鉢 胴 体					縄文(原体?)	横		平 底		III	1	b	
	45 -11	3覆 号土	深鉢 底			9.4		RL縄文(横、斜位)					III	1	a	
	45 -10	3覆 号土	深鉢 胴 体					LR多条縄文(不特定)	横			B器形	III	1	b	
55図 -1	45 -4	3覆 号土	深鉢 口 縁		(47.0)			LR単斜縄文	横 縦	肥厚		B器形	III	1	a	
	46 -3	3覆 号土	深鉢 口 縁		(21.0)			I. IIa-羽状縄文 II-入組状磨消羽状縄文	横				III	4	j	
	45 -2	3覆 号土	深鉢 口 縁		(23.0)			LR多条縄文	横			B器形	III	1	a	二次火焼有
56図 -1	46 -2	3覆 号土	台付鉢 口 縁		(32.0)			I. IIa-平行磨消羽状縄文	横 縦				III	1	f	

第14表 第3号遺構出土土器観察表(4)

単位 cm

挿図 番号	図版 番号	遺構 名位	器形 現状	器高	口径	底径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考	
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類		
56	46	3覆 -2-5 号土	壺 胴 体				21.0	II-入組状磨消羽状縄文	横				III	4	g	
	46	3覆 -3-4 号土	深鉢 底			(6.7)		II-入組状磨消羽状縄文			(底面 欠)		III	4	g	二次火熱有
57		3覆 -1 号土	深鉢 口 縁			(45.5)		RI.単節斜縄文	横 縦	平縁肥厚		B器形	III	1	a	

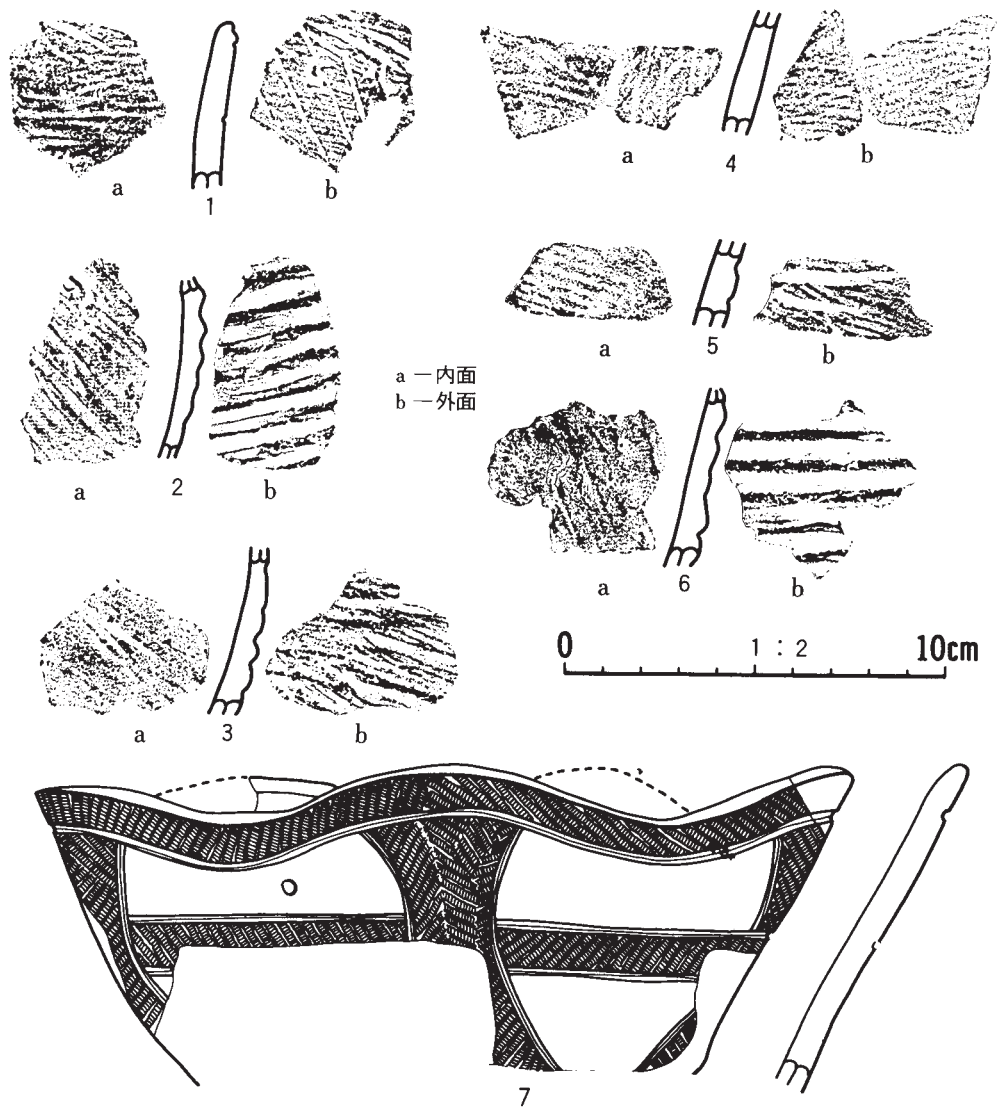
第15表 第3号遺構出土土器観察表(5)

単位 cm

挿図 番号	図版 番号	遺構 名位	器形 現状	器高	口径	底径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
58	47	3覆 -1-10 号土	深鉢 口 縁		22.4			I-斜沈線(鋭角的) IIa-斜位連続沈線	鋭角的	斜位 切り込み 内面沈線	内面条痕 黄橙色・焼成堅緻		I	3	
	47	3覆 -2-11 号土	深鉢 胴 体					平行・格子状の微隆起線文			外面赤褐・暗赤褐 内面煤状炭化物		I	3	
	47	3覆 -3-13 号土	深鉢 胴 体					平行・格子状の微隆起線文			外面赤褐・暗赤褐 内面煤状炭化物		I	3	
	42	3覆 -4-14 号土	深鉢 胴 体					条痕文	条痕				I	3	P.211 P.273 接合
	47	3床 -5-12 号面	深鉢 胴 体					条痕文			外面赤褐・暗赤褐 内面煤状炭化物		I	3	
	47	3床 -6-15 号面	深鉢 胴 体					条痕文			外面赤褐・暗赤褐 内面煤状炭化物		I	3	
	46	3覆 -7-1 号土	深鉢 口 縁			(20.5)		I. IIa-連弧状磨消縄文	横	肥厚	煤付 口縁波状 花卉形 5		III	4	d

第16表 第6号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群 (早期)					第 II 群(前期)			第 III 群 (後期)				第 IV 群(晩期)				
	1類 (貝殻 文系)	2類 (蛋状 A II)	3類 ムシリ I	4類 (条痕 文系)	5類 赤御 堂式	1類	2類		1類	2類	3類	4類		1類	2類	3類	
現 状						計		計	縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三文文	羊歯 状文	擦糸 縄文	計
完 形																	
復 原																	
部 位	口 縁 部								2			2	4				
	胴 体 部			3		3			6			2	8				
	底 部																
	注 口・把手 不 明																
計			3		3			8			4	12					
個 体 数			1		1			8			4	12					

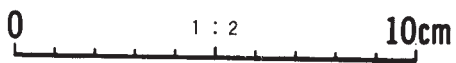
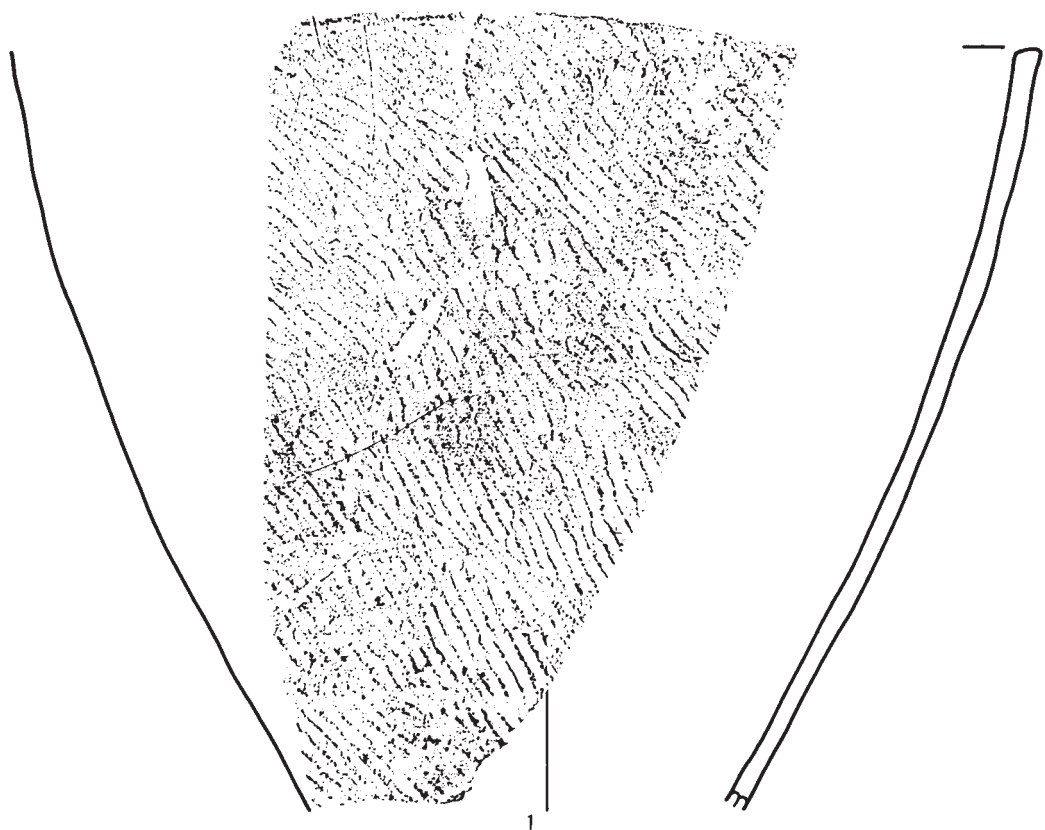


第58図 第3号遺構出土土器実測拓影図 (10)

第17表 第6号遺構出土土器観察表

単位 cm

棟号	図版番号	遺構名	器形	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面調整	その他の特徴			分類		備考	
										口唇部	底部	その他	群	類		
59	48-1	6底号面	深鉢口縁		(25.0)			R.L. 浅筋縄文	横				III	1	a	
	48-2	6覆号土	小鉢口縁		(13.0)			I. IIa - 無文 II - 平行彫消縄文	横				III	4	i	
	48-3	6覆号土	深鉢胴体					三日状連続刺突文+微隆起線文	浅い条痕			外面-黄橙色・黒色炭化物附着 内面-灰黒色・砂小礫混合	I	3		3片接合



第59图 第6号遺構出土土器拓影图

第7号遺構出土土器(図版48)

第 群1、2、4類土器が、完形品を含めて48個体58点が、床面及び覆土から出土した(第59、60図)。分類別、部位別の数量と主な土器の観察所見は、第18~19表にまとめて示した。

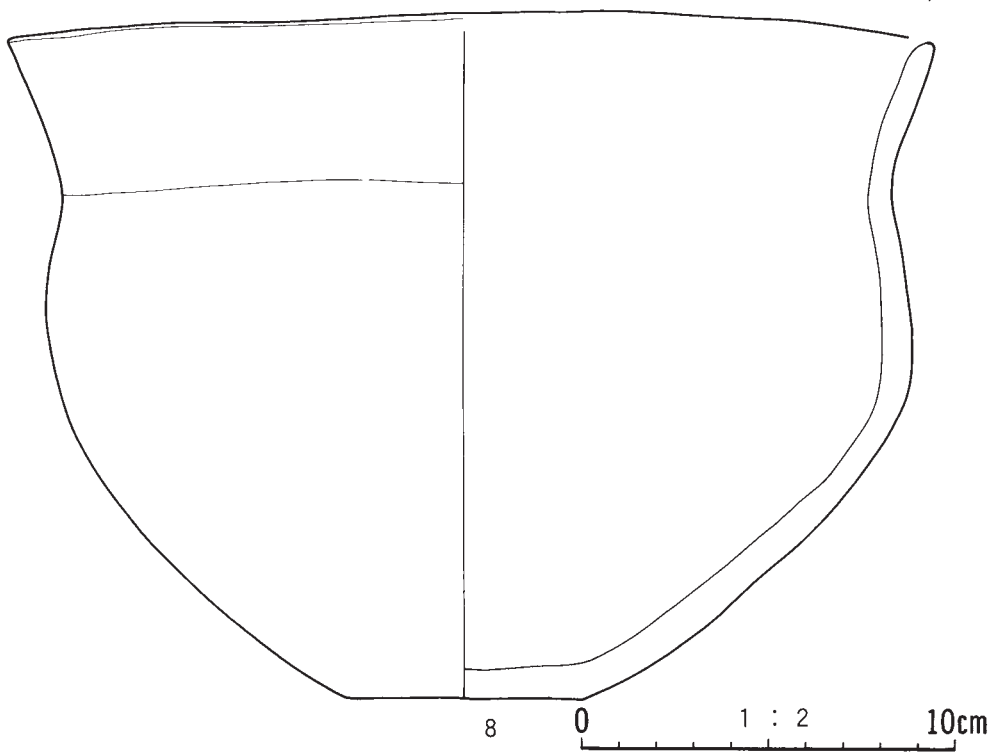
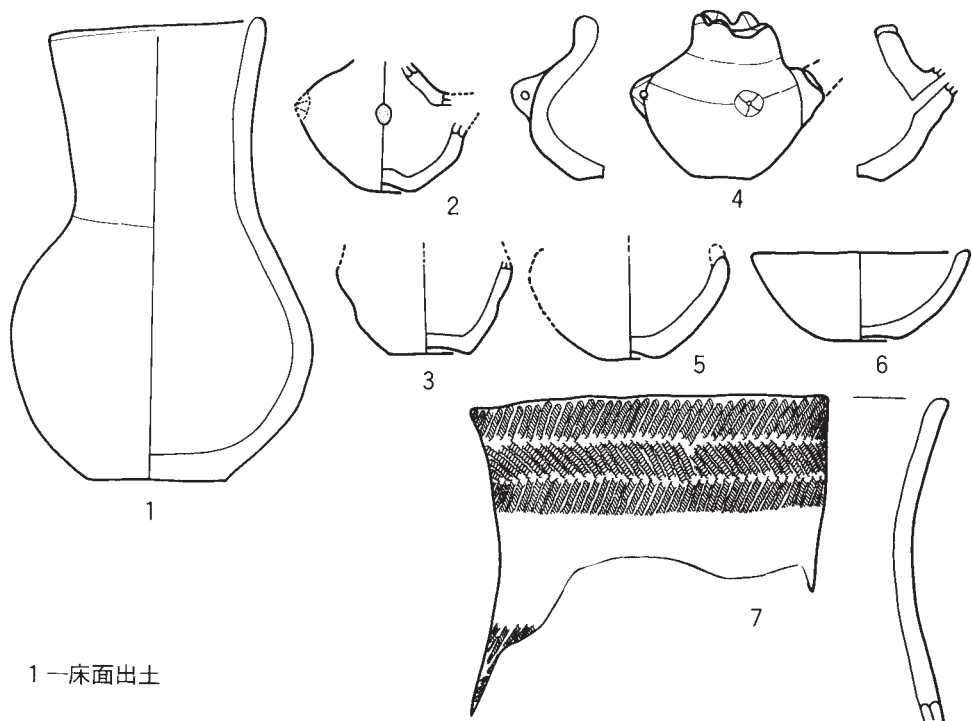
完形品と復原して器形の全体を把握できる土器が7個出土した。ミニチュア形土器と無文土器が多いことが特徴である。

第18表 第7号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第I群(早期)					第II群(前期)		第III群(後期)				第IV群(晩期)					
	1類	2類	3類	4類	5類	1類	2類	1類	2類	3類	4類	1類	2類	3類			
	(貝殻 文系)	(蜜沢 A II)	ムシ リ I	(糸袋 文系)	赤御 堂式	早稲田 V類	( )	十 腰 内 IV 群				大洞 B式	大洞 BC式				
現 状								計				計	三叉文	羊歯 状文	捲糸 文	計	
完 形																	
復 原																	
部 位	口 縁 部																
	胴 体 部																
	底 部																
	注口・把手																
不 明																	
計																	
個 体 数																	

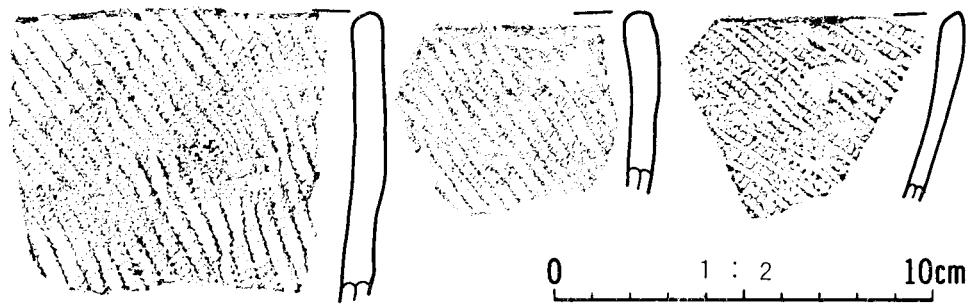
第19表 第7号遺構出土土器観察表(1)

挿図 番号	図版 番号	遺構 名位	器形 現 状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 縁 部	底 部	そ の 他	群 類	種 類	
60図 -1	48 -4	7床 号面	長頸壺 完形	12.3	5.8	3.6	8.1	無文	横 彩の			二尖火熱有	III	2 b	
-2	48 -5	7床 号面	ミニ鉢 底			1.3	4.8	無文	雑 裾付3個 (割離)				III	1 a	
-3	48 -6	7覆 号土	ミニ鉢 底	(2.5)		1.8		無文	横 斜め				III	2 b	
4	48 -7	7覆 号土	ミニ鉢 完形	4.0	2.1	1.4	4.5	無文	横 斜め				III	2 a	注口部欠
-5	48 -8	7覆 号土	ミニ鉢 復原	3.3	(5.8)	1.8	5.8	無文	雑	小突起有 (割離)			III	2 a	
-6	48 -9	7覆 号土	ミニ鉢 復原	2.6	(6.2)	2.8	(6.2)	無文	雑				III	2 b	
-7	48 -10	7覆 号土	壺 口縁		(9.5)			I. IIa - 平行縞面弱法縄文	横				III	4 f	
-8	48 -11	7覆 号土	深鉢 復原	18.5	24.6	6.2	24.9	無文	縦 斜め			B器形	III	2 b	



第60图 第7号遺構出土土器実測図(1)





第61図 第7号遺構出土土器拓影図(2)

第19表 第7号遺構出土土器観察表(2)

単位 cm

地層 番号	図版 番号	遺構 名位	器形 現状	器 高	L1 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
61図 -1	48 -12	7覆 号土	深鉢 口縁		(26.0)			RL縄文	横 入念	肥厚		B器形	III	I a	
-2	48 -13	7覆 号土	深鉢 口縁		(21.0)			RL縄文	横	肥厚		B器形	III	I a	
-3	48 -14	7覆 号土	深鉢 口縁		(22)			RL縄文に異節混る	横 入念	肥厚		B器形	III	I e	

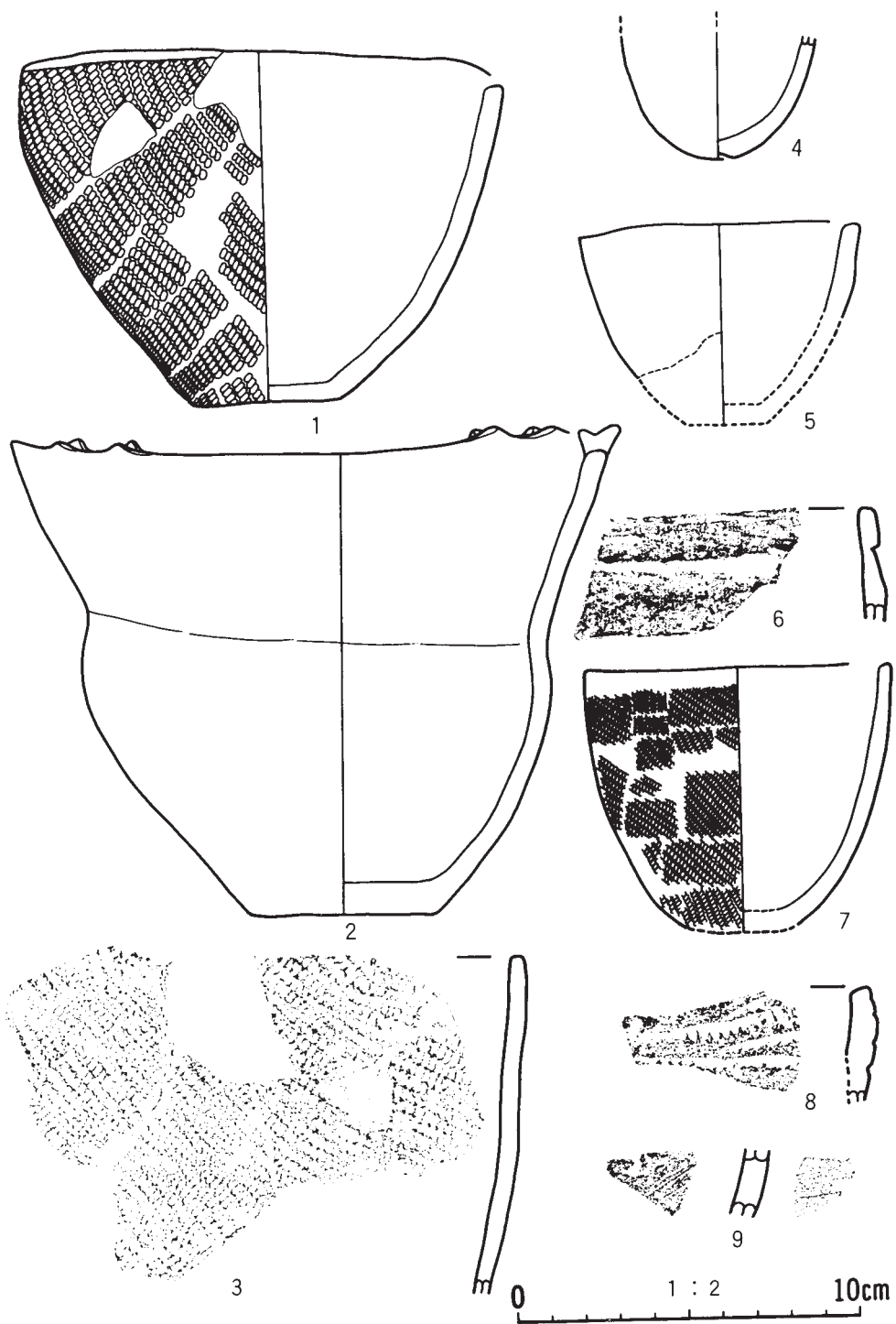
第10号遺構出土土器(図版48~50)

第 群 2類、3類土器4片、第 群 1、2、4類土器が25個体30点出土した(第62図)。分類別、部位別の数量及び主な土器の観察表は、第20表と第21表に示した。

遺構の約50%より調査していないため土器組成は不確実な要素を含んでいる。また、第 群土器も4片含まれている。C-4、5グリッド出土の土器と接合、又は同一個体の土器がみられる。主体は本書における第 群土器である。

第20表 第10号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群(早期)					第 II 群(前期)		第 III 群(後期)				第 IV 群(晩期)				
	1類 (貝殻 文系)	2類 (黄沢 A II)	3類 ムシ リ I	4類 (糸俵 文系)	5類 赤御 堂式	1類 早稲田 V類	2類 ( )	1類	2類	3類	4類	1類 大洞 B式	2類 大洞 BC式	3類		
現 状					計		計	縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三叉文	羊歯 状文	捻糸 縄文	計
完 形																
復 原																
部 位	口 縁 部		1			1			2	3			5			
	胴 体 部			3		3			15	9		1	25			
	底 部															
	注口・把手 不 明															
計		1	3		4			17	12		1	30				
個 体 数		1	3		4			13	11		1	25				



第62図 第10号遺構出土土器実測拓影図

第21表 第10号遺構出土土器観察表

単位 cm

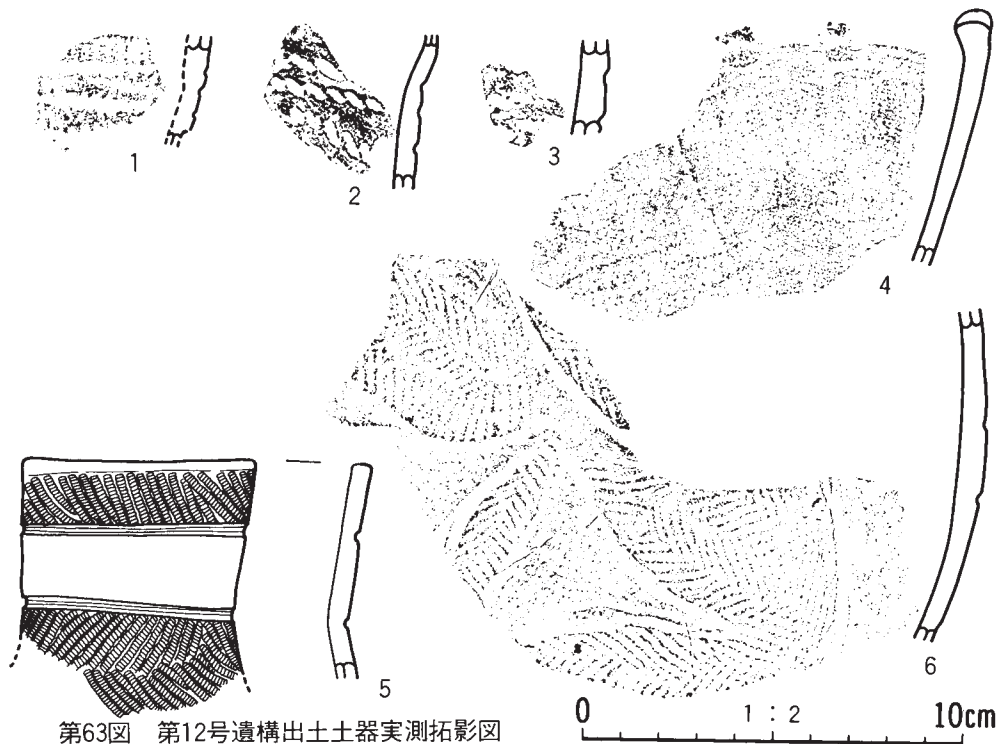
図版 番号	図版 番号	遺器 名	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 径 部	底 部	そ の 他	群	類	
62図 -1	50 -1	10覆 号土	小鉢 復原	9.6	13.6	4.3	14.2	RL縄文	横 斜め			B器形	Ⅲ	1 a	二次火焼有
-2	49 -2	10覆 号土	小鉢 復原	13.6	17.6	5.4	18.2	無文	横 斜め 入念	2個1組構割 小突起4組	上げ底	二次火焼有 A器形	Ⅲ	2 a	
-3	48 -15	10覆 号土	深鉢 口縁		(22.0)			RL縄文	横 縦			B器形	Ⅲ	1 a	
-4	48 17	10覆 号土	ミニ密 底	(4.0)		1.0		無文	横		上げ底		Ⅲ	2 b	
-5	48 -16	10覆 号土	ミニ鉢 口縁	(5.0)	8.4		8.4	無文	横			平縁	Ⅲ	2 b	
-6	48 -19	10覆 号土	深鉢 口縁		(21.0)			無文(折返し沈線1条)	横	折返し状		B器形	Ⅲ	2 b	
7	48 -18	10覆 号土	小鉢 口縁		(7.8)			RL縄文(斜位一縦位変化)	横				Ⅲ	1 a	
-8	48 -20	10覆 号土	深鉢 底縁		(24.4)			貝殻複雑横位・斜位文差 押引き文	剥離	斜位 連続刺突痕		粗砂微量の縦縞を含む 暗赤褐色・焼成・堅緻	I	2	
-9	48 -21	10覆 号土	深鉢 胴体					間隔の狭い条痕	条痕			黄褐色・灰褐色 焼成・堅緻	I	3	

第12号遺構出土土器(図版49、50)

覆土から第 群2類1片、第 群1類とみられるもの2片、第 群1、2、4類土器が6片4個体出土した(第63図)。分類別、部位別の数量及び土器観察結果は第22表、第23表に示した。

第22表 第12号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群(早期)					第 II 群(前期)			第 III 群(後期)				第 IV 群(晩期)				
	1類 (貝殻 文系)	2類 (蜜沢 A II)	3類 ムシ リ I	4類 (条痕 文系)	5類 赤御 堂式	1類 早稲田 V類	2類 ( )		1類 十 内	2類 内	3類 IV 群	4類		1類 大洞 B式	2類 大洞 C式	3類	
現 状					計			計	縄文	無文	沈線文	磨 消 文	計	三叉文	羊齒 状文	撚系 縄文	計
完 形																	
復 原																	
部 位	口 縁 部										1		1				
	胴 体 部		1			1	2	2	3			2	5				
	底 部																
	注 口・把手																
不 明																	
計		1			1	2		2	3	1		2	6				
個 体 数		1			1	2		2	2	1		1	4				



第63図 第12号遺構出土土器実測拓影図

第23表 第12号遺構出土土器観察表

単位 cm

採回 番号	図版 番号	遺構 名位	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 地 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群 類		
63図 -1	49 -4	12覆 号土	尖 深 胴 体					貝殻縞線押引文	刻 離			暗赤褐色・焼成良 粗砂・小礫を含む	I	3	
-2	49 -5	12覆 号土	深 鉢 胴 体					0段多条LR縄文	横			赤褐色・黄褐色・粗砂 浮石層を含む。繊維微 量含む	II	1	
-3	49 -6	12覆 号土	深 鉢 胴 体					0段多条LR縄文	横			火熱有	II	1	
-4	49 -2	12覆 号土	台付鉢 口 縁		(24.8)			無文	横 窪	小突起			III	2 a	
-5	50 -2	12覆 号土	深 鉢 口 縁		6.5			I. IIa - 平行磨消羽状燃糸文	横			平 縁	III	4 g	
-6	49 -3	12覆 号土	深 鉢 胴 体					II - 人組状磨消縄文	横				III	4 h	

第13号遺構出土土器 (図版49~52)

第 群 1 類とみられる土器 3 片、第 群 1 ~ 4 類土器537点429個体及び第 群 1 類17片 1 個体が出土した。分類別、部位別の数量及び土器観察結果は、第24表及び第25表に示した。第 群土器には、完形品、復原して器形を把握できるものが 6 個体 (第64~70図) あるが、いずれも覆土から出土した。

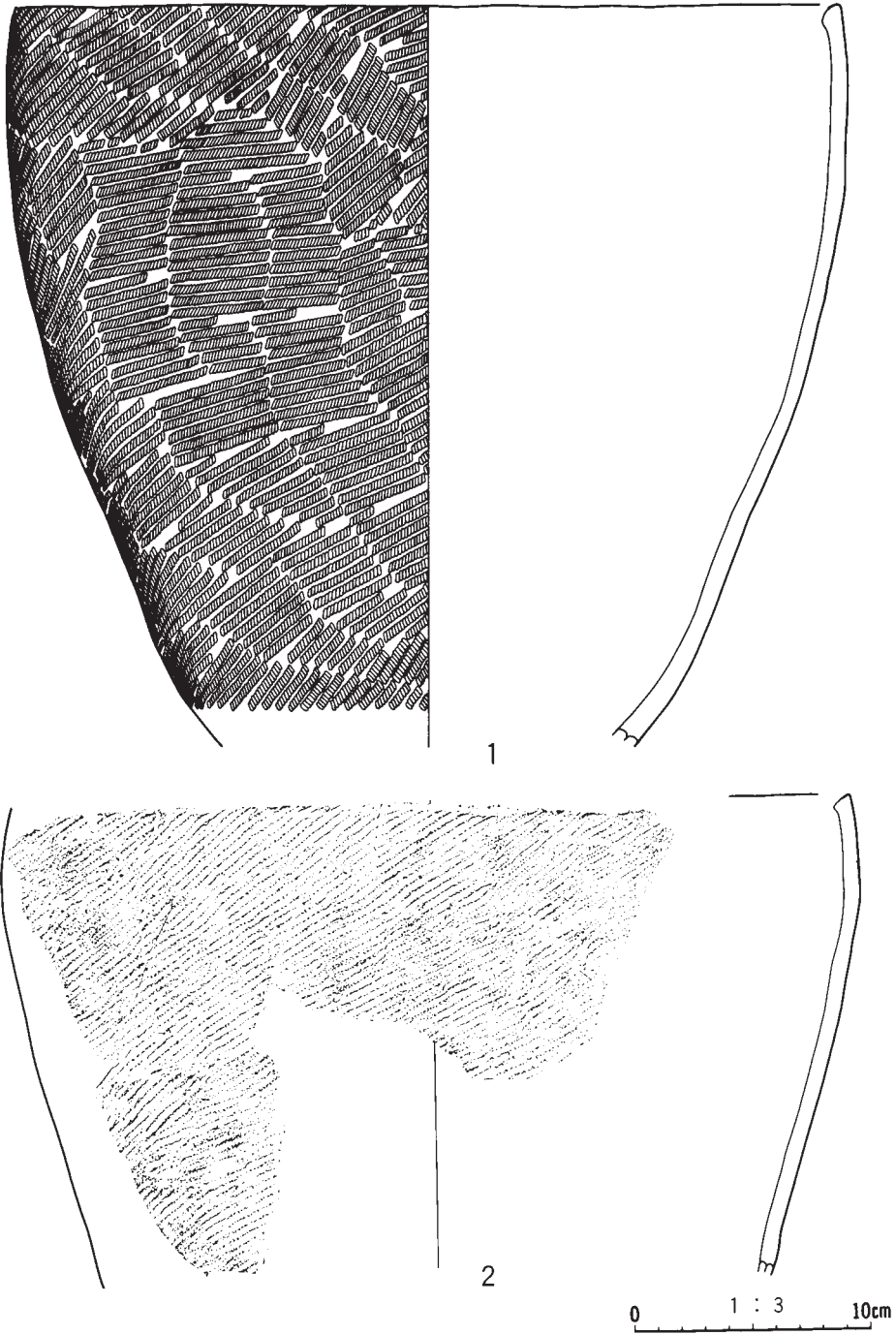
第24表 第13号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群 (早期)					第 II 群 (前期)			第 III 群 (後期)				第 IV 群 (晩期)				
	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	1 類	2 類		1 類	2 類	3 類	4 類		1 類	2 類	3 類	
	(貝殻 文系)	(蛸状 A II)	ムシ リ I	(条痕 文系)	赤 御 堂式		早稲田 V 類	( )		十 腰 内 IV 群				大洞 B 式	大洞 BC 式		
現 状						計		計	縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三叉文	羊 状文	捺糸 縄文	計
完 形																	
復 原									3	1			4				
部 位	口 縁 部								<20> 23	3	1	<2> 3	<22> 30	<1> 1			<1> 1
	胴 体 部					3	3	<275> 379	26	2	45	<275> 452	16				16
	底 部							<12> 13			<2> 6	<14> 19					
	注口・把手 不 明								36				36				
計						3	3	451	29	3	54	537	17				17
個 体 数								343	32	3	51	429	1				1

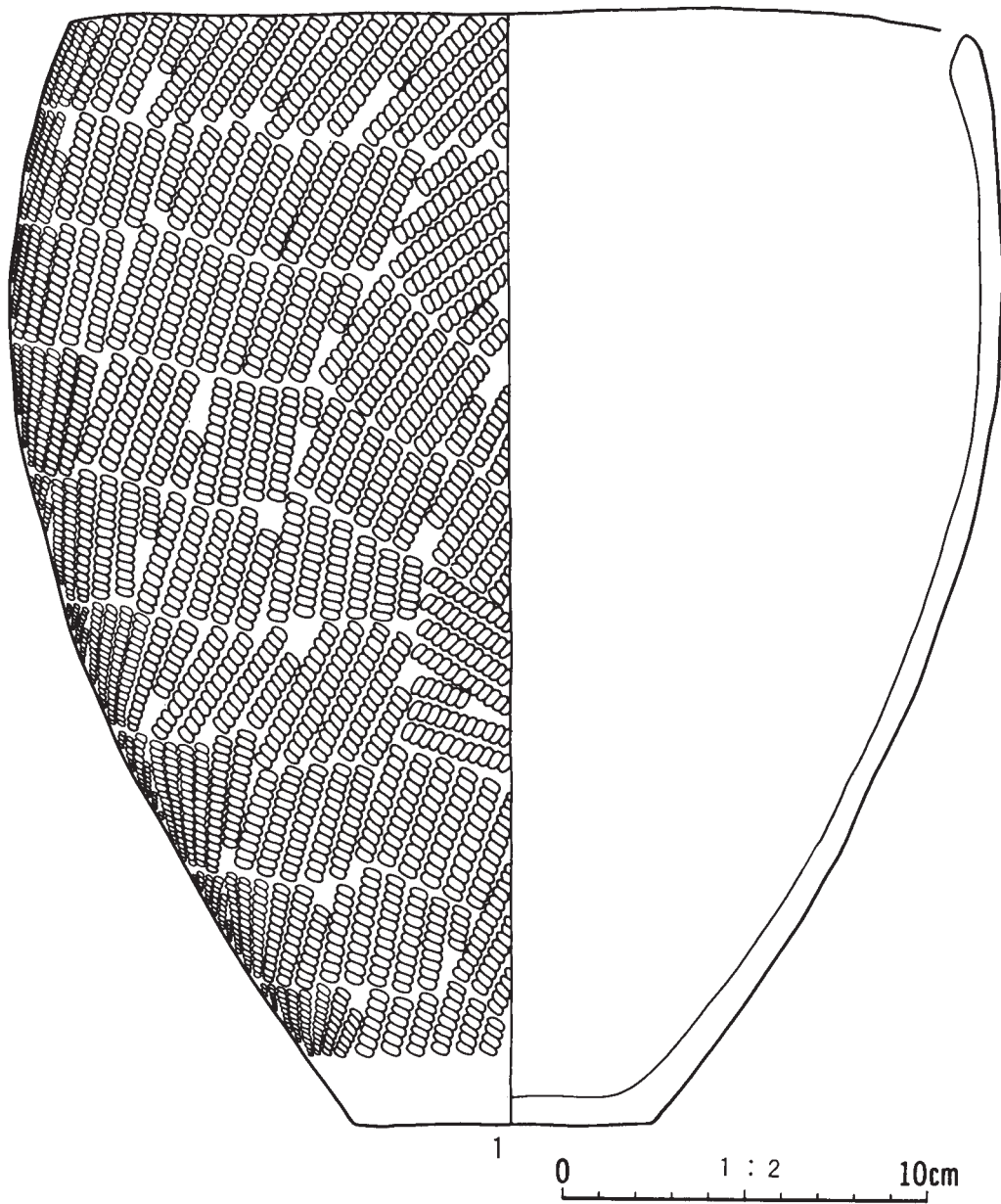
第25表 第13号遺構出土土器観察表(1)

単 位 cm

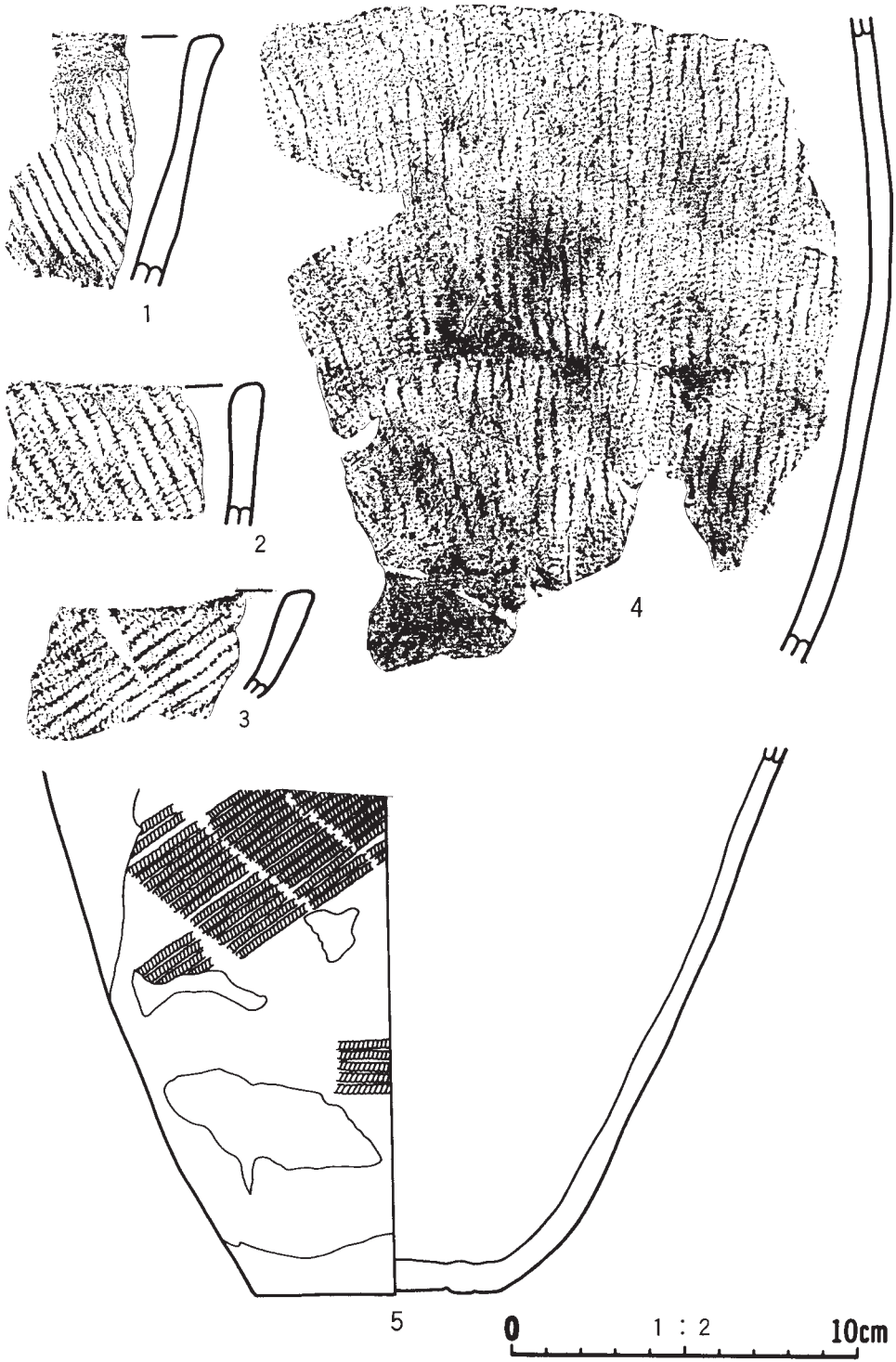
種 番	図 番	遺 層 名	器 形 現 状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
64	51	13	深鉢 口縁	33.0	35.5			LR 多条縄文 (単斜縄文)	横 斜め入	肥厚		底部欠	III	1 a	
	51	13	深鉢 口縁		(32.5)			LR 縄文	横 縦	肥厚		B器形	III	1 a	
65	51	13	深鉢 復原	30.6	24.9	8.3	27.3	LR 縄文	横 斜め	肥厚		煤付 B器形	III	1 a	
66	49	13	深鉢 口縁					RL 縄文	横			B器形	III	1 a	
	49	13	深鉢 口縁		(27.0)			RL 縄文	横	肥厚		B器形	III	1 a	
	49	13	深鉢 口縁		(20.6)			LR 多条縄文	横			B器形	III	1 a	
	51	13	深鉢 胴体					RL 縄文 (斜位施文-縦走縄文)	横 縦			二次火焼有 B器形	III	1 a	
	50	13	深鉢 底			8		LR 縄文 (部位により横斜位に変化)	横 斜め				III	1 a	



第64図 第13号遺構出土土器実測拓影図(1)

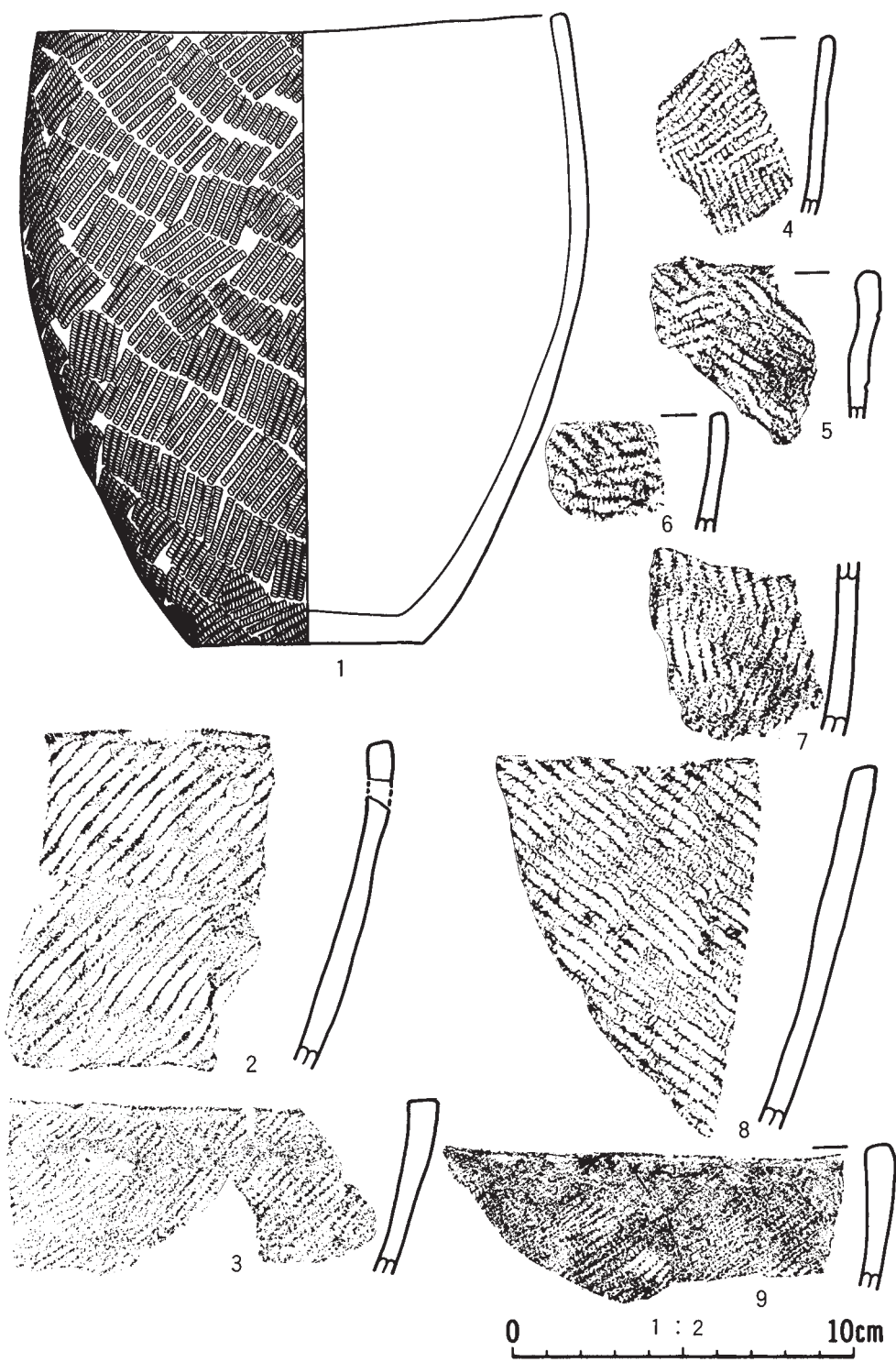


第65図 第13号遺構出土土器実測図(2)

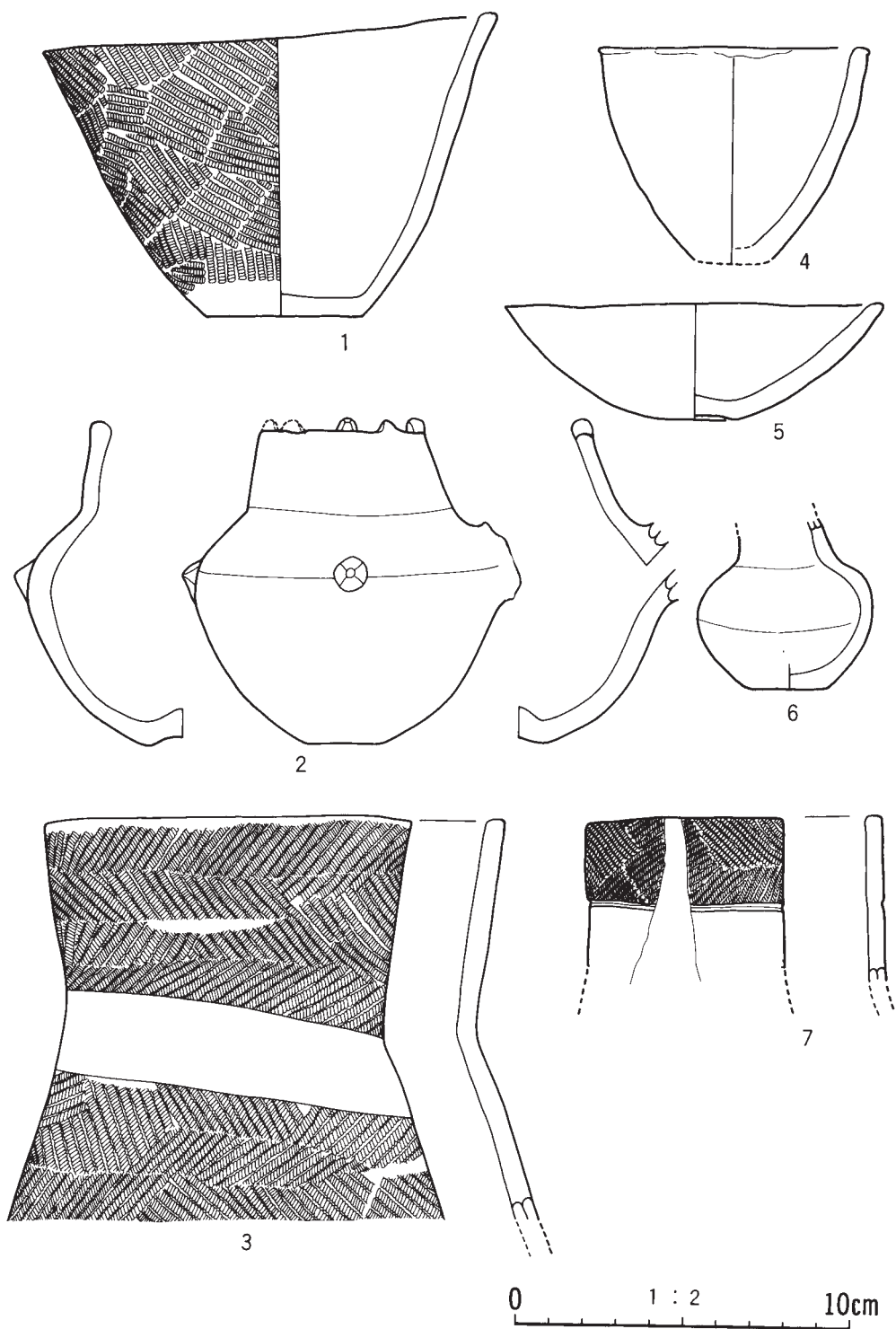


第66图 第13号遺構出土土器实测拓影图 (3)

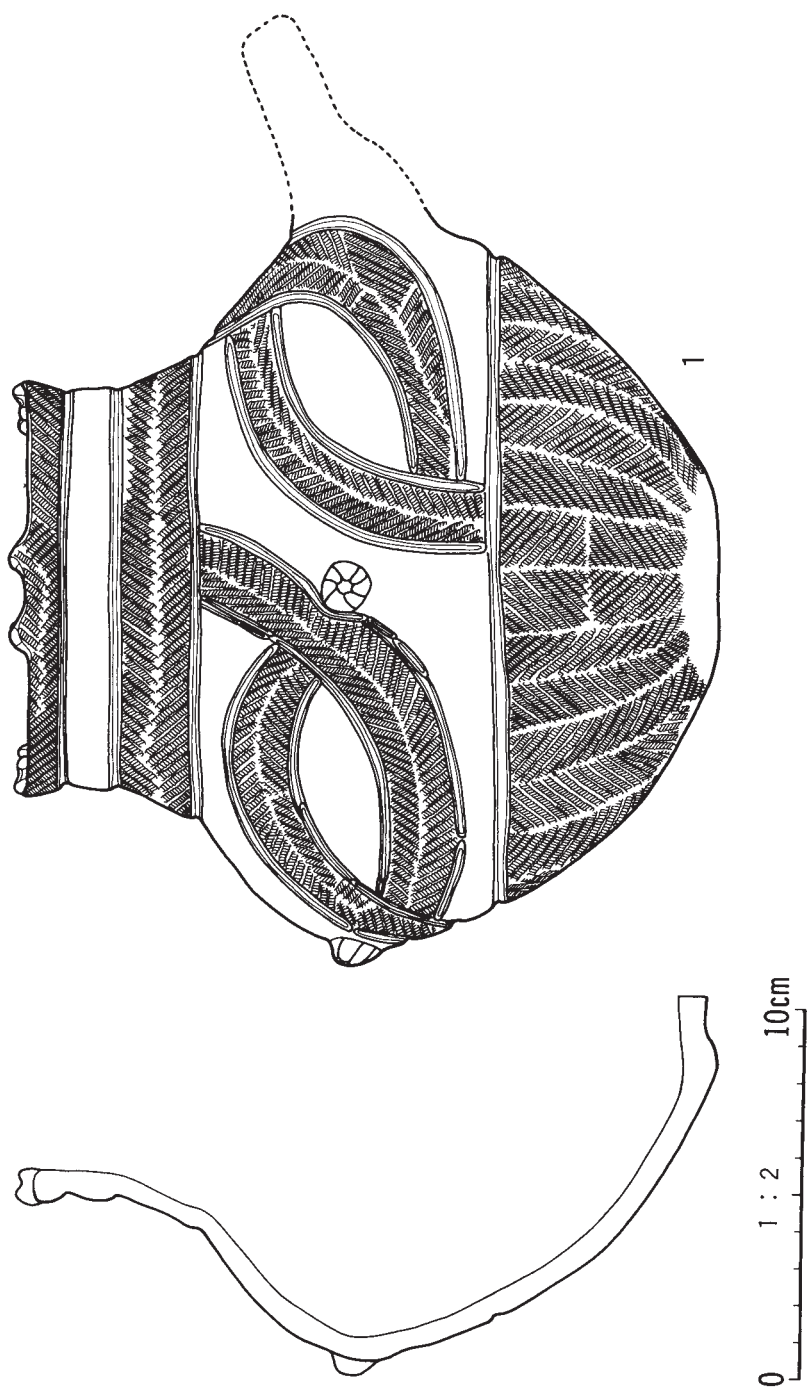




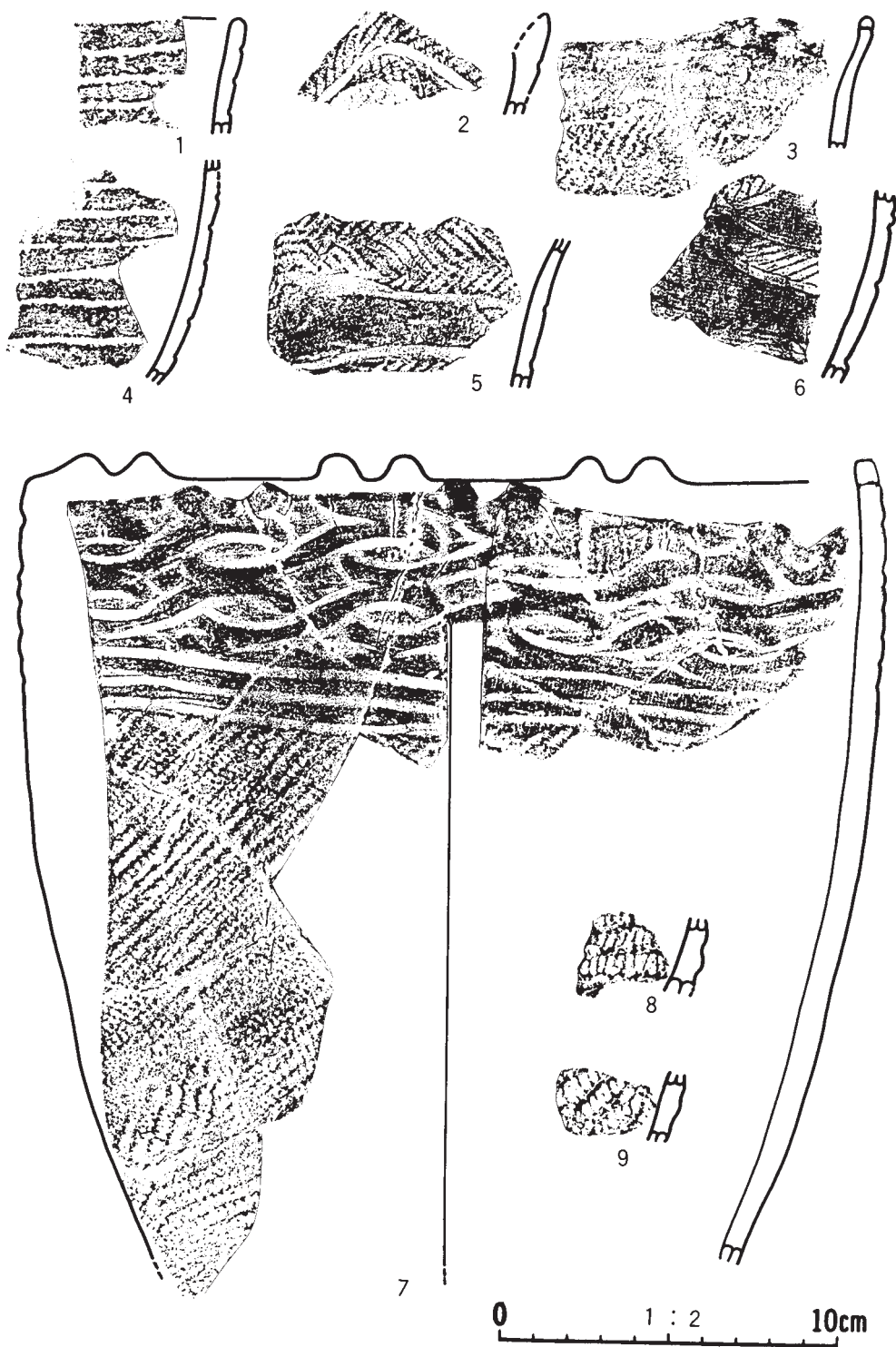
第67图 第13号遺構出土土器実測拓影图 (4)



第68图 第13号遺構出土土器実測図 (5)



第69図 第13号遺構出土土器実測図（6）



第70图 第13号遺構出土土器拓影图 (7)

第26表 第13号遺構出土土器観察表(2)

単位 cm

挿図 番号	図吹 番号	遺層 名位	器形 現 状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
67図 -1	51 -2	13覆 号土	小鉢 復原	18.5	15.0	6.5	16.0	LR縄文	横 (接合 痕残)		上唇底 気味	外面煤付着	Ⅲ	1 a	
-2	49 -13	13覆 号土	深鉢 口縁		(29.8)			LR縄文	横	肥厚気味		補修孔有 B器形	Ⅲ	1 a	
-3	49 -11	13覆 号土	深鉢 口縁		(25.3)			LR縄文	横			煤付着 B器形	Ⅲ	1 a	
-4	52 -4	13覆 号土	深鉢 口縁					幅広い羽状縄文(原体2種)					Ⅲ	1 d	
-5	49 -8	13覆 号土	深鉢 口縁					RL縄文(不特定方向)	横				Ⅲ	4 c	
-6	52 -3	13覆 号土	深鉢 口縁					RL縄文(施文方向不特定)					Ⅲ	1 b	
-7	49 -12	13覆 号土	深鉢 胴体					RL縄文(施文方向不特定)					Ⅲ	1 b	
-8	52 -1	13覆 号土	深鉢 口縁		(32.2)			RL多条縄文	横	肥厚気味		B器形	Ⅲ	1 a	
-9	52 -2	13覆 号土	深鉢 口縁		(33.6)			LR縄文	横			B器形	Ⅲ	1 a	
68図 -1	50 -8	13覆 号土	小鉢 復原	8.4	13.6	4.6	13.6	RL多条縄文(回転幅広い)	横 斜め			二次火焼有 B器形	Ⅲ	1 a	
-2	50 -6	13覆 号土	注口 完形	9.6	4.9	2.0	10.2	無文(研磨)	横 斜め	小突起5個	押し上 げ底	胴部縮3個 縮2個と注口部を 欠く	Ⅲ	2 a	
-3	50 -10	13覆 号土	長頸壺 口縁	(12.0)	12.5			I. IIa-平行磨消羽状縄文	横				Ⅲ	4 f	
-4	52 -13	13覆 号土	ミニ鉢 口縁		8.6			無文	横				Ⅲ	2 b	
-5	52 -10	13覆 号土	浅鉢 復原	4.2	(12.6)	2.8	(12.6)	無文	横 念入				Ⅲ	2 b	
-6	50 -9	13覆 号土	ミニ 長頸壺 底	現 (5.2)		2.2	5.3	無文	横 斜め		上唇底 気味	口縁欠く	Ⅲ	2 b	
-7	50 -3	13覆 号土	壺 口縁		6.0			I. IIa-平行磨消羽状縄文	横 端				Ⅲ	4 f	
69図 -1	50 -7	13覆 号土	注口 復原	19.0	11.5	3.5	19.5	I. IIa-平行磨消+入組羽状縄文 II-縦位刻状縄文	横	2個1組 横割小突起4個	上唇底	胴体部貼縮3個	Ⅲ	4 c	
70図 -1	52 -6	13覆 号土	小鉢 口縁		(8.0)			I. IIa-平行沈線3条	横				Ⅲ	3 b	

第26表 第13号遺構出土土器観察表(3)

単位 cm

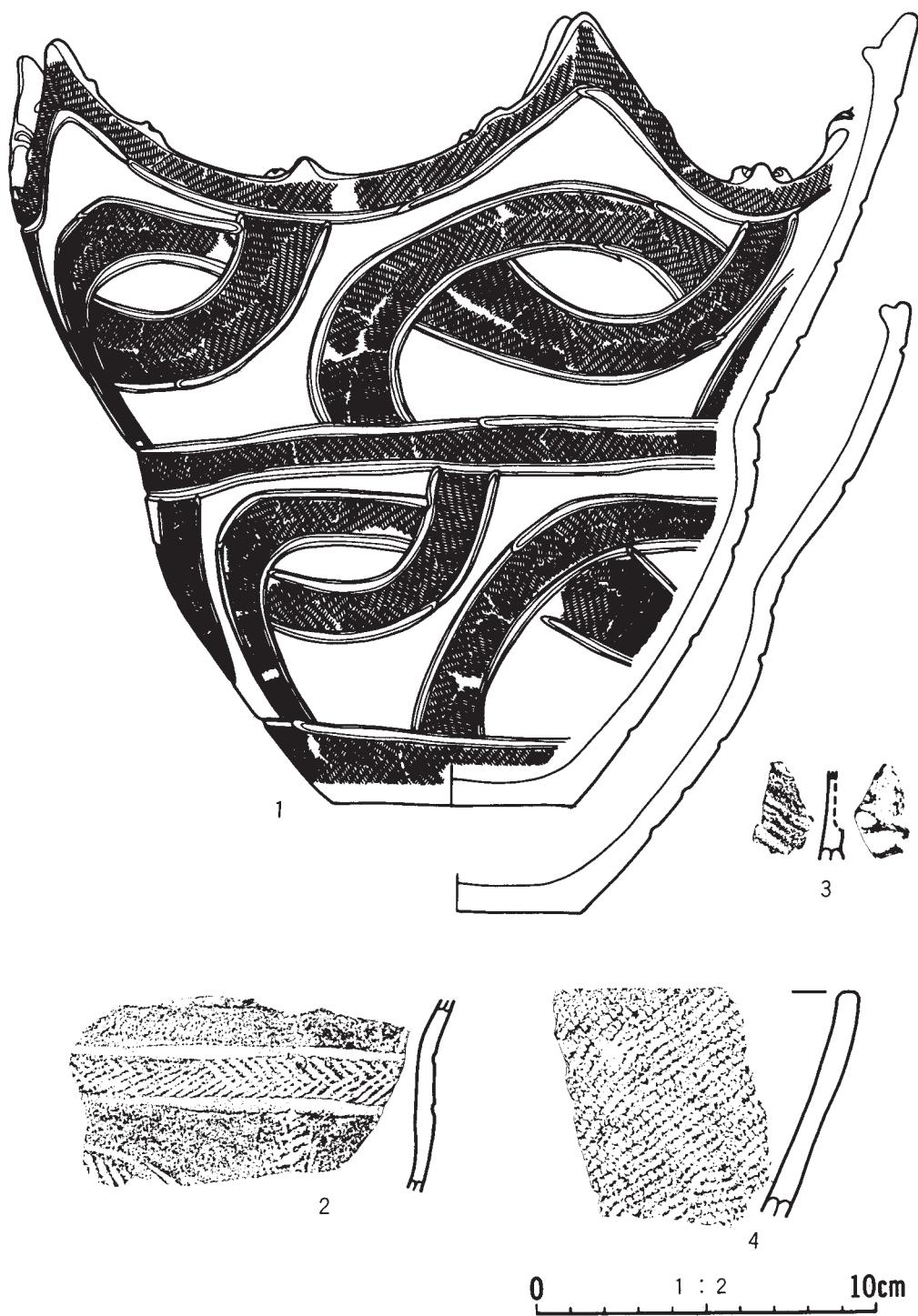
挿図 番号	図版 番号	遺層 名位	器形 現狀	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面 調整	その他の特徴			分類		備考
										口唇部	底部	その他	群	類	
70	52	13覆 号土	深鉢 口縁					I. IIa - 入組状磨消縄文	横	肥厚	A器形 大波状口縁	III	4 g		
	52	13覆 号土	台付鉢 口縁		(19.2)			I - 平行磨消 IIa - LR縄文		肥厚なし 2個1組小突起		IV	3	III 4 f 分	
	52	13覆 号土	小鉢 胴体					IIa. II - 平行沈線6条			上げ底	III	3 b		
	52	13覆 号土	深鉢 胴体					II - 平行磨消羽状縄文				III	4 f		
	52	13覆 号土	深鉢 胴体					II - 入組状磨消縄文	横			III	4 h	炭化物付着	
	52	13覆 号土	深鉢 口縁		(25.0)			I. II - 三又文+LR縄文	横	二個1組 山形小突起		IV	1		
	52	13覆 号土	深鉢 胴体					O段多条LR縄文				II	1		
	52	13覆 号土	深鉢 胴体					O段多条LR縄文			縦線混入	II	1		

第14号遺構出土土器 (図版53)

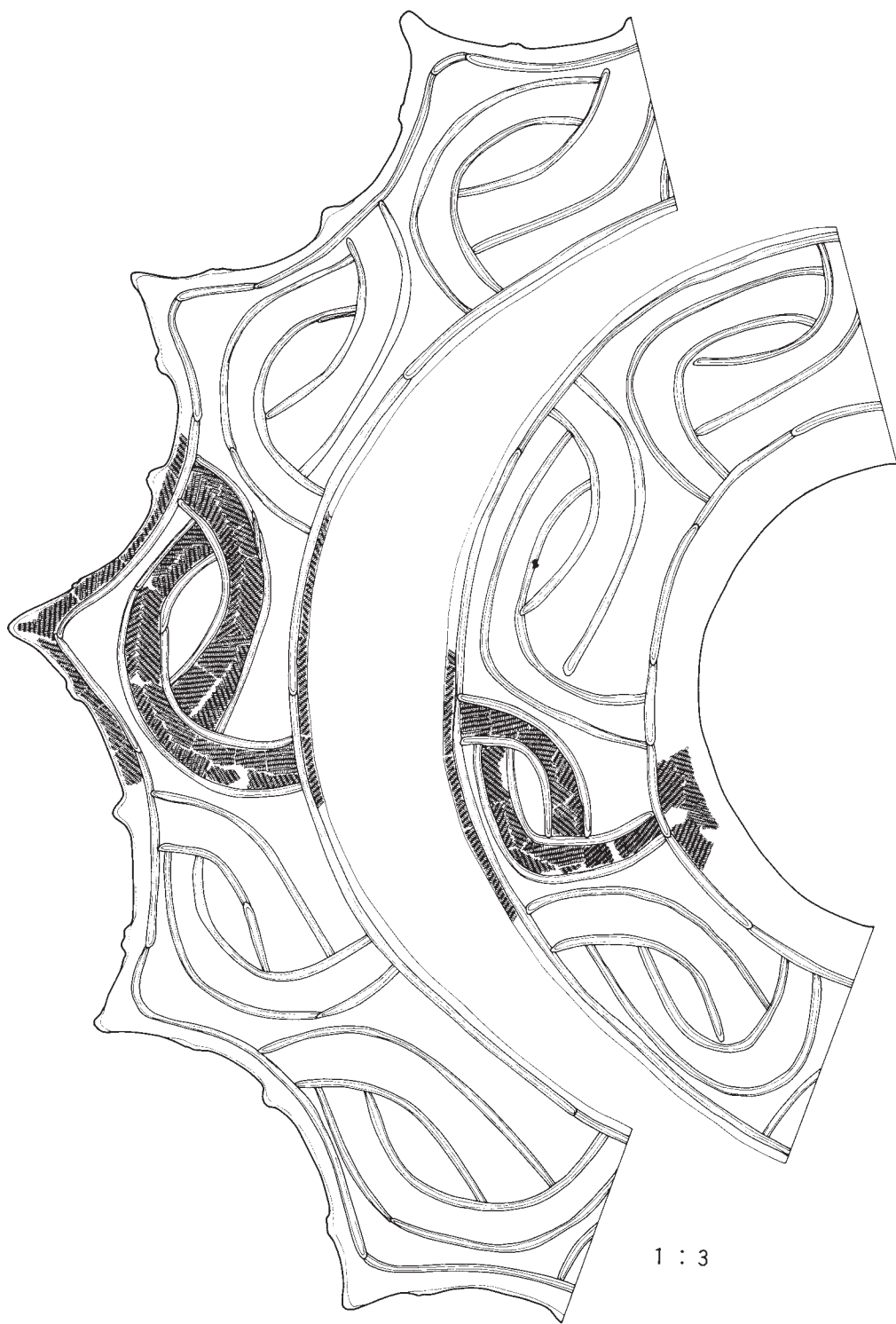
床面と覆土から、第 群3類と第 群土器が出土した(第71~74図)。分類別、部位別の数は第27表に、また、実測、拓影図の土器観察表は第28表に示した。器形の全体を把握できる土器は、床面上から出土した第 群土器1点(第71図1、72図1、73図1)である。

第27表 第14号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群 (早期)					第 II 群(前期)			第 III 群 (後期)				第 IV 群(晩期)				
	1類 (貝殻 文系)	2類 (蜜沢 A II)	3類 ムシ リ I	4類 (条痕 文系)	5類 赤御 堂式	1類 早稲田 V類	2類 ( )		1類	2類	3類	4類	類	1類	2類	3類	
現 状					計			計	縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三又文	羊歯 状文	捲糸 縄文	計
完 形																	
復 原												1	1				
部 位	口 縁 部								7				7				
	胴 体 部			1		1			16	2		3	21				
	底 部								1				1				
	注 口・手 柄																
不 明																	
計			1		1				24	2		3	29				
個 体 数			1		1				15	2		4	21				

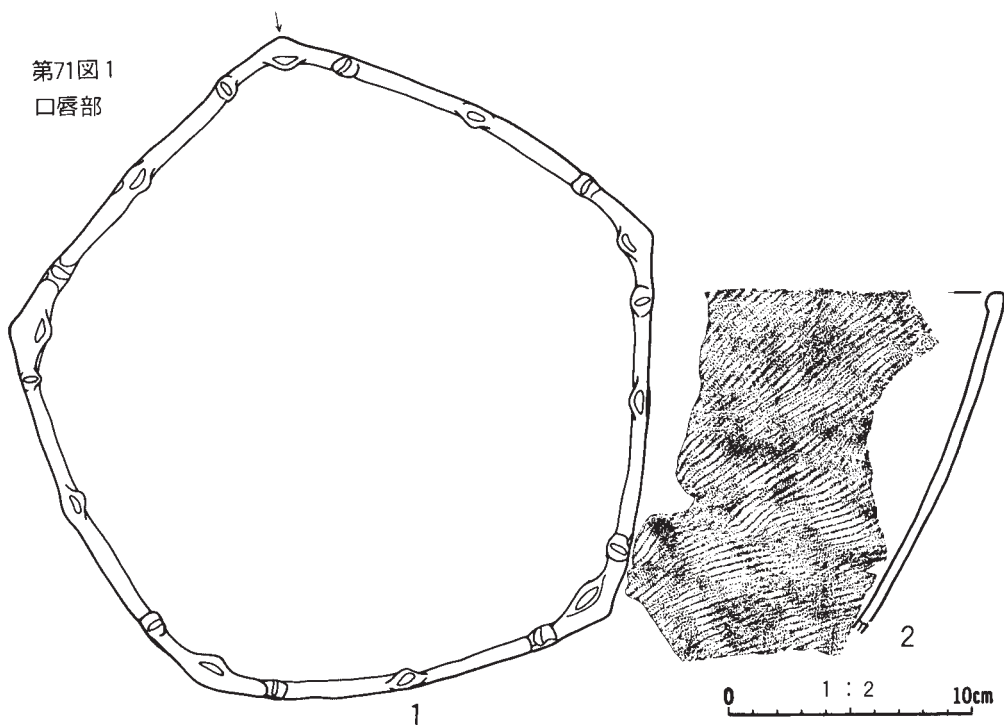


第71图 第14号遺構出土土器実測拓影图 (1)



第72図 第14号遺構出土土器展開図(2)





第73図 第14号遺構出土土器拓影図(3)

第28表 第14号遺構出土土器観察表

単位 cm

挿図 番号	図版 番号	遺構 名位	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口唇部	底部	そ の 他	群 類	個 数	
71 -1 72 -1	53 -1	14棟 号面	深鉢 復原	23.8	27.5	7.5	27.5	I・IIa - 入組状磨消羽状縄文 II - 入組状磨消羽状縄文	横 縦	3個1根小突起	平底	大波状口縁(1.5弁) A器形	III 4	h	73図-1 参照
71図 -2	53 -2	14棟 号土	深鉢 胴体				(18.0)	IIa - 平行磨消羽状縄文 II - 入組状磨消羽状縄文	横 入念				III 4	g	
-3	53 -3b	14棟 号土	深鉢 胴体					微隆起線文	糸痕				I 3		
-4	53 -4	14棟 号土	小鉢 口縁	(15.4)				LR縄文	横 良			B器形	III 1	a	
73図 -2	53 -5	14棟 号土	深鉢 口縁	(28.0)				LR縄文	横 縦 良 好	肥厚		B器形	III 1	a	

第15号遺構出土土器(図版53、54)

床面と覆土から、第 群土器と第 群土器が出土した(第74、75図)。分類別、部位別の数量は第29表に、また、実測、拓影図の土器観察表は第30表に示した。

床面上から、6個の完形又は復原して全体の知れる土器が出土した。これらの土器は、本書中の第 群土器に該当するものである。

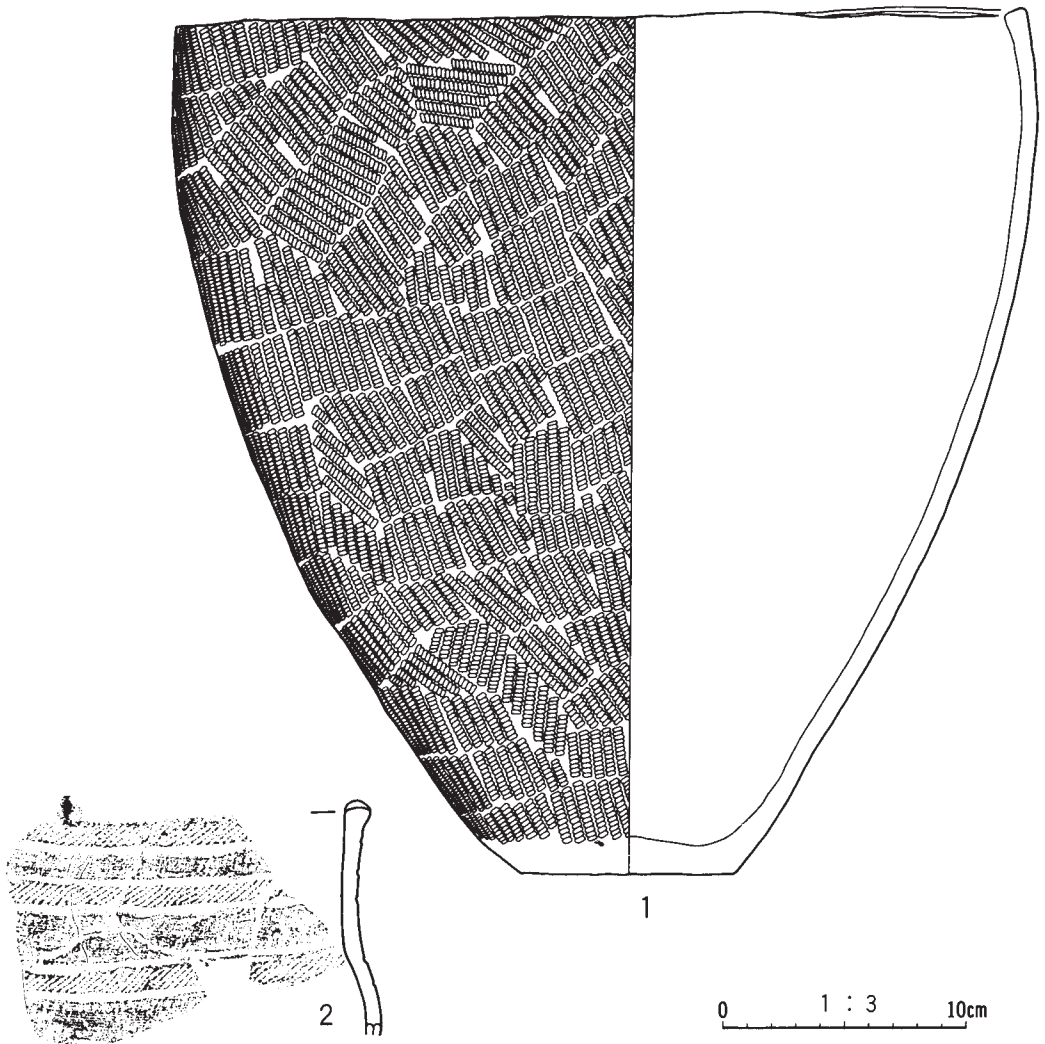
第29表 第15号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群 (早期)					第 II 群 (前期)		第 III 群 (後期)				第 IV 群 (晩期)					
	1類 (目埜文系)	2類 (笹沢 A II)	3類 ムシリ	4類 (条痕 文系)	5類 赤堂 式	1類	2類	1類	2類	3類	4類	1類	2類	3類			
現状					計					十 腰 内 IV 群				大洞 B式	大洞 BC式		
								縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三文文	羊歯 状文	摺糸 縄文	計	
完形								1	2			3					
復原								2			1	3					
部位	11 縁部							2	2		10	14					
	胴体部	1			3	4		39	8	<24> 33	80						
	底部							6			4	10					
	注口・把手																
不明																	
計	1			3	4			47	10		47	104					
個体数	1			3	4			50	12		39	101					

第30表 第15号遺構出土土器観察表(1)

単位 cm

掘削 番号	図取 番号	遺構 構名位	器形 現状	器高	口径	底径	最大径	外面 施文	内面 調整	その他の特徴			分類 群類	備考
										口唇部	底部	その他		
74	53	15床 -6	深鉢 復原	36.6	35.0	8.8	35.6	RL多条縄文	横 斜め磨	肥厚	七付底	B器形	III 1 a	
	53	15覆 -7	台付鉢 口縁		(25.0)			I. IIa - 平行磨消縄文	横			A1器形	III 4 f	
75	54	15床 -1	小鉢 復原	12.5	10.5	3.9	11.9	LR多条縄文	横 斜め雑		底面欠	B器形	III 1 a	
	53	15床 -10	小鉢 完形	7.2	9.7	3.8	9.8	RL多条縄文 (施文方向不特定)	横 斜め		施文有	二次火熱有 B器形	III 1 a	
	53	15床 -8	無頸壺 完形	5.1	3.5	3.0	7.9	無文(なでつけ)	横 斜め雑		七付底	小橋状肥手付	III 2 a	器形不均整
	54	15床 -6	台付鉢 台			6.4		無文(縦磨き)	横		橋高 3.0		III 2 a	
	53	15床 -9	ミニ 長頸壺 完形	6.0	2.3	1.6	4.5	無文(なでつけ)			七付底		III 2 b	
	54	15覆 -2	尖底 胴体					(研磨)	研磨		なし		I 1	
	54	15覆 -3	尖底 胴体					条痕文(不鮮明)	縦			砂・小礫	I 4	
	54	15覆 -4	深鉢 胴体					条痕文 (凹、凸幅2ミリ)	不明			砂粒多	I 4	
	54	15覆 -7	深鉢 口縁		(28.0)			LR縄文	横	肥厚			III 1 a	
	54	15覆 -8	深鉢 胴体					II - 平行磨消縄文	横				III 4 a	

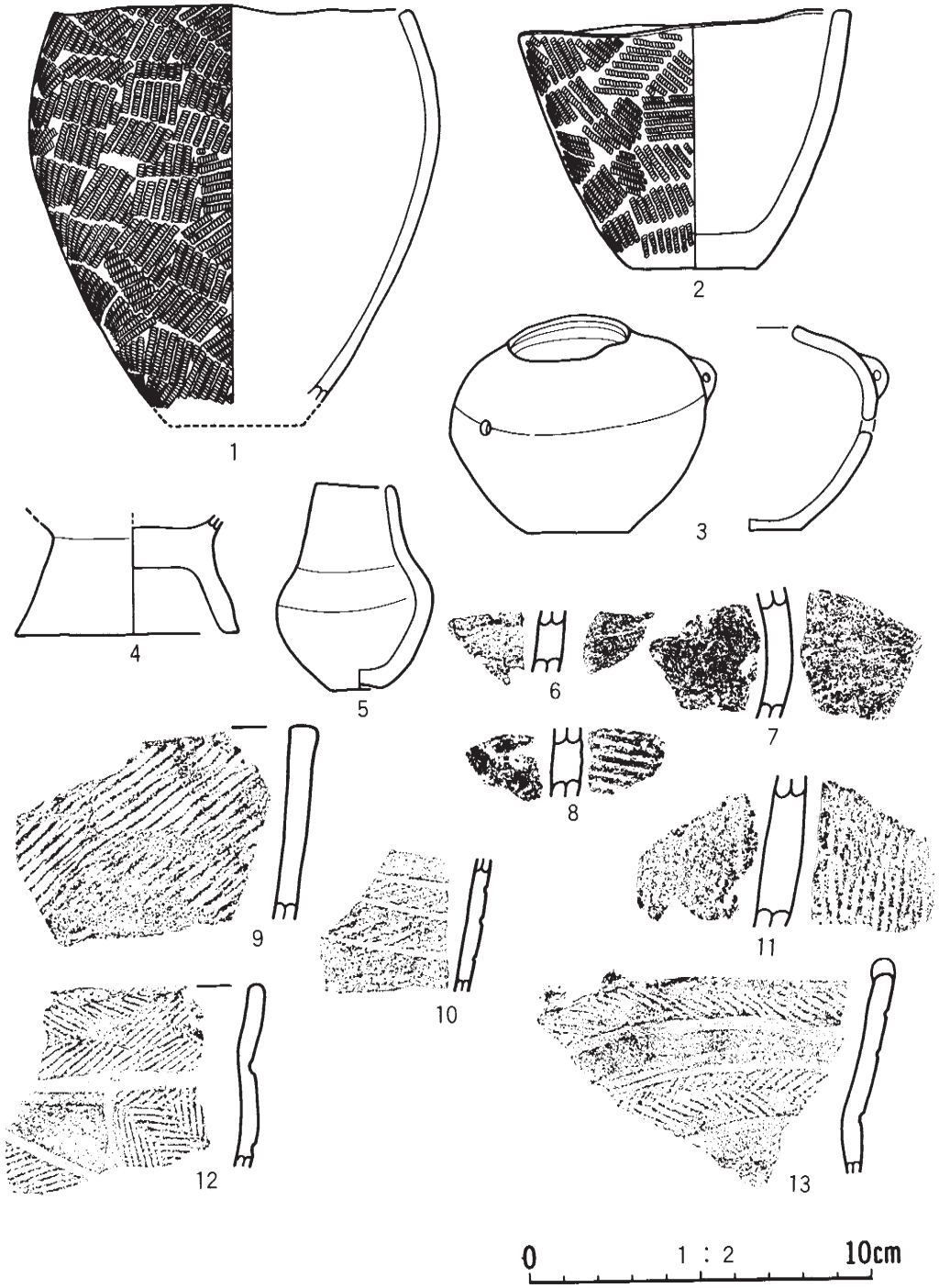


第74図 第15号遺構出土土器実測拓影図(1)

第30表 第15号遺構出土土器観察表(2)

単位 cm

挿図 番号	図政 番号	遺構 番号	器形 名位	器現 状	器高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
											口 唇 部	底 部	そ の 他	群 類		
75	54	15	深鉢						条痕文 (凹凸幅1.5~2.0ミリ)	不明			砂粒多	I	4	
-11	5	号土	胴体													
	54	15	小鉢						I.IIa 羽状縄文 II-入組状磨消羽状縄文	横				III	4	i
-12	10	号土	口縁			(10.4)										
	54	15	台付鉢						I.IIa-平行磨消羽状縄文	横				III	4	f
-13	9	号土	口縁			(22.6)				入念						



第75図 第15号遺構出土土器実測拓影図（2）

第20号遺構出土土器（図版54）

第 群土器が78点47個体、第 群土器16点3個体が出土した（第76図）。分類別、部位別の数量は第31表に、また、実測、拓影図の観察表は第32表に示した。本遺構と23号遺構出土の土器は接合関係が認められた。

第31表 第20号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群（早期）					第 II 群(前期)		第 III 群（後期）				第 IV 群(晩期)					
	1類	2類	3類	4類	5類	1類	2類	1類	2類	3類	4類	1類	2類	3類			
	(貝殻 文系)	(蛭沢 A II)	ムシ リ I	(条痕 文系)	赤御 堂式	早稲田 V類	( )	I-腰内IV群				大洞 B式	大洞 BC式				
現状						計		計	縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三叉文	羊歯 状文	捲糸文	計
完形																	
復原																	
部位	口縁部								6	1			7				
	胴体部								<35> 66				66			<3> 16	16
	底部								4	1			5				
	注口・把手																
不明																	
計								76	2			78				16	16
個体数								45	2			47				3	3

第32表 第20号遺構出土土器観察表(1)

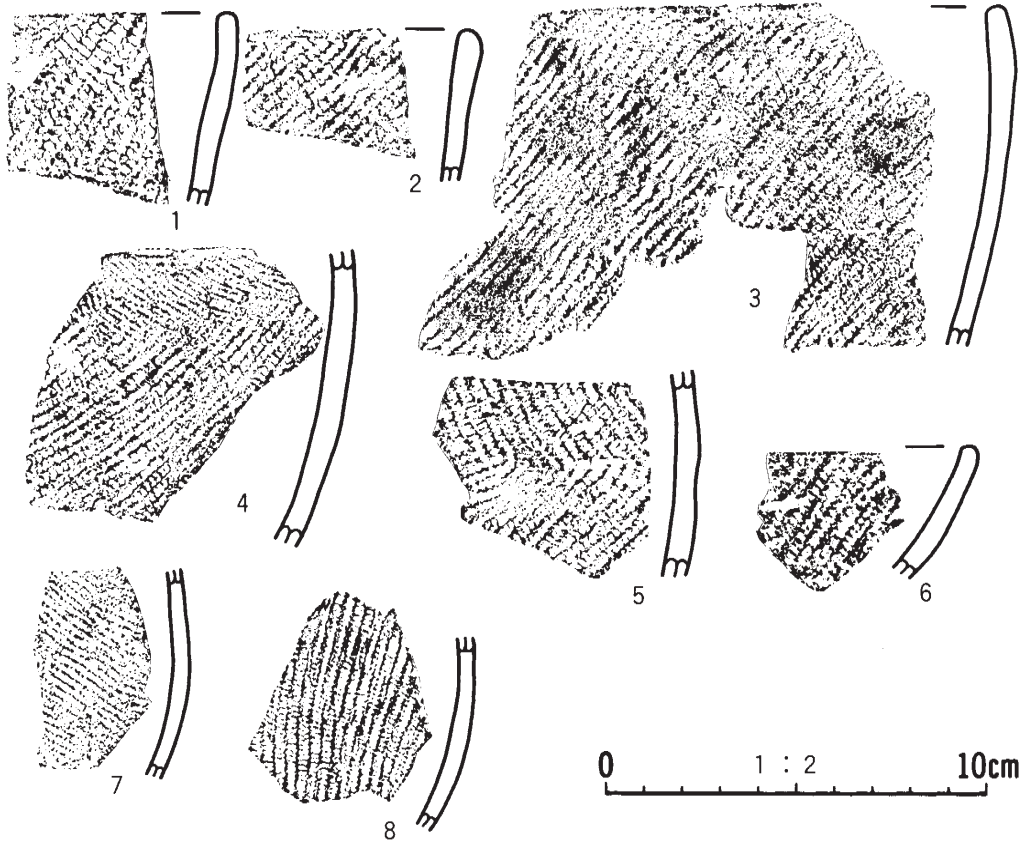
単位 cm

挿図 番号	図版 番号	遺物 名	器形 現状	器高	口径	底径	最大 径	外面 施文	内面 調整	その他の特徴			分類		備考
										口縁部	底部	その他	群類	個体	
76図 -1	54 -11	20覆 号土	深鉢 口縁		(28.0)			L.R縄文	横			B器彩	III	1 a	
-2	54 -12	20覆 号土	深鉢 口縁		(21.0)			L.R縄文	横			胎土精選	IV	3	煤付
-4	54 -13	20覆 号土	深鉢 胴体					幅広い羽状縄文(原体は捲糸と縄文) (捲糸RL、縄文LR)	横 良好				III	1 d	
-7	54 -14	20覆 号土	深鉢 胴体					L.R捲糸文(単一方向)	縦 良好				IV	3	
-8	54 -15	20覆 号土	深鉢 胴体					L.R捲糸文(単一方向)	縦 良好				IV	3	

第32表 第20号遺構出土土器観察表(2)

単位 cm

拓影 番号	図取 番号	遺器 名位	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 縁 部	底 部	そ の 他	群	類	
76 -3	54 -18	20 号土	深 鉢 口 縁		(24.0)			LR縄文	横 縦	肥厚なし		B器形	Ⅲ	1 a	煤付
5 -5	54 -17	20 号土	深 鉢 胴 体					幅広い羽状縄文	横				Ⅲ	1 d	
6 -6	54 -16	20 号土	深 鉢 口 縁		(23.0)			LR縄文	横			B器形	Ⅳ	3	



第76図 第20号遺構出土土器拓影図

第21号遺構出土土器（図版54）

第 群土器が4点2個体、第 群土器が22点21個体出土した（第77図）。分類別、部位別の数量は、第33表のとおりである。実測、拓影図の観察表は第34表に記載した。

第 群土器と第 群土器が混在しているが、いずれも流れ込みであろう。

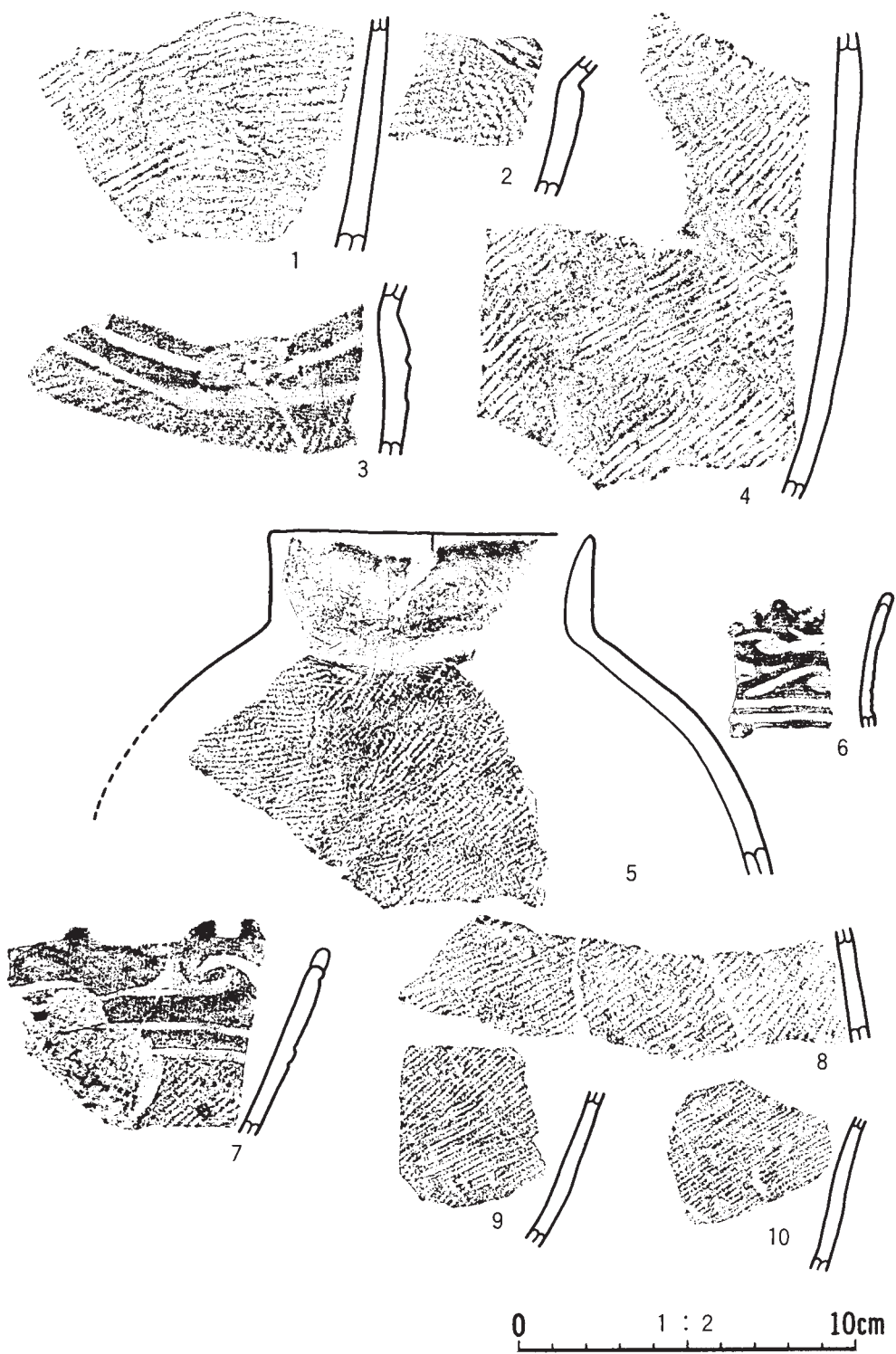
第33表 第21号遺構出土土器分類表

分類 型式名 現状	第 I 群 (早期)					第 II 群 (前期)		第 III 群 (後期)				第 IV 群 (晩期)					
	1類	2類	3類	4類	5類	1類	2類	1類	2類	3類	4類	1類	2類	3類			
	(貝殻 文系)	(蜜沢 A II)	ムシ リ I	(糸痕 文系)	赤御 堂式	早稲田 V類	( )	十 腰 内 IV 群				大洞 B式	大洞 BC式				
						計		計	縄文	無文	沈線文	磨消 文	計	三叉文	羊歯 状文	捺糸 繩文	計
完 形																	
復 原																	
部 位	口 縁 部													5		1	6
	胴 体 部										< 2 > 4		4		< 7 > 13	13	
	底 部														3	3	
	注口・把手																
不 明																	
計											4	4	5		17	22	
個 体 数											2	2	5		16	21	

第34表 第21号遺構出土土器観察表(1)

単 位 cm

挿図 番号	図版 番号	遺構 名位	器 形 現 状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群 類	類	
77図 -1	54 -19	21覆 号土	深鉢 胴体					LR縄文(無節)	斜め 良好				III	1 a	
-2	54 -20	21覆 号土	深鉢 胴体					IIa-磨消縄文 IIb-縄文(施文方向不特定)	入念				IV	3	(III群1類か)
-3	54 -21	21覆 号土	壺 胴体					隆起帯2条+LR縄文	横				IV	3	
-4	54 -22	21覆 号土	深鉢 胴体					LR縄文(無節)	横				III	1 a	
-5	55 -2	21覆 号土	壺 口縁		10.0			I. IIa-磨消無文 II-LR縄文(細粒)	横				IV	3	
-6	54 -23	21覆 号土	深鉢 口縁					I. IIa-三叉文	みがき				IV	1	
-7	54 -24	21覆 号土	深鉢 口縁		20.0			I. IIa-三叉文	横				IV	1	



第77图 第21号遺構出土土器拓影図



第34表 第21号遺構出土土器観察表(2)

単位 cm

挿図 番号	図収 番号	遺層 名位	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
77図	55	21覆	深鉢					LR燃糸文	縦				IV	3	
-8	-1	号土	刷体												
	54	21覆	深鉢					LR燃紋	縦				IV	3	
-9	-25	号土	刷体						不良						
	54	21覆	深鉢					LR燃紋	不明				IV	3	
-10	-26	号土	刷体												

第22号遺構出土土器

覆土から第 群土器が13点 1 個体、第 群土器 6 点 6 個体が出土した（第78図）。分類別、部位別の数量は、第35表のとおりである。拓影図の観察表は第36表に示した。第20号遺構出土の土器と接合したものがある。

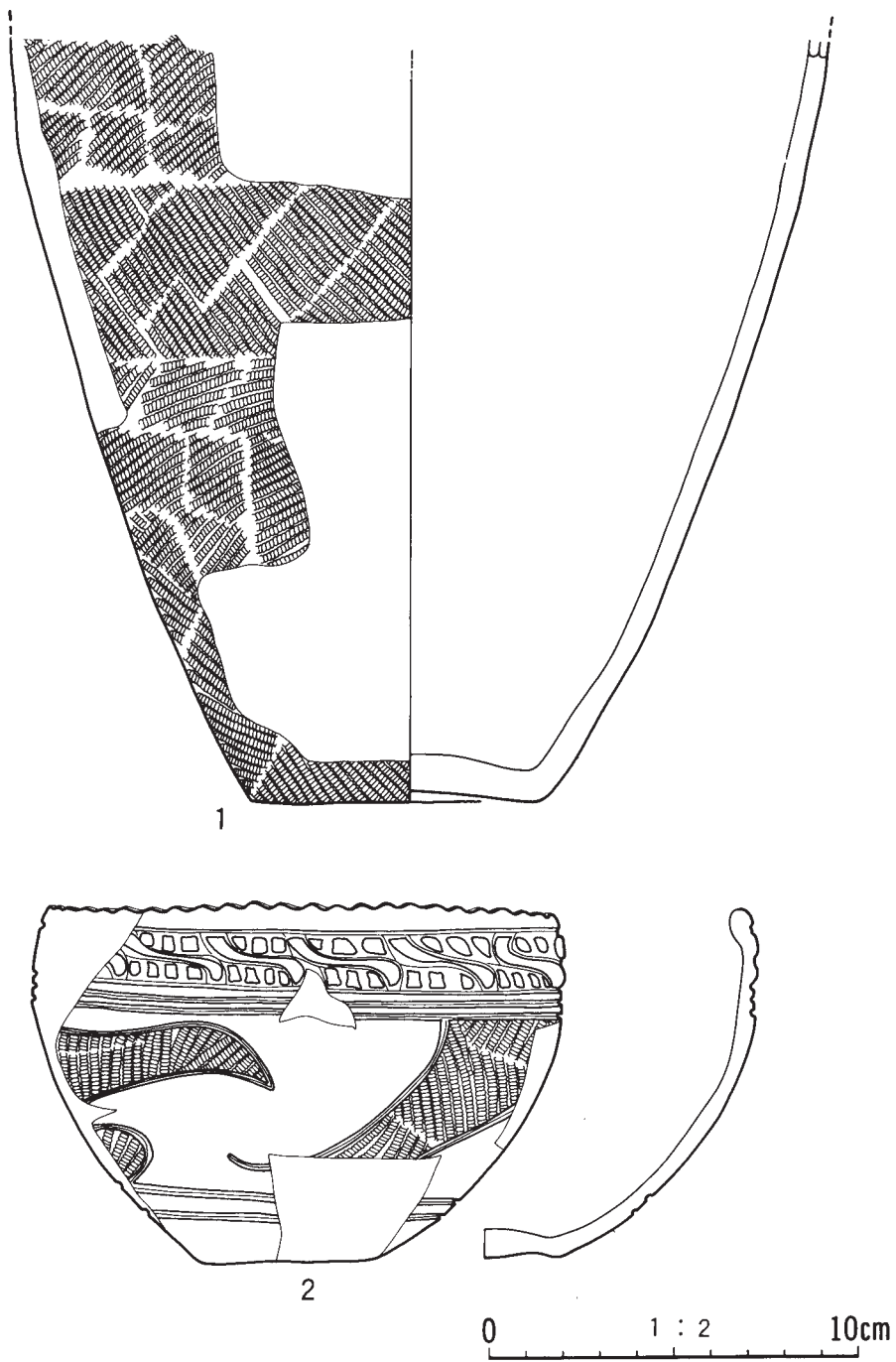
第35表 第22号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群 (早期)					第 II 群(前期)		第 III 群 (後期)				第 IV 群 (晩期)						
	1 類 (貝殻 文系)	2 類 (堂沢 A II)	3 類 ムシ リ I	4 類 (条痕 文系)	5 類 赤御 堂式	1 類 早稲田 V 類	2 類 ( )	1 類	2 類	3 類	4 類	1 類	2 類	3 類				
現 状						計		計	縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三叉文	羊歯 状文	燃糸 文	計	
完 形																		
復 原																		
部 位	口 縁 部																4	4
	刷 体 部								< 1 > 12				12				2	2
	底 部								1				1					
	注口・把手																	
不 明																		
計									13				13				6	6
個 体 数									1				1				6	6

第36表 第22号遺構出土土器観察表

単位 cm

挿図 番号	図収 番号	遺層 名位	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
78図	55	22覆	深鉢			8.1		幅広い羽状縄文(LR、RI)	入念		上り底		III	1	h
-1	-3	号土	底								気味				
	55	22覆	小鉢	9.0	14.2	4.6	15.0	I. IIa - 羊歯状文 II - 磨消縄文	入念				IV	2	
-2	-4	号土	復原												



第78図 第22号遺構出土土器実測図

### 第23号遺構出土土器

第 群土器が 8 点 5 個体出土したが、切り合い関係から、出土土器は第20号遺構に伴うものとみられる。従ってこれらの土器については、第20号遺構出土の項に加えて表示及び図化してある。

### 第28号遺構出土土器

第 群 1 類土器が 7 点 2 個体出土したが（第37表）、図示できる土器はない。いずれも流れ込みとみられる。（北林）

第37表 第28号遺構出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群 (早期)					第 II 群(前期)		第 III 群 (後期)				第 IV 群 (晩期)					
	1 類 (貝殻 文系)	2 類 (釜沢 A II)	3 類 ムシ リ I	4 類 (条痕 文系)	5 類 赤御 堂式	1 類 早稲田 V 類	2 類 ( )	1 類	2 類	3 類	4 類	1 類	2 類	3 類			
現 状						計		計	十	腰	内	IV 群		大洞 B 式	大洞 B C 式		
完 形																	
復 原																	
部 位	口 縁 部								< 2 > 7					7			
	胴 体 部																
	底 部																
	注口・把手																
不 明																	
計									7					7			
個 体 数									2					2			

### 竪穴遺構出土土器

第 群土器のなかで、竪穴遺構の床面上及び覆土から出土し器形を把握できる土器をまとめると次の第38表のとおりである。

第38表 竪穴遺構出土完形復原土器一覧表

遺構名	出土層	挿図番号	器 種	分類記号	形状	遺構名	出土層	挿図番号	器 種	分類記号	形状
第 1 号	床 面	47-1	長 頸 壺	III-4-g	完	第 3 号	覆 土	50-6	ミニ浅鉢	III-2-b	復
		48-1	小 鉢	III-4-g	"			"	50-8	"	III-2-b
第 3 号	床 面	49-2	小 鉢	III-1-c	完	"	"	50-10	ミニ長頸壺	III-3-b	"
		49-5	注 口	III-2-a	"	"	"	51-3	台付浅鉢	III-4-f	"
		49-3	長 頸 壺	III-2-b	"	"	"	52-1	"	III-4-f	"
		49-4	注 口	III-4-d	"	"	"	51-2	"	III-4-g	"
		49-1	深 鉢	III-4-e	復	第 7 号	床 面	60-1	長 頸 壺	III-2-b	完
	50-1	台付浅鉢	III-4-f	"	覆 土			60-5	ミニ鉢	III-2-a	復
	覆 土	50-5	小 鉢	III-1-a	"		"	60-8	深 鉢	III-2-b	"
		50-2	ミニ注口	III-2-a	"		"	60-4	ミニ注口	III-2-a	完
		50-4	ミニ浅鉢	III-2-a	完		"	60-6	ミニ鉢	III-2-b	復
	"	50-9	ミニ四脚付鉢	III-2-a	復	第 10 号	覆 土	62-1	小 鉢	III-1-a	復
"	50-3	ミニ浅鉢	III-2-b	完	"			62-2	"	III-2-a	"

遺構名	出土層	挿図番号	器種	分類記号	形状	遺構名	出土層	挿図番号	器種	分類記号	形状	
第13号	覆土	65-1	深鉢	III-1-a	復	第14号	床面	71-1	深鉢	III-1-h	復	
	"	67-1	小鉢	III-1-a	"	第15号	床面	75-1	小鉢	III-1-a	復	
	"	68-1	小鉢	III-1-a	"			"	74-1	深鉢	III-1-a	"
	"	68-2	注口	III-2-a	完			"	75-2	小鉢	III-1-a	完
	"	68-5	浅鉢	III-2-b	復			"	75-3	ミニ無頸壺	III-2-a	"
	"	69-1	注口	III-4-g	"			"	75-5	ミニ長頸壺	III-2-b	"

第39表 遺構出土土器分類表

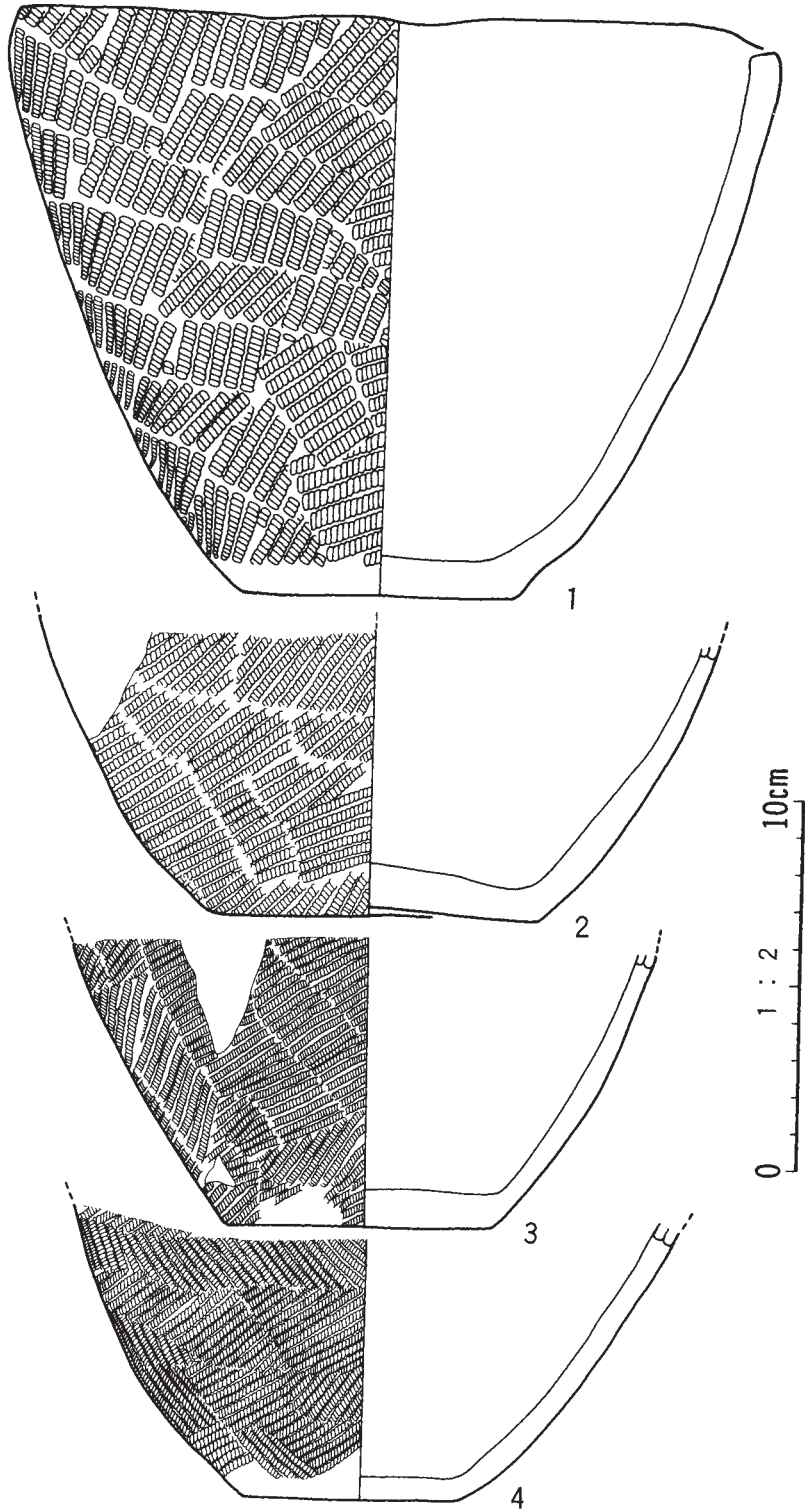
分類 型式名	第I群(早期)					第II群(前期)		第III群(後期)				第IV群(晩期)			合計					
	1類	2類	3類	4類	5類	1類	2類	1類	2類	3類	4類	1類	2類	3類						
	(具袋文系) A	釜 II	沢 I	ムシ I	(条痕文系) 赤堂 式	早稲田 V類	( )	十腰内IV群				大 B	洞 式	大 B		洞 式				
現状						計		計	縄文	無文	沈線文	磨 文	消 文	計	三叉文	羊 扶	虚文	捲 糸文	計	
完形									2	9		3	14							14
復原									6	9	1	8	24							24
部位	口縁部			3		3			73	18	1	53	145	6			5	11		159
	胴体部	1	1	33	6	41	5	5	811	95	6	190	1,102	16			31	47		1,195
	底部			1		1			32	5		13	50				3	3		54
	注口・把手											1	1							1
不明									109	1		4	114						61	114
計	1	1	37	6	45	5	5	1,025	119		261	1,412	22				39			1,523
比率%					2.95		0.32	(72.59)	8.42	0.50	(18.48)	92.71					4.00			99.98

## B 遺構外出土の土器

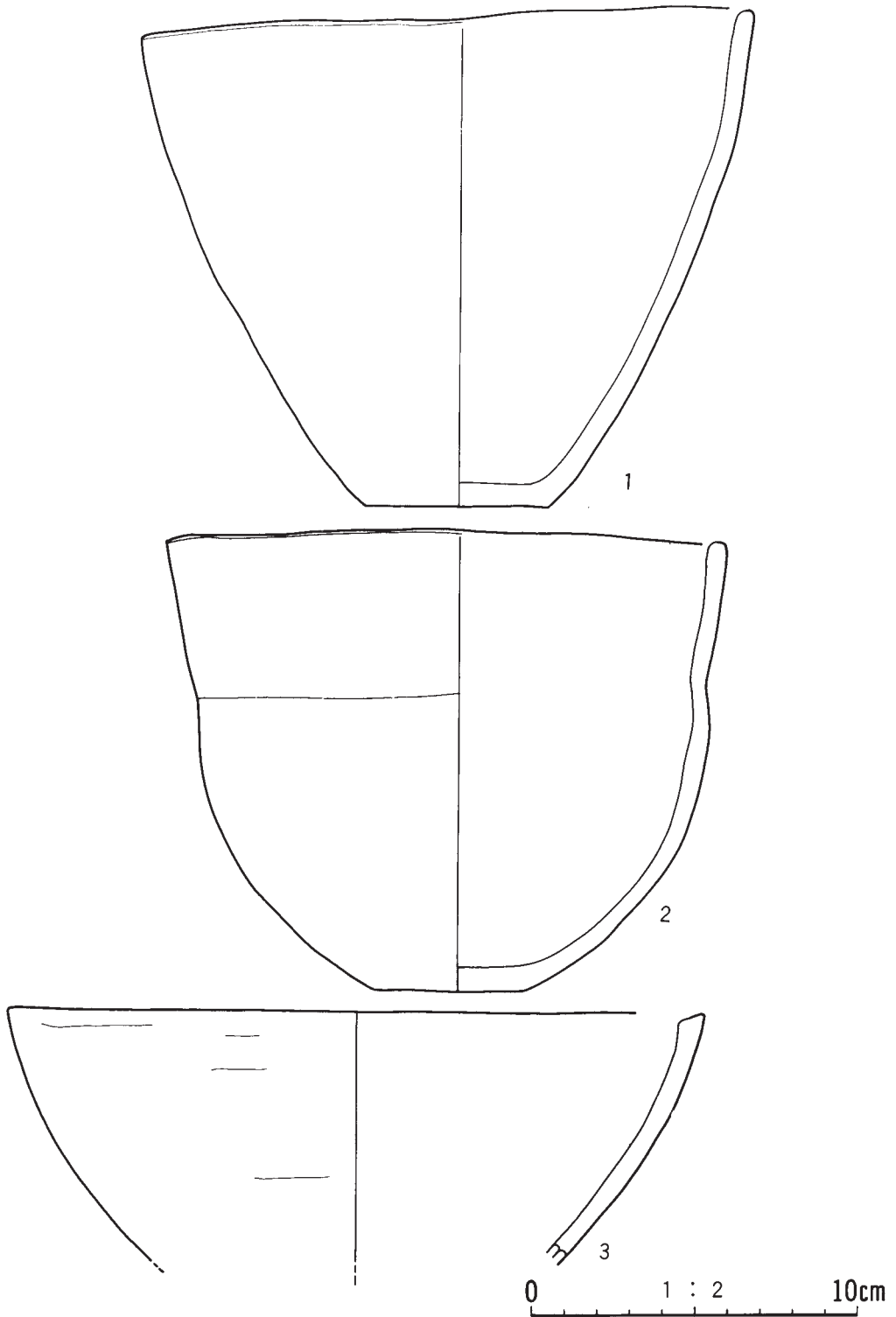
第 層の調査で、遺構外から出土した土器の分布は、第 章3、(1)で述べられている。前述のように各遺構の覆土から出土した土器もこの項に含めるべきであるが、整理の都合上分割した。

ここでは、第 層の、遺構外から出土した土器(第79~90図)の分類、数量、比率を第48表に、個々の土器の観察所見は第40表以下に示す(第40~47表)。これらの出土土器は、遺構内出土の土器と同様、第 群から第 群までのものである。土器の分類基準は遺構内出土の土器と同様である。また、遺構出土の土器と接合した破片は、遺構内出土の数に含めてある。出土数量の比率には、完形土器及び復原した土器を含めていない。

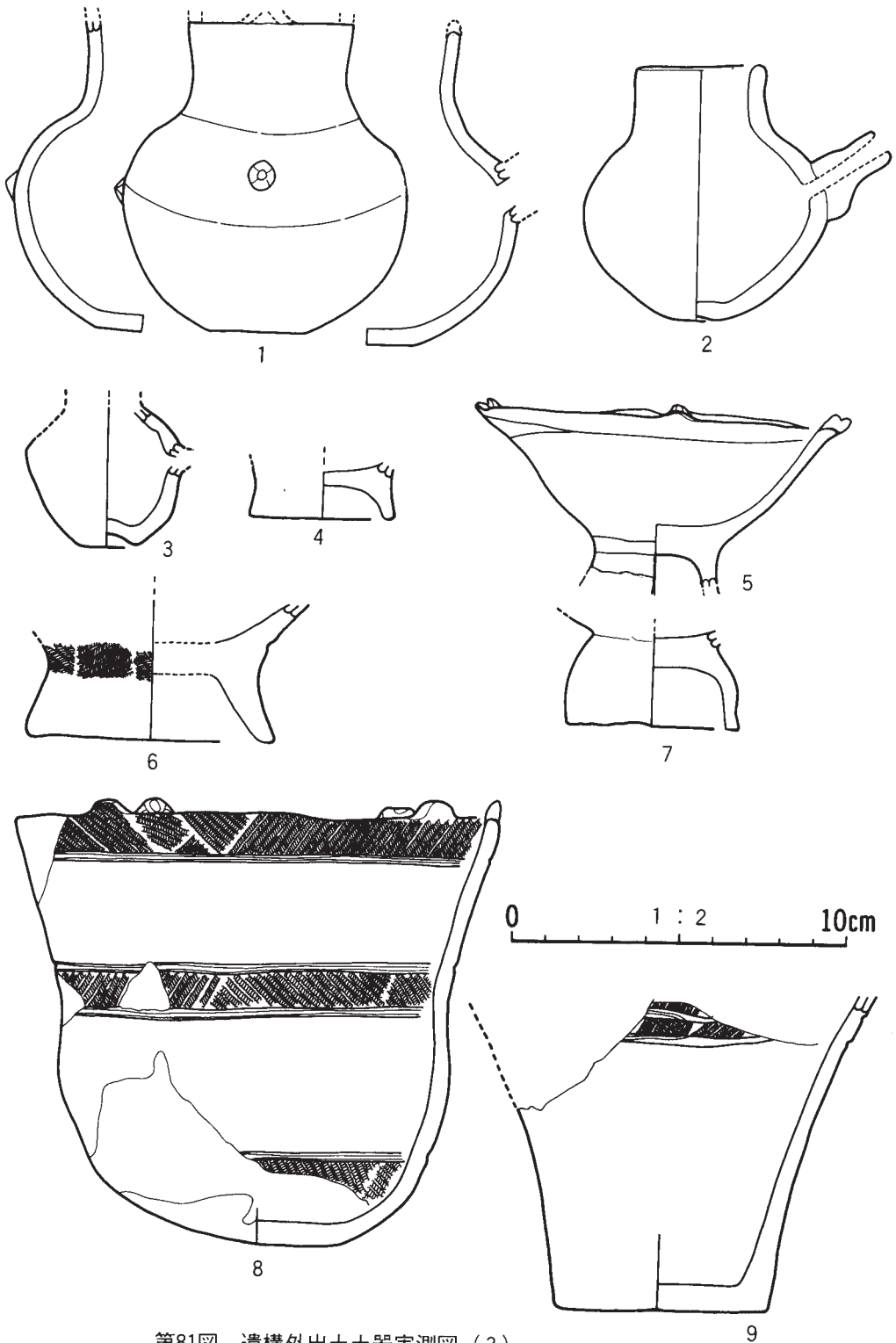
第48表出土土器分類表と第40~47表土器観察表をまとめると、第 群(縄文早期)土器が54片(0.90%)、第 群土器(縄文前期)3片(0.05%)、第 群土器(縄文後期)5,671片(98.40%)、第 群土器(縄文晩期)38片(0.60%)である。第 群土器には、これらの破片以外に完形土器2点、復原した土器10点がある。従って、第 層の調査で遺構外から出土した土器の主体は、第 群土器である。(北林)



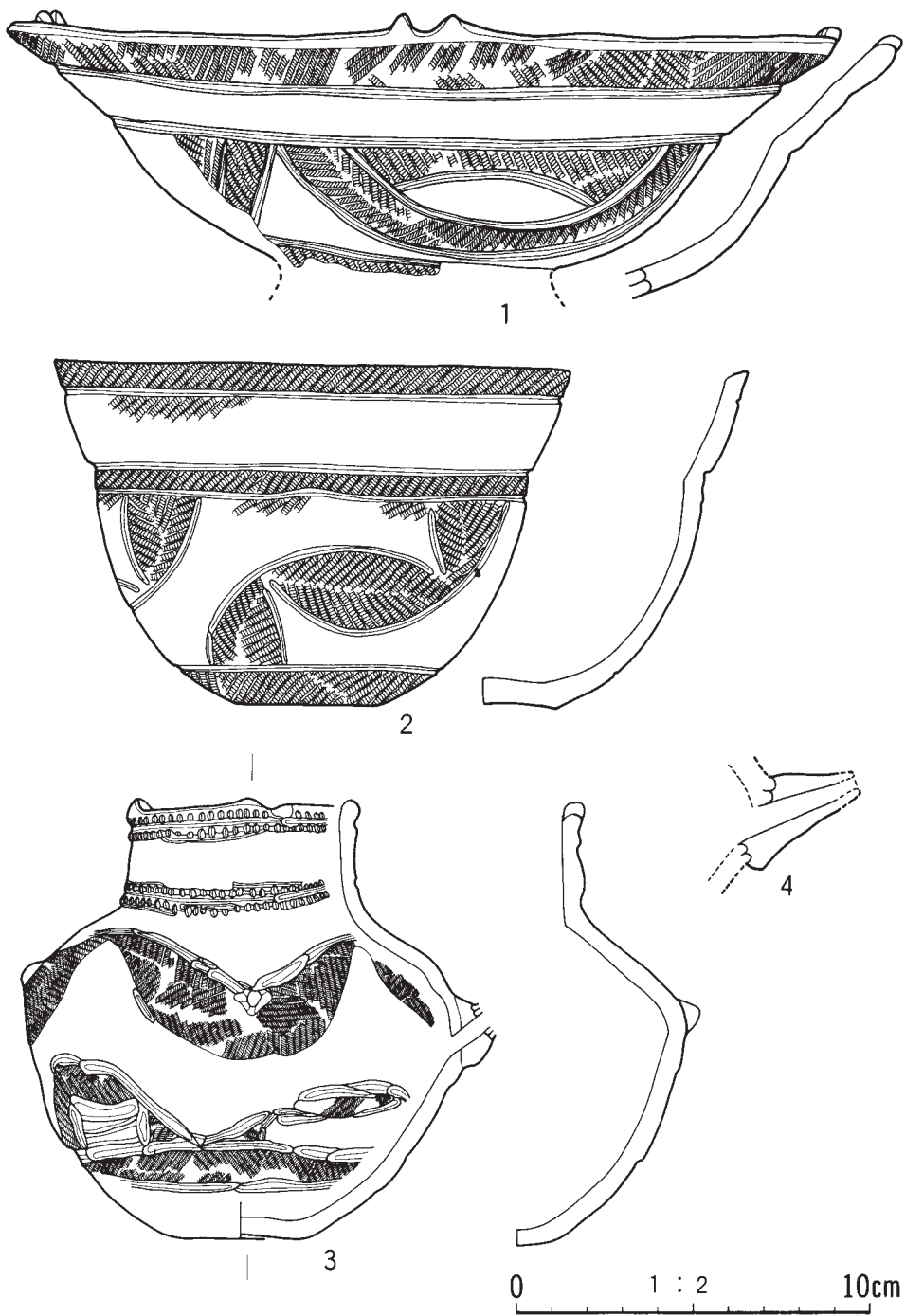
第79図 遺構外出土土器実測図(1)



第80図 遺構外出土土器実測図(2)

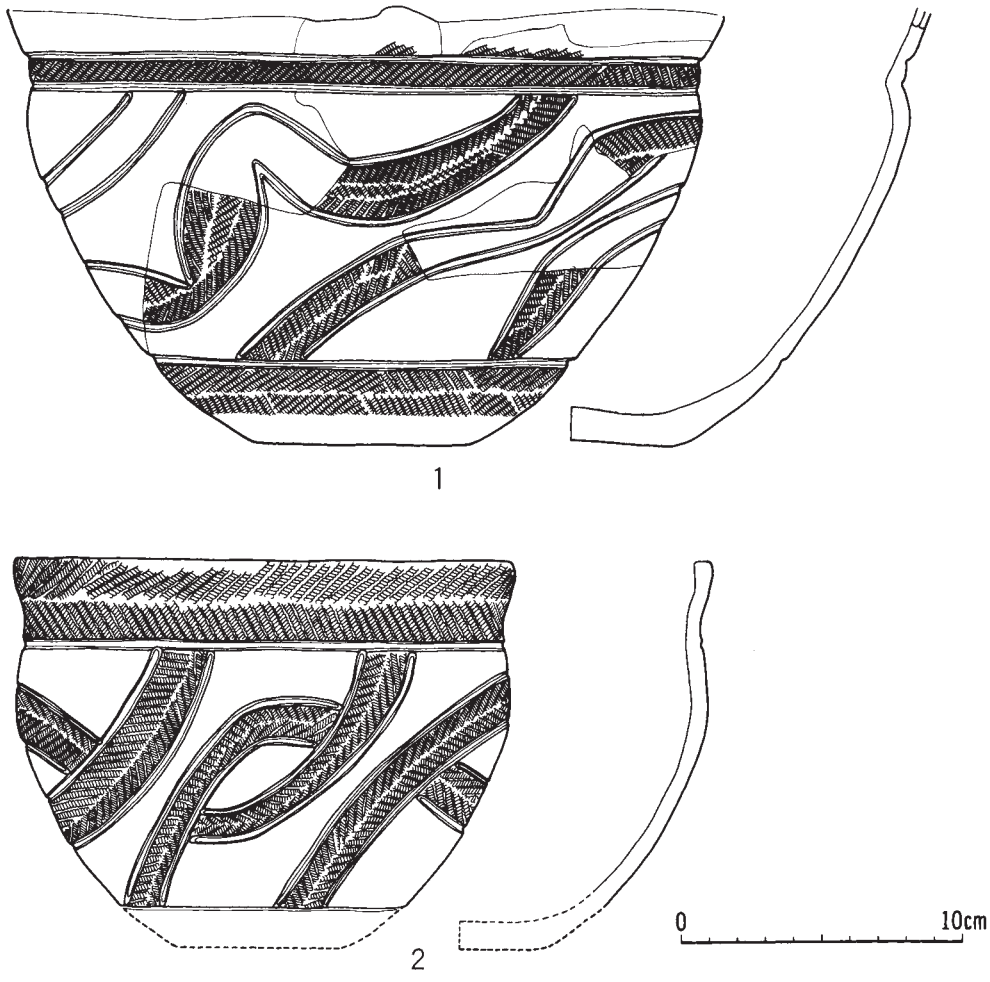


第81図 遺構外出土土器実測図(3)



第82図 遺構外出土土器実測図（4）



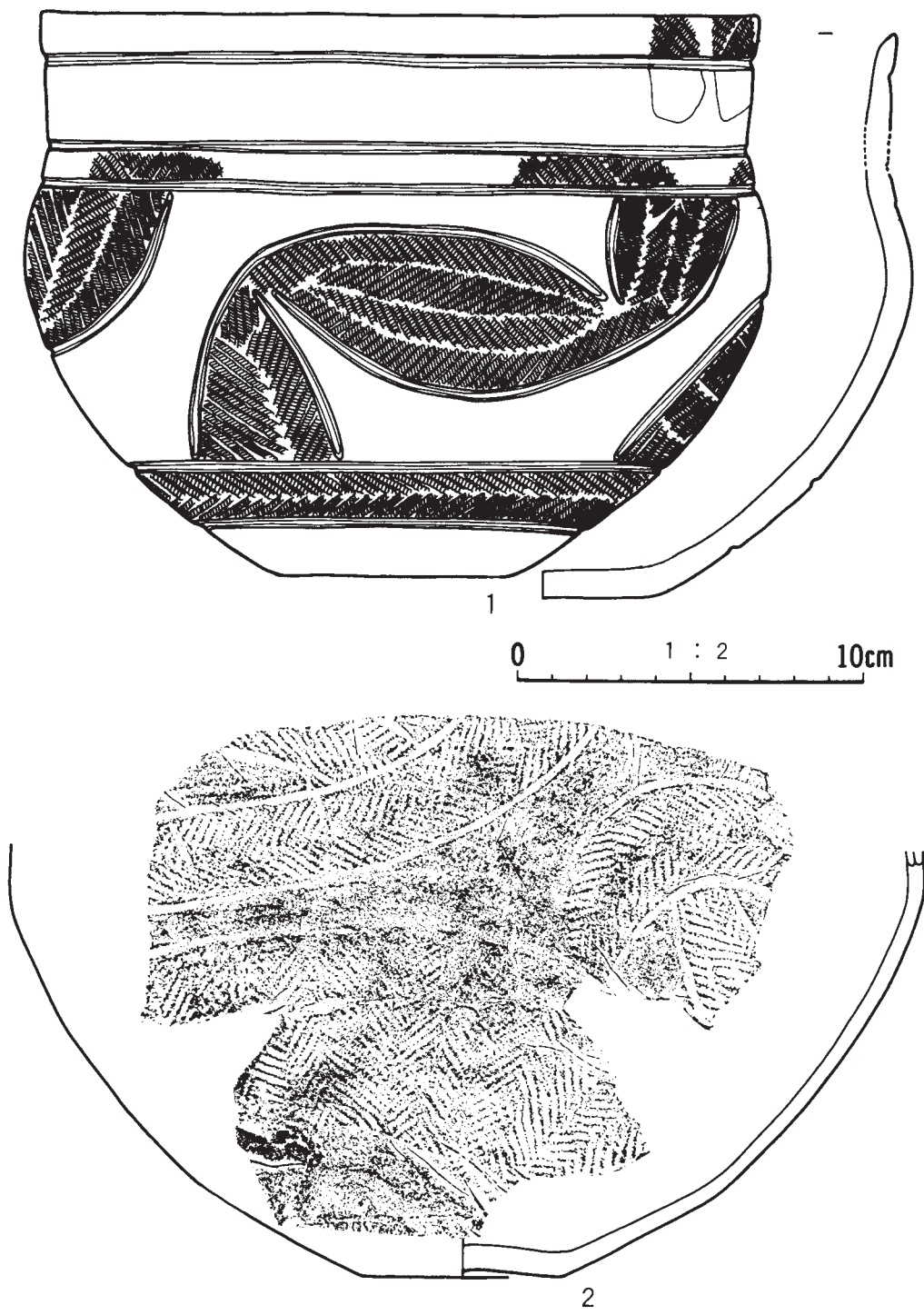


第83図 遺構外出土土器実測図(5)

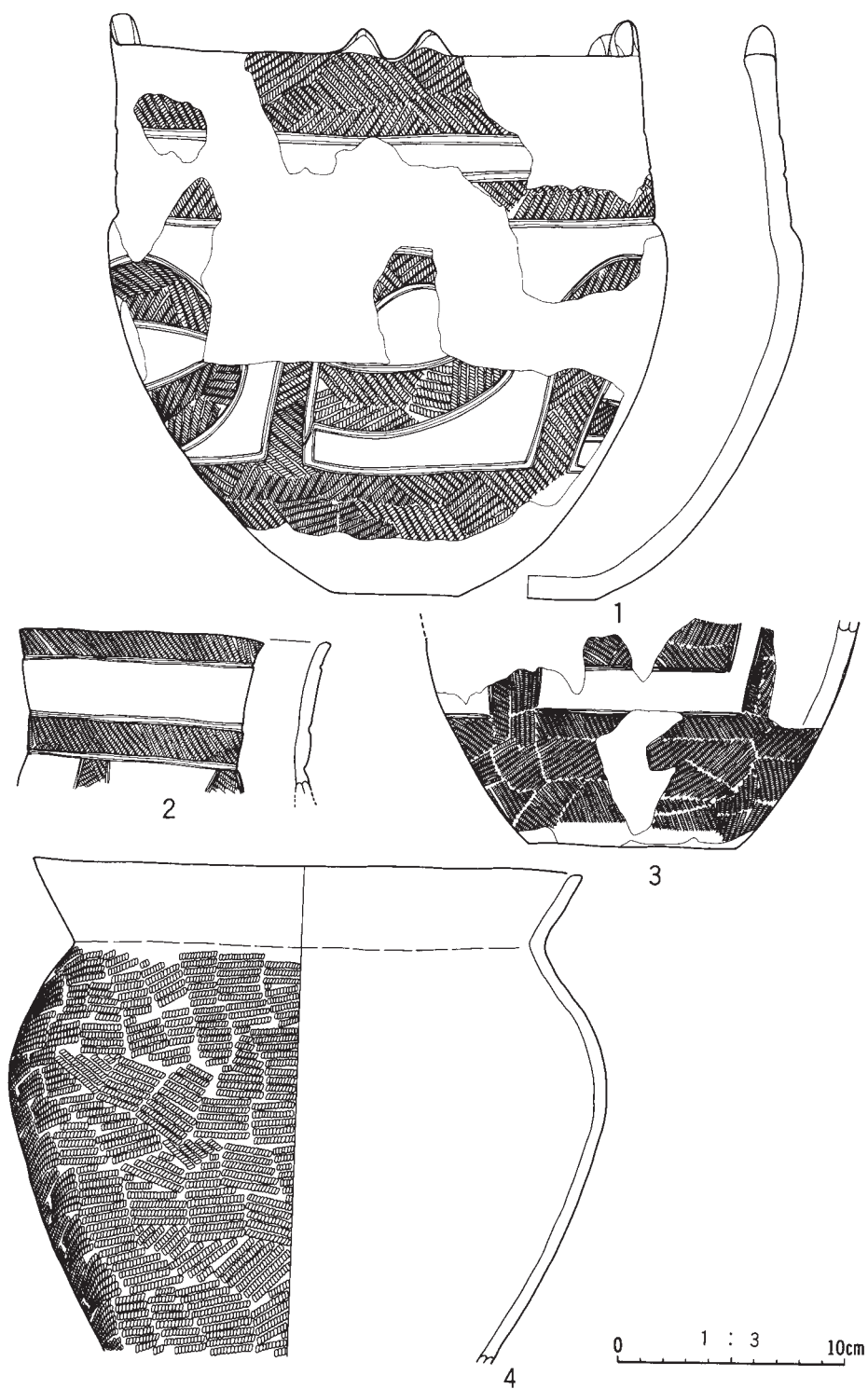
第40表 遺構外出土土器観察表(1)

単位 cm

補図 番号	図取 番号	発掘 区画	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
79	55	G- 6 II	小鉢 復原	15.6	19.5	8.0	19.5	LR単斜縄文	横			B器形	III	1 a	
-2	55	G- 22 I	深鉢 底			10.0		LR単斜縄文					III	1 a	
-3	55	C- 5 I	深鉢 底			7.2		LR単斜縄文	横				III	1 a	
-4	55	F- 6 I	深鉢 底			5.8		羽状縄文	横 斜め		欠く		III	1 c	



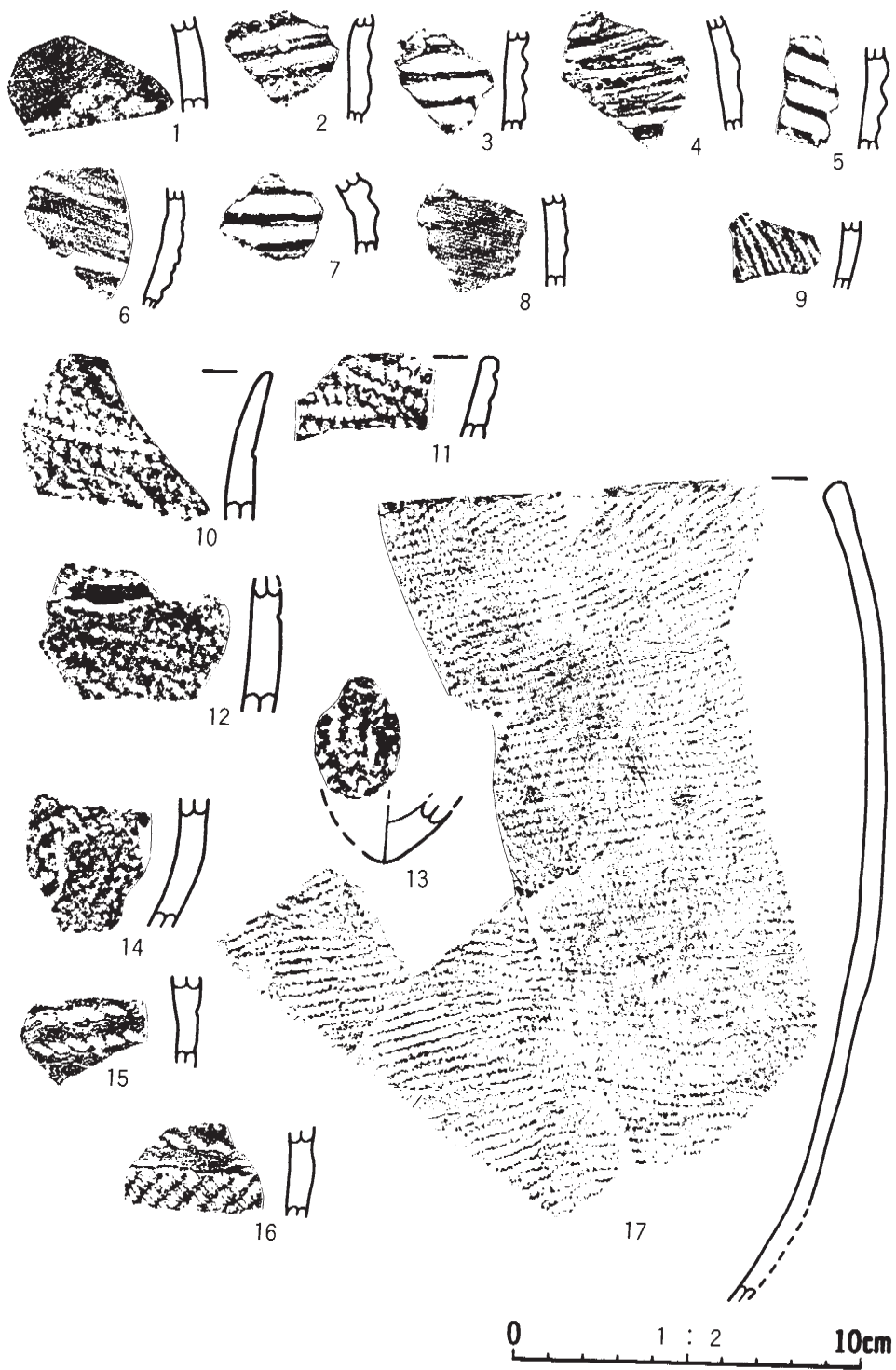
第84図 遺構外出土土器実測拓影図（6）



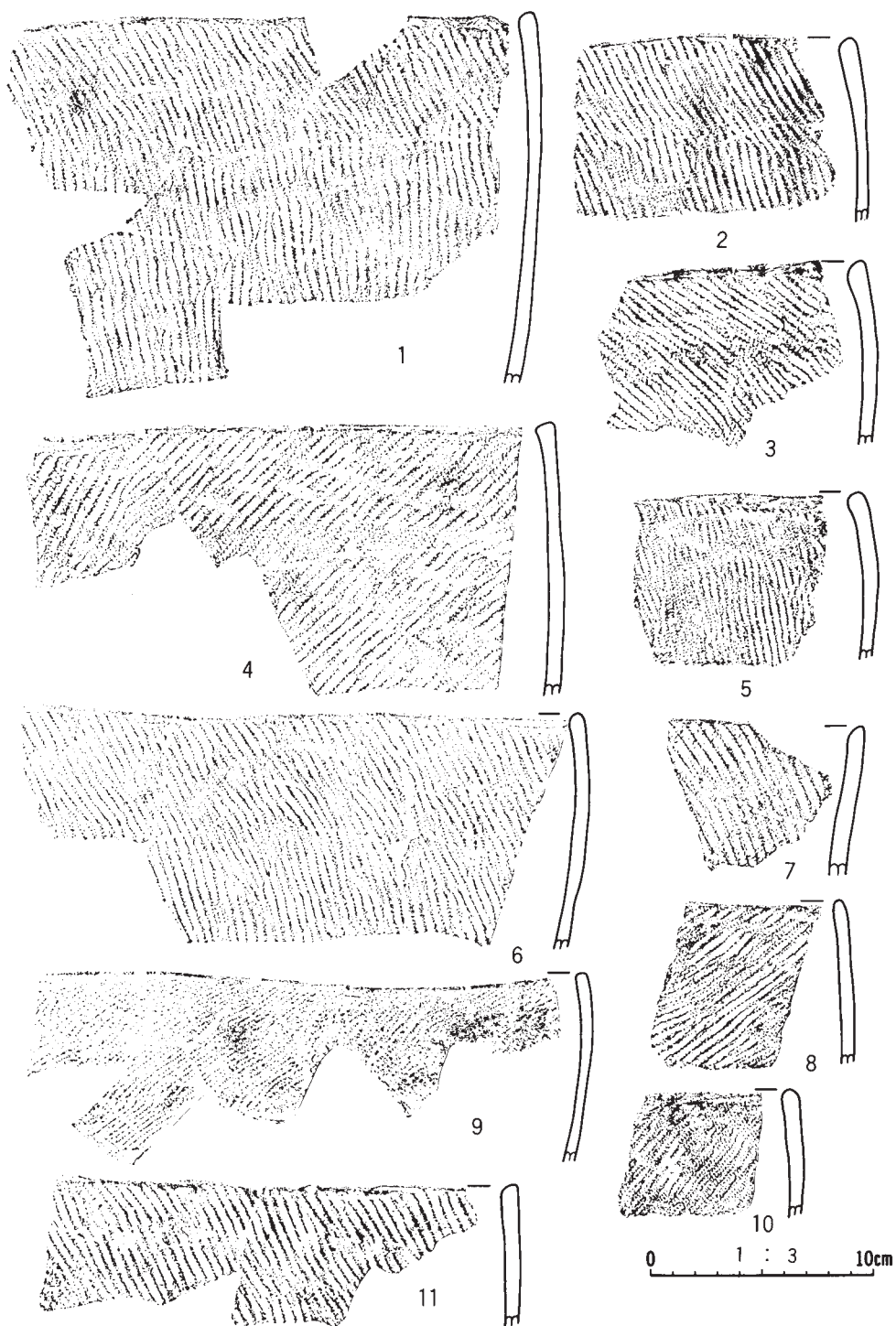
第85図 遺構外出土土器実測図(7)



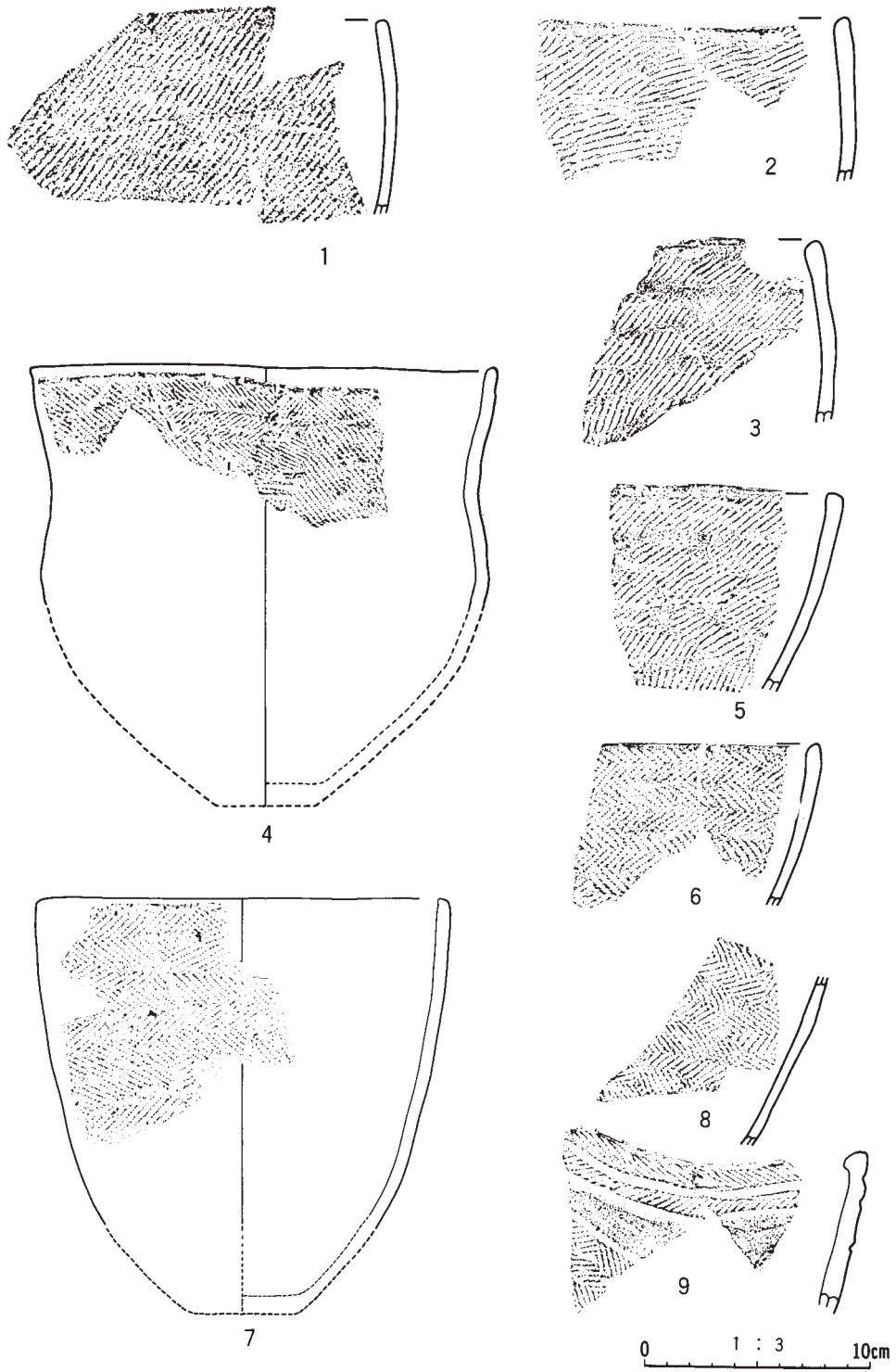
第86図 遺構外出土土器実測図(8)



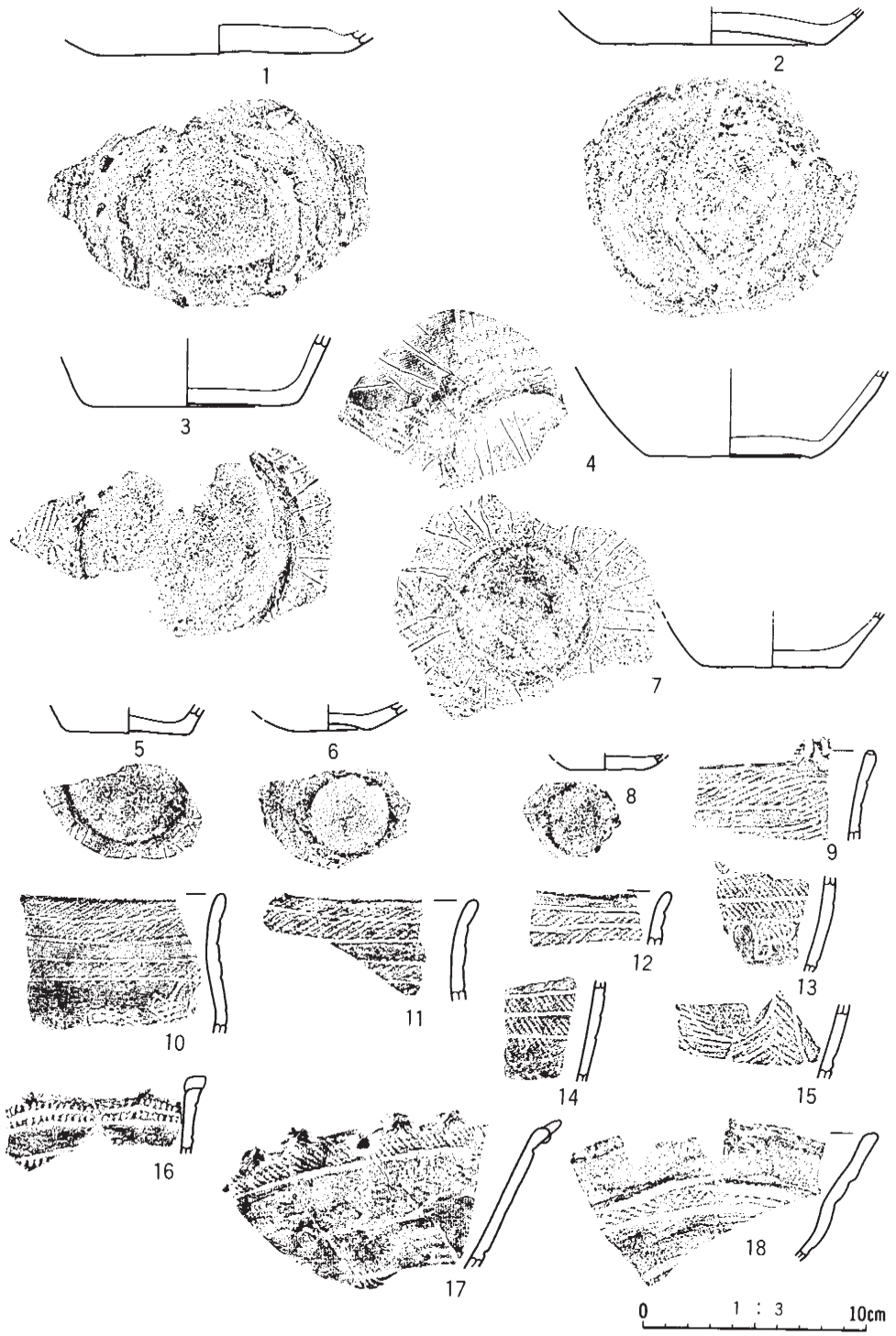
第87图 遺構外出土土器拓影图 (9)



第88图 遺構外出土土器拓影图 (10)

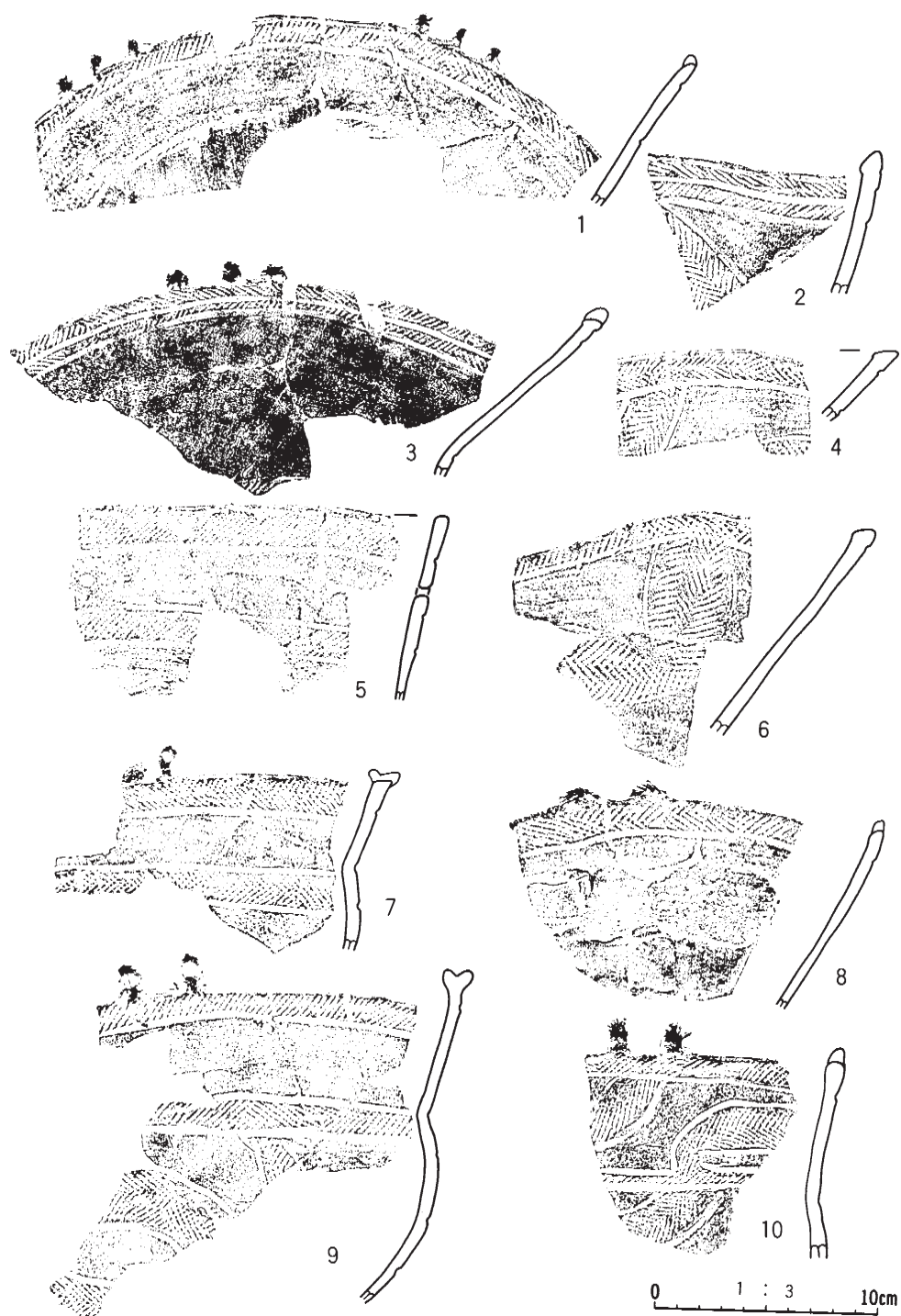


第89図 遺構外出土土器拓影図 (11)

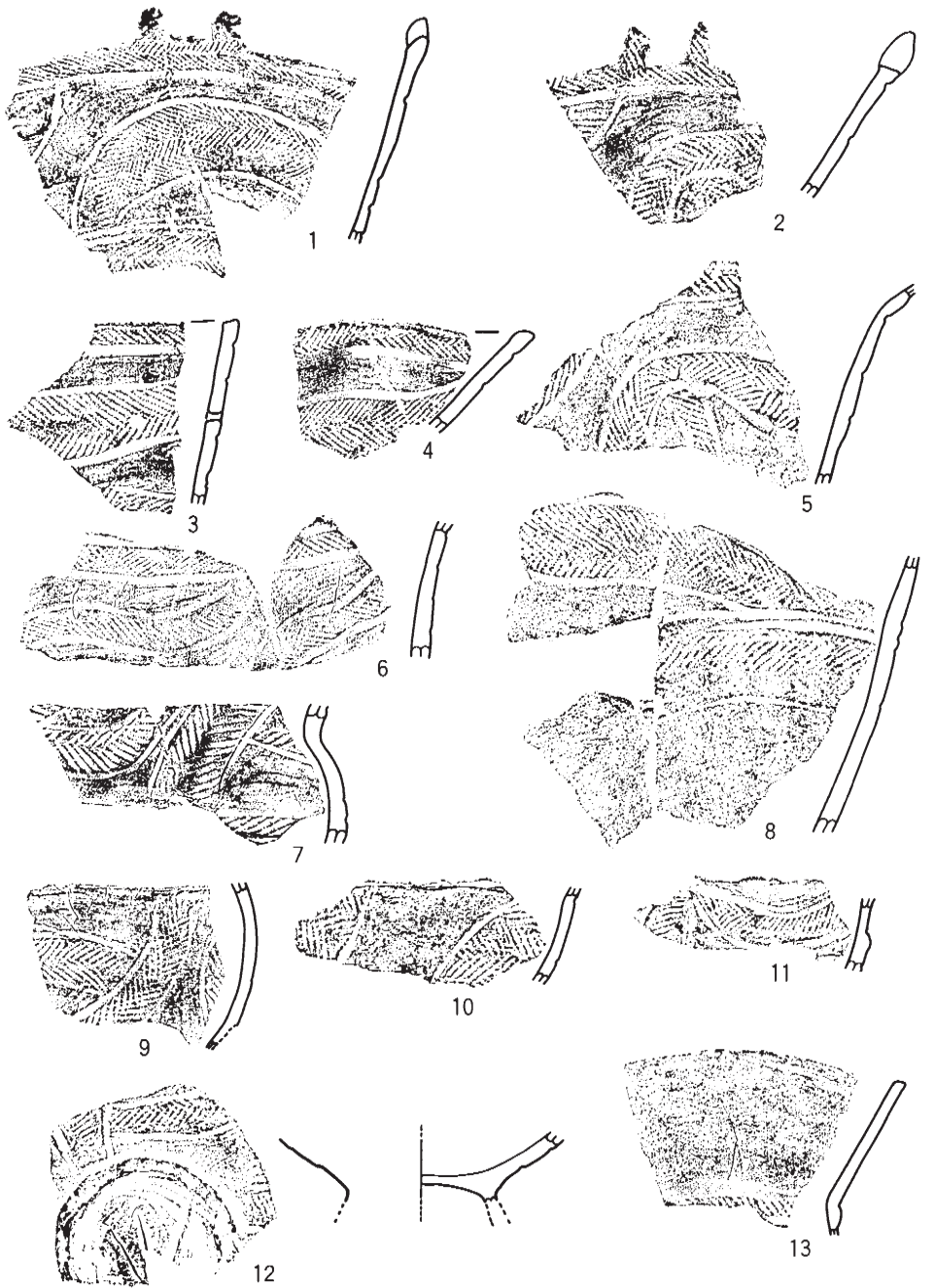


第90図 遺構外出土土器拓影図 (12)





第91图 遺構外出土土器拓影图 (13)



第92図 遺構外出土土器拓影図 (14)

第41表 遺構外出土土器観察表(2)

単位 cm

埴岡 番号	岡阪 番号	発掘 区画	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考		
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類			
80岡 -1	57 -1	G-5 I	小鉢 復原	15.1	18.8	5.5	19.7	無文				二次火熱有 (B器形に近い)	III	2	b		
	57 -2	F-6 I	小鉢 復原	14.2	17.2	4.0	17.2	無文	縦 横			A <sub>2</sub> 器形	III	2	b		
	57 -3	G-4 II	台付鉢 口縁		(21.0)			無文	横	肥厚				III	2	b	
81岡 -1	56 -1	G-5 II	注口 完形	9.3	4.9	2.8	9.1	無文		小突起 4箇所 (欠損)		胴部磨 3箇所 注口欠く	III	2	a		
	56 -2	E-6 I	注口 復原	7.5	4.0	2.0	7.4	無文	横		上付底			III	2	b	
	62 -3	P-6 I	ミニ 長頸壺 底	4.0		1.8	4.6	無文						III	2	b	
	56 -4	F-7 II	台付鉢 台			(4.8)		(無文)	入念 横丸く			脚高 1.3cm		III	2	b	
	56 -5	C-4 II	台付鉢 復原	(5.3)	11.2	(3.9)	11.2	無文		横割小 突起 4個有	台部欠く	二次火熱有		III	2	a	
	56 -6	G-8 II	台付鉢 台			7.3		II-平行磨消羽状縄文	入念 横			脚高 2.7cm		III	4	f	
	56 -7	C-4 I	台付鉢 台			4.8		(無文)	雑					III	2	b	
	56 -8	H-8 II	小鉢 復原	13.7	14.4	4.0	14.4	I-IIa-平行磨消縄文 II-平行磨消縄文	横	縦割小突起 4箇所	丸底	A <sub>2</sub> 器形		III	4	f	
	58 -9	G-4 II	深鉢 底	9.5		6.4		II-平行磨消縄文	縦		平底 磨減			III	4	f	
82岡 -1	57 -7	H-8 II	台付鉢 口縁		24.0		24.0	I-IIa-平行・入組状磨消縄文	横	2個1組小突起 4箇所		小突起と入組状モチ ツ割付は一致しない		III	4	h	
	57 -2	D-9 I C-9 I	小鉢 復原	9.7	15.0	5.0	15	I-IIa-平行磨消縄文 II-入組状磨消羽状縄文	横		ケズリ	A <sub>2</sub> 器形か		III	4	g	
	56 -3	C-4 II	注口 完形	12.6	6.6	3.8	12.4	I-連続刻み目帯 2条 IIa-磨消帯+刻み目帯2条 II-入組状磨消縄文	横	小突起 4個		胴部に縦割磨 3箇所		III	4	b	注口部欠く
	56 -4	H-8 II	注口 注口					無文(研磨)						III	2	b	
83岡 -1	58 -7	G-4 II	深鉢 復原			8.0		II-入組状磨消羽状縄文	横					III	4	g	
	57 -2	D-6 I	小鉢 口縁		(16.8)		(17.6)	I-IIa-羽状縄文 II-入組状磨消縄文	雑					III	4	j	
84岡 -1	57 -6	G-5 II	深鉢 復原	(16.5)	(20.0)	8.0	20.0	I-IIa-平行磨消縄文 II-入組状磨消羽状縄文	横		平底	A <sub>2</sub> 器形か (胴~底復原)		III	4	g	

第42表 遺構外出土土器観察表(3)

単位 cm

検出 番号	図版 番号	発掘 地区	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群 類		
84回 -2	57 -5	C- 4 I	深鉢 底			6		II-入組状磨消羽状縄文 縦位羽状縄文	縦入念		上げ底 気味		III 4	e	
85回 -1	58 -6	G- 5 I G- 4 II	深鉢 口縁	(25.5)	(26.5)			I. IIa-平行磨消羽状縄文 II-入組状磨消羽状縄文	横	肥厚2個1組 山形突起4箇所		A器形	III 4	g	
	56 -2	G- 5 I	長頸壺 口縁	7.0	11.0			I. IIa-平行磨消羽状縄文	横				III 4	f	
	56 -3	H- 9 II	深鉢 底			(9.4)		II-長方形状磨消羽状縄文	横 良好				III 4	e	
	58 -4	D- 8 I	深鉢 口縁	21.5	24.3		26.4	I. IIa-磨消無文帯 II-LR多条縄文(単科)	横 斜め			C器形	IV 4	i	底部欠
86回 -1	58 -11	P- 18 II	台付鉢 復原	11.3	(15.0)	(7.6)	(15.8)	IIa-羊歯状文 II-LR燃系文	横 縦	台付鉢 2.8	脚高 2.8	脚部二次火焼有	IV 2		
	58 -2	D- 8 I E- 5 I	壺 復原	22.3	8.4	6.8	(17.2)	I. IIa-無文 II-LR縄文	横				IV 3		
87回 -1	62 -1	F- 6 I	尖底 胴体					研磨痕のみ	雑			暗赤褐色 砂、小礫、 浮石含む。	I 1		
	62 -2	G- 5 I	深鉢 胴体					微隆起線文(ムシリI式) (貝殻腹縁)	条痕			赤褐色 小礫を含む。 内面炭化物付着	I 3		
		G- 4 II	深鉢 胴体					微隆起線文(ムシリI式)	条痕			赤褐色	I 3		
	62 -4	G- 4 I	深鉢 胴体					微隆起線文(ムシリI式)	条痕			赤褐色 小礫を含む。 内面炭化物付着	I 3		
	62 -5	F- 4 I	深鉢 胴体					微隆起線文(ムシリI式)	条痕			赤褐色 小礫を含む。 内面炭化物付着	I 3		
	62 -6	G- 5 I	深鉢 胴体					微隆起線文(ムシリI式)	条痕			赤褐色 小礫を含む。 内面炭化物付着	I 3		
	62 -7	G- 4 I	深鉢 胴体					微隆起線文(ムシリI式)	条痕			赤褐色 小礫を含む。 内面炭化物付着	I 3		
	62 -8	G- 5 I	深鉢 胴体					微隆起線文(ムシリI式)	条痕			灰褐色、灰黄褐色 小礫を含む。内面炭化 物付着	I 3		
	62 -9	F- 5 I	深鉢 胴体					貝殻条痕文	条痕			橙黄色、黄褐色 小礫 を含む)	I 4		
	62 -10	R- 12 II	尖底 口縁					(0段多条RL縄文)				灰褐色 小礫を含む	I 5		
	62 -11	R- 12 II	尖底 口縁					0段多条RL縄文 (赤御堂式相当)				灰褐色 細礫を含む	I 5		
	62 -12	R- 12 II	尖底 胴体					(縄文磨滅) (赤御堂式相当)				黄褐色 細礫を含む	I 5		

第43表 遺構外出土土器観察表(4)

単位 cm

棟号	図取番号	発掘区画	器形	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面調整	その他の特徴			分類		備考
										口唇部	底部	その他	群	類	
87区	62-13	R-12II	深鉢底					O段多条				黄褐色	I	4	
	62-14	R-12II	尖底胴体					O段多条(赤御堂式相当)				黄褐色	I	5	
	62-15	C-5I	深鉢胴体					O段多条LR縄文	横			暗灰褐色 繊維混入 浮石含む	II	1 a	
	62-16	C-5I	深鉢胴体					O段多条LR縄文				黄褐色 繊維混入 浮石含む	II	1 a	
	59-17	Q-11I	深鉢口縁		(31.0)			LR縄文(横位・斜位)	横 斜め			B器形	III	1 a	
88区	59-1	H-4II	深鉢口縁		(44.0)			RL縄文(斜位・横位)	横 縦 斜め	肥厚		B器形	III	1 a	
	59-2	G-4II	深鉢口縁		(35.0)			RL縄文	横 縦	肥厚			III	1 a	
	59-3	C-7I	深鉢口縁		(38.0)			RL単斜縄文	横	肥厚		B器形	III	1 a	
	59-4	F-6I	深鉢口縁		(38.0)			LR単斜縄文				補修孔有 B器形	III	1 a	
	59-5	F-7I	深鉢口縁		(28.0)			LR縄文(斜位)	横	肥厚		B器形	III	1 a	
	62-17	H-4II	深鉢口縁		(39.0)			RL単斜縄文	横 縦	肥厚		B器形	III	1 a	
	59-7	H-8II	深鉢口縁		(30.0)			RL単斜縄文	横	肥厚		B器形	III	1 a	
	59-8	E-7I	深鉢口縁		(28.0)			LR単斜縄文	横			B器形	III	1 a	
	59-9	Q-18II	深鉢口縁		(21.0)			LR縄文	横			B器形	III	1 a	
	59-10	E-7I	深鉢口縁		(22.0)			LR単斜縄文	横	肥厚		B器形	III	1 a	
	59-11	H-4II	深鉢口縁		(38.0)			RL単斜縄文	横	肥厚		B器形	III	1 a	
89区	59-1	F-6I	深鉢口縁		(19.6)			LR縄文	横			B器形	III	1 a	
	59-2	E-5I	深鉢口縁		(39.0)			LR縄文(不特定)	横	肥厚		B器形	III	1 a	
	60-3	G-7II	深鉢口縁		(28.0)			LR縄文(帯状ブロック)	横	肥厚			III	1 a	

第44表 遺構外出土土器観察表(5)

単位位 cm

棟図 番号	図版 番号	発掘 区位	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考	
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類		
89	60	C-	深鉢		(20.1)			羽状縄文	横			A器形	Ⅲ	1	c	
-4	-4	5Ⅱ	口縁													
60	F-	深鉢			(28.7)			LR縄文(ブロック状)	横	肥厚気味			Ⅲ	1	a	
-5	-2	7Ⅱ	口縁													
60	E-	深鉢			(20.0)			羽状縄文	横	肥厚			Ⅲ	1	c	
-6	-3	7Ⅰ	口縁													
58	G-	深鉢		(18.0)	(20.0)			羽状縄文	横 縦			二次火熱 B器形	Ⅲ	1	c	
-7	-2	4Ⅱ	口縁													
60	G-	小鉢			(13.0)			羽状縄文	横 縦				Ⅲ	1	c	
-8	-6	4Ⅱ	口縁													
60	D-	深鉢			(28.0)			I.Ⅱa-磨消入組羽状縄文	横	肥厚		A器形	Ⅲ	4	f	
-9	-5	8Ⅱ	口縁													
90	63	C-	深鉢			10.0		B- (縄文)	雑		上げ底 気味		Ⅲ	1	a	
-1	-2	4Ⅰ	底													
63	L-	深鉢				9.4		縄文	入念		上げ底 気味		Ⅲ	1	a	
-2	-5	9Ⅰ	底													
63	E-	小鉢				5.6		無文	入念		平底		Ⅲ	2	b	
-3	-3	4Ⅱ	底													
60	C-	深鉢			(21.0)			I.Ⅱa-平行沈線+磨消 (地文は縄文以下同じ)	横			(沈線施文後磨消)	Ⅲ	4	a	
-4	-7	5Ⅱ	口縁													
63	C-	注口						I.Ⅱa-平行刻目帯+磨消無文帯	横 雑				Ⅲ	4	b	
-5	-4	4Ⅰ	口縁		(7.0)											
63	G-	深鉢				(10.0)		(縄文)			上げ底 (薄手)		Ⅲ	1	a	
-6	-7	6Ⅰ	底													
63	H-	深鉢				(7.0)		LR縄文	横 斜め		上げ底		Ⅲ	1	a	
-7	-6	4Ⅱ	底													
63	E-	深鉢				6		Ⅱ-LR縄文	入念		平底		Ⅲ	1	a	
-8	-8	7Ⅰ	底													
60	G-	壺				3.4		無文	雑		上げ底		Ⅲ	2	b	
-9	-11	4Ⅰ	底													
60	F-	小鉢				3.2		無文	雑				Ⅲ	2	b	
-10	-9	4Ⅰ	底													
60	C-	深鉢			(22.0)			I.Ⅱa-平行沈線+磨消	横			(沈線施文後磨消)	Ⅲ	4	a	
-11	-12	5Ⅰ	口縁													
60	C-	深鉢			(30.0)			I.Ⅱa-平行沈線+磨消	横			(沈線施文後磨消)	Ⅲ	4	a	
-12	-12	5Ⅰ	口縁													
60	C-	深鉢			(21.0)			I.Ⅱa-平行沈線+磨消	横			(沈線施文後磨消)	Ⅲ	4	a	
-13	8b	5Ⅰ	口縁													

第45表 遺構外出土土器観察表(6)

単位 cm

種別 番号	図版 番号	発掘 区 位	器形 現 状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
90区	60 -14	8 a	D- 5 I	深鉢 胴体				II-磨消沈線文	横			沈線施文後磨消	III	4 a	
	60 -15	-13	D- 4 I	深鉢 胴体				II-磨消沈線文	横			(沈線施文後磨消)	III	4 a	
	60 -16	-19	C- 5 I	深鉢 胴体				II-磨消沈線文	横			(沈線施文後磨消)	III	4 a	
	60 -17	-14	Q- 11 I	小鉢 口縁	(16.0)			I. IIa-平行磨消縄文	横	小突起瘤組合		A器形	III	4 f	
	60 -18	-16	F- 5 I	台付鉢 口縁	(22)			I. IIa-平行磨消縄文	横				III	4 f	
91区	60 -1	-15	H- 8 II	台付鉢 口縁	(29.3)			I. IIa-平行磨消縄文	横	小突起3個1組 4箇所か			III	4 f	
	60 -2	-18	D- 8 II	深鉢 口縁				I. IIa-入組状磨消羽状縄文	横	肥厚		大流状口縁か	III	4 h	
	60 -3	-17	E- 5 I	台付鉢 口縁	(32.8)			I. IIa-平行磨消縄文	横	小突起3個1組			III	4 f	
	60 -4	-6	F- 4 I	深鉢 口縁	(21.6)			I. IIa-入組状磨消羽状縄文	横	肥厚			III	4 h	
	60 -5	-20	G- 4 II	深鉢 口縁	28.5			I. IIa-平行磨消羽状縄文	横			補修孔有	III	4 g	
	60 -6	-3	F- 5 II	台付鉢 口縁	(30.0)			I. IIa-縦位連弧状磨消縄文	横	肥厚		花弁状口縁	III	4 d	
	60 -7	-4	E- 6 I	深鉢 口縁	(20.0)			I. IIa-平行磨消羽状縄文 II-(入組状磨消羽状縄文)	横	横割小突起		A器形	III	4 g	
	61 -8	-1	C- 7 I	深鉢 口縁	(22.4)			I. IIa-平行磨消羽状縄文	横	小突起2個1組		A器形	III	4 f	
	61 -9	-5	F- 6 I	深鉢 口縁	(21.0)			I. IIa-平行磨消縄文 II-入組状磨消羽状縄文	横	横割小突起 2個1組		A器形	III	4 g	
	61 -10	-9	F- 8 II	小鉢 口縁	(19.0)			I. IIa-入組状磨消羽状縄文	横 斜め	小突起2個1組		A器形	III	4 h	
92区	61 -1	-7	F- 5 I	台付鉢 口縁	(31.5)			I. IIa-入組状磨消羽状縄文	横	小突起2個1組			III	4 h	
	61 -2	-8	H- 4 I	深鉢 口縁				I. IIa-入組状磨消羽状縄文	横	小突起2個1組			III	4 h	
	61 -3	-12	H- 5 I	深鉢 口縁	(30.0)			I. IIa-入組状磨消羽状縄文	横	肥厚			III	4 h	
	61 -4	-13	E- 4 II	台付鉢 口縁	(26.8)			I. IIa-入組状磨消羽状縄文	横	肥厚			III	4 h	

第46表 遺構外出土土器観察表(7)

単位 cm

棟区 番号	図取 番号	発掘 地区	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
92	61	H-	深鉢					II-入組状磨消羽状縄文	横 縦				III	4 g	
-5	-11	4 II	胴体												
61	H-	長頸壺			(10.1)			I-IIa-入組状磨消縄文	横				III	4 h	口唇部を欠く
-6	-10	8 I	口縁												
61	F-	深鉢						II-入組状磨消羽状縄文	横 縦				III	4 g	
-7	-17	5 I	胴体												
61	H-	深鉢						II-入組状磨消羽状縄文	縦 斜め				III	4 g	
-8	-1	4 I	胴体												
61	D-	深鉢						II-入組状磨消羽状縄文	横				III	4 g	
-9	-14	7 I	胴体												
61	C-	深鉢						II-入組状磨消羽状縄文	横				III	4 g	
-10	-15	4 I	胴体												
61	H-	壺						II-入組状磨消縄文					III	4 g	
-11	-16	8 II	胴体												
61	C-	台付鉢				(6.6)		II-入組状羽状縄文	入念 撞		脚内 調整撞		III	4 g	
-12	-19	8 II	台												
61	H-	壺			13.0			I-平行磨消無文帯 IIa-平行磨消縄文	横				III	4 i	
-13	-18	8 II	口縁												

第47表 遺構外出土土器分類表

分類 型式名 現 状	第 I 群 (早期)					第 II 群(前期)		第 III 群 (後期)				第 IV 群(晩期)				合 計			
	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	1 類	2 類	1 類	2 類	3 類	4 類	1 類	2 類	3 類					
	(具装) A 系 文系	蜜 A II	沢 II	ム I	シ I (条装) 文系	赤 堂 式	早 輪 田 V 類	( )	十 腰 内 IV 群				大 洞 B 式	大 洞 B C 式					
完 形						計		計	縄文	無文	沈線文	磨消 縄文	計	三叉文	羊 状	函 文	捺 縄 文	計	2
復 原									1	4		5	10						10
部 位	口 縁 部				2	2			366	102	7	214	689	2	2			695	
	胴 体 部	1		15	1	32	49	3	2,948	854	113	814	4,729	5	26			4,812	
	底 部				1	1			48	85	1	10	144	1	2			148	
	注 口・把 手									3			3					3	
	不 明					2							106					108	
計	1		15	1	35	54	3	3	3,362	1,044	121	1,038	5,671		8	30	38	5,766	
比 率	全 体					0.90		0.05					98.40					0.60	
	第 III 群								59.3	18.4	2.1	18.3	98.1						



## イ 土 製 品

第 一 層から出土した土製品は、6点である（第93図、第49表、図版63）。土製品の種類は、巾着（きんちやく）状土製品1点、土偶4点、円盤状土製品1点である。巾着状土製品は完形品で、土偶はいずれも破片である。これらの土製品は、遺構に伴って出土したものはなく、すべて第 一 層に遺棄されたような状態で出土した。G-4グリッドから土偶が2点出土した点が注目される。

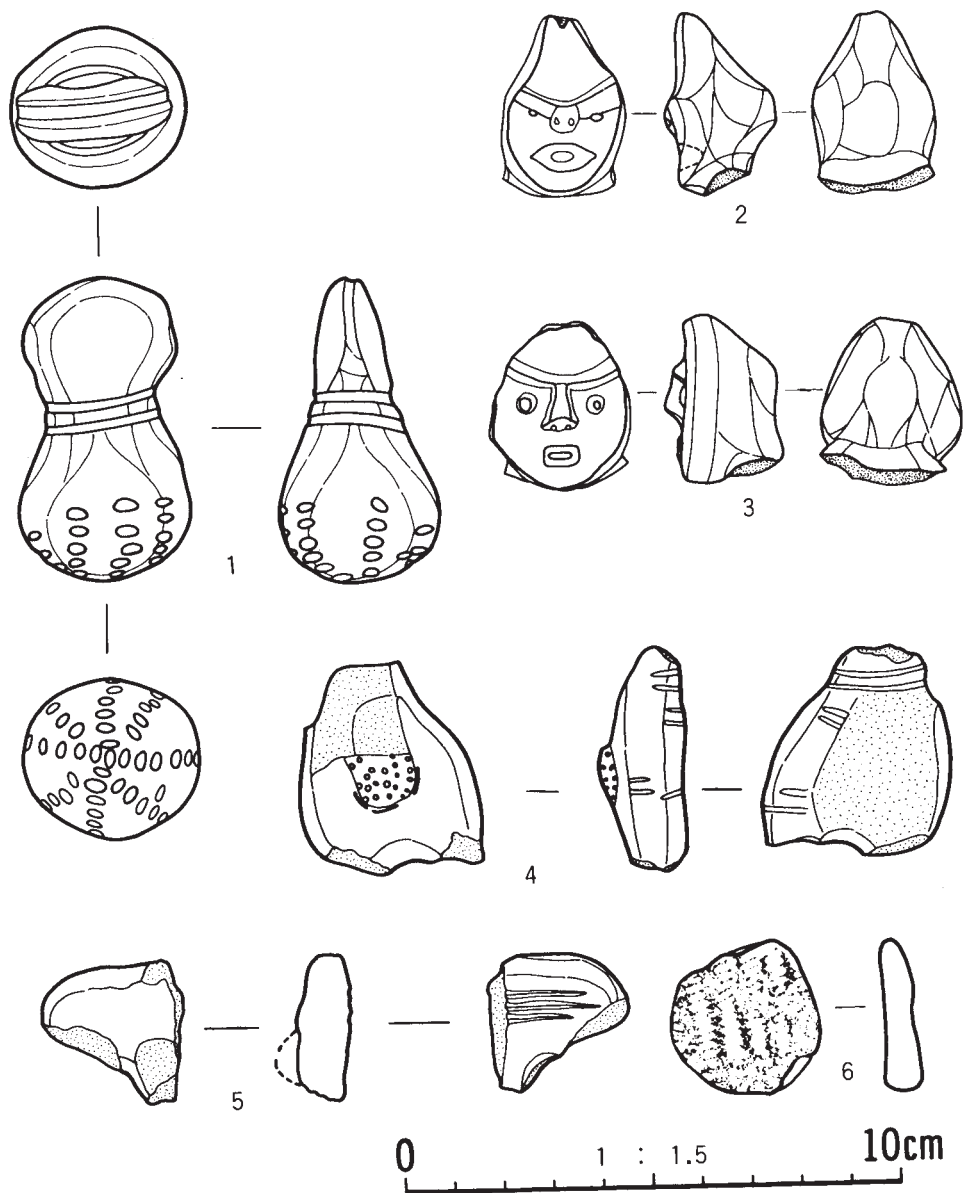
第48表 土製品観察表

挿図番号	図版番号	発掘区	層位	形態名称	現状部位	文 様	胎 土	焼 成	色 調	大 き さ (単位cm/g)
93図-1	63-13	H-4	II	巾着状	完 形	上半部に1、2条の浅い沈線、下半部に刺突文	良	堅	橙灰黒色	高さ 6.0 上幅3.0×0.4 最小径 2.3 最大径 3.4 重さ56.8g
-2	-10	H-6	I	土 偶	頭 部	(粘土貼付)	普 通	良	淡黄・褐色	現高 3.6 幅 2.5 厚さ 2.1
-3	-11	E-5	II	土 偶	頭 部	(粘土貼付)	良	良	褐 灰 色	現高 3.5 幅 2.9 厚さ 2.2
-4	-12	G-4	I	土 偶	胴 体 部	腹部にまるい刺突、沈線	普 通	良	灰黄褐色	現高 0.4 幅 3.0 厚さ 1.5
-5	-9	G-4	I	土 偶	肩 部	背面に沈線3条	良	良	黒 褐 色	現高 2.8 幅 2.8 厚さ 1.0
-6	-14	G-7	I	円盤状	完 形	R.L縄文	微砂含	軟	灰 褐 色	径 3.1 厚さ 0.5 重さ 8g

第93図1は、巾着（注1）状土製品と仮称してみたい。ものを入れる袋の中央を紐で縛ったような形状をしており、スタンプ状土製品とは異なる。立面の上半部は扁平な円形で、下半部が球状を呈している。文様は、浅くやや幅の広い沈線と目形の刺突で構成されている。ややしぼった胴体部の中央に2条の沈線、また、上半部の開口部周縁に1条の沈線を巡らしてある。球体状の下半部文様は、最大径のある部分から下位にかけて、目形の刺突を「米」の字状に施文している。施文順序は、横画から縦画の順とみられる（以下不明）。施文以前に丁寧に研磨したようで、器面全体に光沢がある。大畑町水木沢遺跡の第3号住居跡床面から出土した土製品と酷似しているが、水木沢遺跡ではスタンプ状土製品と称している。

第93図2は、あまり写実的な土偶ではないが、顔面は、五角形を逆にしたような形状である。まゆ毛と鼻は、粘土紐の貼り付けによってわずかに突出して、小さな鼻孔が付されている。眼は、左右ともかすかにくぼんでいるが、形は、非対称である。口は大きく開いて、歯を示すような刺突がある。頭部は、結髪を示しているのか、頭頂部と後頭部が瘡状に盛りあがっている。器面調整は、なでつけてあるが、やや粗雑である。造形は、頭部と胴体部を個別につくってから接合している。その痕跡は首部断面に認められる。

第93図3の土偶は、しもぶくれの顔で、まゆ毛、鼻、眼、口は粘土紐を貼り付けて表現している。鼻は大きく、高く、明瞭な鼻孔が付加されているが、顔面全体は扁平である。頭部は、



第93図 土製品実測図

第93図2の土偶と共通している。また、意識的に焼成したものが否かは判断できないが、頭頂部とまゆ毛から顎の部分は、黒味の濃い灰褐色をおび、その他の部分が褐色を呈している。器面調整は、やや雑である。

第93図4の土偶は、全体に風化していることと、農具などによる損傷があるため文様の不明な個所がある。胴体部中央に貼り付けによる凸部があり、径1mm以下の円形の刺突が加えられ

ている。そのほか、かすかな沈線文様が正面、側面、背面に認められるが、全体の文様構成は不明である。

第93図5の土偶は、首部から右肩部及び胸部の一部を残すのみの破片である。右乳房部分が剥離したような痕跡から、正面を推定したが、これを正面とすると背面には3条の浅い沈線が施文されてある。製作方法は、粘土で胴体の概形をつかって芯材とし、その上に化粧粘土を塗り重ねた有様が断面に認められる。

第93図6の土製品は、縄文土器片を打ち欠いて円盤状にしたもので、直径約3cm、厚さ0.5cm、長さ8g、RL縄文が施文されている。この土製品は、馬場瀬2遺跡からも出土している。

注 (北林)

- 1 巾着とは、布又は革などで作り、口に緒をめぐらして引き括るようにした袋。中に金銭、薬などを入れて携帯できるようにしたもの。『国語大辞典』尚学図書。昭和56年。

#### ウ 石器・石製品・礫

、 層出土の石を素材とする遺物を次のように分類し、出土点数をともに表記する。

第49表 石器・石製品・礫分類表

		A地区	B地区	C地区	地区外	計	
石 器	I 磨製石器	A 磨製石斧	9			9	
	II 剥片石器	A 尖頭器	13		1	1	15
		B 石 匙	4				4
		C 石 錐	4				4
		D 異形石器	2				2
		E R-フレイク	17				17
		F 欠損品	3	1			4
	剥片石器の素材	石 核	18				18
		剥 片	195	5	1		201
		原 材	33	8			41
	III 礫石器	A すり石	14	7	2		23
		B 特殊すり石				1	1
		C 円盤状石器	3	1			4
		D 打製石斧	1				1
E 石 皿		5				5	
石 製 品	石剣(石刀)	1				1	
	石 棒		1			1	
礫		313	63	21		397	

## A地区（第94図）

遺構及び土器の分布と重複しており、縄文時代後期の所産とみられる。

### 一 A 磨製石斧（第98図1～8）

9点出土した。8点は遺構（竪穴住居）内からの出土である。

すべて欠損品であるが、基部半ばで折損したものが多く、基端に残る敲打痕とともに、使用法の激しさを示している。原形に近いもの（第98図1・2）でも、刃部は全くつぶれている。刃部における使用痕の観察できる例としては、刃縁に対して斜交する線状痕をもつものがある。ほかに転用使用痕として、基部に敲打痕が集中し、浅いくぼみをなすものがある（第98図3・7）。

形態的には、a 基端の尖る細身のもの（第98図1・4・6） b 基端の角ばる広身のもの（第98図2・5）等がある。

第50表 磨製石斧計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第98図8	3号・床面	(84)	60	32	(260)	輝緑岩	基部欠損、刃部がつぶれている
2	第98図6	"・覆土	(53)	(35)	(26)	(60)	砂岩	刃部欠損、基端に敲打痕
3	第98図7	10号・"	(51)	(38)	(24)	(60)	輝緑岩	刃部欠損、基部片面に敲打痕
4	第98図4	"・"	(85)	(44)	(28)	(160)	緑色凝灰岩	刃部欠損、基端に敲打痕
5	第98図1	"・"	(97)	40	22	(130)	"	刃縁欠損、基端に敲打痕
6	第98図5	"・"	(78)	(45)	(27)	(160)	輝緑岩	刃部欠損、基部両面に敲打痕
7	第98図9	"・"	(16)	(44)	(14)	(10)	"	基部欠損、刃縁に斜行する線状痕
8	第98図2	15号・床面	(92)	52	27	(190)	"	刃縁欠損、基端に敲打痕
9	第98図3	H-4・II	(71)	(46)	(28)	(150)	"	刃部欠損、基端に敲打痕、基部片面に敲打痕

注1. 計測値の単位は、長さ・幅・厚さ(cm)、重さ(g)である。

2. ( )内の計測値は、現存値を示す。

3. 出土区の3号は第3号遺構、H-4はH-4グリッドを示す。以下同様の表記である。

### - A 尖頭器（第99図9～21）

石鏃以外に、石鏃としてはやや長大なものも、尖頭器として一括した。

13点中、6点が遺構（竪穴住居）内から出土したものである。

完形品は7点、ほかは、すべて尖頭部先端を欠損している。完形品のうち、1例は基部にピッチ状の付着物を残している。

形態的には、a 有柄のもの（第99図17～20） b 無柄一円基ないし尖基のもの（第99図10～16） c 無柄 - 平基のもの（第99図9） d 無柄 - 凹基のもの（第99図21）がありその

中でも、それぞれ平面形と大きさにバラツキがある。

第51表 尖頭器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第99図17	7号・覆土	27	12	5	1.2	珪質頁岩	完形、有柄、基部にタール状の付着物
2	第99図12	10号・"	(18)	13	6	(1.0)	玉ずい	先端欠損、無柄—円ないし尖基
3	第99図18	13号・"	(26)	12	5	(1.1)	"	先端欠損、有柄
4	第99図19	"・"	35	12	4	1.4	珪質頁岩	完形、有柄
5	第99図10	"・"	(26)	14	5	(1.2)	玉ずい	先端欠損、無柄—尖基
6	第99図13	15号・"	17	10	3	0.5	珪質頁岩	完形、無柄—円ないし尖基
7	第99図21	F-3・—	(20)	18	3	(0.6)	"	先端欠損、無柄—凹基
8	第99図16	C-6・Ia	(32)	13	4	(1.5)	"	先端欠損、無柄—円ないし尖基
9	第99図20	F-6・II	22	9	2	0.3	玉ずい	完形、有柄—小型
10	第99図14	E-7・Ia	20	9	3	0.4	珪質頁岩	完形、有柄
11	第99図15	C-9・"	18	11	5	0.9	玉ずい	完形、無柄—尖基
12	第99図11	D-9・"	(17)	15	6	(1.0)	"	先端欠損、無柄—尖基
13	第99図9	D-10・"	24	17	3	1.0	珪質頁岩	完形、無柄—平基

- B 石匙 (第99図22・23、第100図24・26)

4点出土した。3点は遺構(竪穴住居)内からの出土である。

すべて完形品のいわゆる縦形石匙であるが、a 刃部の先端に調整剥離が加えられたもの(第99図23、第100図24)、b 未調整のまま残されているもの(第99図22、第100図25)がある。

第52表 石匙計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第100図26	10号・覆土	49	21	9	5.1	珪質頁岩	完形、作業角L=54°、R=56°縦形
2	第100図24	13号・"	72	28	11	19.8	"	完形、作業角L=65°、R=57° "
3	第99図22	E-4・II	73	24	8	12.0	"	完形、作業角L=43°、R=58° "
4	第99図23	G-5・Ia	72	40	11	23.9	"	完形、作業角L=53°、R=56° "

注1. 作業角Lは、正面図左側縁部における剥離角を、1剥離面毎に計測し、平均値を示したものである。

2. 作業角Rは、正面図右側縁部における剥離角を、1剥離面毎に計測し、平均値を示したものである。

以下、同様の表記である。

- C 石錐 (第100図29~32)

4点出土したが、遺構(竪穴住居)内から1点、遺構外からの3点の出土である。

すべて完形品であり、相対的に、a 大型のもの(第100図31・32)、b 小型のもの(第100図29・30)がある。小型のものは、大型のものに比べて、錐部が明瞭に作出され、また、錐部

の断面がより扁平である。

第53表 石錐計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第100図30	7号・覆土	17	11	4	0.6	珪質頁岩	完形、錐部先端が磨滅
2	第100図29	G-7・表土	18	9	3	0.4	望土	〃
3	第100図32	C-10・Ia	32	27	9	4.0	珪質頁岩	〃
4	第100図31	D-10・〃	23	17	7	2.1	〃	〃

- D 異形石器 (第100図27・28)

いわゆる定形石器には属さないが、面調整が加えられ、特殊な器形が作出されたものである。

2点共、遺構外の近接した位置から出土した。

第100図28は、全体がカギ状に作出されているが、先端は鈍い。第100図27は、全体が鋸歯状に構成され、両端が、つまみ状の部分と先端とに分れている。

第54表 異形石器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第100図27	D-8・II	31	11	4	1.1	黒曜岩	完形
2	第100図28	D-9・Ia	23	18	9	2.4	玉ずい	〃

- E R-フレイク (第100図25・33~40、第101図41~46)

剥片の一部に調整剥離の加えられたものを一括した。

17点出土したが、遺構(竪穴住居)内からは、6点の出土である。

調整剥離の加え方によって、a 作業側縁が単数のもの(第100図40・45)、b 作業側縁が複数のもの(第101図41・42)、c 尖端部の作出されたもの(第100図35・36)等の区別がある。

第55表 R-フレイク計測表(1)

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第100図36	3号・覆土	18	14	6	1.0	珪質頁岩	尖端角=56°
2	第101図46	〃・〃	60	31	5	8.1	〃	作業角=50°
3	第101図41	〃・〃	90	29	11	32.4	〃	作業角=46°、72°
4	第101図42	10号・〃	(57)	25	8	(7.6)	〃	作業角=76°、48°
5	第100図37	13号・〃	31	19	8	4.6	〃	作業角=65°、53°
6	第101図43	〃・〃	47	22	11	6.2	〃	尖端角=35°
7	第100図25	G-3・II	(64)	32	14	(23.9)	〃	作業角=61°、尖端角=10°
8	—	C-5・Ia	(26)	38	9	(9.2)	〃	作業角=57°
9	第101図44	E-5・〃	99	78	19	120.0	〃	作業角=67°、35°
10	—	F-5・〃	68	28	8	13.4	〃	作業角=61°

第55表 R-フレイク計測表(2)

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
11	第101図45	F-5・Ia	(48)	29	9	(8.1)	珪質頁岩	作業角=52°
12	第100図39	G-5・"	27	59	13	15.8	"	作業角=58°、56°
13	第100図34	H-6・表土	23	18	6	1.9	"	作業角=52°、48°
14	第100図40	E-7・Ia	25	(52)	14	12.0	"	作業角=62°
15	第100図38	"・Ia	27	18	6	4.4	"	
16	第100図33	G-8・表土	25	20	10	3.4	玉ずい	作業角=60°、65°
17	第100図35	C-10・Ia	18	13	8	1.3	珪質頁岩	尖端角=60°

注1. 作業角は、調整剥離の加えられている側縁部における剥離角を、1剥離面毎に計測し、平均値を示したものである。  
 2. 尖端角は、調整剥離の加えられている先端部における計測値である。  
 以下、同様の表記である。

- F 欠損品 (第101図47~49)

遺構(竪穴住居)内から1点、遺構外から2点出土している。

主要剥離面を残すもの(第101図47・49)と、両面加工されたもの(第101図48)とあるが器種は不明である。

第56表 欠損品計測表

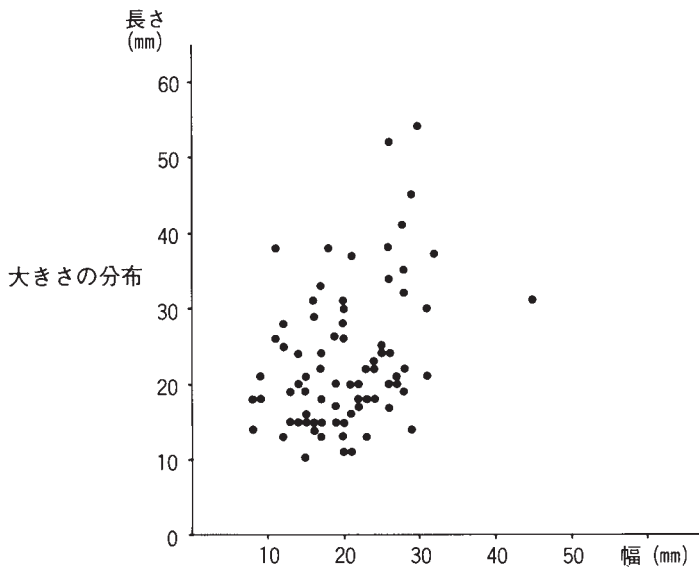
No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第101図47	3号・覆土	(33)	(20)	(8)	(4.9)	珪質頁岩	作業角=(59°)(59°)
2	第101図49	F-8・Ia	(20)	(21)	(6)	(2.4)	"	作業角=(58°)(48°)
3	第101図48	D-9・"	(19)	(15)	(9)	(2.3)	玉ずい	

剥片石器の素材

石核は、18点出土したが、部分的に表皮を残しているものが多い。従って推定される原材の大きさ及び残された剥離面の大きさからみて、石鏃・石錐等、小型の剥片石器製作の素材を剥離しうる程度のもののみである。石匙等、比較的大型の剥片石器製作にかかわるものは出土していない。

剥片の剥離に際して、打面を固定している例はない。転移の仕方にも特に規則性がみられない。部分的には、90度及び180度単位で転移する場合もあるが、全体として一貫性をもつものがない。

剥片は、195点出土したが、完形品は86点(44.1%)である。破損品のうち、主要剥離面に剥離痕を残すものが56点(51.4%)ある。偶発的なものとしては比率が高い。ただし、石器の素材としうるほどの大きさのものはない。

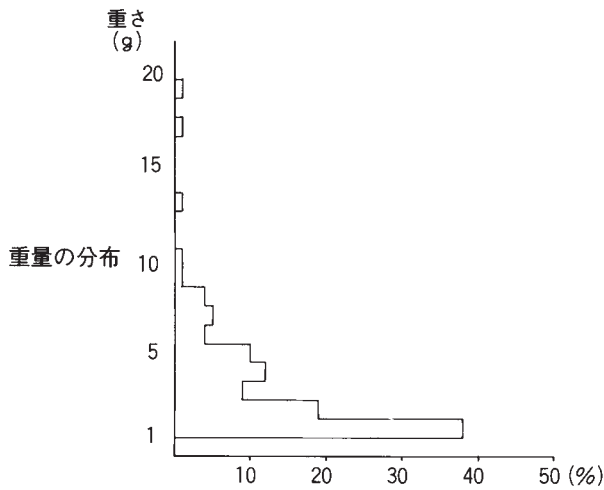


(長さ)

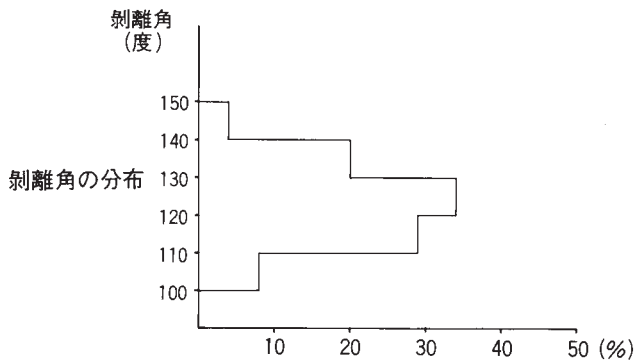
$n = 86$   
 $\bar{x} = 22.95$   
 $\sigma = 8.92$   
 $\max = 54.0$   
 $\min = 10.0$

(幅)

$n = 86$   
 $\bar{x} = 20.47$   
 $\sigma = 6.52$   
 $\max = 45.0$   
 $\min = 8.0$



$n = 86$   
 $\bar{x} = 3.22$   
 $\sigma = 3.37$   
 $\max = 18.9$   
 $\min = 0.4$



$n = 81$   
 $\bar{x} = 122.90$   
 $\sigma = 8.84$   
 $\max = 142.0$   
 $\min = 104.0$

第95図 A地区出土剥片計測グラフ



完形品については、長さ、幅、重さ、および剥離角について計測し、グラフ化した(第95図)。  
 原材は、33点出土したが、25点は破損している。やや扁平なものが多い。最小のものでは、約1×2cmほどのものがある。このようなものが、すべて剥片石器の原材としてもちこまれたものであるかは、疑問である。

- A すり石(第102図50~57)。

いわゆるすり石、敲石、くぼみ石の類を一括した。

遺構(竪穴住居・竪穴)から3点、遺構外から11点出土した。

完形品は9点である。基本的な使用痕として、擦痕と敲打痕があり、これらが残される部位によって、a 擦痕が面に残るもの(第102図52・53) b 擦痕が側縁部・端部に残るもの(第102図57) c 敲打痕が面に残るもの - くぼみとして観察される(第102図50~52) d 敲打痕が側縁部・端部に残るもの(第102図53~57)がある。また、それぞれ使用痕の種類と部位が、単数のものと複数のものがある。

第57表 すり石計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第102図57	10号・覆土	84	58	36	384	ホルンフェルス	完形、使用痕は、 $x_2$ 、 $y_2$
2	第102図55	"・"	119	68	48	632	安山岩	完形、使用痕は、 $y_2$
3	第102図51	12号・"	116	62	41	420	砂岩	完形、使用痕は、 $y_1$
4	-	B-3・II	131	50	30	222	"	完形、使用痕は、 $x_1$ 、 $y_2$
5	第102図54	"・"	121	46	28	240	頁岩	完形、使用痕は、 $y_2$
6	第102図53	D-3・—	119	85	56	732	安山岩	完形、使用痕は、 $x_1$ 、 $y_2$
7	-	G-3・II	95	55	37	171	凝灰岩	完形、使用痕は、 $y_1$
8	第102図52	C-5・表土	(114)	34	(24)	(190)	頁岩	一端欠損、使用痕は、 $x_1$ 、 $y_1$
9	第102図56	F-5・II	95	85	38	580	"	完形、使用痕は、 $y_2$
10	-	E-6・Ia	(133)	(84)	(48)	(140)	花崗岩	破片、使用痕は、 $y_2$
11	第102図50	J-6・"	139	47	25	233	凝灰岩	完形、使用痕は、 $y_1$
12	-	"・"	(108)	(77)	(57)	(430)	"	一側欠損、使用痕は、 $y_1$
13	-	D-9・"	(60)	(47)	(17)	(49)	安山岩	破片、使用痕は、 $x_2$ 、 $y_2$
14	-	C-10・"	(74)	(36)	(31)	(103)	砂岩	破片、使用痕は、 $x_2$ 、 $y_2$

- 注1. 使用痕  $x_1$  は、面に残る擦痕を示す。  
 2. 使用痕  $x_2$  は、側縁部・端部に残る擦痕を示す。  
 3. 使用痕  $y_1$  は、面に残る敲打痕を示す。  
 4. 使用痕  $y_2$  は、側縁部・端部に残る敲打痕を示す。  
 以下、同様の表記である。

- C 円盤状石器 (第102図58・59)

やや扁平な円形礫の周縁部を一周する「すり面」をもつものである。

遺構(竪穴住居)内から3点出土したが、完形品は2点である。

最終的な使用痕(整形痕)は「すり面」であるが、これを加える前に敲打によって整形したらしい痕跡を残すものがある(第102図58)。あるいは、一連の作業による複合痕であるかもしれない。

第58表 円盤状石器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第102図59	3号・覆土	65	64	39	320	ホルンフェルス	完形
2	第102図58	10号・"	57	59	35	200	"	完形、すり面に敲打痕
3	—	15号・"	—	—	—	(60)	"	破片、すり面に敲打痕

- D 打製石斧 (第103図60)

第3号遺構(竪穴住居)から1点出土した。

粗く打欠いて整形しているが、鋭利な刃部は作出されていない。

第59表 打製石斧計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第103図60	3号・覆土	129	53	35	250	砂岩	完形

- E 石皿 (第103図62~64)

5点出土した。遺構(竪穴住居)内からは3点の出土である。遺構外出土のもので、3点接合した資料がある。

使用面により、a 一面のみ使用したもの(第103図62・63)、b 両面使用したもの(第103図64)がある。また、利用する前に、素材を整形したらしい痕跡を残すものがある(第103図63)。

第60表 石皿計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第103図63	3号・覆土	(260)	(152)	(98)	(3,200)	砂岩	一側縁欠損、敲打により整形
2	—	10号・"	—	—	—	(150)	"	破片
3	—	13号・"	(197)	(130)	(56)	(2,530)	安山岩	中央部破片
4	第103図64	表採・—	(200)	(168)	(80)	(1,750)	砂岩	中央部破片、両面使用
5	第103図62	C-3・II	(400)	(366)	(118)	(15,000)	安山岩	中央部破片、C-5グリッド出土の資料と接合

石製品 (第103図61)

第15号遺構(竪穴住居)から、石剣又は石刀状に整形されたものが出土している。

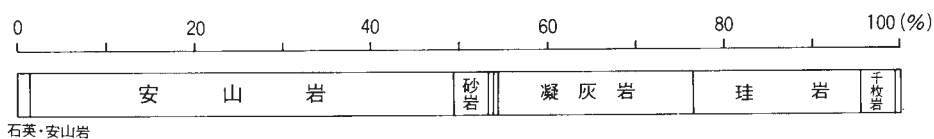
縦に割れた破片である。

第61表 石製品計測表

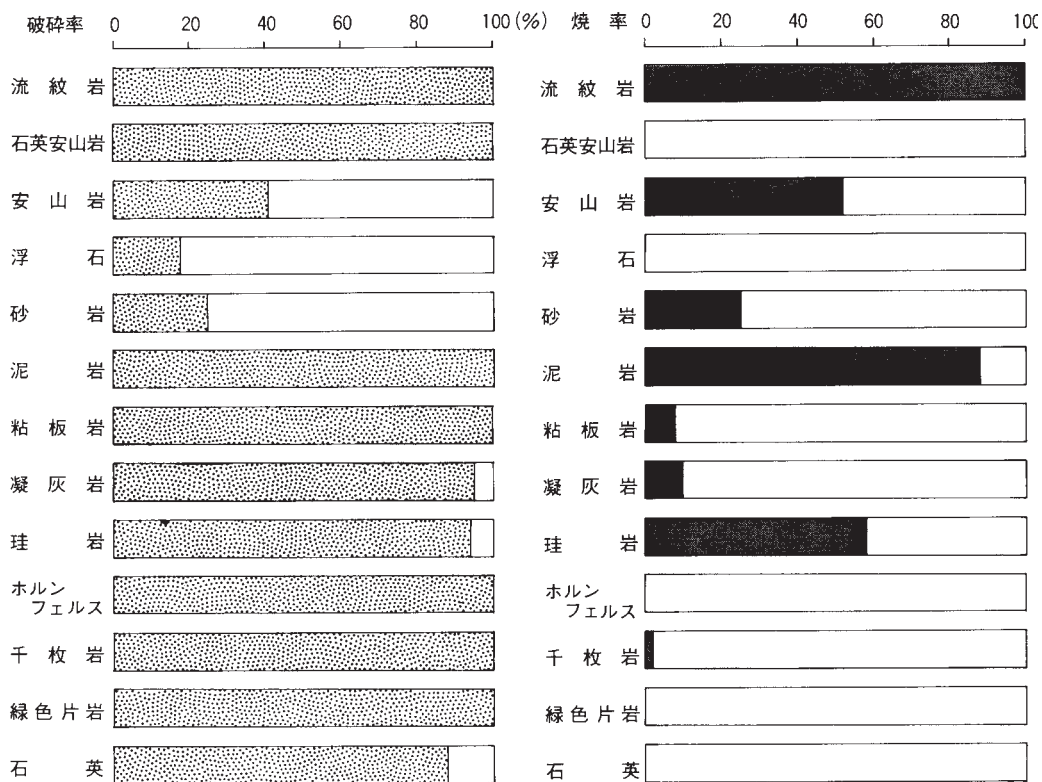
No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第103図61	15号・覆土	(118)	(24)	(12)	(30)	粘板岩	破片

礫

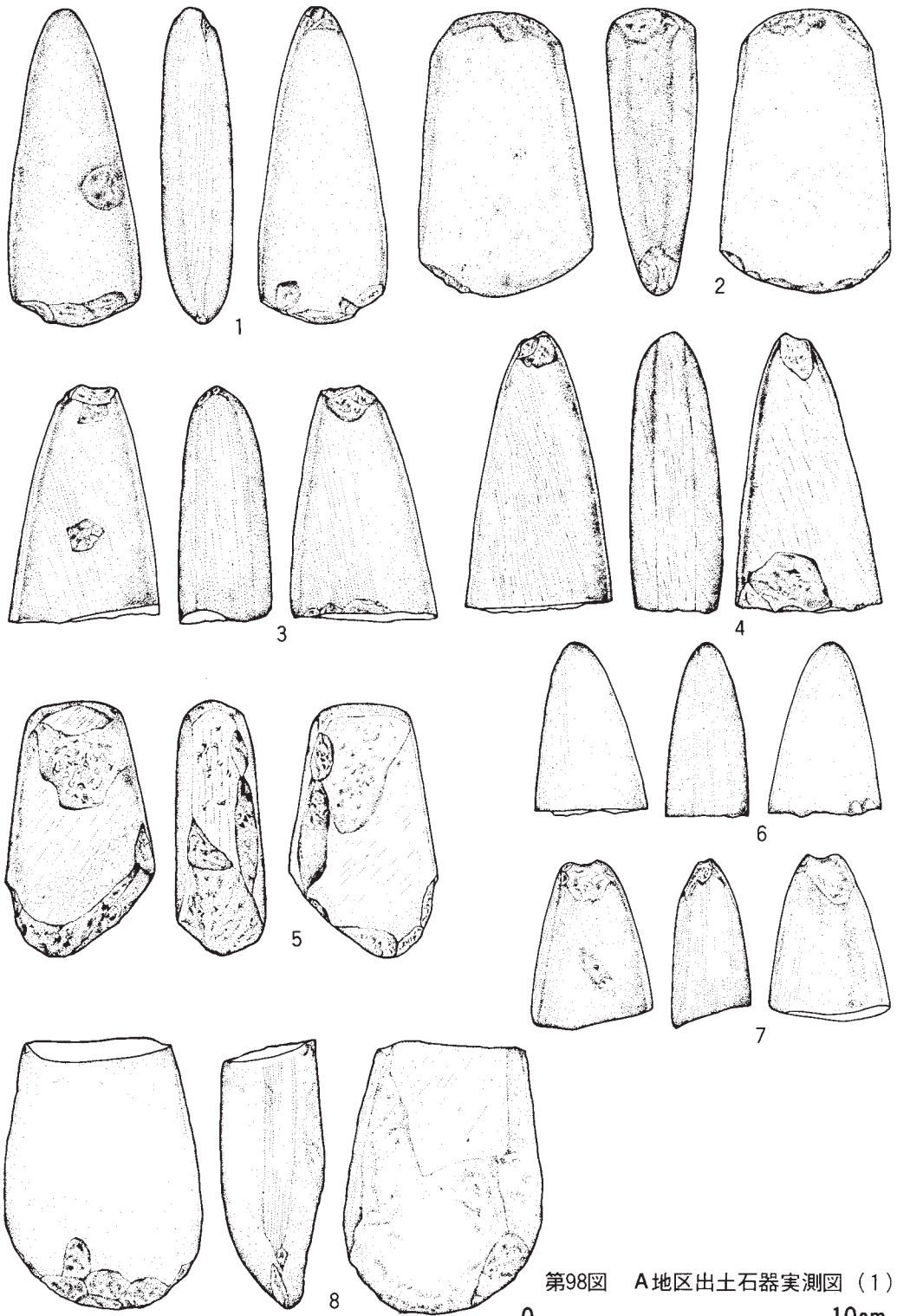
遺構内外合わせて、313点出土しているが、安山岩、凝灰岩、埋岩（チャート）で大半を占めている（第96図）。石種別の破碎率及び焼率は、第97図に示すとおりである。出土量の多いものの中では、安山岩、砂岩の破碎率が低く、安山岩、珪岩（チャート）の焼率が高い。



第96図 A地区出土礫構成比



第97図 A地区出土礫、破碎率と焼率

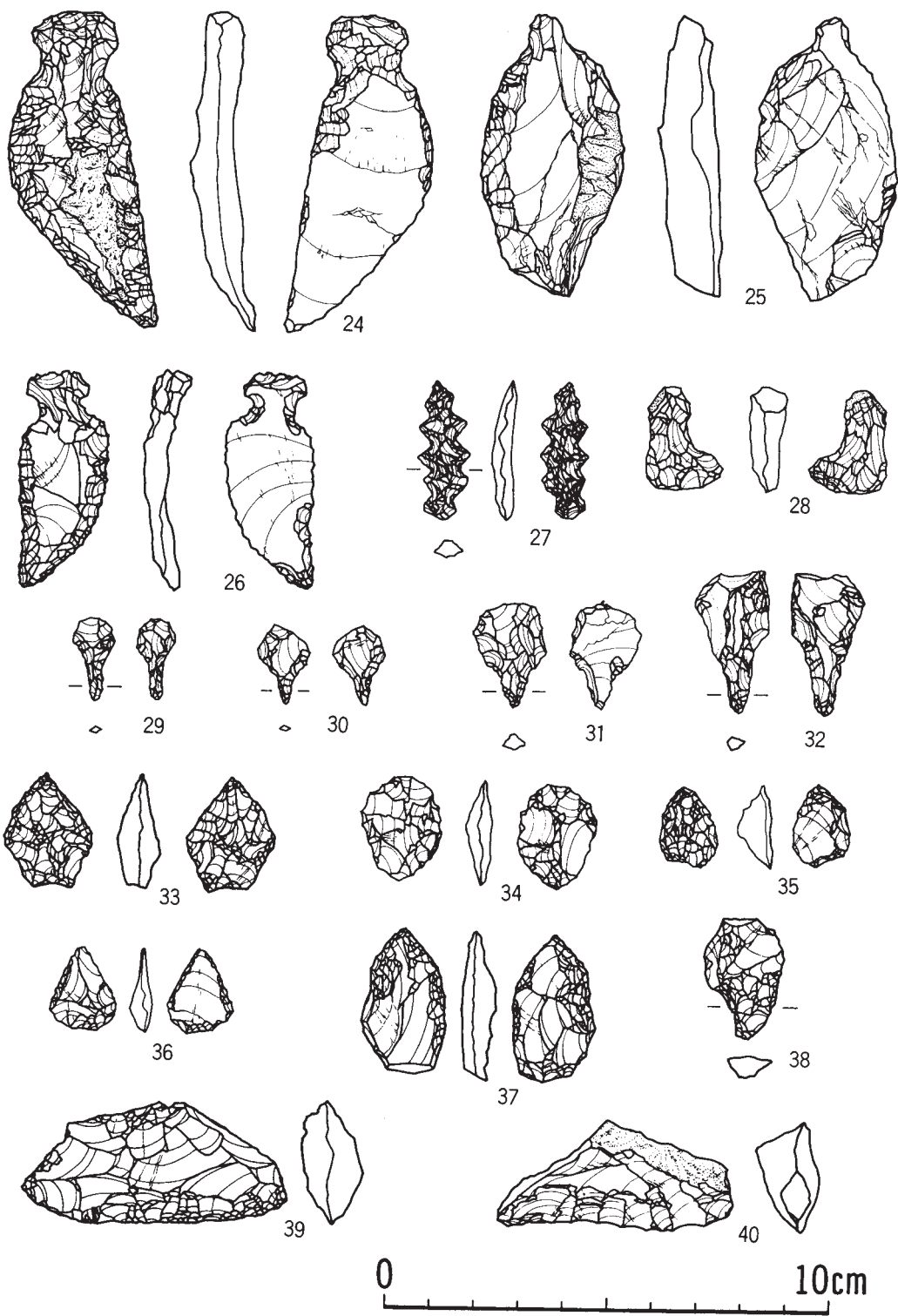


第98图 A地区出土石器实测图(1)

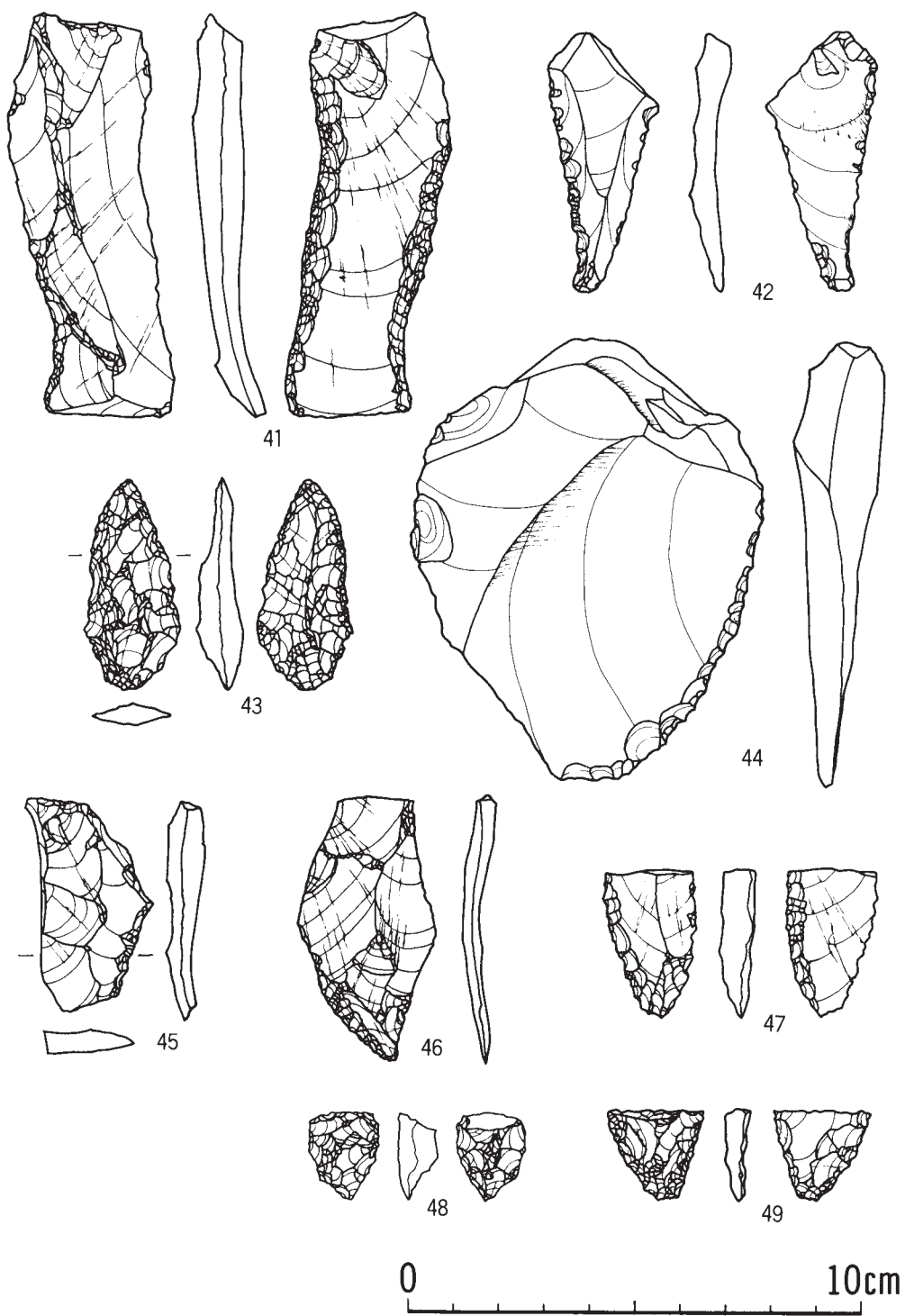
0 10cm



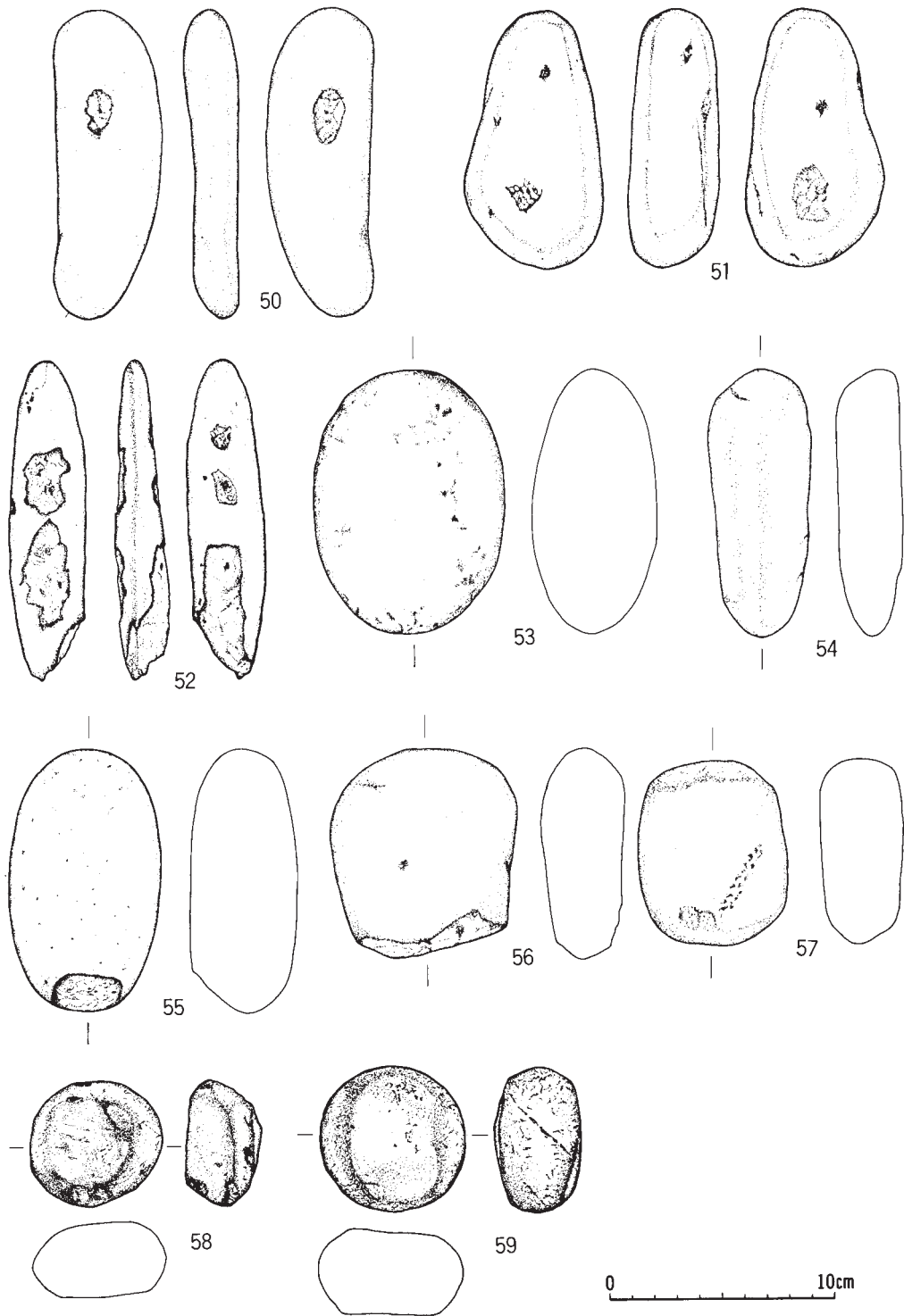
第99图 A地区出土石器实测图(2)



第100图 A地区出土石器实测图(3)

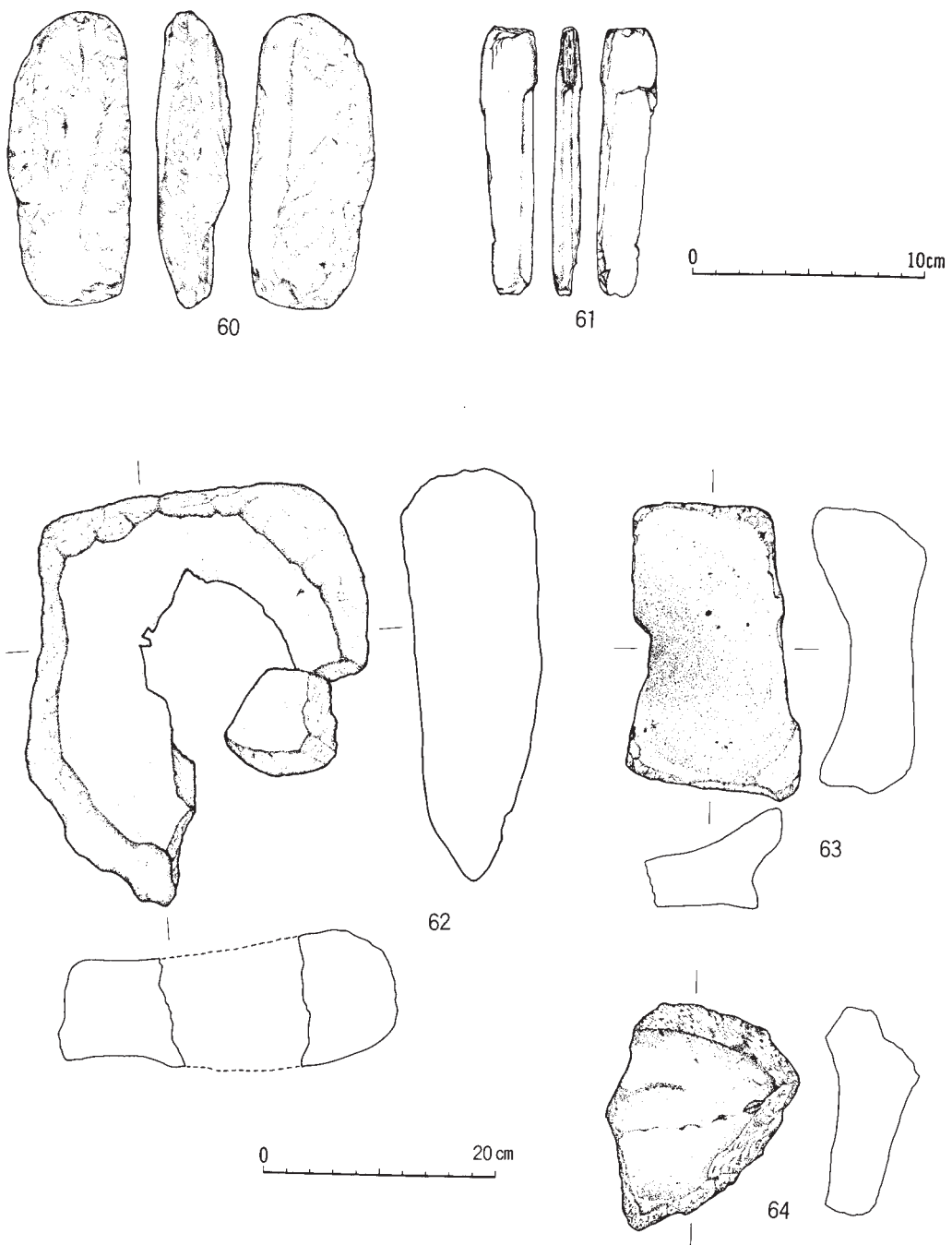


第101图 A地区出土石器实测图(4)



第102图 A地区出土石器实测图(5)





第103图 A地区出土石器实测图（6）

**B地区（第104図）**

土器の分布とほぼ一致し、散在しており、縄文時代後・晩期の所産とみられる。

**- F 欠損品（第107図1）**

Q - 12グリッドから1点出土しただけである。

**第62表 欠損品計測表**

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第107図1	Q-12・II	(28)	(23)	(7)	(4.5)	珉質頁岩	作業角 = (60°)

**剥片石器の素材**

剥片5点、原材8点出土したが、石核は出土していない。

**- A すり石（第108図2～5）**

7点出土したが、完形品は3点である。

A地区における、a（第108図5）b、C（第108図2）d（第108図3・4）がみられる。

**第63表 すり石計測表**

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第108図2	P-9・Ia	(116)	51	(31)	(291)	砂岩	一端欠損、使用後は、y <sub>1</sub> 、y <sub>2</sub>
2	第108図4	Q-9・"	186	80	50	954	"	完形、使用痕は、y <sub>2</sub>
3	—	N-10・II	135	42	31	245	"	完形、使用痕は、y <sub>2</sub>
4	—	Q-10・"	182	49	49	860	"	完形、使用痕は、x <sub>1</sub> 、x <sub>2</sub> 、y <sub>2</sub>
5	第108図5	Q-11・Ia	118	68	38	1,030	安山岩	完形、使用痕は、x <sub>1</sub> 、y <sub>2</sub>
6	第108図3	R-12・—	(86)	70	28	(270)	"	一端欠損、使用痕は、y <sub>2</sub>
7	—	P-18・II	(75)	(36)	(27)	(77)	"	破片、使用痕は、x <sub>1</sub>

**- C 円盤状石器（第108図6）**

Q - 11グリッドから完形品が1点出土した。

**第64表 円盤状石器計測表**

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第108図6	Q-11・Ia	61	58	30	190	ホルンフェルス	完形、すり面に敲打痕

**石製品（第108図7）**

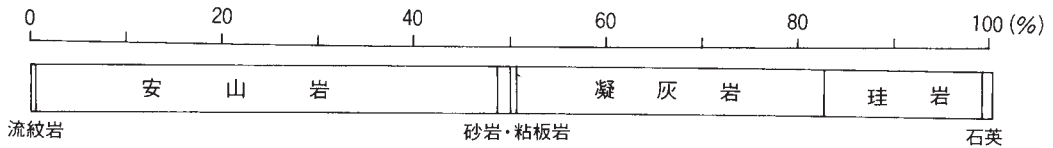
P - 18グリッドから石棒が1点出土した。両端を欠損したものである。

**第65表 石製品計測表**

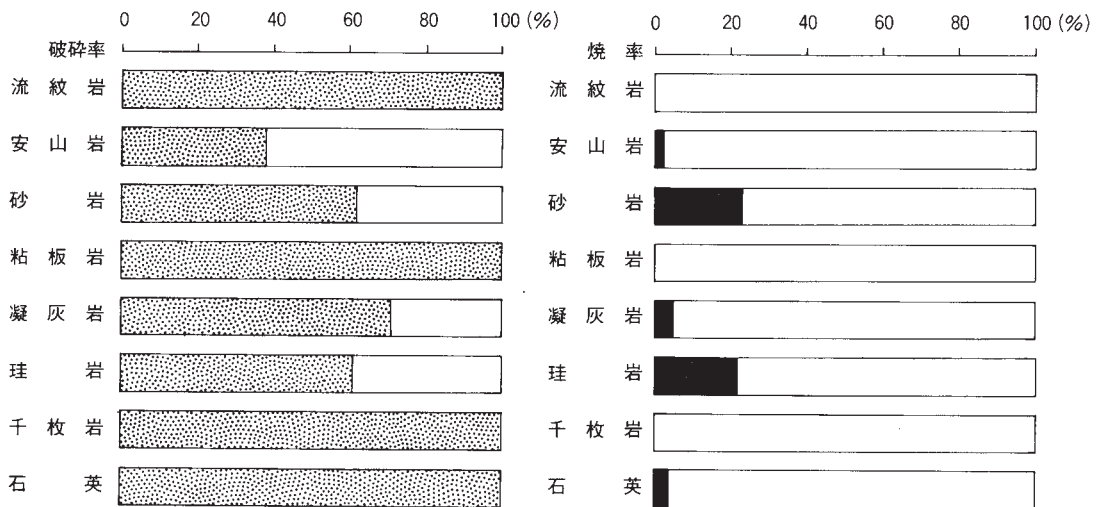
No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第108図7	P-18・II	(240)	(26)	(22)	(280)	粘板岩	破片

礫

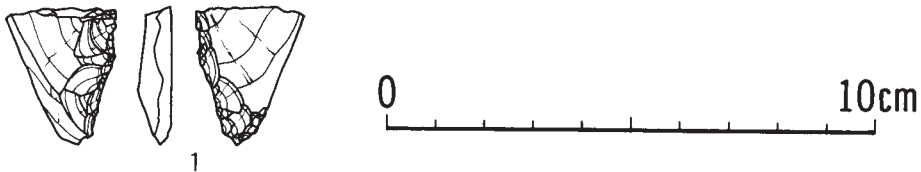
63点出土した。A地区と同様、安山岩、凝灰岩、珪岩（チャート）で大半を占めるが、相対的には、凝灰岩の比率が高く、珪岩（チャート）の比率が低くなっている（第105図）。石種別の破砕率及び焼率は、第106図に示すとおりであるが、安山岩の破砕率が低く、珪岩（チャート）の焼率が高い。



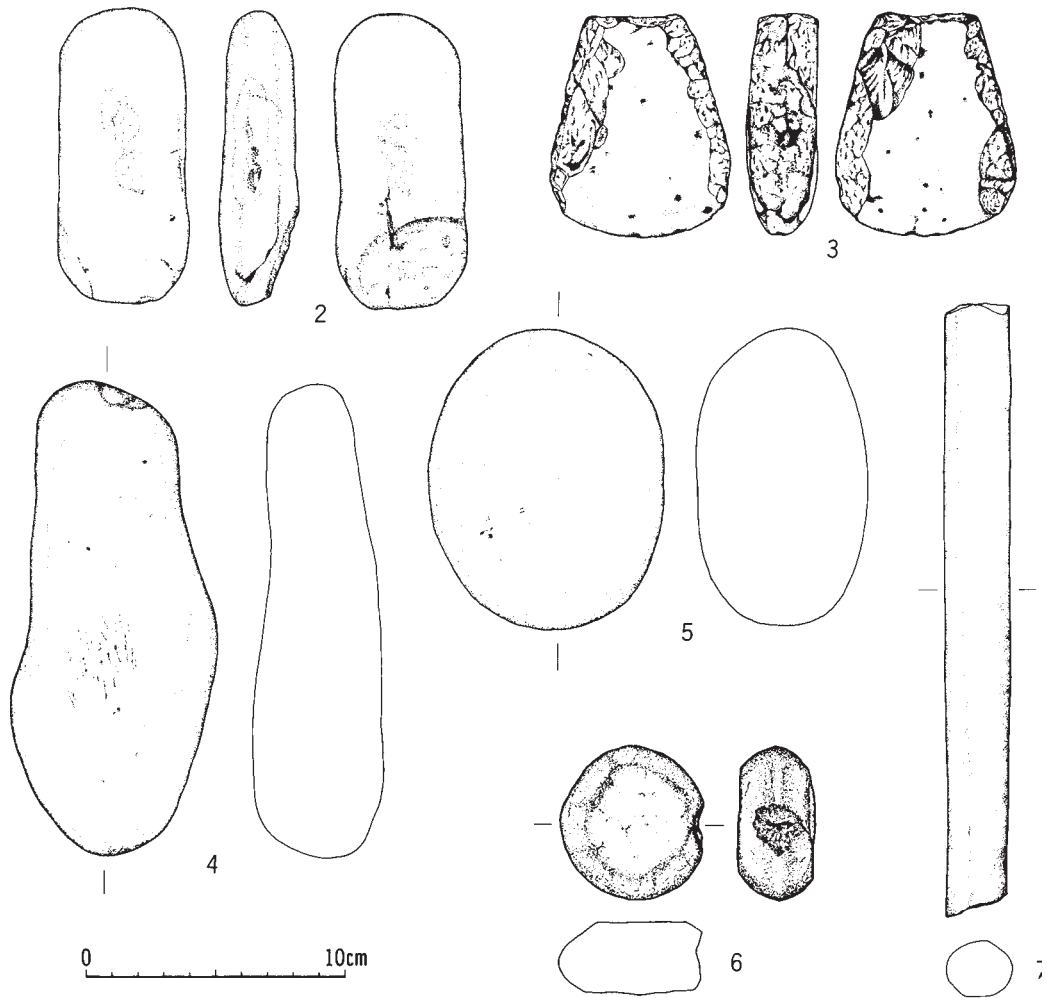
第105図 B地区出土礫構成比



第106図 B地区出土礫、破砕率と焼率



第107図 B地区出土石器実測図（1）



第108図 B地区出土石器実測図(2)

### C地区

土器と同様、ほぼ遺構内に分布が限られ、縄文時代後、晩期の所産とみられる。

#### - A 尖頭器(第111図1)

第23号遺構(フラスコ状土壌)の底面近くから1点出土した。A地区ではみられなかった、石鏃としてはかなり長大なものである。形態的にも、A地区のものとは異なる。

第66表 尖頭器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第111図1	23号・覆土	42	13	4	2.3	珪質頁岩	完形、無柄—平基—長大

### 剥片石器の素材

第20号遺構(特殊竪穴)から剥片が1点出土しただけである。

一A すり石 (第112図2)

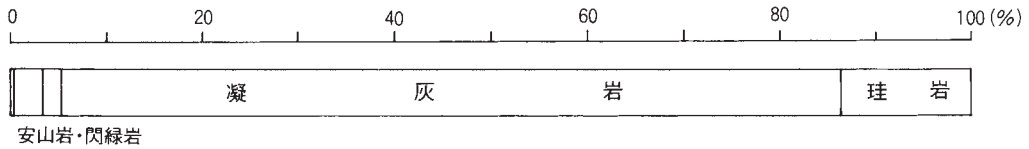
第21号遺構 (特殊竪穴) から2点出土した。完形品は1点である。

第67表 すり石計測表

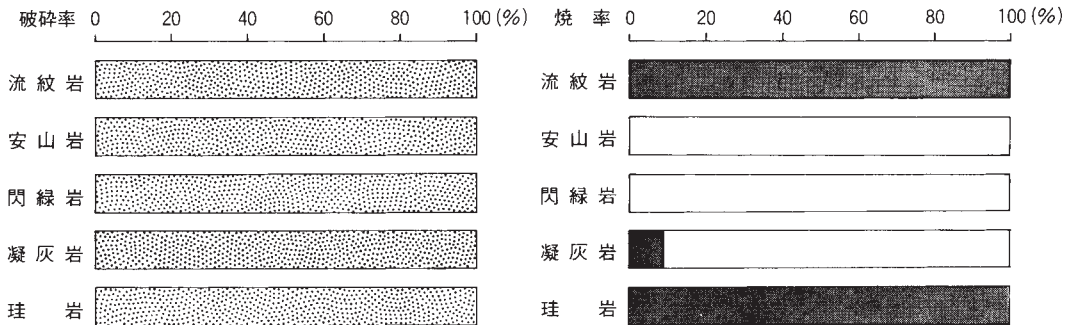
No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第112図2	21号・覆土	114	106	42	755	砂岩	完形、使用痕は、 $x_1$ 、 $y_1$ 、 $y_2$
2	—	"・"	(107)	(51)	(38)	(262)	"	破片、使用痕は、 $x_1$ 、 $y_1$

礫

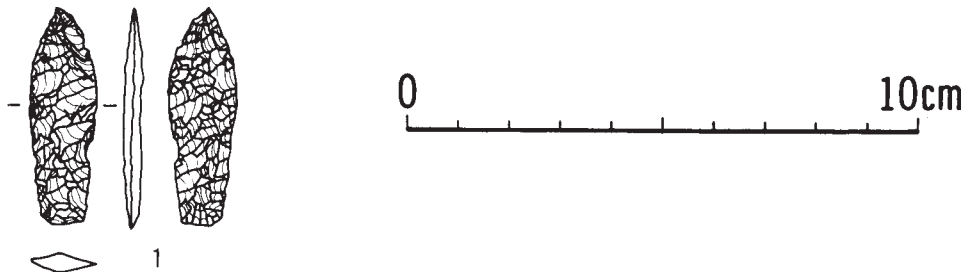
21点出土した。他の地区と異なり、安山岩、珪岩 (チャート) の比率が低くなり、凝灰岩が大半を占めている (第109図)。珪岩 (チャート) の焼率が高いことは、他の地区と同様である (第110図)。



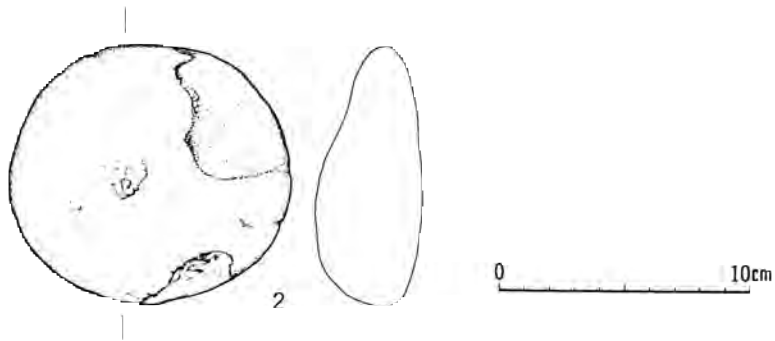
第109図 C地区出土礫構成比



第110図 C地区出土礫、破碎率と焼率



第111図 C地区出土石器実測図 (1)



第112図 C地区出土石器実測図（2）

**地区外**

設定地区外から石器が2点出土した。時期は不明である。

**- A 尖頭器（第113図1）**

J - 11グリッドから欠損品が1点出土した。C地区のものと同様、長大なものであるが、形態的に異なり、平基の石鉄に類似している。

第68表 尖頭器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第113図1	J-11・Ia	(52)	15	3	(2.5)	珪質頁岩	先端欠損、無柄—凹基—長大

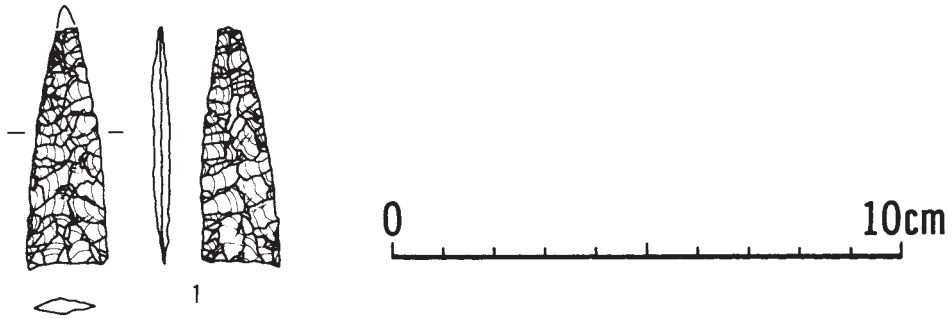
**- B 特殊すり石（第114図2）**

J - 12グリッドから完形品が1点出土した。扁平な部類に属し、「すり面」の両側に剥落痕をもっている。

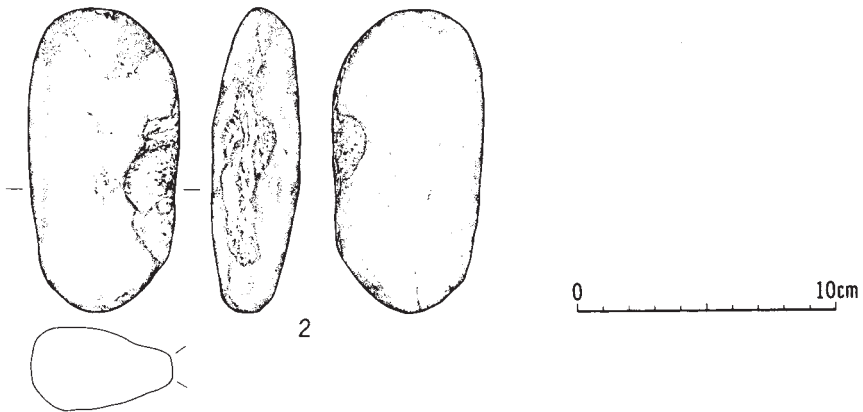
第69表 特殊すり石計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第114図2	J-12・表土	118	59	33	330	安山岩	完形、両端に敲打痕、両面に擦痕

（工藤大・奈良清隆）



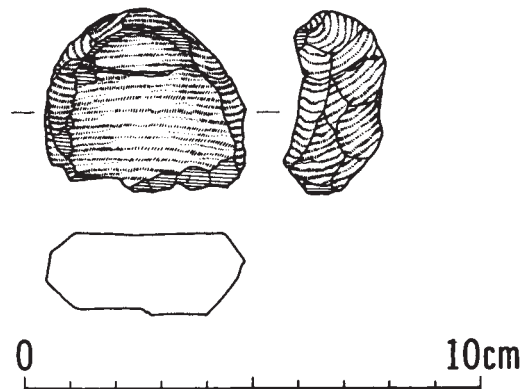
第113図 地区外出土石器実測図（1）



第114図 地区外出土石器実測図（2）

エ 炭化木製品（第115図）

C - 5グリッド第 層から出土したものである。正面図下部及びR面を欠損しており、原形は不明であるが、細かく面取りして先端をまるく仕上げている。L面は、やや凹面にカットされている。樹種はカエデ類を用いており、現存値は長さ約40mm、幅約43mm、厚さ約18mmである。第 層は、縄文時代後・晩期の包含層であり、付近からは後期の遺物が出土している。



第115図 炭化木製品実測図

（工藤 大）

#### 4 第 層の調査

##### (1) 遺構、遺物の分布 (第116図)

遺構とは判断し難いが、H - 8 グリッド付近で落ち込みを検出した。

遺物は、台地の縁辺部に沿って分布するものとみられるが、調査区全面を掘り下げていないので、充分その拡がり把握できない。縄文時代早期の土器及び礫が出土している。

なお、前述したように、A地区の遺構内からも、少量ではあるが、早期の土器が出土している。従って、これが、遺構構築の際に混入したものであるとすれば、A地区の未調査部分に、早期の包含層が存在する可能性がある訳である。 (工藤 大)

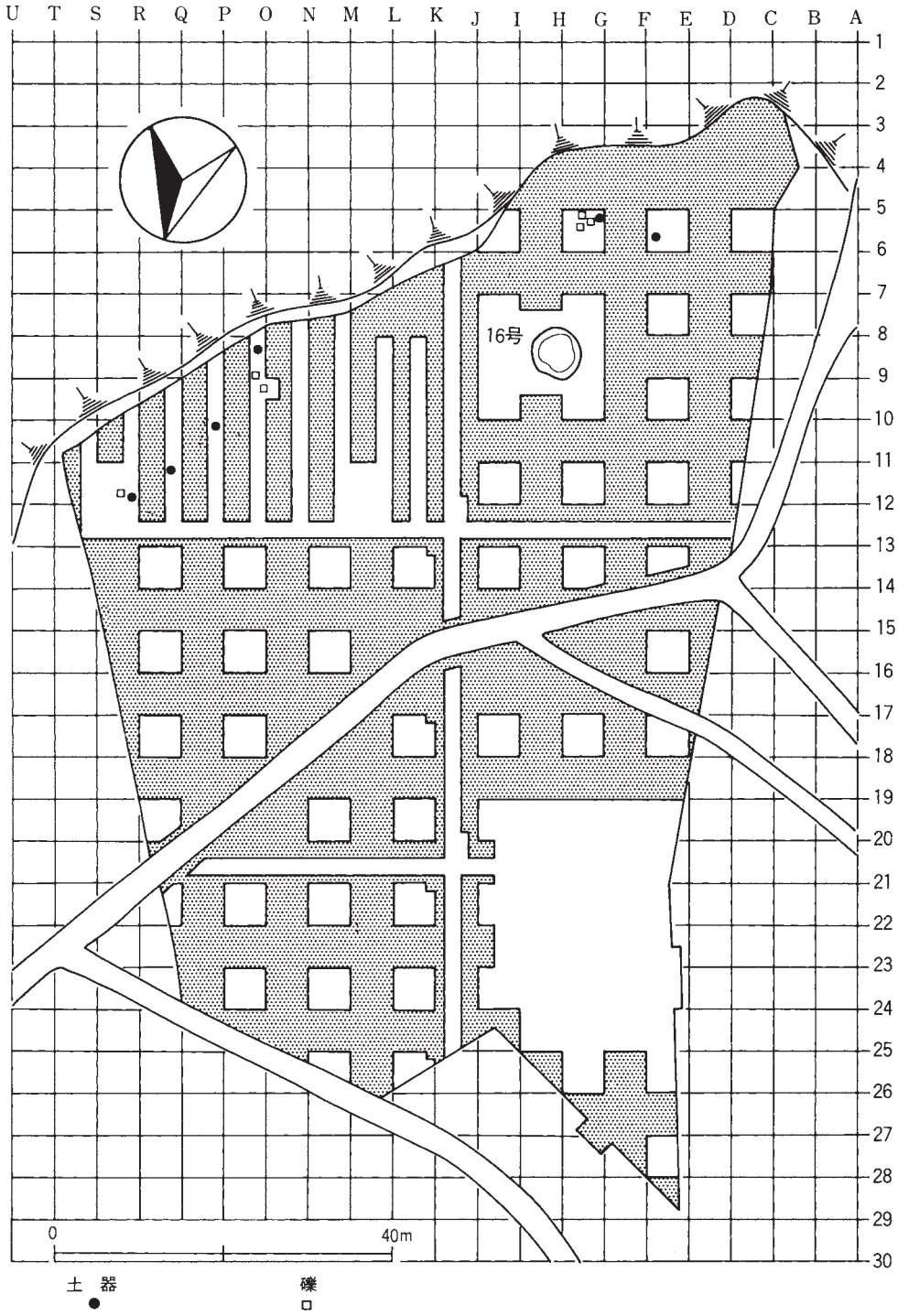
##### (2) 検 出 遺 構

###### 落ち込み

###### 第16号遺構 (第117図)

第 層 (南部浮石層) 上面で落ち込みを確認したが、湧水のため、精査を途中で放棄した。ボーリング棒による調査では、湧水面から約1.4m下まで泥が堆積しており、その下は粘土層である。精査した範囲では、掘り方もだらだらしており、遺構とすべきかは疑問である。遺物は全く出土しなかった。 (工藤 大)





第116図 第IV層遺構、遺物分布図

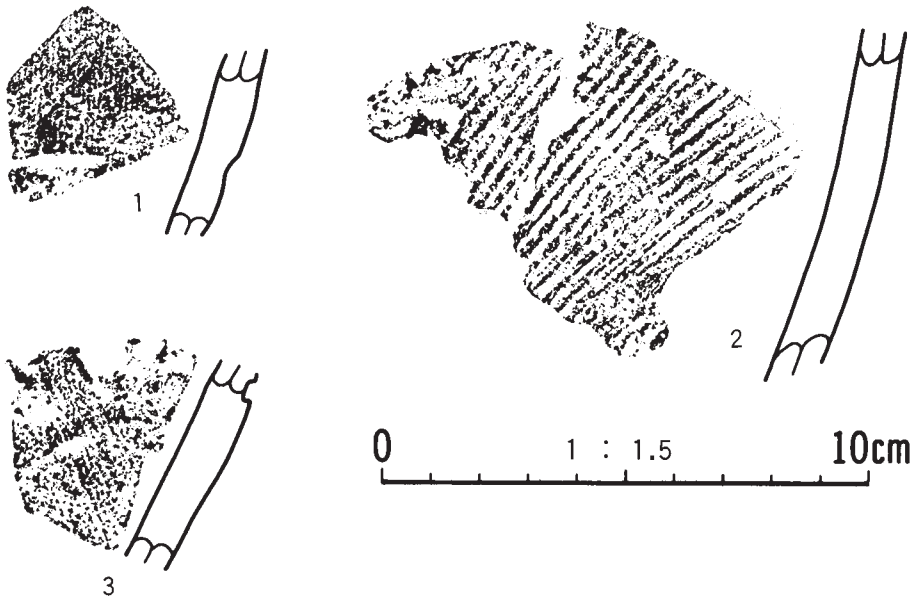
(3) 出土遺物

ア 土器

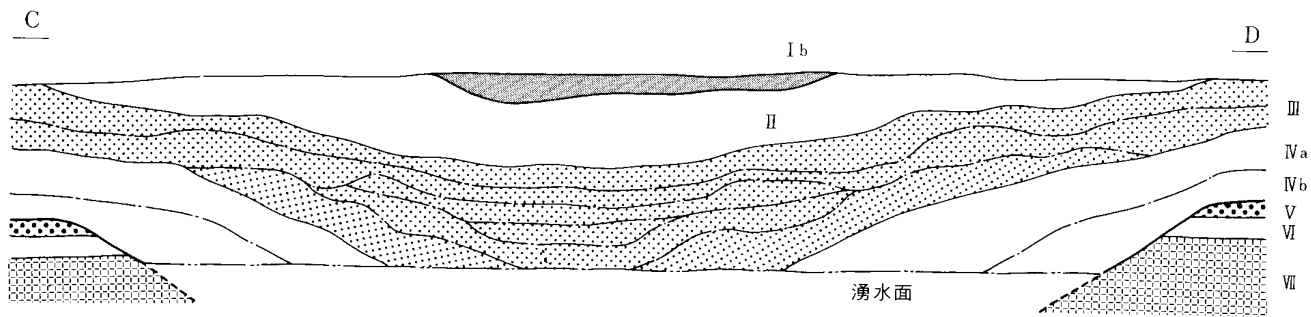
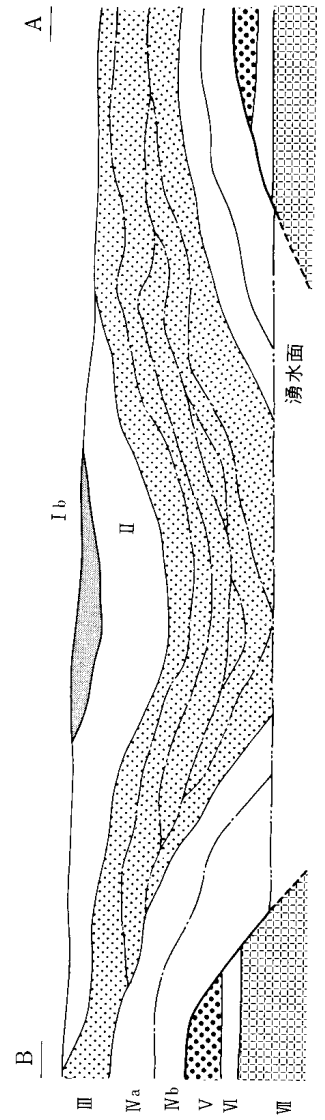
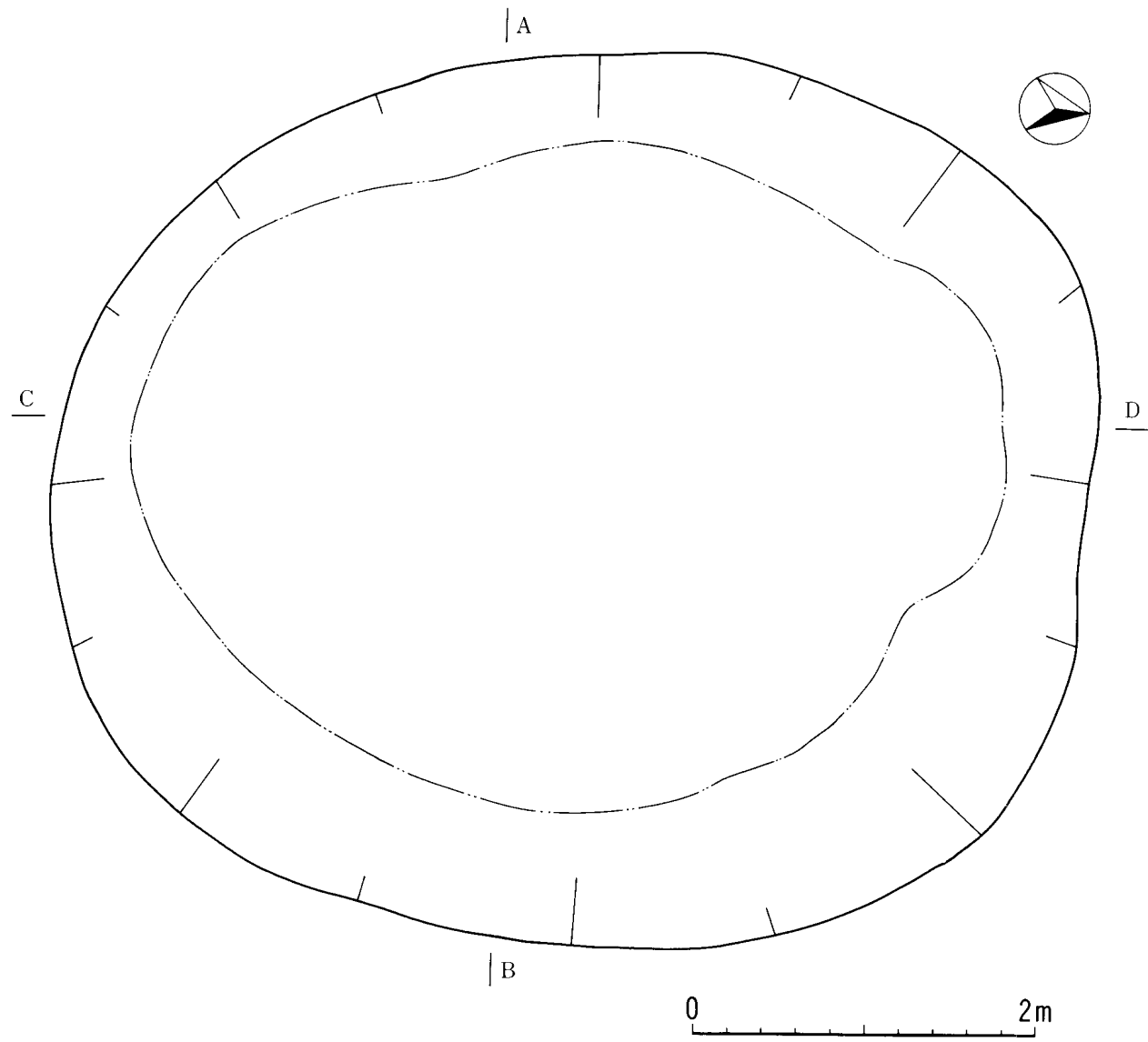
第層から出土した土器は、4片3個体である(第70表、第118図)。これらの土器は、いずれも本書の第群(縄文早期)に分類できるものである。

第70表 第IV層出土土器分類表

分類 型式名	第I群(早期)					第II群(前期)		第III群(後期)				第IV群(晩期)					
	1類 (貝殻文系)	2類 (笹沢AII)	3類 ムシリI	4類 (条痕文系)	5類 赤堂御堂式	1類 早稲田V類	2類 ( )	1類	2類	3類	4類	1類 大河B式	2類 大河BC式	3類			
現状						計		計	縄文	無文	沈線文	磨消縄文	計	三叉文	羊歯状文	燃糸縄文	計
完形																	
復原																	
部位	口縁部																
	胴体部	1			3	4											
	底部																
	注口・把手不明																
計	1			3	4												
個体数	1			2	3												



第118図 第IV層出土土器拓影図

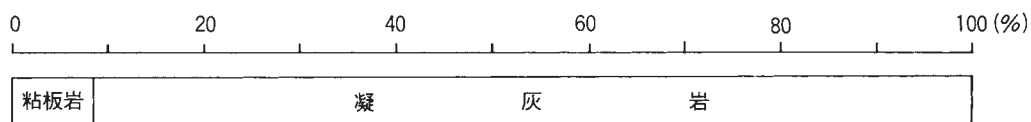


第117図 第16号遺構

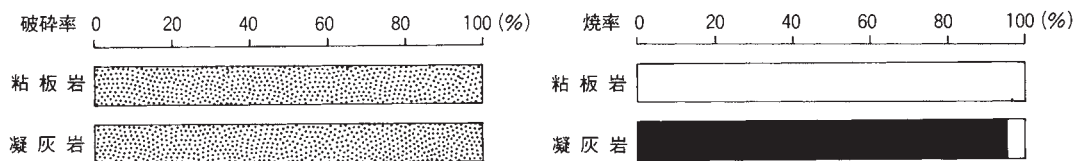
C - 9 グリッドから出土した土器（第118図1、図版63 - 15）は、第 群1類に分類できる。胴体部の破片で文様は認められないが、貝殻文系無文の土器である。外面は暗赤褐色、内面は灰褐色の色調で、焼成は堅緻である。胎土には相当の微砂が混入している。E - 7 グリッドから出土して、第 群4類に分類した土器（第118図2、図版63 - 16）は、2片が接合した。外面には横位の貝殻条痕文がみられ、黄橙色～赤橙色を呈しているが、内面は灰黒色である。胎土には小礫、微砂が相当混入されている。第 群4類土器でE - 5グリッドから出土した土器（第118図3、図版63 - 17）は、口縁に近い胴体部片のようで、器面に垂直な連続刺突文と擦痕が認められる。内外面の色調は黄灰褐色であるが、器壁内は灰褐色である。胎土には小礫、微砂が混入しており、焼成は堅緻である。（北林）

### イ 礫

主に、調査区東側の谷寄りから、6点出土した。凝灰岩が大半を占める。（第119図）。石種別の破碎率及び焼率は、第120図に示すとおりである。（工藤大・奈良清隆）



第119図 第IV層出土礫構成比



第120図 第IV層出土礫、破碎率と焼率

## 5 第 層の調査

### (1) 遺物の分布（第121図）

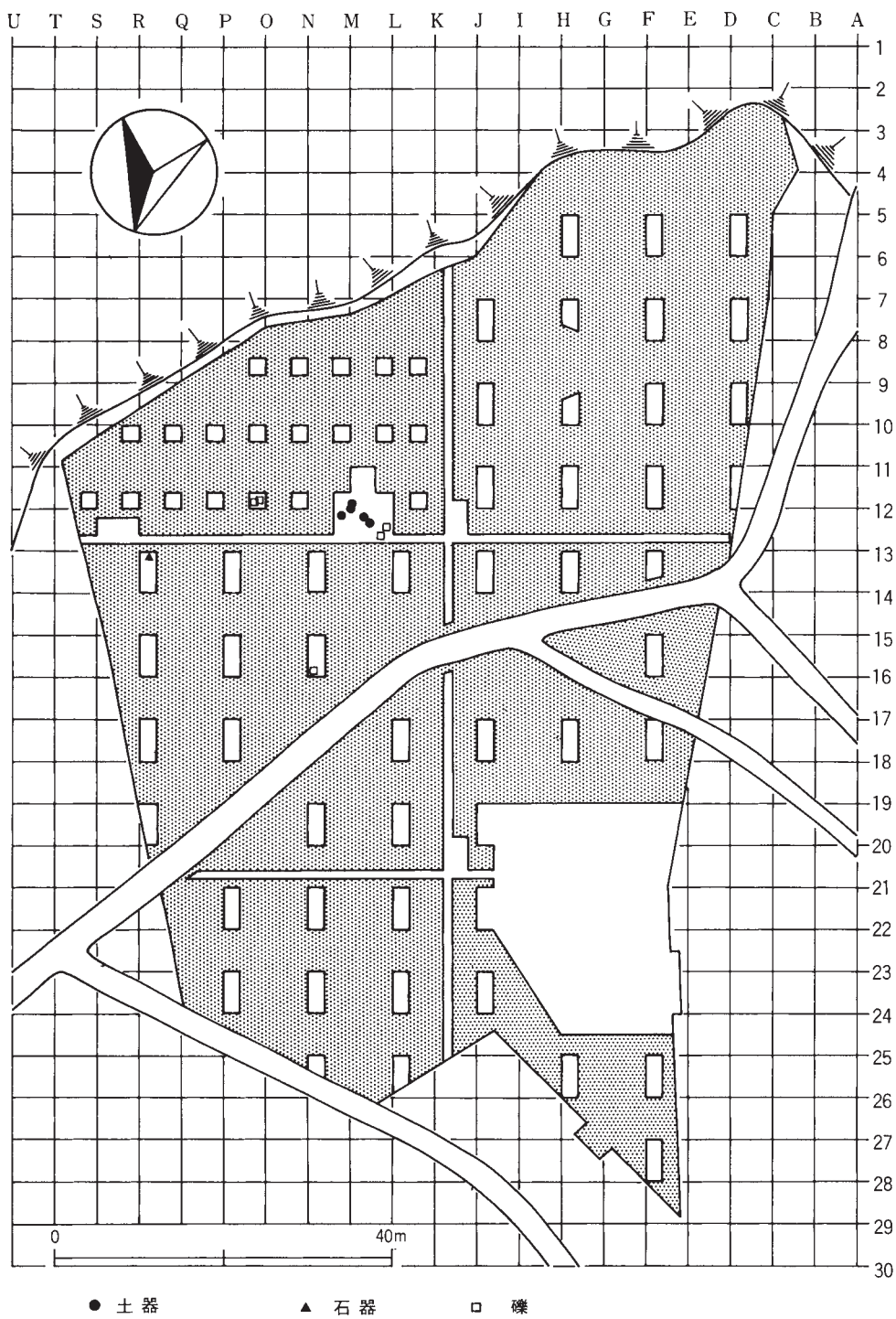
M - 12グリッド付近から、縄文時代早期の土器が出土した。第 層と同様、全面調査していないので、拡がりは不明である。また、やや離れて、石器及び礫が出土している。

（工藤 大）

### (2) 出 土 遺 物

#### ア 土 器

第 層の土器は、L - 12とM - 12の両グリッドから出土した7片（第72表、第122図）だけである。これらの土器は、本書の第 群1類に分類される。

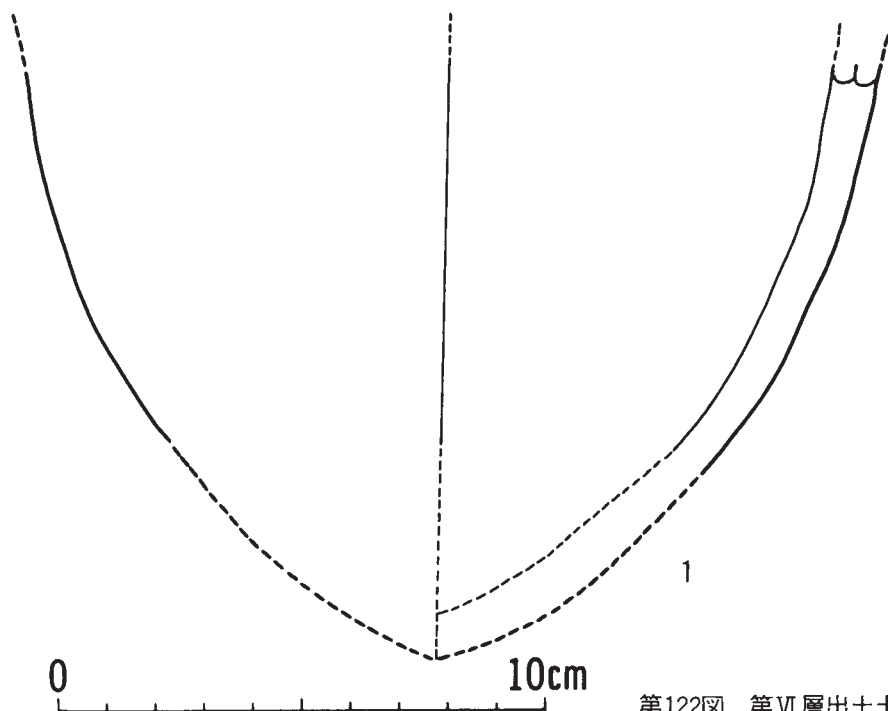


第121図 第IV層遺物分布図

第71表 第VI層出土土器分類表

分類 型式名	第 I 群 (早期)					第 II 群(前期)		第 III 群 (後期)				第 IV 群(晩期)					
	1類 (貝殻 文系)	2類 (雲状 A II)	3類 ムシ リ I	4類 (条痕 文系)	5類 赤御 堂式	1類 早稲田 V類	2類 ( )	1類	2類	3類	4類	1類 大洞 B式	2類 大洞 BC式	3類			
現状						計		計	繩文	無文	沈線文	磨消 繩文	計	三叉文	羊歯 状文	捲糸 繩文	計
完形																	
復原																	
部 位	口縁部																
	胴体部	7				7											
	底部																
	注口・把手 不明																
計	7				7												
個体数	1				1												

いずれも貝殻文系土器の胴体部下半から底部にかけての破片である。すべて接合した同一個体であり、尖底部分が欠損している。この土器の胎土には、砂粒、小礫などの混入物が認められるが、器面には目立つほど大きなものはみられない。焼成は、堅緻である。色調は、外面が橙色、内面が黒褐色である。外面には、縦位の研磨痕がみられ、内面は、磨耗と剥離のため、ざらざらしている。器厚は0.8~1.0cmで、成形は輪積みである。施文部分が残存していないため型式名をとらえることがむずかしい土器である（第122図、図版63 - 18）。（北林）



第122図 第VI層出土土器実測図

イ 石器・礫

- A すり石 (第125図)

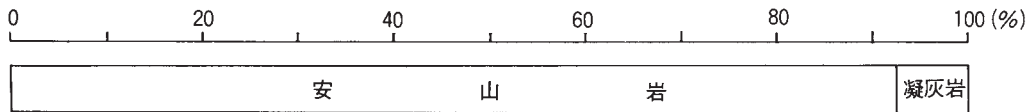
Q - 13グリッドから、欠損品が1点出土した。第 層出土の石器はこれだけである。

第72表 すり石計測表

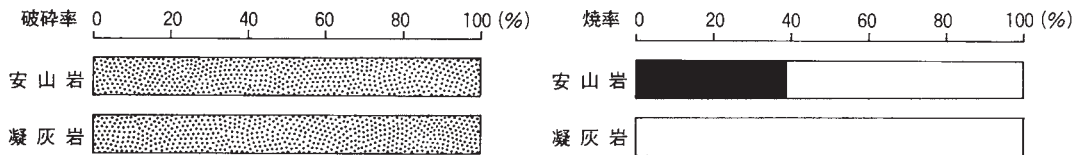
No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第125図	Q-13・VI	(110)	78	34	(350)	砂岩	両端欠損、使用痕は、 $y_1$ 、 $y_2$

礫

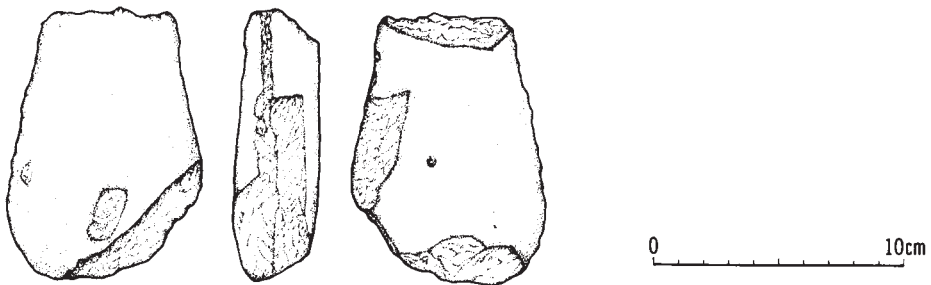
6点出土しており、安山岩が大半を占めている (第123図)。石種別の破碎率及び焼率は、第124図に示すとおりである。 (工藤大・奈良清隆)



第123図 第VI層出土礫構成比



第124図 第VI層出土礫、破碎率と焼率



第125図 第VI層出土石器実測図

## 6 若干の分類と考察

### 第 群土器について

主に竪穴住居跡、竪穴遺構及びその周辺の第 Ⅰ層から出土し、本遺跡出土土器の主流を占める。後出の第74表第 Ⅰ層出土土器分類集計表の土器群は、既に第 1類から第 4類まで大別してあるが、ここでは更に次のように細分を試みた。

#### ア 文様の細分

第Ⅲ群土器	}	1類—縄文—— a、b、c、d、e
		2類—無文—— a、b
		3類—沈線文—— a、b
		4類—磨消縄文— a、b、c、d、e、f、g、h、i、j

資料に用いた土器は、完形土器と復原できた土器約50点を中心としたが、相当量の破片も利用したので全体の器形、文様などを充分把握できない部分や誤謬を犯したところがあるかも知れない。なお、第74表の第 Ⅰ群土器の出土比率には、完形品及び復原した土器を含めていない。

#### 第 1類土器 縄文のみを施文した土器

縄文以外の意匠文を付加していない土器を一括したので、次の a から e に細分できる。第 1類土器は、遺構内から出土した土器の約73%、第 Ⅰ層の遺物包含層から出土した土器の約59%を占める。また、完形土器 9 点、復原した土器 2 点がある。

##### 1 a 縄文を施文した土器

L R、R L のいずれかの縄文原体を用いて、横位または斜位に回転して施文した土器、土器の部位によって、横位回転、斜位回転、斜位回転、横位回転などに変化している土器、縄文原体を横位回転させているが、施文部分の上下間隔が密接していない土器などを含めてある（第50図 5、第62図 1、第65図 1、第67図 1、第68図 1、第74図 1、第75図 1、2、第79図 1）。

第 Ⅰ群 1類 a 土器は、B 器形の深鉢（第65図 1、第74図 1）と小鉢（第50図 5、第62図 1、第67図 1、第68図 1、第75図 1、2）及び C 器形のもの（第85図 4）が認められる。C 器形の土器は第 Ⅰ群土器よりも第 Ⅱ群土器の可能性が残っている。

##### 1 b 縄文の施文方向が一定でなく、不特定に変化している土器

第54図 7、9、第67図 6、7、第89図 7 が相当する。深鉢形の B 器形土器で占められている。

##### 1 c 横位の羽状縄文を施文した土器

L R、R L の原体を上段、下段交互に押捺回転して、方向の異なる斜縄文を積み重ねて羽状縄文を形成した土器（第49図 2、第79図 1、第89図 6～8）で、L R と R L 原体の接点（交叉点）は、器軸に対して直角、横の方向に走る。羽状縄文の上段に L  $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ 、下段に R  $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  を使うと、羽状縄文となる。第 Ⅰ群 1類 c とした横位羽状縄文の施文幅は 2～3 cm 内外で、第 Ⅰ群 1



類 e とした幅広い羽状縄文とは施文幅が異なるが、地文の施文手法では第 群 4 類 e 土器と共通する。

#### 1 d 幅広い羽状縄文をもつ土器

第67図4、第76図3、7、第78図1が相当する。基本的な施文技法、縄文原体は、横位の羽状縄文と差異はないが、斜縄文の上下、交互に組み合わせた施文帯の幅が、10cm内外と広い類をまとめた。縄文晩期の土器にも施文されている。

#### 1 e 付加縄文の認められる土器

L R か、R L のいずれかの縄文原体に別の撚糸状の原体を付加した土器（第61図3）と、2種類の縄文原体を重ねて施文した土器（馬場瀨2遺跡出土）などを包括した。第 群 1 類 e の器形は、大小の相違はあるが平縁直口の深鉢形で占められている。

### 第 2 類土器 無文土器

器面に縄文、沈線文などの文様が認められない土器を一括し、a、bに細分した。遺構内及び遺構外出土の完形土器18点、復原できた土器4点の計22点で、器形を確認できる土器が最も多い。破片数では、第 群 土器中の第3位、遺構内出土の約8%、遺構外出土の約18%である点が注目される。また、ミニチュア形土器が多いことも特筆される。

#### 2 a 無文で装飾的貼瘡、小突起などを付した土器

無文で口唇部、胴体部（最大径部）に貼瘡、縦割りあるいは横割りなどの装飾的小突起をもつ土器で、小鉢（第62図2、第66図5、第80図1）、注口（第49図5、第68図2、第81図1）、台付浅鉢（第60図8）、ミニチュア形注口（第50図2、第60図4）、無頸壺（第75図3）、鉢（第60図5）、浅鉢（第50図3、4、6）、台付鉢（第50図9）の器形がある。

#### 2 b 無文で貼瘡、小突起など装飾的付加物をもたない土器

b類の無文土器は、ミニチュア形（第50図3、6、8、第60図6、第75図5）、鉢（第60図8）、注口（第81図2）、長頸壺（第49図3、第60図1）、台付鉢、浅鉢（第68図5）が出土した。ミニチュア形の土器には、前出の器形が全て認められるほか、無頸壺（第75図3）、四脚付（第50図9）も各1点出土した。器形は多様で変化に富んでいるが、大型の深鉢形土器は見当たらない。器面を入念に研磨して光沢を有した土器と粗雑な造形をしたミニチュアの類がある。この差異は、胎土の精粗とも関連が深い。ミニチュア形土器は、以下ミニ と略称する場合がある。

### 第 3 類土器 沈線文土器

沈線文を指標とする土器を包括した。次の a、b に細分類できるが、遺構内出土土器の0.5%、遺構外出土の約2%を占めるに過ぎない。復原できた土器は1点である。

#### 3 a 2条1組を単位にした平行沈線を口頸部に施し、胴体部に入組状沈線文をもつ土器

ミニ長頸壺（第50図10）が相当する。

### 3 b 沈線文と貼瘤を組み合わせた土器

本遺跡では出土例がなく、馬場瀬2遺跡出土の香炉形土器1点が該当する。

## 第4類土器 磨消縄文土器

各種の磨消縄文を有する土器を一括して、a～jに細分した。第4類土器は、前記の第1～3類土器をすべて加えて組み合わせた土器で、精粗どちらのつくりかと言うと、いわゆる精製土器に近い土器が多い。第1層から出土した土器及び遺構から出土した土器のそれぞれ約18%を占める。完形土器4点、復原できた土器9点がある。

### 4 a 平行沈線化した磨消縄文を有する土器

平縁か波状口縁をもつ深鉢形土器にみられる文様（第70図1、4、第75図10、第90図9～15）で、焼成がよく、薄手の粗製土器に属する。斜縄文の地文に、口縁とほぼ平行する沈線を数条ひき、更に胴体部に大湯式土器の構図（第90図10、13）に類似した沈線で、帯状に区画した曲線的な文様を描いた後、沈線の内外のいずれかの縄文を磨消したもの（第90図10～12）、平行沈線文の間に弧状の沈線文を施したり、平行沈線文の間に長隋円形の文様を描いて、一部の縄文を磨消したもの（第90図9）。この種の磨消縄文手法は、第4群4類土器においては例外的な施文手法である。一般的な入組状磨消縄文を施文する場合は、波状・花卉状の口縁部、小突起、貼瘤を目印にして、構図を沈線で区画し、その次に沈線に沿って羽状縄文や縄文の原体を回転押捺して充填する方法をとっている。

### 4 b 口頸部、胴体部に2条一組の平行連続刻目文と磨消無文帯をもつ土器

第81図3は、完形に近い注口土器で、口唇部に小突起、胴体部に縦割りの瘤を貼付けて、口頸部に刻目文帯を配し、胴体部には磨消羽状縄文による入組状文を施文している。出土例は第90図5の注口土器、口頸部片との2例がある。

十腰内遺跡出土の第4群土器の中で連続した刻目が加えられた土器は、深鉢形を呈したもののようである。そして、「十腰内第4群土器は、第4群土器に対してかなり接近した時間的位置にあると考えられるので、この刻目などは第4群土器からの伝統的なものとしてよいだろう」といわれている。

### 4 c 縦位羽状縄文を特徴とする土器

縦位羽状縄文は、注口土器の胴体部下半に施文されている。第69図1、第84図2の土器は、口唇部に2個一組の小突起をもち、口頸部に平行磨消縄文を施している。更に胴体部上半には磨消羽状縄文による入組状文が施文されて、その下部から底部立ち上りまでの間に口縁部、底部に対して直角方向の縦位羽状縄文が認められる。第84図2の土器も同様であるが、器形は深鉢又は壺であろう。縦位羽状縄文以外は次の4g、4hに類似する。器軸に平行して施文した

縦位羽状縄文と、器軸方向に直角方向の横位羽状縄文の、施文技法上の違いについては、すでに十腰内遺跡の報告書で指摘されている。すなわち、「十腰内第 群土器では縦位羽状縄文、第 群土器では横位羽状縄文である。そして、縦位、横位の施文技法上の相違が両群を分ける指標となっている」。このことについては、貝島貝塚（草間・金子：1971）の報告書ほかでも指摘されている。

#### 4 d 連弧状磨消縄文を特徴とする土器

花卉状口縁をもつ深鉢形と小型注口土器の器形が認められている。

第58図7の土器は、花卉状口縁に磨消縄文帯を配し、五つの花卉状口縁に合わせて、縦位に弧線、横位に平行沈線を配して連続させ、磨消による無文帯と縄文を交互に配してある。口唇部は、内側に肥厚しており、補修孔も認められる。花卉状の口縁をもつ深鉢形土器は、岩木山麓、湯の沢遺跡（村越：1968）から出土している。

小型の注口土器（第49図4）は、口唇部に縦割の小突起を対称的に4個付している。口頸部には、平行（横位）磨消縄文帯を配し、胴体部には上下に向かい合った弧線を連結させてから、磨消羽状縄文を充填して連弧文を形成したもので、連弧文の接点に注口部（アスファルト状の物質で接合補修している）貼瘤、小把手を配している。底部にもアスファルト状物質による補修痕がある。

#### 4 e 地文が羽状縄文で、口頸部、胴体部に横位、縦位の磨消無文帯をもつ土器。

器形の全体を確認できる土器が少ないため、分類の特徴を示す部位以外に施文された文様については不明である。第85図3の土器は、胴体部に方形状の磨消無文帯を有する。器形は、深鉢形が認められる。第49図1の土器は、A3器形で頸部に横位の磨消無文帯を一条施している。

#### 4 f 口頸部、胴体部、底部（台部）に平行磨消羽状縄文のみをもつ土器

口唇部に双頭の小突起、横割り小突起、押し切り小突起（口唇部の2箇所を篋状工具で強く押し、刻み目状小突起を形成したものを）を4箇所、あるいは2個一組を単位にして4箇所に付したものが多。このグループは、口頸部の破片の場合、次の第 群4類gと区別することが困難である。器形は、台付浅鉢が多く、台付浅鉢土器（第51図3、第52図1）のなかには、器内面中央に目形の刺突文を円形に施したもの（第51図3）や、縄文を円形に施したもの（第52図1）がある。第81図9は、胴体下半から底部までを研磨したように磨消して無文化しているが、本遺跡ではほかに類例のない文様構成を示している。

#### 4 g 口唇部に各種の小突起をもち、口頸部と底部に平行磨消羽状縄文帯を付し、胴体部（台部）に入組状磨消羽状縄文をもつ土器

器形は、台付浅鉢（第51図2、第52図2、3）、A2器形の深鉢（第84図1）、B器形、A2器形の浅鉢（第48図1、第82図4）、注口（第69図1）、長頸壺（第47図1）がみられる。注口

土器の胴体部のみに瘤が付されている（第13号遺構第69図1ほか）例もある。このグループの胴体部破片は、次の4 h、4 j のグループの胴体部破片と共通の要素をもっているため、それによって区別することはできない。

4 h 口唇部に各種小突起を付し、口縁部端に沿って一、二条の磨消縄文帯をめぐらせてから、口頸部と胴体部に磨消羽状縄文による入組状文を施した文様を特徴とする土器

器形は、小突起付平縁（第91図10、第92図1）及び5個の大きな波状口縁（第71図1）をもつ深鉢形が多いが、長頸壺形もみられる（第92図6）。口縁が外反し、頸部がくびれるA器形のものだけで、今のところこの種のB器形を示す土器はみられないようである。また、この種の文様を有する土器には口唇部に小突起を付す類はあるが、胴体部に瘤を付す類は見当たらない。

4 i 口頸部に磨消無文帯を有する土器

胴体部に縄文を施したもの（第85図4）と、広義の磨消縄文を付したもの（第92図13）などがみられるようである。器形は、口頸部が短かく“く”字状に外反し、胴体部が膨らむC器形の深鉢（第85図4）長頸壺（第92図13ほか）などが認められる。

4 j 口頸部が羽状縄文で、胴体部に入組状磨消羽状縄文のある土器

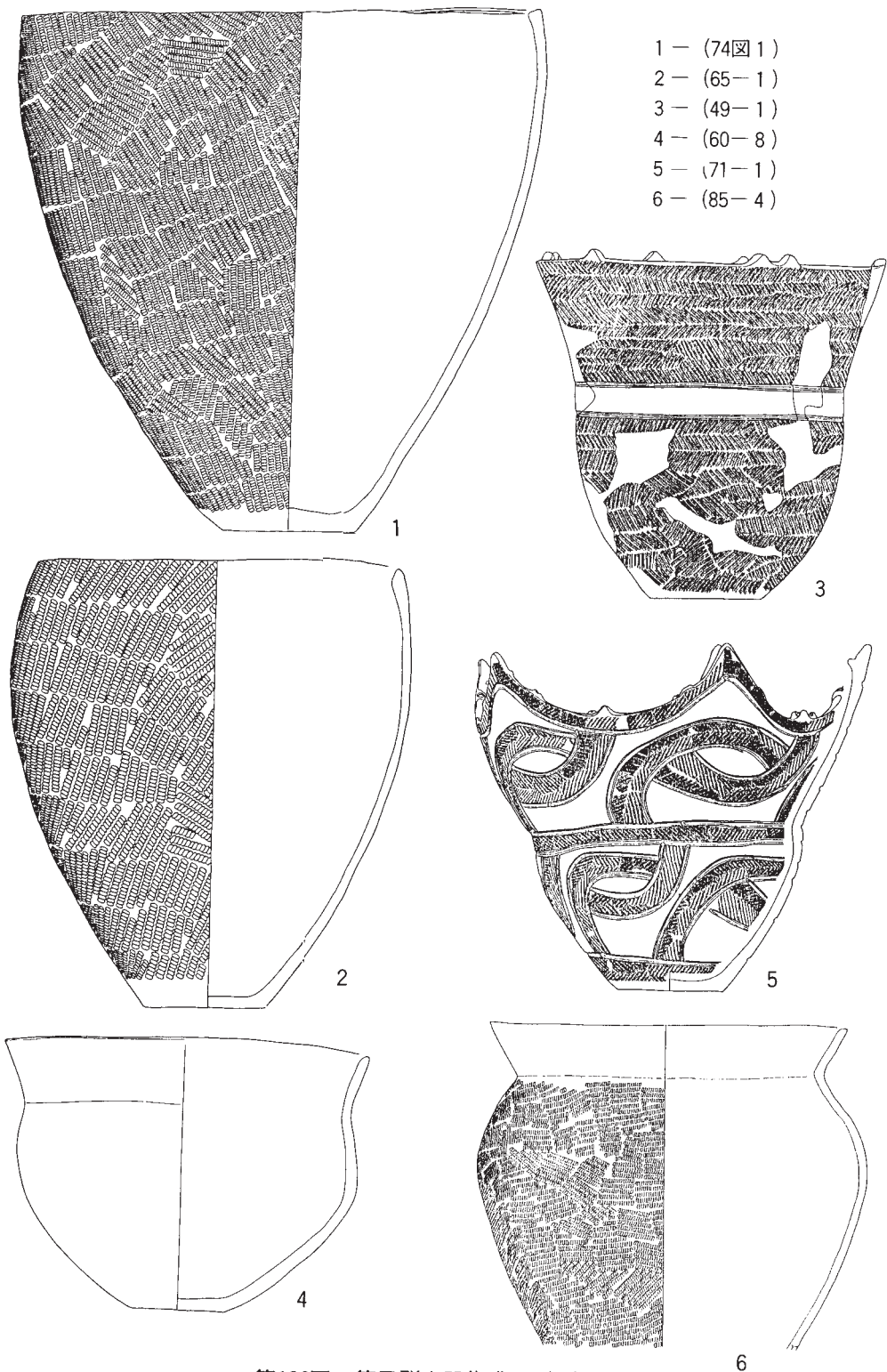
4 g との相違は、口頸部、底部に平行磨消無文帯をもたない点である。（第48図2、第55図2、第83図2）が相当する。

第 群土器は、一応以上のように文様を細分類することが可能である。これらの第 群土器の細分類は、馬場瀬2遺跡においても適用し、その際、新たに細分類できるものがあれば追加したい。第 群1類土器とした後期粗製土器には、第 群3類晩期粗製土器と明確に区分できないものも含まれている可能性はないとは言い切れない。

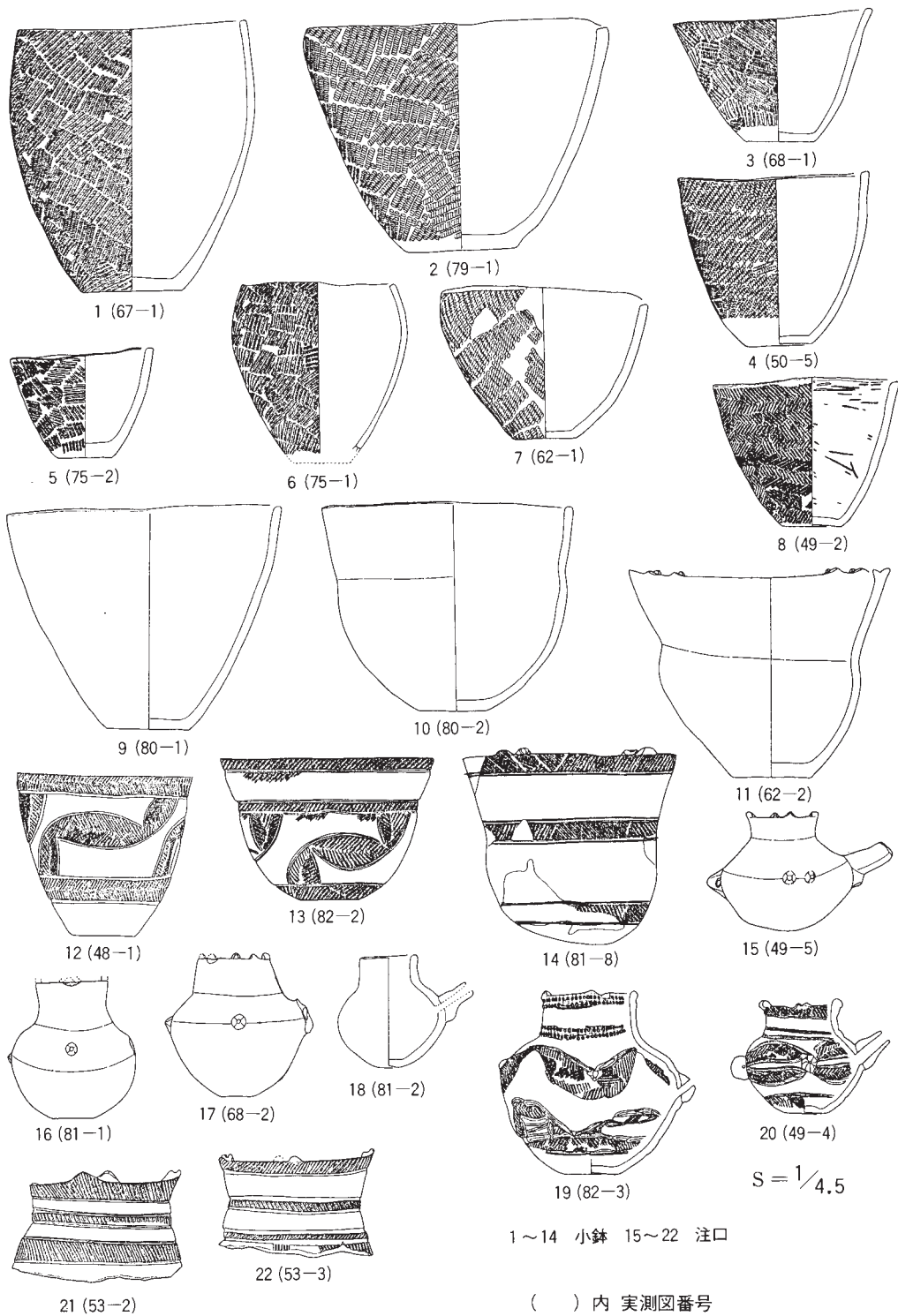
磯崎氏も述べられているが、第 群土器には器面に貼り付けられた瘤状突起が存在する。しかし、十腰内第 群土器ほど繁多ではなく、貼瘤文土器全盛期への移行期におかれていたと考えられる。

第73表 第I・II層出土土器分類一覧表

分類 型式名 現状	第 I 群 (早期)						第 II 群 (前期)			第 III 群 (後期)				第 IV 群 (晩期)				合 計		
	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類		1 類	2 類		1 類	2 類	3 類	4 類		1 類	2 類	3 類			
	長段文系	(蛋状) A II	ムシロI式	(条痕文系)	赤御堂式	計	早稲田 V 類	( )	計	第 IV 群				計	大洞B式	大洞BC式	B、B-C 燃糸縄文		計	
										十 縄文	腰 無文	内 沈線文	IV 磨消縄文							
完 形	遺構内								2	9			3	14					14	
	遺構外								1				1	2					2	
復 原	遺構内								7	9		1	8	25					25	
	遺構外								1	4			4	9					9	
計	遺構内								9	18		1	11	39					39	
	遺構外								2	4			5	11					11	
口 縁 部	遺構内			3			3		73	18		1	53	145	6			5	11	159
	遺構外					2	2		366	102		7	214	689			2	2	4	695
	計			3		2	5		439	120		8	267	834	6		2	7	15	854
胴 体 部	遺構内	1	1	33	6		41	5	5	811	95	6	190	1,102	16			31	47	1,195
	遺構外	1		15	1	32	49	3	3	2,948	854	113	814	4,729			5	26	31	4,812
	計	2	1	48	7	32	90	8	8	3,759	949	119	1,004	5,831	16		5	57		6,007
底 部	遺構内			1			1			32	5		14	51				3	3	55
	遺構外					1	1			48	85	1	10	144			1	2	3	148
	計			1		1	2			80	90	1	24	195			1	5	6	203
そ の 他	遺構内									109	1		4	114						114
	遺構外												3	3						3
	計									109	4		4	117						117
合 計	遺構内	1	1	37	6		45	5	5	1,025	119	7	261	1,412	22			39	61	1,523
	遺構外	1		15	1	35	54	3	3	3,362	1,044	121	1,038	5,671			8	30	38	5,766
総 数		2	1	52	7	35	99	8	8	4,387	1,163	128	1,299	7,083	22		8	69	99	7,289
比 率 %	遺構内						2.95		0.32	(72.59)	8.42	0.50	(18.48)	92.71					4.00	99.98
	遺構外						0.90		0.05	(59.30)	18.4	2.10	(18.30)	98.40					0.60	
	全体(省略)																			



第126图 第Ⅲ群土器集成图(1)



第127図 第三群土器集成図(2)



第128図 第三群土器集成図 (3)



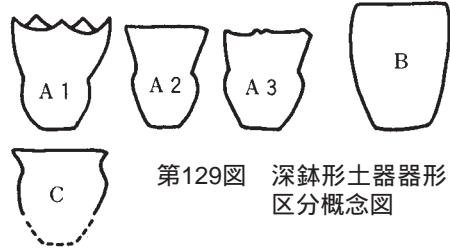
## イ 第 群土器の器形と分類

第 群土器で器形の全体を計測できる土器は、約50点である。次に、これらの土器と資料として利用できる破片の器形を分類して、器形の種類、大きさ、特色などを確めてみたい。

### 深鉢形土器 (第126図、第74表)

深鉢形土器で、器形の全体が確認できるのは6点である。それらのデータは、第126図と第74表に示した。更に、深鉢形とみられる土器全体のデータも、第74表に示した。深鉢形の器

形は、A、B、Cに区分できる。A器形は口縁部が開き、頸部がすぼまり、胴体部がやや膨らんで底部にいたる器形である。口縁部の形態によってA1～A3に細分した。A1器形は、(第71図1)のように5個の大波状をな



第129図 深鉢形土器器形区分概念図

している類。A2器形は、(第60図8、第80図2、第82図2)のように平縁直口の類。A3器形は、(第49図1、第62図2、第81図8)のように口唇部に小突起、貼瘤などの装飾的付加物がある類である。B器形は、口縁部がやや内傾気味で、砲弾の先端部を切り離したような類で、多くは口唇部が肥厚している。深鉢では、第65図1、74図1、小鉢では、第50図5、第62図1、第67図1、第68図1、第75図1、2、第79図1などが相当する。C器形は、1例(第85図4)認められている。短い口頸部が“く”の字状に外反して、胴体部が球状にふくらんでいる甕形に近い器形の土器である。口径24.2cmよりも胴体部の最大径が大きく26.3cm。器高は、恐らく最大径よりも若干大きいものとみられる。遺物包含層から出土した土器であるが、第 群土器に包括されるとすれば、特異な器形である。B器形の深鉢形土器は、口径が器高よりやや小さく、器形を確認できる土器の法量は、器高30～36cm、口径25～35cm、底径8～9cmである。B器形とA器形の深鉢形土器の割合は70対9、約8対1である。A器形の深鉢は、口径が器高よりやや大きく、器高のわかる土器の法量は器高16～24cm、口径20～27cm、底径6～8cmで、B器形土器より小型の類が多い。口径が20～30cmまではA、B器形共存するが、31～47cmの口径をもつ深鉢は、B器形土器によって占められている。

器形と文様の関係。B器形の深鉢形土器(45点)の88.9%(40点)は縄文(第 群1類a)を施文した類で、そのほか、羽状縄文(第 群1類c)6.7%(3点)、付加縄文(第 群1類e)2.2%(1点)、無文(第 群2類b)2.2%(1点)の割合が認められる。これは、全体数の全てを示すものではないかも知れないが、一応の割合を示しているものと考えられる。A器形深鉢形土器(12点)の多くは(10点、83.3%)磨消縄文(第 群4類)の類で占められ、羽状縄文(第 群1類c)の類と無文(第 群2類b)の類も(各1点、8.3%)認められる。

A器形のなかで、A1とした大波状口縁(第71図1)の類は、この時期に発生した器形である

第74表 深鉢形土器資料一覧表

出土地	挿図No	器形	文様分類	法量	5	10	15	20	25	30	35cm
15号床面	74図1	B	Ⅲ1a	TK							KK H
13号覆土	65-1	B	Ⅲ1a	TK					KK	H	
14号床面	71-1	A <sub>1</sub>	Ⅲ4h	TK					H	KK	
7号覆土	60-8	A <sub>2</sub>	Ⅲ2b	TK			H		KK		
G-5	84-1	A <sub>2</sub>	Ⅲ4g	TK			H		KK		
3号床面	49-1	A <sub>3</sub>	Ⅲ4e	TK					H	KK	
D-8	85-4	C	Ⅲ1a						KK	MDK	

H—器高  
 KK—口径  
 TK—底径  
 MDK—最大胴径  
 ( )—推定  
 (H23以上)

(H) 器高	頻出数	(KK) 口径	頻出数(A, B, C, ?は器形を示す)	(TK) 底径	頻出数	文様分類	頻出料(A, B, C, ?は器形を示す)
18	A <sub>1</sub>	20cm	A B ?	5cm	1	Ⅲ1a	B
23	A <sub>2</sub>	21	A B ?	6	5	Ⅲ1c	A B
24	A <sub>3</sub>	22	A B ?	7	6	Ⅲ1e	B
30	B	23	B	8	5	Ⅲ2b	A B
36	B	24	B C	9	5	Ⅲ4a	A ?
計	5	25	A B ?	10	5	Ⅲ4d	A
		26	A B	計	27	Ⅲ4e	A
		27	A B			Ⅲ4f	A
		28	A B			Ⅲ4g	A
		29	B			Ⅲ4h	A ?
		30	A B			Ⅲ4i	C
		31	B			Ⅲ4j	?
		32	B			計	64
		34	B				
		35	B				
		38	B				
		39	B				
		44	B				
		45	B				
		47	B				
		計	64				

A 器形 12  
 B 器形 45  
 C 器形 1  
 器形不詳? 6  
 計 64

うか。近似するものとしては、花卉（五弁）状（第58図7、第91図6）の類がある。この器形は、十腰内第 群土器（中宇田遺跡、梶埋文13集：1974）で認められているが、モチーフが異なる。また、十腰内第 群土器（蛭沢遺跡出土：1979）にも継続している器形である。A3器形の土器とB器形の土器は、第3号遺構では床面からセット（第49図1、2）で出土した。従って、両器形の土器は、器形の独立、換言すると用途の分化がすでに成立していたと考えられ、

事実、B器形は十腰内第 群に存在している。A器形からB器形へ、あるいはB器形からA器形への変化は本遺跡の第 群土器では考えられない。

小鉢形土器 (第127図1~14、第75表)

全体の器形を確認できる土器は、14点ある。器形が小型のために、典型的なA器形とB器形を示す土器は少なく、A器形が5点、B器形が9点である。A器形の法量は、器高9~14cm、口径

第75表 小鉢形土器資料一覧表

出土地	挿図No	器形	分類	法量
G-6	79図1	B	Ⅲ1a	TK H KK
7号覆土	62-1	B	Ⅲ1a	TK H KK
3号覆土	50-5	B	Ⅲ1a	TK H KK
15号床面	75-1	B	Ⅲ1a	TK H
13号覆土	67-1	B	Ⅲ1a	TK H KK
13号覆土	68-1	B	Ⅲ1a	TK H KK
15号床面	75-2	B	Ⅲ1a	TK H KK
3号床面	49-2	B	Ⅲ1c	TK H KK
G-5	80-1	B	Ⅲ2a	TK H KK
1号床面	48-1	A <sub>2</sub>	Ⅲ4g	TK H KK
F-6	80-2	A <sub>2</sub>	Ⅲ2a	TK H KK
D-9、C-9	82-2	A <sub>2</sub>	Ⅲ4g	TK H KK
10号覆土	62-2	A <sub>3</sub>	Ⅲ2a	TK H KK
H-8	81-8	A <sub>3</sub>	Ⅲ4f	TK H KK

(H) 器高	頻出数
7 cm	B 1
8	B 1
9	
10	A <sub>2</sub> B 3
11	A <sub>2</sub>
12	B 2
13	
14	A <sub>2</sub> A <sub>3</sub> 3
15	B 2
16	
17	
18	B 1
計	14

(KK) 口径	頻出数
8 cm	? 3
9	B 1
10	B ? 2
11	
12	A <sub>2</sub> 1
13	B ? 6
14	A <sub>3</sub> B ? 4
15	A <sub>2</sub> B
16	? 1
17	A <sub>2</sub> A <sub>3</sub> ? 4
18	B 1
19	A(B) 2
計	29

底径	頻出数
3 cm	1
4	9
5	4
6	3
計	17

A器形 7  
 B器形 12  
 器形不詳? 10  
 計 29

文様分類	頻出数
Ⅲ1a	B ? 11
Ⅲ1c	B ? 2
Ⅲ2a	A B 3
Ⅲ2b	? 2
Ⅲ3b	? 1
Ⅲ4f	A ? 2
Ⅲ4g	A ? 3
Ⅲ4h	A 1
Ⅲ4i	? 2
Ⅲ4j	A ? 2
計	29

13～17cm、底径4～5cmで、口径が器高よりも大きいことが特徴である。土器の文様では、第群2類a（無文の類）が2点、4類（磨消縄文の類）が3点認められる。B器形の法量は、器高7～18cm、口径9～19cm、底径4～8cm、器高が口径より大きい土器が2点ある以外は、口径が器高より大きい類で占められる。底径は17点中9点（52.9%）が4cmの類で占められている。これら小鉢形の器形は、深鉢形の器形同様、器形だけに限ると十腰内第群、群にも存在している器形（前出、十腰内、神明町、蛭沢遺跡出土例ほか）である。

**注口土器**（第127、128図、第76表）

器形の概略を計測できる土器は7点出土した。便宜上器高及び最大胴径が15cm以上をA型注口、それ以下から7cmまでをB型注口とすると、A型注口1点、B型注口6点に分けられる。A型、B型ともに器高と最大胴径の数値が近接している点が一つの特色である。A型注口土器の口縁部とみられる破片は2～4点（第48図3、第53図2、3、第90図5）認められる。注口部は長さ4cm、仰角は35度前後である。B型注口より小型の類は、ミニチュア形とした。これらの注口土器の文様は、無文の類（第群2類4点）と磨消縄文（第群4類7点）に大別される。B型注口で無文の類に貼瘤、小突起、把手（吊り手か）などを全く付加していない土

第76表 注口土器資料一覧表

出土地	挿図No	文様分類	器高(H)	口径(KK)	底径(TK)	最大胴径(MDK)	法量			
							5	10	15	20cm
3号床面	49図5	Ⅲ2a	8.1	5.0	(丸)	7×9	KK MDK H MDK			
C-5	81-1	Ⅲ2a	9.3	4.9	2.8	9.1	TK KK MDK H			
13号覆土	68-2	Ⅲ2a	9.6	4.9	2.0	10.2	TK KK H MDK			
E-6	81-2	Ⅲ2b	7.5	4.0	2.0	7.4	TK KK MDK H			
C-4	82-3	Ⅲ4b	12.6	6.6	3.8	12.4	TK KK MDK H			
13号覆土	69-1	Ⅲ4c	19.6	11.5	3.5	19.0	TK KK HMDK			
3号床面	49-4	Ⅲ4d	7.2	5.5	(丸)	10.4	KK H MDK			

器高(H)	頻出数
7cm	2
8	1
9	2
12	1
19	1
計	7

口径(KK)	頻出数
4cm	3
5	2
6	1
7	1
8	1
9	
10	2
11	1
計	11

底径(TK)	頻出数
2cm	3
3	2
丸底	2
計	7

(MDK)最大胴径	頻出数
7cm	2
9	1
10	2
12	1
19	1
計	7

文様分類	頻出数
Ⅲ2a	B 3
Ⅲ2b	B 1
Ⅲ4b	B 2
Ⅲ4c	A 1
Ⅲ4d	B 1
Ⅲ4f	A 3
	11

器（第81図2）が1点認められる。この注口土器以外は、口唇部に各種の小突起を4組、胴体部に3個の貼瘤あるいは2個の貼瘤と把手1個（2例、第49図4、5）を注口部とともに器体を四等分する形状で配してある。このような把手をもつ注口土器の出土例は少ないようであるが、本遺跡では、ミニチュア形無頸壺（第75図3）と注口土器（第51図7、第60図4）にも認められる。また、1例だけ胴体部が楕（長）円形（7×9cm）の類（第49図5）が認められる。底部は上げ底と平底がある。十腰内第 群の注口土器は、口頸部が長頸壺のように細長く、しかも貼瘤の数が増加しているが、これまで十腰内第 群の注口土器（日本原始美術1、No.165：1964）と対比した場合、器形上の変化（勿論モチーフは変化しているが）は認め難い。把手状の装飾的付属部分は、十腰内第 群土器には認められていないようであるが、第 群土器（蛭沢遺跡第12号住居跡出土）の台付鉢には確認されている。

**長頸壺形土器**（第128図、第77表）

器形の全体を把握できる土器は3点で、床面から出土した。また、口頸部片で長頸壺と推定されるものが8点ほどある。器高12～16cm、口径4～7cm、最大胴径8～11cm、底径1～3cmの法量をもつ土器が認められるほか、口径9～13cmから推測される大型の長頸壺の存在が予測される。破片からは注口土器であるか、長頸壺であるか判別しがたい土器であるが、器形

第77表 長頸壺形土器資料一覧表

出土地	挿図No	文様分類	器高(H)	口径(KK)	底径(TK)	最大胴径(MDK)	法量			
							5	10	15	cm
7号床面	60図1	Ⅲ 2 b	12.3	5.8	3.6	8.1	TK	KK	MDK	H
3号床面	49-3	Ⅲ 2 b	16.0	7.2	3.0	11.5	TK	KK	MDK	H
1号床面	47-1	Ⅲ 4 g	13.5	4.3	1.3	9.3	TK	KK	MDK	H

器高	頻出数
12cm	1
13	1
14	
15	
16	1
計	3

口径	頻出数
4cm	1
5	
6	3
7	1
8	
9	1
10	1
11	1
12	2
13	1
計	11

底径	頻出数
1cm	1
2	
3	2
計	3

最大胴径	頻出数
8cm	1
9	1
10	
11	1
計	3

文様分類	頻出数
Ⅲ 2 b	3
Ⅲ 4 f	4
Ⅲ 4 g	2
Ⅲ 4 h	1
Ⅲ 4 i	1
計	11

のわかる長頸壺には胴体部の貼瘤と口唇部の小突起は認められない。十腰内 群の長頸壺には無文でも貼瘤が認められている（蛭沢遺跡に出土例）。底部は小さく、押し上げたような上げ底である。文様は無文（第 群 2 類 b）の類と磨消縄文（第 群 4 類）の類が認められ、十腰内第 群の壺形土器のような縄文の類の出土はない。ミニアチュア形長頸壺には、沈線文（第 群 3 類 a）の類が存在している点が注目される。十腰内第 群中の長頸壺とは、貼瘤の有無のほか、器形上の大きな変化は認め難い（蛭沢、十腰内遺跡と比較して）ようである。

台付浅鉢形土器（第128図、第78表）

器形の概略を計測できる台付浅鉢土器は 5 点出土した。そのほか、約20点の破片を器形計

第78表 台付浅鉢形土器資料一覧表

出土地	挿図No	文様分類	器高 (H)	鉢口径 (KK)	鉢高 (HH)	鉢底径 (HTK)	台高 (FH)	台径 (FK)	法量			
									5	10	15	cm
C-4	81図5	Ⅲ2a	(5.3)	11.2	4.0	3.3	(欠)	(欠)	HTKHH KK			
3号覆土	51-3	Ⅲ4f	8.7	9.9	2.5	4.4	6.2	7.3	HH HTK FHK H KK			
3号覆土	52-1	Ⅲ4f	9.3	11.6	3.3	5.1	6.0	8.4	HHHTK FKH KK			
3号床面	50-1	Ⅲ4f	12.8	15.1	4.9	4.7	7.9	8.8	HTKHHFHK H KK			
3号覆土	51-2	Ⅲ4g	7.0	16.5	5.2	5.0	1.8	7.5	FH HTKHH H FK KK			

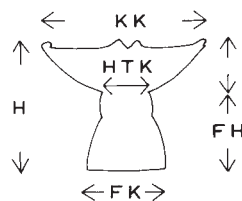
器高	頻出数
7 cm	1
8	1
9	1
12	1
計	4

口径	頻出数
10cm	2
11	2
15	1
16	1
19	1
21	1
22	1
23	2
24	2
25	3
27	1
29	1
30	1
31	1
32	2
33	1
計	23

台高	頻出数
1 cm	2
2	1
3	1
8	2
11	1
計	7

台径	頻出数
5 cm	2
6	1
7	2
10	1
11	2
13	1
計	9

文様分類	頻出数
Ⅲ2a	2
Ⅲ2b	1
Ⅲ3b	1
Ⅲ4d	1
Ⅲ4f	13
Ⅲ4g	2
Ⅲ4h	3
計	23



測用の資料とする。総体的には、器高よりも鉢部の口径が大きい傾向が認められるほか、用途と器形の変化による器形上の相違から大きくA、B、C類の器形に分けられる。ただし、第50図1以外床面から出土したものがいないため、器形的な変化を時期的な変化に置き換えることができるか言及できない。台付A類土器は、(第50図1、7、第51図3、7、第52図1)のように浅鉢部の口径と台部径との差が大きくなり、器形全体が小型のつくりのものである。この器形は、鉢部内面に文様が施文されている類(第51図3、第52図1)と無文の類に分けることができる。台付A類土器の器高は8~12cm、鉢部径9~12cm、台径7~8cm、その文様は、無文(第2群2類a)と平行磨消縄文(第4群4類f)を施文した類がある。台付B類土器は、器高のなかの台部高が1.8~3cmと低く、鉢部径が16cm前後のA類より大きく、第51図2がその典型的土器である。台付C類土器は、A類の大型土器を想定しているが、器形の全体が残っている土器は少なく、破片からの類推である。第51図4、6、7、第52図2~4、第56図1、第57図1、第63図4、第74図2、第75図4、第81図6、第82図1)などから想定すると、推定口径20cm前後から33cm、台の高さ8~11cm、台径10~13cm、全体の推定器高15~23cmの法量が推測される。これらの土器は、第4群4類f、g、hの文様を施文している。これらA、B、C類の台付浅鉢形土器と十腰内第2群と第3群のそれと対比すると、これまで神明町遺跡から出土した第2群台付土器の鉢部とは文様構成を除き変化はないが、台部の高さは本遺跡の台付B類に似て丈が低い点を指摘できる。蛭沢遺跡の十腰内第2群比定土器にも台付形は認められるが、浅鉢形の類は認められず、台付の深鉢、注口、底部穿孔土器が認められるのみである。台をもつ土器には、香炉形も含まれるが、本遺跡では確認されない。これらのことから、台付浅鉢形土器のA類とC類は、十腰内第2群特有の器形であることも予測される。

#### 浅鉢形土器 (第128図)

全形を判別できる土器は1、2点である(第68図5)。器高4.2cm、推定口径12.6cm、底径2.8cm、無文の類(第2群2類b)である。十腰内第2群及び第3群にも認められる器形であるが、タイプが異なっている。

#### ミニチュア形土器 (第128図、第79表)

器形については、前節ア、第2類土器の項で触れてあるが、鉢形6、長頸壺形3、無頸壺1、四脚付鉢1、注口4など計15点が器形のわかる土器である。この土器の用途については、次の節で述べてある。ミニチュア形土器の法量について、厳密なきまりはないようであるが、ここでミニチュア形とした土器を集計したところ、偶然であるが口径、器高、最大胴径などが8cm以下の土器となった。また、ミニチュア形土器が、無文、粗製、極小型などの制約があるとすれば、その制約から逸脱している土器は、沈線による入組状文を施文した長頸壺(第50図10)が相当する。器形の計測値、文様などは第79表にまとめて示してある。ミニチュア土

第79表 ミニチュア形土器資料一覧表

鉢

出土地	挿図番号	文様分類	法量	5 cm
3号覆土	50図8	Ⅲ2b	TK H (KK)	
7号覆土	60-6	Ⅲ2b	H TK (KK)	
7号覆土	60-8	Ⅲ2a	TK H (KK)	
3号覆土	50-3	Ⅲ2b	TKH KK	
3号覆土	50-6	Ⅲ2b	TK H KK	
3号覆土	50-4	Ⅲ2a	TKH KK	
計				6

無頸壺

出土地	挿図番号	文様分類	法量	5 cm
15号床面	75図3	Ⅲ2a	TKKK H MDK	
計				1

四脚付鉢

出土地	挿図番号	文様分類	法量	5 cm
3号覆土	50図9	Ⅲ2a	TK H KK	
計				1

長頸壺

出土地	挿図番号	文様分類	法量	5 cm
13号覆土	68図6	Ⅲ2b	TK MDK (H)	
3号覆土	50-10	Ⅲ3b	TKKK MDK H	
15号床面	75-5	Ⅲ2b	TKKK MDK H	
計				3

注口土器

出土地	挿図番号	文様分類	法量	5 cm
1-6	81図3	Ⅲ2b	TK (MDK)H	
7号覆土	60-4	Ⅲ2a	TKKK H MDK	
3号覆土	50-2	Ⅲ2a	TKKK MDKH	
7号覆土	60-2	Ⅲ2a	TK (H) MDK(H)	
計				4

器は、器形を確認できる土器50点中15点、約30%を占め、遺存率はよい。小型で、土圧に耐え得る力が大きいためであろう。

ウ 第 群土器の土器組成と型式設定

十腰内遺跡の報告書で、その第 群土器について、次のように報告されている。

「第 群土器は、内容の把握がまだ充分にできていない一群である」(同書340頁)とし、土器の実測図、拓影図がなく、P.L.74-125~135に写真図版が収録されているだけである。また、「第 群土器は後期後半から末葉に至る型式である。少なくとも三型式以上の細分が可能であろう。残念ながら資料が少なく、多くを述べることはできない。古くは新地式と呼ばれ、近年は金剛式や宮戸 a・b式と称されているもので、いわゆる貼瘤文土器のグループである(伊東:1956、後藤:1957)。第 群土器は括れた頸部から放射状に開いた口縁の先端が、尖鋭な波状を形づくる鉢形土器をもって代表的なものとする。波状口縁の先端やその中間には刻目を加えた鱗状、角状の突起が発達する。仙台湾地方で、後藤勝彦氏が宮戸 b、a式の中間に設定された西ノ浜式にほぼ相当するものと考えている(後藤:1961)。器面に加えられる瘤状



突起の存在も第 群土器ほどの繁縷さはなく、いわゆる貼瘤文土器の前段階的なものとみることができよう。繰り返すことになるが、第 群土器の資料は非常に少ない。これは本遺跡だけに限らず全般的な傾向として扱えられるものである。今までに、この時期の土器の詳しい内容分析が不可能だった原因の一半は、その辺にあるといってもよい。ただ、後藤氏のいう西ノ浜式が一型式として成立することには、もはや疑問の余地がないだろうし、十腰内遺跡における第 群土器の場合も、独立した型式として取扱える可能性を含むものとしてよいだろう。しかし、私達の場合は第 群土器との分離がまだ充分だといえないし、第 群土器との間にも同様なことをいわねばならない。したがって、この二つの型式に対する詳しい記述は後日に機会を持ちたいと思っている」(同書383～384頁)。誤解を招かないためと自戒の意味もこめて、あえて長文を引用したのは、十腰内第 群土器が当時どのような状況で型的分類が行われたか、そして、それらの土器型式の内容を引きだすためである。

報告書が刊行された後、磯崎正彦「後期の土器」(山内清男編：1964)、天問勝也「後期」(青森県立郷土館：1971)、小林達雄編「縄文土器」(1972)、佐原真「縄文土器」(1979)などに十腰内 群～ 群土器の標式的なものが掲載されたが、依然として十腰内 群を中心とした土器型式の実態は未完成であったといわざるを得ない。

本遺跡出土の第 群土器が、これまで発表されている内容不明な十腰内第 群土器に相当するとすれば、第 群が土器型式としての要件を具備しているか吟味して、その内容をより明確にしておくことが肝要であろう。磯崎氏が提唱された十腰内第 群土器の型的独立の可能を含めた分析と検討が必要である。言いかえると十腰内第 群土器の型的再編成に関する予察を行うことを意味する。

なお、ここで用いている「土器型式」の概念は、「ある地域である時期に使われていた器種の全体、つまり土器の組成(セット)を指す」(須藤：1973)。また、型式、様式、形式の概念については、「土器の型式、様式、形式について」(小林：1979)、「土器の用途と製作」(佐原：1979)などが知られている。さて、本遺跡の第 群土器の型的分類に用いる資料は、竪穴住居跡の床面上から出土したもので、更に器形が確認できる土器(第130図、第38表)である。竪穴住居跡、竪穴遺構は9軒検出したが、すべて同時期に居住し廃絶したとは考えられない。床面から器形を確認できる土器が出土した遺構は、第1、3、7、14、15号遺構の5軒である。これらの各遺構から1～6点の土器が出土し、その総数は13点である。従って資料としては十分なものとは言い難いが、十腰内遺跡出土の土器よりは多少良好な資料と考えられる。これらの遺構から出土した土器を組み合わせると、第82表に示したようになる。土器型式、土器の組成についてひとつの仮説を試みると、深鉢1点、小鉢1～2点、注口1～2点、長頸壺1点、台付浅鉢1点、ミニチュア形(袖珍、小型模造土器)1～2点の土器組成が考えられる。これらの土器組成

が最も揃っている遺構は第3号遺構である。ミニチュア形土器は、日常生活で直接使用されない土器といわれている（小林：1977、佐原：1979）から一応除外して考えてよからう。

上記のような土器組成を仮定すると、第1号遺構では、深鉢、注口、台付浅鉢の器種が欠けているが、小鉢と長頸壺が各1点共伴している。これらの土器の文様は、第3群3類以外に縄文（第3群1類）、無文（第3群2類）、磨消縄文（第3群4類）の土器が認められる。第7号遺構の土器は、長頸壺だけが出土し、その他の器種は欠けている。長頸壺は、無文（第3群2類）土器である。第14号遺構では、第1号遺構同様、第1～3類土器の出土はなく、器種は深鉢（第3群4類h）のみであるが、この土器は十腰内第3群土器を代表する土器（磯崎：1964）に類似する。第15号遺構の土器は、深鉢と小鉢2点出土し、他の器種を欠いている。これらの土器は、縄文を施文したもの（第3群1類a）だけである。

これらの床面から出土した土器は、竪穴住居、遺構の使用、廃絶時期を決定し、廃棄のパターンを（小林：1974）示すものといわれている。器形の区別については、佐原氏が提唱した（佐原：1979）ように、一つの便宜的な目安にすぎないともいわれている。そしてこれらの遺構から出土した土器のなかに、第3群3類に分類した沈線文を主体とした土器は見当たらない。

深鉢形土器（第49図1、第71図1、第74図1など）は、A1類「5個の大波状口縁」、A2類「平縁」、A3類「口唇部に双頭状山形小突起をもつ」及びB器形「口縁がやや内傾する器形」がある。A器形の土器は、羽状縄文の地文を一部磨消した類（A3第3群4類e）と口頸部、胴体部ともに入組状磨消羽状縄文を施文した類（A1第3群4類h）で、後者が十腰内第3群土器の標式的土器となっている。B器形の土器は、いわゆる粗製の縄文土器に組み入れられる類（第3群1類a）である。深鉢土器は、5軒中3から各1点出土し、法量は、器高23～36cm、口径26～35cm、底径7～8cmである。

小鉢形土器は、A器形の類が少なく、B器形が多いようである（第48図1、第49図2、第75図1、2）。これら小鉢の文様は、縄文（第3群1類a、第75図1、2）と羽状縄文（第3群1類c、第49図2）及び口頸部と底部に平行磨消羽状縄文帯、胴体部に入組状磨消羽状縄文を施した（第3群4類g、第48図1）類がある。小鉢は5軒中3軒から4点出土し、法量は、器高7～12cm、口径9～13cm、底径3～4cmほどである。

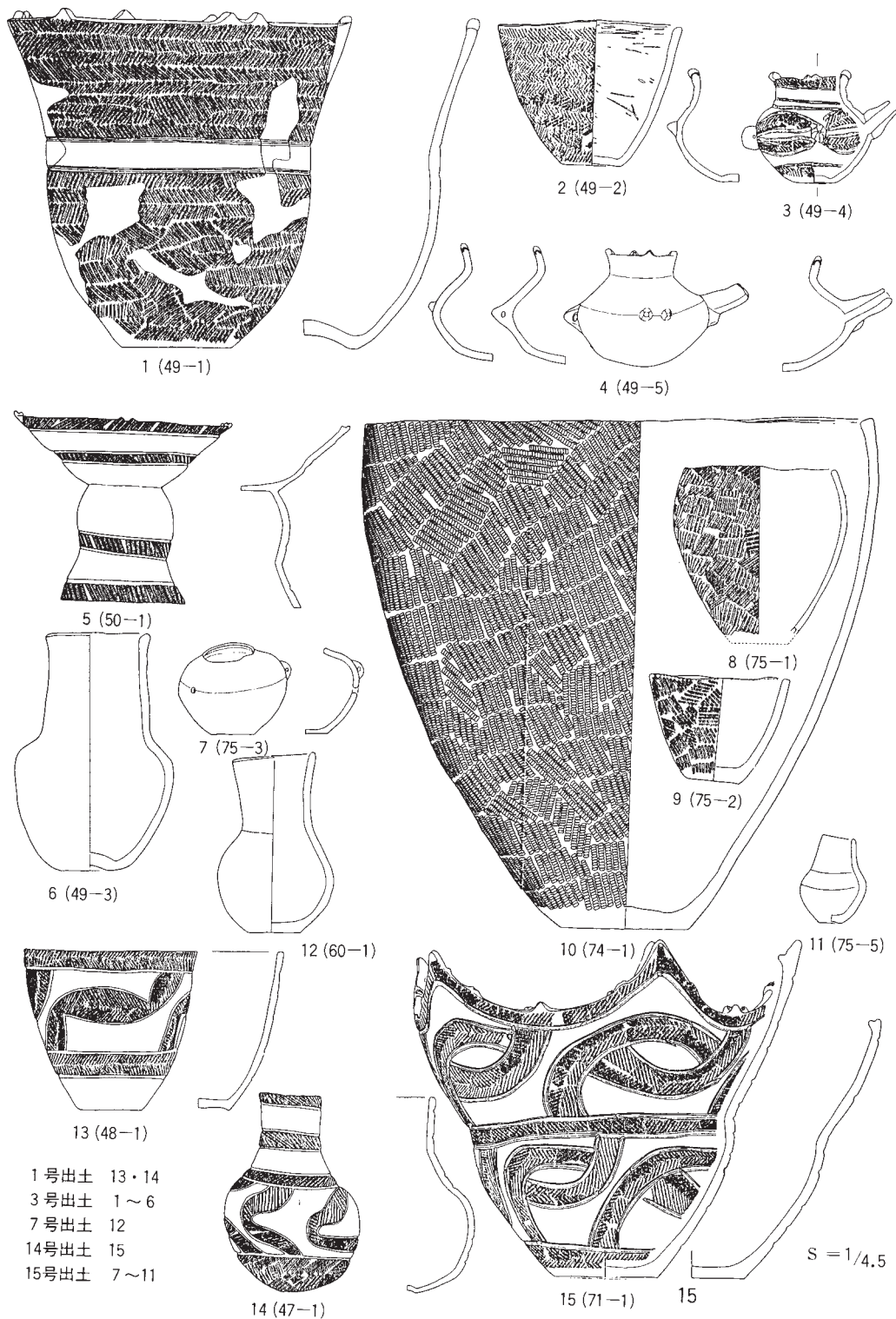
注口土器は、第3号遺構から2点出土した（第49図4、5）。第49図5の土器は無文で、小突起、小把手、貼瘤がある類（第3群2類a）で、器高8cm、口径5cm、丸底である。別の1点（第49図4）は、胴体部に連弧状磨消羽状縄文を施し、口唇部に双頭状小突起、胴体部に把手と貼瘤がある類（第3群4類d）で、器高7cm、口径5cm、丸底を呈している。これらの注口土器は、いずれも小型の類に入るが、ミニチュア形ではない。

長頸壺形土器は、無文の類 2 点（第49図3、第60図1）と入組状磨消羽状縄文の類 1 点（第47図1）が、5軒中の3軒から各1点出土した。無文の類は、器高12～16cm、口径5～7cm、底径3cmであり、入組状磨消羽状縄文の土器は、器高13cm、口径4cm、底径1cmほどの大きさである。

台付浅鉢形土器は、第3号遺構から1点（第50図1）出土した。口唇部に2個一組の小山形突起をもち、鉢、台部共平行磨消縄文が施文された（第群4類f）類で、器高12cm、口径15cm、台径8cmほどの法量を備えている。

前記のように、第群土器のセット関係が認められた土器は、第3号遺構出土の土器に代表される器種であろうと考えられる。その器種は、深鉢1、小鉢1、注口2、長頸壺1、台付浅鉢1である。上述のように充分とは言えないが、一応セット関係を想定することは可能である。そして、第群土器のセットを構成する土器の文様には、本書で第群3類（沈線文）とした土器は含まれていない。従って、土器型式の主流をなす土器の文様は、第群1、2、4類ということになる。第群1類とした土器は、縄文を施文し後期及び晩期にも存在する器種である。また、第群2類とした土器は、無文の土器で、器形の全体を把握できない場合は時期を決定する要素が欠けた土器である。従って、本遺跡の竪穴住居出土の第群土器で、標式的土器として採用できる土器は、第群第4類土器で、しかも、床面から出土した4類d、e、f、g、hに分類した土器である。これらの土器は、十腰内遺跡の第群土器に比定できる要素を具備している。

土器組成論については、須藤隆氏の論文が詳しい（須藤：1973）。単一遺跡における土器組成の在り方、同一型式期に属する複数遺跡間の土器組成の在り方、更に異型式間での土器組成の差異・変化が問題視されている。また、その方法論上の問題はあがあるが、本遺跡の第群土器を十腰内第群土器に相当させ、それを型式化する場合には、これらの問題を含めた基礎的な資料集めが必要である。各型式、器形ごとの数量的関係、その関係がそれぞれの型式において、一般的傾向として認め得るか否か等（前出、須藤：1973、84頁）検討してみたい。対比に用いた資料は、十腰内第群から第群までの土器を伴出した県内の神明町（県埋文58集：1981）、中宇田（県埋文13集：1974）、渦ノ沢（村越：1968）、一本木沢（村越：1968）、水木沢（県埋文34集：1977）、蛭沢（葛西励：1979）の6遺跡のほか、土壌（墓？）からこれらの土器群が出土した遺跡もあるが、一般的に竪穴住居跡出土の土器組成と墓域出土の土器組成は、異なる量的関係を示すであろうといわれているので（須藤：1973）除外した。前記の遺跡から出土した土器と対比するため、本遺跡の第群土器の各種分類基準に該当または近似する土器は一応適用した。また、本遺跡の組成に採用した資料は、既に第38表にまとめてあるものを用いた。



1号出土 13・14  
 3号出土 1~6  
 7号出土 12  
 14号出土 15  
 15号出土 7~11

第130图 第Ⅲ群土器組成図

第80表 十腰内第Ⅲ～Ⅴ群土器組成対比表(1)

型式名	遺跡名	遺構名	器種										計	備考	
			A器形深鉢	B器形深鉢	小鉢	浅鉢	台付浅鉢	長頸壺	広口・無頸壺	注口	台付注口	香炉			
十腰内Ⅲ	神明町	5住		①a				④b	①a					3	神明町遺跡，県埋文58集：1980。
		6住		①a				④e	④e					3	
		計		2				2	1	1				6	
		%		33.3				33.3	16.7	16.7					
中宇田	1住								④h				1	中宇田遺跡，県埋文13集：1974。	
		計							1				1		
		%								100					
Ⅲ・Ⅳ	湯ノ沢	2住				④e							1	湯ノ沢，一本木沢遺跡，村越潔『岩木山』1968。	
		1住	④h	①c	①c	①c							4		
		計	1	1	1	2							5		
		%		40.0	20.0	40.0									
Ⅳ・Ⅴ	一本木沢	1住	④h		①a				④e	④x				一本木沢一床面出土は，壺形2点だけのようである。	
			②b		①a			④g					7		
		計	2		2			2	1				7		
%	28.6		28.6				28.6	14.3							
馬場瀬第Ⅲ群	馬場瀬(1)	1号			④g			④g					2	馬場瀬(1)では9軒出土し，床面出土の土器がない，あるいは破片のみ出土が4軒ある。第3号遺構が最多器種。	
		3号	④e		①c		④f	②b	②a		④d		6		
		7号						②b					1		
		14号	④h										1		
		15号		①a	①a								3		
		計	2	1	4		1	3		2			13		
		%	23.0	30.8			7.7	23.0		15.4					
縄文後期後葉	水木沢	1住				②b		④e	①c	②b			4	水木沢遺跡，県埋文34集1977。17軒出土，床面から小破片のみ出土した住居跡が6軒認められた。型式名を採っていない。	
		2住	④d	①c		④x		②b		②b	③b		9		
		3住					④g		①c		③d		3		
		5住	④e							④g			2		
		6住	④e										1		

第81表 十腰内第Ⅲ～Ⅴ群土器組成対比表(2)

縄 文 後 期 後 葉	水 木 沢	7住				(2b)														1		
		8住								(4d)	(4g)										2	
		9住						(2b)													1	
		10住						(2b)			(4g)										2	
		11住		(1c)				(4g)	(1c)	(4g)	(4g)										5	
		13住	(4g)																			
			(4c)																			2
		計	5	2			3	2	7	3	7									3	32	
		%	21.9				9.4	6.3	21.9	9.4	21.9									9.4		
		十 腰 内 第 Ⅲ 群	住 沢	12																	(3a)	1
																			(4g)	2		
	(2b)			(2b)																(2b)	3	
	(2b)			(2b)	(2a)				(2b)											(2b)	5	
	(4h)			(1a)	(2b)	(4b)	(2b)	(2b)			(4g)									(4x)	8	
計	3			4	2	1	1	2			5									1	19	
%	36.8			10.5	5.2	5.2	10.5				26.3									5.2		
13	(4h)																				1	
	(4g)										(3a)										2	
	(2b)										(ε=)										2	
住	(2b)				(2b)		(深)				(2a)										4	
計	4				1		1				3										9	
%	44.4				11.1		11.1				33.3											
14住								(2a)													1	
計								1													1	
%																						
15住			(2b)			(2b)													2			
	(2a)		(2a)		(3a)				(4e)	(4g)									5			
計	1		2		2				1	1									7			
%	14.2		28.6		28.6				14.2	14.2												
16										(4h)									1			
								(2a)		(4h)									2			
		(1c)						(2b)		(4h)									3			
住		(2b)						(2b)	(4d)	(4h)	(2a)								5			
計		2						3	1	4	1								11			

蛭沢遺跡調査団，葛西励『蛭沢遺跡』  
1979。7軒で51点，1軒平均7.3個。

	%	18.2			27.3	9.0	36.4	9.0			(蛍沢遺跡のつづき)
17住							(2a)	(4h)	(2b)	3	
計							1	1	1	3	
%							33.3	33.3	33.3		
18住	(2a)									1	
計	1									1	
%	100										

(注) 文様分類は一応馬場瀬1遺跡の第 群土器と同様であるが、下記のように大別した。

群1類 縄文、羽状縄文

群2類 無文

群3類 沈線文(含櫛がき文)

群4類 磨消縄文

印は、個数を示す。比率は、土器組成の目安にすぎない。土器は床面出土で、器形の全体が示されているものの数である。

第82表 十腰内第Ⅲ～Ⅴ群土器組成対比表(3)

型 式 名	遺 跡 名	器 種									計	住 居 数	備 考		
		A 器形 深鉢	B 器形 深鉢	小 鉢	浅 鉢	台 付 浅 鉢	長 頸 壺	広 口・ 無 頸 壺	注 口	台 付 注 口				香 炉	
十 腰 内 Ⅲ	神明町	個数	2			2	1	1				6	2		
	%	33.3			33.3	16.7	16.7								
Ⅳ	中宇田	個数						1				1	1		
	%						100								
(Ⅲ・Ⅳ)	湯ノ沢	個数	1	1	1	2						5	2		
	%	20.0	20.0	20.0	40.0										
(Ⅳ・Ⅴ)	一本木沢	個数	2		2			2	1			7	2		
	%	28.6		28.6			28.6	14.3							
(Ⅳ)	馬場瀬(1)	個数	2	1	4		1	3			2	13	5	土器組成不明 4軒あり	
	%	15.4	7.7	30.8		7.7	23.0			15.4					
後 期 葉	水木沢	個数	5	2		3	2	7	3	7		3	32	11	土器組成不明 6軒あり
	%	15.6	6.3		9.4	6.3	21.9	9.4	21.9		9.4				
Ⅴ	蛍沢	個数	8	7	5	1	4	6	2	14	2	2	51	7	
	%	15.7	13.7	9.8	2.0	7.8	11.8	4.0	27.5	4.0	4.0				

十腰内第 群から第 群に及ぶ土器組成については、第80～82表のような対比を試みたが、遺跡数が僅かなため一般的な傾向としてとらえることは無理であろう。しかし、第 群土器群の器種に存在しないものが、第 群土器になると、出現していることだけは確かである。また、最大残存個数を比較すると、神明町遺跡の第 群土器は3個、馬場瀬(1)遺跡の第 群土器は6個、水木沢遺跡で9個、第 群土器を伴出した蛭沢遺跡では19個と増加の傾向が認められる。住居内の土器組成は、その土器群を製作・使用・廃棄した家族、あるいはそれらの集団の生活様式と密接な関係をもち、生活様式を反映している。土器組成の数量的差異、変化は、生活様式の変化多様化に起因しているものと考えられる。また、生活の道具である土器の形態的变化と用途の関係、数量的増減も、それを必要とした家族及びそれらの集合体である社会集団の生活様式と密着していると言われている。土器組成を比較分析する方法はいろいろあるが、土器型式を設定する際は、できるだけ型式内容を明らかにする基礎資料、手掛りを具備しておくことが、差し当たって必要である。できれば、第 群土器の分布範囲についても究明しておくべきであるが、別の機会を持ちたい。

なお、県内で発掘された十腰内第 群土器を伴出した竪穴住居跡は、前掲の各遺跡のほかに、弘前市の高長根山遺跡(弘前市教育委員会ほか：1981)が知られている。この遺跡からは十腰内第 群土器を伴う竪穴住居跡が2軒検出されているが、器形の全体を確認できる土器がはっきりしないこと、時間的な余裕がないため、資料とすることを割愛した。

## エ 第 群土器の編年的位置

十腰内遺跡の土器群別と東北地方における後期縄文土器の型式対比表(第83表)は、十腰内遺跡の報告書(磯崎：1968、376～377頁)に発表されている。本遺跡出土の第 群土器が、十腰内第 群土器に相当するならば、従来の土器群別から土器型式に変えることができる内容を秘めている。これまで土器群別を土器型式化して、既に十腰内1式～十腰内5式と記述している刊行物もみられるが、実際十腰内 群、 群土器の型式的内容が不明なまま使用されてきたことになる。磯崎氏が発表された型式対比表(1964「後期縄文式土器」)以後、発表された土器編年表の主なるものを列挙すると次のものがある。

斉藤忠編、上野佳也作成「縄文時代編年表」(1974)の十腰内4は、加曾利B<sub>2</sub>-曾谷に併行させている。安孫子昭二「縄文式土器の型式と編年」(1978)は、具体的な型式名を記載していない。小林達雄、泉拓良編「縄文土器編年表」(1979)の十腰内4は、加曾利B<sub>3</sub>、金剛寺と併行、十腰内5は安行 a、大洞B<sub>1</sub>と併行させ、十腰内4は晩期に位置づけられている。佐原真編、安孫子昭二作成「縄文土器編年表」(1979)では、十腰内3-新地1-曾谷、十腰内4-新地2-安行 -(+)-新地3-安行、十腰内5-新地4 -(+)-御殿山となっている。井上光



第83表 十腰内遺跡の土器群別と東北地方における後期縄文土器の型式対比表

地方	時期	後 期 初 頭	後 期 中 葉	後 期 末 葉	晩 期 前 半	文 献
	氏 名					
關 東	山内清男 (1940)	堀之内 1 2	加曾利 B 1 2 3	曾谷安行 1 2	安 行 3 a 3 b 3 c	「日本先史土器図譜」1-12 先史考古学会
	芹沢長介 (1956)	堀之内 1 2	加曾利 B 1 2 3	曾谷安行 1 2	安 行 3 a 3 b 3 c	「縄文文化」日本考古学講座3 河出書房
東 北 一 般	山内清男 (1930)				大 洞 B BC CI	「所譜亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」考古学 1-3
	芹沢長介 (1960)				I期(雨滝) II期	「石器時代の日本」築地書館
	山内清男 (1944頃)				大洞B BC CI 1 2 1 2	「日本原始美術」1 講談社 (附記, 原典参照)
東 北 南 半 (仙台湾)	伊東信雄 (1956)	南 境	宝ヶ峰	金剛寺		「宮城県古代史」宮城県史1 宮城県
	後藤勝彦 (1956)	第三層土器	第二層土器	第一層土器		「宮城県宮戸島台囲貝塚の研究」宮城県の地理と歴史1
	後藤勝彦 (1956)	宮 戸 I a I b	宮 戸 II a II b	宮 戸 III a III b		「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器編年について」塩釜市教委教育論文 第2集
	齋藤良治 (1959)			第三貝層 第二混土層 第二貝層 第一混土層 第一土層		「宮城県鳴瀬町宮戸台囲貝塚の研究」宮城県の地理と歴史2
	加藤孝 (1960)	宮 戸 I a I b	宮 戸 II a II b	宮 戸 III a III b	大 洞 B a B b BC CI	「考古学上より見た塩釜市周辺の遺跡」塩釜市史III 別篇1
	後藤勝彦 (1961)	第一類土器 (I a I b)	第二類土器 第三類土器 第四類土器 第五類土器 (II a II b) 西ノ浜 (III a III b)	第六類		「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌 48-1
	林謙作 (1965)	宮 戸 袖窪 I a I b	宮 戸 II a II b	西ノ浜 宮 戸 III a III b		「東北一縄文文化の発展と地域性-」日本の考古学II 河出書房
角田文衛 (1935)	a b	c			「奥羽に於ける二・三の薄手式土器」考古学評論1-2	

地方	時期	後 期 初 頭	後 期 中 葉	後 期 末 葉	晩 期 前 半	文 献
	氏 名					
東北北半 (陸奥・津軽)	八 幡 一 郎 (1953)	大 湯				「大湯町環状列石」埋蔵文化財発掘調査報告II 文化財保護委員会
	江 坂 輝 弥 (1956)	天 吉 鳴 狗 野 沢 沢 田 沢	大 湯			「東北一各地域の縄文式土器」日本考古学講座3 河出書房
	江 坂 輝 弥 (1957)	札地 荒川	(+) (+) (+)	(+) (+)	雨滝・是川 C I	「先史時化—II縄文文化」考古学ノート2 日本評論新社
	磯 崎 正 彦 (1964)	I	十 腰 内 II III IV V	VI		「後期縄文式土器」日本原始美術1 講談社
北 海 道	児玉作左衛門・大場利夫 (1952)		船 泊 上 層			「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」北方文化研究報告7
	大場利夫・石川 徹 (1956)		手 稲 第1・2・3様式			「手稲遺跡」北海道札幌郡手稲町教育委員会
	名取武光・峰山 巖 (1958)	入 江 B A				「入江貝塚」北方文化研究報告13
	吉 崎 昌 一 (1965)	(+) 涌元 入江	船泊上層 手稲	堂林 御殿山	(+) 上ノ国 (+)	「北海道—縄文文化の発展と地域性—」日本の考古学II河出書房

1. 本表は東北地方における後期縄文土器の諸型式を発表年次を追って対比したものである。一部のものは編年表から採録した。
2. 本表に掲載された型式名は私達の目に触れたもののうち、主要な文献だけのものを掲載した。したがって総ての型式を網羅してはいない。
3. 各型式の全体的な位置を把握出来るように、型式編年の整備されている関東地方のものを附した。又晩期前半のものも参考までに附した。
4. 関係ある型式のものとして北海道も併載した。北海道の全体的な型式序列については、吉崎氏のものより道西南部、中央部のものを併用させていただいた。
5. 本表に誤りがあるとすれば、その責は総て私達の負うべきものである。(十腰内遺跡報告書 376~377頁引用 担当者)。

貞、児玉幸多、林屋辰三郎、黛弘道編「縄文式土器編年表」(1980)の関係分のみ転載すると次のとおりである。

地方 時期	北海道 北東部	北海道 北西部	北海道 東北部	北海道 東南部	関東 東部
縄文後期	丸松	涌元	大曲 I	+	称名寺
	ワシベツ	入江	十腰内 I	袖窪	堀之内 I
	船泊上層	船泊上層	十腰内 II	南境	堀之内 II
	手稲	手稲	十腰内 III	宝ヶ峰	加曾利 B I
	堂林		十腰内 IV	西ノ浜	加曾利 B II
	御殿山	茂辺地	十腰内 V	金剛寺	加曾利 B III
					曾谷
					安行 I
					安行 II

一般的に縄文後期の土器群は、後半になると北海道では突瘤文土器(堂林、御殿山式、これは一部青森県でも出土している)、東北地方では貼瘤文土器群(茂辺地、十腰内、西ノ浜、金剛寺、新地式など)が盛行し、そして、関東地方を中心として安行式土器群が地域を判然と区分して出現している。馬場瀨(1)遺跡の第 群土器が十腰内第 群に相当するとすれば、縄文時代後期中葉より新しく、末葉より古い時期、後期後半の中頃に位置づけられることが想定されよう。今後、更に土器型式を識別できる資料が増加して、十腰内土器群の型式的内容が解明されることを期待したい。(北林)

## 7 まとめと問題点

以上が、馬場瀬(1)遺跡の検出遺構と出土遺物の概要である。

このたびの調査で得られた成果を整理し、それによって派生する問題点などを指摘して、本報告書のまとめとしたい。

### (1) 遺跡の立地

本遺跡は、岩手県に源をもつ新井田川と馬淵川の間挟在する山間地の小丘陵地に立地し、太平洋岸から直線距離にして約14km内陸部に入っている。また、鮭の潮行している新井田川は、本遺跡の東方4kmを北に向けて流れている。遺跡の北側を一般国道340号線が通っているが、この道は、藩政時代に“上り街道”と呼ばれ、現在でも一里塚が残っている。遺跡付近の小丘陵は200m前後の標高があり、小丘陵の間には沢水が流れ、遺跡の調査地区は南に面している。遺構、遺物の分布から、調査対象地区の周辺に埋蔵文化財が遺存していることは明確である。

(北林)

### 「上り街道」について

貞享の頃(1684～1687)より開通していたことは、刊本『八戸藩史料』寛保3年(1743年)の条に見える。また、「新上り街道」については、『八戸藩御日記』寛保2年8月8日(1742年)と寛保3年3月26日の条に記されている。小井田先生を介して、八戸市史編さん委員の野田健次郎氏から資料を提供していただいた。

### (2) 遺跡の基本層位

遺跡調査区の基本層位は、8層に区分された。第1層下位には十和田b火山灰層が、また、中掇浮石(第1層)、南部浮石(第2層)、八戸火山灰層(第3層)などの火山灰層が層位区分の鍵層となった。調査区北側の小丘陵地では第4～6層が欠失して、表土下から第7層が認められた。また、調査区南側では、基本層位と同様の堆積が認められた。

遺構の確認は、調査区南側では第7層(中掇浮石層)上位面、調査区の北側では第7層上位面であった。

遺物は、表土、覆土を除くと第1、2、3層から出土した。第4、5層からは、縄文時代後期後半(十腰内群土器)及び晩期初頭(大洞B、B-C式)の遺物が、また、第6、7層及び覆土からは縄文時代中期の遺物も出土した。

(北林)

### (3) 調査の成果

#### ア 検出遺構

##### 遺構の立地と構成

A地区及びC地区の遺構群は、いずれも南東に面する台地上に位置しているが、前述したように、それぞれその立地を異にしている(第9図)。A地区の遺構群は、南東側平坦面の南端谷に面した台地の縁の部分に位置し、竪穴住居(5基)、竪穴(4基)、土壇(2基)により構成され(第11図)、C地区の遺構群は、北西側緩斜面の末端から急斜面に移行する部分に位置し、特殊竪穴(3基)、フラスコ状土壇(6基)、土壇(4基)から構成されている(第31図)。従って、A・C地区の遺構群は、各々その立地とともに、遺構の構成においても顕著な対照を示している。

##### 遺構の時期

A地区では、遺構の掘り込み面が、すべて第層(中撤浮石層)より上部に想定され、また遺構内外から、縄文時代後期十腰内第群に相当するとみられる土器が、ほぼ単一の相をもって多量に出土している。従って、A地区遺構群構築の時期は、縄文時代後期後半に求めることができる。なお、第3・6・10・12・13・14・15号遺構から、それぞれ少量の早期及び晩期の土器が出土したが、主として、後期の遺構構築の際にこわされた包含層からの混入とみられる。

C地区の場合は、遺構の立地する部分で、第層(中撤浮石層)及び第層(南部浮石層)をほとんど欠いており、また、遺構に確実に伴う遺物も出土していない。つまり、C地区遺構群については、厳密には、その構築時期を決定できない訳である。しかし、遺構周辺に少量ではあるが、後期又は晩期の土器が分布すること、他の時期の遺物が出土していないこと、第20・22号遺構(特殊竪穴)及び第28号遺構(フラスコ状土壇)の埋没過程において、遺構廃絶後あまり時間的経過のない時点で、後期又は晩期及び晩期大洞BC式に相当する土器が、廃棄あるいは流入していること、また、第21号遺構(特殊竪穴)内の堆積層のうち、第1・2層が縄文時代晩期末葉以降に形成された層とみられ(注1)、この層の下層から晩期大洞B式に相当する土器が出土していること等の理由により、特殊竪穴の構築時期を、縄文時代晩期前半又はそれ以前の比較的近い時期に求めることが可能である。ただし、遺物のほとんど出土していないフラスコ状土壇及び土壇については、その構築時期を明確にできない。

注1、松山力氏の御教示による。

##### A地区の遺構

A地区における遺構と遺物の分布状態は、これが調査区外西側にのびることを示しており、事実、西側に隣接する畑地から、同時期に属する相当量の遺物が表面採集されている。ただし、

A地区の遺構群構築に際して、未広がりにのびる台地平坦面の一端部を選択利用していることから、遺構群全体の規模は、それほど大きなものになるとはみなし難い。また、調査区西側における平坦面は、農道の東側までの小面積に限られ、農道の西側は、東面する急斜面となっている。従って、遺構構築の立地条件の1つとして、平坦面に占地するという制約があったとすれば、A地区の遺構及び遺物の分布は、ほぼ、農道の東側に限られるものとみられる。農道の西側斜面については、林地となっているため、表面採集等を行えなかったが、仮にこの部分に、遺構あるいは遺物が分布するとしても、立地条件からみて、調査区内のものとは、その性格を異にするものが予想される。

以上述べたように、A地区遺構群については、調査区外に予想される分布範囲の狭さから判断して、調査区内で確認された遺構群の規模が、ほぼ、この遺構群の全貌を呈しているものとみられる。従って、A地区における竪穴住居、竪穴及び土壇からなる遺構群の構成が（個々の遺構の同時性については、検討すべき余地があるものの）、縄文時代後期十腰内第 群期の集落のひとつの姿を示すものとして把握できる。

遺構の計測値、長軸方向等については、第84表に示し、規模（長径×短径）、深さ等については、第131～132図にグラフ化してある。A地区遺構群の場合、竪穴と土壇の規模は相互に類似しているが、竪穴住居は、相対的に規模の大きなもの（第3・10・13号遺構）と、規模の小さなもの（第7・15号遺構）とに分けられる。竪穴住居の中で規模の最小のもの（第7号遺構）は、竪穴の中で規模の最大のもの（第12号遺構）に近い値をもつ。従って、規模の上では、竪穴住居と竪穴との間に明確な区別が存在しない。竪穴住居の平面プランについては、規模の小さなものが、ほぼ円形を基本とするのに対して、規模の大きなものは、楕円形を基本としている。また、規模の大きなもののうち、第10・13号遺構の平面形は、壁の一部が竪穴内に張り出すタイプのものであり、第3号遺構の場合も、南半部のプランが不明であるので、やはり同タイプのものとなる可能性がある。竪穴の平面プランについては、規模の大小にかかわらず、円形と楕円形のものがあるようである。竪穴住居及び竪穴の上屋構造に関しては、柱穴の確認例が少ないので、その差異を論ずることができない。竪穴住居のうち、主柱穴を判断できる例（第3号遺構）は、炉を囲んで台形に配置された4主柱穴をもつタイプであり、これに壁柱穴が組合うものとみられる。第13号遺構の場合も、同タイプとみられるが、明確には主柱穴を判断できなかった。竪穴住居における炉は、石組の痕跡が確認されないため、すべて地床炉と判断せざるを得ない。炉の位置は、規模の大きな竪穴住居では、床面中央から、壁の張り出している側へ寄る傾向があり、規模の小さな竪穴住居では、むしろ床面中央に近い傾向がある。一般論として、炉の偏在する方向に出入口が想定されるとすれば、規模の大きな竪穴住居及び竪穴の床面の多くは、第 層中に構築されているが、ほとんど生活面としての痕跡を残していない。

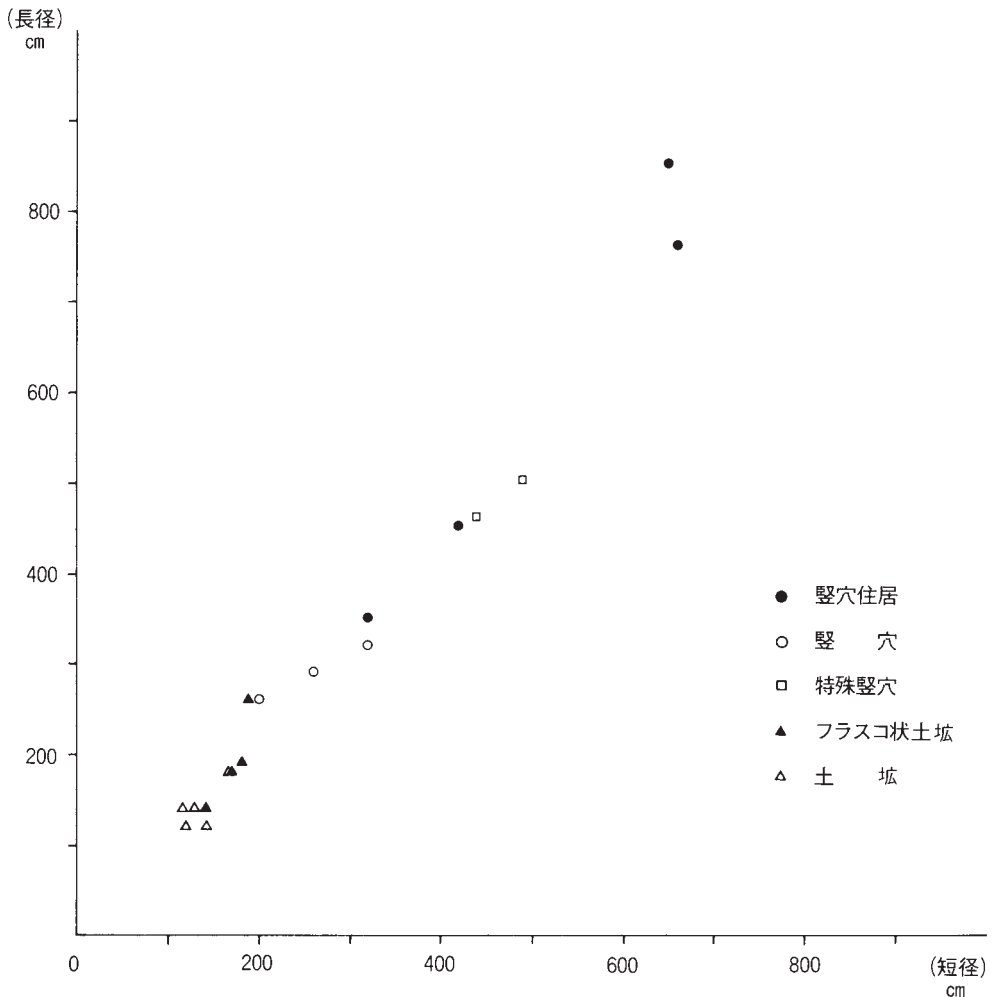
第84表 遺 構 一 覧 表

遺構No.	分 類	確 認 面	位 置	平 面 形	大 き さ(cm)	長 軸 方 向	床面積(m <sup>2</sup> )	壁 高(cm)	炉の大きさ(cm)
1	竪 穴	Ⅲ層上面	A地区G、F-6	円 形	290 × 263 × 22		5.08	14~ 22	
2	竪 穴	Ⅲ層上面	A地区F-5	楕 円 形	261 × 200 × 25	N-48°-E	3.28	20~ 24	
3	竪 穴 住 居	Ⅲ層上面	A地区E、F-3、4、G-4、F-5	楕 円 形	《(846)》×《(652)》× 48	《(N-45°-E)》	《(38.80)》	28~ 44	70×70×10
6	土 壇	Ⅲ層上面	A地区G-6	不整な円形	135 × 126 × 54		0.84	48~ 54	
7	竪 穴 住 居	Ⅲ層上面	A地区G、H-6、7	不整な円形	346 × 316 × 22		7.84	22~ 28	40×36× 1
9	土 壇	Ⅲ層上面	A地区H-6	楕 円 形	142 × 122 × 72	—————	1.00	60~ 72	
10	竪 穴 住 居	Ⅲ層上面	A地区B-4、C-4、5、6	楕 円 形	《(636)》× — × ( 40 )	—————	—	( 20~ 52 )	《(110×84×14)》
12	竪 穴	Ⅲ層上面	A地区C、D-4	円 形	《(322)》×《(321)》×《( 14 )		《( 6.48 )		
13	竪 穴 住 居	Ⅲ層上面	A地区C、D-2、3	楕 円 形	760 ×《(658)》× 60	N-50°-E	《(37.92)》	44~ 65	62×58× 6
14	竪 穴	Ⅲ層上面	A地区E-4、5	楕 円 形	— ×《(288)》×( 34 )	—————	—	( 28~ 36 )	
15	竪 穴 住 居	Ⅲ層上面	A地区D、E-6、7	不整な円形	454 × 420 × 34		12.72	30~ 34	60×56×11
16	落ち込み	V層上面	A地区G、H-7、8	—————	623 × 526 × —		—		
18	フラスコ状土壇	—————	C地区H-20	不整な円形	255 ×《(192)》×(100)	N-43°-W	《( 2.96 )	( 96~100 )	
19	フラスコ状土壇	—————	C地区E-19、20、F-19	円 形	《(178)》×《(166)》×《( 88 )		《( 1.72 )	( 86~ 90 )	
20	特殊 竪 穴	VII層上面	C地区E、F-21、22	円 形	504 × 490 × 86		4.24	50~122	
21	特殊 竪 穴	VII層上面	C地区E-22、23	円 形	《(572)》× — ×(100)		—	( 95~106 )	
22	特殊 竪 穴	VII層上面	C地区G-22、F、G-23	円 形	462 × 440 × 116		3.44	102~120	
23	フラスコ状土壇	—————	C地区E-22	円 形	《(212)》× — ×( 98 )		—	( 84~108 )	
24	土 壇	Ⅲ層上面	C地区G-26、27	円 形	178 × 168 × 54		1.08	43~ 68	
25	フラスコ状土壇	VII層上面	C地区H-20、21	円 形	193 × 176 × 98		2.52	88~108	
26 a	土 壇	VII層上面	C地区H-21	楕 円 形	142 × 120 × 38	—————	1.04	24~ 38	
26 b	土 壇	VII層上面	C地区H-21	—————	— ×《(116)》×( 12 )		—	( 10 )	
27	フラスコ状土壇	—————	C地区H-21	円 形	《(102)》× — ×( 84 )		—	( 78~ 90 )	
28	フラスコ状土壇	VII層上面	C地区G-23	円 形	144 × 137 × 38		2.32	36~ 42	
29	土 壇	VII層上面	C地区G、H-23	円 形	116 × 116 × 16		0.96	14~ 16	

- 注 1. 位置は、グリッドで示してある。  
 2. 大きさ(cm)は、長径×短径×深さ、で示してある。  
 3. 長軸方向は、磁北に対するの数値である。  
 4. 床面積は、縮尺20分の1の図面から、プランメーターで3回計測した平均値である。  
 5. 壁高は、確認面からの数値である。  
 6. 炉の大きさは、長径×短径×深さ、で示してある。  
 7. ( )内は、現存値。《 》内は、推定値である。

特に、炉を持たない竪穴の場合は、床面を面として把握できない遺構もあるほどである。遺物の出土状態からみても、構築された遺構が全く利用されなかったとは言えないので、何らかの施設を床面上に想定するべきであるが、有機物等の置かれた痕跡は確認されていない。

遺構の廃絶時及び廃絶後の状況については、出土遺物等の面からも検討する必要がある。A地区の竪穴住居と竪穴の場合、遺構内堆積土の断面図からみて、第10号遺構の廃絶時を除き、すべて廃絶後は自然埋没したものとみられる。第10号遺構については、遺構中央部に崩れ落ちたような、炭化材、炭化物を多く含む層が堆積しているため、廃絶時における火災等の状況も想定できるが、このほかの遺構では、人為的に埋土した痕跡がみられない。そこで、上屋構造をもつとみられる遺構が、ある時点で廃絶され、その後、自然に崩壊し、埋没したものとすれば、出土遺物に関して、次のような解釈が成り立つ。



第131図 遺構の規模



a 遺構の床面から遺物が出土した場合

(1) 遺構の廃絶時における、床面への放置

(2) 遺構の廃絶後、床面埋没前における、上屋からの自然的落下

(3) 遺構の廃絶後、床面埋没前における、遺構外からの人為的投棄

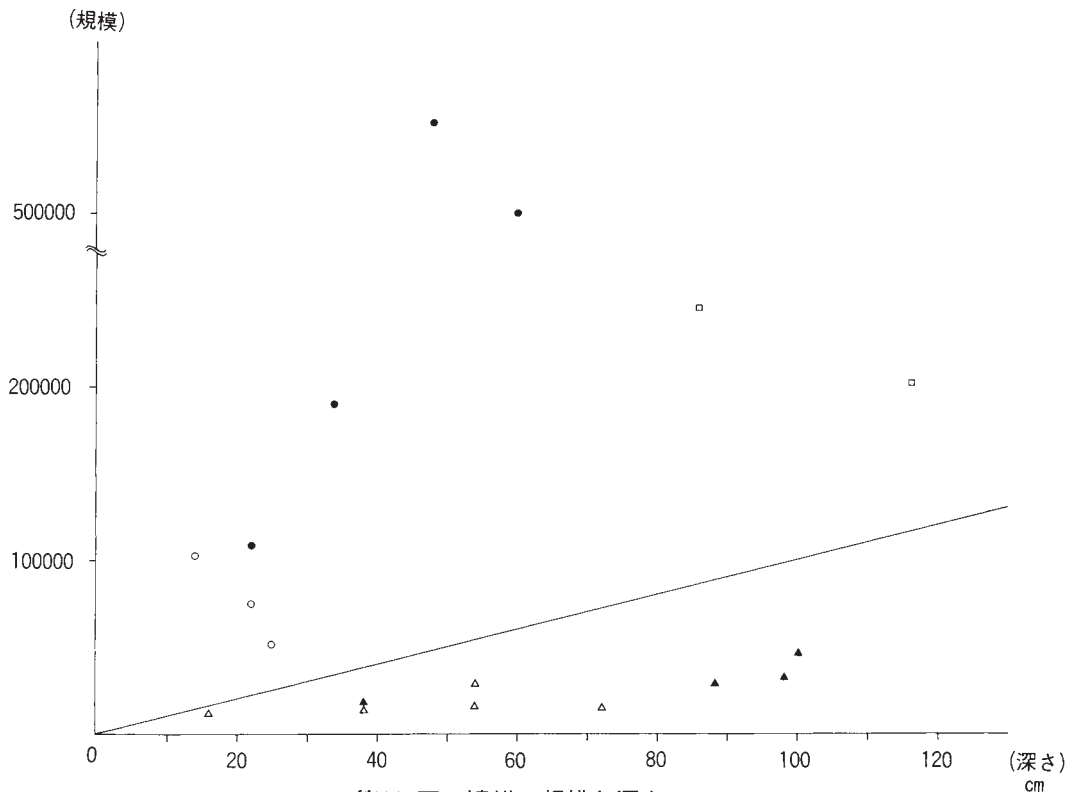
b 遺構の覆土から遺物が出土した場合

(1) 遺構の廃絶後、埋没過程における、上屋からの自然的落下

(2) 遺構の廃絶後、埋没過程における、遺構外からの自然的流入

(3) 遺構の廃絶後、埋没過程における、遺構外からの人為的投棄

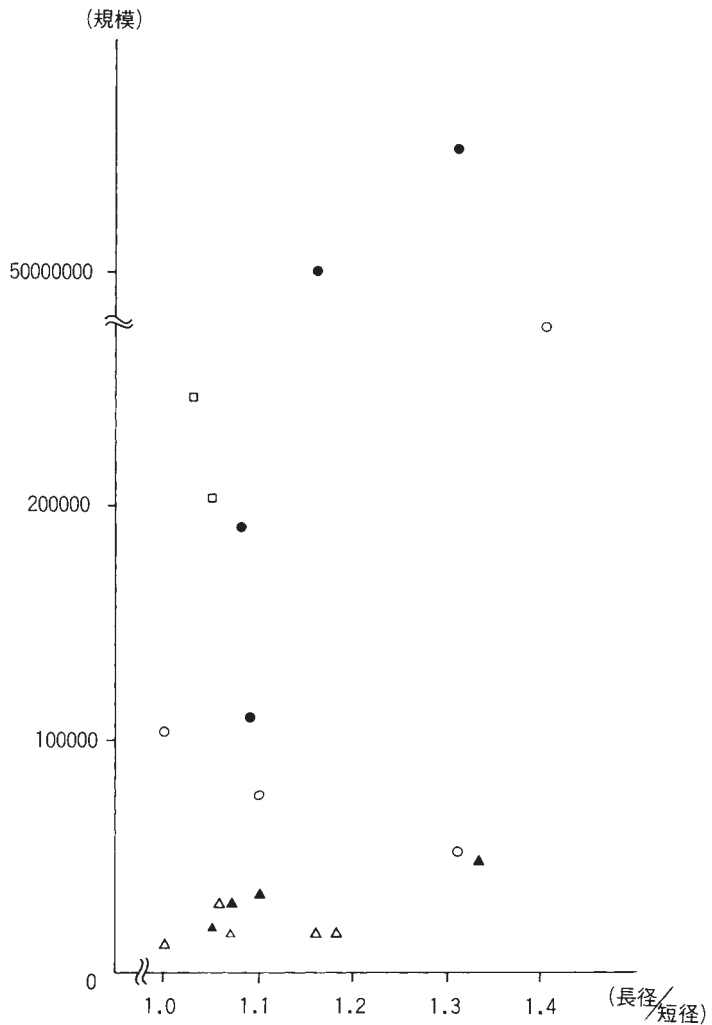
遺構が廃絶された時点で、遺物が遺構内に残される場合には、床面への放置と、上屋への放置（壁外の空間も含めて）の二つのケースが考えられる。上屋へ放置された場合は、上屋が腐朽し崩壊した（又は壁が崩れた）時点で、遺構内へ遺物が落下する訳であるが、その時点での遺構の埋没状態の違いによって、遺物の出土状態に差異が生じることになる。また、A地区のように、ほぼ平坦な場所に遺構が構築されている場合、遺構外から、自然の営力によって多量に遺物が遺構内へ流入することは考え難い。仮に流入したものがあっても、ほぼ近接したものに限られ、その場合は、その遺構を構築し利用した人が、残したものである可能性が高



第132図 遺構の規模と深さ

くなる。これに対して、遺物が遺構外から投棄された場合には、その時点での遺構の埋没状態の違いによって、遺物の出土状態に差異が生じることは勿論であるが、また、その遺物を投棄した人と、使用した人とを、一応区別して考える必要もある。

以上のように考えれば、a-(102)及びb-(1)の場合は、その遺構のいわゆる伴出遺物として認識され、b-(2)の場合は、伴出の可能性を持つことになる。また、a-(3)、b-(3)の場合には、伴出の可能性が全くないとは言えないが、非常に低いことになる。従って、床面から出土した遺物のすべてが、必ずしもその遺構に伴うものとは限らず、また、伴出遺物の全体を示している訳でもない。遺構に関して、その伴出遺物を決定す

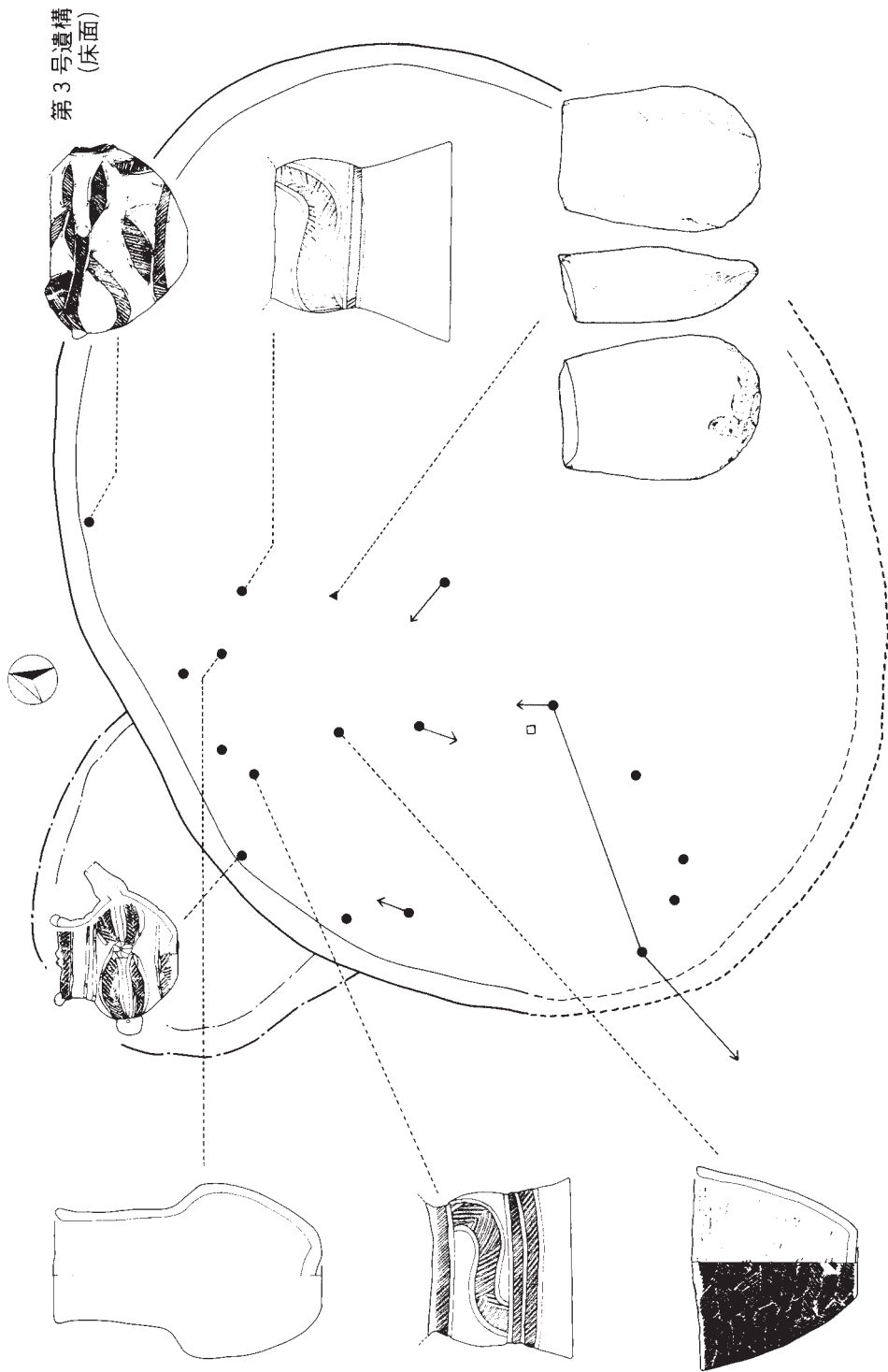


第133図 遺構の規模と長幅比

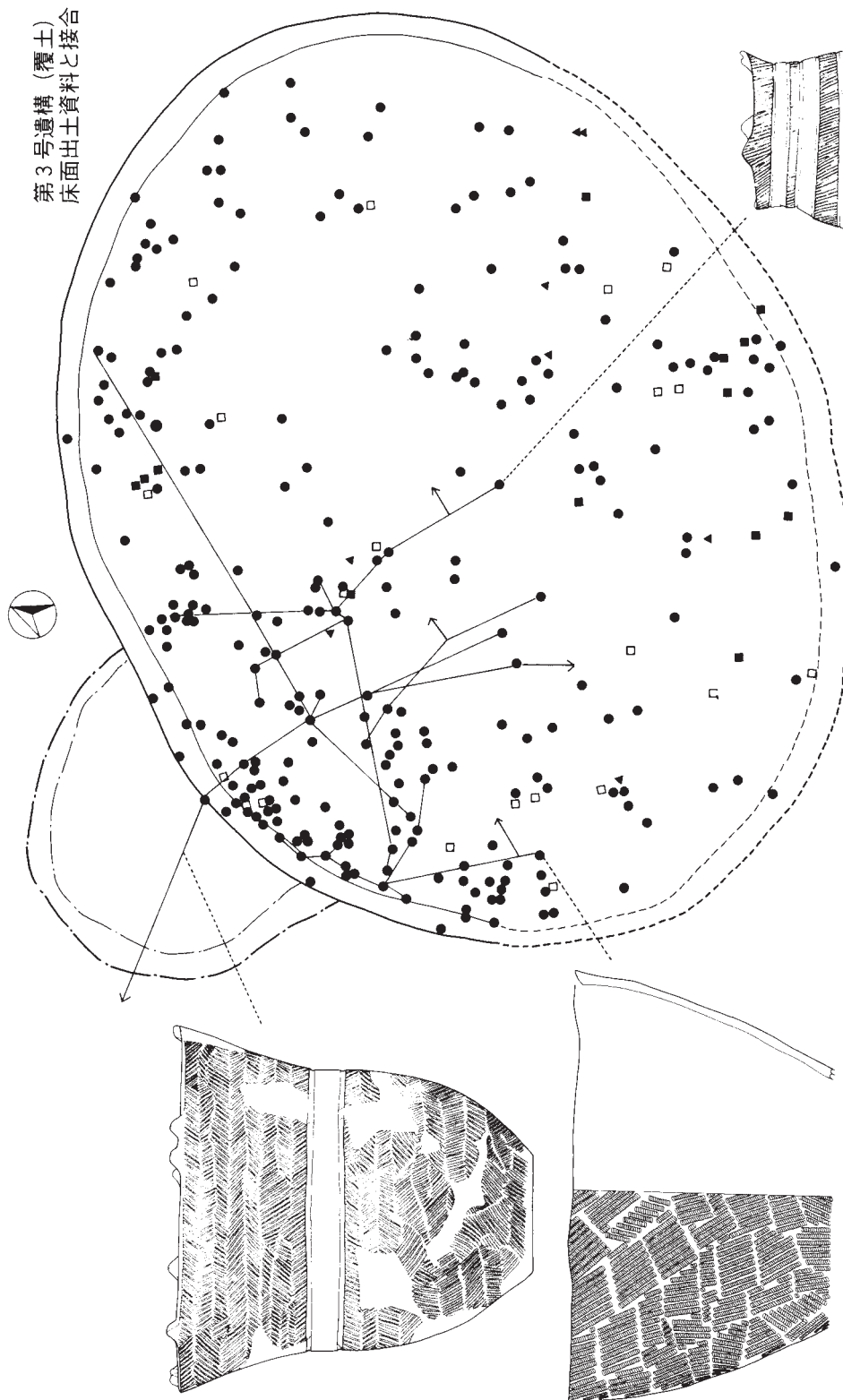
ることは、遺構の廃絶時期、遺構の性格等を把握する上で、重要な問題であるが、そのためには、遺物の出土状態等の検討を通して、慎重に判断される必要がある。

第134～151図は、遺構内出土遺物の接合関係等を示したものである。

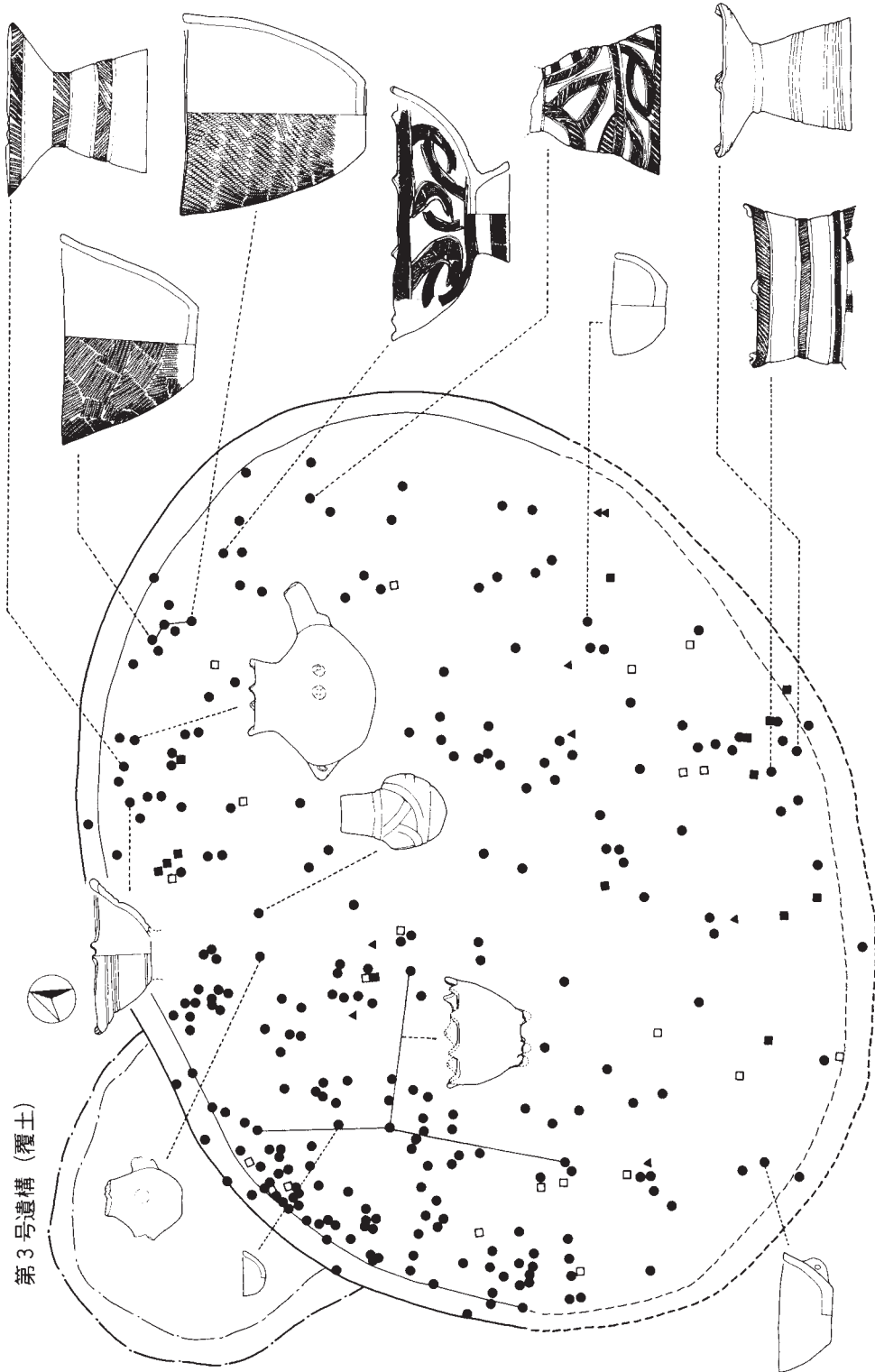
遺構が竪穴住居の場合、一般的には、炉の周囲 - 遺構の中央部は、居間としての性格が強いものとみられる。したがって、使用中の状態で出土した特定の遺物を除き、床面に遺物が放置される場合は、壁際又は壁寄りに位置する可能性が高い。上屋に放置された遺物は、小型のもののみみられるが、それが落下する場合、その時点で、床面がまだ埋没していなければ、落下した位置から遠く散逸することがないが、すり鉢状に覆土が堆積していれば、中央部のくぼみに向かって遺物が散逸することがある。壁外の空間に遺物が置かれた場合は、壁の崩壊によって、



第134图 遺構内遺物分布图 (1)



第3号遺構 (覆土)

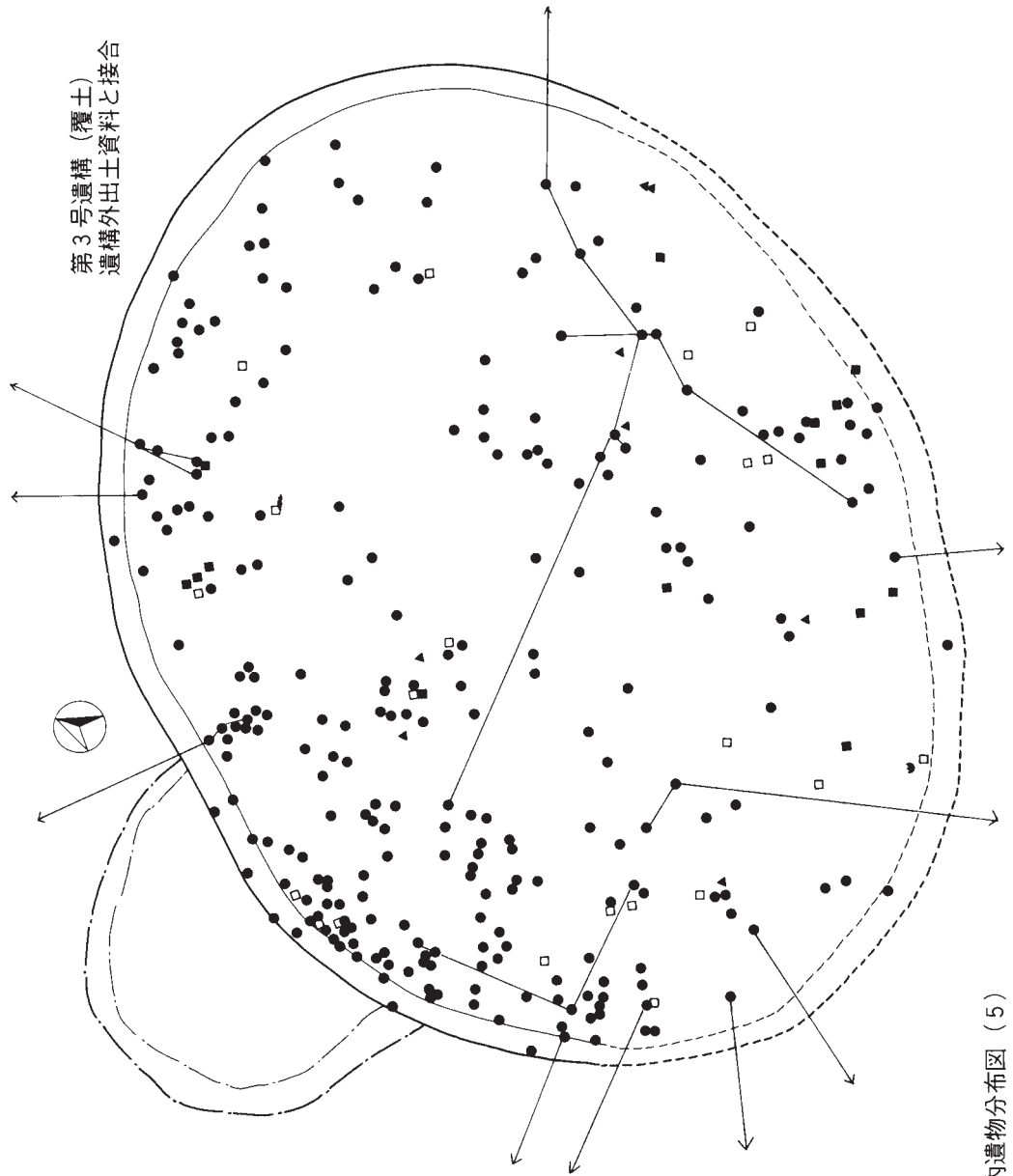


第136図 遺構内遺物分布図 (3)

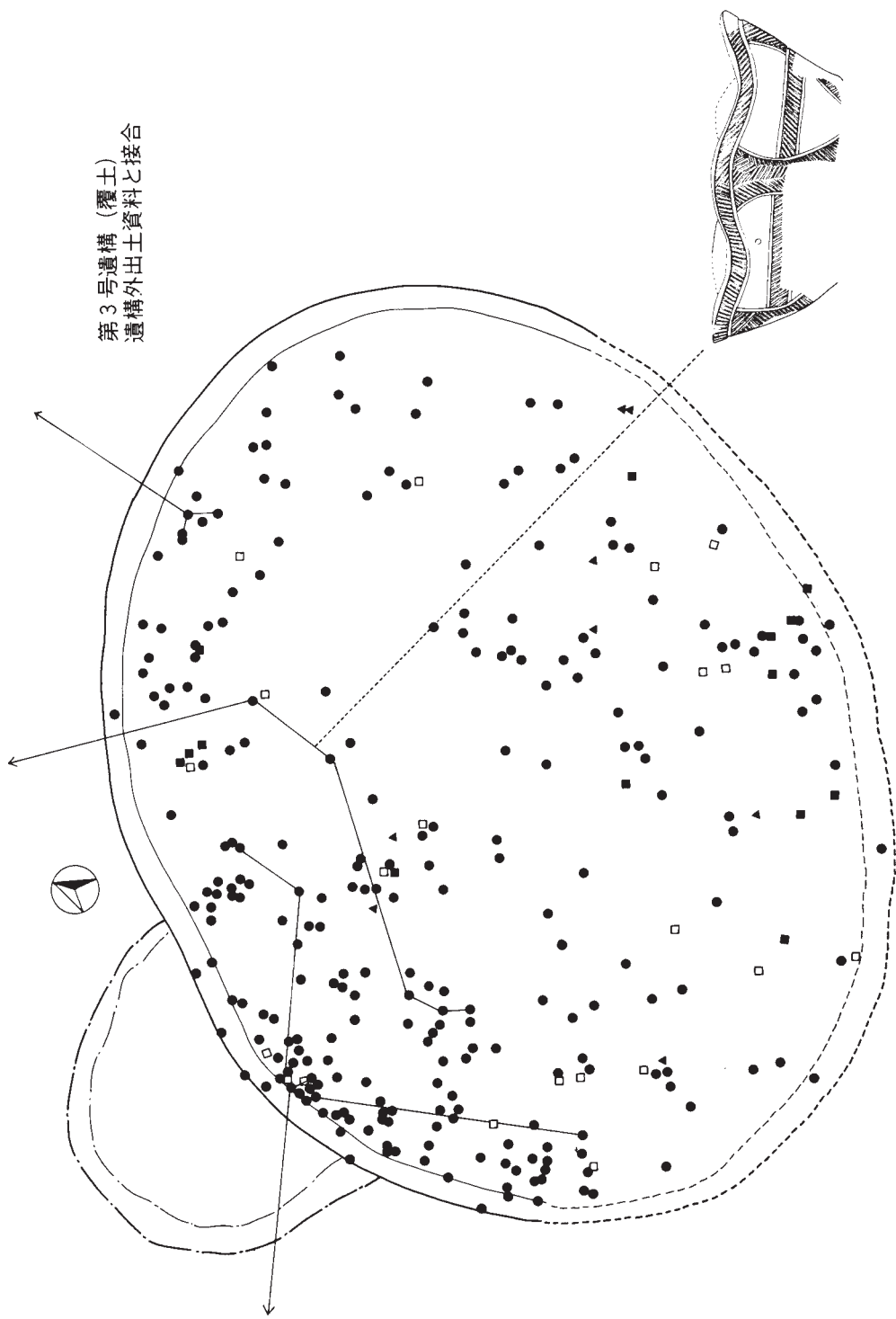
第3号遺構 (覆土)



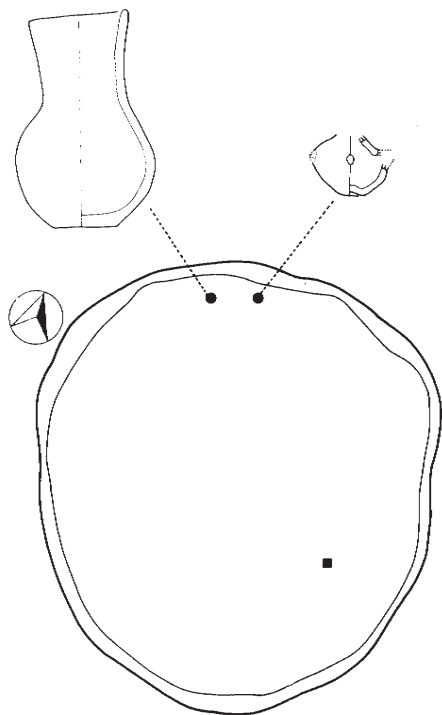
第137図 遺構内遺物分布図 (4)



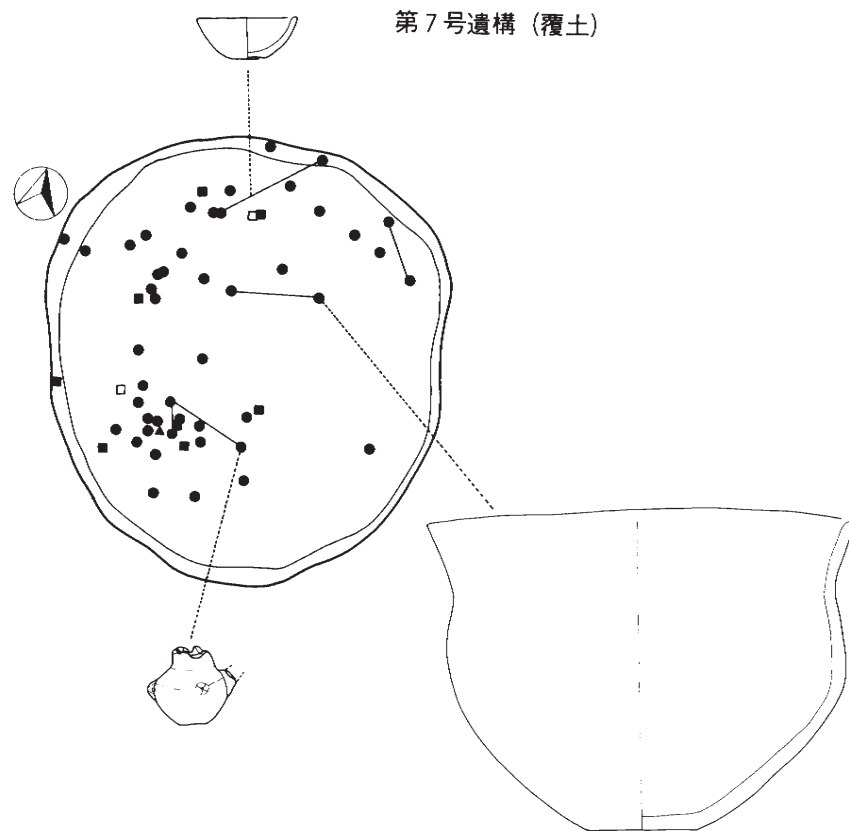
第138図 遺構内遺物分布図 (5)





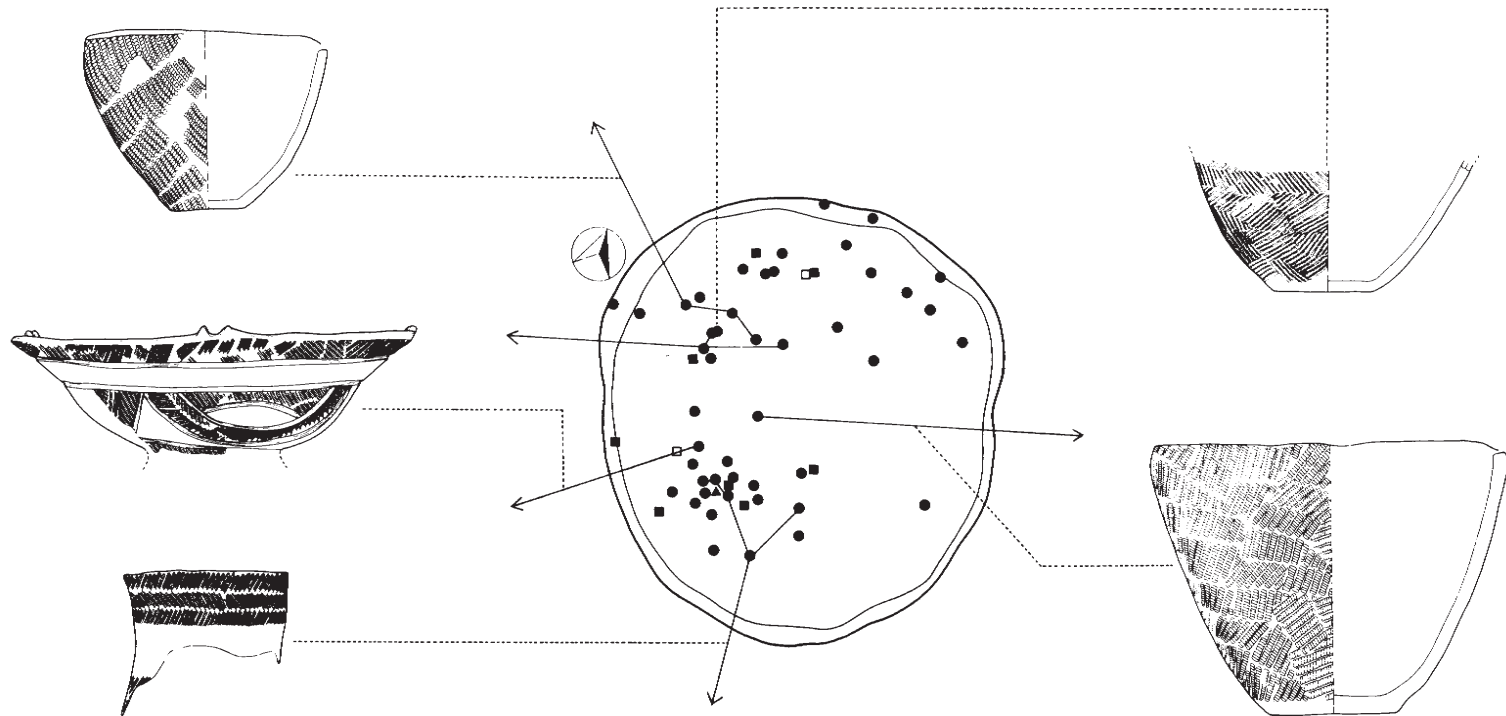


第7号遺構 (床面)



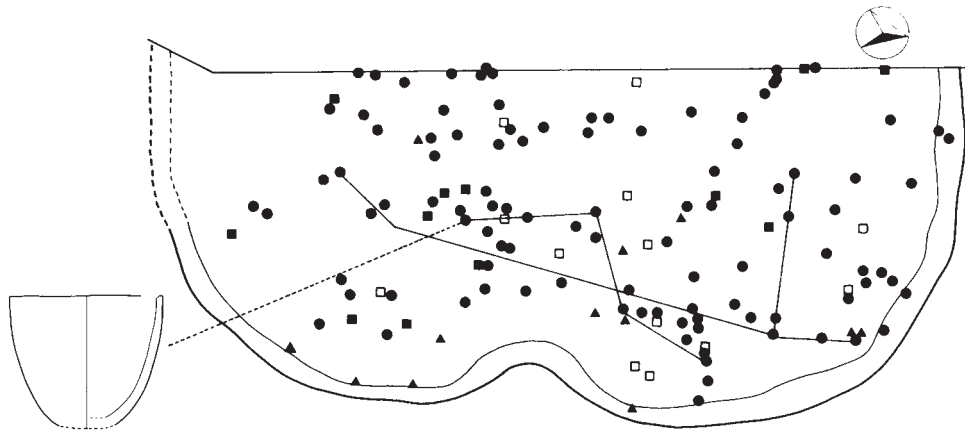
第7号遺構 (覆土)

第140図 遺構内遺物分布図 (7)

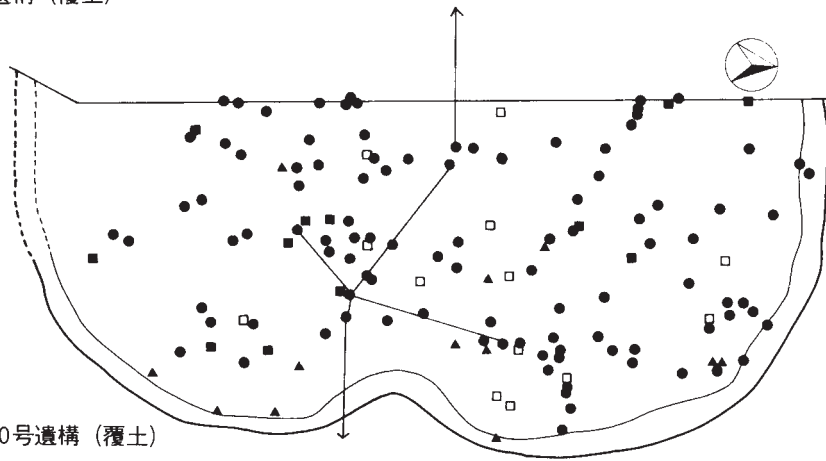


第7号遺構（覆土）遺構外出土資料と接合

第141図 遺構内遺物分布図（8）

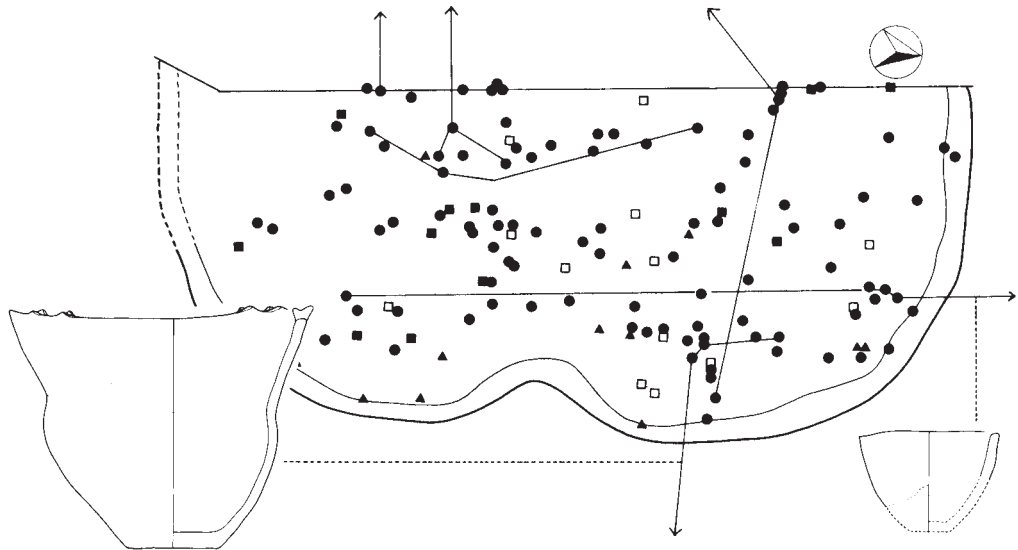


第10号遺構 (覆土)

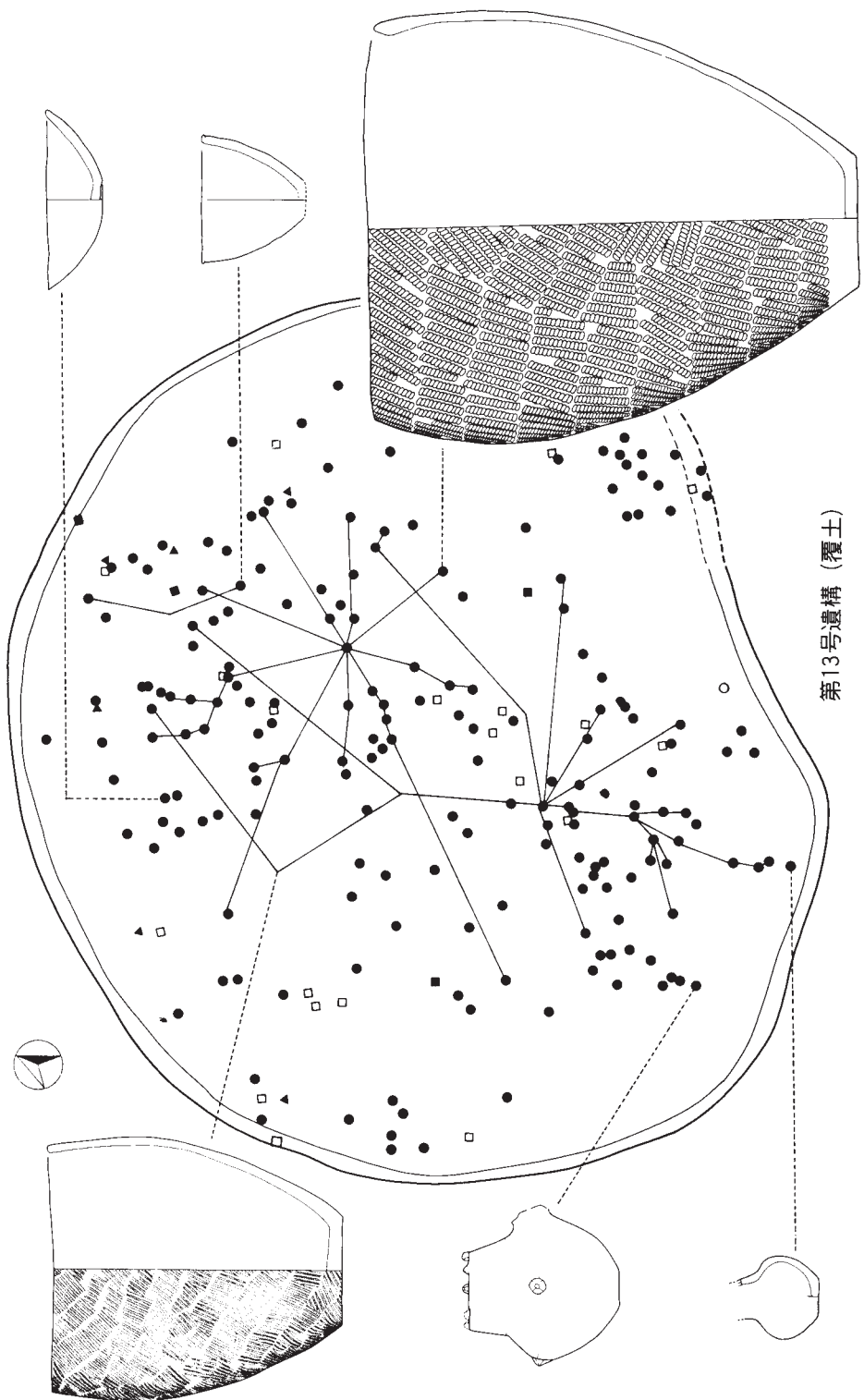


第10号遺構 (覆土)

遺構外出土資料と接合

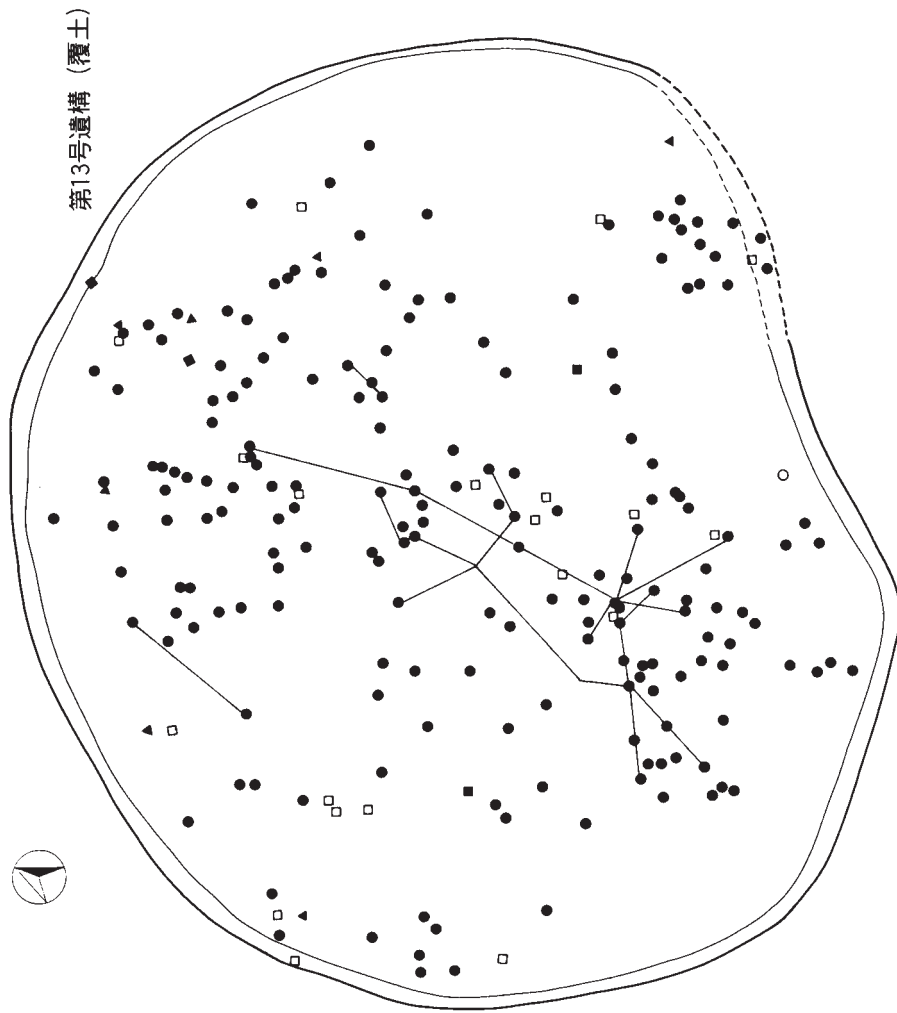


第142図 遺構内遺物分布図 (9)

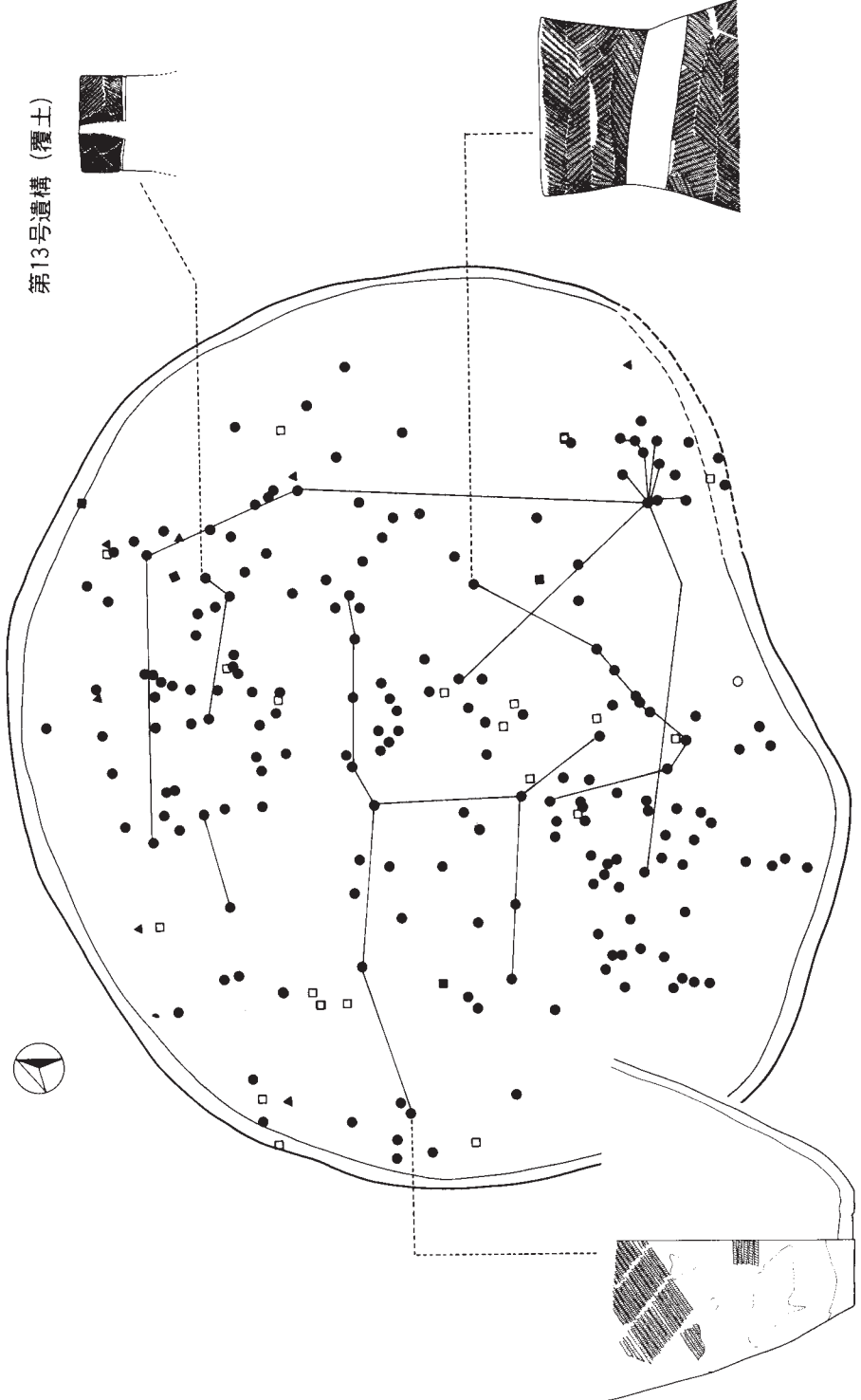


第13号遺構 (覆土)

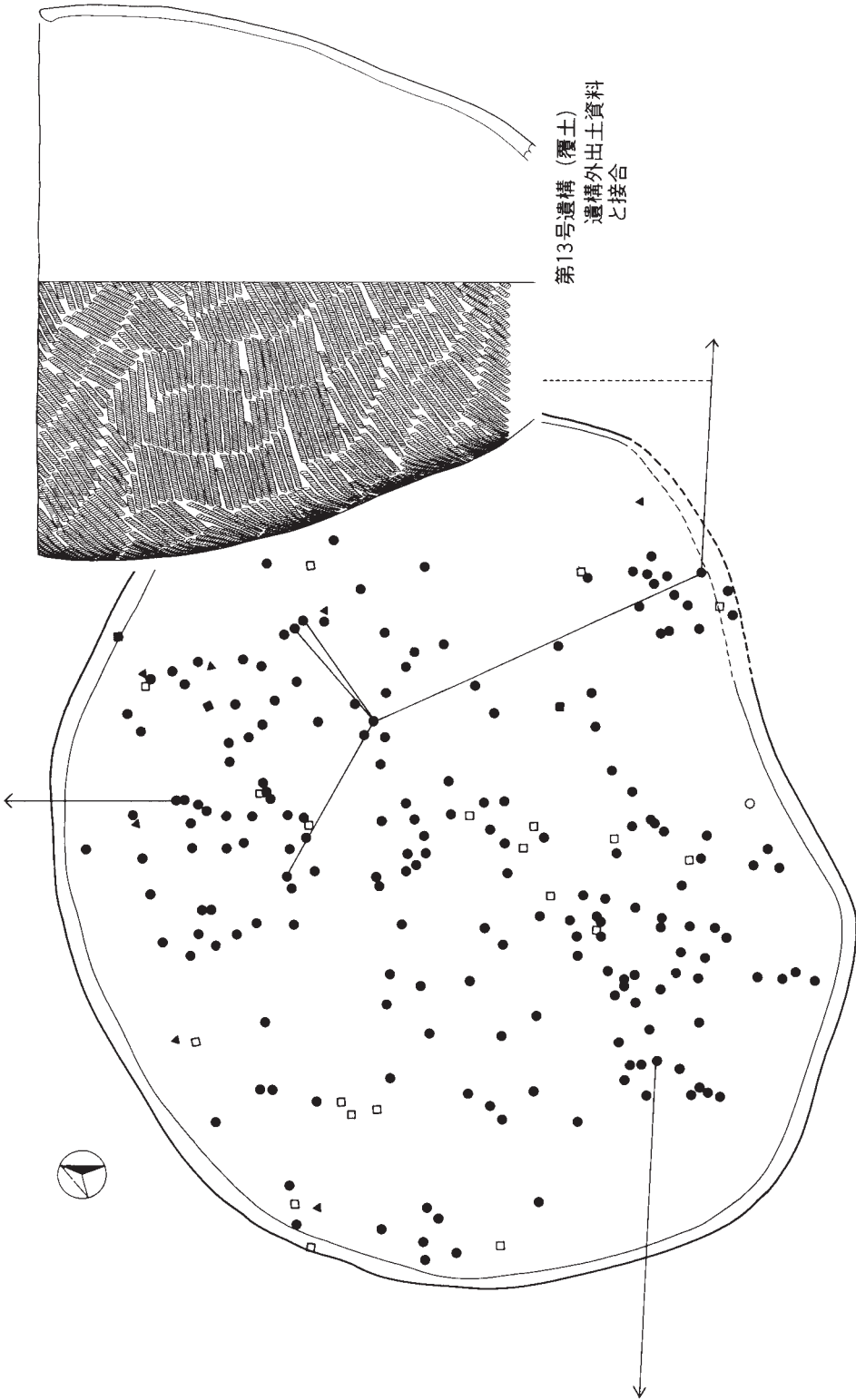
第143図 遺構内遺物分布図 (10)



第144図 遺構内遺物分布図 (11)



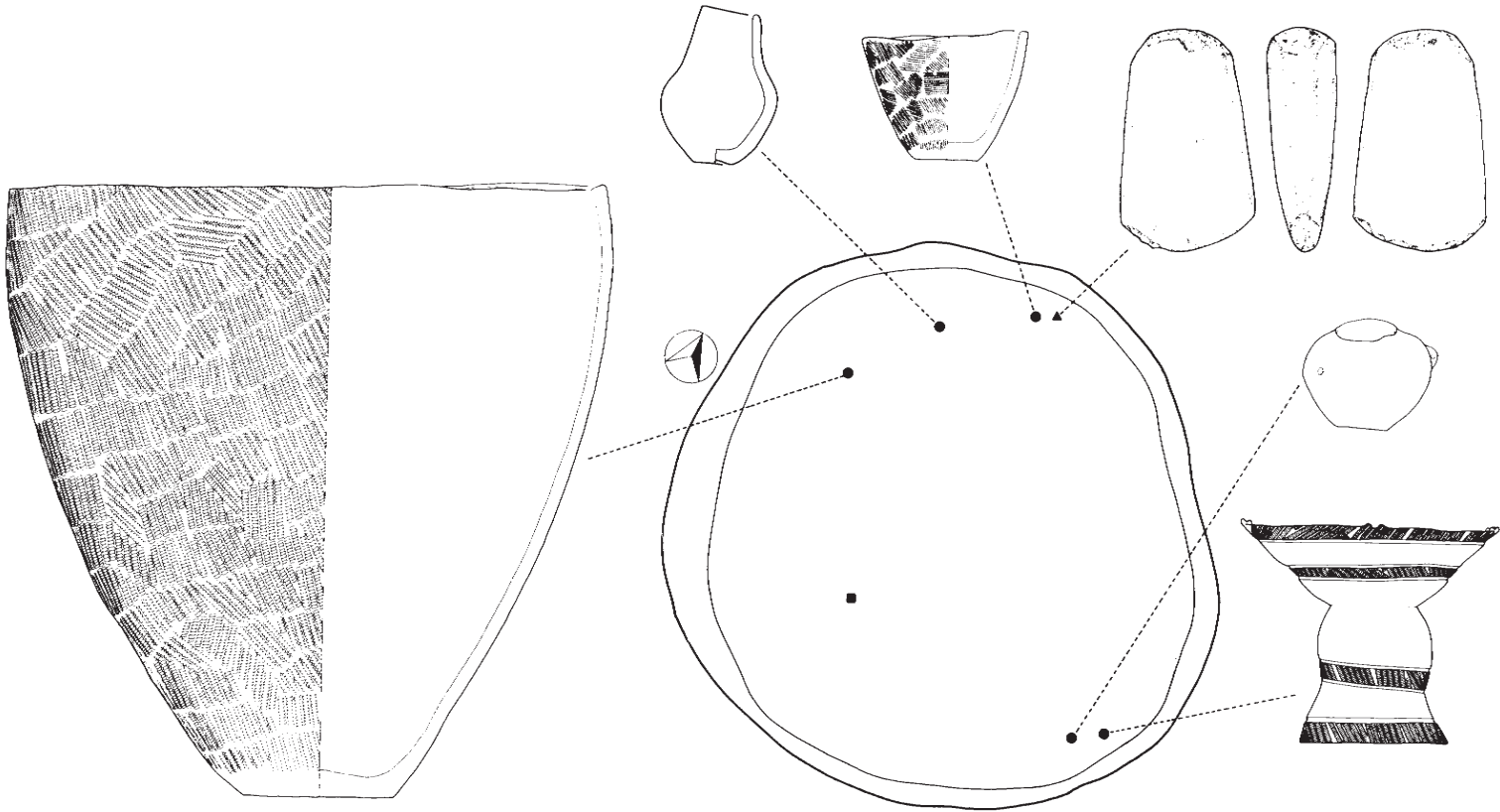
第145図 遺構内遺物分布図 (12)



第146図 遺構内遺物分布図 (13)

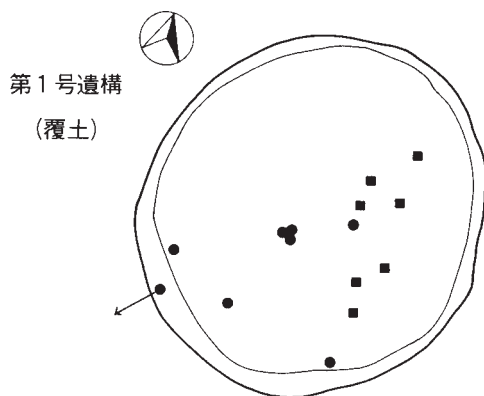
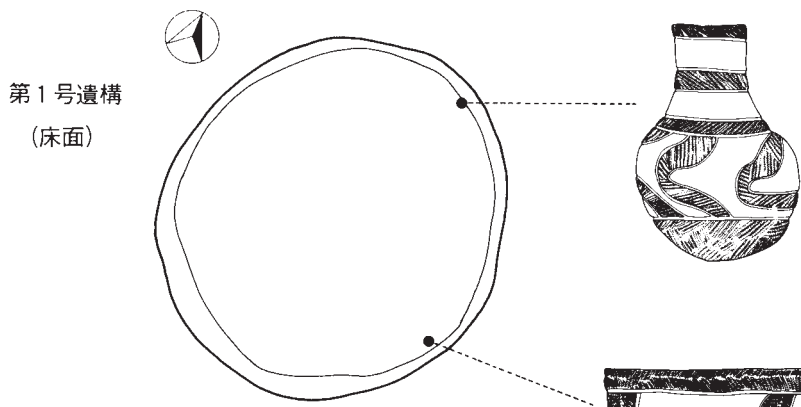
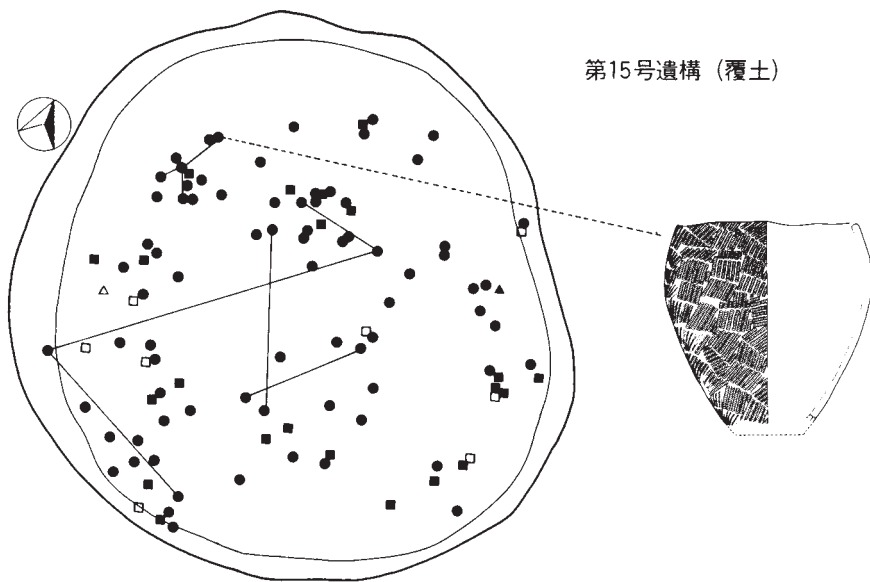
第15号遺構 (床面)

213



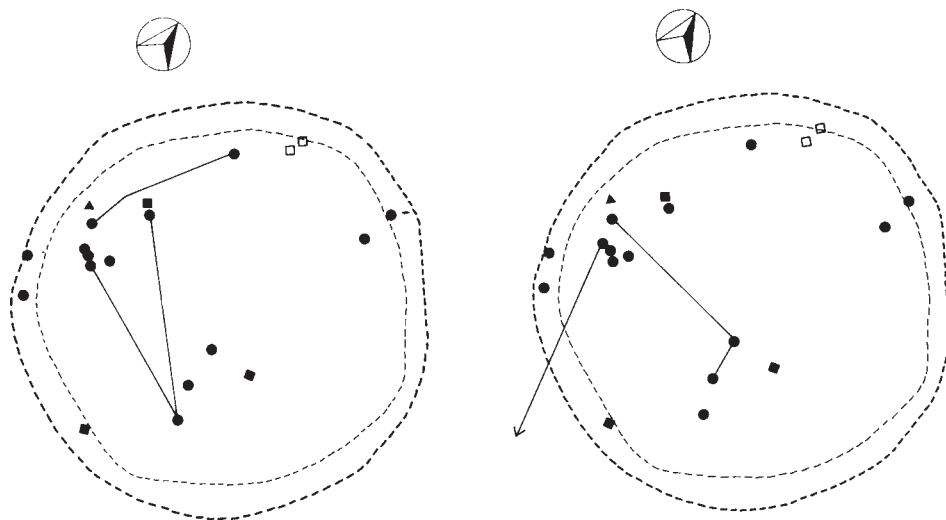
第147図 遺構内遺物分布図 (14)



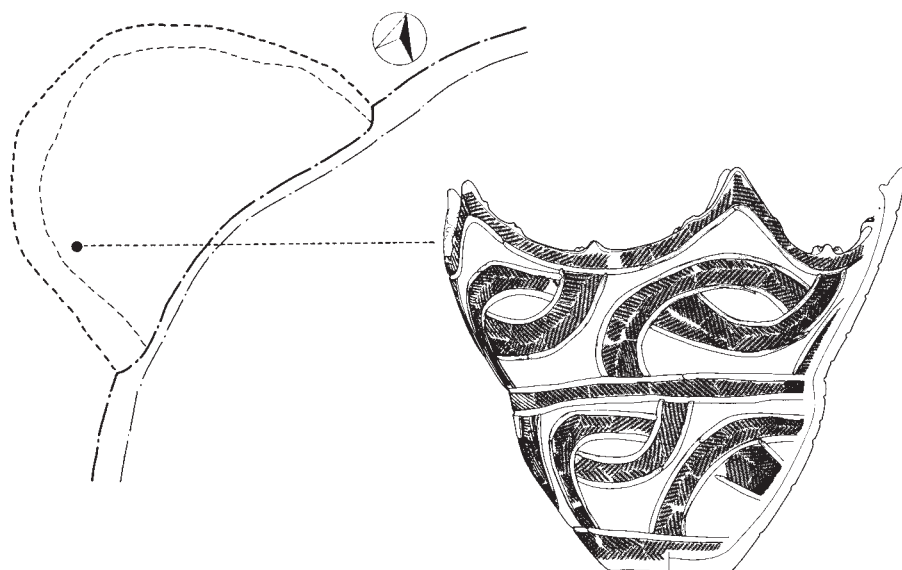


第148図 遺構内遺物分布図 (15)

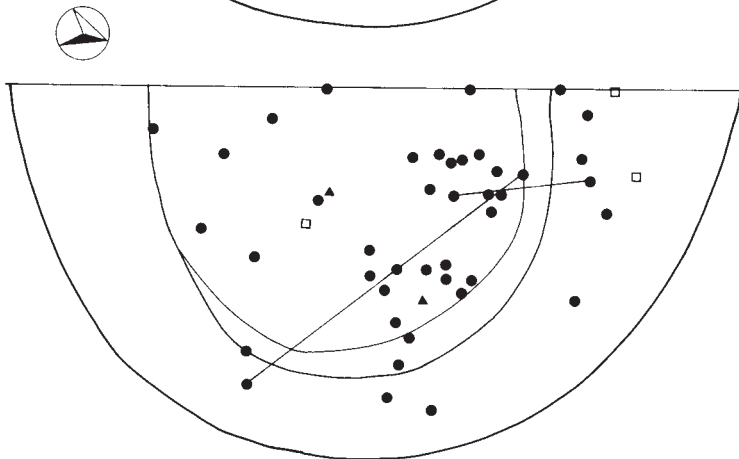
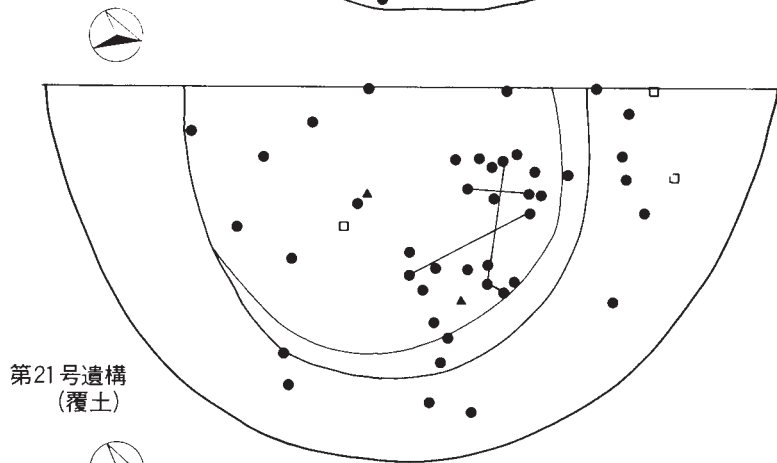
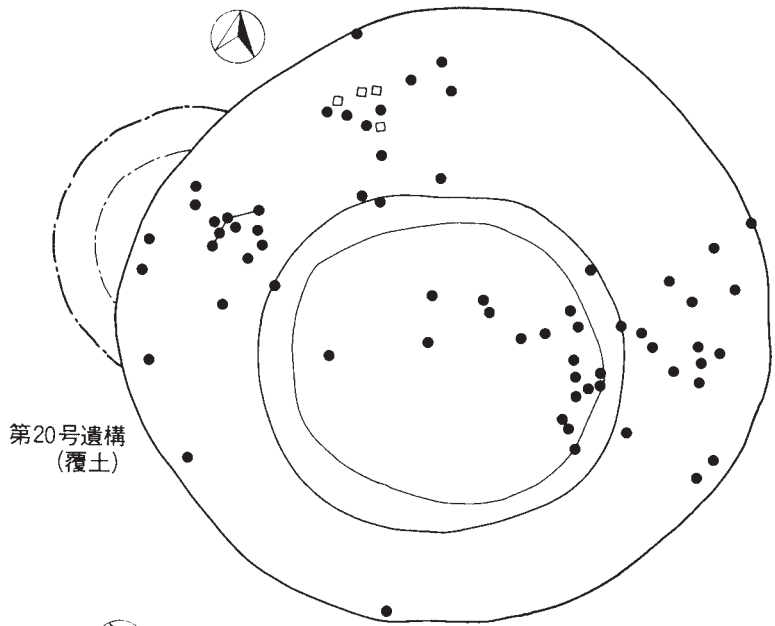
第12号遺構 (覆土)



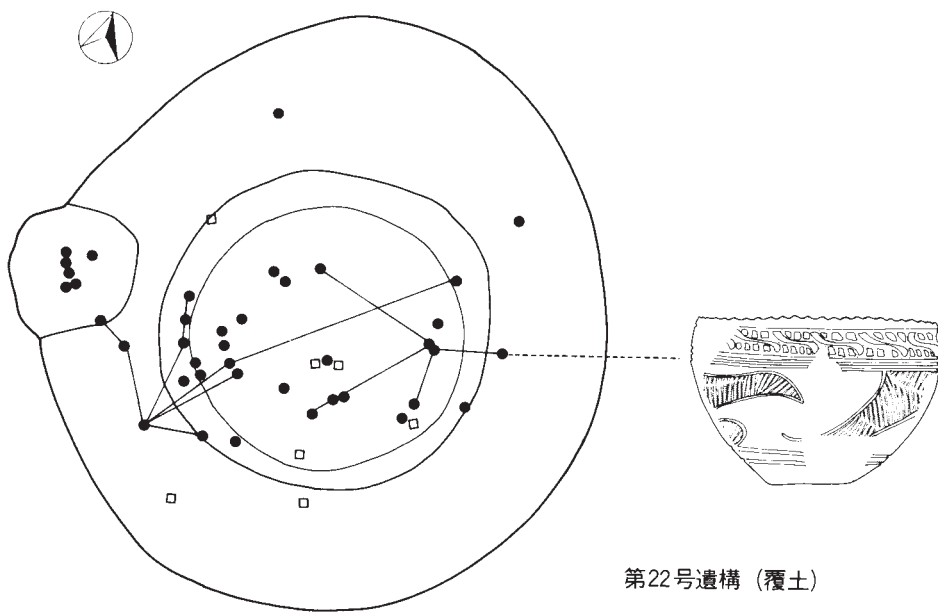
第14号遺構 (床面)



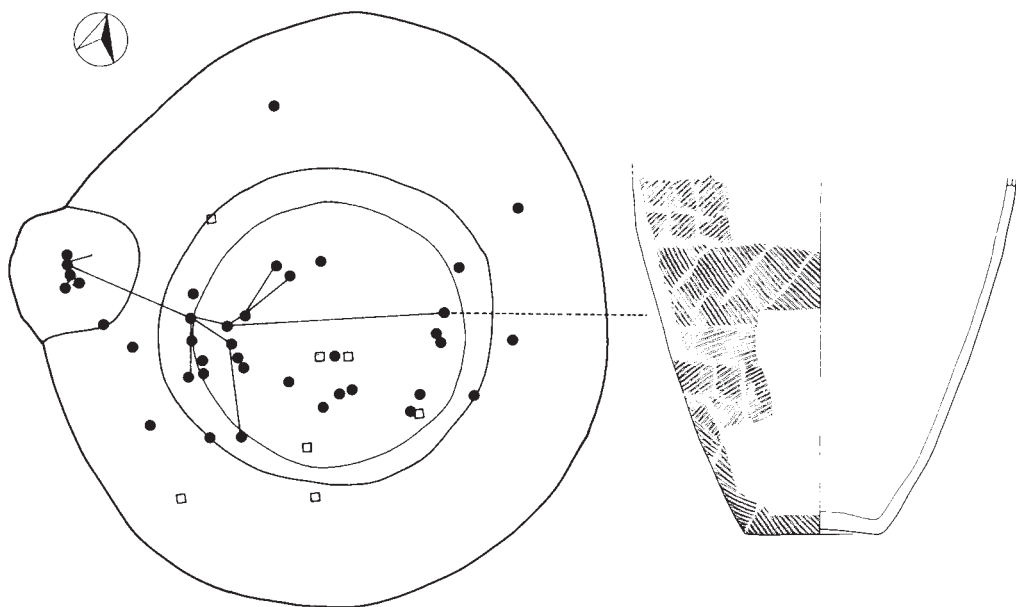
第149図 遺構内遺物分布図 (16)



第150図 遺構内遺物分布図 (17)



第22号遺構 (覆土)



第151図 遺構内遺物分布図 (18)

壁寄りに流入することになる。また、遺物が土器の場合、それが遺構の廃絶時に使用されていたものであれば、完形又は、少なくとも機能を保ちうる程度に復原できるような資料でなければならぬ。破片については、特殊な用途のために保存される例を除き、一般的には再活用されるケースはまれである。遺構の廃絶時に土器片が放置されるケースがあったとしても、それは廃絶時以前に使用されたものであり、既にその機能は、別の土器に移行したものとみなすべきである。遺構外の近接した位置に、その遺構を利用した人によって残された土器についても、同様の見解が成り立つ。これに対して、石器あるいは礫の場合、破損品であっても、その再活用の可能性は、土器に比べて、はるかに高い。特に、石種によって入手し難いものなどは、かなり保存されるケースを考える必要がある。

以上の点を考慮し、その遺構の廃絶時に使用されていたもので、遺構内に放置されたとみられる遺物を推定すると、次のようになる。

#### 竪穴住居

##### 第3号遺構（第134～139図）

床面壁際及び壁寄りから出土した3点の完形土器（壺・注口・鉢）が、廃絶時に放置されたものとみられる。また、覆土から出土した完形又は原形を復原できる資料の中で、小型のもの（浅鉢・注口・手づくね）は、上屋に放置された可能性がある。

##### 第7号遺構（第140・141図）

床面壁際から出土した2点の完形土器（壺・手づくね）が、廃絶時に放置されたものとみられる。また覆土から、2点の復原資料（手づくね）が出土したが、比較的近い位置で接合しており、上屋に放置された可能性がある。

##### 第10号遺構（第142図）

覆土からは、完形又は原形を復原できる資料が出土していない。他の遺構、及び遺構外出土のものとは接合する資料が多く、原形を復原できる資料もあるが、放置されたものとはみなし難い。

##### 第13号遺構（第143～146図）

覆土中で接合する資料が多く、原形を復原できるものもある。このうち、近い位置で接合した小型のもの（注口・手づくね）は、上屋に放置された可能性がある。

##### 第15号遺構（第147・148図）

床面壁際から出土した2点の完形土器（鉢・手づくね）、土壌上面から倒立の状態出土した復原資料（深鉢）及び壁際から出土した完形に近い磨製石斧が、廃絶時に放置されたものとみられる。接合資料は覆土中のものにはほぼ限られ、壁寄りから出土した復原資料（小型の深鉢）は、上屋に放置された可能性がある。

## 豎 穴

### 第1号遺構 (第148図)

床面壁際から出土した2点の完形土器(壺・鉢)が、廃絶時に放置されたものとみられる。

### 第2号遺構

遺構の廃絶時に放置されたとみられる遺物は出土していない。

### 第12号遺構 (第149図)

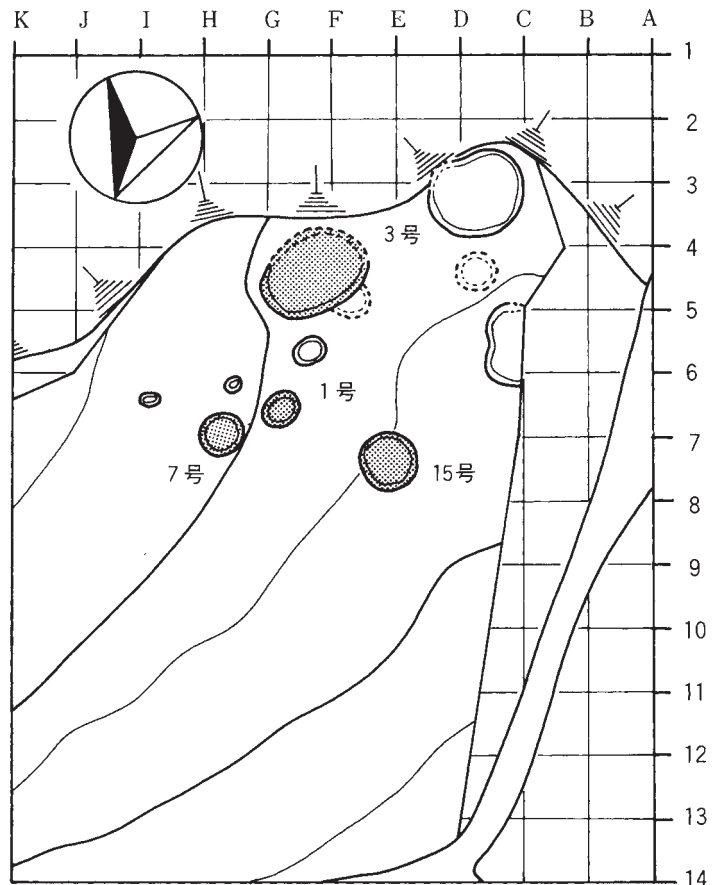
完形又は原形を復原できるような資料は出土していない。接合資料は、壁寄りに多いが、放置されたとみられる遺物は出土していない。

### 第14号遺構 (第149図)

床面壁際から出土した完形土器(深鉢)が、廃絶時に放置されたものとみられる。

従って、豎穴住居及び豎穴の中で、その廃絶時において使用中の遺物が、遺構内に放置されたものとして、ほぼ確実に把握できるのは、第3・7・15・1・14号遺構である。

A地区遺構群の配置は、豎穴住居がU字形に並び、その内側に豎穴、外側に土壇が並ぶ構成を示している。また、豎穴住居のうち大型のものは、南側 - 谷寄りに位置している。しかし、これらの遺構は、ほぼ同時期に属するものではあるが、そのすべての遺構が同時に存在していた訳ではな



第152図 最終期の遺構

い。一般的に、遺構内に遺物（特に土器）を放置する場合は、比較的遠距離に、放置しない場合は近距離に移動したものとみられる。そこで、遺構の切り合い関係等も考慮し、集落内の遺構の動きを推測すれば、集落を廃絶した段階で、最終的に存在した遺構は、使用可能な遺物を遺構内に放置した、第3・7・15・1号遺構であるとみられる。つまり、A地区における縄文時代後期集落の最終期は、遺構群の中で北東部に位置する大型の竪穴住居1基、小型の竪穴住居2基及びこれに伴う土壌から構成されるものと推測される（第152図）。

### C地区の遺構

C地区の遺構群の立地については、既に述べたとおり、南東にのびる台地の南面する部分に構築されているが、遺構の種類によっては、多少異なる面が指摘できる。つまり、特殊竪穴の場合は、主に緩斜面の末端部に位置し、フラスコ状土壌の場合は、急斜面に移行した部分に位置するものが多い。従って、こうした占地上の制約と、周囲の地形から判断すると、特殊竪穴の分布は、調査区外の北西へ、フラスコ状土壌の分布は、調査区外の西へ広がるものとみられる。ただし、いずれの場合も予想される分布範囲は、地形的制約から、それほど大きなものとはなり得ない。更に、C地区の場合、遺構の種類によって、立地が異なるだけでなく出土遺物の有無があり、また、重複関係にある遺構もある。従って、これを同時期の遺構群として、把握することができないので、一応別個に考察する必要がある。

第131図～133図によれば、特殊竪穴としたものは、ほかの竪穴に比較して、異常に掘り込みが深いという特徴がある。これは、壁における段の存在及び規模に対する床面積の小ささと共に、この種の遺構の構造的な特質をなしており、ほかの竪穴とは、区別されるべき全く異質な性格を想定させる。また、検出されたのは3基のみであるが、規模、構造とも、極めて類似しており、規格性の強いものであると言える。上屋構造については、類例もないので判断し難いが、ピットの検出されたものが1基ある（第22号遺構）。これが柱穴とすれば、4本柱の構造をもつものである。壁上部で検出しているので、検出されていないほかの遺構でも、本来存在していたものが、斜面における堆積土の流れ等によって消滅した可能性がある。ピットの検出された遺構が、3基の中で傾斜の最も緩い部分に位置することを考えると、その可能性は強い。上屋が存在したとすれば、一種の家屋ともみられるが、床面積の大きさからは、居住したとしても、1～2人が限度である。

遺構内出土遺物の接合関係等は、第150・151図に示してある。3基とも廃絶後は、自然埋没したものとみられ、完形土器は出土していない。接合し、復原できた資料は、第22号遺構における羊歯状文の施文された鉢だけである。床面からも遺物は出土しておらず、遺構の廃絶時において、使用中の遺物を遺構内に放置した可能性は全くないと言ってよい。接合資料は、壁寄

りから遺構中央部のくぼみに向かって散逸した状態のものが多い。遺構周辺から、遺物はほとんど出土しておらず、別の遺構構築のために、遺物が整理された様子もない。地形的に、付近に別種の遺構群が存在する可能性も薄いので、埋没過程で、人為的に遺物が投棄されたケースは、考え難い。従って、この場合の遺構内出土遺物は、特殊竪穴を利用した人によって、使用され、破損した土器及びその他の遺物が、遺構の周囲に放棄され、遺構の埋没過程で、流入したものと解釈するのが妥当である。また、遺構の廃絶時に、まだ利用できる土器等があったとすれば、それを携帯し移動したことになり、それは、比較的近距離の移動であったと考えられる。

フラスコ状土壌及び土壌については、第131～133図により、概して、フラスコ状土壌の方が、規模が大きく、かつ深く掘り込まれる傾向にある。前述のように構築の時期は、不明であるが、これを示唆する例としては、第 層（中坵浮石層）上面で確認した土壌（第24号遺構）後期又は晩期の土器を出土したフラスコ状土壌（第28号遺構）及び特殊竪穴（第20号遺構）によって切られたフラスコ状土壌（第23号遺構）がある。ただし、後期又は晩期の土器を出土したフラスコ状土壌の場合、ほかの同種の遺構において遺物を出土しないのが一般的である以上、単純にこれを遺構と結びつけて考えるのは危険である。むしろ、これを偶然性の産物として把握すれば、特殊竪穴を使用した人によって廃棄されたものである可能性が高い。従って、ここで述べられることは、土壌の中の1基は、後期以降に構築されたものであり、フラスコ状土壌の中の1基は、特殊竪穴の構築以前に構築されたものであるということだけである。一方、フラスコ状土壌及び土壌が、他のどの遺構と伴うかということである。これら遺構の性格からみて、単独で存在するものとは考え難く、近接した場所に集落等の存在を想定する必要がある。そこで、可能性として出てくるのが、A地区の遺構群と関係し、その一部として集落を構成するのではないかということである。A・C地区の遺構群間には、かなり距離が存在するが、特に、フラスコ状土壌の場合、その構造的特徴から、崩れやすい、第（中坵浮石）（南部浮石）層の分布を避けて、斜面上部に構築されたとすれば、A地区の集落を営んだ人にとって、最も適した場所がC地区であると言える。

（工藤 大）



## イ 出土遺物

遺構内覆土及び基本層序の第 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの各層から、縄文土器、石器、土製品、炭化木製品、炭化物、礫などの遺物が出土した。およその出土数は、完形及び復原した土器50点、土器片7,155点、石器類89点、土偶・土製品6点、炭化木製品1点である。

### (ア) 土器

縄文土器は、第Ⅰ群から第Ⅳ群土器に大別した。そして、今回の調査で最も主体的な土器は、第Ⅰ群土器であるが、これらは、第Ⅰ層及び竪穴住居跡から主に出土した。第Ⅱ群土器は、遺構覆土第Ⅱ層と第Ⅲ層から出土した。

第Ⅰ群土器は、第Ⅰ類から第Ⅴ類に分類した。第Ⅰ類貝殻文系土器は、型式名を特定できないが、白浜式土器から物見台式に至る貝殻文系土器とみられ、縄文時代早期中葉に比定しておきたい。第Ⅱ群Ⅱ類土器は、第Ⅰ類と同様、貝殻文系土器であるが、口縁部の貝殻腹縁押引文は、岩手県日野遺跡（草間：1956）、出土の早期土器、大鰐町砂沢平遺跡出土の第Ⅰ群土器（県埋文53集：1980）及び青森市蛸沢遺跡の蛸沢AⅡ式に類似し（三宅：1979）縄文早期中葉に位置付けられよう。第Ⅲ類土器は、ムシリ式（早稲田第Ⅰ類併行）に相当し、第Ⅳ類の貝殻条痕文土器と共に早期後葉から末葉の時期に該当させることができるものと思う。第Ⅴ類土器群は、縄文土器文化の直接的母胎と考えられている（江坂：1955）赤御堂式土器（長七谷地）で、早期後葉から早期末葉に編年的位置付けがなされている。これらの土器は、出土量が僅かであり、器形については、ほかの出土例からの類推である。第Ⅰ類土器は、調査した基本層序の最下層である第Ⅰ層（八戸火山灰層の上位面）から出土したことは、今後の土器編年と発掘調査に与える影響は大きいであろう。

第Ⅱ群土器は、本書の編年上の都合でⅡ類に大別したが、本遺跡からはⅠ類とした土器が出土した。第Ⅱ群土器よりも出土数が少なく、しかも小破片であるが、縄文時代前期初頭に位置付けられている早稲田Ⅰ類（佐藤・二本柳・角鹿：1957ほか）に相当する。

第Ⅲ群土器は、第Ⅰ類から第Ⅳ類に類別して、更に細分した。そして第Ⅲ群土器に群化した土器を土器組成、土器型式の観点から若干の分析を試みたところ、これら第Ⅲ群土器は、標式遺跡である弘前市十腰内遺跡の報告書のなかでも、土器型式、組成、器形などの内容が不詳であった十腰内第Ⅲ群土器であることが推定された。その結果、本遺跡の調査によって出土した第Ⅲ群土器は、これまで空白的な状況にあった十腰内第Ⅲ群土器の型式的内容を充分ではないが、把握できる資料であって、独立した土器型式として取り扱える可能性を含む土器群であると仮定した。第Ⅲ群土器が十腰内第Ⅲ群土器と仮定すると、磯崎氏の編年では縄文時代後期中葉、東北地方南半では宝ヶ峰式の一部（伊東：1956）、西ノ浜式（後藤：1961、林：1965）、宮戸Ⅰ式の一部（後藤：1957）、安孫子昭二氏の提唱している新地Ⅱ式（安孫子：1979）関東

地方の加曾利B式、曾谷式、安行式（芹沢：1956、鈴木：1980）に併行するものと考えられるが、最近の縄文時代土器編年表（井上ほか：1980）によると、縄文時代後期中葉と末葉の中間に位置づけられている。十腰内第 群土器は、岩手県貝島貝塚第 群5類、第 群土器（草間・金子：1971）、崎山弁天遺跡第 群6類（草間：1974）、大槌町立石遺跡第 群5類（岩手県大槌町教育委員会：1979）、水木沢遺跡A、C～E群（県埋文34集：1977）に併行関係が認められるようである。これらの土器群は、貼瘤（コブ付）土器群の系統に属しているが、この時期の貼瘤の風潮は顕著ではなく、東北地方を中心として北海道東部まで分布している。また、東北地方における縄文後期後半のいわゆる「コブ付土器」の編年は、安孫子昭二氏の研究（安孫子：1969ほか）がある。なお、水木沢遺跡から多数出土したA群b類4種「カギ状幾何学帯縄文」と名付けた文様をもつ土器は、本遺跡第 群中には認められなかった。これは、地域差か、時期的差異か、今後検討を要する問題である。また、出土数量の多い第 群1類土器と第 群第3類土器を分類して、一つの問題となった点は、所謂、粗製深鉢形縄文土器の破片を施文手法、器形、胎土などの差異から、時期的区分に結び付けることが充分になし得たか危惧している。縄文後期と晩期初頭の土器破片から時期的に分類することは困難であった。今後十腰内第 群土器の発掘資料の蓄積によって、更に土器型式の内容的検討を期待したい。

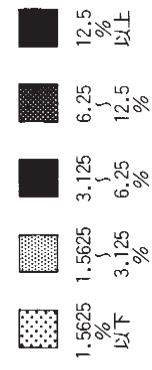
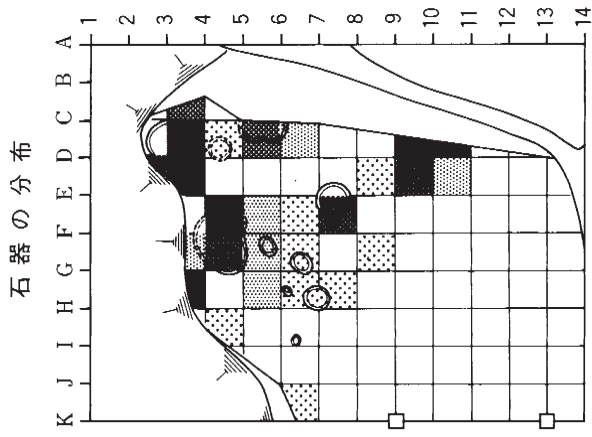
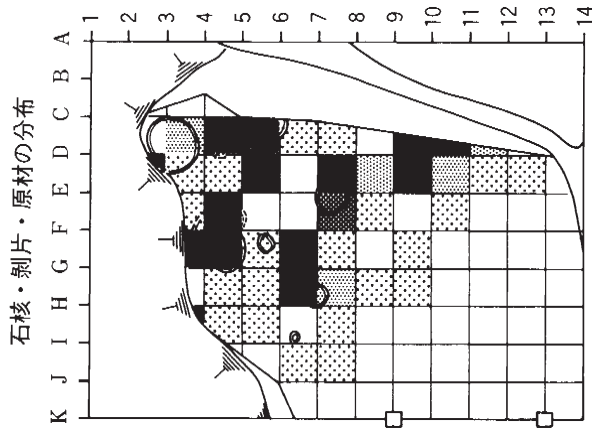
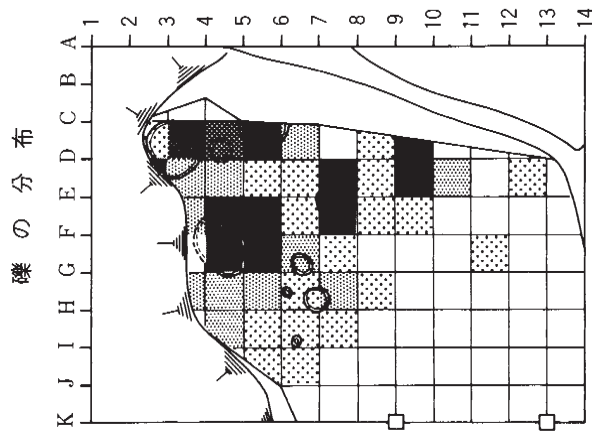
第 群土器は、第1類から第3類までに分類した。これらの土器群は、縄文時代晩期初頭に位置づけられている（山内：1930ほか）。第1類は大洞B式（三叉文土器）、第2類には大洞B-C式（羊歯文土器）を該当させた。第3類については、第1、2類土器の粗製縄文土器をふりあてた。本遺跡の周辺に該当時期の遺跡が存在していることが想定される。（北林）

（イ）石器・石製品・礫

#### A地区の分布

A地区における石器、石製品及び礫の分布状態については、第94図に示してあるが、ここで注意しなければならないのは、遺構確認面の上位から、遺構外の遺物として採り上げられたものの中で、遺構の掘り込み面を考慮した場合、遺構覆土出土の遺物として処理すべきものがあることである。これに該当する石器を列記すると、F-6グリッド出土の尖頭器（第7号遺構）、E-4グリッド出土の石匙（第3号遺構）、F-5グリッド出土のR-フレイク2点（第2号遺構）、C-3グリッド出土の石皿（第13号遺構）がある。

第153図は、石器・剥片石器の素材、礫に分けて、グリッド単位の大まかな分布を示したものである。いずれも、遺構（特に竪穴住居）内及びその周辺に多く分布し、遺構外では、D-9グリッド付近に集中する傾向にあるが、個々の遺構との関係では、それぞれ差異がある。石器は、第3・10・15号遺構（竪穴住居）付近に多いが、剥片石器の素材は、第10・12・15号遺構（竪穴住居・竪穴）付近に多く、また、礫は、第3・10・12・13号遺構（竪穴住居・竪穴）付



注) 分布図は、グリッド単位の出土量を出土量全体に対する  
%に置きかえ相対量として段階区分し、示してある。

第153図 A地区石器、礫の分布

近くに多く分布する。従って、第3号遺構付近には、石器と礫、第10号遺構付近には、石器、剥片石器の素材と礫、第12号遺構付近には、剥片石器の素材と礫、第13号遺構付近には、礫、第15号遺構付近には、石器と剥片石器の素材が多く分布することになり、これは、その遺構の廃絶時の事情に関係するものとみられる。つまり、廃絶時に、遺物を遺構内に放置したとみられる遺構（第3・15号遺構）では、石器が多く、遺物を放置しなかったとみられる遺構（第10・12・13号遺構）では、礫が多い傾向にある。

次に、第85表は、石器の遺構別の出土量を示したものである。これによると、石器については、器種によって、主に遺構内から出土したもの（磨製石斧・石匙・円盤状石器）と、主に遺構外から出土したもの（石錐・異形石器・すり石）に分けられる。更に、磨製石斧の様に、特定の遺構（第10号遺構）に集中するものもある。遺構別にみた場合は、多様な器種を出土した遺構（第3・10・15号遺構）と、特定の器種のみ出土した遺構（第7・13号遺構）がある。前者の場合、遺物を遺構内に放置しなかったとみられる遺構（第10号遺構）では、出土器種に偏りがある。

なお、接合資料としては、第13号遺構覆土出土のものも、C - 5グリッド、第10号遺構付近出土のものが接合した石皿、第10号遺構覆土出土のものが接合した剥片及び第15号遺構覆土出土のものが接合した石核と剥片がある（第94図）。

第85表 A地区石器遺構別出土表

	2号	3号	7号	10号	12号	13号	15号	遺構外
I-A 磨製石斧		2		5			1	1
II-A 尖頭器			2	1		3	1 (1)	6
II-B 石匙		1		1		1		1
II-C 石錐			1					3
II-D 異形石器								2
II-E R-フレイク	2	3		1 (1)		2	(2)	6
II-F 欠損品		1						2
III-A すり石				2	1		(1)	10
III-C 円盤状石器		1		1			1	
III-D 打製石斧		1						
III-E 石皿		1		1		1		2

注1. ( )内の数値は、その遺構に近接した位置で出土したものの数を示す。

2. 第13号遺構から出土した石皿は、第10号遺構付近から出土した破片と接合している。

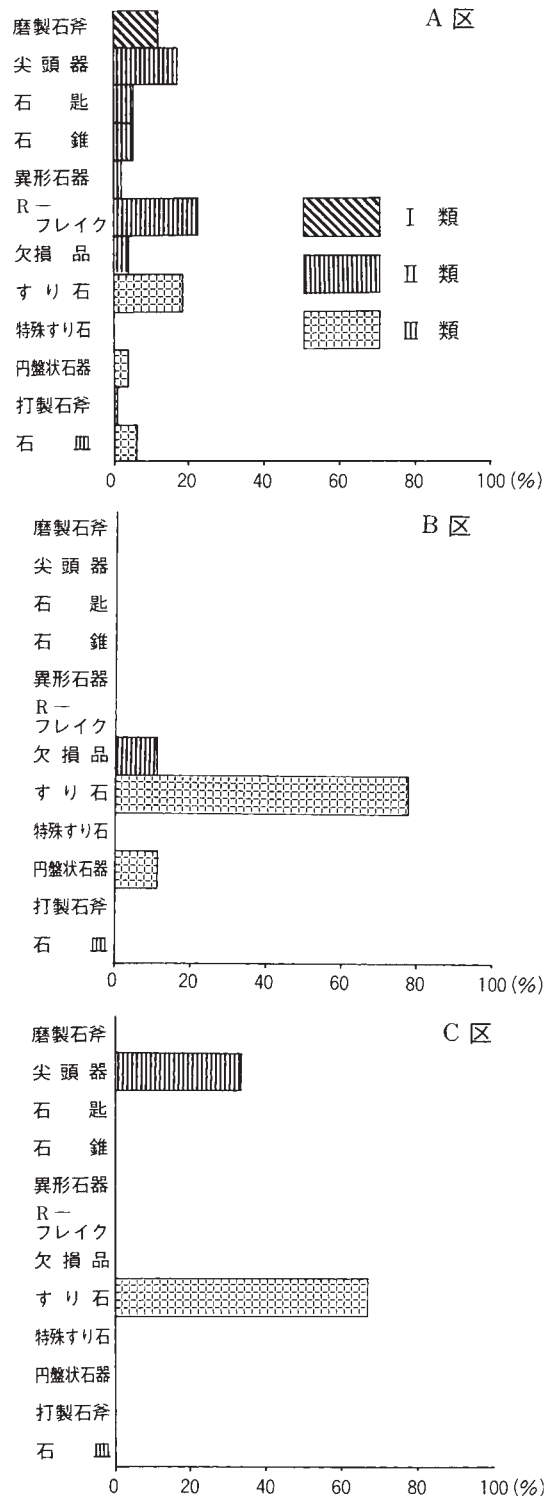
## 石器の構成

各地区出土石器の器種別構成比については、第154図に示すとおりである。B・C地区の場合、極端に出土量がすくなく、また、各地区とも、調査区外に分布がのびるので、対比し難いが、B地区では、特にすり石が多く出土している。A地区の場合は、ほぼ、縄文時代後期十腰内第 群期の集落を営んだ人が移動した際に放置された石器の構成を示すものとみられる。この時期に生産された石器の構成については、集落に残された石器以外に、集落外で消費されたもの、あるいは、移動に際して携帯されたもの等の存在も含めて考える必要がある。

### 搬入石種とその利用

各地区において出土した石器・石製品及び礫の石種に関するグラフ（第155～157図）から、次のことが指摘できる。

1. （磨製石器）類、（剥片石器）類、（礫石器）類とも、それぞれ別種の岩石が利用される傾向にある。
2. 類の製作に利用された石種は、珪質頁岩と玉ずいがほとんどで、まれに黒曜岩と碧玉がある。
3. 玉ずいの場合、珪質頁岩に比較して、素材又は残り屑として残される比率が高い。従って、剥片石器の原材としては、珪質頁岩の方が生産性の高い石種であるとみられる。
4. 頁岩は、一般に剥片石器の原材として利用される石種であるが、調査区内では、製品化されたものは出土していない。むしろA地区において、類として利用された例がある。
5. 類のうち、 - A類には、多様な石種が



第154図 石器構成比

利用される傾向にあるが、 - C・E類では、石種が限定して用いられている。

6．石製品の場合も、石種は、粘板岩のみに限定されている。

7．利用される器種又は製品の限定される石種としては、輝緑岩（ - A類）、花崗岩（ - A類）、粘板岩（石製品）、凝灰岩（ - A類）、緑色凝灰岩（ - A類）等がある。

8．これと対照的に、安山岩、砂岩等は、多様な器種に利用される傾向にある。

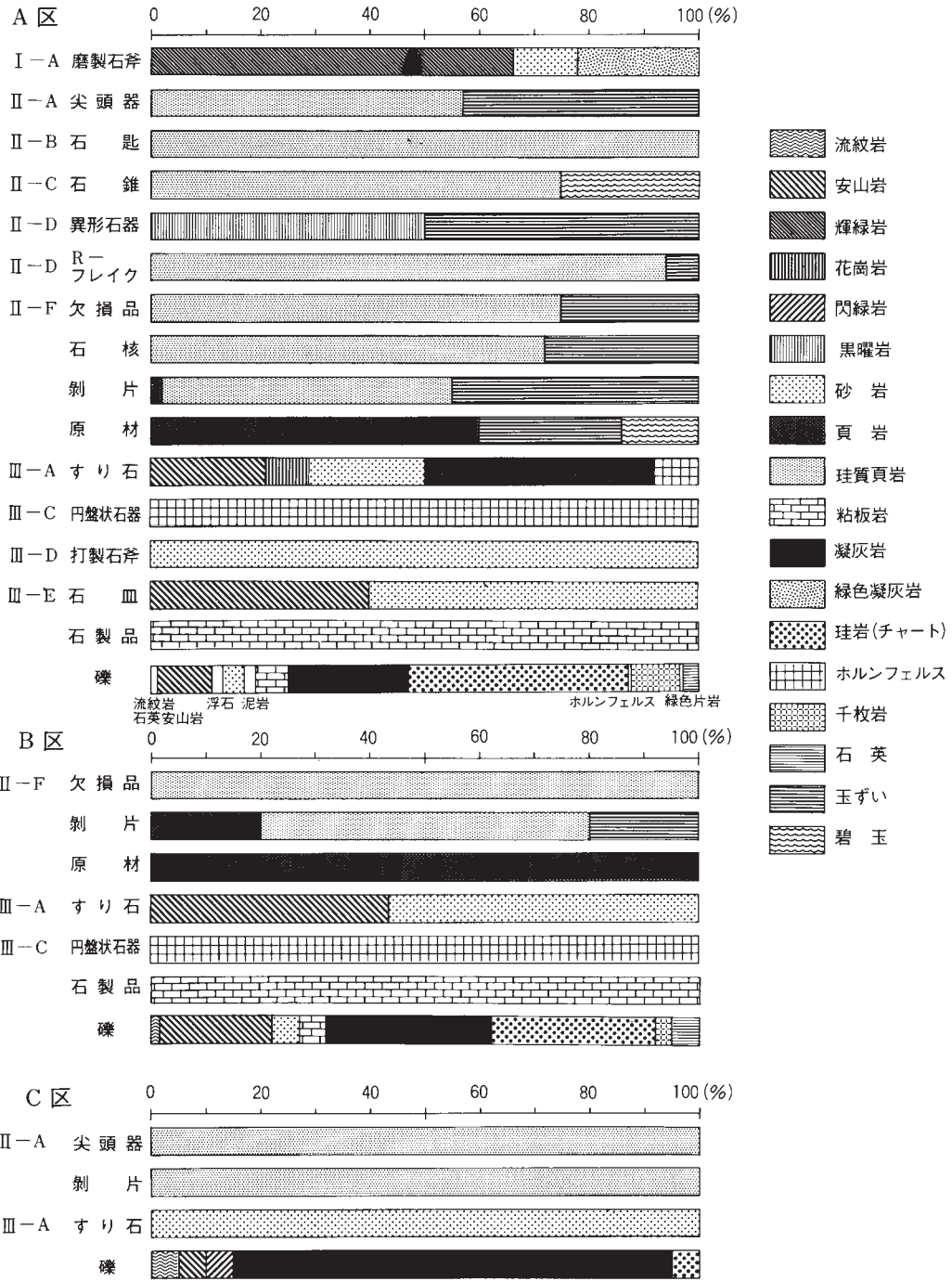
9．この中でも、石器あるいは石製品として利用度の高いものは、輝緑岩、花崗岩、砂岩、緑色凝灰岩、ホルンフェルス等である。逆に低いものは、粘板岩、凝灰岩等であり、礫として残される比率が圧倒的に高い。

10．石器又は石製品の原材として、全く利用されていない石種としては、流紋岩、石英安山岩、浮石、泥岩、珪岩（チャート）、千枚岩、緑色変岩、石英がある。

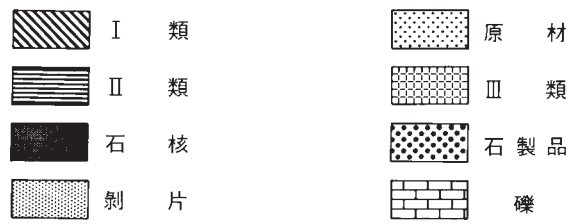
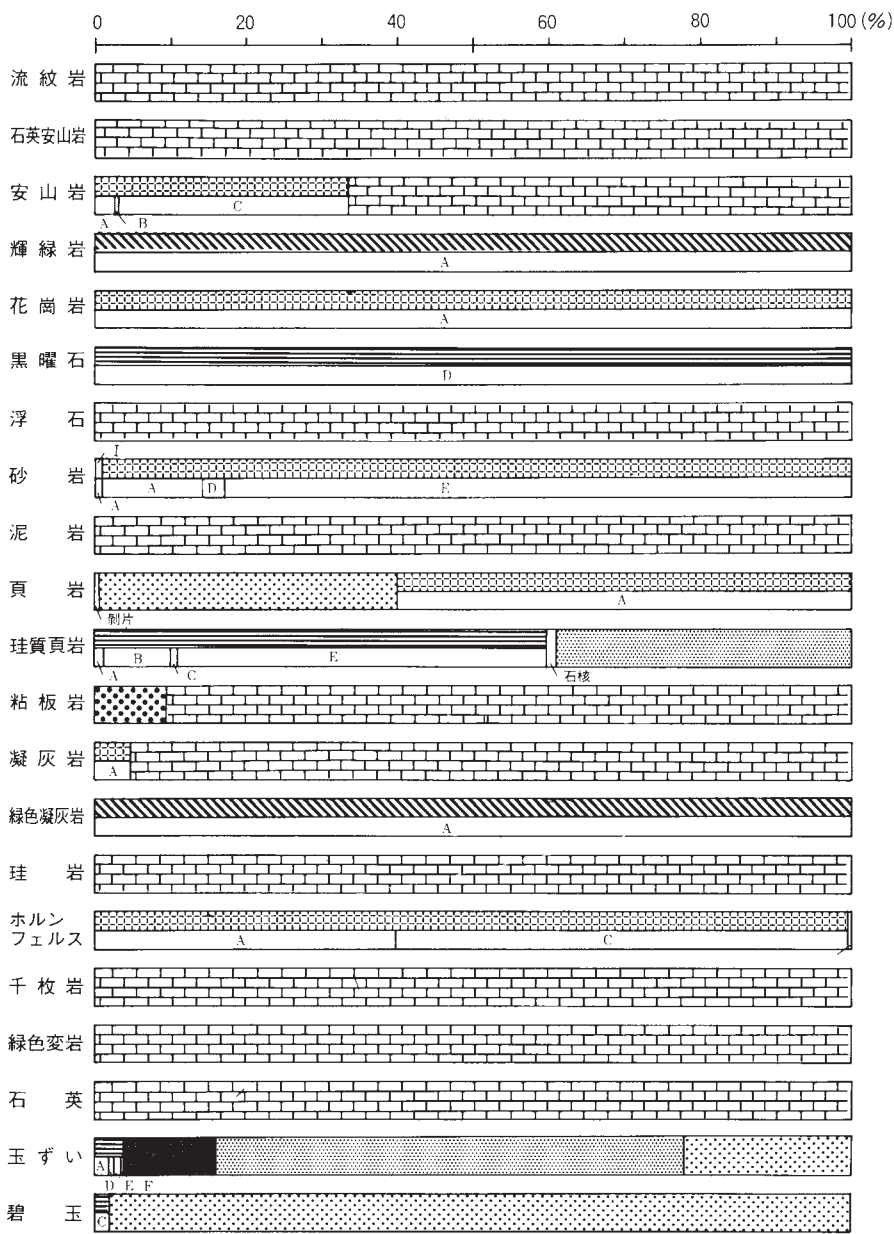
11．また、出土量が多いにもかかわらず、石器として利用度が低い石種としては、安山岩、凝灰岩等がある。

以上述べたように、石器又は石製品の製作に際しては、その目的に合った石種が選択されていたものとみられる。一方、全くあるいは、ほとんど製品化されていないにもかかわらず、多量に集落内に運びこまれた礫が存在することは、利用に不適なものとして廃棄されたとみなすよりも、別種の用途を想定するべきである。特に、珪岩（チャート）などは、火を受けている率がかなり高く、何らかの形で、利用するために、搬入されたものであるとみられる。

（工藤大・奈良清隆）

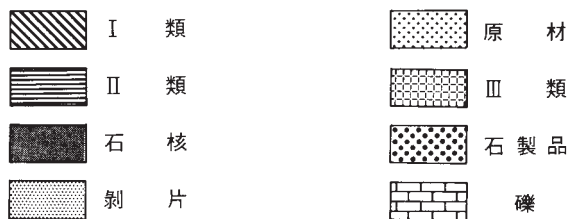
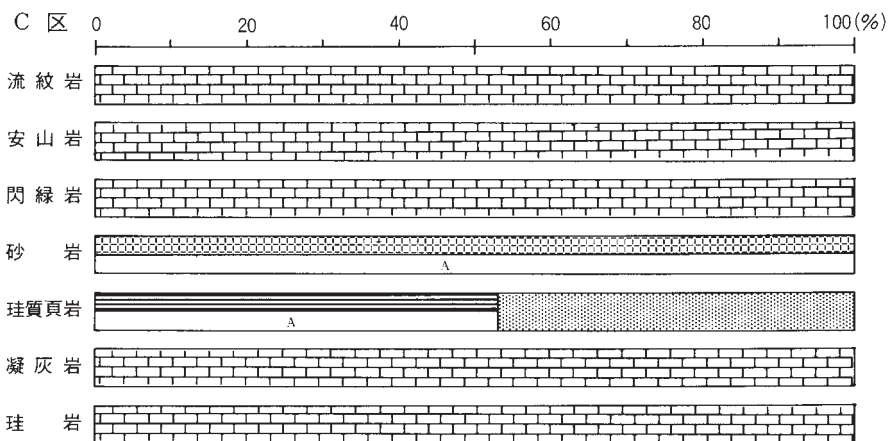
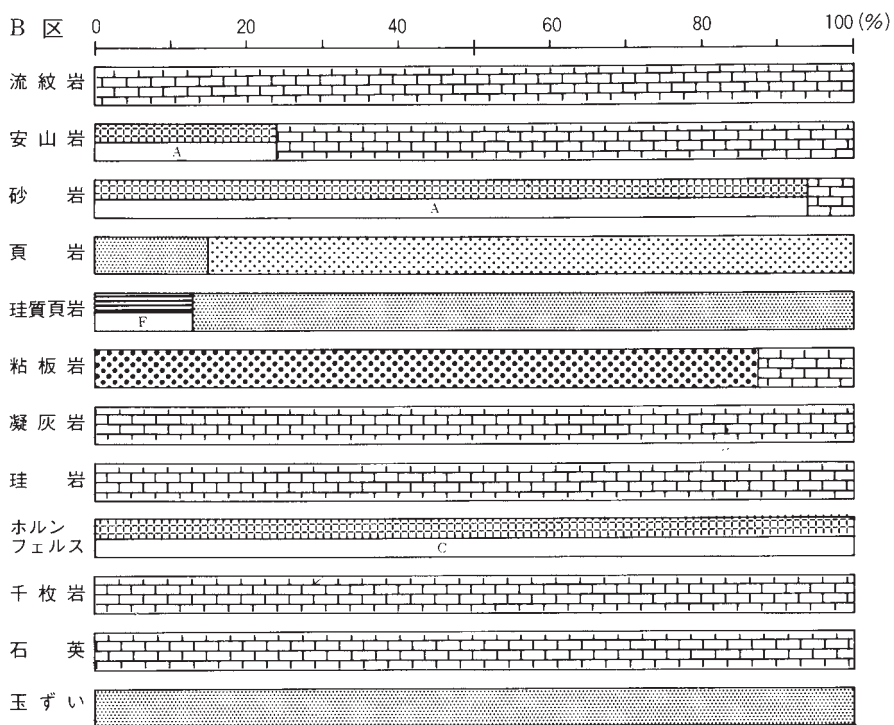


第155図 個体数による器種別、石種構成比



第156図 重量による石種別、器種構成比

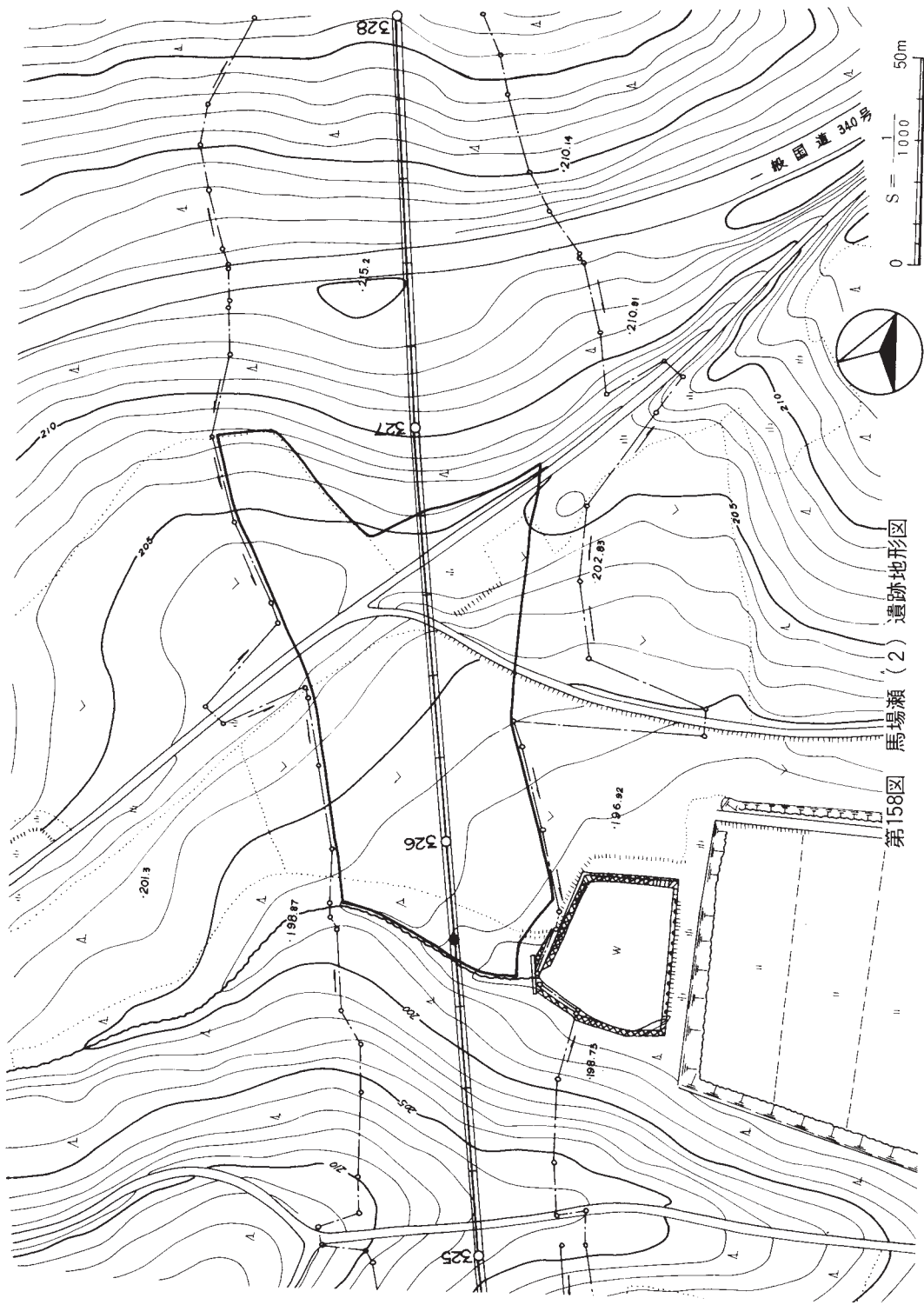




第157図 重量による石種別、器種構成比

## 馬場瀨(2)遺跡





第158図 馬場瀬(2) 遺跡地形図



# 馬場瀬(2)遺跡

## 1 調査の概要

本遺跡の調査は、馬場瀬(1)遺跡と同じように、調査開始直後に試掘調査を行って、遺物包含層の有無、遺物の分布状況、堆積土の厚さなどを、一応把握した上で実施した。

調査は、分層発掘法を採用したが、無遺物層については一部重機を利用した。遺構は、第 第 層で溝状ピット1基、第 層でフラスコ状土壌2基、計3基を検出した。

遺物は、縄文時代の早期、前期、後期、晩期の土器約3,100点、土製品4点、石器20点及び歴史時代の土師器3点、須恵器1点、古銭20点、鉄製品3点、土製品1点などが出土した。遺物の多くは、縄文時代後期及び晩期の土器片で、若干復原できたものもある。(北林)

## 2 調査区の基本層位

調査区内の堆積土は、次のように区分される(第159~161図)。

表土

第0a層 再堆積土層(1)。

第0b層 暗褐色土層。

第0c層 未命名の火山灰層。

第0d層 再堆積土層(2)。

第0e層 十和田a火山灰層。

第0f層 再堆積土層(3)。

第 a層 灰黒色土層 下位に十和田b火山灰を少量含む。

第 層 暗褐色土層 下位に中礫浮石を少量含む。

第 層 中礫浮石層。

第 a層 黒褐色土層、南部浮石を少量含む。

第 b層 黒褐色土層、南部浮石を多量に含む。

第 層 南部浮石層。

第 層 暗褐色土層。

第 層 八戸火山灰層。

馬場瀬(2)遺跡では、調査区北西の斜面上方から下方に向かって、再堆積土層が、少なくとも3回にわたって流れた状態で堆積しており、その間に、馬場瀬(1)遺跡ではみられなかった2枚の火山灰層を挟んでいる。調査区南西部では、馬場瀬(1)遺跡とほぼ同様の堆積状態を示しているが、第 b層、(十和田b火山灰層)がみられず、第 層がかなり薄くなっている。

遺物の出土層は、次のとおりである。

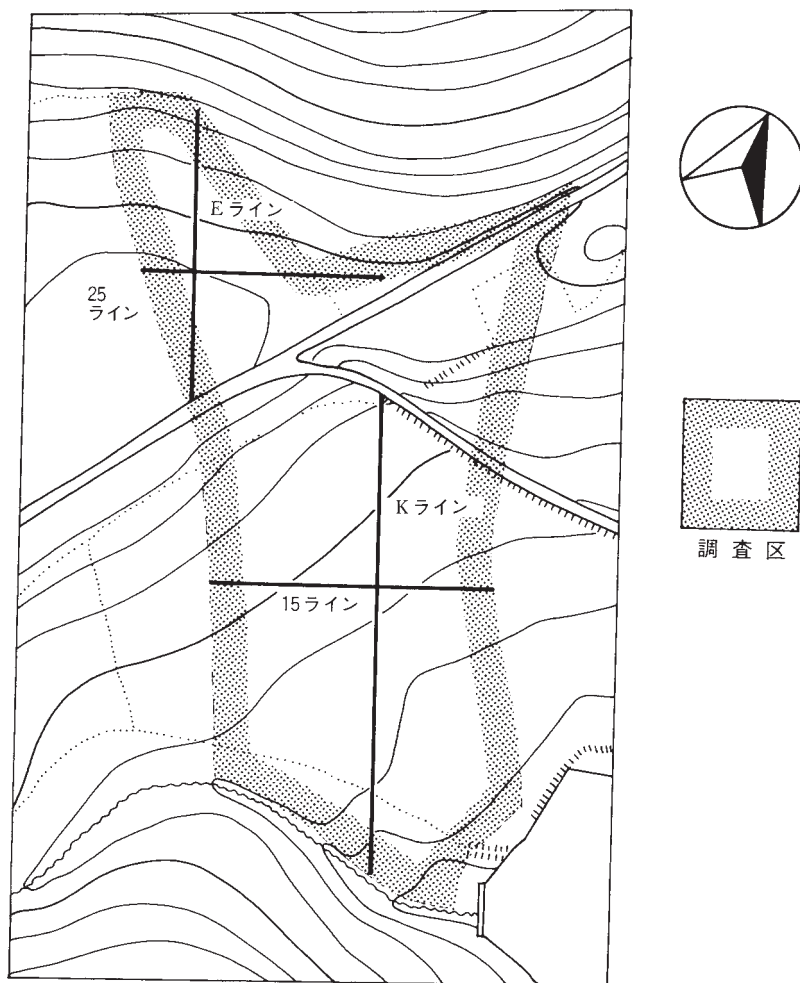
第 a 層 縄文時代後・晩期の遺物

第 層 縄文時代後・晩期の遺物

第 層 縄文時代早期の遺物

なお、このほかに調査区南端で、縄文時代前期の遺物が出土したが、湧水部分からの出土であり、出土層を確認できなかった。また、歴史時代の遺物は、主に表土あるいは再堆積土層からの出土である。

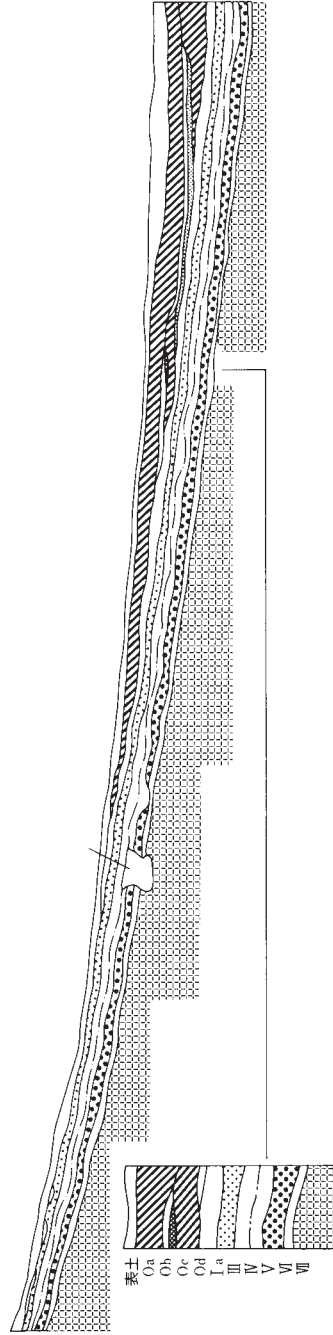
(工藤 大)



第159図 馬場瀬（2）基本層位

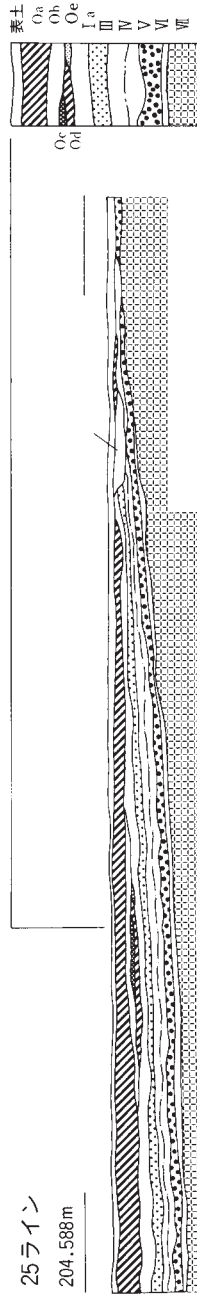
Eライン

208.088m



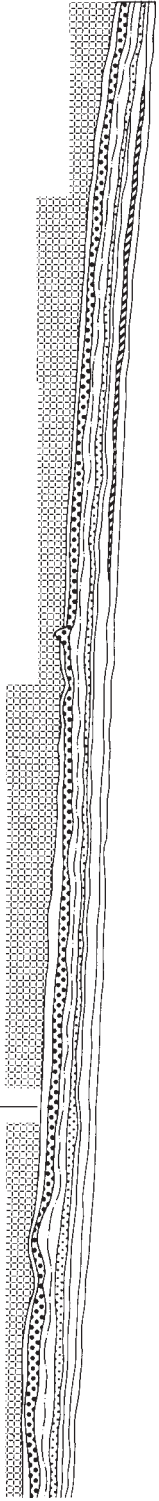
25ライン

204.588m

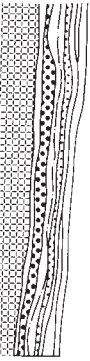


第160図 馬場瀬 (2) 基本層位

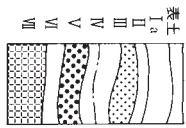
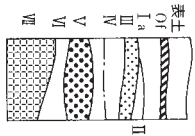
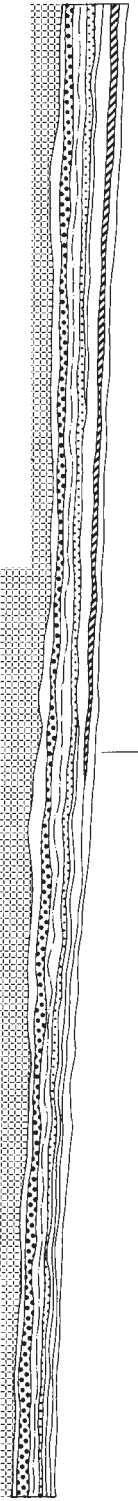
Kライン  
201.247m



201.247m

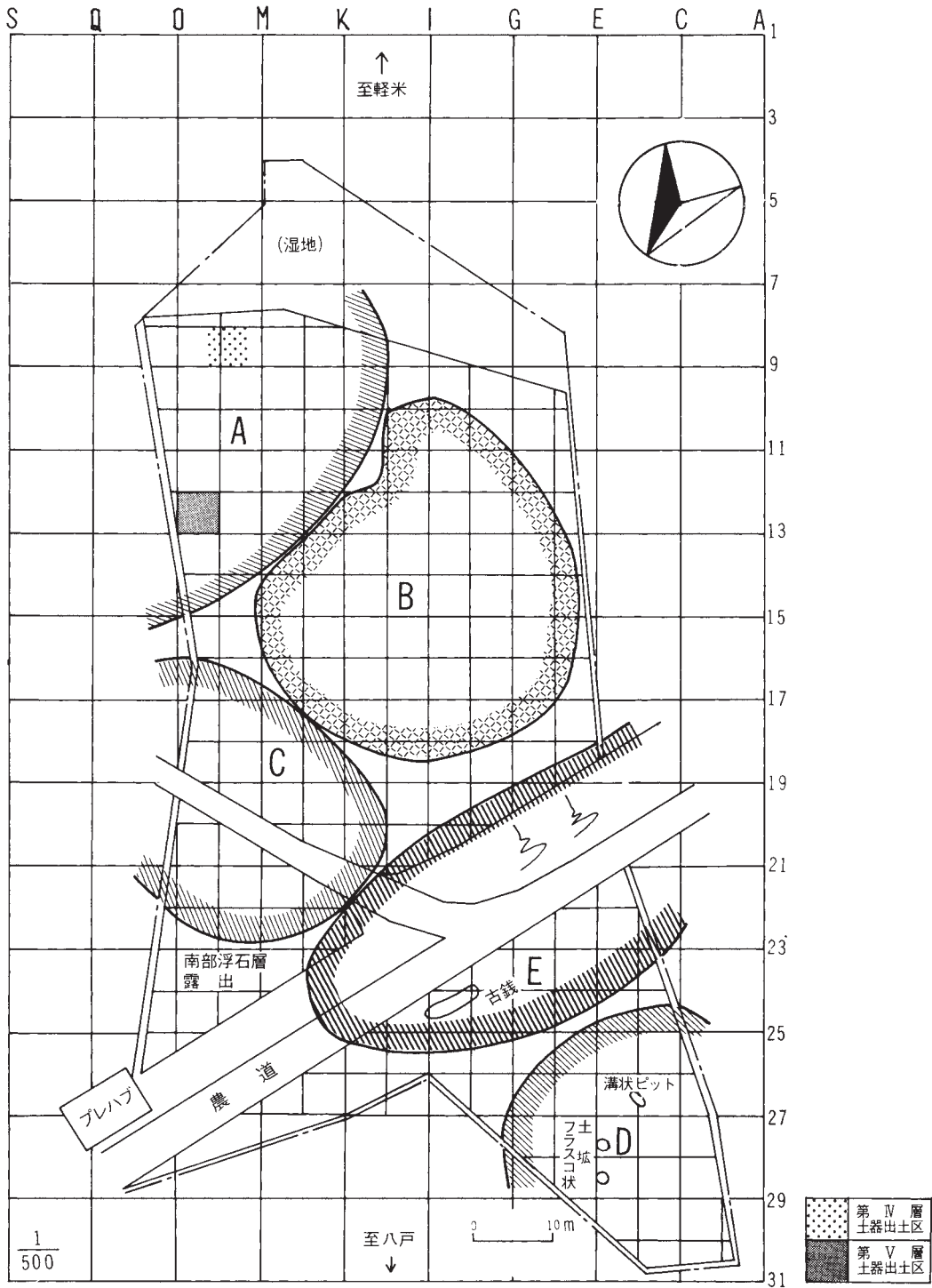


15ライン  
201.247m



第161図 馬場瀬 (2) 基本層位





第162図 遺構、遺物分布模式図

### 3 第 、 層の調査

#### (1) 遺構、遺物の分布

調査地区を横断している農道の両側には、第 、 層の上部に再堆積土が認められた。第 、 層の調査範囲は、第162図の一点鎖線内側にある小さい方眼の部分である。

検出した遺構は、溝状ピット1基だけで、C、D - 26グリッド付近に分布していた。出土した遺物は、縄文時代後期及び晩期の土器片、土製品、石器並びに歴史時代の遺物であるが、これらの遺物は、ほぼ第162図の範囲に分布していた。 (北林)

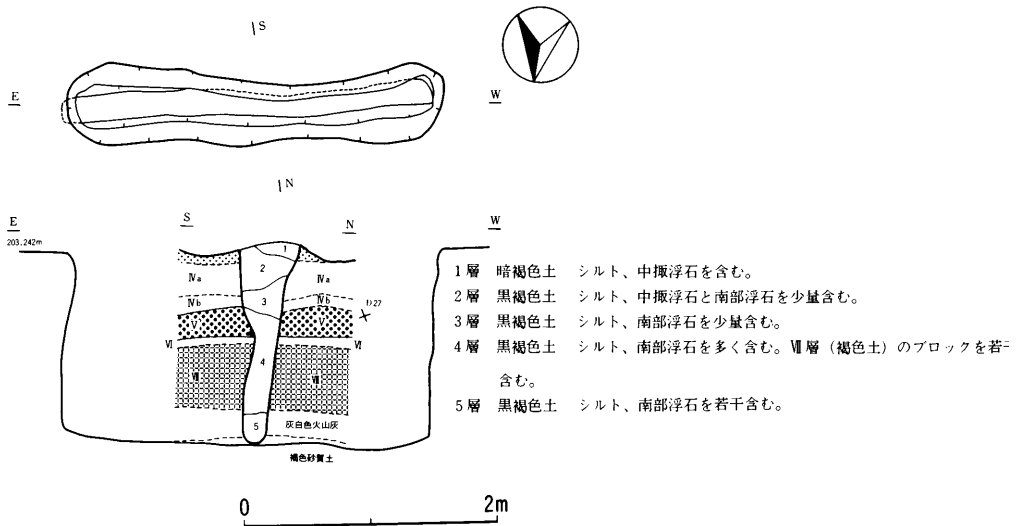
#### (2) 検出遺構

第 、 層の調査で検出した遺構は、現地で第7号遺構と称した溝状ピット1基だけである。

#### 溝状ピット (第163図、図版75、76)

第7号遺構は、調査対象地区の北西部付近にあるC - 26とD - 26の両グリッドにまたがって検出した。遺構は、基本層位の第 層上面で落ち込みを確認した。遺構の壙底面は、第 層の下部に堆積している灰白色火山灰層を更に掘り下げて褐色砂質土層に及んでいる。重複関係は認められない。

平面プランは、両端がやや膨らんだ細長い溝状で、長径方向はN - 83° - Eにある。短径の断面形は開口部がやや開き気味の不整な“U”字状で、また、長径の壙底面は、若干の高低差が認められる。



第163図 第7号溝状ピット実測図

長径上端径3.00m、同下端径2.84m、短径上端最大径0.65m、同最小径0.44m、同下端最大径0.20m、同最小径0.15m、確認面からの深さ1.60mの規模である。

覆土は、5層に大別したが、人為的な堆積とは認められない。遺物及び自然礫などの出土はない。 (北林)

### (3) 出土遺物

第 Ⅰ層及び再堆積土層で出土した遺物は、縄文時代の土器、石器、土製品、平安時代の土師器、江戸時代に鑄造した古銭などである。ここでは、縄文時代の遺物を取りあげることにして、平安時代以降の遺物については第5節において扱う。

縄文時代の遺物は、第 Ⅰ層、第 Ⅱ層においても出土したが、第 Ⅰ層出土の遺物は、一部表面採集の土器を加えると、縄文土器3,040点、石器18点、土製品3点の計3,061点である。これらの遺物は、本遺跡出土遺物の90%以上を占める。

出土遺物は、土器、土製品、石器の順に記載する。

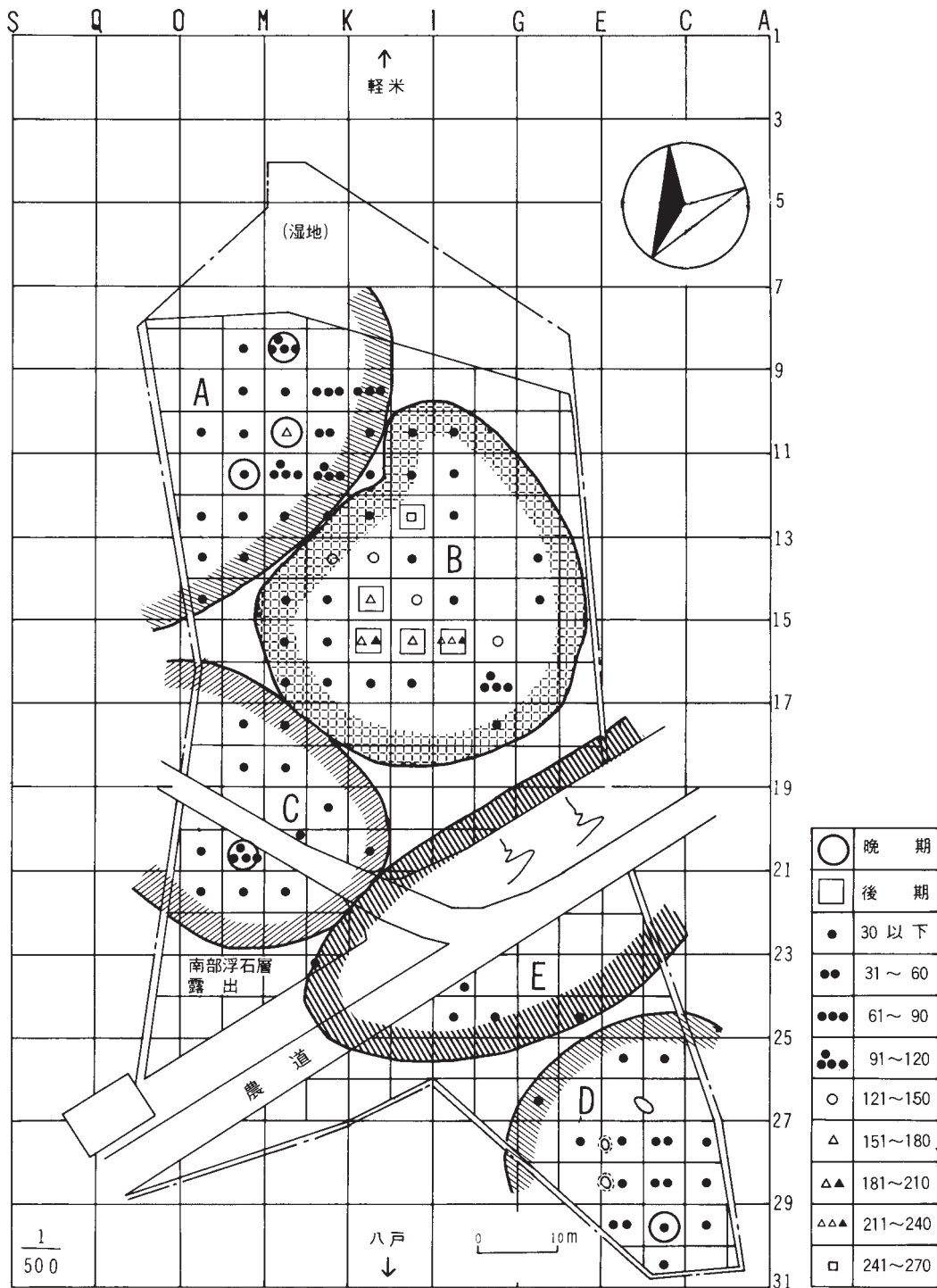
#### ア 土器

第 Ⅰ層出土の土器は、表面採集したものを除くと3,025点で、数量的には本遺跡から出土した土器の98.4%を占める。

出土した土器は、第 Ⅰ層よりも第 Ⅱ層に多く包含されていたが、出土層位によって土器型式に差異があったとは認め難い出土状況である。第 Ⅰ層出土土器は、本書において第 Ⅰ群及び第 Ⅱ群としたものに相当するものが多い。第 Ⅰ層出土土器について、記述する。

第 Ⅰ層の土器分布 (第164図、86、87表)

第 Ⅰ層では、5m×5mの面積を1調査単位としてグリッドを設けたが、25m<sup>2</sup>以下の面積をもつグリッドを含めると189箇所のグリッドになる。第87表は、各グリッドから出土した土器数を集計した表で、この数値から第164図の遺物分布模式図を作成した。第164図によって判然とすると思うが、25m<sup>2</sup>の広さを有するグリッドから、縄文土器の出土が1点もないグリッドが半数以上の104箇所(55%)である。従って、残り85箇所のグリッドから土器が出土したことになる(第86、87表、第 Ⅰ層出土土器集計表)が、その出土数量は、最少1点最多258点で、平面分布数は、均等でも漸移的でない。30点を1単位として各グリッドの土器出土数を第86表にまとめたが、これを説明すると、85箇所のグリッド中30点以下の土器出土数のグリッドが64箇所である。これは、全グリッド数の33.9%である。更にこれを細分してみると10点以下のグ



第164図 第Ⅰ、Ⅱ層遺物分布模式図

第86表 第I、II層出土土器集計表(1)

グリッド名	外面文様			部位			計	1 30	31 60	61 90	91 120	121 150	151 180	181 210	211 240	241 270	
	縄文	無文	その他 施文	口縁	胴体	底											
B-27	3				3		3	●									
B-28	14	1			14	1	15	●									
B-29	18	1		1	18		19	●									
B-30	4	3			7		7	●									
C-25		1			1		1	●									
C-27	33				33		33		●								
C-28	43	1			44		44		●								
C-29	19	2		1	20		21	●									
C-30	12			1	11		12	●									
D-25	1				1		1	●									
D-27	1				1		1	●									
D-28	18			1	17		18	●									
D-29	28	4	3	1	34		35		●								
D-30	8				8		8	●									
E-24	1	6			7		7	●									
E-27	2	1			3		3	●									
F-13	5			2	3		5	●									
F-14	7		3		10		10	●									
F-26	4				4		4	●									
G-14	23				22	1	23	●									
G-15	141			6	129	6	141					●					
G-16	63			7	56		63			●							
G-17			1		1		1	●									
G-24	1				1		1	●									
H-11	1				1		1	●									
H-12	15			2	13		15	●									
H-14	2				2		2	●									
H-15	220	6	6	10	222		232									●	
H-23		2			2		2	●									
H-24	1				1		1	●									
I-10	25	2	1	3	25		28	●									
I-11	19	1	2	2	20		22	●									
I-12	233		25	30	225	3	258										●
I-13	27			8	18	1	27	●									
I-14	133			16	115	2	133					●					
I-15	149		3	8	143	1	152						●				

第86表 第I・II層出土土器集計表(2)

グリッ ド名	外面文様			部位			計	1	31	61	91	121	151	181	211	241	
	縄文	無文	その他 施文	口縁	胴体	底		{ 30	{ 60	{ 90	{ 120	{ 150	{ 180	{ 210	{ 240	{ 270	
I-16	15			2	12	1	15	●									
J-9	62			5	55	2	62			●							
J-10	20	2			21	1	22	●									
J-11	13		4	1	16		17	●									
J-12	7	5		1	10	1	12	●									
J-13	106	16		11	110	1	122					●					
J-14	143	4	24	11	159	1	171						●				
J-15	161	39	1	17	182	2	201							●			
J-16	4			1	3		4	●									
J-20	1				1		1	●									
K-9	64	6	5	3	72		75			●							
K-10	50	1		6	45		51		●								
K-11	102			12	90		102					●					
K-12	14				14		14	●									
K-13	117	3	2	3	118	1	122					●					
K-14	16	4	2		22		22	●									
K-15	3				2	1	3	●									
K-16	6	2			8		8	●									
K-19	3				3		3	●									
K-23		1			1		1	●									
L-8	78	22	9	17	92		109					●					
L-9	5		2		6	1	7	●									
L-10	153			3	144	6	153							●			
L-11	103			17	86		103					●					
L-12	1	1			2		2	●									
L-14	1	1			2		2	●									
L-15	1				1		1	●									
L-16	2				2		2	●									
L-17	2				2		2	●									
L-18	4	3			7		7	●									
L-20	29				27	2	29	●									
L-21	1				1		1	●									
M-8	1	2			3		3	●									
M-9	1				1		1	●									
M-10	1				1		1	●									
M-11	3				3		3	●									

第86表 第I、II層出土土器集計表(3)

グリッド名	外面文様			部位			計	1	31	61	91	121	151	181	211	241	
	縄文	無文	その他文	口縁	胴体	底		30	60	90	120	150	180	210	240	270	
M-12	11		1		12		12	●									
M-13	1				1		1	●									
M-17	2		2		4		4	●									
M-18	21		1	1	21		22	●									
M-20	116		3	7	109	3	119			●							
M-21	10				10		10	●									
N-10	10				10		10	●									
N-12	6	2		1	7		8	●									
N-13	1				1		1	●									
N-14	6				6		6	●									
N-20	3				3		3	●									
N-21	26				25		26	●									
表採	11	2	2	2	13		15										
計	2,791	147	102	221	2,781	38	3,040										
百分率	91.8%	4.8%	3.4%	7.3%	91.5%	1.2%											

第87表 第I、II層出土土器集計表

土器出土数	グリッド数	土器出土数	グリッド数
1~30	64	151~180	3
31~60	4	181~210	1
61~90	3	211~240	1
91~120	4	241~270	1
121~150	4	計	85

リッドが、44箇所(23.2%)、11~20点のグリッドと21~30点のグリッドが、各々10箇所である。1グリッド30点以下のグリッド数と土器の出土がないグリッドを合計すると168箇所(88.9%)で無遺物層

が、土器の包含量が希薄なことを示している。これは、調査地区の過半が遺物の分布が密でないことを物語っている。しかし、逆に土器分布範囲を群化(グルーピング)して抽出する場合は容易となる。第I層から出土した土器の平面分布を模式化して図にしたものが第164図であるが、出土数の密なグリッドを中心に群化(グルーピング)して分布圏を抽出すると、土器の分布に関しては4群に分けられる。土器の平面的分布群には、数量の多少は認められるが、出土数の多い分布群の中核となるグリッドの存在が認められるようである。ただ、第II層出土の遺物分布では、古銭の分布群も加わるので5群に区分される。これらの分布群は、多少重複しているが、仮にそれぞれの分布群にA~Dの名称を付けて説明すると、B群はほぼ全体の範囲をとらえることができる。A、C、D群は、それぞれ調査対象地区外にも分布範囲が延

びているとみてよからう。ちなみにA群の土器分布数は、699点（23%）B群1518点（50%）C群230点（7.6%）D群217点（7.1%）で、B群に出土土器の50%が集中している（第88表参照）。また、土器の分布群は勿論、遺物の分布群のとらえ方については、出土グリッド付近の当持の地形を考えなければならないであろう。これら4つの土器分布群は、その出土土器の型式によって時期差が判断される。出土土器の時期を判断する良好な資料が少ないため明確な分類はでき難いが、B群が縄文時代後期後半（本書土器分類の第 群1～4類）、A、C、D群が縄文晩期初頭（ 群2類）の所産による土器が指標となっている。

第88表 土器分布群別集計表

群	文様	縄文	無文	その他	群	部位	口縁	胴体	底
A		706	36	21	A		65	688	10
B		1,645	83	70	B		140	1,636	22
C		218	3	6	C		9	213	5
D		208	14	3	D		5	219	1
E		3	9		E			12	
計		2,780	145	100	計		219	2,768	38
合計		3,025			合計		3,025		

土器の観察

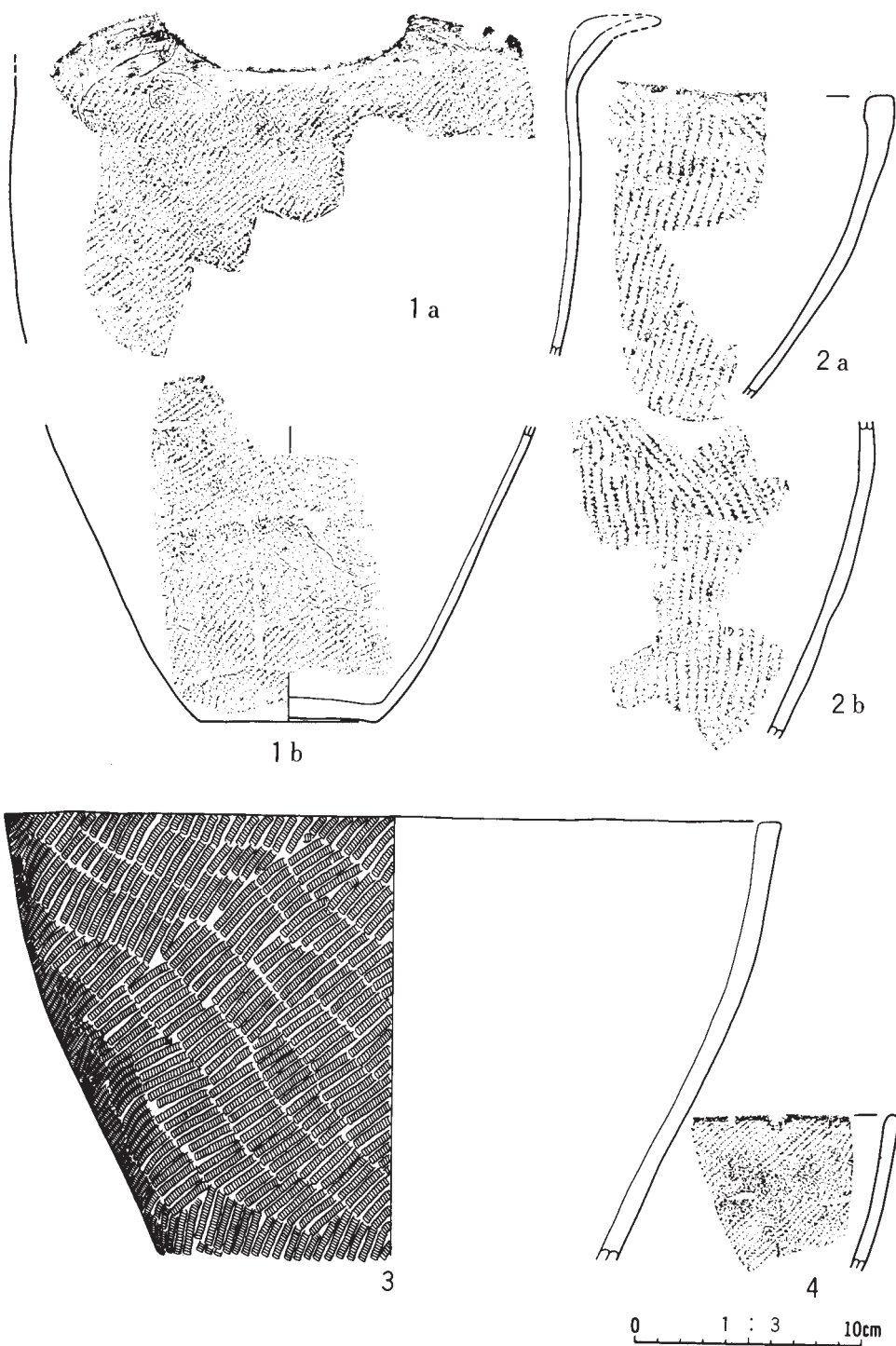
第 層出土の土器のうち、一部接合した土器片と比較的大きな破片で文様、器形などを観察できる土器を第165図から第175図に図示し、土器観察表（第89～94表）を付した。出土土器の分類は、馬場瀬1遺跡において行った基準と同様である。

第89表 遺構外出土土器観察表(1)

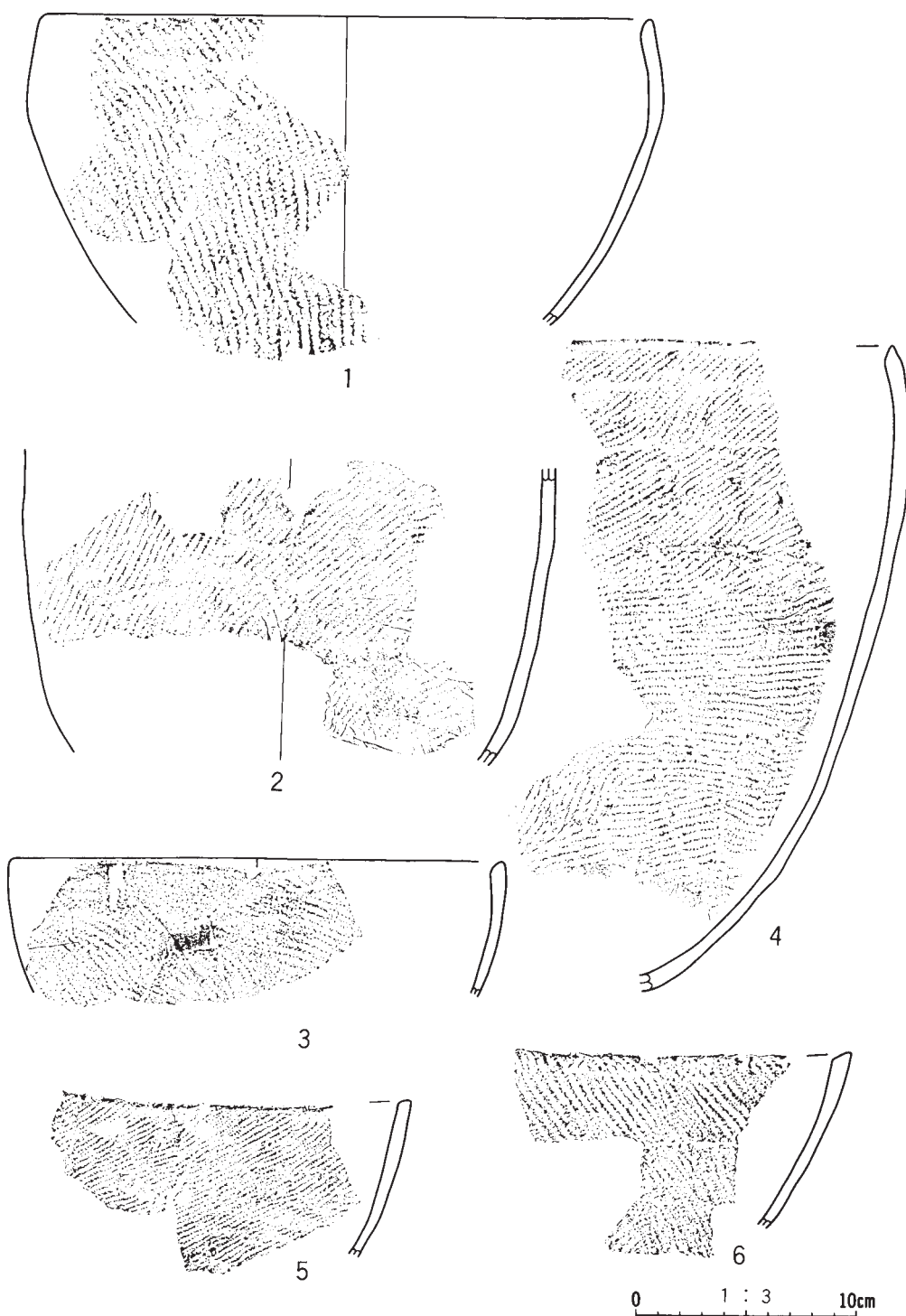
単位 cm

種別 番号	図版 番号	発掘 区画	器形 現状	器高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
165	79	L-10II	片口 図復		(30.4)	7.8		LR単斜縄文	横	横割小突起2個 と小突起1個	やや 上げ底		III	1 a	
	79	H-15II	深鉢 口縁		(37.0)		(39.0)	LR多条縄文	横	肥厚		B器形	III	1 a	
	79	L-11II M-11II	深鉢 口縁		(33.0)			LR縄文 単一方向斜縄文	横			煤付二次火熟	III	1 a	
	79	K-10II	深鉢 口縁		(32.4)			LR縄文	横 みかさ 入念	押しした斜目有			III	1 a	
166	80	H-15II	深鉢 口縁	12.3	(28.0)			RL単斜縄文	横	肥厚			III	1 a	
	80	G-15II	深鉢 胴体					LR単斜縄文	横			二次火熟	III	1 a	
	80	L-13II	深鉢 口縁		(24.0)			RL縄文	横	肥厚		B器形	III	1 a	外面炭化物付着
	80	G-15II	深鉢 口縁		(28.0)		(30.0)	LR縄文	横 縦 斜め	肥厚		底部無文 B器形	III	1 a	





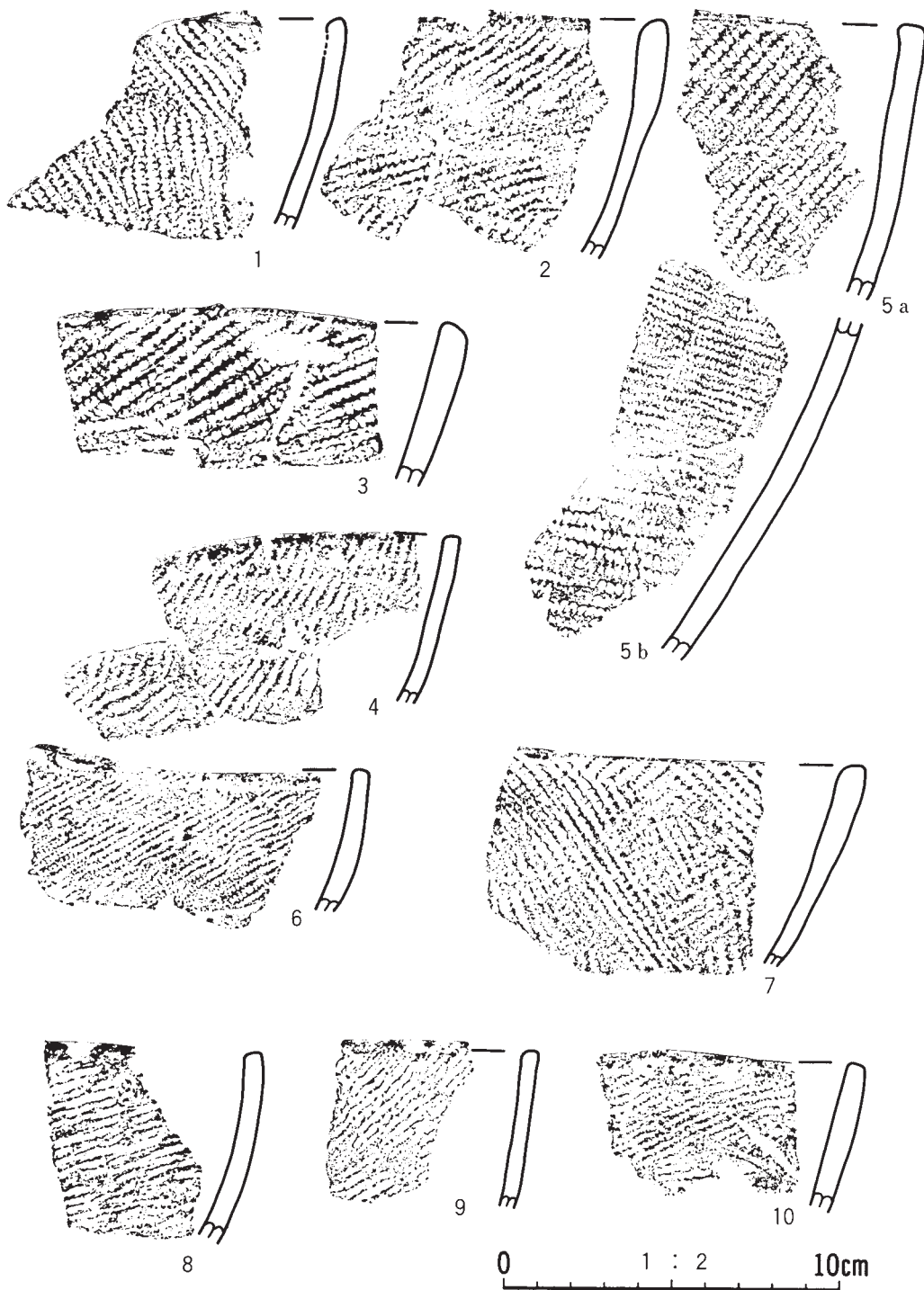
第165図 第I・II層出土土器実測図(1)



第166図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器実測図(2)



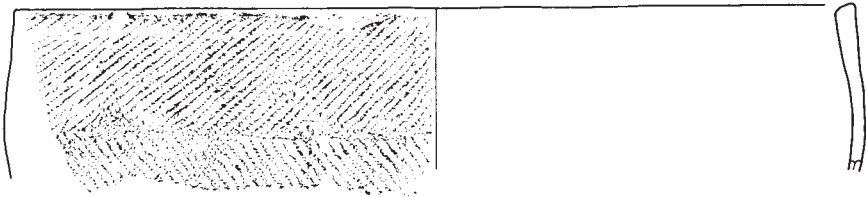
第167图 第I・II層出土土器実測図(3)



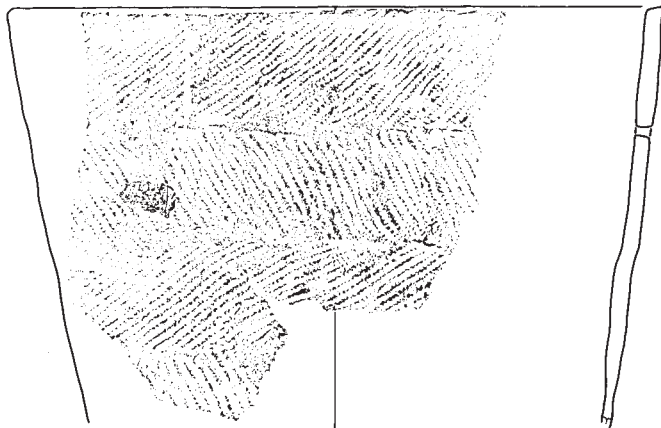
第168图 第I・II層出土土器実測图(4)



1



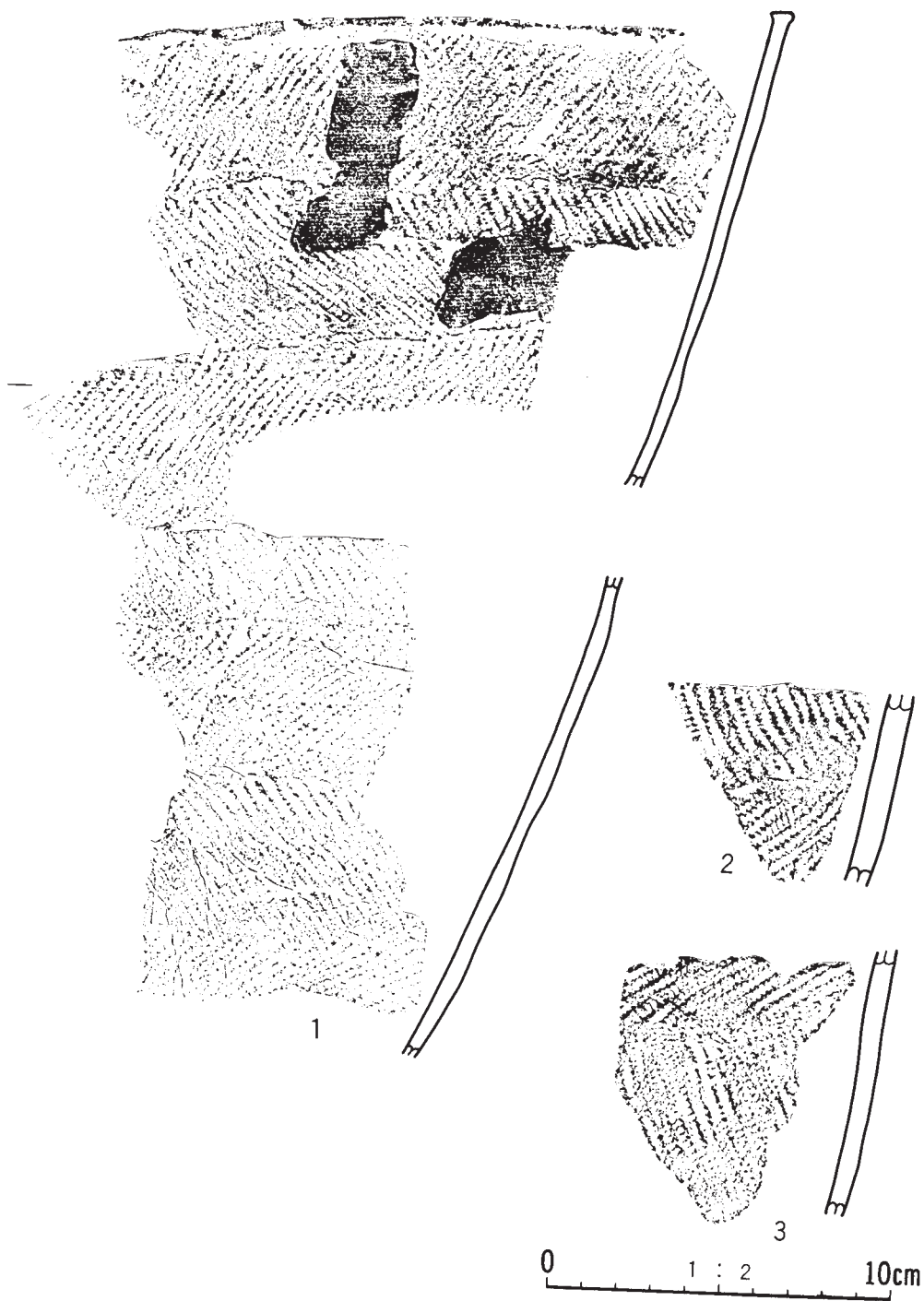
2



3

0 1 : 3 10cm

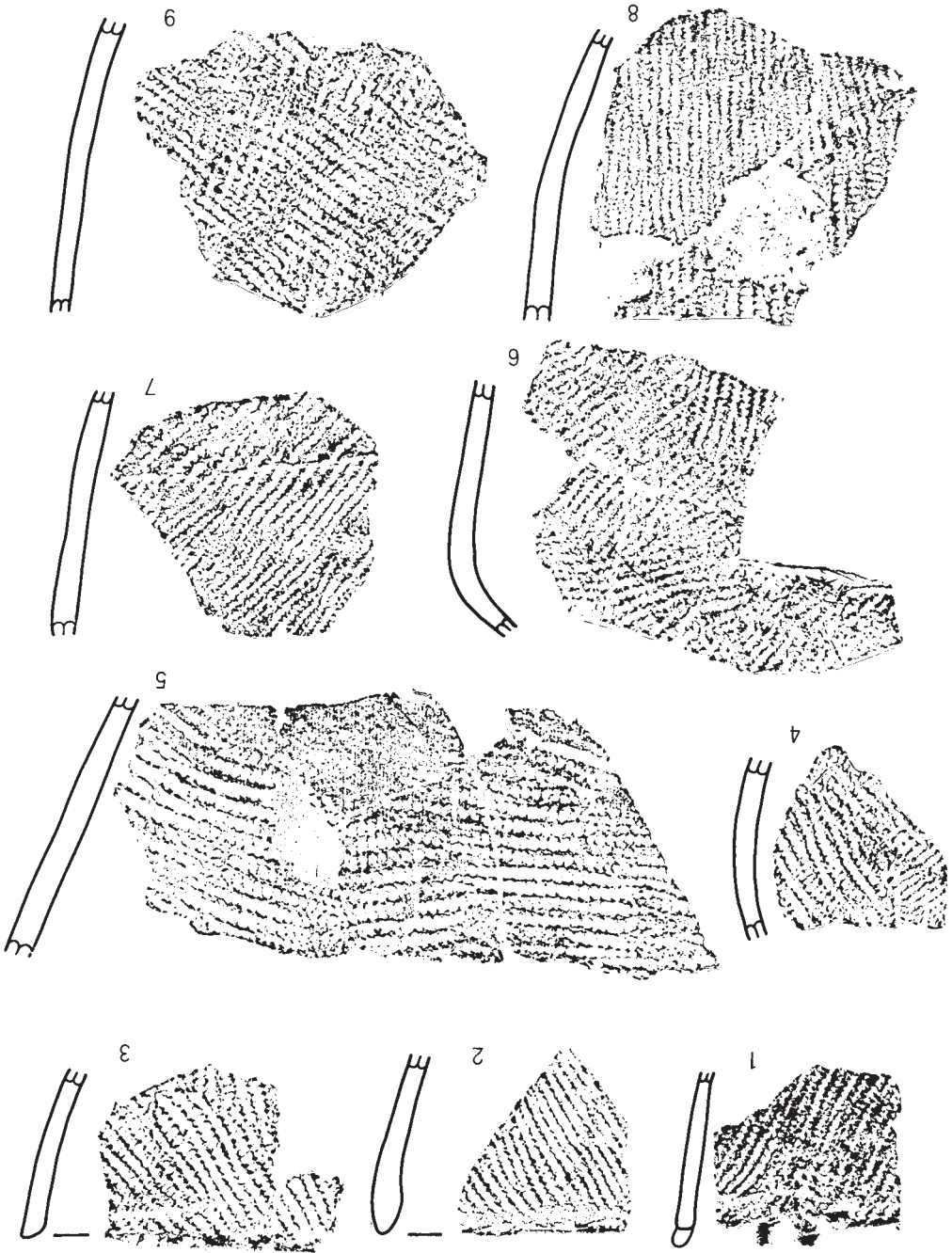
第169図 第I . II層出土土器実測図 (5)

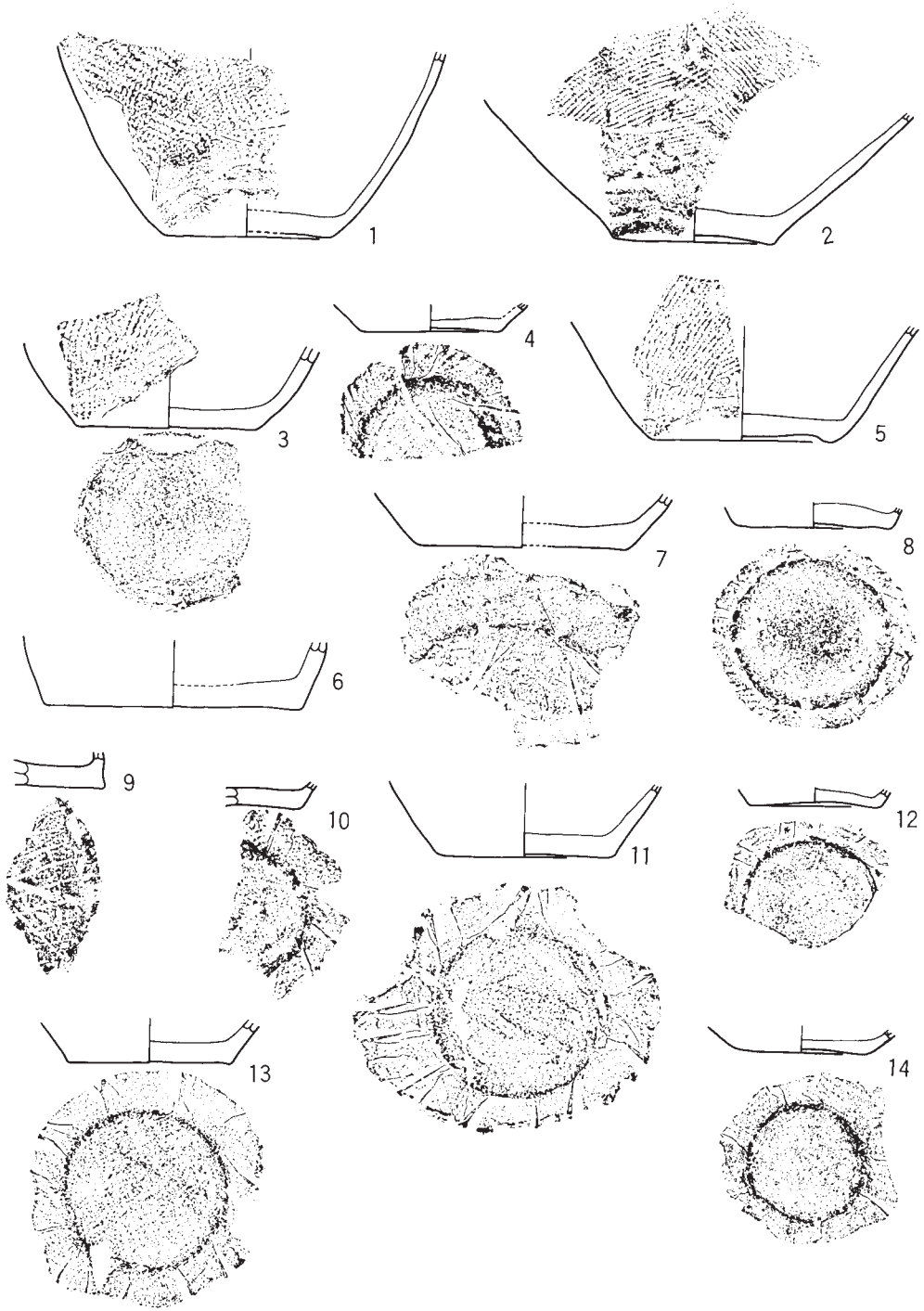


第170図 第I・II層出土土器実測図(6)

第171图 第I. II层出土器类测图 (7)

0 1 2 10cm

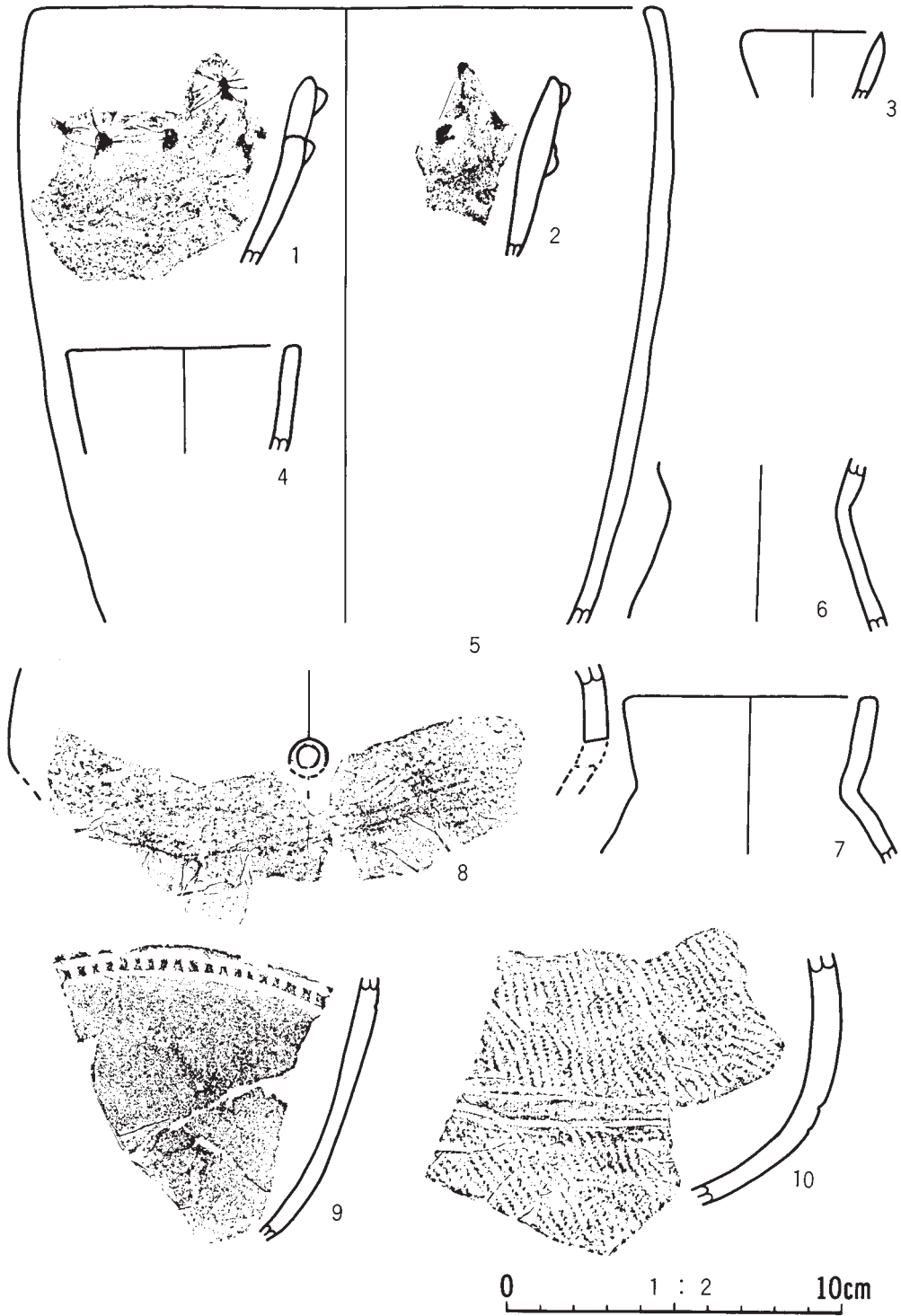




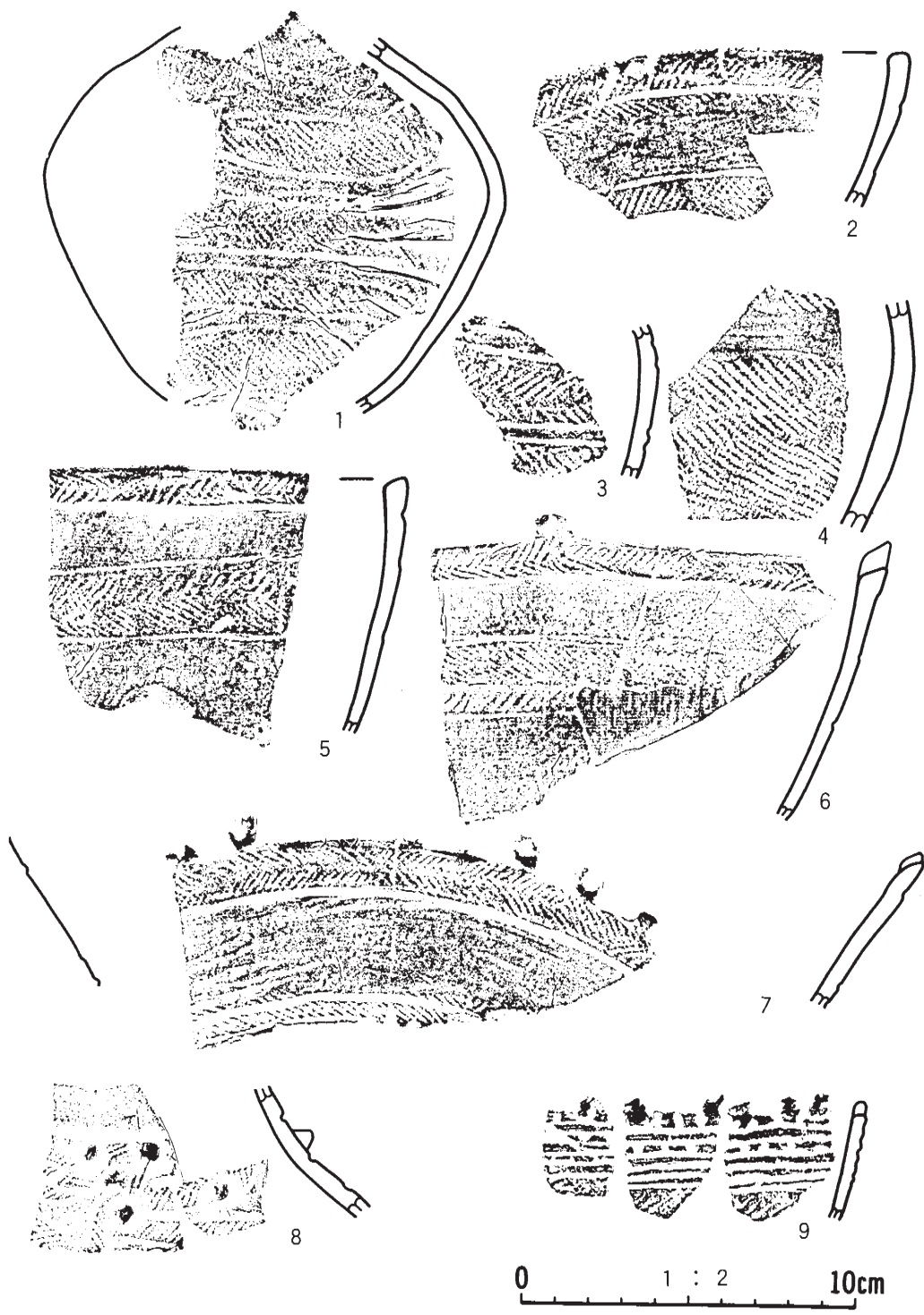
0 1 : 3 10cm

第172图 第I、II层出土土器实测图(8)

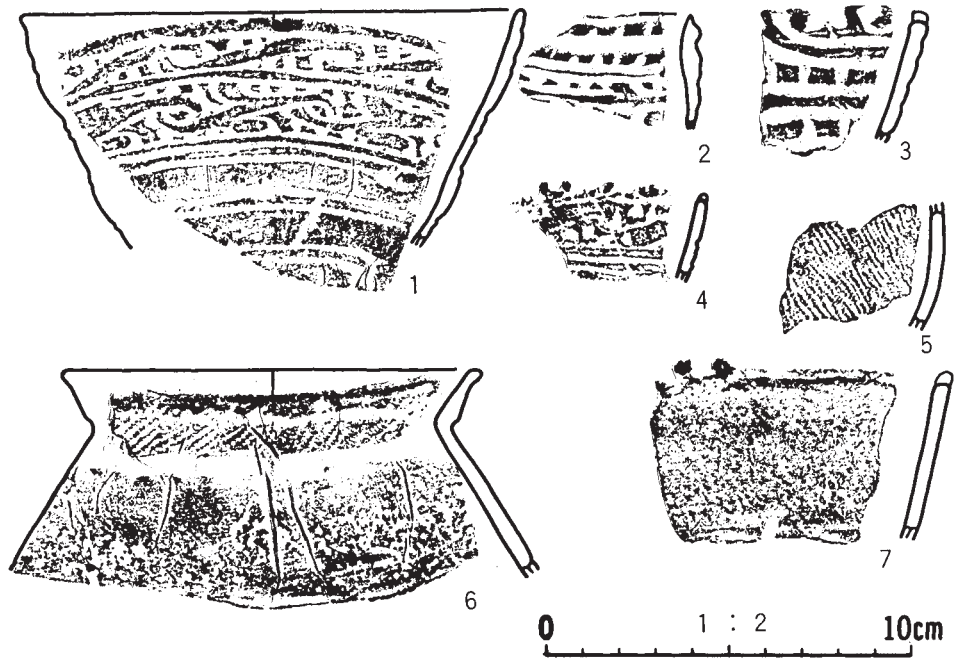




第173图 第I・II層出土土器実測図(9)



第174图 第I、II層出土土器実測图 (10)



第175図 第I、II層出土土器実測図(11)

第90表 遺構外出土土器観察表(2)

単位 cm

棟号 図番	図版 番号	発掘 区画 部位	器形 現状	器高	口 径	底 径	最大 径	外面 施文	内面 調整	その他の特徴			分類		備考
										口 唇部	底部	その他	群	類	
167図 -5	80 -5	M- 20I	深鉢 口縁		(26.0)			LR単斜縄文	横				III	1 a	
80 -6	J- 9II		深鉢 口縁		(36.0)			RL単斜縄文	横	肥厚	B器形		III	1 a	
167図 -1	81 -1	I- 12II	深鉢 口縁		(30.0)			RL縄文(斜位施文)	横	肥厚			III	1 a	
81 -2	I- 12I		深鉢 口縁		(22.0)			LR単斜縄文	斜め		B器形		III	1 a	
81 -3	J- 13II		深鉢 口縁		(32.0)			LR単斜縄文	横	肥厚	B器形		III	1 a	外面煤付着
81 -4	I- 11II		深鉢 口縁		(28.0)			LR単斜縄文	横 みかさ		外面炭化物付着		III	1 a	
81 -5	M- 11II		深鉢 底					LR縄文	横 研摩				III	1 a	
167図 -1	81 -5	K- 9II	深鉢 口縁		(38.0)			RL縄文	横	肥厚	B器形		III	1 a	

第91表 遺構外出土土器観察表(3)

単位 cm

種別 番号	図版 番号	登層 区 位	器形 現 状	器 高	口 径	底 径	最 大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群 類	個 体	
Ⅷ区	-2	J-13II	深鉢 口縁		(40.0)			LR単斜縄文(ブロック状)	横 雑	肥厚		B器形	Ⅲ	1 a	
	-3	81-6 K-11II J-11II	深鉢 口縁		(39.0)			LR縄文(横斜位)	横	肥厚		B器形	Ⅲ	1 a	
	-4	H-13I	深鉢 口縁		(30.0)			LR単斜縄文	横 不良				Ⅲ	1 a	
	-5	81-7 L-8II	深鉢 口縁					LR縄文(斜位→縦位)					Ⅲ	1 a	
	-6	81-8 M-20I	深鉢 口縁		25.6			LR縄文(細粒)	横				Ⅲ	1 a	
	-7	81-9 J-9II	深鉢 口縁		(28.0)			RL縄文	横	肥厚		B器形	Ⅲ	1 a	煤付
	-8	81-10 L-9II	深鉢 口縁					LR無節縄文	横	小波状			Ⅲ	1 a	
	-9	81-11 M-21I	深鉢 口縁		(15.5)			LR無節縄文	横	押圧刻目 3個1組			Ⅲ	1 a	
	-10	81-12 L-14II	深鉢 口縁		(30.0)			LR無節縄文	横				Ⅲ	1 a	
Ⅷ区	-1	82-1 L-8II	深鉢 口縁		(32.8)			幅広い羽状縄文	横	肥厚			Ⅲ	1 d	
	-2	82-2 L-8II	深鉢 口縁		(31.0)			幅広い羽状縄文 (上段LR、下段RL)	横	肥厚			Ⅲ	1 d	
	-3	82-3 L-8II	深鉢 口縁		(28.6)			幅広い羽状縄文 (上段L位、下段R位)	横				Ⅲ	1 d	
Ⅷ区	-1	82-4 K-10II K-11II	深鉢 口縁				(34.0)	幅広い羽状縄文 (LR→RL)	縦				Ⅲ	1 e	付加象原休付
	-2	82-5 L-8II	深鉢 胴体					幅広い羽状縄文	横				Ⅲ	1 d	
	-3	82-6 L-8II	深鉢 胴体					幅広い羽状縄文	横				Ⅲ	1 d	煤付
Ⅷ区	-1	82-7 M-18I	深鉢 口縁		(23.0)			LR単斜縄文	不 明	2個1組小突起			Ⅲ	1 a	
	-2	82-8 H-13I	深鉢 口縁		(28.0)			RL単斜縄文	横				Ⅲ	1 a	
	-3	82-9 G-16II	深鉢 口縁		(32.0)			RL縄文 (横斜位変化)	横				Ⅲ	1 a	
	-4	82-10 I-12II	壺鉢 胴体				(18.8)	RI縄文	横				Ⅲ	1 a	

第92表 遺構外出土土器観察表(4)

単位 cm

挿図 番号	図版 番号	発掘 区位	器形 現状	器高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
17	82 -5	K- 11	深鉢 胴体					LR縄文斜位	横				III	1 a	
	83 -6	K- 10II	壺 胴体			(22.0)		LR縄文 (横斜位に变化)	横				III	1 a	
	83 -7	L- 8II	深鉢 胴体					LR縄文 (原体2種)	横				III	1 a	
	83 -8	L- 8II	深鉢 口縁					LR多条縄文					III	1 a	
	83 -9	J- 11III	深鉢 胴体					LR縄文(横位斜位交差)	横				III	1 e	
12	-1	1- 12II	深鉢 底			7.0		LR縄文(横・斜位)			上坪底 気味		III	1 a	
	83 -2	1- 16II	深鉢 底			6.7		LR縄文	横		上坪底 ケズリ後施文		III	1 a	
	83 -3	L- 10II	深鉢 底			8.2		LR単斜縄文	横		平底		III	1 a	
	83 -4	1- 12II	深鉢 底					LR縄文					III	1 a	
	-5	B- 28II	深鉢 底			7.5		LR単斜縄文	横		上坪底		III	1 a	
	-6	J- 12II	深鉢 底			(12.0)		(縄文)			平底 圧痕付		III	1 a	
	-7	J- 12II	深鉢 底			(11.0)		(縄文)			平底		III	1 a	
	83 -8	J- 9II	小鉢 底			(7.0)		LR縄文					III	1 a	
	83 -9	J- 14II	深鉢 底			(11.0)		(不明)			木 葉 圧痕付	二次火熱	III	1 a	
	83 -10	M- 20I	小鉢 底			(5.6)		LR縄文			上坪底 気味	二次火熱	III	1 a	
	-11	G- 15II	深鉢 底			7.5		RL縄文	不 明		無 文	平底	III	1 a	
	83 -12	L- 10II	小鉢 底			6.0		(不明)					III	1 a	
	83 -13	K- 12II	深鉢 底			7.4		(縄文)	不 明			二次火熱	III	1 a	
	83 -14	J- 15II	鉢 底			5.0		無文	入 念		上坪底 気味		III	2 b	

第93表 遺構外出土土器観察表(5)

単位 cm

調査 番号	図取 番号	発掘 地区 位	器形 現状	器高	口径	底径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群	類	
1	83-14	J-14II	小鉢 口縁					無文	横	外側貼瘤	波状口縁		III	2 a	
-2	83-15	J-15II	深鉢 口縁					無文	縦 横	小突起外側 3個1組瘤			III	2 a	
-3	83-16	J-16III	ミニ 胴体					無文	横				III	2 b	
-4	83-17	J-17II	台付鉢 台			(8.0)		無文	横				IV	2	
-5	83-18	K-9II K-10II	深鉢 口縁		(20.6)		(21.8)	無文	横 縦		外縁付 B器形		III	2 b	
-6	83-19	J-19III	壺 胴体					無文	横				III	2 b	
-7	83-20	J-20III	壺 口縁					無文	接合 痕有				III	2 b	
-8	83-21	J-21II	無須壺 胴体				(18.0)	無文	横				III	2 b	
9	83-22	L-8II	鉢 胴体					II-刻み目帯-赤色顔料	横				III	4 b	
-10	83-23	I-12II	壺 胴体					II-平行磨消縄文	横 不良		接合痕有		III	4 a	
-1	84-1	H-15II	壺 胴体				(12.2)	II-平行磨消縄文	横				III	4 a	
-2	84-2	I-12II	台付鉢 脚					II-平行磨消羽状縄文	横				III	4 e	
-3	84-3	I-12II	壺 胴体					II-平行磨消縄文	横 不良				III	4 a	
-4	84-4	H-13I	深鉢 胴体					II-平行磨消縄文(RL縄文)	横				III	4 a	
-5	84-5	I-12II	深鉢 口縁					I. IIa-平行磨消羽状縄文	横	平縁	A <sub>2</sub> かA <sub>3</sub> 器形		III	4 e	
-6	84-6	F-13II	深鉢 口縁		(18.0)			I. IIa-平行磨消羽状縄文	横 良好	縦そぎの 小突起付			III	4 e	
-7	84-7	I-12II	台付鉢 口縁					I. IIa-平行磨消羽状縄文	横	3個1組 縦割小突起付			III	4 e	
-8	84-8	J-14II	注壺 胴体					IIa-入組状磨消縄文(LR)	横		頸部貼瘤一周か		(十線内V相当)		
-9	84-9	K-9II	鉢 口縁		(18.0)			I. IIa-羊歯状文+LR擦糸文	横 縦研 磨	小突起付	内外縁付		IV	2	

第94表 遺構外出土土器観察表(6)

単位 cm

挿図 番号	図版 番号	発掘 位置	器形 現状	器 高	口 径	底 径	最大 径	外 面 施 文	内 面 調 整	そ の 他 の 特 徴			分 類		備 考
										口 唇 部	底 部	そ の 他	群 類	個 数	
154	84 -1	L- 8 II	浅鉢 口縁	7.0	(13.0)			I. IIa-羊歯状文帯+ II-2本1組の平行沈線	横				VI	2	
	84 -2	D- 29 I	鉢 胴体					IIa-羊歯状文	横 雫				VI	2	
	84 -3	M- 26 I	鉢 口縁		(12.8)			羊歯状文	横				VI	2	
	84 -4	L- 10 II	ミニ鉢 口縁		(5.8)			I. IIa-羊歯状文+平行沈線	研 磨	2個1組 小突起付			VI	2	二次火熱
	84 -5	M- 11 II	鉢 胴体					L.R燃糸文	横				VI	2	
	84 -6	L- 8 II	蓋 口縁		(11.2)			I. IIa-平行磨消縄文	横			精製品	VI	2	(器形の分類から)
	84 -7	L- 8 II	深鉢 口縁		(21.2)			I. IIa-無文(横、みかき)	横	縦割小突起			VI	2	(器形の分類から)
	-22 1 -26	J- 14 II	香炉 口縁					沈線文	貼 瘤				III	3 b	(挿図なし)

土器の文様と部位

馬場瀬(2)遺跡の第 Ⅰ層から出土した土器は、本書における第 Ⅰ群及び第 Ⅱ群土器に相当するが、資料として用いることのできる土器は多くない。また、第 Ⅲ群土器については、馬場瀬(1)遺跡で述べてある。ここでは、本遺跡の特色を指摘することにとどめたい。

出土した土器を施文文様別に大きく区分すると、縄文を地文とする類、無文の類、地文以外の文様を施文した類に大別できる。これらをそれぞれA、B、C類とすると、縄文を地文とするA類が圧倒的に多く、91.8% (2791点)を占める。ついで無文のB類が、4.8% (147点)、C類が、3.4% (102点)の順となる。A類は第 Ⅰ群1類と第 Ⅱ群3類、B類は第 Ⅰ群2類、C類は第 Ⅰ群3、4類及び第 Ⅱ群2類に相当する。第 Ⅲ群4類に分類した土器(第174図8)は十腰内第 Ⅲ群土器の可能性もある。貼瘤の数が本遺跡の第 Ⅲ群土器よりも多いことを指摘できる。また、第 Ⅰ群1類(三叉文)土器が出土していないことも注目される。

縄文を地文とする土器の器形は、深鉢形を呈する類が多い。縄文を地文とする土器は、精製土器と粗製土器との分け方からすれば、後者に属し、それらの土器は、その文様だけによって後期後半の土器であるか晩期の粗製土器であるか、破片から判断することは難しいが、土器組成を粗製土器と精製土器に区分した場合の、一応の比率を知る目安にすることができよう。

土器の文様についての分類で、縄文時代後期後半から晩期初頭にかけての粗製土器、特に深

鉢形土器外面施文には、多分にユニークなものが認められる(第168~170図、第 群1類 a~e)。このような施文例からすれば粗製土器の文様区分は、一部の文様をもって全体の文様を推定することはできないようになるので、その点を充分考慮したいものである。また、第168図5、第171図7のように施文原体の異なる文様が同一個体で使用していることは、土器の製作工程の時間差と関係があることを示しているのかも知れない。

次に、出土土器の残存部位の数量を区分してみると(第88表参照)、口縁部221点(7.3%)、胴体部2,781点(91.5%)、底部38点(1.2%)の数値が得られた。胴体部の破片数が多いことは、粗製深鉢形土器の器形が大型で、器面が広く、精製土器に比較して破片が多くなる率が高いことと、消耗率が高いことがあいまって、このような結果を示しているものと考えられる。底部の数量が極めて少ないことを示しているが、一般的には底部のつくり方が一塊の粘土によって成形されるため、粘土の継ぎ目がなく、破損率が低くなっているものと考えられている。

#### 成形、胎土、焼成、色調、器形

第 層から出土した土器は、破片であるため、破片の剥離状態から胎土の接合方法、成形方法を知ることが容易である。土器の成形は、器形の大小によって異なっている。極小型のミニチュア形は、手づくねであるが、その他の器形は巻き上げを多用し、仕上げ用の化粧土を上塗りして器面を調整した部分も認められる。

粘土紐の継ぎ方は、第 群土器と第 群土器の間に特に差異は認められない。

器形の成形に関連して、土器の厚さは何cm以上が厚手で、何cm以下が薄手という基準はないが、便宜上ここでは、1cmを基準として以下を薄手、以上を区分すれば、全体的には薄手、特に4~6mmのものが多い、晩期の精製土器(第175図1など)にあっては、4mm以下の類も認められる。

縄文時代後期後半から晩期のものの胎土は、器形によって若干混入物の量が異なっているようで、これは、土器文化圏が同じであれば、ほぼ共通的な傾向として理解されている。第 層

出土の土器には、特に植物性の繊維を混入した土器は認められないが、器形によって石英、輝石、浮石粒などを自然のまま、あるいは磨り碎いて微細化したような砂、小礫を肉眼で観察できるくらい多く混入した土器と、ほとんど目立たない程度の微細な鉱物組成のみの胎土とが認められる。今のところ、このような混入物が粘土のような可塑性物の中に、何%含まれていると多量なのか、何らの基準はなく、観察者の経験則によって混入物が少ない、多いなどが判断されている。本遺跡では、(馬場瀬1遺跡ではとりあげなかったが、)一般に混入物が多い土器は深鉢形で、比較的目立たないくらいの混入あるいは、ほとんど認められない土器の器種は注口土器、香炉形、台付形、浅鉢形などの精製土器である。これは、土器の用途 器形の分化 器形別によって混合物を入れる度合が、経験的に会得されていたようである。胎土を選別する傾向は、縄文晩期の精製土器と粗製土器を対比すると、一目瞭然である。



土器には、焼き斑の残っている類が、器形の大小にかかわらず認められた。器面に黒褐色あるいは、黒色を残している類や、器壁の芯が内外面の焼色と異なり、黒色気味を呈する類は、焼成時の条件が影響しているものと考えられている。また、破損後に二次的火熱を受けた土器は同一個体のものであっても、変色していることは無論のことであるが、使用時よりも器面が堅緻になった破片と、逆にもろく変化した土器が認められる。

土器の色調は、本来焼成後、使用開始前、使用中（火熱を受ける）、使用不能（破損）、廃棄後の火熱などによって変化しているものと考えられる。第 Ⅰ 層出土の土器の色調は、内外面共に同一の色調を呈する類は、内外面共異色の類よりも少ない傾向が認められる。また、同一個体の土器であっても、部位、内外面によっても色調を異にする類が多数を占めている。土器の色調については、新版標準土色帖（小山・竹原、1973）を参考にしたが、これだけでは土器の色調と一致する色を選出できない場合も認められた。個々の土器の色調については、第 Ⅰ 層出土土器観察表に記載しなかったが、客観的で明確に表現できる方法が開発されることを期待したい。

第 Ⅰ 層出土の土器は、すべて破片であるため、器形の全体を確認できる資料は極めて少ないが、深鉢形、鉢形、小鉢形、浅鉢形、無頸壺形、台付形、長頸壺形、片口形、香炉形、ミニチュア形（袖珍形）などが認められた。器形の分類は、破片からの推定であるが、縄文時代後期の土器の器形は、単独破片から推定することは多分に誤認のおそれがある。特に注口土器、鉢形土器、無頸壺などは、その器形を決定する部分の破片を確認できない限り断定することは難しい。上記のように器形の種類は、分類できても図示できる土器の数は少なく、器形自体の分類ができる器形も限定される。

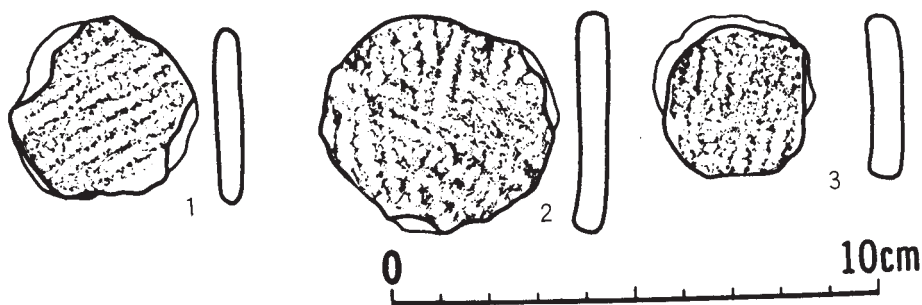
器形別の個体数は、深鉢形61個体以上、鉢形15個体、小鉢形3個体、浅鉢形2個体、無頸壺（有孔）形2個体、台付形1個体、壺形4個体、片口形2個体、香炉形、ミニチュア形3個体、器形不詳74個体以上で、確実な注口土器は認められない。（北林）

#### Ⅰ 土製品（第176図、図版84 - 17～19）

土製品は、土器片の周囲を打ち欠いて、円盤状に作りあげたものだけが3点である。

第176図1は、M - 20グリッドの表土から出土したもので、最大径3.8cm、厚さ0.6cm、重さ10.7gである。縄文時代後期の粗製土器とみられる胴体部片を利用してつくった有文もので、橙色の色調をもっている。

第176図2は、L - 10グリッド第 Ⅰ 層から出土したもので、最大径4.8cm、厚さ0.6cm、重さ17.5gである。縄文時代後期の粒製土器胴体部片でつくられ、内外両面が明灰褐色、器壁内が黒褐色を呈する。



第176図 土製品実測図

第176図3は、M - 20グリッドの表土から出土した。最大径3.5cm、厚さ0.7cm、重さ9.0gである。焼成はよく、橙色を呈する。縄文後期の粗製土器胴体部片を利用したものである。土器胴体部片を打ち欠いて円盤状につくりあげた土製品は、主として縄文後期初頭から晩期にかけての出土例が多い。しかし、底部片を利用した例は、まだ知られていないようで、胴体部片の湾曲（そり）が、この土製品の用途を暗示しているのではないかとと思われる。また、中央に小孔を設けた例（貝島貝塚：1971、草間、金子編）三角形に打ち欠いた例（杉の沢遺跡 県埋文45集：1979）もある。土器片の利用ではなく、その用途に合わせて特に製作された小円盤の例（貝島貝塚）もあるが、出土数量からすれば、土器片利用の円盤状土製品が多いようである。

（北林）

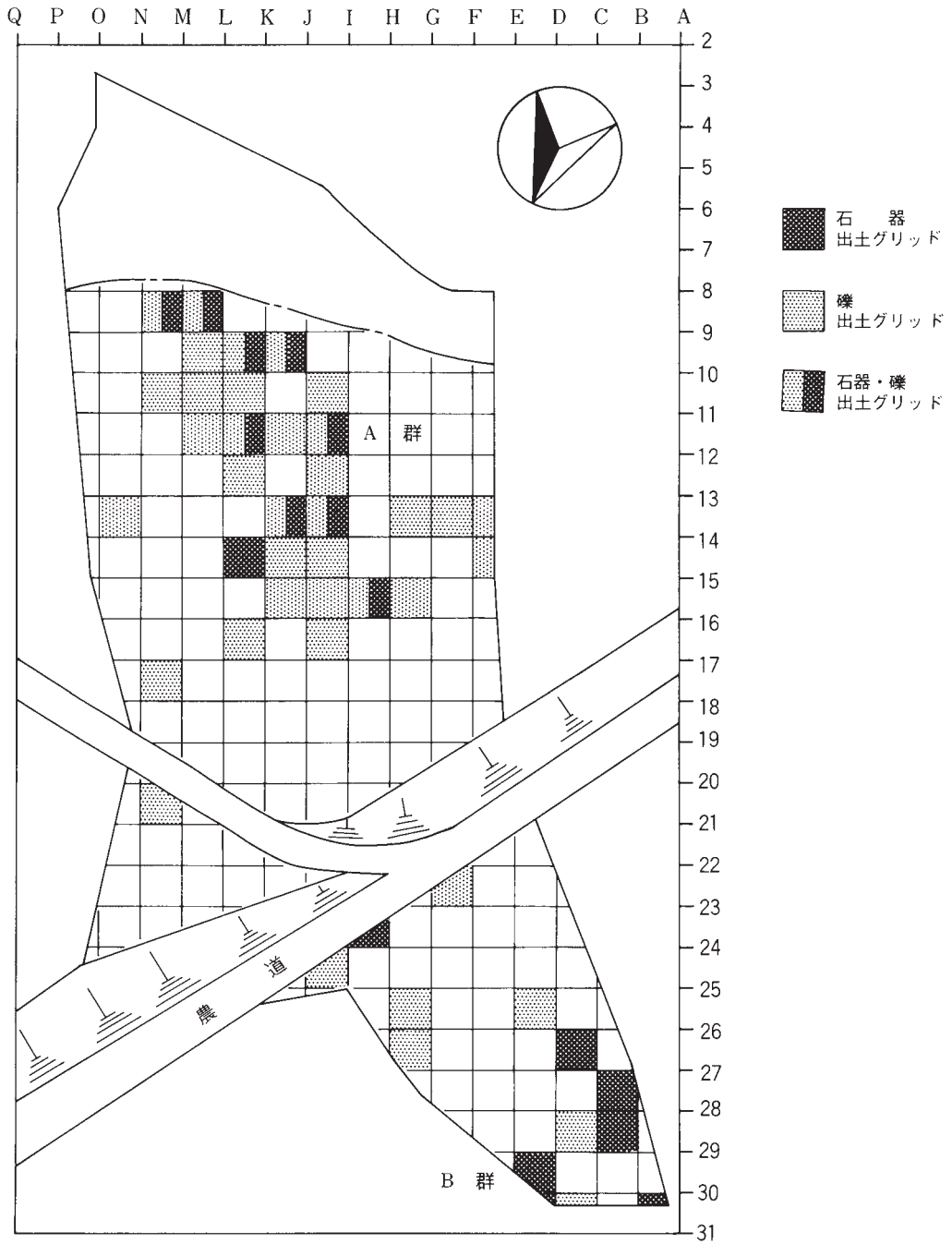
### ウ 石器・礫

馬場瀬(1)遺跡の分類表に従い、次のように表記する。

第95表 石器・礫分類表

石 器	I 磨製石器	A 磨製石斧	1
		A 尖頭器	5
	II 剥片石器	B 石匙	2
		E R-フリイク	1
		剥片	2
	剥片石器の素材	原材	2
		III 礫石器	A すり石
	B 特殊すり石	2	
礫			96

石器・礫とも、傾斜面に沿うように、調査区北西から南東にかけて分布しており、縄文時代後晩期の所産とみられる（第177図）。



第177図 石器、礫分布図

- A 磨製石斧 (第179図1)

- 13グリッドから欠損品1点が出土している。基部半ばで折損しており、両刃、斜交する線状痕、やや扁刃であること等により、縦斧として使用されたものである。

第96表 磨製石斧計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第179図1	I-13・II	(48)	(55)	(27)	(100)	ホルンフェルス	基部欠損、やや扁刃

- A 尖頭器 (第179図2~6)

5点出土したが、完形品は3点である。欠損品は、いずれも尖頭部先端及び基部の一端を若干欠くものである。形態的には、a 有柄のもの(第179図4~6)、b 無柄-平基のもの(第179図2・3)に分けられ、有柄のものはすべて完形品である。

第97表 尖頭器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第179図2	I-11・II	(29)	(14)	3	(1.3)	珪質頁岩	先端・基部欠損、無柄-平基
2	第179図3	"・"	(34)	(11)	4	(1.2)	"	"
3	第179図4	B-27・	25	16	5	0.8	"	完形、有柄
4	第179図6	B-28・	42	16	8	4.3	"	"
5	第179図5	A-30・	33	16	7	2.8	"	"

- B 石匙 (第179図7・8)

いわゆる横形の完形品1点と、縦形の欠損品1点が出土した。

第98表 石匙計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第179図7	I-11・II	31	51	7	9.2	珪質頁岩	完形、作業角=68° 横形
2	第179図8	H-15・	(19)	(17)	(5)	(1.4)	"	刃部欠損 縦形

- E R-フレイク (第179図9)

D-30グリッドから1点出土した。全体に小型の筧状を呈しているが、調整剥離は周縁部に限られている。

第99表 R-フレイク計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第179図9	D-30・	29	18	5	2.9	珪質頁岩	作業角=27°、28°、18°

剥片石器の素材

剥片2点、原材2点が出土しただけである。

- A すり石 (第180図10~14)

表採品も含め、9点出土した。完形品は6点であるが、そのうち3点は、L-8グリッドの集石を構成するものである。

第100表 すり石計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第180図12	L-8・II	145	75	35	540	砂岩	完形、使用痕は、y <sub>2</sub>
2	第180図11	"・"	142	65	44	541	"	完形、使用痕は、y <sub>2</sub>
3	第180図10	"・"	138	74	34	420	安山岩	完形、使用痕は、x <sub>1</sub> 、y <sub>1</sub> 、y <sub>2</sub>
4	—	M-8・表土	(98)	(62)	(59)	(430)	砂岩	一端欠損、使用痕は、y <sub>1</sub>
5	第180図14	J-9・II	(89)	76	46	(390)	安山岩	一端欠損、使用痕は、x <sub>1</sub> 、x <sub>2</sub> 、y <sub>1</sub> 、y <sub>2</sub>
6	—	"・"	111	55	34	230	"	完形、使用痕は、y <sub>1</sub> 、y <sub>2</sub>
7	—	S-14・"	105	75	58	500	"	完形、使用痕は、x <sub>1</sub> 、y <sub>2</sub>
8	—	C-26・—	160	82	32	600	砂岩	完形、使用痕は、y <sub>1</sub> 、y <sub>2</sub>
9	第180図13	表採・	(118)	(47)	(24)	(190)	千枚岩	一端欠損、使用痕は、y <sub>1</sub>

- B 特殊すり石 (第180図15・16)

完形品1点、欠損品1点が出土した。第180図16は、「すり面」を2面もち、いずれも剥落痕を伴っている。第180図15は、一端を欠いているが、他端に敲打痕がみられ、剥落痕を伴わない「すり面」をもっている。

第101表 特殊すり石計測表

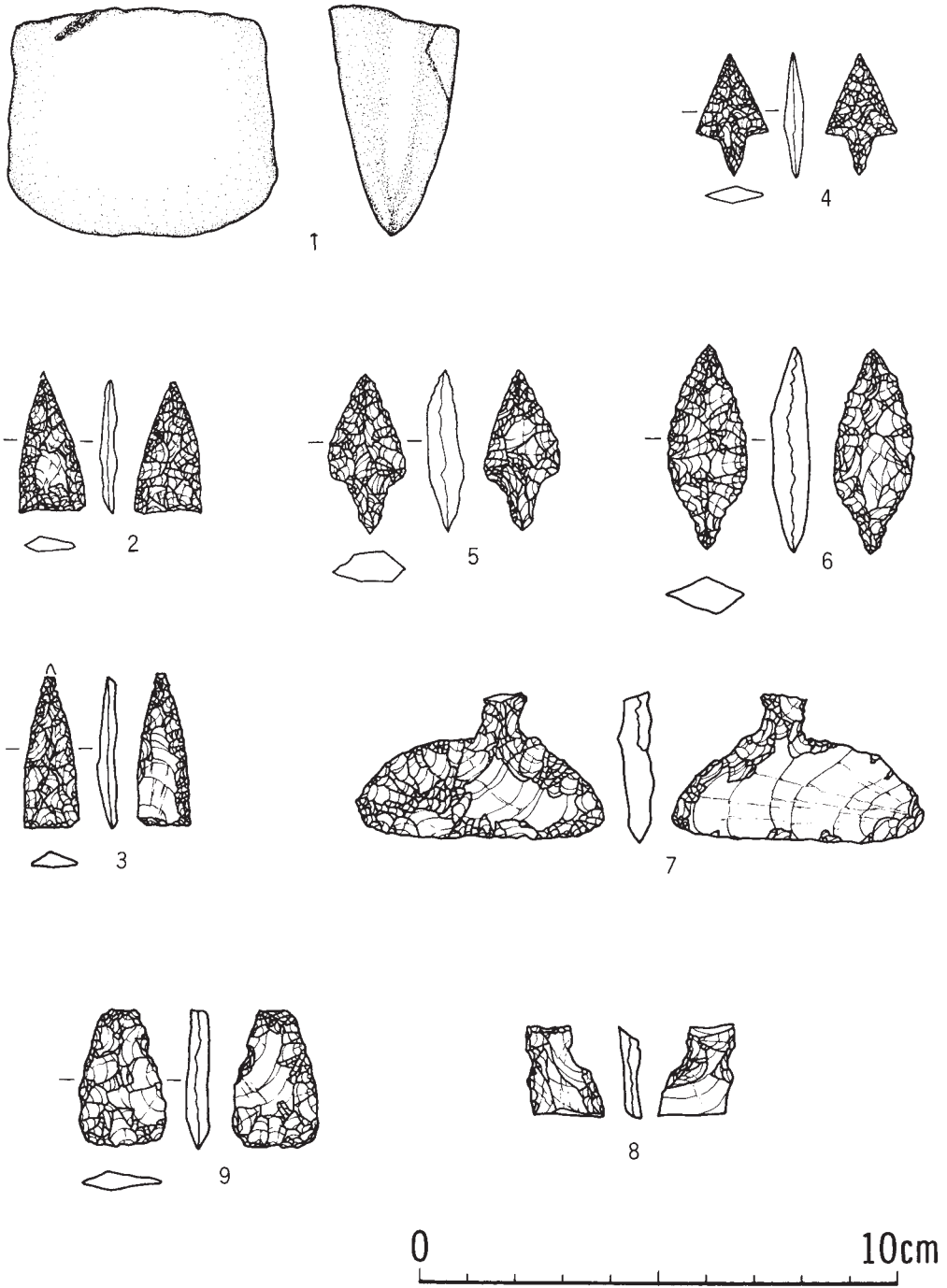
No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石種	備考
1	第180図15	K-14・II	(147)	78	(49)	(740)	安山岩	一端欠損、他端に敲打痕
2	第180図16	H-23・	174	77	65	1,202	砂岩	完形、すり面が2面

礫

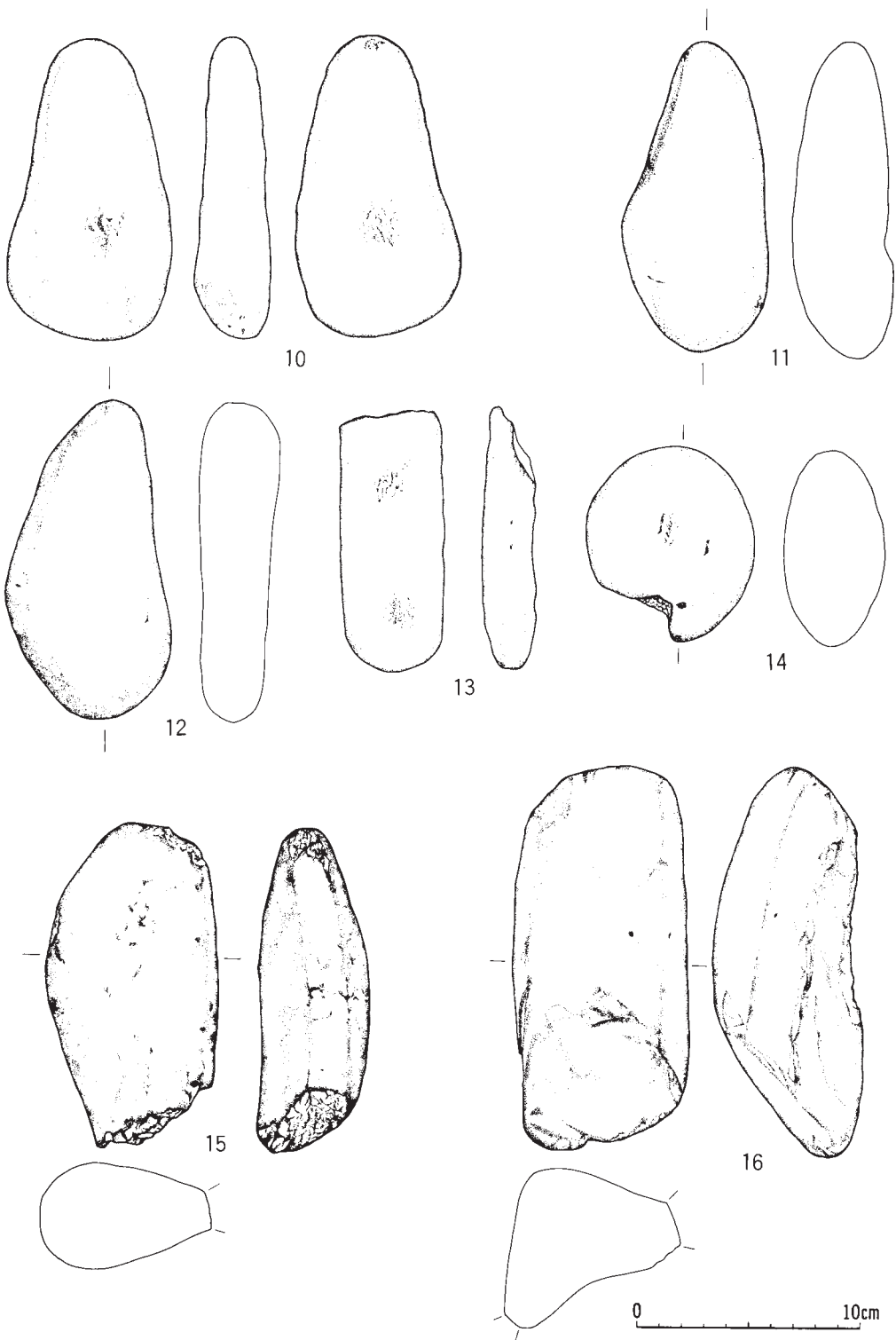
96点出土したが、馬場瀬1遺跡の同時期のもとは異なり、安山岩がほとんどである(第178図)。また、火を受けたものも少数例あるだけである。(工藤大・奈良清隆)



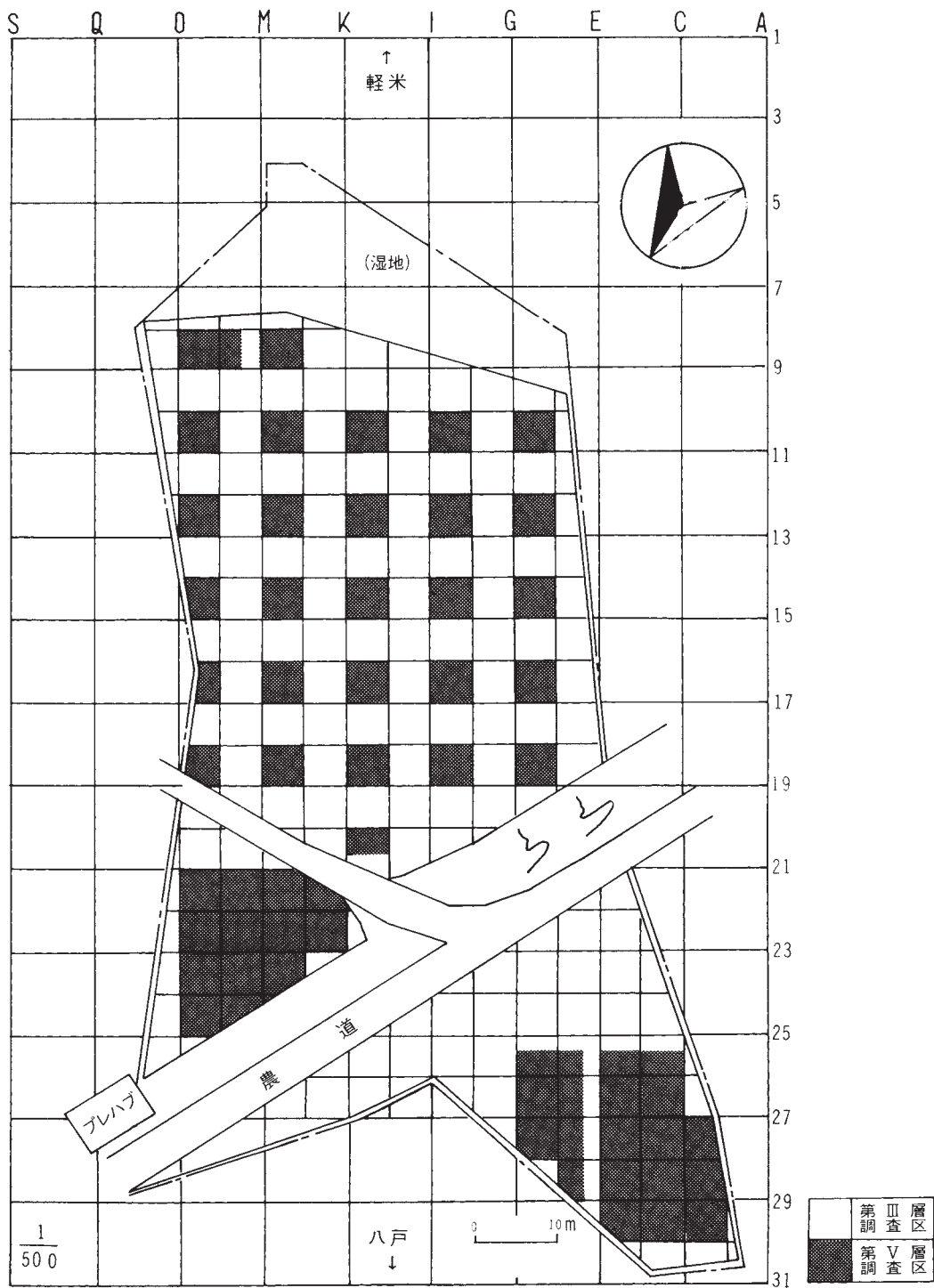
第178図 礫構成比



第179图 石器实测图(1)

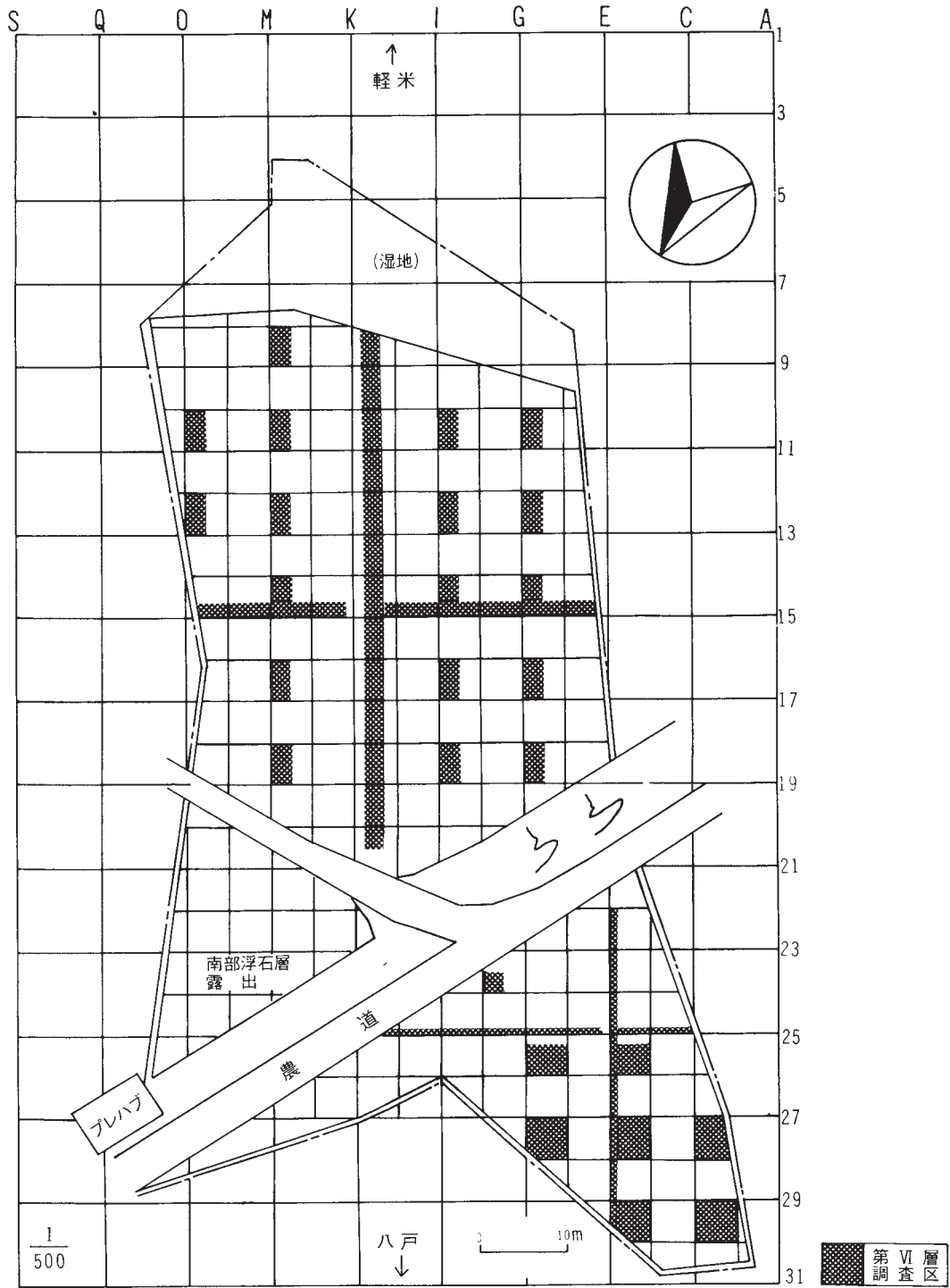


第180图 石器实测图 (2)



第181図 第Ⅲ～Ⅴ層発掘区配置図





第182図 第 層発掘区配置図

## 4 第 ~ 層の調査

### (1) 遺構、遺物の分布

第 層の調査は、第 層中掘浮石層上面までを目安とした。第 層上面までの調査は約4,000㎡で、遺構、遺物の分布は前述のとおりである(第181図スクリーン・トーン白抜き部分)。

第 層(南部浮石層上面)までの調査は(第181図のスクリーン・トーン部分)延1,320㎡について実施した。

検出した遺構は、第 層下部から掘り込まれたフラスコ状土壌2基で(第162図参照)調査地区の北西に位置するD-27及びD-28グリッドに分布している。第 層出土の土器は1個体(第162図参照)で、調査地区の南東端に位置するM-8とN-8グリッドに分布していた。この付近は水位が高く、湧水と労働災害防止のため、調査できないグリッドがあった。

第 層(南部浮石層)から第 層(八戸火山灰層上位面)までは、約580㎡(第183図)を調査した。遺構は確認できなかったが、N-12グリッド第 層中から尖底土器片が出土した。隣接地区にも遺物が包含されている可能性はあるが、調査対象地区外のため拡張できなかった。

(北林)

### (2) 検出遺構

#### フラスコ状土壌

第 層の調査で検出した遺構は、第5、6号遺構と称したフラスコ状土壌2基である。

#### 第5号遺構 (第183図、図版77)

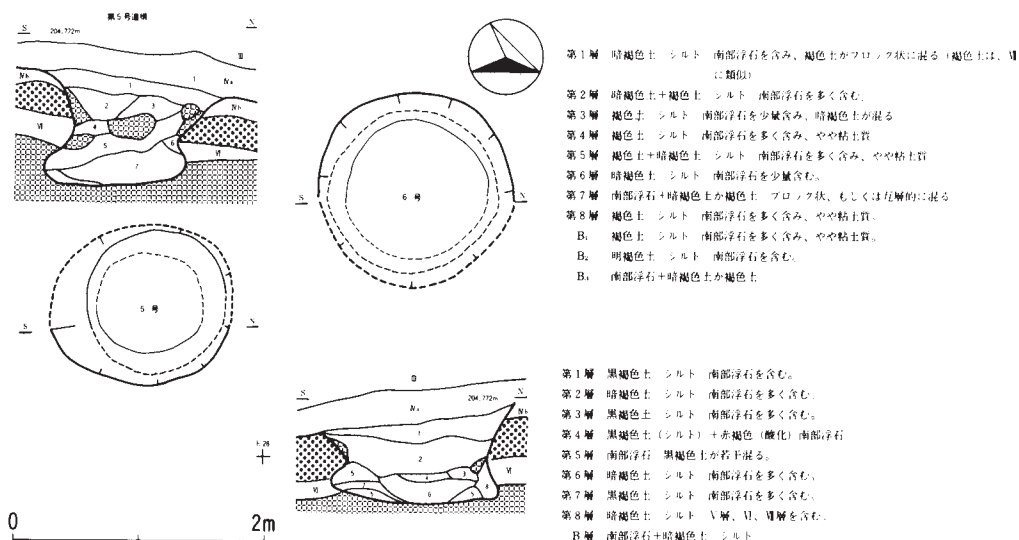
本遺構は、調査対象地区の北西部に設けた南北基本層序実測用溝掘りの際、D-27グリッド北隅付近で検出した。第 a層下部、第 b層から掘り込まれた遺構で、壙底面は、第 層に達している。第6号遺構と近接しているが、重複関係は認められない。

平面プランは、やや歪んだ円形を呈し、開口部径1.42m×1.25m、最小壙径0.81m、壙底部径1.12m、確認面からの深さ0.92mの規模である。遺構の覆土は8層に区分できた。

遺物の出土は全くない。遺構の年代決定資料は、遺構の掘り込み土層によるものと考えられる。

#### 第6号遺構 (第183図、図版78)

本遺構は、第5号遺構の北側に隣接したD-28グリッドから、南北基本層序実測用溝掘りの際、第 a層下部で落ち込みを確認し、検出した。基本層序の第 a層の下部、第 b層から掘り込まれたもので、壙底面は、第 層に達している。平面プランは、円形で、開口部径1.55m、最小壙径1.14m、壙底部径1.35m、確認面からの深さ0.78mの規模である。遺構の覆土は、8層に大別できた。



第183図 第5、6号フラスコ状土坑実測図

遺物は、全く出土しないため、年代決定は、遺構掘り込み面が鍵層となる。（北林）

### (3) 出土遺物

第層から第層までの調査で出土した遺物は、縄文土器2個体である。土器については一括記載する。

#### 土器

##### 第層の土器（図版84 - 20）

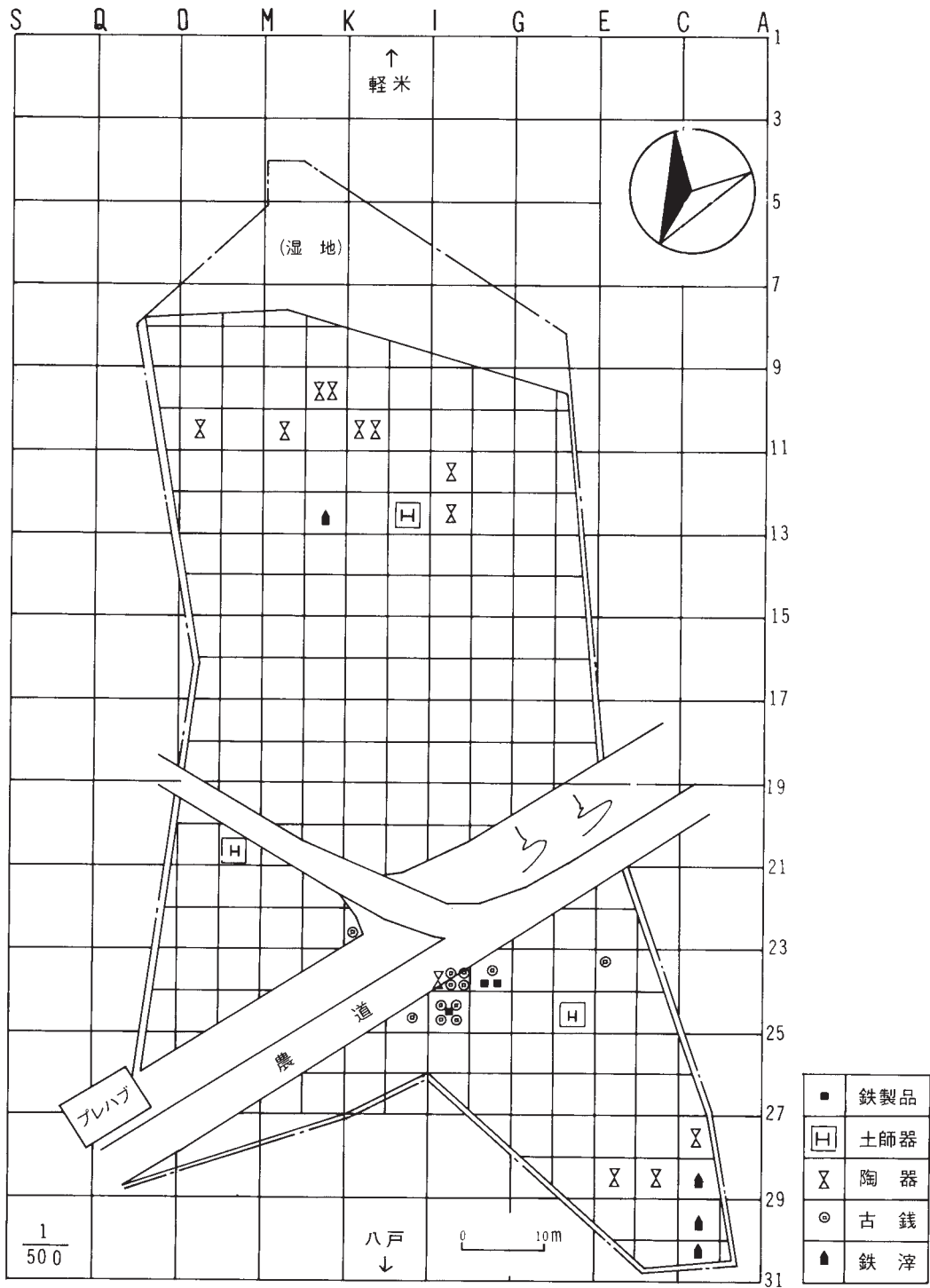
第層の土器（第184図1）は、M - 8、N - 8グリッドから出土した。第層出土の土器は、この1個体だけである。器形は、口縁部がやや開いた円筒状深鉢形を呈するものとみられるが、口縁部と底部を欠失している。現存の器高32cm、推定口径28~29cm。外面の文様は、胴体部上半と下半で異なっている。上半の文様は、RL多条とLR多条を交差させたものであるが、胴体部下半には、RLの縄文原体を斜位にして回転させた文様がみられる。胎土には、植物性繊維と、石英、長石、浮石粒などの砂粒が多量に混入されている。焼成は、非常に堅緻である。外面の上半は異褐色、下半は暗褐色であるが、内面は黒褐色と灰褐色を呈する。土器の型式名は、不詳であるが、本書の第群2類土器に分類される。内面調整は、横位が多く、砂粒が浮き出ている。



第184図 第四、V層出土土器実測図

**第 層の土器** (図版84 - 21)

第184図2 第 層の土器(第184図2)は、N-12グリッドから1点出土した。5.5cm×3.4cmの小破片であるため、器形は推測の域を出ないが、尖底土器とみられる。器厚は、0.8~1.0cm内外面共文様を欠いているが、外面には、研磨痕が残っている。内面の調整面は、既に剥離して器面がざらざらしている。胎土は、粘りの少ないものを使用し、混入物は通常のものより粒が細かく、胎土全体の粒子は、緻密性を欠いている。焼成は、すこぶる堅緻である。外面の焼成は褐色、内面は黒褐色を呈する。第 群1類に分類される土器である。(北林)



第185図 歴史時代遺物分布模式図

## 5 歴史時代の遺物

本項における歴史時代とは、平安時代、江戸時代（～現代）を対象としている。

歴史時代の遺物は、第185図のように分布し、第 Ⅰ 層及び再堆積土層から出土した。

出土した遺物は、土師器 3、須恵器 1、鉄製品 3、鉄滓 4、古銭20、土製品 1 であるが、古銭以外はすべて破片である。 (北林)

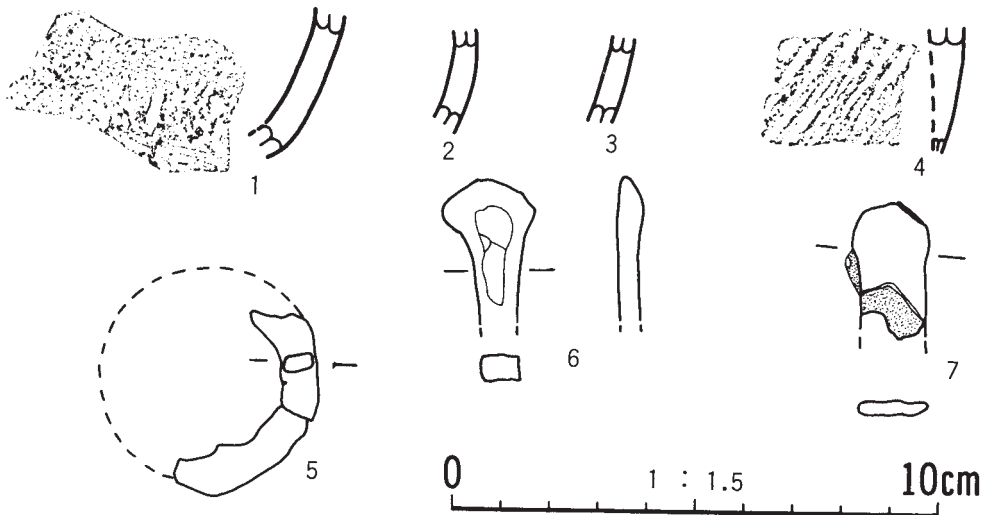
### (1) 土師器、須恵器 (第186図、図版86 - 1 ~ 4)

第186図 1 は、土師器で E - 12グリッドの第 Ⅰ 層から出土した。回転系切底の内黒処理を施した坏形土師器である。ロク口から切り離した後、調整を加えている。外面が明赤褐色、内面が黒色を呈しており、焼成は堅緻である。

第186図 2 は、E - 24グリッドの第 Ⅰ 層から出土した。甕形胴体部の小破片で、器厚は0.5 ~ 0.6 cm、ロク口製ではない。胎土には小礫、砂の混入が多少みられ、二次的な火熱を受け赤変している。

第186図 3 は、M - 20グリッドの第 Ⅰ 層から出土した。第186図 2 と同様、整形胴体部の小破片で、器厚は0.5cm、外面は、ヘラケズリ後、ナデを加え、内面にはヨコナデが認められる。胎土、焼成ともに良く、焼色は両面ともに橙色を呈する。これらの土師器は、平安時代後葉期のものとみられる。

須恵器は、F - 9グリッド第 Ⅰ 層から 1 片だけ出土した。大型甕形胴体部の破片で、外面に叩き締め痕がみられる (第186図 4) が、内面は剥離している。色調は灰白色で、器内壁がやや橙色を示している。二次的の火熱を受けた破片である。 (北林)



第186図 土師器・須恵器・鉄製品実測図

## (2) 鉄製品 (第186図、図版87-5、6)

鉄製品は3点で、農道付近のグリッドから出土したものである。第186図5は、H-24グリッドから出土した。径4cm、幅0.6cm、厚さ0.2cmのリング状の鉄製品である。

第186図6、7は、G-23グリッドから出土したもので、第186図6は、“楔”か釘のような鉄製品の基部片である。第186図7は、厚さ0.2cmほどの板状の鉄片である。これらの鉄製品は、用途、種類は不詳であるが、農道の造成再堆積土から出土したことから推測すれば、藩政(江戸)時代の製品ではないかとも考えられる。(北林)

## (3) 鉄滓 (図版87-1~4)

鉄滓は、第1層から4点出土したが、出土グリッドは、図版87-1がK-13、図版87-2がB-28、図版87-3がB-29、図版87-4がB-30である。いずれも鉄分が残留した未溶解の製鉄(たたら)滓である。重量は、図版87-1が15.5g、図版87-2が19.5g、図版87-3が14.0g、図版87-4が44.9gである。製鉄関係の遺物、遺構は確認できないが、八戸市から本遺跡までの間に、鍛冶畑という部落名があるので、関連性があるのか、また、鉄滓の年代比定は、これ自体からは推測できかねる。(北林)

## (4) 古銭

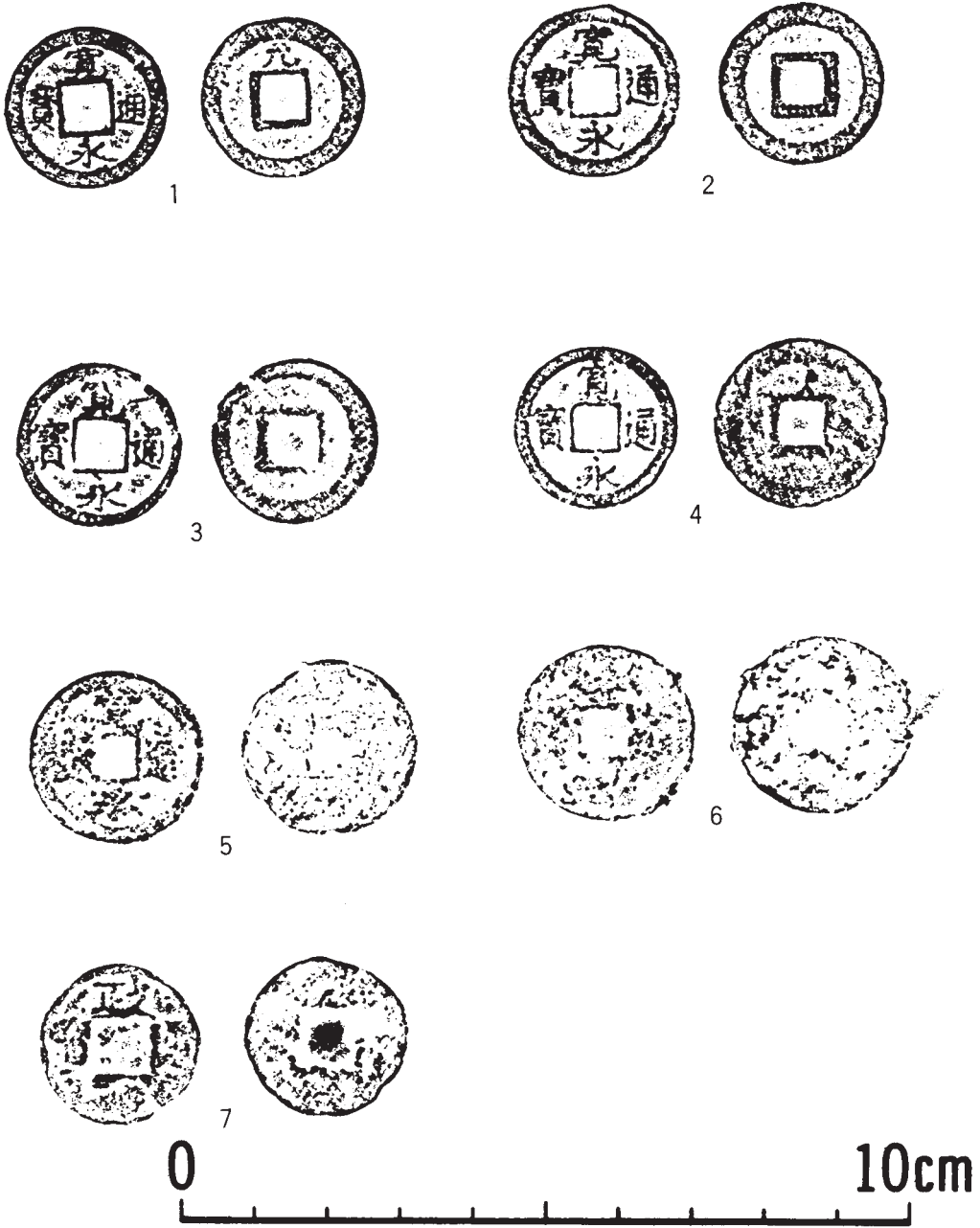
20点出土(第187図、第102表、図版87-7~15)した。ここでは、馬場瀬(1)遺跡の北側畑地から採集した1点を加えて観察表で示す。出土グリッドは第185図のように、農道の北西側に集中している傾向が認められる。出土土層は、現表土(耕作土)下の再堆積土層である。

何ら遺構らしい形跡は検出できなかったが、古銭が出土した12箇所中の6箇所では2~3枚の銭貨が錆で融着し合った状況で出土した点が注目される。

判読できる銭貨名(面文)は、政和通宝1、寛永通宝6(馬場瀬(1)採集を除く)の7枚であるが、いずれも銅製の銭貨である。銭貨名の不明なものは、すべて鉄銭である。寛永通宝は、鉄製の一文銭も鑄造されていたことが知られている(青山 1972)。

政和通宝は、磨滅しているが、北宋銭で、初鑄年が1111年である。寛永通宝は、江戸時代の寛永3年(1626)に水戸の商人佐藤新助が、最初の許可を得て鑄造したのに始まり、以後明治初期まで250余年にわたって全国に通用した法定貨である。背文-元-をもつもの1枚、(第187図)残りは無背である。表採品を含めた寛永通宝7枚中、“ス”宝が2枚(第187図4、1、図版87-8、11)“ハ”宝が4枚(第187図2、3、6、図版87-9、10、13、15)認められる。また、法量については、個体ごとに多少の差がある。

政和通宝の出土例は、函館市志海苔(函館市博物館：1970)青森県藤崎、柏木、乳井、猿賀(工藤：1961、1968)脇野沢(奈良：1972)などで多量に、また、浪岡城跡(浪岡町教委：1980)から1枚、尻八館跡(青森県立郷土館、岩本：1980)から3枚、などの出土例がある。



第187図 古銭拓影図



寛永通宝の発見例は前記のところ以外に、県教育委員会の調査では、平賀町富山遺跡（県埋文21集：1975）から2枚、同町鳥海山遺跡（県埋文32集：1977）1枚、浪岡町杉の沢遺跡（県埋文45集：1979）7枚、階上町志民<sup>はしかみ</sup>(2)<sup>したみ</sup>遺跡（県埋文65集：1981）16～17枚、などの出土例が知られている。志民(2)遺跡では、墓壙内から3枚一緒の出土例がある。また、杉の沢遺跡では、江戸時代以降のお堂跡から、さい銭のようにまとまった状況で出土した例がある。（北林）

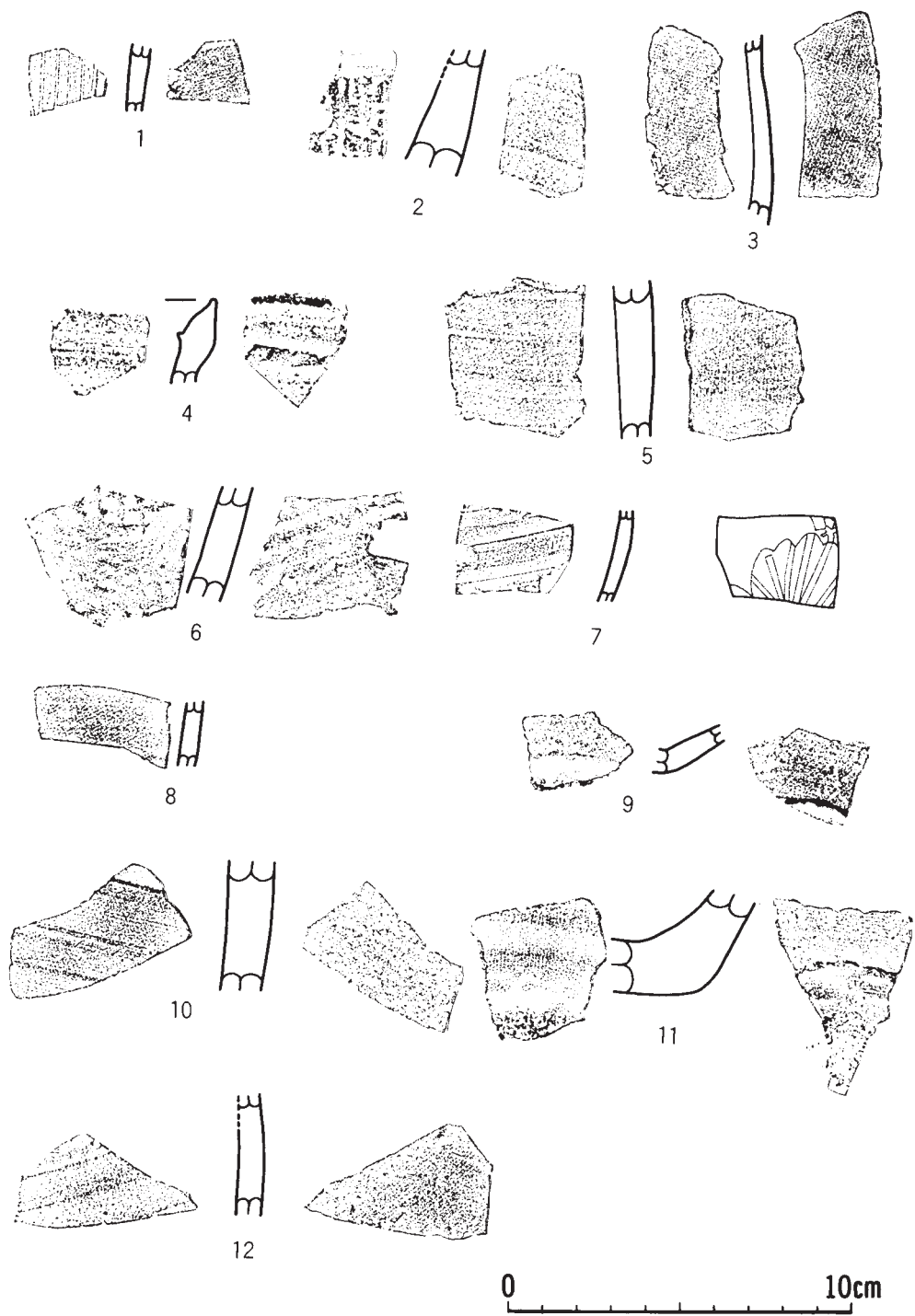
第102表 古 銭 観 察 表

挿図 番号	図版 番号	アリス 名	銭貨名(面文)	背文	使用 金属	単 枚	銭径(mm)	輪幅(mm)	孔径(mm)	銭厚(mm)	重さ(g)	備 考
187 -1	81 -8	表 採	寛永通宝	元	銅	1	22×22.5	2.0	6.5	0.6	2.20	鉄錆付着、「ス」宝、馬場瀬1採集
-2	-9	D-23	寛永通宝	無	銅	1	23	2.0	6.5×6.0	0.9	2.45	「ハ」宝
		G-23	不明、破損		鉄	1						
-3	-10	H-23	寛永通宝	無	銅	1	23	1.5	6.5	0.5	1.90	「ハ」宝
		H-23	不明、破損		鉄	2						
-4	-11	H-23	寛永通宝	無	銅	2	23.5	2.0	5.0	0.8~1.0	3.25	「ス」宝
-5	-12	H-23	寛永通宝	無	銅	2	24.5		6.5×6.0	0.8	3.30	187図4と融着
-6	-13	H-23	寛永通宝	無	銅	3	24			1.0		他の2枚は鉄銭破損、「ハ」宝
		H-24	寛永通宝	無	銅	3	23		5.5			他の2枚は鉄銭破損
		H-24	不明、破損		鉄	3						3枚共破損
	-7	H-24	不明、破損		鉄	2	23				3.30	2枚のうち1枚破損
	-15	H-24	寛永通宝	無	銅	1	23×22	2.0	5.5	1.0	2.30	「ハ」宝
-7	-14	J-22	政和通宝	無	銅	1	22	1.0	7.5×7.0	0.5	0.90	北宋銭、初铸年1111年

### (5) 陶 器

第 層から12片出土した。出土グリッドの分布は、第185図のように調査地区の南端寄りと北端寄りに二分されるが、特に集中的に出土したグリッドは認められない。

藤沼邦彦氏の御教示によると、これらの陶器は、近世以降の年代が認められる、とのことである。また、佐々木達夫氏から第188図4、9は、江戸時代若しくはそれより古いと御教示をいただいた。（北林）



第188图 陶器实测拓影图

第103表 陶器観察表

挿図番号	図版番号	グリッド名	層位	器形	部位	特徴	時代
188 図 1	86-6	B-27	I	すり鉢	胴体部	内外共に鉄色。筋目浅く、幅3~4ミリ。全体的に薄い。	近世以降
2	7	C-28	I	"	胴下半	筋目に自然釉が付着、胎土は粗い。	"
3	8	D-28	I	鉢	胴体部	灰白色の釉が内外に厚くみられる。	"
4	9	H-11	II	すり鉢	口縁部	鉄釉に近い色調で、やや明るい色、胎土に細礫が混り多孔質。	(近世、以前か)
5	10	H-12	II	鉢	胴体部	外が鉄釉色、内が薄い鉄釉の横縞文様	近世以降
6	11	H-23	I	甕	胴体部	胎土は練瓦色、内外に叩き痕と鉄釉。	"
7	12	J-10	II	徳利	胴体部	内外無釉、外面薄青白色地に青色の花模様。	"
8	13	J-10	II	鉢	胴体部	内外に厚い鉄釉色の釉がかかっている。	"
9	14	K-9	I	皿	胴下・底	褐色の胎土に内外共に薄緑色(久慈焼、相馬焼の色)の釉。	(近世、以前か)
10	15	K-9	II	甕	胴体部	内外共鉄釉色。胎土は濃い灰色。	近世以降
11	16	L-10	II	同上	底部	同上のほか、底部に砂粒が付着している。	"
12	17	N-10	II	甕	胴体部	内外共鉄釉色。胎土は濃い灰色。	"

(6) 土製品 (図版86-5)

N-10グリッドの第層から1点出土した。仏像の顔面、眼から顎にかけての小破片であるが、恐らく江戸時代以降に、粘土を型において抜き、焼き上げた土製品で、仏像は、“大黒様”とみられる。胎土には、砂などの混入がみられず、焼成は堅緻で、暗赤褐色~にぶい橙色を呈している。中空か否かは不明である。江戸時代以降の型抜きの土製品である泥面子、鳩笛は、黒石市高館(県埋文40集:1978)、鳥海山(県埋文32集:1977)、碓ヶ関村古館(県埋文54集:1980)遺跡から出土し、その用途は、子供達の玩具であったようであるが、仏像はいかなる用途をもっていたのであろう。土製仏像の出土例は、八戸市長者森遺跡(県埋文センター1981年の調査)がある。土製仏像の年代は、恐らく近世以降のものと考えられる。(北林)

## 6 まとめ

以上が本調査の概要であるが、本遺跡も、調査対象地外に広がりをもっていることは、検出した遺構及び遺物によって裏付けられる。この調査によって得た成果の一端を列挙して本報告書のまとめとしたい。

遺跡の立地と遺跡の基本層序は、すでに馬場瀬(1)遺跡において述べてあるので省略する。

### 調査の成果

#### (1) 検出遺構

溝状ピット1基、フラスコ状土壌2基である。これらの遺構からの出土遺物がないため、遺物による遺構の年代決定はできない。遺構確認面、遺構掘り込み土層が異なっていることから溝状ピットとフラスコ状土壌の構築時期に、年代差が存在したことは明白である。前者は、第 層上面の中掘浮石層で確認され、その土層(第 、 層)からは縄文時代後期後半、晩期初頭以降の遺物が出土した。また、後者は、隣接地域の馬場瀬(1)遺跡の検出例からすれば、比較的規模が小さい。この土壌は、第 b層から掘り込まれており、遺構の掘り込み土層が、構築年代の手がかりとなる。この土層から掘り込まれた遺構についての検出例、性格、用途などについては、今後更に検討が必要である。(北林)

溝状ピットは、「Tピット」「陥し穴状遺構」とも呼称されているが、遺物を伴出した例が少ないため、その構築年代、用途などについて不明なピットであるが、最近これに関する調査研究が進められている(瀬川：1981、福田：1981)。南郷村における検出例は、田ノ上遺跡1基(県埋文65集：1981)、三合山遺跡1基(県埋文69集：1982)、石ノ窪4基(同前)、鴨平(1)遺跡2基(昭和56年度の調査)の5遺跡9基である。この遺構の分布は、南は神奈川県、北は北海道東部あたりまで知られている。東北地方では、今のところ山形、宮城、福島各県での発見例が少ないようであるが、本県の県南地方から岩手県には濃密に分布している遺構である。溝状ピットの最初の報告例は、昭和29年7月といわれている(前出、福田：1981)が、本県では昭和48年、上北郡六ヶ所村発茶沢遺跡(2)試掘調査(県埋文9集：1974)で3基検出し、小竪穴状遺構と称されたものが初現である。次いで、発茶沢遺跡(3)4基(県埋文24集：1975)、千歳遺跡(13)10基(県埋文27集：1976)の報告書から「溝状ピット」と称するようになった。そして明確な時期、用途は不明であるとしながら、複数のピットを並列させた一種の「陥し穴」、あるいは平安時代以降に馬の放牧場に付設した防護施設などを想定したにとどまった。その後、五戸町古街道長根遺跡2基(県埋文29集：1976)、青森市近野( )1基(県埋文33集：1977)、八戸市長七谷地貝塚101基(県埋文57集：1980)、同売場遺跡60基以上(報告書未刊、昭和53、54年調査)、大鰐町砂沢平遺跡3基(県埋文53集：1980)、碓ヶ関村大面遺跡2基(県埋文55集：1980)、六ヶ

所村表館遺跡15基（県埋文61集：1981）、同村新納屋遺跡（2）3基（県埋文62集：1981）、同村茶沢遺跡430余基（昭和54、55年調査、県埋文67集：1982）などの検出例がある。これらのなかで、長七谷地貝塚の報告書ではその形態、規模、規則的な方向性をもつ配置、遺構の覆土、埋め戻しなどから、陥し穴遺構が最も妥当な見解とした。すなわち、長七谷地貝塚においては、縄文時代中期から晩期にかけて、同遺跡の水源地、湿地帯に集まる仮説的対象動物（ニホンシカ）の群を対象とした、追いおとし狩猟法に使用された遺構で、集落や居住地の遺構とあまり直接的にかかわりのない遺構と考えられるとした。しかしながら、馬場瀬（2）遺跡においては地理的環境が溝状ピットを設けるような地形ではなかったのか、あるいは調査対象地区外に遺存している可能性は考えられるとしても、1基よりも検出できなかった。青森市近野、南郷村三合山、石ノ窟、五戸町古街道長根、碓ヶ関村大面、今別町山崎などの諸遺跡で検出された数は、単独又は少数である。本遺構がこのような狩猟を目的とするものであれば、当然1基の構築配置だけであれば、その機能は、複数同時構築配置の場合よりも機能面で劣ることになる。同時に多数の溝状ピットを、同じ季節に作用させる複数同時配置の機能面を重視する説明であれば、単独あるいは少数の溝状ピットが、同じような狩猟を目的のために構築された遺構として妥当か、否か、今後仮説的対象動物の生態から、このような追いおとし狩猟法が実際可能であったか、民俗学の面からも究明することが必要であろう。

長七谷地貝塚における溝状ピットの使用時期は、縄文時代中期から晩期に及ぶといわれているので、少数の溝状ピットを季節毎に掘り返し、あるいは新規構築、掘り返し放棄（廃棄）を繰り返した結果が、100基以上の累計となったものであろうか。それにしても、このような幅の狭い、しかも深い溝状ピットをどのような道具を使用して硬いローム層まで掘り下げて空洞化したか、調査時に遺構覆土を除去するだけでも、大変な労力を要したことを考えると、本遺跡のように単独検出の場合でも、その構築目的が狩猟のための「陥し穴」として説明できるためには、更に検討を加える余地を残した遺構の一つにあげることができよう。

フラスコ状土壙については、馬場瀬（1）遺跡において概略を記述してあるので割愛するが、構築・使用・廃棄の時期は、溝状ピットよりも層位的には古い階梯を与えることができよう。

（北林）

## （2）出土遺物

遺物は、主として第 Ⅰ 層から出土し、遺構内からの出土はない。出土した遺物は、縄文土器約3100点、石器18点、土製品4点、土師器3点、須恵器1点、鉄製品3点、鉄浮4点、古銭20点、陶器12点であるが、石器、古銭以外は、完形品はみられない。

## 土 器

縄文土器の分類基準は、馬場瀬（1）遺跡と同様であるが、内容において若干の差異が認められ

た。出土した土器は、縄文早期貝殻文系（第 群 1 類）1 点、前期初頭（第 群 2 類）1 個体以外は、縄文時代後期後半の十腰内第 群土器（本書の第 群 1 ~ 4 類）と、縄文晩期初頭に比定されている大洞 B C 式土器（第 群 2・3）に包括される。数量的には後期の縄文を地文とする類が多く、出土土器の主流を占めるが、縄文晩期の粗製土器と形態上区分できない土器もみられた。第 群 2 類土器は、全く単独出土の 1 個体であり、明確な型式名を確認できないまま、縄文時代前期初頭に位置づけたが、今後はこの時期に該当する土器を検討することが課題である。

今年度の調査において出土した遺物の時期からみて、本遺跡は、多分に馬場瀬(1)遺跡と時期的に併行関係がみられ、同時に生活の場、領域をもち交流があったものとみられる。特に縄文時代早期、後期後半～晩期初頭において、その形跡が顕著であるが、特に遺構に伴うまとまった遺物の出土がない。馬場瀬(1)遺跡と多少、異なる点は、平安時代の土器、江戸時代の古銭、陶器片などが出土したこと、再堆積土層と降下火山灰の堆積が認められたことなどである。

#### 石器・礫

（北林）

石器及び礫の分布は、第177図に示したとおりである。石器は、調査区南東（斜面下方）及び調査区北西（斜面上方）の 2 グループに分かれて分布している。前者を A 群、後者を B 群とすれば、礫は、A 群の分布と重複して集中している。土器の分布状態から判断すれば、A 群は、縄文時代後・晩期、B 群は、晩期に属するものとみられる。

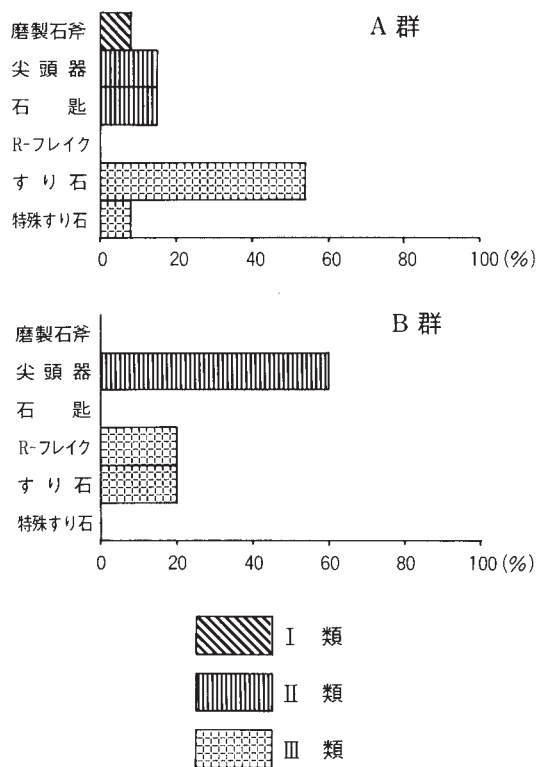
第189図は、石器 A・B 群の器種別構成比を示したものである。A 群は、磨製石斧（1 点）尖頭器（2 点）石匙（2 点）すり石（7 点）特殊すり石（1 点）で構成され、すり石の比率が高い。B 群は、尖頭器（3 点）R - フレイク（1 点）すり石（1 点）で構成されている。A・B 両群に共通するのは、尖頭器とすり石であるが、A 群と B 群で、それぞれ比率が逆転している。また、A 群の尖頭器が、いずれも無柄の欠損品であるのに対して、B 群の尖頭器は、すべて有柄の完形品である。ただし、A 群は湿地帯にかかるため、未調査部分を残しており、B 群は、分布が調査区外にのびるものとみられる。従って、いずれも本来の構成比を示すものは疑問である。

石器及び礫の石種に関しては、第190図によって、次のことが指摘できる。

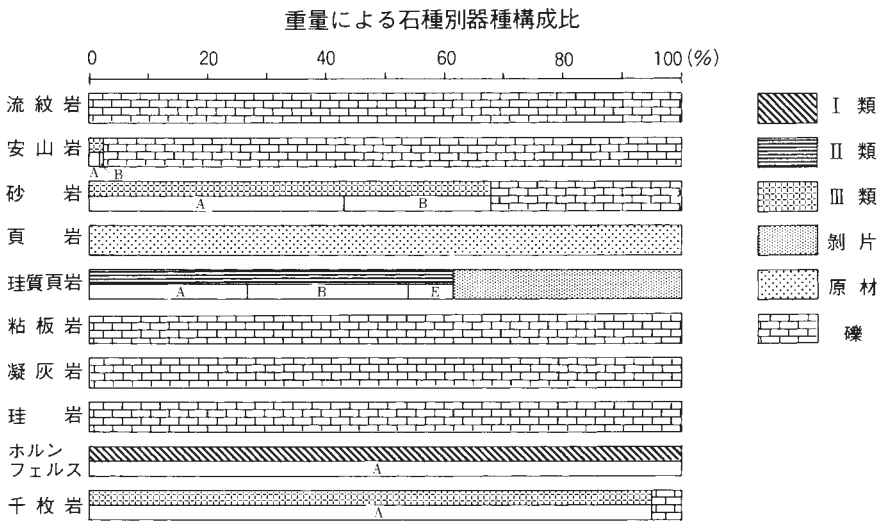
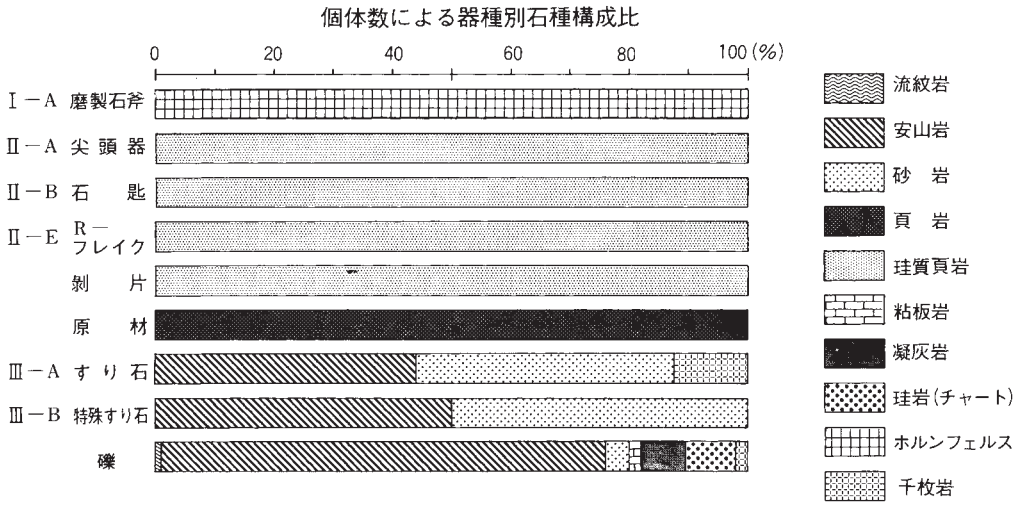
1. 馬場瀬(1)遺跡と同様（磨製石器）・（剥片石器）・（礫石器）類で、それぞれ別種の岩石が利用されているが、石種構成がより単純である。
2. 馬場瀬(1)遺跡では、 - C 類に多く用いられていたホルンフェルスが、ここでは、 - A 類に利用されている。
3. 類には、珪質頁岩のみ利用されており、玉ずいがみられない。
4. - A 類と、 - B 類では、利用石種に大きな差がみられない。

5. 馬場瀬(1)遺跡と同様、石器として利用度の高いものは砂岩であり、逆に安山岩、凝灰岩は、利用度が極端に低いか、全く利用されていない。
6. 流紋岩・珪岩(チャート)等は、やはり、全く利用されていないが、ここでは、千枚岩が、 - A類として利用されている。

(工藤大・奈良清隆)



第189図 石器構成比



第190図 石器、礫と石種



# 炭化材の樹種同定

青森県の遺跡から出土した炭化材の樹種

調査者 嶋倉巳三郎

青森県下の遺跡から出土した炭化材について、その樹種を調査したのでここに報告する。

試料は1 cm内外のものから数cm大のものまで66点で、これらについて木口、柾目、板目方向の破断面をつくり、反射顕微鏡で観察した。炭化による変形あるいは適切な面が得られなかったため、解剖学的特徴を十分見出すことができず、同定にやや疑問のあるものには?をつけた。

## 馬場瀬遺跡の炭化材

三戸郡南郷村馬場瀬(1)及び馬場瀬(2)遺跡(縄文時代後期)から得た炭化材の樹種は次のようである。

番号	遺跡名	遺構名	出土層位	樹種
1	馬場瀬(1)	第10号遺構	覆土	エゾエノキ
2	馬場瀬(1)	第10号遺構	覆土	エゾエノキ
3	馬場瀬(1)	第10号遺構	覆土	クリ
4	馬場瀬(1)	第15号遺構	覆土	クリ・アスナロ
5	馬場瀬(1)	C-5グリッド	Ⅱ層	カエデ類
6	馬場瀬(2)	K-9グリッド	Ⅲ層	ケヤキ
7	馬場瀬(2)	K-9グリッド	Ⅲ層	ケヤキ

エノキに同定したものは、早材部道管の大きな環孔材で、晩材部の小道管は集合し独特の配列を示し、放射組織は10細胞中に達するものである。分布上からみるとエゾエノキに近いものと思われる。カエデ類としたものはサクラ類にやや似た散孔材であるが、放射組織が同性で、道管壁のラセン肥厚もそれ程著しくないものである。カエデ属には種類が多いが種の同定に至らなかった。この材は容器等の木製品として各地の遺跡から広く出土している。

以上をまとめると次のようになる。同定にやや疑問のあるものも一応それとして扱った。

試料数が少ないので、比較することはあまり意味が無いかも知れないが、数例以上のものについてみると、縄文時代のみの炭化材には、オニグルミ・コナラ・フサザクラなどがあり、平安時代のみのものにホオノキがある。何れにも多く含まれているものにクリがある。遺跡から出土した炭化材は、当時の人々が使用したものが多く、時代による樹種の変遷があったら面白いことと思う。

樹種名	時代		縄文時代				平安時代～中世			
	遺跡名		石ノ窪	馬場瀬(1)(2)	田ノ上	山崎	発茶沢A	発茶沢B	銅屋(3)	明前
イチイ							1			
マツ	4						2			
マスナロ				1		1		2		
オニグルミ		2								
クリ	5	2	1	2	1	2	3	5	1	
コナラ	4					1				
ケヤキ	1			2	1					
エゾエノキ				2		1				
ホオノキ							2	2	1	
フサザクラ	2				1					
ナナカマド	1									
サクラ類	2						1			
カエデ類				1	1	1		1		
ハクウンボク	1	1								
ヤチダモ					1					

## 引用参考文献

- 青森県教育委員会 1974 『発茶沢遺跡(2)』 県埋文 9集。
- ” 1974 『中宇田遺跡』 県埋文 13集。
- ” 1975 『富山遺跡』 県埋文 21集。
- ” 1975 『発茶沢遺跡(3)』 県埋文 24集。
- ” 1976 『千歳遺跡(13)』 県埋文 27集。
- ” 1976 『古街道長根遺跡』 県埋文 29集。
- ” 1977 『鳥海山遺跡』 県埋文 32集。
- ” 1977 『近野遺跡( )』 県埋文 33集。
- ” 1977 『水木沢遺跡』 県埋文 34集。
- ” 1978 『高館遺跡』 県埋文 40集。
- ” 1979 『杉の沢遺跡』 県埋文 45集。
- ” 1980 『砂沢平遺跡』 県埋文 53集。
- ” 1980 『古館遺跡』 県埋文 54集。
- ” 1980 『大面遺跡』 県埋文 55集。
- ” 1980 『長七谷地遺跡』 県埋文 57集。
- ” 1980 『神明町遺跡』 県埋文 58集。
- ” 1980 『表館遺跡』 県埋文 61集。
- ” 1980 『新納屋遺跡(2)』 県埋文 62集。
- ” 1981 『外長根(1)遺跡』『前平(2)遺跡』 県埋文 64集。
- ” 1981 『志民(2)遺跡』『田ノ上遺跡』 県埋文 65集。
- 青森県立郷土館 1971 「後期」『縄文式土器のうつりかわり』。
- 天 間 勝 也
- 青森県立郷土館 1980 『尻八館跡』。
- 岩本義雄 ほか
- 青 山 礼 志 1972 『貨幣手帳』 頌文社。
- 安孫子 昭 二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式」『石器時代』9。
- ” 1978 「縄文土器の型式と編年」『日本考古学を学ぶ』1。
- ” 1980 「コブ付土器様式から亀ヶ岡式土器様式への変遷過程」『考古風土記』5。
- 岩手県埋蔵文化財 1980 「松尾村野駄遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第11集。

- センター（財） 縄文後期末葉竪穴住居跡 3 軒の出土例。
- ” 1980 「軽米町吠屋敷 遺跡」『現地説明会資料』による。縄文後期前葉（十腰内 群）1 棟、同後期（加曾利 B 式）1 棟の竪穴住居跡が出土。
- ” 1980 「軽米町君成田遺跡」『現地説明会資料』縄文後期35棟、同晩期（大洞 A 式）1 棟の竪穴住居跡出土例。
- 岩手県教育委員会 1980 『大明神遺跡』岩手県埋蔵文化財調査報告書第52集。
- 岩手大学 1955 「岩手県日野遺跡調査報告」『岩手大学学芸部研究報告』10。
- 磯崎正彦 1964 「後期縄文式土器」『日本原始美術』1。
- 伊東信雄 1956 「宮城県古代史」『宮城県史』1 宮城県。
- ” 1977 「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」『考古学研究』24 - 3 . 4。
- 市川金丸 1967 「蕪島遺跡報告（略報）」『東奥文化』34。
- 井上晃夫 1976 「縄文土器の製作」『考古学ノート』6 武蔵野文化協会考古学部会。
- 今井富士雄 1968 「十腰内遺跡」『岩木山 - 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山磯崎正彦刊行会。
- 江坂輝弥 1957 「三戸郡大館村十日市赤御堂貝塚調査（略報）」『奥南史苑』2。
- ” 1969 「縄文文化の発現」『世界考古学大系 日本』1。
- ” 1975 「縄文式土器」『日本の美術』。
- 太田保 1974 『古銭利殖入門』。
- 音喜多富寿 1959 「埋蔵文化財からみた八戸周辺の成立」『東奥文化』14。
- ” 1960 『青森県八戸市周辺に於ける遺跡、遺物地名表』八戸市文化財シリーズ 1。
- ” 1961 『石器時代のはちのへ～主として縄文土器とのその周辺～』。
- 小山正忠 1973 『新版標準土色帖』。
- 竹原秀雄
- 葛西 励 1979 「後期編」『蛭沢遺跡』、蛭沢遺跡調査団。
- 三宅 徹也 「早期編」 ” ”
- 北上市教育委員会 1978 『八天遺跡』。
- 草間俊一 1971 『貝鳥貝塚』 岩手県花泉町教育委員会。
- 金子浩昌
- 草間俊一 編 1974 『崎山弁天遺跡』 岩手県大槌町教育委員会。
- 鈴鹿良一

- 草間 俊一 編 1979 『立石遺跡』岩手県大槌町教育委員会。
- 工 藤 正 1968 『平賀町館山出土古銭』 平賀町教育委員会。  
 " 1961 『猿賀出土古銭について』。
- 栗 村 知 弘 1960 「埋れた八戸 - 縄文文化時代から古墳文化時代まで - 」『概説八戸の歴史』。
- 小 林 達 雄 1972 「縄文土器」『日本原始美術大系』1。  
 " 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93。  
 " 1977 「縄文土器編年表」『日本原始 世界陶磁全集』1。
- 泉 拓 良
- 小 林 達 雄 1979 「土器の型式、様式、形式について」『日本原始美術大系』1。
- 後 藤 勝 彦 1957 「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器編年について」『塩釜市教委教育論文』2。  
 " 1961 「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」『考古学雑誌』48 - 1。
- 斎 藤 忠 1974 「縄文時代編年表」『日本考古学の視点』(上)付録。
- 上 野 佳 也
- 佐 川 正 敏 1978 「東日本における縄文時代早期貝殻文土器文化の研究」『函館空港中野遺跡』。
- 佐 原 真 ほか 1979 「縄文土器」『日本の原始美術』2。
- 佐藤達夫 ほか 1957 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』43 - 2。
- 佐 藤 達 夫 1958 「青森県上北郡出土の早期縄文土器」『考古学雑誌』43 - 3。  
 " 1961 「六ヶ所出土早稲田第5類土器」『上北考古会報告』2。
- 渡 辺 兼 庸
- 鈴 木 正 博 1980 「曾谷式研究序説」『古代探叢』。
- 須 藤 隆 1973 「土器組成論」『考古学研究』19 - 4。
- 瀬 川 司 男 1981 「陥し穴状遺構について」『岩手県埋蔵文化財センター紀要』。
- 芹 沢 長 介 1956 「縄文文化」『日本考古学講座』3。
- 浪岡町教育委員会 1980 『浪岡城跡』。
- 名久井 文 明 1974 「北日本縄文時代早期編年に関する一試考」『考古学雑誌』60 - 3。  
 " 1979 「北日本縄文時代早期編年に関する一試考( )」『考古学雑誌』65 - 1。
- 七飯町教育委員会 1979 『峠下聖山遺跡』。

- 奈良 仁 1972 「脇野沢村小沢出土古銭の研究」『うそり』9。
- 函館市博物館 1970 「函館市志海苔町出土古銭目録」『銭亀古銭と新資料展』。
- 八戸市教育委員会 1975 『赤御堂遺跡発掘調査概要報告書』。
- 林 謙 作 1965 「東北 - 縄文文化の発展と地域性 - 」『日本の考古学』。
- 弘前市教育委員会ほか1981 『弘前市高長根山遺跡』。
- 福田 友之 1981 「溝状ピット研究に関する覚書」『弘前大学考古学研究』1。
- 黛 弘道 1980 「原始 - 飛鳥・奈良 (- 783)」『年表 日本歴史』1。
- 井上光貞 ほか
- 村 越 潔 1968 「湯ノ沢遺跡」「一本木沢遺跡」『岩木山』、岩木山刊行会。
- 盛田 稔 ほか 1980 「中野館」「島守館」『日本城郭大系』2所収。
- 山形県教育委員会 1978 『的場遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第14集。
- 八幡 一郎 1968 「型式と様式、弥生式土器」『新版考古学講座』2。
- 山内 清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1 - 3。
- ” 1964 「縄文式土器」『日本原始美術』1。
- 裕 光 1961 「市浦村十三出土古銭調査」『東奥文化』21。
- 吉田 格 1965 「日常生活用具」『日本の考古学』。



馬 場 瀨 (1)  
写 真 図 版







調査前 南東▷北西



調査前 南▷北

図版1 馬場瀬(1)遺跡遠景



南西部遺構確認状況 西▷東



南西部第Ⅰ、Ⅱ層調査 北▷南

図版2 馬場瀬(1)遺跡南西部の調査



南西部第IV、VI層の調査 北▷南



南東部第IV、VI層の調査 北▷南

図版3 南西部第IV、VI層の調査



北半部第Ⅳ、Ⅵ層の調査 東▷西

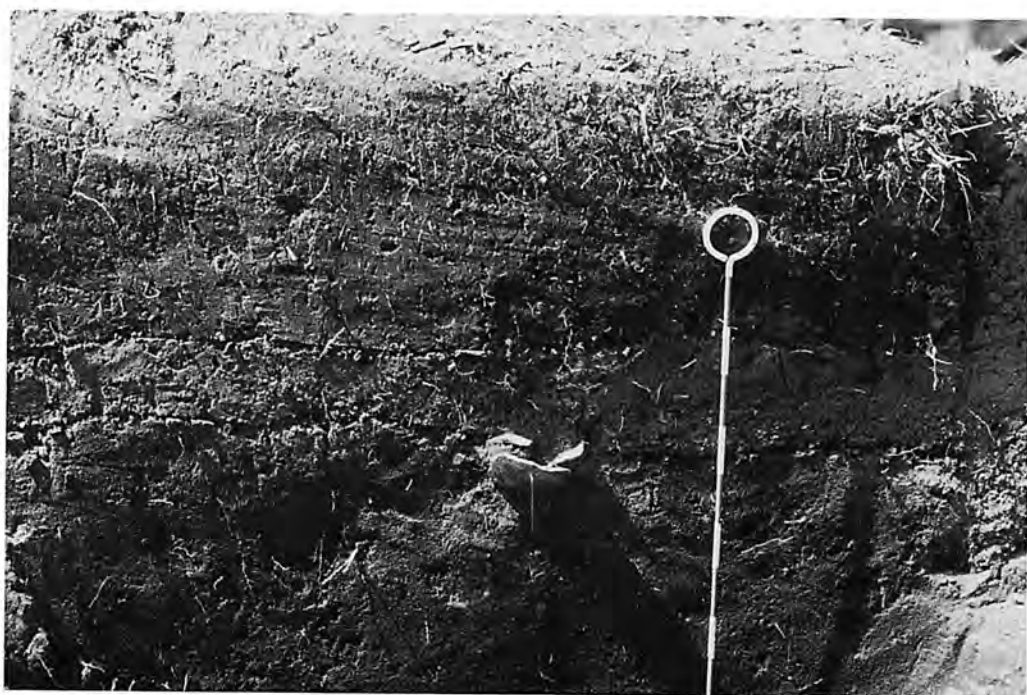


北西部出土遺構群 西▷東

図版 4 北半部の調査

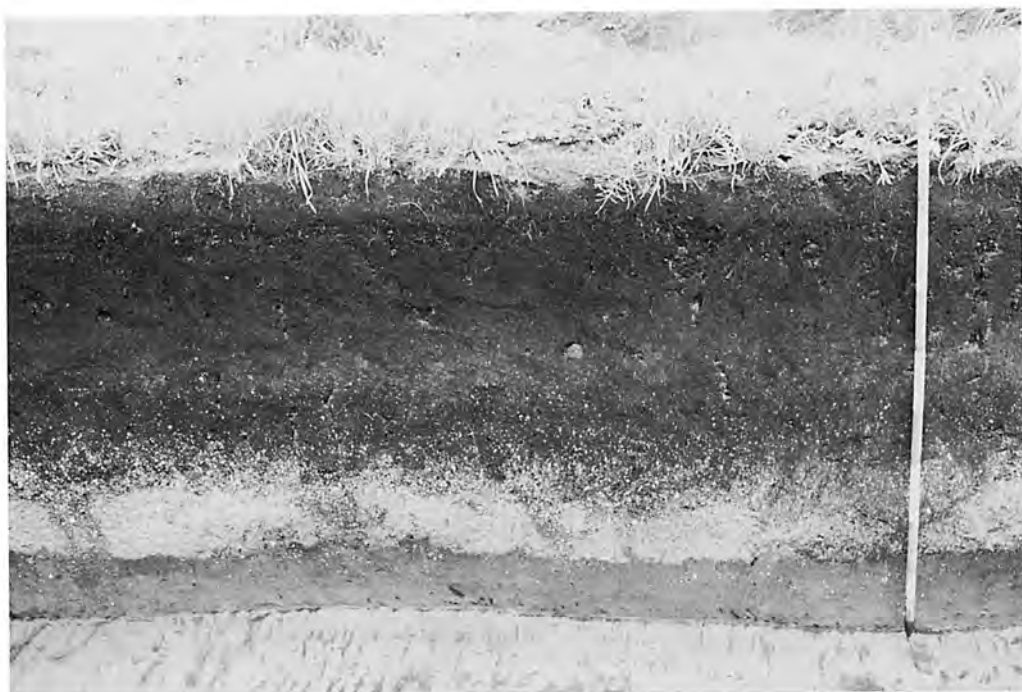


南北基本層位 Kライン 20.21 付近

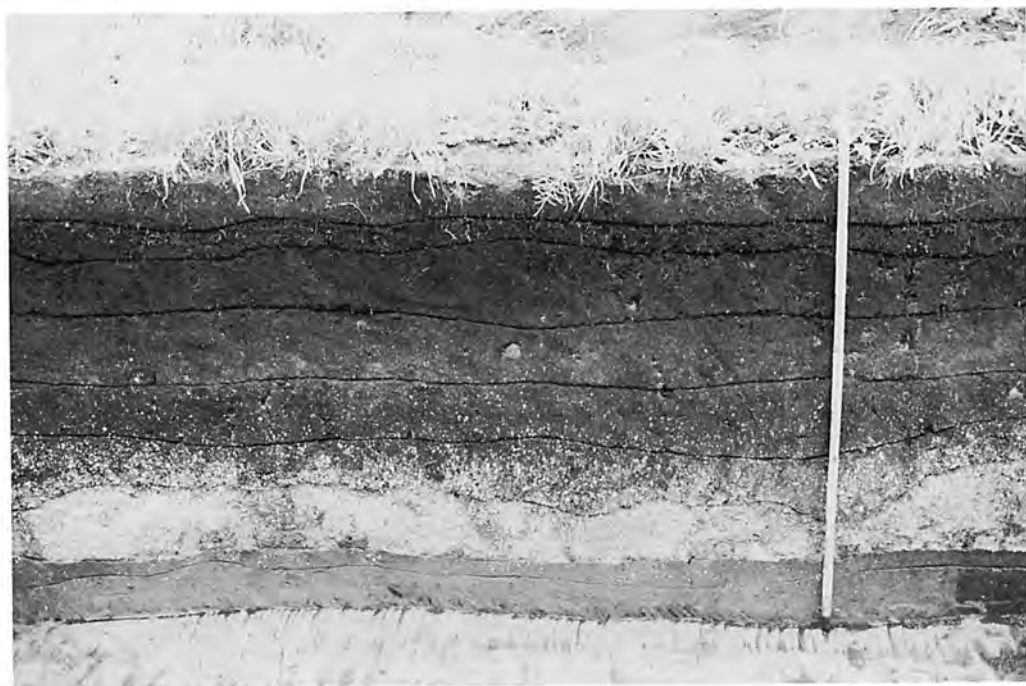


P-8グリッドの十和田b層と第Ⅲ群土器

図版5 基本層位 (1)



南北基本層位 K-13グリッド付近



南北基本層位

図版6 基本層位 (2)



南西部 (A 地区) 検出遺構群 東▷西



南西部検出遺構群 北▷南

図版 7 南西部検出遺構群





図版8 第3号遺構



図版9 第3号遺構出土遺物



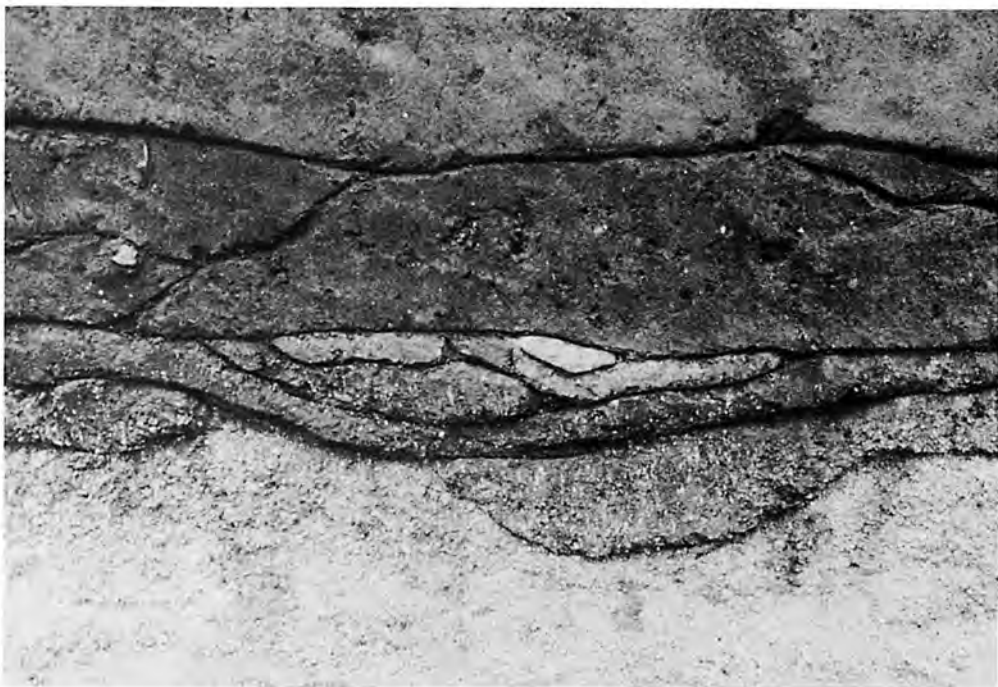
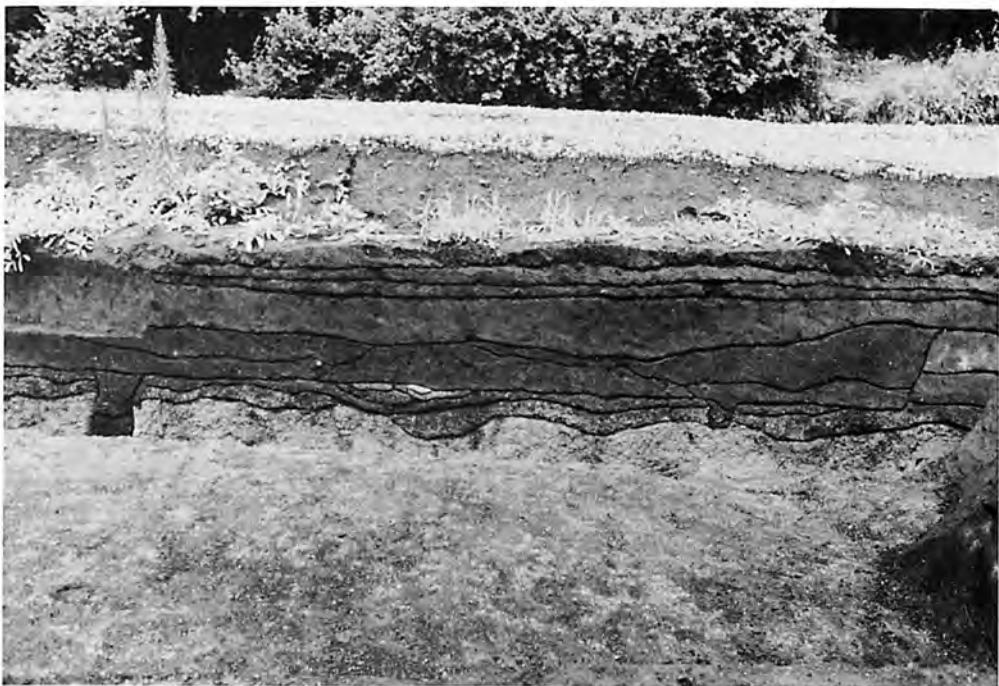
図版10 第7号遺構



図版11 第7号遺構出土遺物



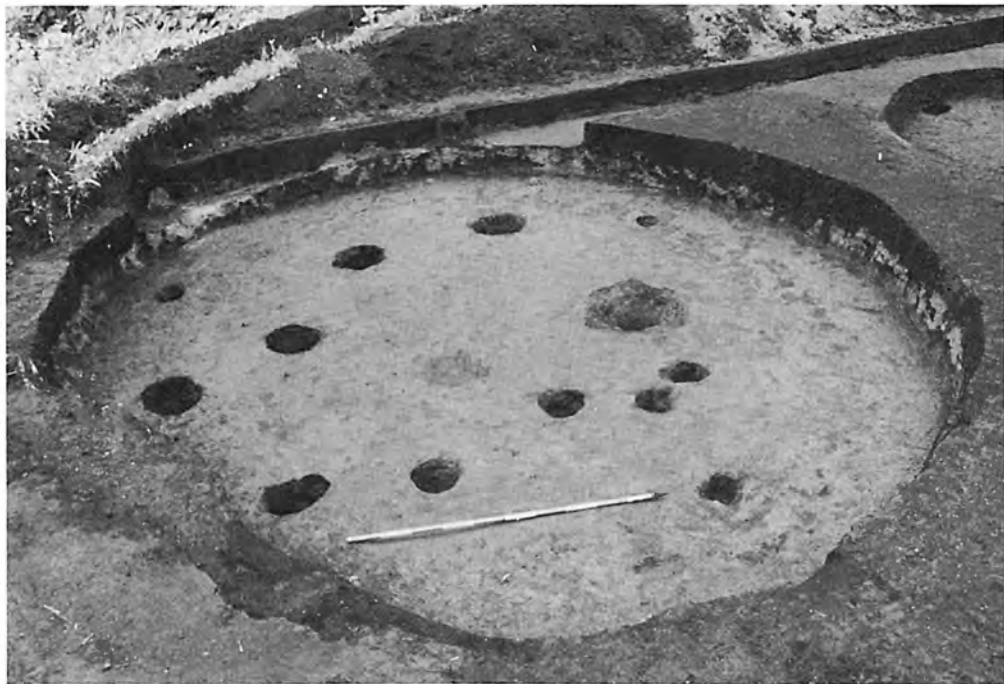
図版12 第10号遺構



図版13 第10号遺構



図版14 第10号遺構出土遺物

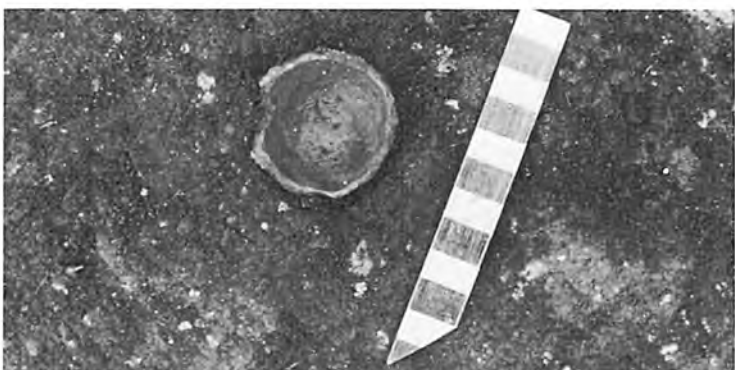


図版15 第13号遺構

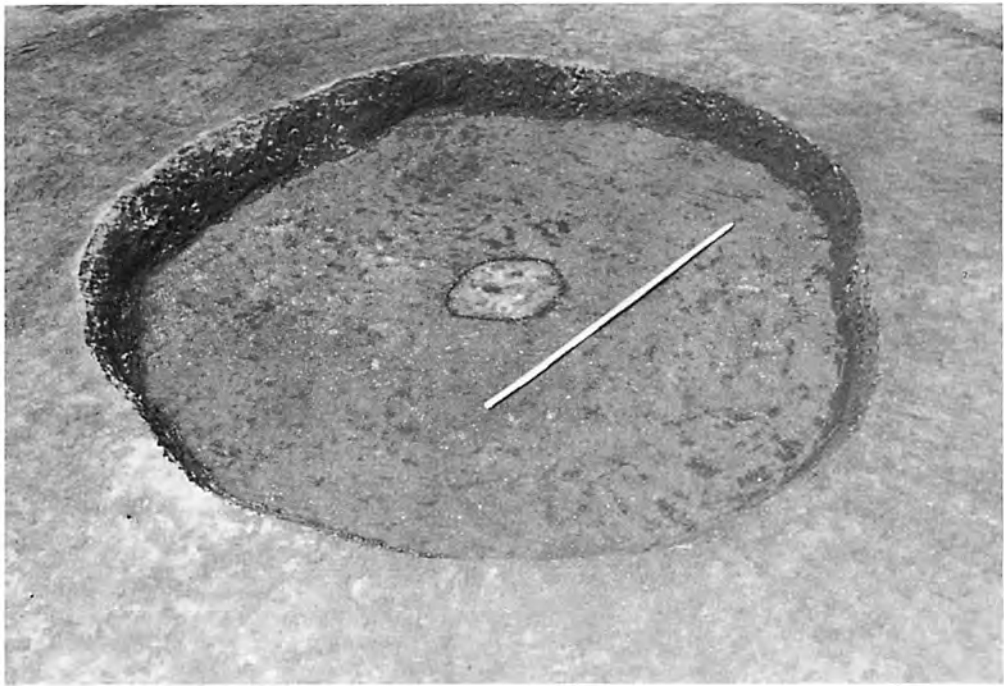




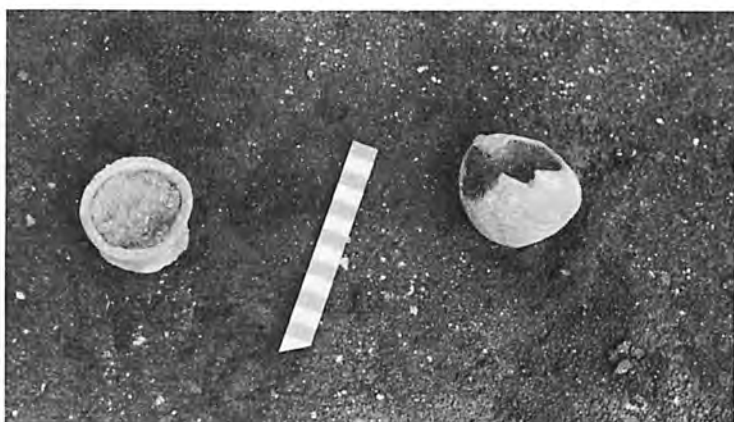
图版16 第13号遺構



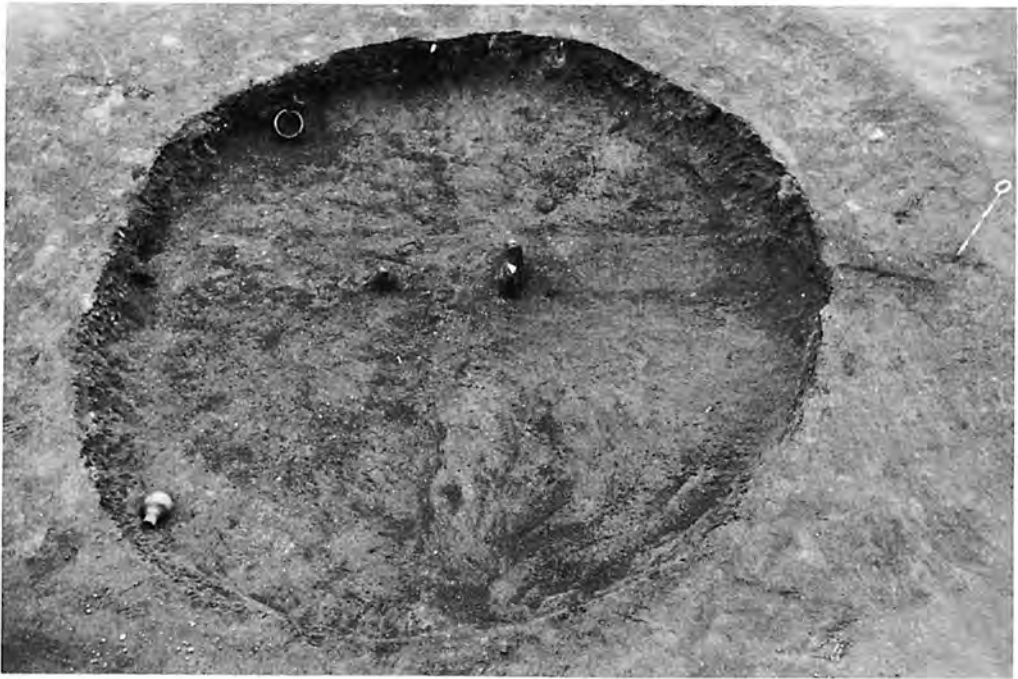
图版17 第13号遺構出土遺物



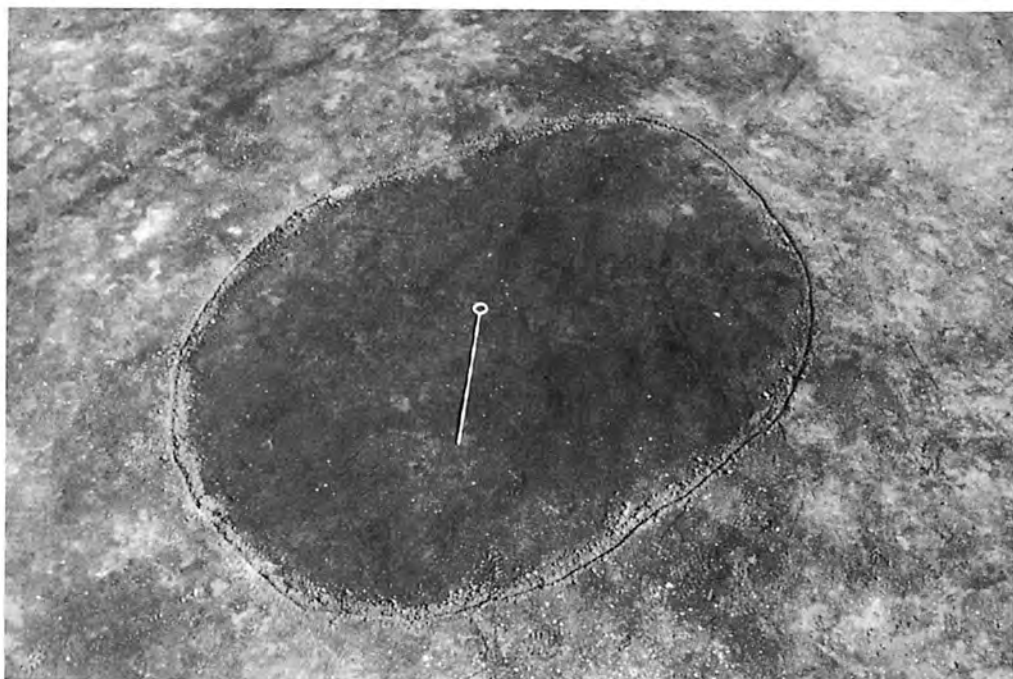
図版18 第15号遺構



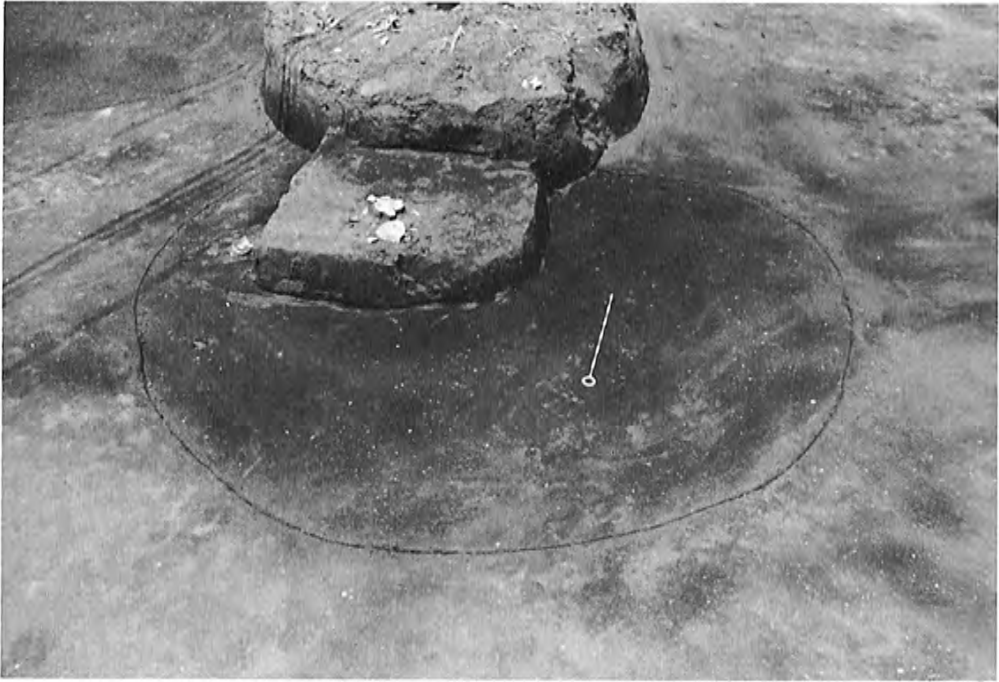
図版19 第15号遺構 出土遺物



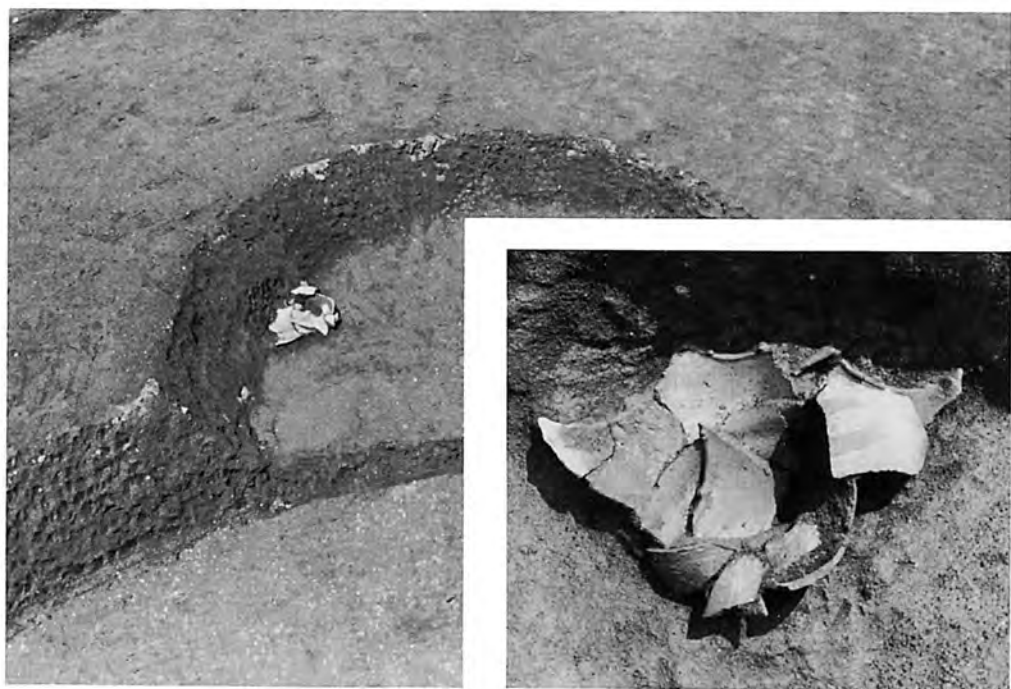
図版20 第1号遺構 出土遺物



図版21 第2号遺構



図版22 第12号遺構

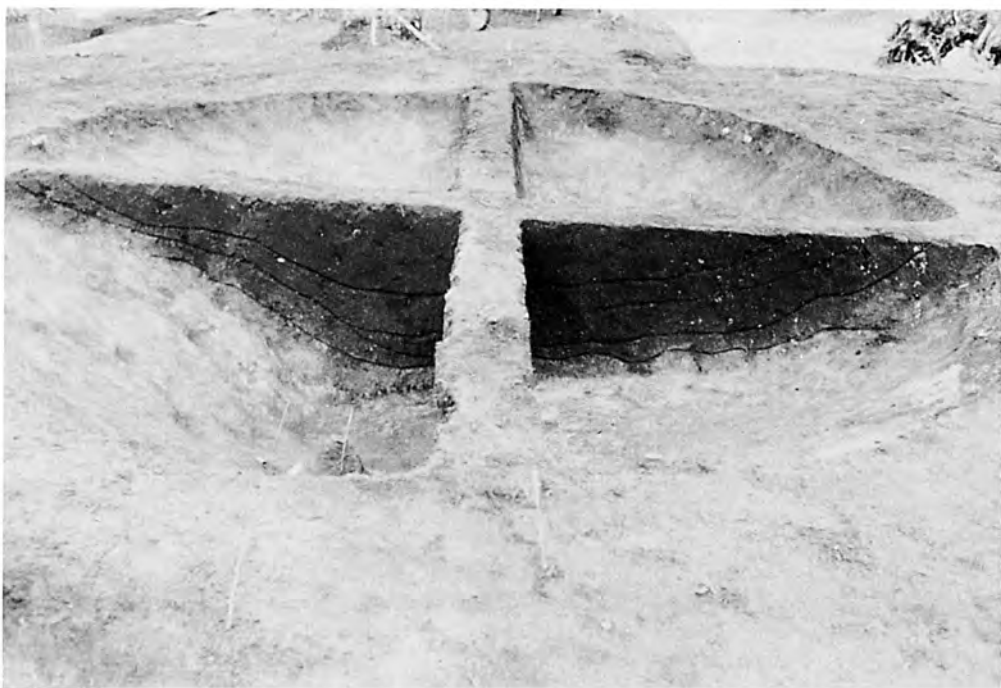


図版23 第14号遺構出土遺物





図版24 第20号遺構



図版25 第20号遺構



图版26 第21号遺構



図版27 第21号遺構



図版28 第22号遺構



図版29 第22号遺構

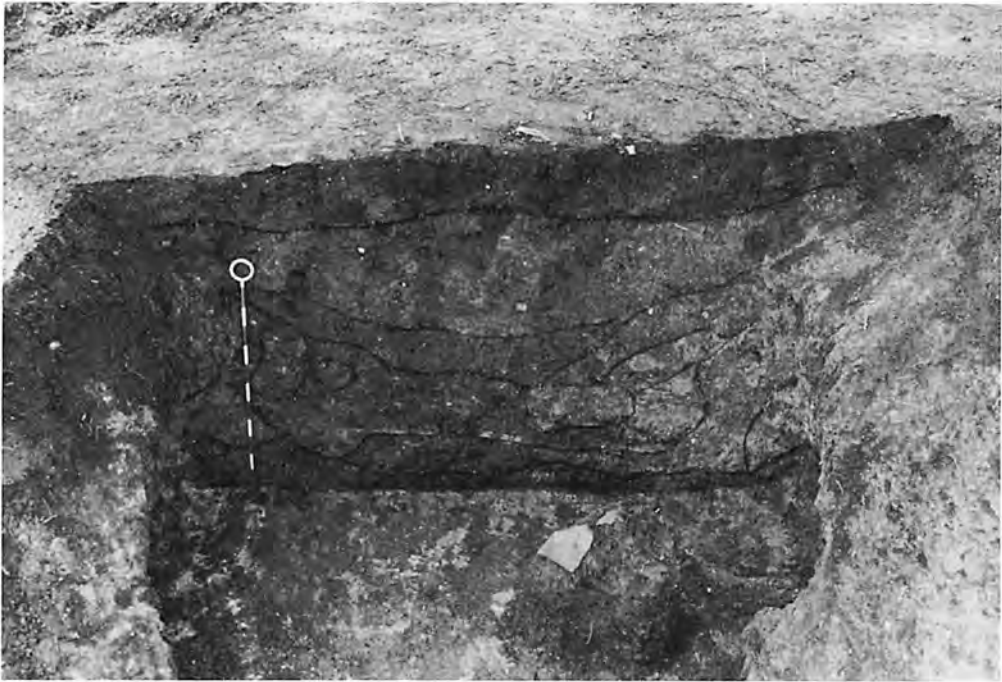


図版30 第18号遺構

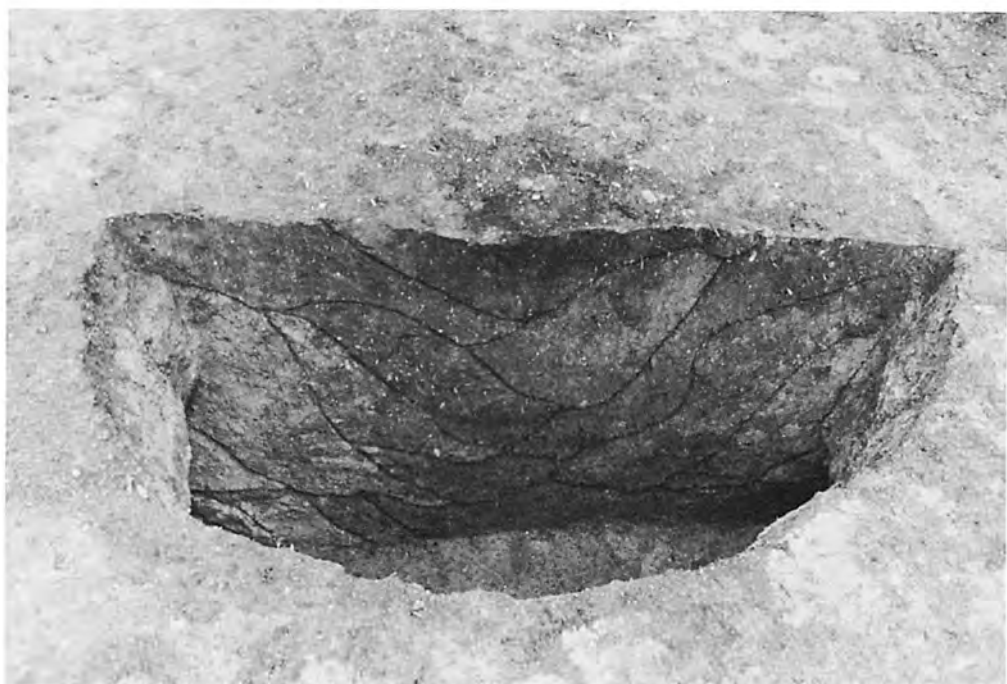


図版31 第19号遺構





図版32 第23号遺構出土土器



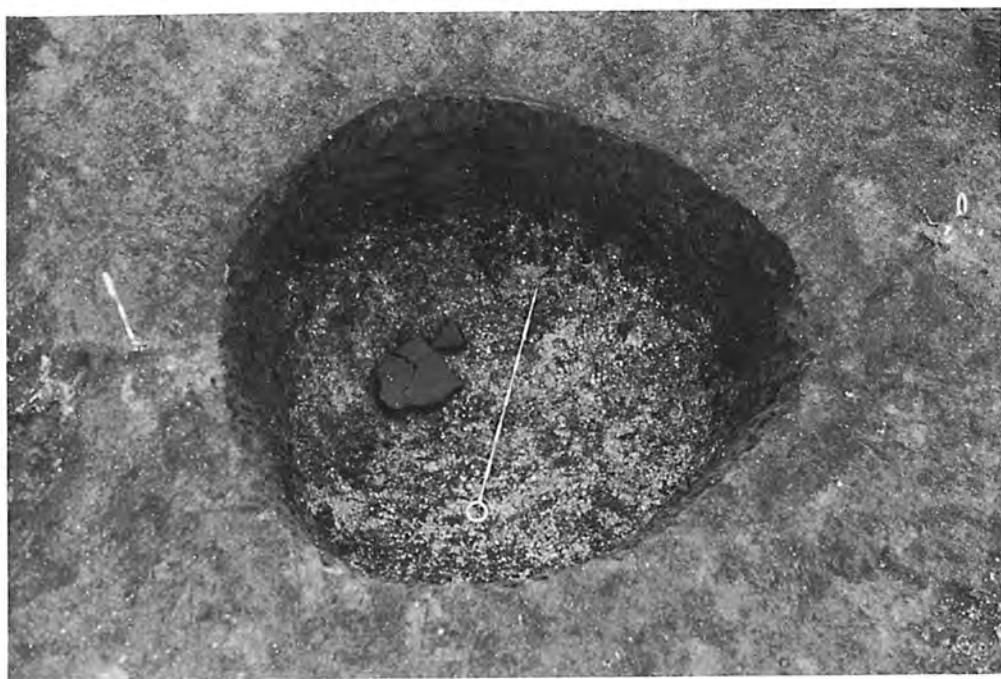
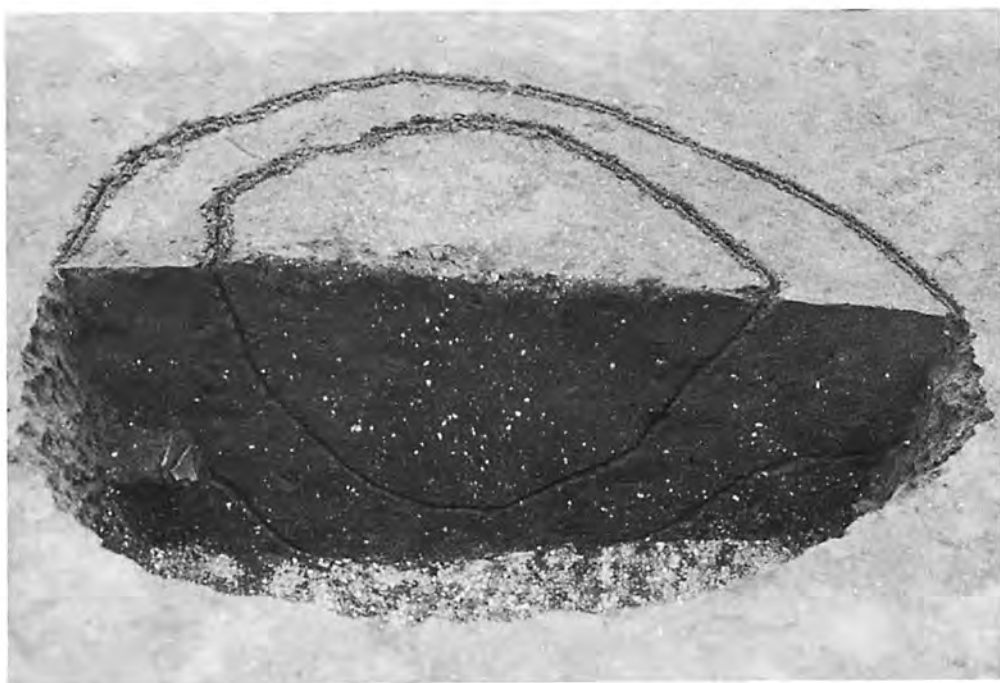
図版33 第25号遺構



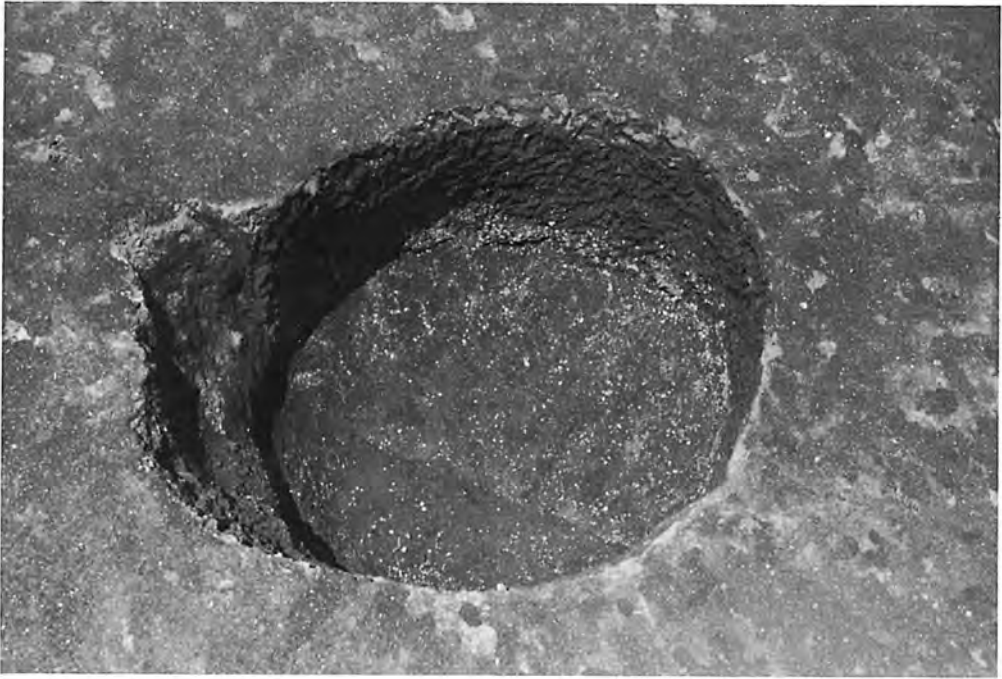
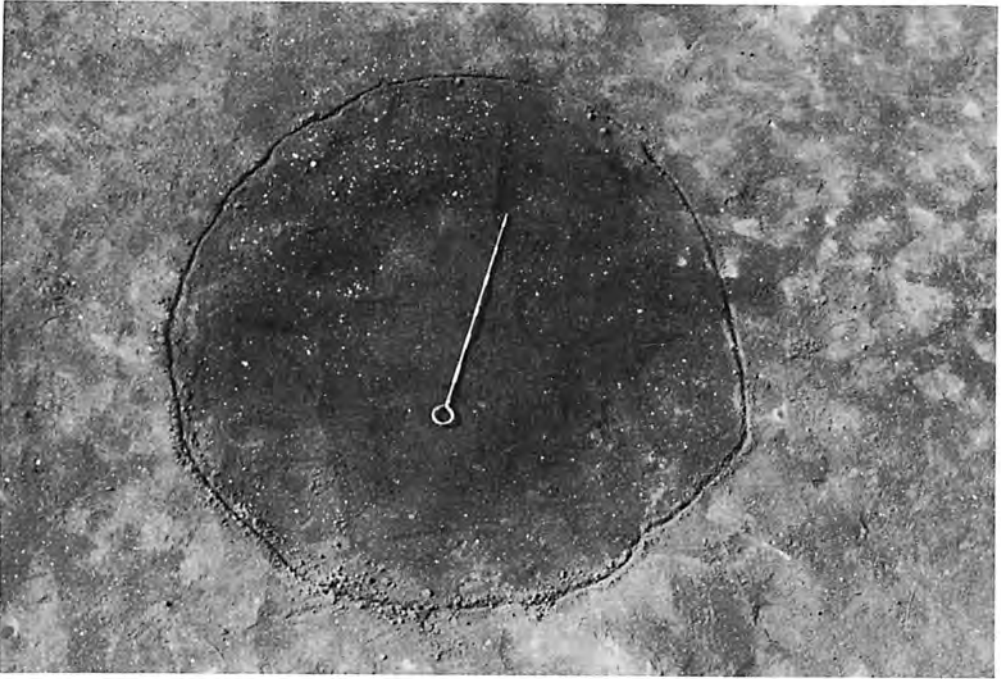
图版34 第27号遺構



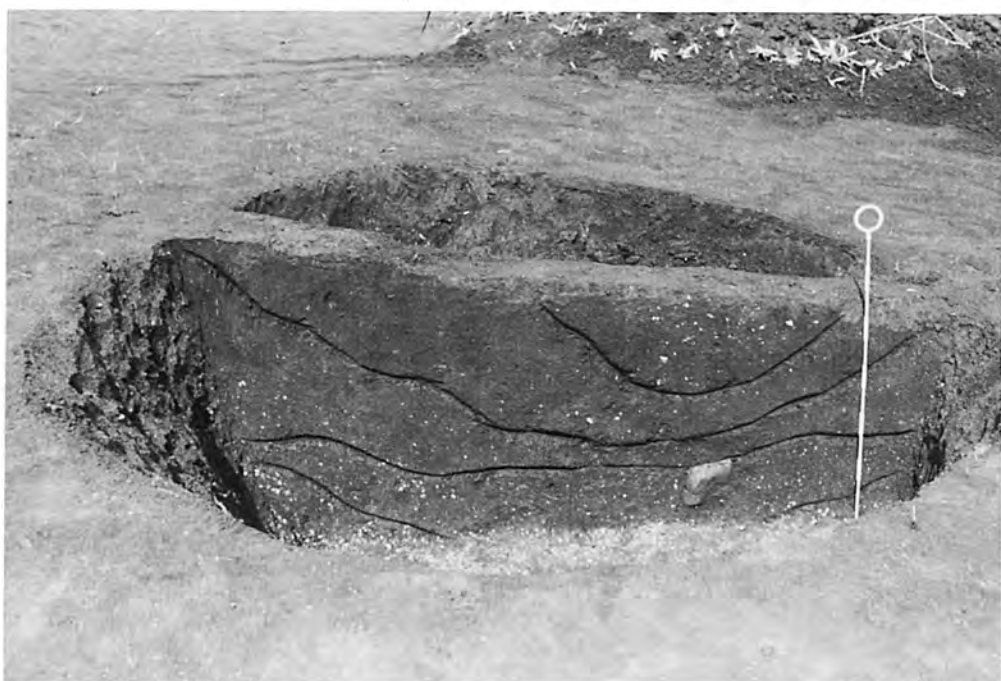
图版35 第28号遺構



図版36 第6号遺構



図版37 第9号遺構出

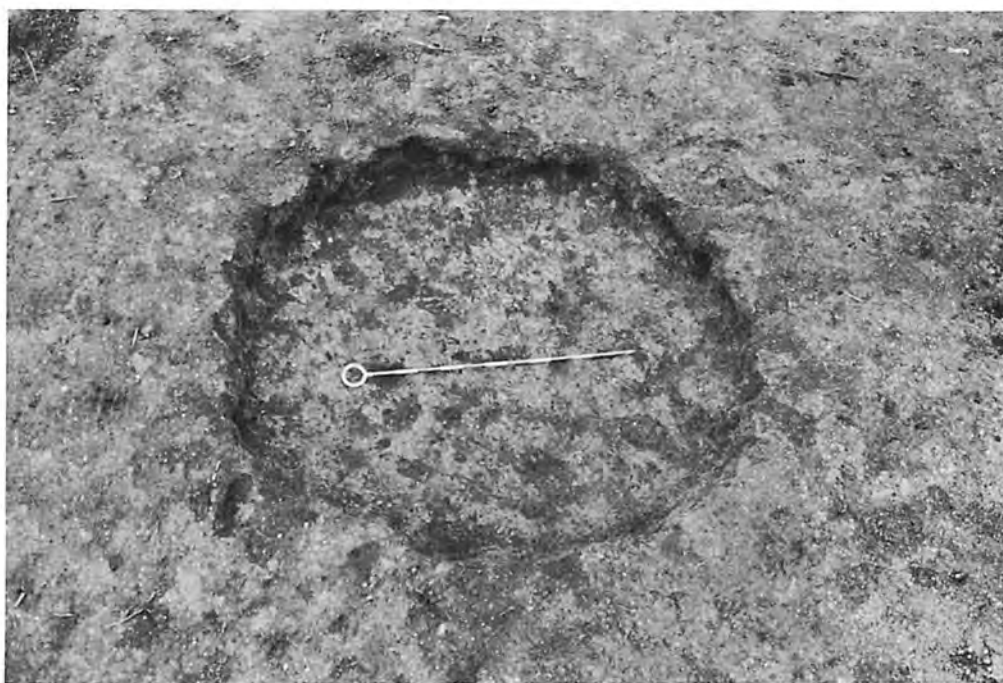


図版38 第24号遺構

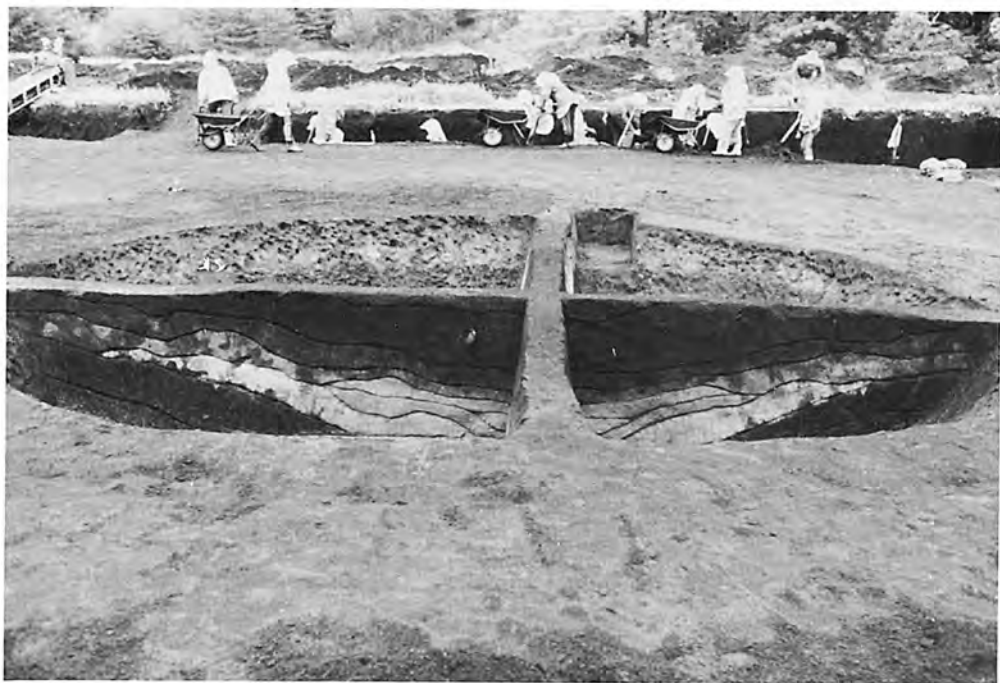


図版39 第26号遺構





図版40 第29号遺構



图版41 第16号遺構



1 (47-1)



2 (48-1)



3 (50-5)



4 (49-2)



5 (49-5)



6 (49-3)

1、2 第1号遺構出土  
3～6 第3号遺構出土  
( ) 内は挿図番号、以下同じ

S = 1/2

図版42 第1・3号遺構出土土器



1 (49-4)



2 (53-1)



3 (53-2)



4 (53-3)



5 (51-3)



6 (52-1)



7 (51-7)

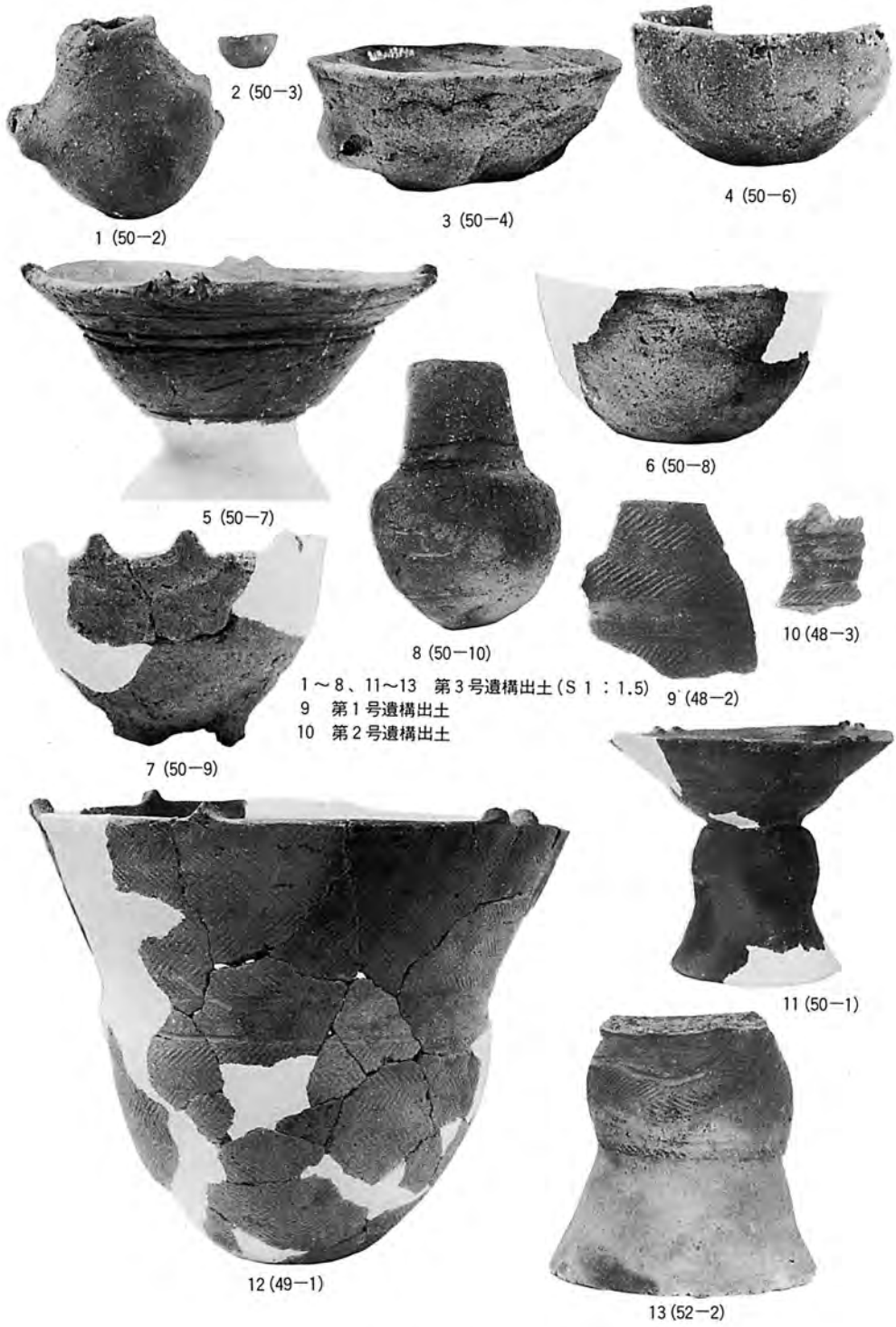


8 (51-2)

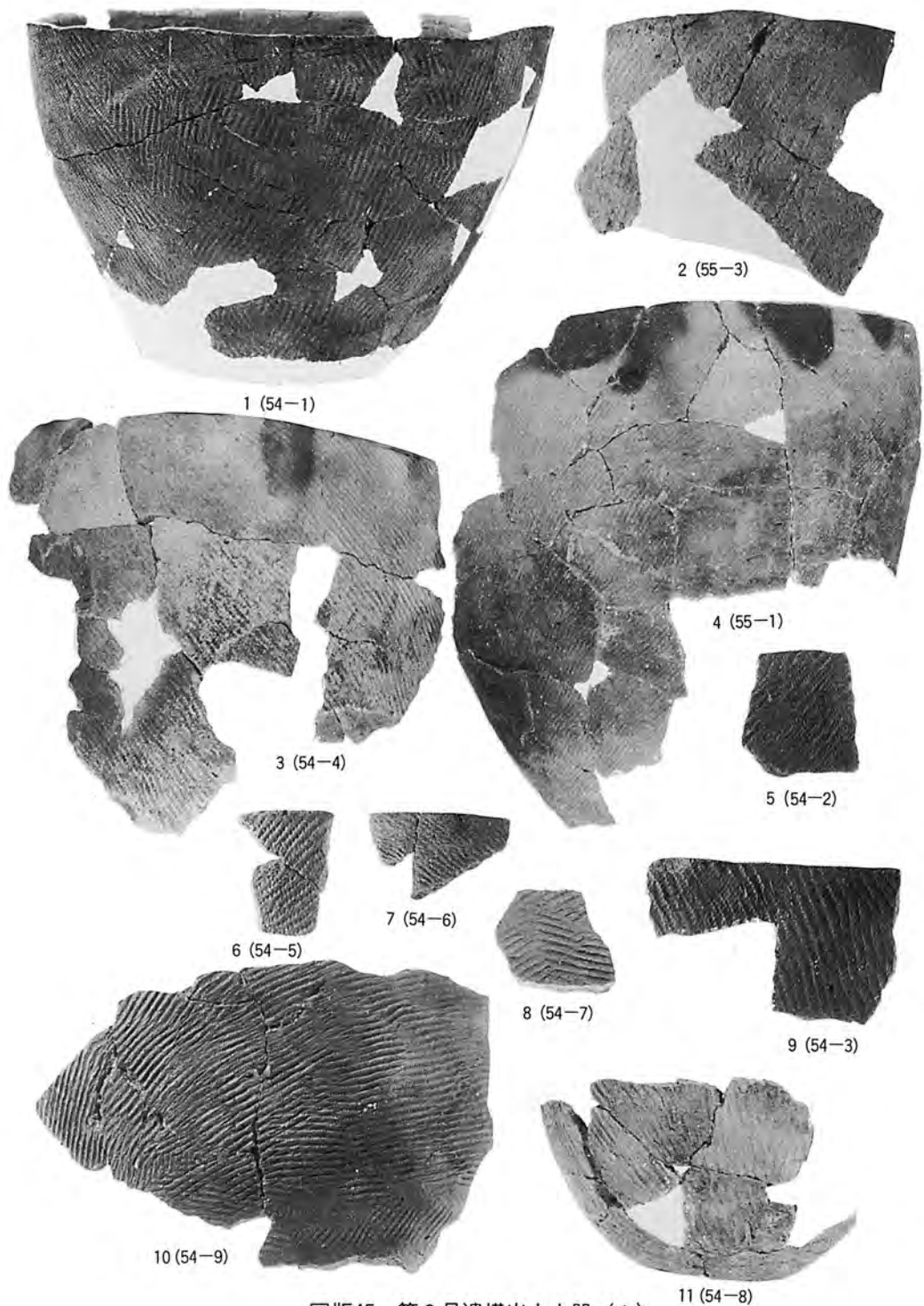


9 (52-3)

图版43 第3号遺構出土土器



図版44 第1～3号遺構出土土器



図版45 第3号遺構出土土器 (1)



1 (58-7)



2 (56-1)



3 (55-2)



4 (56-3)

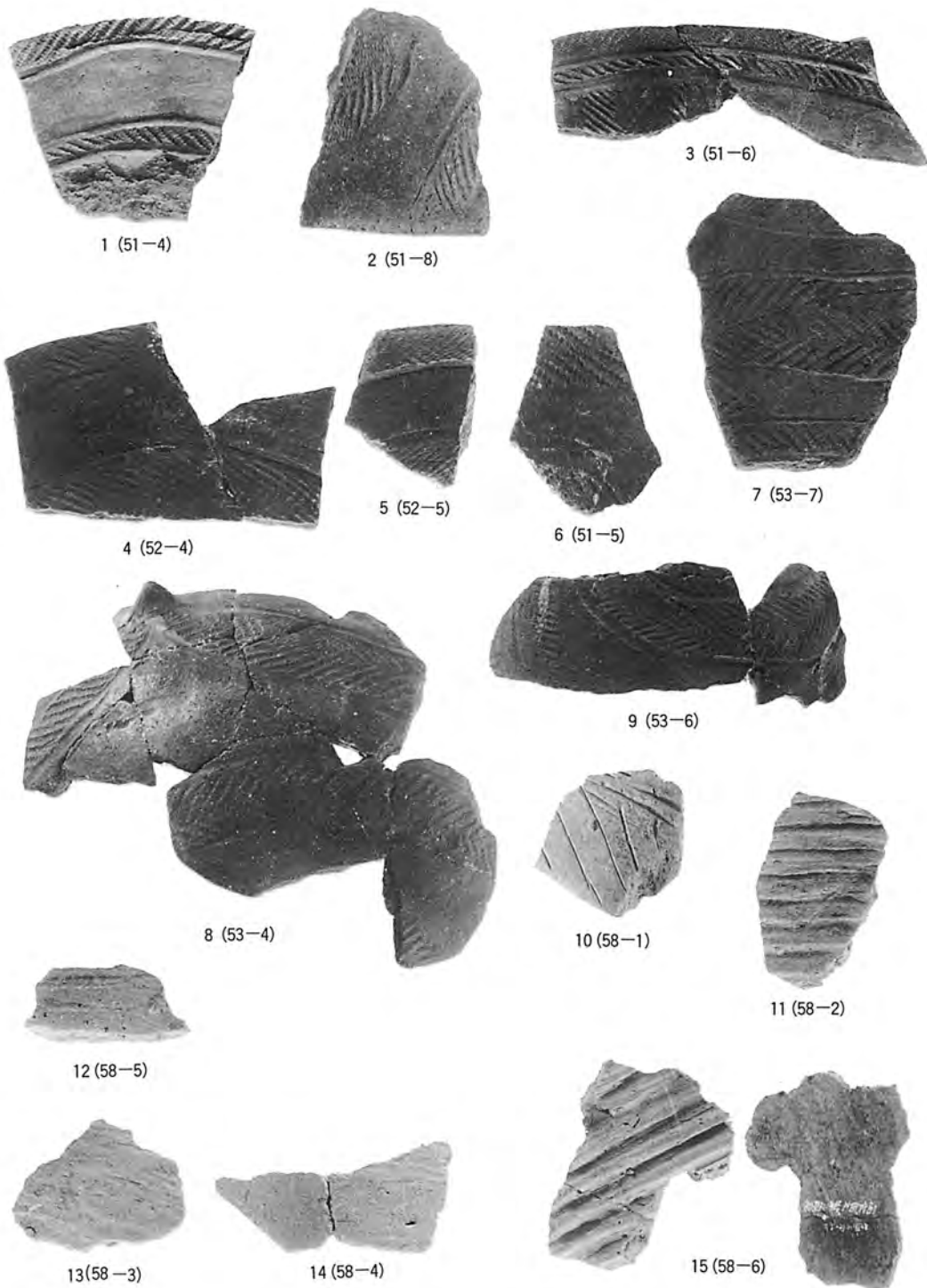


5 (56-2)



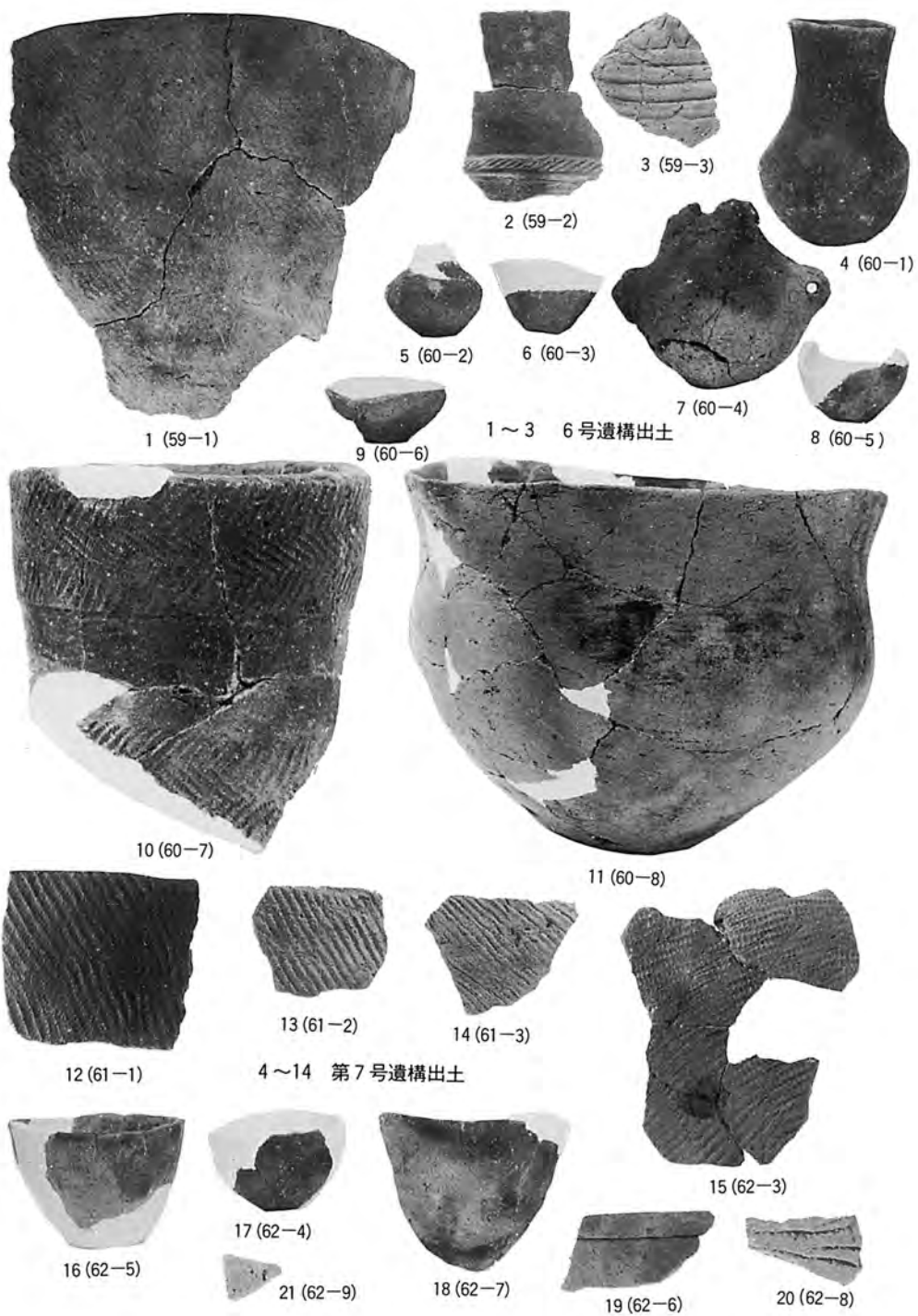
6 (53-4, 5)

图版46 第3号遺構出土土器(2)

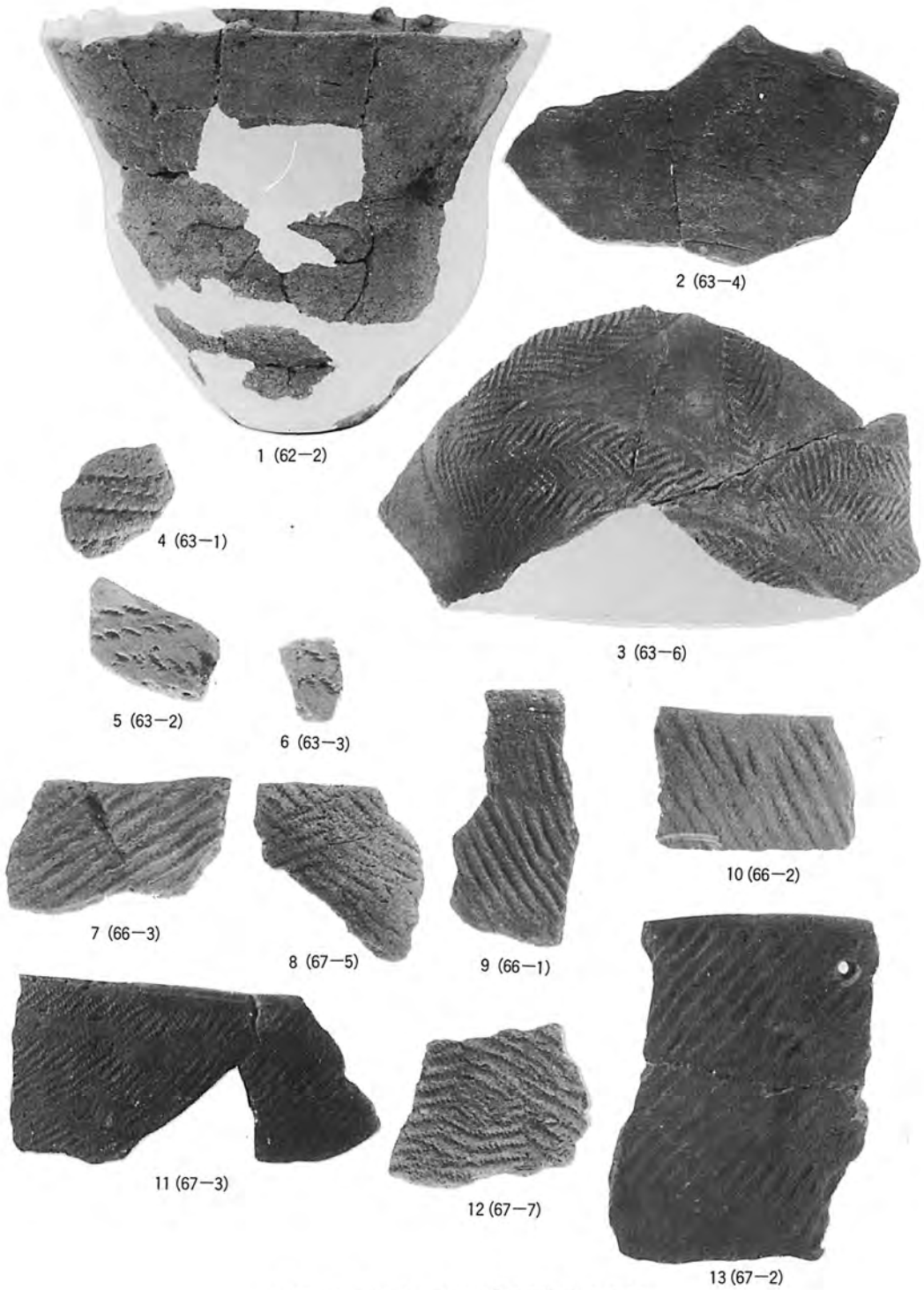


图版47 第3号遺構出土土器(3)





図版48 第6・7・10号遺構出土土器



图版49 第10·12·13号遺構出土土器



1 (62-1)



2 (63-5)



3 (68-7)



5 (66-5)



6 (68-2)



7 (69-1)



8 (68-1)



9 (68-6)



10 (68-3)

図版50 第10・12・13号遺構出土土器



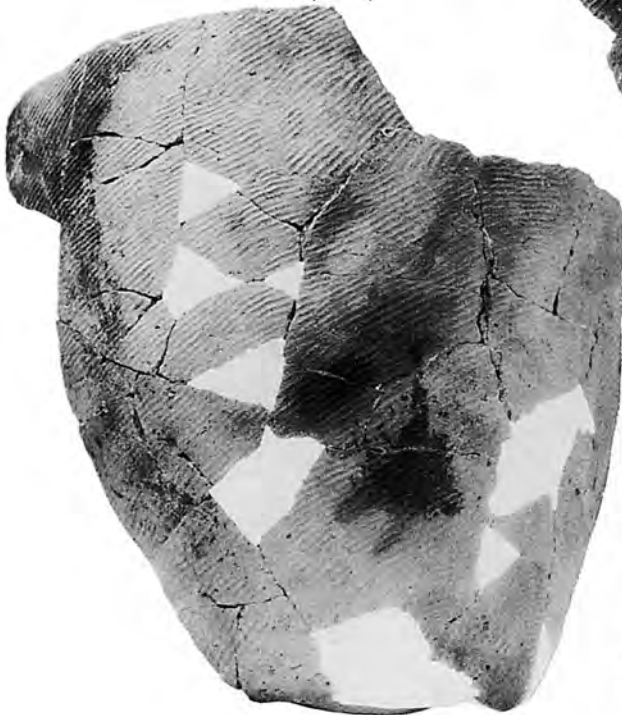
1 (65-1)



2 (67-1)



3 (64-2)

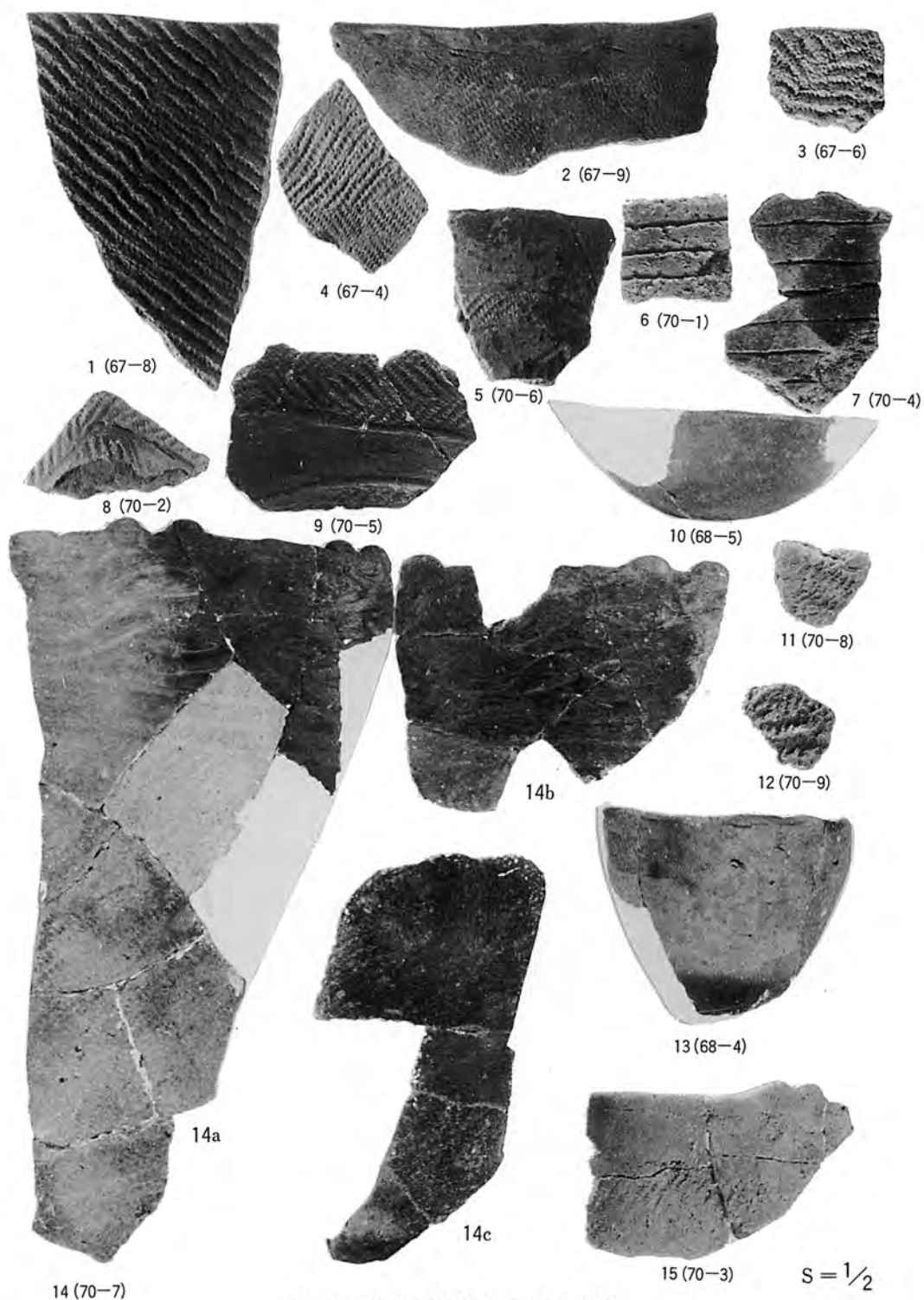


4 (64-1)

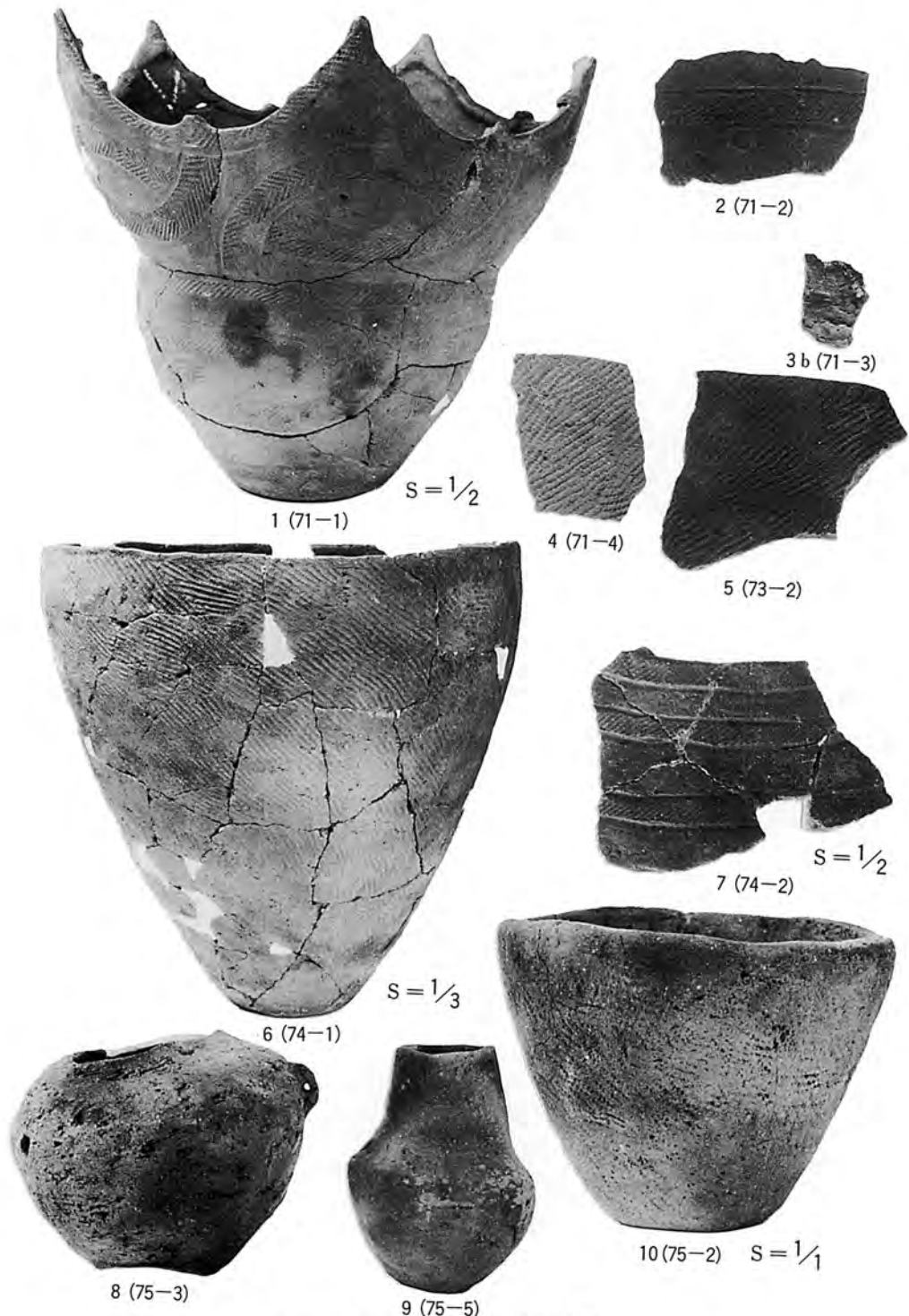


5 (66-4)

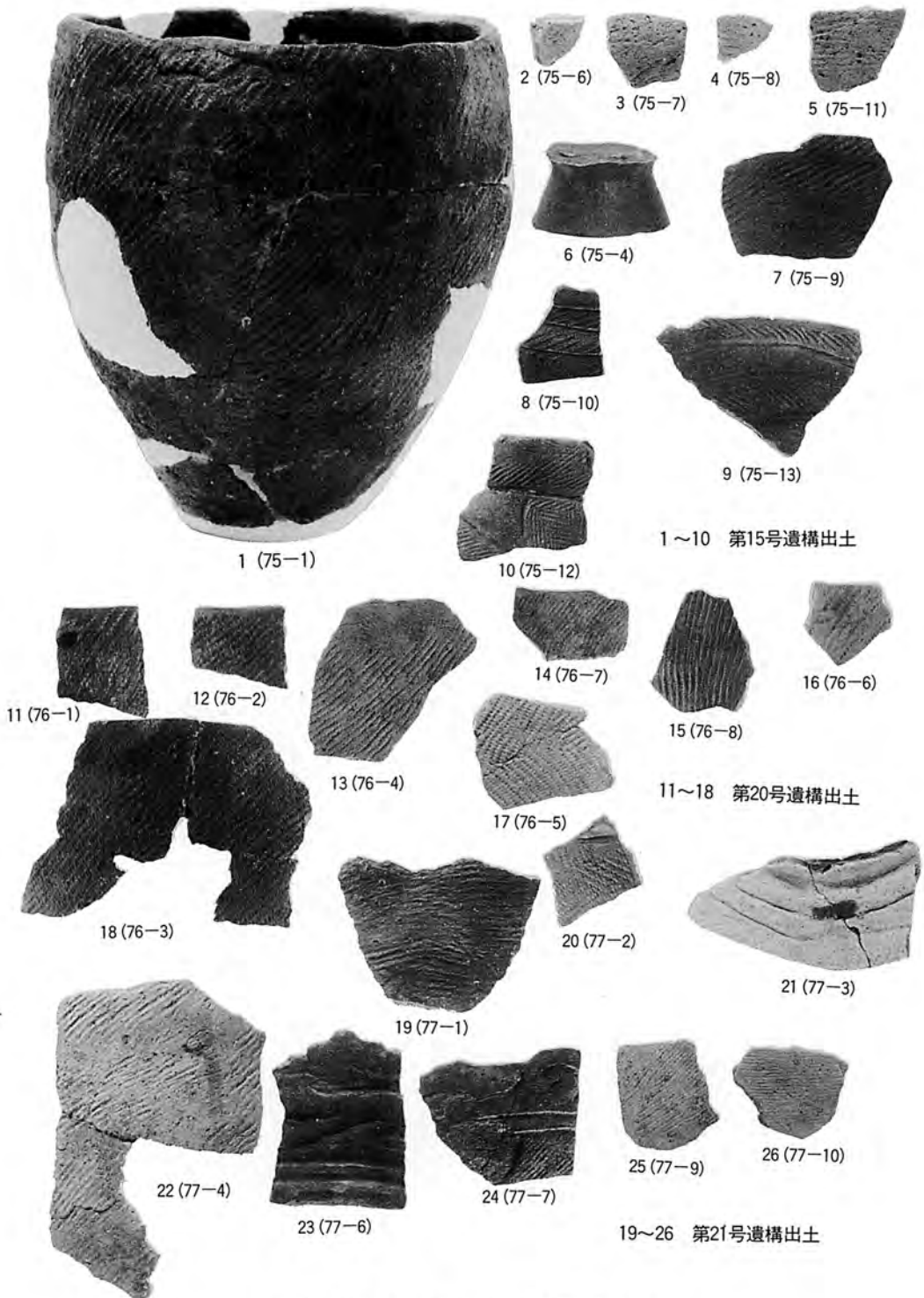
図版51 第13号遺構出土土器 (1)



图版52 第13号遺構出土土器 (2)



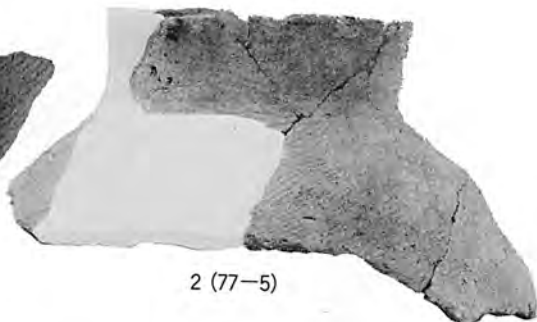
图版53 第14·15号遺構出土土器



図版54 第15・20・21号遺構出土土器



1 (77-8)



2 (77-5)

1、2 第21号遺構出土



3 (78-1)



4 (78-2)

3、4 第22号遺構出土



5 (79-1)



6 (79-2)



7 (79-3)

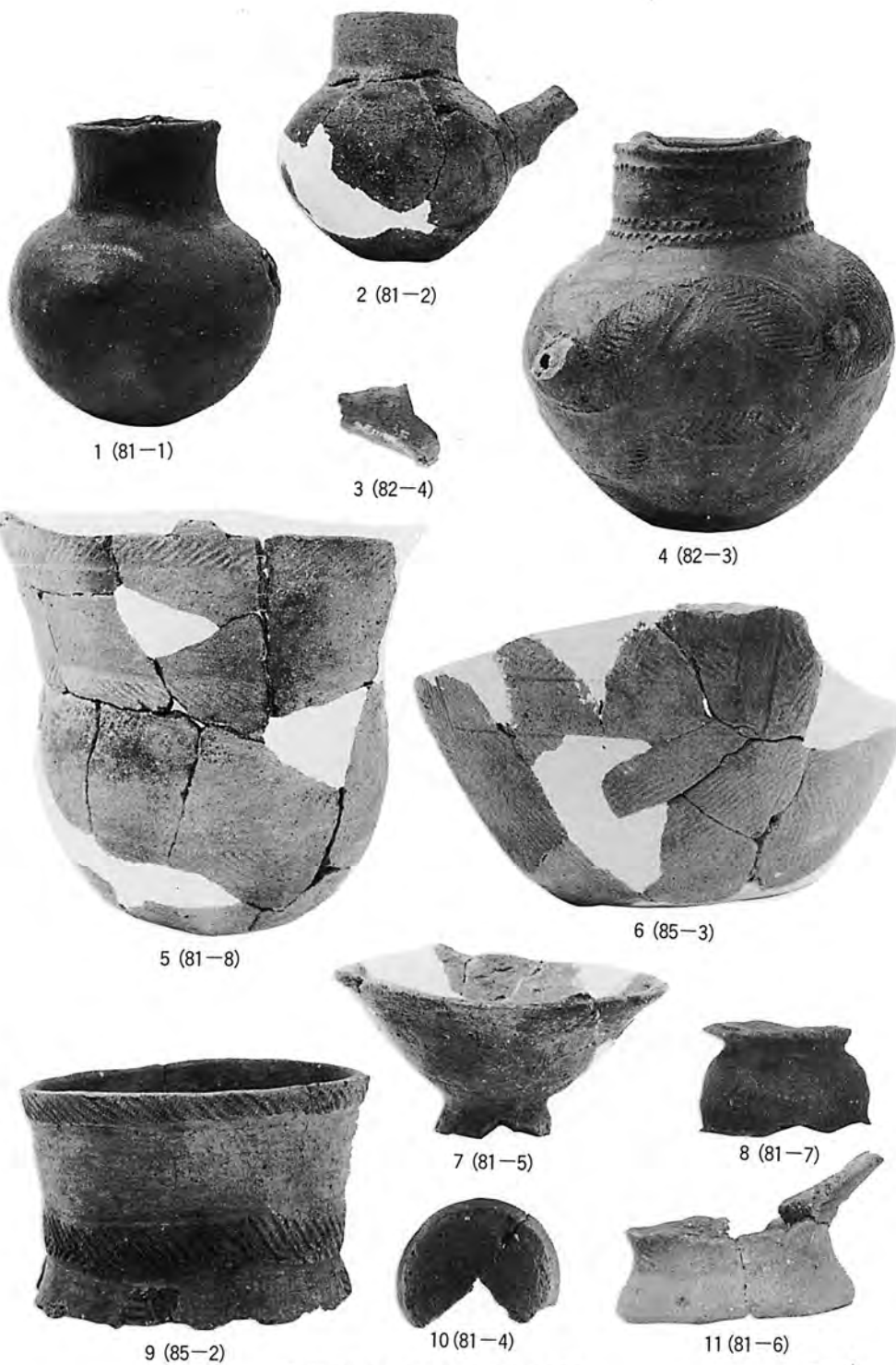
5~8 遺構外出土



8 (79-4)

図版55 遺構内・遺構外出土器





1 (81-1)

2 (81-2)

3 (82-4)

4 (82-3)

5 (81-8)

6 (85-3)

7 (81-5)

8 (81-7)

9 (85-2)

10 (81-4)

11 (81-6)

図版56 遺構外出土土器 (1)

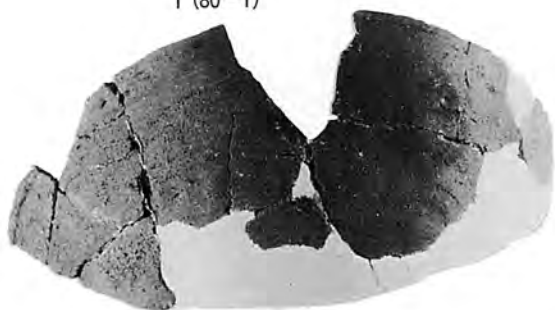
S = 1/2



1 (80-1)



2 (83-2)



3 (80-3)



4 (82-2)



5 (84-2)



6 (84-1)

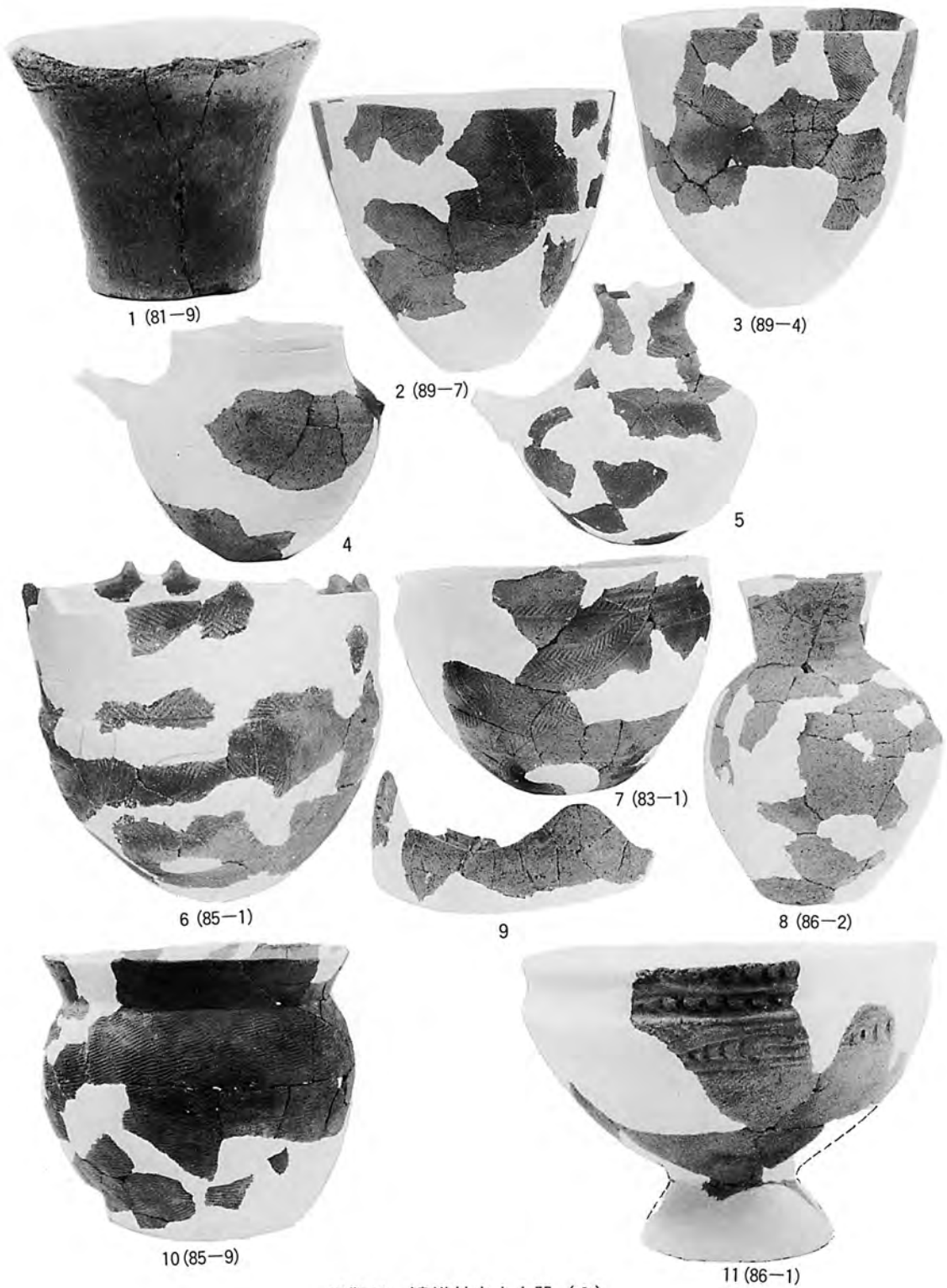


7 (82-1)

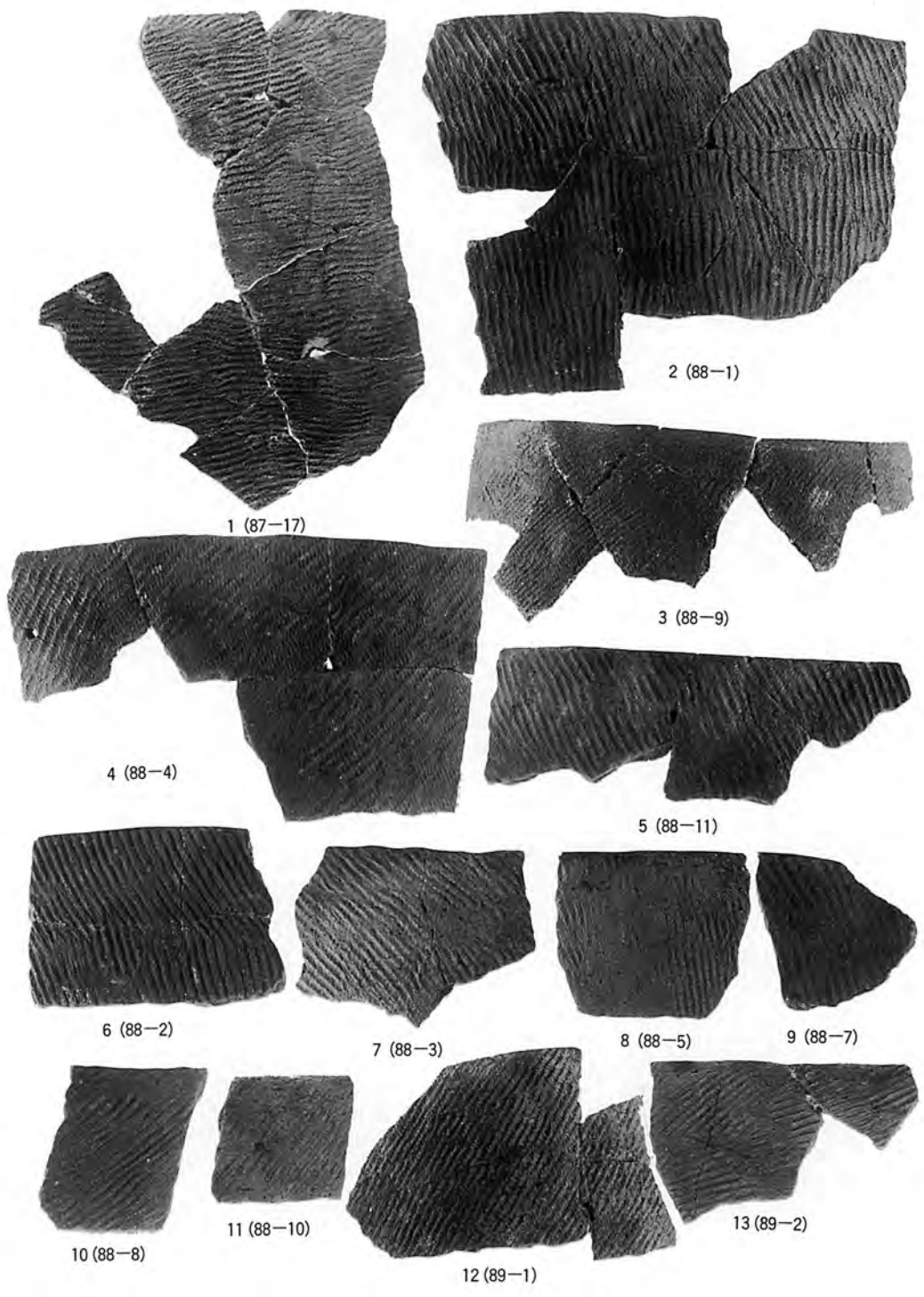


8 (80-2)

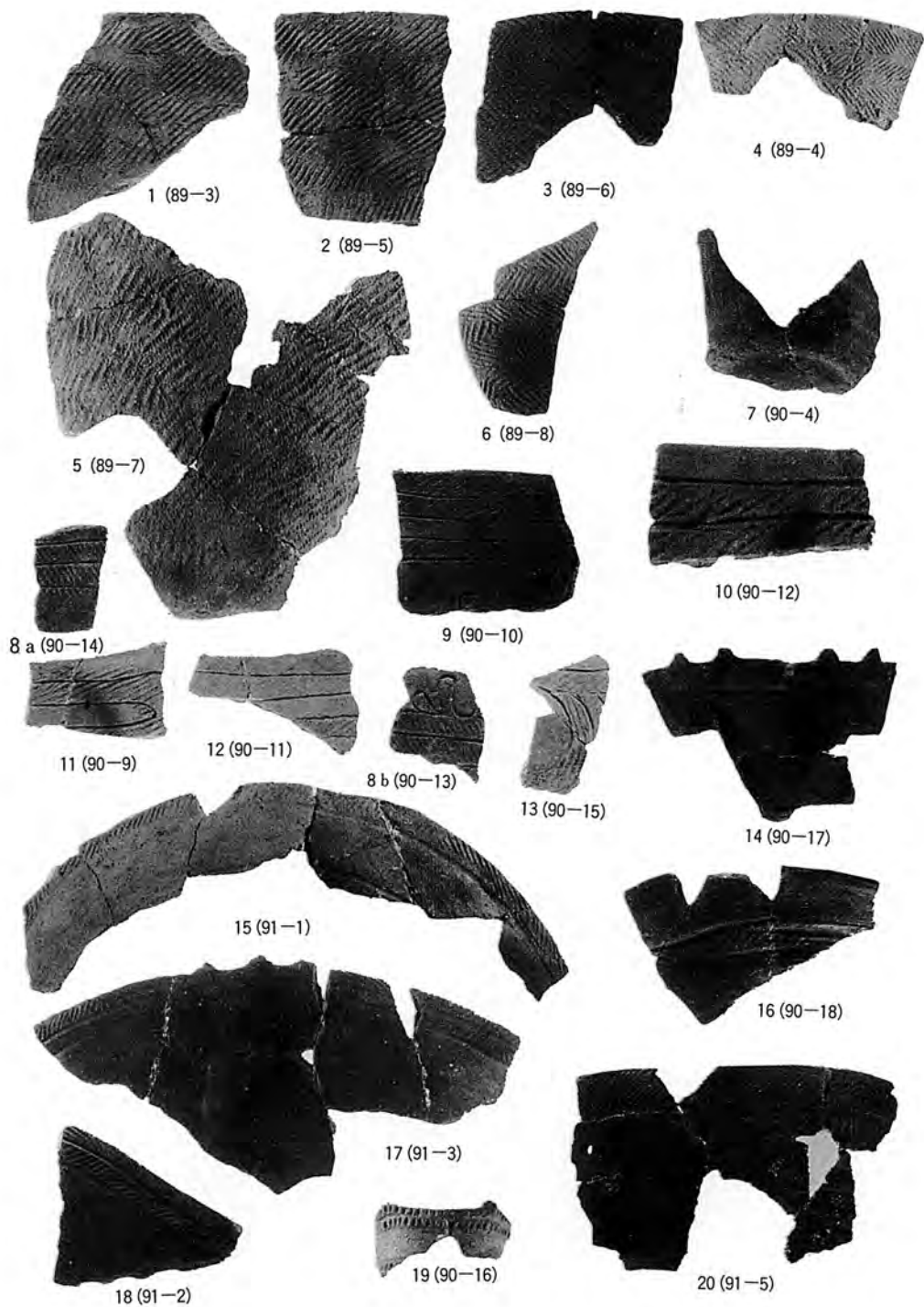
図版57 遺構外出土土器 (2)



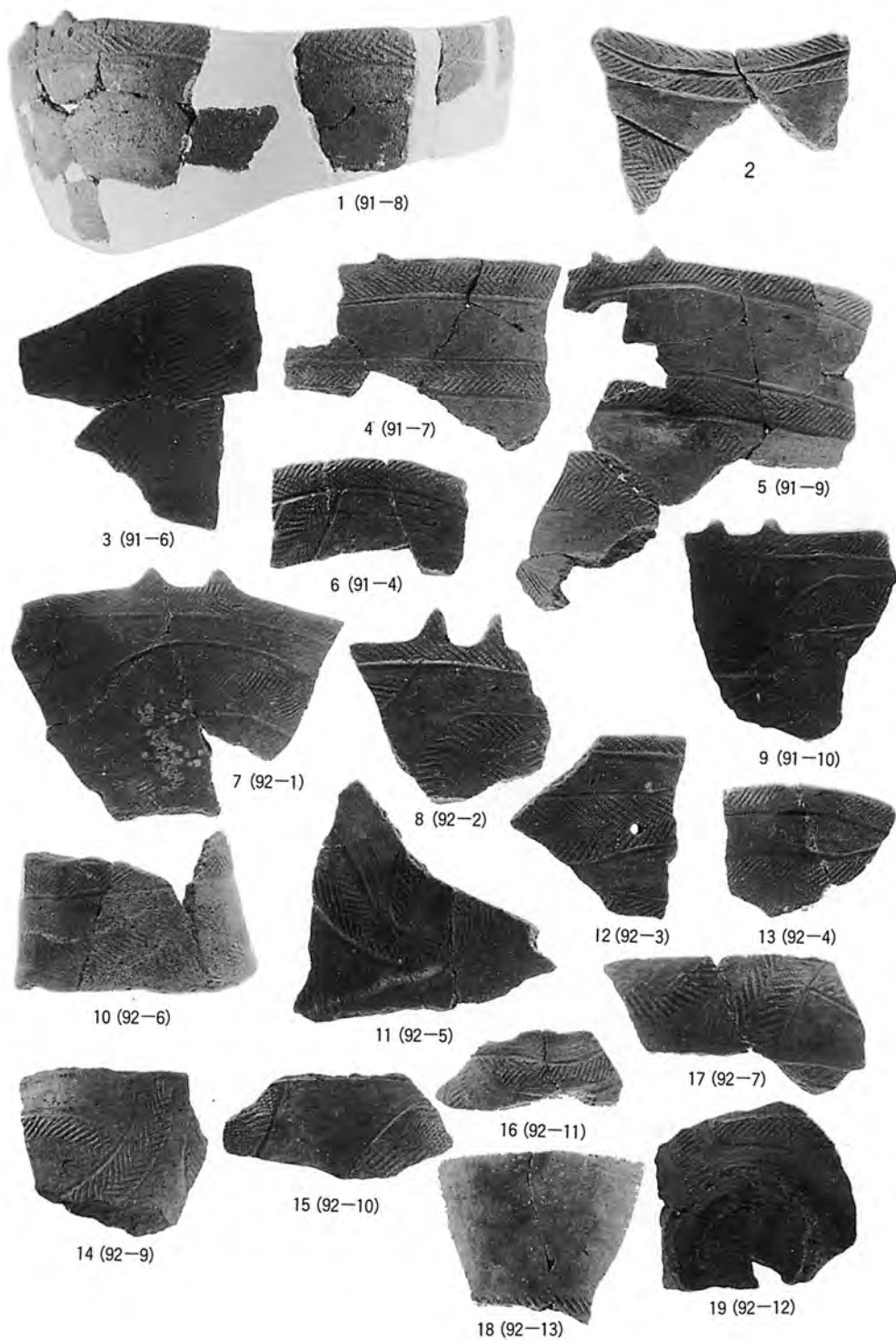
図版58 遺構外出土土器 (3)



图版59 遺構外出土土器（4）



图版60 遺構外出土土器 (5)



图版61 遺構外出土土器 (6)



1 (87-1)



2 (87-2)

3 (87-4)



4 (87-5)



5 (87-6)



6 (87-7)



7 (87-8)



8 (87-9)



9 (87-10)



10 (87-11)



11 (87-12)



12 (87-13)



13 (87-14)



14 (87-15)



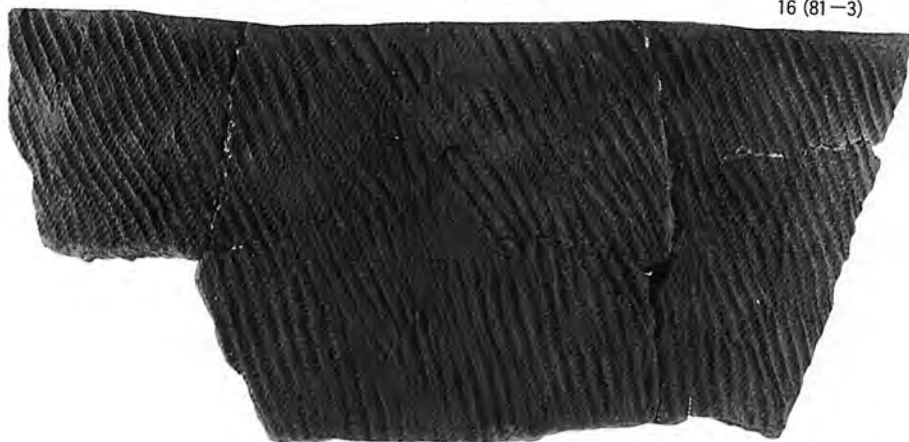
15 (87-16)



16 (81-3)

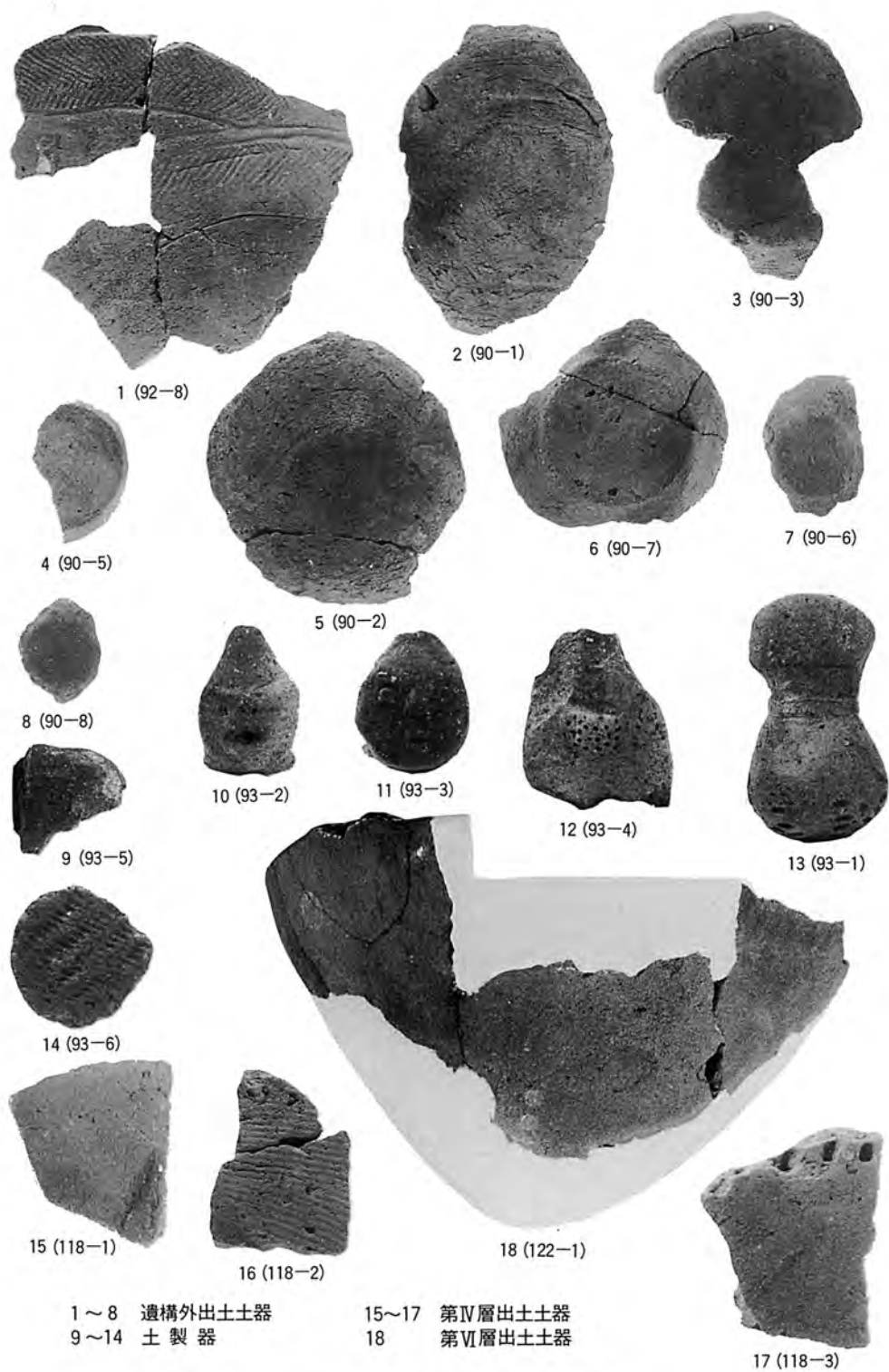


17 (88-6)



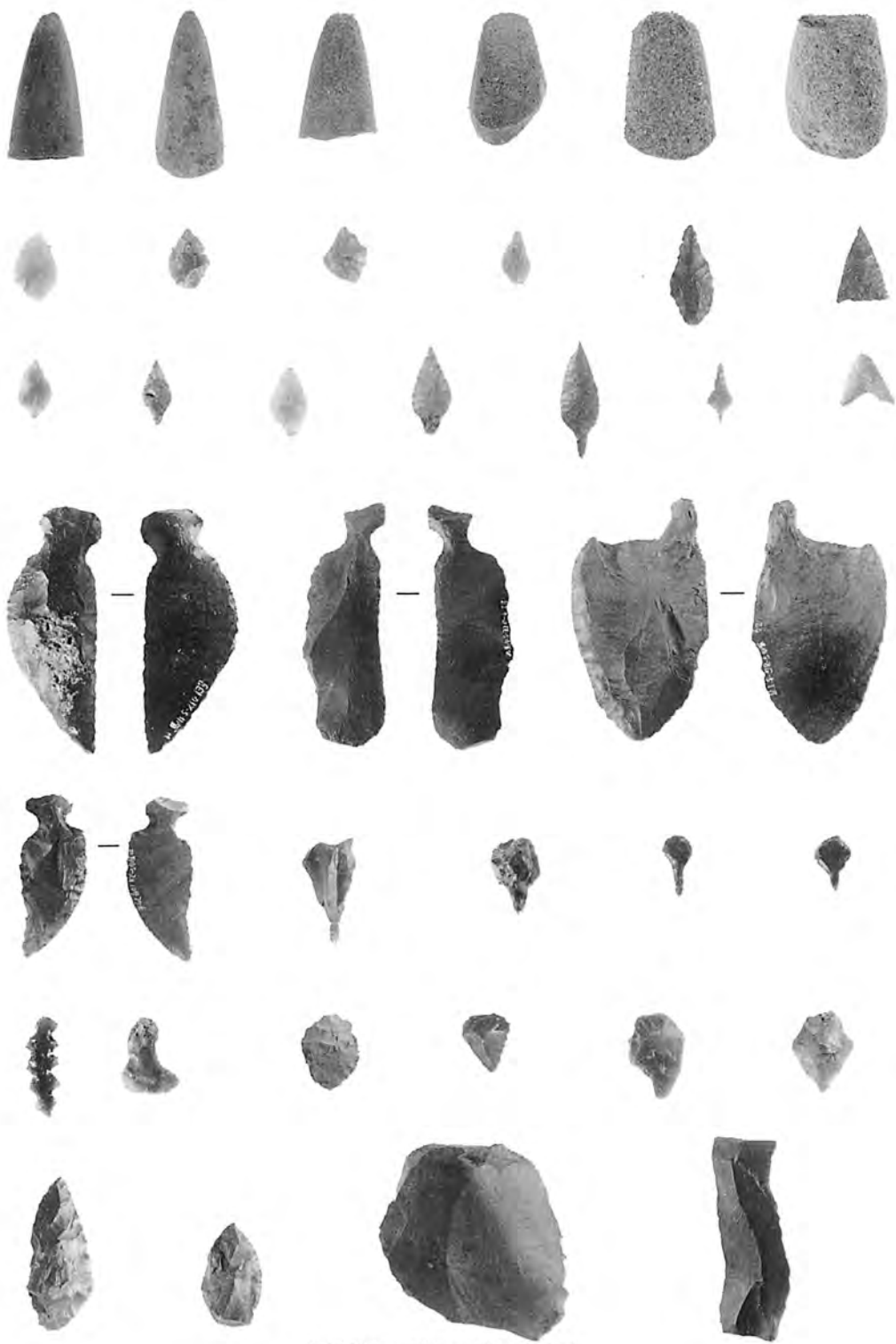
S = 1/2

图版62 遺構外出土土器 (7)



図版63 遺構外出土土器・土製品





图版64 石器·石製品 (1)



図版65 石器・石製品 (2)



図版66 石器・石製品 (3)

馬 場 瀨 (2)  
写 真 図 版





調査前 南▷北



調査開始 北▷南

図版67 馬場瀬（2）遺跡遠景



試掘調査 北▷南



試掘調査 南▷北

図版68 馬場瀬（2）遺跡試掘調査



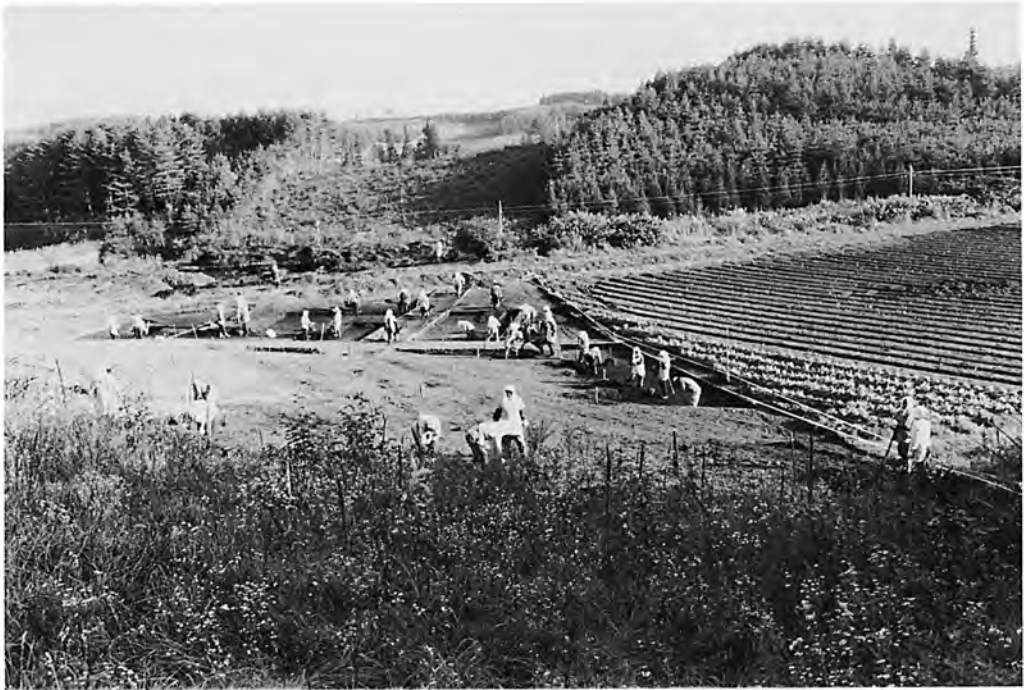
発掘調査 北▷南



発掘調査 南▷北

図版69 馬場瀬（2）遺跡発掘調査



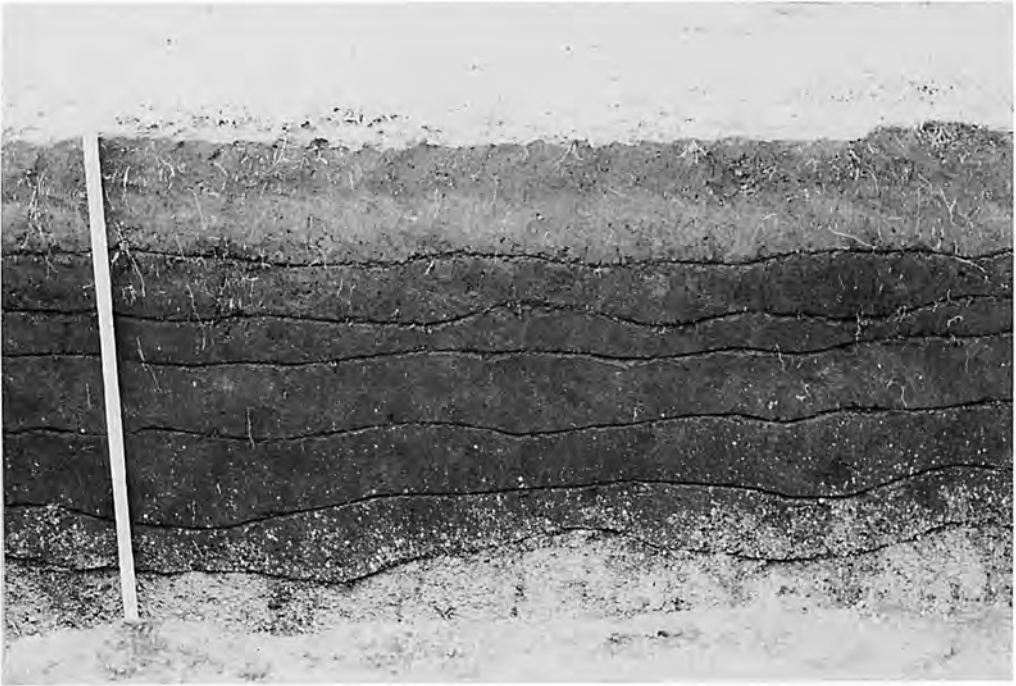


北半地区発掘調査 北▷南



北半地区発掘調査 西▷東

図版70 馬場瀬（2）遺跡北半地区の調査



東西基本層位 (K-15、L-15) 南▷北



南北基本層位 (K-18~19上位火山灰層擴大) 西▷東

図版71 基本層位 (1)

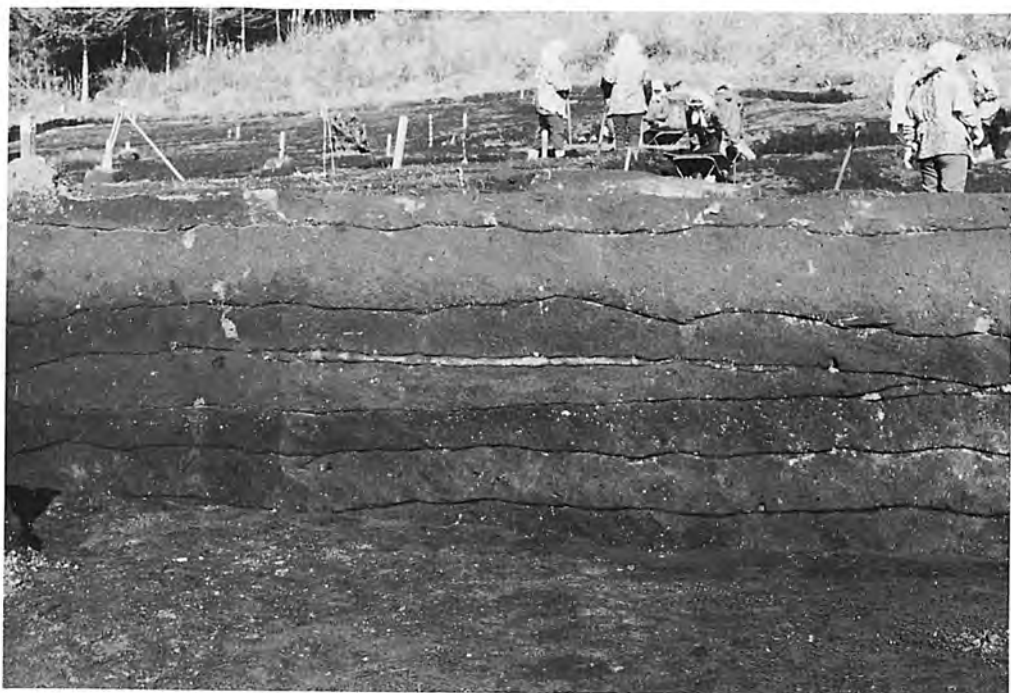


F - 18 区基本層位 南▽北



F - 18 区(西)基本層位 東▽西

图版72 基本層位 (2)



北半地区東西基本層位 南▷北



北半地区南北基本層位 (E-23、24) 西▷東

図版73 基本層位 (3)



北半地区南北基本層位 (E-23、24)



南半地区南北基本層位 西▷東

図版74 基本層位 (4)



第I、II層の遺物出土状況



古銭の出土状況(1)



第II層の遺物



古銭の出土状況(2)



第II層の遺物



第IV層の土器出土状況



石器出土状況



第7号溝状ピット確認状況

図版75 遺物・遺構出土状況



第7号溝状ピット断面

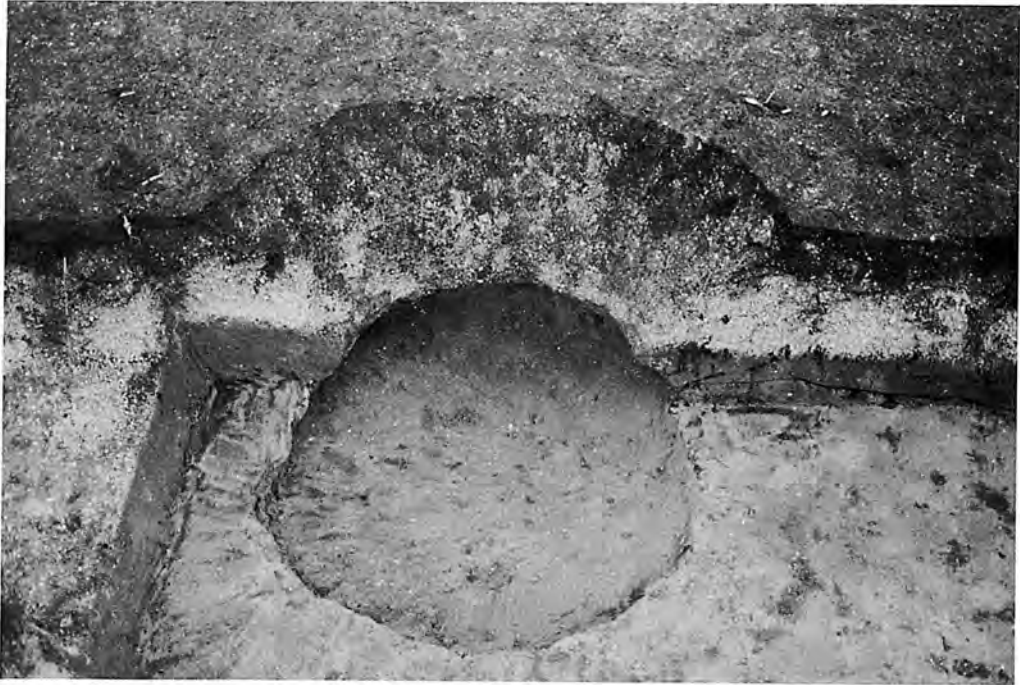
第7号溝状ピット完掘



図版76 第7号溝状ピット



第5号フラスコ状土埴土層断面 西▷東



第5号フラスコ状土埴完掘 西▷東

図版77 フラスコ状土埴(1)

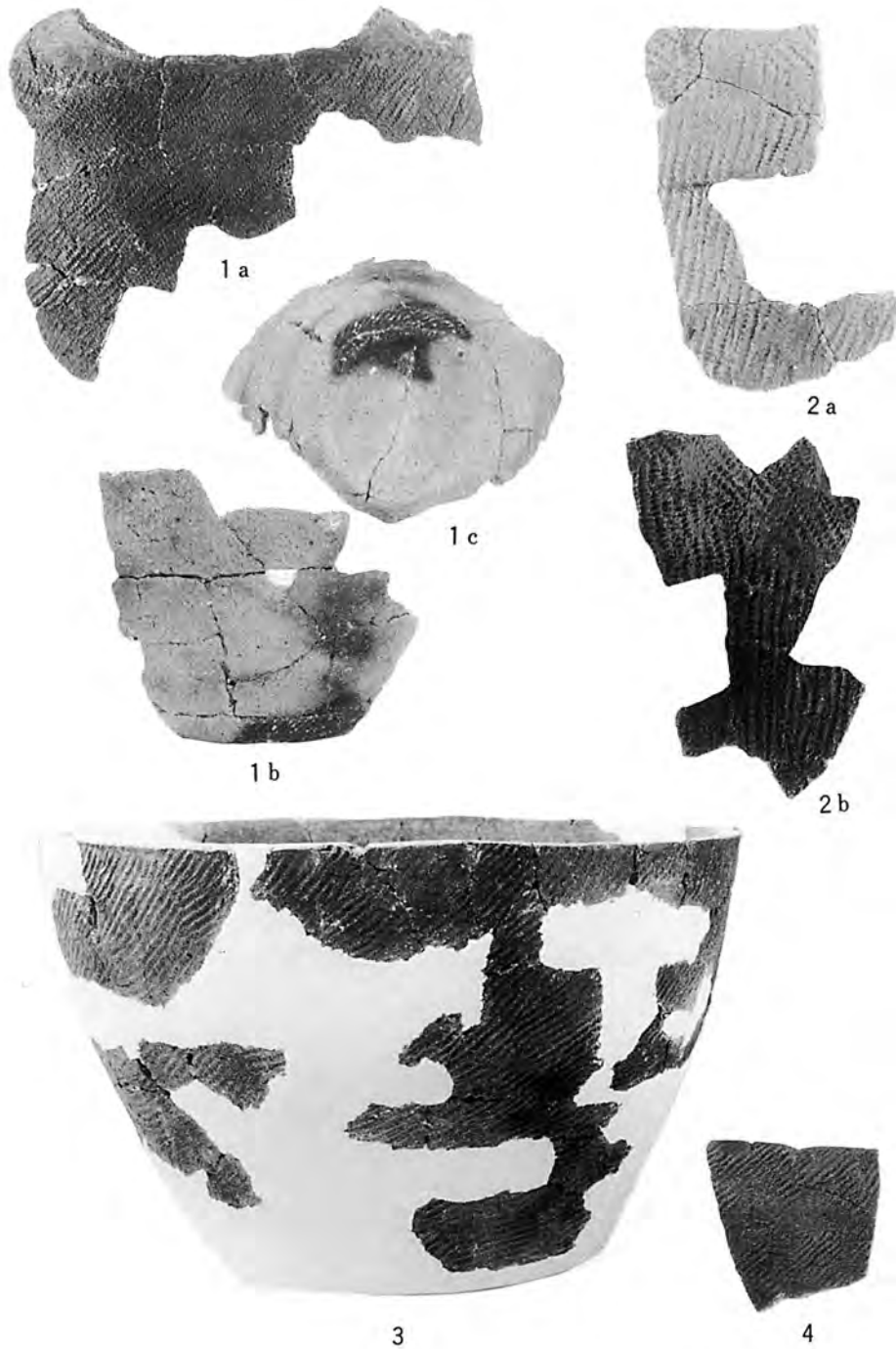




第6号フラスコ状土塚土層断面 西▷東

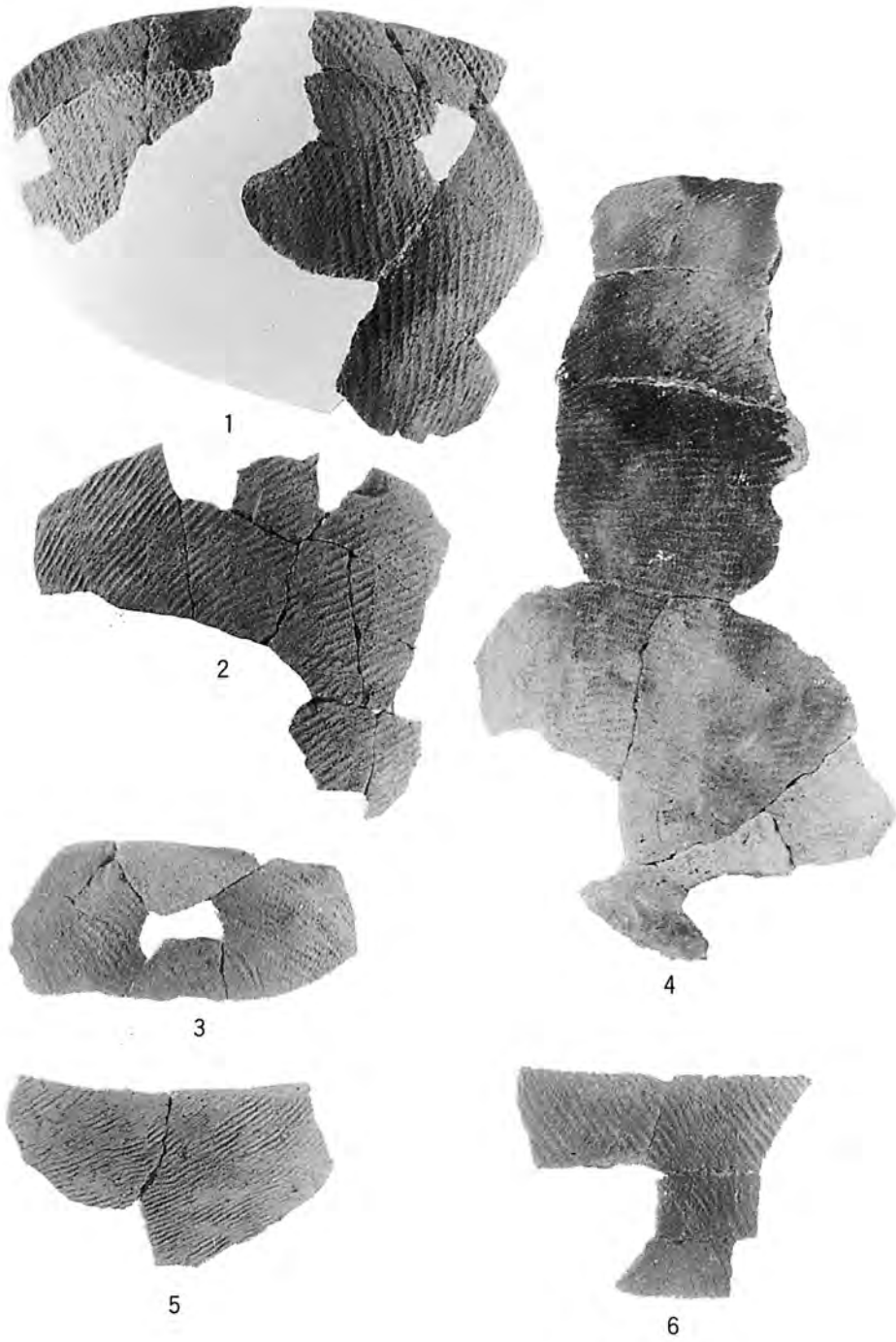


第6号フラスコ状土塚完掘 西▷東



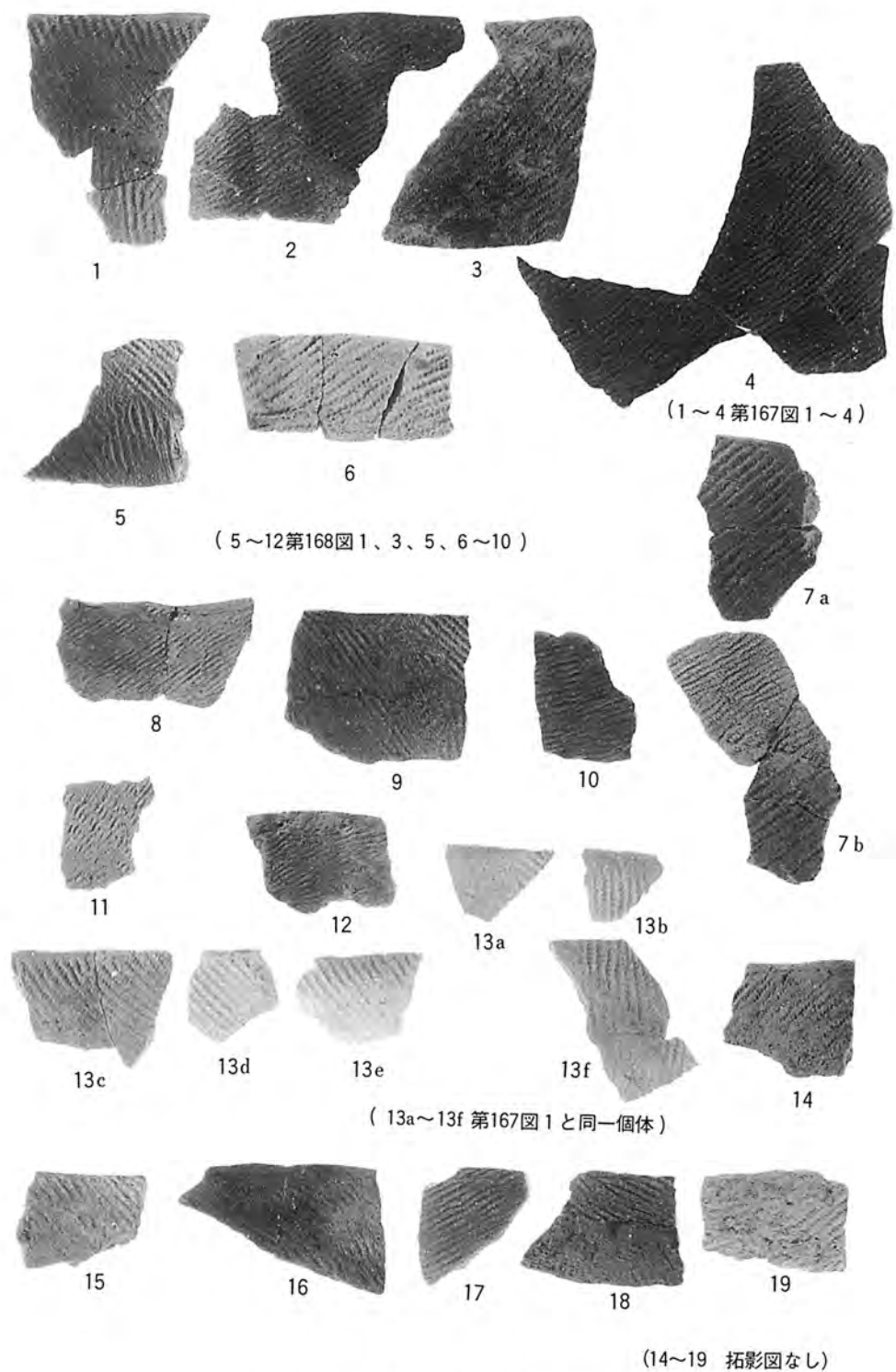
(第165図1~4)

図版79 第I・II層出土土器(1)

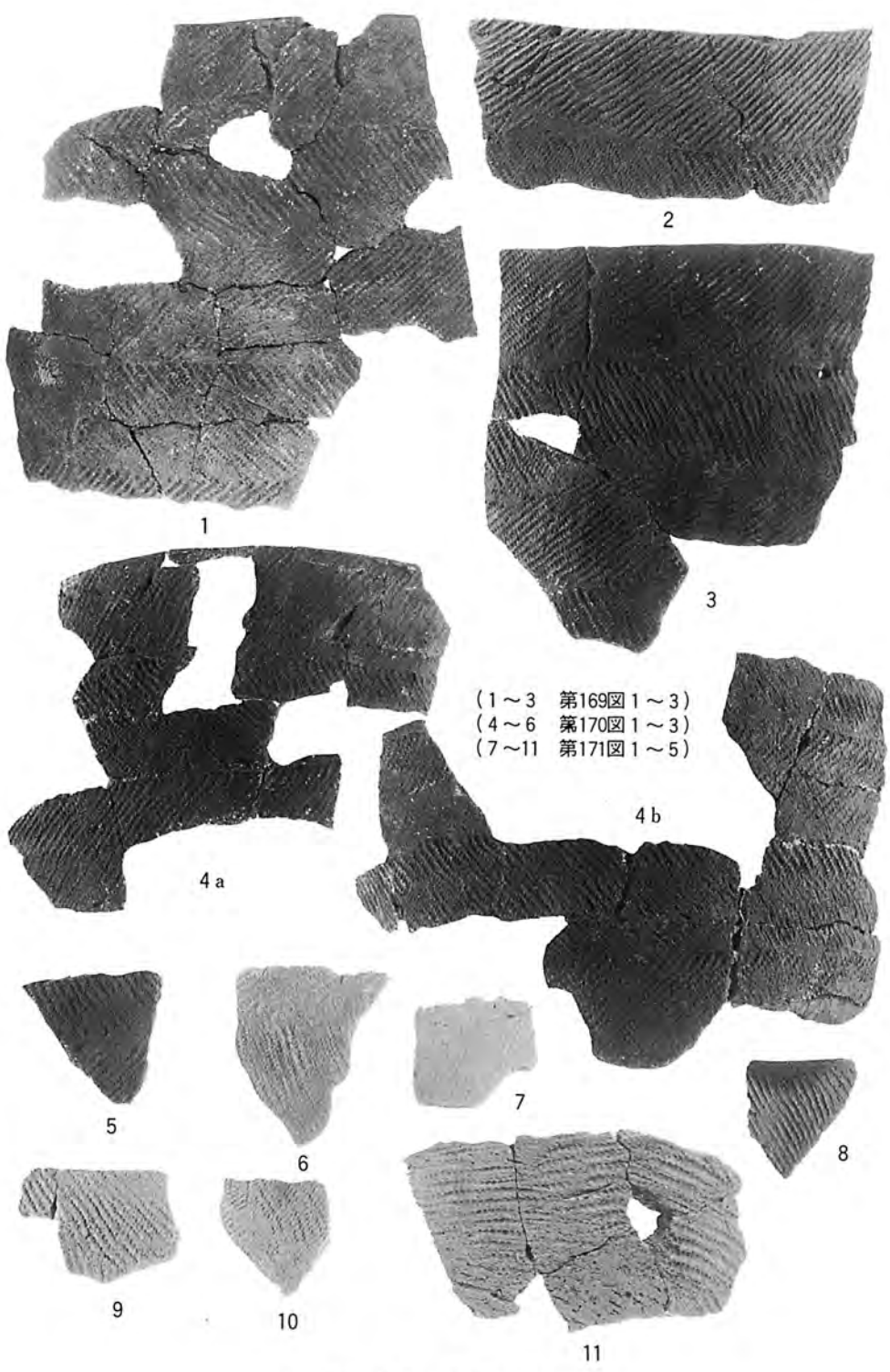


( 第166図 1 ~ 6 )

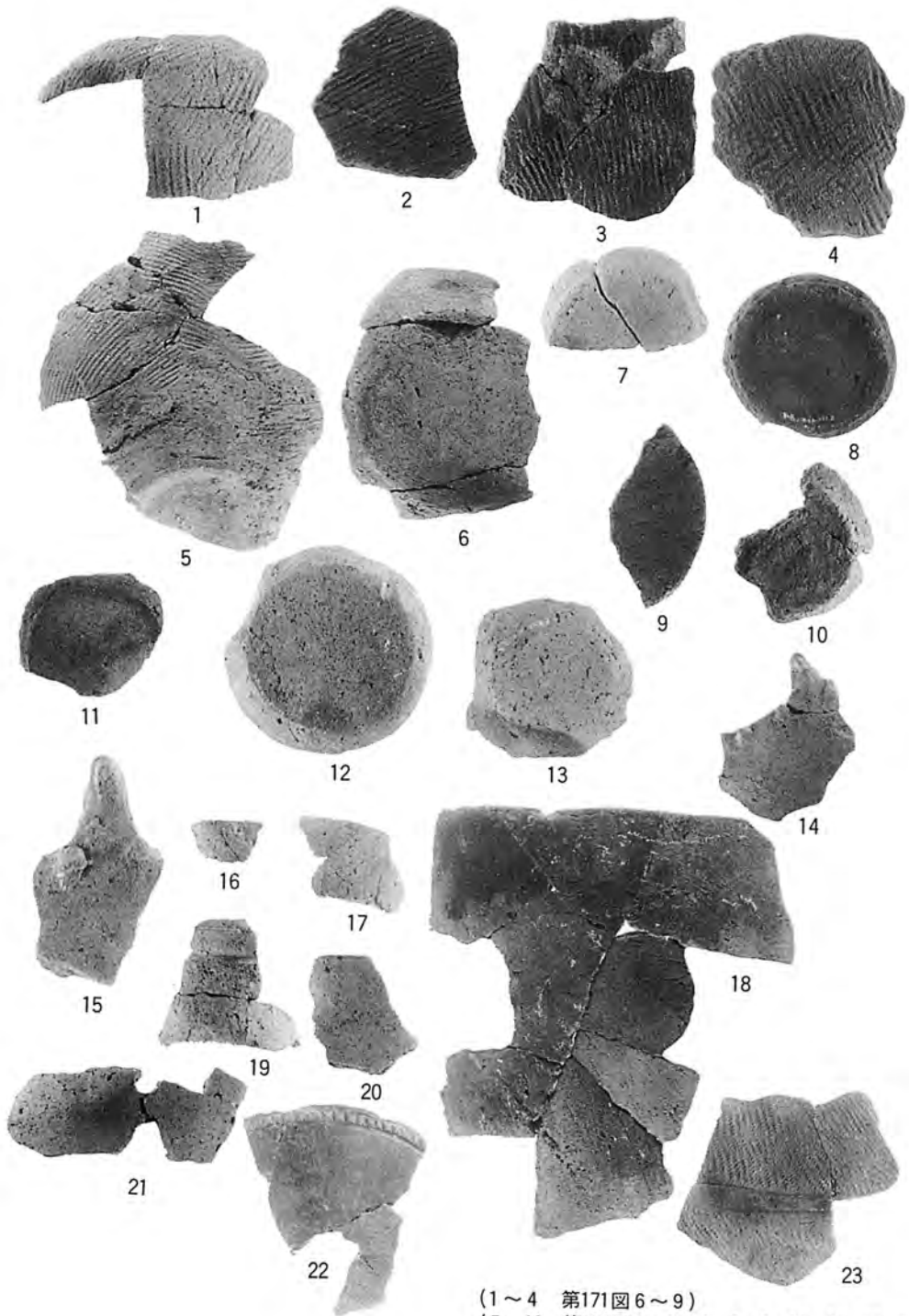
图版80 第I・II層出土土器 (2)



図版81 第I・II層出土土器(3)



図版82 第I・II層出土土器(4)



(1~4 第171図6~9)  
 (5~13 第172図2、3、4、8、9、10、12、13、14)  
 (14~23 第173図1~10)

図版83 第I・II層出土土器(5)



図版84 土器・土製品

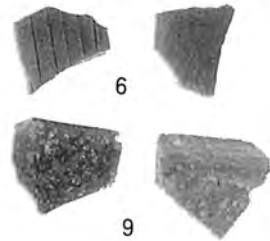


图版85 石器





(1~3 土師器)  
 (4 須恵器)  
 (5 仏像)  
 (6~17 陶器)



図版86 歴史時代の遺物 (1)



鉄滓 1  
(1~4)



鉄製品 5  
(5~6)

古銭 (7~15)



図版87 歴史時代の遺物 (2)



No. 2 エノキ (木口×50)



No. 2 エノキ (芯目×50)



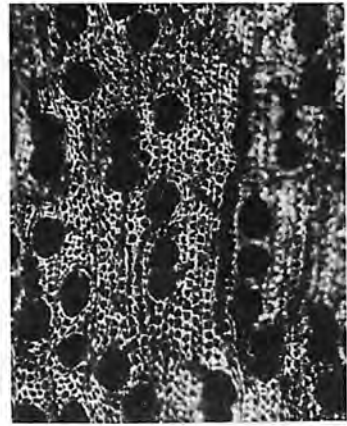
No. 2 エノキ (板目×50)



No. 1 エノキ (木口×50)



No. 1 エノキ (板目×50)



No. 7 カエデ (木口×50)



No. 7 カエデ (芯目×100)



No. 7 カエデ (板目×100)



No. 5 ケヤキ (木口×50)

青森県埋蔵文化財調査報告書第70集

---

# 馬場瀬(1)(2)遺跡発掘調査報告書

---

—東北縦貫自動車道八戸線関係 II 昭和56年度—

発行年月日 昭和57年3月29日

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒030-02 青森市大字新城字天田内152-15

発行 青森県教育委員会

〒030 青森市新町二丁目3-1

製版・印刷 第一印刷株式会社

〒030 青森市古川二丁目1-9 TEL 0177(76)1551 (大代)

---